

栃木県埋蔵文化財調査報告第189集

八幡根遺跡

一般国道4号(新4号国道)改築に伴う埋蔵文化財発掘調査

1997.3

栃木県教育委員会
(財)栃木県文化振興事業団

や はた ね
八 幡 根 遺 跡

一般国道4号(新4号国道)改築に伴う埋蔵文化財発掘調査

1997.3

栃木県教育委員会
(財)栃木県文化振興事業団

序

本県を縦貫する4号国道は、本県の産業や経済を支える基幹道路として重要な役割を果たしてまいりましたが、交通量の増加に対処するため、建設省は新4号国道の建設を計画いたしました。計画路線部分には多くの埋蔵文化財包蔵地が存在し、道路建設に先立ち記録保存のための発掘調査を実施することになりました。

八幡根遺跡は、小山市の東端部分にあり、古墳時代と平安時代の集落跡を中心に、旧石器時代から平安時代までの様々な資料が発見されました。その中でも、古墳時代の土師器製作に関わる資料は、関東地方では類例の少ない貴重なものと見られます。

本報告書刊行にあたり、歴史研究の基礎資料として、また、埋蔵文化財の普及啓蒙、及び、教育機関の参考資料として広く活用して頂ければ幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行まで多大な御指導・御協力をいただきました建設省宇都宮国道工事事務所を始め、関係機関・各位に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成9年3月

栃木県教育委員会
教育長 石川 格

目次

序文	
目次・例言・凡例	
第1章 発掘調査に至る経緯および経過	1
第1節 発掘調査の経緯	1
第2節 発掘調査の経過	6
(1) 発掘調査の実施	6
(2) 発掘調査の組織	7
第2章 遺跡の環境	8
第1節 地理的環境	8
第2節 歴史的環境	8
第3章 発掘調査された遺構と遺物	19
第1節 縄文時代の土坑	19
第2節 古墳時代中期の竪穴建物跡	20
(1) 石製模造品工房跡	20
(2) 竪穴建物跡	26
第3節 古墳時代後期の竪穴建物跡	30
第4節 古墳時代終末期の竪穴建物跡	36
第5節 平安時代の竪穴建物跡	170
第6節 時期不明の竪穴建物跡	224
第7節 その他の遺構と遺物	225
(1) 井戸跡	225
(2) 円形・方形土坑	226
(3) 長方形土坑	236
(4) 遺構外出土の古墳時代・平安時代の遺物	242
第8節 遺構外出土の旧石器・縄文・弥生時代の遺物	249
(1) 旧石器時代の遺物	249
(2) 縄文時代の遺物	250
(3) 弥生時代の遺物	259
第4章 まとめ	261
第1節 古墳時代の集落と遺物	261
(1) 古墳時代前・中期の集落	261
(2) 古墳時代後期の集落	261
(3) 古墳時代終末期の集落と土師器	261
(4) 古墳時代終末期の土師器生産	268
第2節 平安時代の集落と遺物	273
(1) 平安時代の集落	273
(2) 灰粘陶器の産地と型式	273
第3節 旧石器・縄文・弥生時代の遺物	274
参考文献	276
写真図版	285
報告書抄録	346

插图目次

第1图 新4号国道路線と榮洲開墾遺跡(橋木県)位置図 (1/200,000)		第37图 八幡根遺跡 SI-14A (3) 遺物	74
第2图 八幡根遺跡と周辺の遺跡 (1/75,000)	5	第38图 八幡根遺跡 SI-14A (4) 遺物	76
第3图 八幡根遺跡周辺地形図 (1/13,000)	9	第39图 八幡根遺跡 SI-14A (5) 遺物	78
第4图 八幡根遺跡と八幡根東遺跡 (1/3,000)	14・15	第40图 八幡根遺跡 SI-14B 遺構	79
第5图 八幡根遺跡 調査区全体図 (1/1,000)	16	第41图 八幡根遺跡 SI-15 遺構・遺物	80
第6图 八幡根遺跡 北半部遺構配置図 (1/300)	17	第42图 八幡根遺跡 SI-16 遺構・遺物	83
第7图 八幡根遺跡 南半部遺構配置図 (1/300)	18	第43图 八幡根遺跡 SI-17 遺構・遺物	85
第8图 八幡根遺跡 SK-30 遺構・遺物	19	第44图 八幡根遺跡 SI-21B 遺構・遺物	89
第9图 八幡根遺跡 SI-30 (1) 遺構	21	第45图 八幡根遺跡 SI-22A (1) 遺構	91
第10图 八幡根遺跡 SI-30 (2) 遺物	22	第46图 八幡根遺跡 SI-22A (2) 遺物	92
第11图 八幡根遺跡 SI-30 (3) 石製模造品製作関連遺物	24	第47图 八幡根遺跡 SI-22B (1) 遺構・遺物	96
第12图 八幡根遺跡 SI-30 (4) 石製模造品製作関連遺物	25	第48图 八幡根遺跡 SI-22B (2) 土師器製作関連遺物	96
第13图 八幡根遺跡 SI-33 遺構・遺物	27	第49图 八幡根遺跡 SI-23 遺構・遺物	99
第14图 八幡根遺跡 SI-36C 遺構・遺物	28	第50图 八幡根遺跡 SI-24 遺構・遺物	101
第15图 八幡根遺跡 SI-36D 遺構・遺物	30	第51图 八幡根遺跡 SI-26 (1) 遺構	103
第16图 八幡根遺跡 SI-49A (1) 遺構	32	第52图 八幡根遺跡 SI-26 (2) 遺物	104
第17图 八幡根遺跡 SI-49A (2) 遺物	33	第53图 八幡根遺跡 SI-27 遺構・遺物	107
第18图 八幡根遺跡 SI-01A 遺構・遺物	37	第54图 八幡根遺跡 SI-28 (1) 遺構	109
第19图 八幡根遺跡 SI-01B (1) 遺構	39	第55图 八幡根遺跡 SI-28 (2) 遺物	110
第20图 八幡根遺跡 SI-01B (2) 遺物	40	第56图 八幡根遺跡 SI-28 (3) 遺物	111
第21图 八幡根遺跡 SI-01A又は01B 遺物	40	第57图 八幡根遺跡 SI-32 遺構・遺物	115
第22图 八幡根遺跡 SI-06A 遺構・遺物	43	第58图 八幡根遺跡 SI-34 (1) 遺構	116
第23图 八幡根遺跡 SI-06 遺構・遺物	45	第59图 八幡根遺跡 SI-34 (2) 遺物	118
第24图 八幡根遺跡 SI-06A (1) 遺構・遺物	47	第60图 八幡根遺跡 SI-34 (3) 遺物	119
第25图 八幡根遺跡 SI-06A (2) 遺物	48	第61图 八幡根遺跡 SI-35B 遺構・遺物	121
第26图 八幡根遺跡 SI-06B 遺構・遺物	51	第62图 八幡根遺跡 SI-35C 遺構・遺物	123
第27图 八幡根遺跡 SI-07 遺構・遺物	52	第63图 八幡根遺跡 SI-36A 遺構・遺物	125
第28图 八幡根遺跡 SI-08 遺構・遺物	54	第64图 八幡根遺跡 SI-36B 遺構・遺物	125
第29图 八幡根遺跡 SI-09 遺構・遺物	56	第65图 八幡根遺跡 SI-37A (1) 遺構	128
第30图 八幡根遺跡 SI-10 遺構・遺物	58	第66图 八幡根遺跡 SI-37A (2) 遺物	129
第31图 八幡根遺跡 SI-11A・B (1) 遺構	59	第67图 八幡根遺跡 SI-37A (3) 遺物	132
第32图 八幡根遺跡 SI-11A・B (2) 遺物	60	第68图 八幡根遺跡 SI-37A (4) 遺物	133
第33图 八幡根遺跡 SI-13 (1) 遺構・遺物	64	第69图 八幡根遺跡 SI-38 遺構・遺物	135
第34图 八幡根遺跡 SI-13 (2) 遺物	66	第70图 八幡根遺跡 SI-43 遺構・遺物	136
第35图 八幡根遺跡 SI-14A (1) 遺構	69	第71图 八幡根遺跡 SI-46B 遺構・遺物	138
第36图 八幡根遺跡 SI-14A (2) 遺物	70	第72图 八幡根遺跡 SI-47 (1) 遺構	141
		第73图 八幡根遺跡 SI-47 (2) 遺物	142

第74図 八幡根遺跡 SI-46 遺構・遺物	146	第104図 八幡根遺跡 SI-44 (1) 遺構・遺物	206
第75図 八幡根遺跡 SI-49B 遺構・遺物	149	第105図 八幡根遺跡 SI-44 (2) 遺物	211
第76図 八幡根遺跡 SI-49A又は49B 遺物	151	第106図 八幡根遺跡 SI-45 遺物	213
第77図 八幡根遺跡 SI-50 (1) 遺構	153	第107図 八幡根遺跡 SI-46A (1) 遺構	216
第78図 八幡根遺跡 SI-50 (2) 遺物	155	第108図 八幡根遺跡 SI-46A (2) 遺物	217
第79図 八幡根遺跡 SI-50 (3) 遺物	158	第109図 八幡根遺跡 SI-55 遺構・遺物	220
第80図 八幡根遺跡 SI-53 (1) 遺構	161	第110図 八幡根遺跡 SI-60 遺構・遺物	222
第81図 八幡根遺跡 SI-53 (2) 遺物	163	第111図 八幡根遺跡 SI-04C 遺構	224
第82図 八幡根遺跡 SI-53 (3) 遺物	166	第112図 八幡根遺跡 1号井戸・2号井戸 遺構・遺物	226
第83図 八幡根遺跡 SI-57 遺構・遺物	167	第113図 八幡根遺跡 円形・方形土坑 (1) 遺構	229
第84図 八幡根遺跡 SI-02 遺構・遺物	171	第114図 八幡根遺跡 円形・方形土坑 (2) 遺構	232
第85図 八幡根遺跡 SI-03B 遺構・遺物	172	第115図 八幡根遺跡 円形・方形土坑 (3) 遺物	233
第86図 八幡根遺跡 SI-04A (1) 遺構	175	第116図 八幡根遺跡 長方形土坑 (1) 遺構	237
第87図 八幡根遺跡 SI-04A (2) 遺物	176	第117図 八幡根遺跡 長方形土坑 (2) 遺構・遺物	240
第88図 八幡根遺跡 SI-04A (3) 遺物	178	第118図 八幡根遺跡 遺構外出土遺物 (1)	243
第89図 八幡根遺跡 SI-12 遺構・遺物	181	第119図 八幡根遺跡 遺構外出土遺物 (2)	244
第90図 八幡根遺跡 SI-18 遺構・遺物	182	第120図 八幡根遺跡 旧石器時代の遺物	249
第91図 八幡根遺跡 SI-20A 遺構・遺物	183	第121図 八幡根遺跡 縄文土器 (1)	251
第92図 八幡根遺跡 SI-21A 遺構・遺物	185	第122図 八幡根遺跡 縄文土器 (2)	252
第93図 八幡根遺跡 SI-25 遺構・遺物	186	第123図 八幡根遺跡 縄文土器 (3)	253
第94図 八幡根遺跡 SI-29 遺構・遺物	188	第124図 八幡根遺跡 縄文土器 (4)	254
第95図 八幡根遺跡 SI-31 遺構・遺物	190	第125図 八幡根遺跡 縄文土器 (5)	257
第96図 八幡根遺跡 SI-35A (1) 遺構	192	第126図 八幡根遺跡 縄文土器 (6)	257
第97図 八幡根遺跡 SI-35A (2) 遺物	193	第127図 八幡根遺跡 縄文時代の石器	258
第98図 八幡根遺跡 SI-35A (3) 遺物	196	第128図 八幡根遺跡 弥生土器	259
第99図 八幡根遺跡 SI-39 遺構・遺物	198	第129図 古墳時代終末期前半の土師器 (1) 坏・高坏・鉢類	263
第100図 八幡根遺跡 SI-40 遺構・遺物	200	第130図 古墳時代終末期前半の土師器 (2) 坏の大きさ	265
第101図 八幡根遺跡 SI-41 遺構・遺物	202	第131図 古墳時代終末期前半の土師器 (3) 飯・壺類	266
第102図 八幡根遺跡 SI-42 (1) 遺構・遺物	204	第132図 土師器の不良品・未製品の焼成品・糸切り痕跡資料	269
第103図 八幡根遺跡 SI-42 (2) 遺物	206	第133図 土師器の雨りかす・焼粘土塊	270

表 目 次

<p>第1表 一般国道4号(新4号国道)改築工事に係わる 埋蔵文化財包蔵地一覽表</p> <p>第2表 調査工程表</p> <p>第3表 SI-30 古墳時代中期 出土遺物數一覽表</p> <p>第4表 SI-30 出土遺物</p> <p>第5表 SI-33 出土遺物</p> <p>第6表 SI-33 古墳時代中期 出土遺物數一覽表</p> <p>第7表 SI-36C 古墳時代中期 出土遺物數一覽表</p> <p>第8表 SI-36C 出土遺物</p> <p>第9表 SI-36D 出土遺物</p> <p>第10表 SI-36D 古墳時代後期 出土遺物數一覽表</p> <p>第11表 SI-49A 出土遺物</p> <p>第12表 SI-49A 古墳時代後期 出土遺物數一覽表</p> <p>第13表 SI-01A 出土遺物</p> <p>第14表 SI-01A 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表</p> <p>第15表 SI-01B 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表</p> <p>第16表 SI-01B 出土遺物</p> <p>第17表 SI-01A又は01B 出土遺物</p> <p>第18表 SI-03A 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表</p> <p>第19表 SI-03A 出土遺物</p> <p>第20表 SI-05 出土遺物</p> <p>第21表 SI-05 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表</p> <p>第22表 SI-06A 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表</p> <p>第23表 SI-06A 出土遺物</p> <p>第24表 SI-06B 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表</p> <p>第25表 SI-06(AかB不明) 古墳時代終末期 出土遺物 數一覽表</p> <p>第26表 SI-06B 出土遺物</p> <p>第27表 SI-07 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表</p> <p>第28表 SI-07 出土遺物</p> <p>第29表 SI-06 出土遺物</p> <p>第30表 SI-06 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表</p> <p>第31表 SI-09 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表</p> <p>第32表 SI-09 出土遺物</p> <p>第33表 SI-10 出土遺物</p> <p>第34表 SI-10 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表</p> <p>第35表 SI-11AおよびB 古墳時代終末期 出土遺物數 一覽表</p> <p>第36表 SI-11A・B 出土遺物</p> <p>第37表 SI-13 出土遺物</p>	<p>第38表 SI-13 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 68</p> <p>3 第39表 SI-14A 出土遺物 71</p> <p>4 第40表 SI-14A 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 79</p> <p>第41表 SI-15 出土遺物 81</p> <p>第42表 SI-15 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 82</p> <p>22 第43表 SI-16 出土遺物 83</p> <p>27 第44表 SI-16 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 84</p> <p>28 第45表 SI-17 出土遺物 86</p> <p>29 第46表 SI-17 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 87</p> <p>30 第47表 SI-21B 出土遺物 88</p> <p>31 第48表 SI-21B 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 90</p> <p>34 第49表 SI-22A 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 91</p> <p>35 第50表 SI-22A 出土遺物 92</p> <p>36 第51表 SI-22B 出土遺物 96</p> <p>38 第52表 SI-22B 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 96</p> <p>40 第53表 SI-23 出土遺物 100</p> <p>41 第54表 SI-23 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 100</p> <p>42 第55表 SI-24 出土遺物 101</p> <p>42 第56表 SI-24 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 102</p> <p>43 第57表 SI-26 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 103</p> <p>44 第58表 SI-26 出土遺物 104</p> <p>46 第59表 SI-27 出土遺物 107</p> <p>46 第60表 SI-27 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 107</p> <p>48 第61表 SI-28 出土遺物 111</p> <p>50 第62表 SI-28 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 114</p> <p>50 第63表 SI-32 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 114</p> <p>50 第64表 SI-32 出土遺物 115</p> <p>51 第65表 SI-34 出土遺物 117</p> <p>51 第66表 SI-34 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 120</p> <p>52 第67表 SI-35B 出土遺物 120</p> <p>53 第68表 SI-35B 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 122</p> <p>55 第69表 SI-35 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 122</p> <p>55 第70表 SI-35C 出土遺物 124</p> <p>57 第71表 SI-35C 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 124</p> <p>58 第72表 SI-36A 出土遺物 126</p> <p>58 第73表 SI-36A 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 126</p> <p>60 第74表 SI-36B 出土遺物 126</p> <p>60 第75表 SI-36B 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 126</p> <p>61 第76表 SI-37A 出土遺物 130</p> <p>63 第77表 SI-37A 古墳時代終末期 出土遺物數一覽表 134</p>
---	---

第78表	SI-37A	平安時代	出土遺物数一覧表	134	第120表	SI-35A	出土遺物	194	
第79表	SI-38	古墳時代終末期	出土遺物数一覧表	135	第121表	SI-39	出土遺物	197	
第80表	SI-38		出土遺物	136	第122表	SI-39	平安時代	出土遺物数一覧表	197
第81表	SI-43		出土遺物	137	第123表	SI-40	出土遺物	199	
第82表	SI-43	古墳時代終末期	出土遺物数一覧表	137	第124表	SI-40	平安時代	出土遺物数一覧表	201
第83表	SI-46B		出土遺物	139	第125表	SI-41	平安時代	出土遺物数一覧表	201
第84表	SI-46B	古墳時代終末期	出土遺物数一覧表	141	第126表	SI-41	出土遺物	203	
第85表	SI-47		出土遺物	143	第127表	SI-42	出土遺物	204	
第86表	SI-47	古墳時代終末期	出土遺物数一覧表	144	第128表	SI-42	平安時代	出土遺物数一覧表	207
第87表	SI-48		出土遺物	145	第129表	SI-44	出土遺物	209	
第88表	SI-48	古墳時代終末期	出土遺物数一覧表	148	第130表	SI-44	平安時代	出土遺物数一覧表	212
第89表	SI-49B		出土遺物	150	第131表	SI-45	平安時代	出土遺物数一覧表	212
第90表	SI-49B	古墳時代終末期	出土遺物数一覧表	150	第132表	SI-45	出土遺物	214	
第91表	SI-49A又は49B		出土遺物	151	第133表	SI-46A	平安時代	出土遺物数一覧表	216
第92表	SI-49A又は49B	古墳時代終末期	出土遺物数 一覧表	152	第134表	SI-46A	出土遺物	217	
第93表	SI-50		出土遺物	154	第135表	SI-55	出土遺物	221	
第94表	SI-50	古墳時代終末期	出土遺物数一覧表	160	第136表	SI-55	平安時代	出土遺物数一覧表	222
第95表	SI-53		出土遺物	162	第137表	SI-60	出土遺物	223	
第96表	SI-53	古墳時代終末期	出土遺物数一覧表	166	第138表	SI-60	平安時代	出土遺物数一覧表	223
第97表	SI-57		出土遺物	168	第139表	井戸	出土遺物数一覧表	225	
第98表	SI-57	古墳時代終末期	出土遺物数一覧表	169	第140表	1号井戸	出土遺物	226	
第99表	SI-02		出土遺物	170	第141表	2号井戸	出土遺物	226	
第100表	SI-02	平安時代	出土遺物数一覧表	171	第142表	SK-03	出土遺物	234	
第101表	SI-03B		出土遺物	173	第143表	SK-07	出土遺物	234	
第102表	SI-03B	平安時代	出土遺物数一覧表	174	第144表	SK-10	出土遺物	234	
第103表	SI-04A		出土遺物	177	第145表	SK-14	出土遺物	234	
第104表	SI-04A	平安時代	出土遺物数一覧表	180	第146表	SK-16	出土遺物	234	
第105表	SI-12	平安時代	出土遺物数一覧表	180	第147表	SK-17	出土遺物	235	
第106表	SI-12		出土遺物	181	第148表	SK-26	出土遺物	235	
第107表	SI-18		出土遺物	182	第149表	SK-32・33	出土遺物	235	
第108表	SI-18	平安時代	出土遺物数一覧表	183	第150表	SK-37	出土遺物	235	
第109表	SI-20A		出土遺物	184	第151表	SK-43	出土遺物	235	
第110表	SI-20A	平安時代	出土遺物数一覧表	184	第152表	SK-44	出土遺物	236	
第111表	SI-21A	平安時代	出土遺物数一覧表	185	第153表	SK-06	出土遺物	240	
第112表	SI-21A		出土遺物	186	第154表	SK-09	出土遺物	240	
第113表	SI-25		出土遺物	187	第155表	SK-23	出土遺物	240	
第114表	SI-25	平安時代	出土遺物数一覧表	187	第156表	土坑	出土遺物数一覧表	241	
第115表	SI-29		出土遺物	188	第157表	遺構外	出土遺物	245	
第116表	SI-29	平安時代	出土遺物数一覧表	189	第158表	土師器	坏の大きさ	267	
第117表	SI-31		出土遺物	190	第159表	八幡渠遺跡	出土灰輪陶器	一覧表	274
第118表	SI-31	平安時代	出土遺物数一覧表	191	第160表	八幡渠遺跡	遺構	一覧表	279
第119表	SI-35A	平安時代	出土遺物数一覧表	192	第161表	八幡渠遺跡	遺構索引表	282	

写真目次

- | | |
|---|--|
| <p>図版1 八幡根遺跡と八幡根東遺跡遠景（東上空から）
八幡根遺跡（東上空から）</p> | <p>SI-15遺物出土状況（東から）
SI-15全景（南東から）</p> |
| <p>図版2 八幡根遺跡と八幡根東遺跡遠景（南西上空から）
八幡根遺跡（南西上空から）</p> | <p>SI-15貯蔵穴（東から）
SI-16とSK-02・03全景（東から）</p> |
| <p>図版3 SI-01A遺物出土状況（東から）
SI-01A・B・03A・BとSK-25全景
SI-01A竈（南から）
SI-01A貯蔵穴（北西から）
SI-01B遺物出土状況（東から）
SI-01B竈（南から）
SI-01B貯蔵穴（東から）
SI-02とSK-26全景（南東から）</p> | <p>図版8 SI-17遺物出土状況（南東から）
SI-17全景と1号井戸（南東から）
SI-18全景（南東から）
SI-20A全景（南西から）
SI-21A・B・22A・BとSK-07・09全景
SI-21B貯蔵穴（北西から）
SI-22A遺物出土状況（西から）
SI-22A竈（南から）</p> |
| <p>図版4 SI-02竈（南から）
SI-03B遺物出土状況（南から）
SI-03B遺物出土状況（東から）
SI-03B竈（南から）
SI-04A・04B・05とSK-27全景（南から）
SI-04A竈（西から）
SI-06A遺物出土状況（北東から）
SI-06A遺物出土状況（東から）</p> | <p>図版9 SI-22A貯蔵穴（北西から）
SI-22B遺物出土状況（北西から）
SI-22B遺物出土状況（西から）
SI-23遺物出土状況（南から）
SI-23全景（東から）
SI-23竈（南から）
SI-24全景（東から）
SI-25とSK-12・13・14・15全景（南東から）</p> |
| <p>図版5 SI-06A・06B・07全景（南から）
SI-08遺物出土状況（東から）
SI-08遺物出土状況（南東から）
SI-06・10全景（東から）
SI-09遺物出土状況（南から）
SI-09遺物出土状況（南から）
SI-09勾玉出土状況（東から）
SI-09全景（東から）</p> | <p>図版10 SI-26遺物出土状況（南から）
SI-26遺物出土状況（南から）
SI-26とSK-10・11全景（東から）
SI-27とSK-30全景（東から）
SI-28貯蔵穴2（北から）
SI-28貯蔵穴1（西から）
SI-28貯蔵穴2 発掘（北から）
SI-28貯蔵穴1 発掘（西から）</p> |
| <p>図版6 SI-11A・12とSK-04全景（東から）
SI-11A貯蔵穴（東から）
SI-13遺物出土状況（北から）
SI-13貯蔵穴遺物出土状況（東から）
SI-13とSK-08全景（東から）
SI-13竈（南から）
SI-14Aセクション（南から）
SI-14A遺物出土状況（西から）</p> | <p>図版11 SI-28遺物出土状況（西から）
SI-28全景（西から）
SI-28竈（南から）
SI-29全景（南東から）
SI-30セクション（南東から）
SI-30遺物出土状況（東から）
SI-30遺物出土状況（北西から）
SI-30全景（東から）</p> |
| <p>図版7 SI-14A遺物出土状況（南から）
SI-14A全景（南から）
SI-14A竈（南から）
SI-14B竈遺物出土状況（西から）</p> | <p>図版12 SI-30貯蔵穴（東から）
SI-31全景（東から）
SI-32全景（南から）
SI-32竈（南から）</p> |

- SI-33全景 (東から)
 SI-34全景 (南から)
 SI-34竈 (南から)
 SI-35A遺物出土状況 (東から)
- 図版13** SI-35A遺物出土状況 (南から)
 SI-35A遺物出土状況 (南から)
 SI-35A・BとSK-18全景 (東から)
 SI-35A竈全景 (南から)
 SI-35C全景 (南から)
 SI-36A・B・C・DとSK-16・17全景 (南東から)
 SI-37A遺物出土状況 (北から)
 SI-37A遺物出土状況 (東から)
- 図版14** SI-37A全景 (南から)
 SI-37A竈全景 (南から)
 SI-37A貯蔵穴 (東から)
 SI-38・39全景 (東から)
 SI-40全景 (東から)
 SI-41全景 (東から)
 SI-42遺物出土状況 (東から)
 SI-42全景 (南から)
- 図版15** SI-43とSK-01A・B全景 (南東から)
 SI-44遺物出土状況 (南から)
 SI-44遺物出土状況 墨書土器 (南から)
 SI-44全景 (南から)
 SI-44竈 (南から)
 SI-45竈 (南西から)
 SI-46A遺物出土状況 (東から)
 SI-46A遺物出土状況 (南東から)
- 図版16** SI-46A・BとSK-19・20・21・22 (東から)
 SI-47遺物出土状況 (南から)
 SI-47遺物出土状況 (南から)
 SI-47・48全景 (東から)
 SI-48遺物出土状況 (東から)
 SI-48貯蔵穴 (北から)
 SI-49A遺物出土状況 (南東から)
 SI-49A遺物出土状況 (南東から)
- 図版17** SI-49A遺物出土状況 (南西から)
 SI-49A遺物出土状況 (西から)
 SI-49A遺物出土状況 (東から)
 SI-49B遺物出土状況 (西から)
 SI-49A・B全景 (南東から)
 SI-50遺物出土状況 (南西から)
- SI-50遺物出土状況 (南東から)
 SI-50とSK-24全景 (東から)
- 図版18** SI-50貯蔵穴 (東から)
 SI-53遺物出土状況 (東から)
 SI-53全景 (東から)
 SI-53竈 (南から)
 SI-53貯蔵穴 (南東から)
 SI-55遺物出土状況 (南から)
 SI-55全景 (南から)
 SI-56A遺物出土状況
- 図版19** SI-57全景 (東から)
 SI-60とSK-36全景 (東から)
 2号井戸
 SK-05 (北東から)
 SK-05 (東から)
 SK-28 (東から)
 SK-31 (東から)
 SK-32・33 (東から)
- 図版20** SK-34 (東から)
 SK-37 (北西から)
 SK-38 (西から)
 SK-39 (東から)
 SK-40
 SK-42 (南から)
 SK-43 (南から)
 SK-44 (東から)
- 図版21** 出土遺物
 SI-01A-1
 SI-01A-3
 SI-01A-4
 SI-01A-5
 SI-01A-6
 SI-01A-7
 SI-01A-8
 SI-01A-10
 SI-01B-3
 SI-01B-4
 SI-01B-5
 SI-01B-8
 SI-01B-9
 SI-01B-10 内面
 SI-02-3

SI-02-4	SI-06A-17	SI-13-8	SI-14A-21
SI-03A-3	SI-06A-18	SI-13-9	圖版28 出土遺物
SI-03B-1	SI-06A-20	圖版26 出土遺物	SI-14A-22
SI-03B-3	圖版24 出土遺物	SI-13-10	SI-14A-24
SI-03B-4	SI-06A-19	SI-13-12	SI-14A-25
圖版22 出土遺物	SI-06A-21	SI-13-15	SI-14A-26
SI-03B-5	SI-06A-22	SI-13-16	SI-14A-28
SI-03B-6	SI-06A-24	SI-13-18	SI-14A-29
SI-03B-7	SI-08-2	SI-13-19	SI-14A-30
SI-03B-8	SI-08-3	SI-13-20	SI-14A-32
SI-03B-9	SI-08-4	SI-13-21	SI-14A-33
SI-03B-9 底面	SI-08-5	SI-13-22	SI-14A-36
SI-03B-10	SI-08-7	SI-13-23	SI-14A-37
SI-03B-12	SI-08-8	SI-13-24	SI-14A-38
SI-03B-13	SI-08-10	SI-13-25	SI-14A-39
SI-04A-5	SI-09-1	SI-13-26	SI-14A-40
SI-04A-6	SI-09-2	SI-13-27	SI-14A-42
SI-04A-11	SI-09-3	SI-13-28	圖版29 出土遺物
SI-04A-15	SI-09-4	SI-13-29	SI-14A-35
SI-04A-18	SI-09-5	SI-13-30	SI-14A-41
SI-04A-23	SI-09-6	SI-13-31	SI-14A-43
SI-04A-29	SI-09-7	SI-13-32	SI-14A-44
SI-04A-34	圖版25 出土遺物	SI-13-34	SI-14A-45
SI-05-1	SI-09-8	圖版27 出土遺物	SI-14A-47
圖版23 出土遺物	SI-09-9	SI-13-33	SI-14A-48
SI-05-2	SI-09-10	SI-13-35	SI-14A-49
SI-06-5	SI-11A-1	SI-13-36	SI-14A-50
SI-06A-1	SI-11A-3 內面	SI-14A-2	SI-14A-51
SI-06A-2	SI-11A-3	SI-14A-4	SI-14A-52
SI-06A-3	SI-11A-3 底面	SI-14A-5	SI-14A-53
SI-06A-4	SI-11A-5	SI-14A-6	圖版30 出土遺物
SI-06A-5	SI-11A-8	SI-14A-7	SI-14A-46
SI-06A-6	SI-11A-10	SI-14A-8	SI-14A-54
SI-06A-7	SI-11A-11	SI-14A-9	SI-14A-55
SI-06A-8	SI-11A-12 內面	SI-14A-12	SI-14A-56
SI-06A-9	SI-11A-12	SI-14A-13	SI-14A-57
SI-06A-10	SI-11A-13	SI-14A-14	SI-14A-58
SI-06A-11	SI-13-1	SI-14A-15	SI-14A-59
SI-06A-12	SI-13-2	SI-14A-16	SI-14A-60
SI-06A-14	SI-13-3	SI-14A-17	SI-15-1
SI-06A-15	SI-13-4	SI-14A-19	SI-15-3
SI-06A-16	SI-13-6	SI-14A-20	SI-15-5

SI-15-8	SI-22B-2	SI-28-10	SI-35A-16
SI-15-10	SI-22B-3	SI-28-14	SI-35A-17
SI-15-12	SI-22B-4	SI-28-15	SI-35A-18
SI-15-13	SI-22B-6	SI-28-18	図版37 出土遺物
SI-15-14	SI-22B-11	SI-28-19	SI-35A-19
図版31 出土遺物	SI-22B-12	SI-28-20	SI-35A-20
SI-17-2	図版33 出土遺物	SI-28-20 底面	SI-35A-21
SI-17-4	SI-22B-13	図版35 出土遺物	SI-35A-22
SI-16-5 内面	SI-22B-14	SI-28-21	SI-35A-23
SI-17-6	SI-22B-15	SI-28-22	SI-35A-31
SI-17-7	SI-23-2	SI-28-23	SI-35A-32
SI-17-9	SI-23-4	SI-28-24	SI-35A-33
SI-17-10	SI-23-5	SI-28-25	SI-35B-3
SI-17-11	SI-23-8	SI-29-4	SI-35C-2
SI-17-12	SI-26-1	SI-30-2	SI-35C-3
SI-17-14	SI-26-2	SI-30-3	SI-35C-4
SI-17-15	SI-26-3	SI-30-4	SI-35C-6
SI-17-19	SI-26-5	SI-30-6	SI-35C-7
SI-17-20	SI-26-6	SI-30-7	SI-36C-1
SI-17-22	SI-26-7	SI-30-8	SI-36C-3 内面
SI-18-1	SI-26-8	SI-30-9	SI-36C-3
SI-20A-2	SI-26-10	SI-30-11	SI-37A-2
SI-21A-1	SI-26-11	SI-30-12	SI-37A-3
SI-21B-2	SI-26-12	SI-31-3	図版38 出土遺物
SI-21B-5	SI-26-13	SI-31-4	SI-37A-4
SI-21B-6	SI-26-15	SI-31-5	SI-37A-5
SI-21B-7	SI-26-19	SI-34-1	SI-37A-6
図版32 出土遺物	SI-26-20	図版36 出土遺物	SI-37A-7
SI-21B-8	図版34 出土遺物	SI-34-2	SI-37A-8
SI-21B-9	SI-26-21	SI-34-5	SI-37A-9
SI-22A-1	SI-26-22	SI-34-7	SI-37A-10
SI-22A-4	SI-26-22 底面	SI-34-9	SI-37A-11
SI-22A-5	SI-26-23	SI-34-10	SI-37A-12
SI-22A-6	SI-26-23 底面	SI-34-11	SI-37A-13
SI-22A-7	SI-27-2	SI-35A-1	SI-37A-14
SI-22A-10	SI-28-3	SI-35A-2	SI-37A-20
SI-22A-12	SI-28-4	SI-35A-3 内面	SI-37A-21
SI-22A-13	SI-28-5	SI-35A-3	SI-37A-22
SI-22A-14	SI-28-6	SI-35A-4	SI-37A-23
SI-22A-15 内面	SI-28-7	SI-35A-5	SI-37A-32
SI-22A-15	SI-28-8	SI-35A-8	SI-37A-33
SI-22B-1	SI-28-9	SI-35A-9	SI-37A-35

圖版39 出土遺物	SI-44-9	SI-46B-7	SI-49A-7
SI-37A-24	SI-44-9 底面	SI-46B-8	SI-49A-8
SI-37A-25	SI-44-11	SI-46B-9	SI-49A-9
SI-37A-26	SI-44-12	SI-46B-10	SI-49B-2
SI-37A-36	SI-44-13	SI-46B-12	SI-49B-3
SI-37A-37 內面	SI-44-15	SI-46B-13	SI-49B-4 內面
SI-37A-37 底面	SI-44-16	SI-46B-14	SI-49B-4
SI-37A-38	SI-44-18	SI-46B-15	SI-49B-6
SI-38-1	SI-44-19	SI-46B-17	SI-49B-7
SI-38-3	SI-44-20	SI-46B-18	SI-49B-8
SI-38-4	SI-44-21	SI-46B-19	SI-49B-9
SI-39-1 內面	SI-44-22	SI-47-1	SI-49B-10
SI-39-1	SI-44-27	圖版44 出土遺物	SI-50-1
SI-39-2 內面	SI-44-28	SI-47-3	圖版46 出土遺物
SI-39-2	圖版42 出土遺物	SI-47-4	SI-50-2
SI-40-1	SI-44-32	SI-47-5	SI-50-3
SI-40-2	SI-44-33	SI-47-6	SI-50-4
SI-40-3	SI-44-34	SI-47-7	SI-50-5
圖版40 出土遺物	SI-45-4	SI-47-8	SI-50-6
SI-40-5	SI-45-7	SI-47-9	SI-50-7
SI-40-6	SI-45-8	SI-47-10	SI-50-8
SI-42-1	SI-45-10	SI-47-14	SI-50-9
SI-42-3	SI-46A-1	SI-48-1	SI-50-10
SI-42-4	SI-46A-3	SI-48-2	SI-50-11 內面
SI-42-7	SI-46A-3 底面	SI-48-3	SI-50-12
SI-42-8	SI-46A-4	SI-48-5	SI-50-13
SI-42-10	SI-46A-5	SI-48-6	SI-50-14
SI-42-11	SI-46A-6	SI-48-7	SI-50-15
SI-42-13	SI-46A-7	SI-48-9	SI-50-15 底面
SI-42-14	SI-46A-9	SI-48-12	SI-50-17 內面
SI-42-15	SI-46A-11	SI-48-14	SI-50-17
SI-42-16	SI-46A-12	SI-48-15	SI-50-18
SI-42-17	圖版43 出土遺物	SI-48-15 底面	SI-50-19
SI-43-5	SI-46A-14	SI-48-16	SI-50-20
圖版41 出土遺物	SI-46A-14 底面	圖版45 出土遺物	SI-50-21
SI-43-3	SI-46A-16	SI-48-17	圖版47 出土遺物
SI-44-1	SI-46A-18	SI-48-18	SI-50-22
SI-44-2	SI-46A-19	SI-49A-1	SI-50-23
SI-44-3	SI-46B-2	SI-49A-2	SI-50-24
SI-44-4	SI-46B-3	SI-49A-3	SI-50-25
SI-44-5	SI-46B-5	SI-49A-5	SI-50-26
SI-44-8	SI-46B-6	SI-49A-6	SI-50-27

SI-50-28	SI-55-7	SI-37A-31	図版54 土師器の未製品の焼 成品・不良品・削り かす
SI-50-29	SI-55-8	SI-45-12	
SI-50-30	SI-57-7	SI-50-37	
SI-50-31	SI-57-8	SI-53-32	SI-11A-19
SI-50-32	SI-57-10	SI-34-12	SI-14A-63
SI-50-33	SK-14-4	図版53 鉄器類	SI-22A-17
SI-50-34	SK-14-4 底面		SI-03B-14
SI-50-35	SK-26-9	SI-04A-30	SI-22B-17
SI-53-1	SK-30-1・2・3	SI-04A-35	SI-22B-18
SI-53-2	SK-32・33-10	SI-11A-20	SI-22B-19
SI-53-4	SK-37-12	SI-11A-21	SI-22B-20
SI-53-5	図版50 出土遺物	SI-11A-22	SI-22B-21
SI-53-6		SK-43-13	SI-14A-67
SI-53-7	遺構外-1	SI-14A-68	SI-22B-23
SI-53-9	遺構外-3	SI-21A-4	SI-22B-24
図版48 出土遺物	遺構外-13	SI-26-26	SI-22B-25
	SI-53-8	SI-30-13	SI-28-28
SI-53-8 底面	遺構外-15	SI-35A-36	SI-28-29
SI-53-10	遺構外-16	SI-35A-37	SI-28-30
SI-53-11	遺構外-17	SI-35A-38	SI-34-13
SI-53-11 底面	遺構外-18	SI-35C-9	SI-35B-7
SI-53-12	遺構外-19	SI-37A-40	SI-36C-4
SI-53-13	遺構外-20	SI-41-6	SI-37A-29
SI-53-16	遺構外-21	SI-41-7	SI-37A-30
SI-53-17	遺構外-26	SI-46A-20	SI-46B-22
SI-53-17 底面	遺構外-27	SI-46A-21	SI-47-2
SI-53-18	遺構外-28	SI-46A-22	SI-47-12
SI-53-21	遺構外-29	SI-55-12	SI-50-47
SI-53-22	遺構外-30	SI-55-13	SI-50-48
図版51 石製模造品製作関連遺物	SI-90-14・16・17	SI-57-12	SI-50-49
	SI-90-18	SI-57-14	SI-53-30
SI-53-23	SI-90-65・67	SI-57-15	焼粘土塊
SI-53-24	SI-90-96	遺構外-33	SI-22A-16
SI-53-25	SI-90-102・103・104	遺構外-34	SI-22B-26
図版49 出土遺物	SI-90-136・137	遺構外-35	SI-22B-27
	SI-90-138	遺構外-36	SI-22B-28
SI-55-1	図版52 砥石・磨石および石皿(?)	遺構外-37	SI-22B-29
SI-55-2		SI-04A-31	SI-25-3
SI-55-3	SI-04A-32	遺構外-38	SI-28-31
SI-55-4	SI-04A-33	遺構外-39	SI-28-32
SI-55-5	SI-24-4	遺構外-40	SI-47-16
SI-55-6	SI-34-15	遺構外-41	SI-47-17
		遺構外-42	

SI-50-41

旧石器時代の遺物

SI-50-42

図版56 縄文土器(1)(2)(3)

SI-50-43

図版57 縄文土器(4)(5)(6)

SI-50-44

図版58 縄文土器(7)(8)

SI-50-45

縄文時代の石器

SI-50-46

弥生土器(1)

SI-53-29

図版59 弥生土器(2)

遺構外-4

図版55 土製品・石製模造品・石製品

SI-01B-16

SI-04A-26

SI-04A-27

SI-05-7

SI-09-11

SI-14A-64

SI-14A-65

SI-14A-66

SI-15-15

SI-26-27

SI-26-28

SI-34-14

SI-37A-27

SI-38-5

SI-45-13

SI-47-18

SI-47-19

SI-49A-13

SI-49A-14

SI-49A-15

SI-53-31

SK-16-17

SK-16-18

SK-16-19

SK-16-20

SK-16-21

遺構外-8

遺構外-9

遺構外-10

遺構外-23

遺構外-24

遺構外-25

遺構外-31

例 言

1. 本書は、栃木県小山市大字中久喜八幡根939番地ほかに所在する八幡根遺跡の発掘調査報告書である。遺跡略号は「ON4-NKK」である。
2. 発掘調査は、一般国道4号(新4号国道)改築工事にともなう事前調査である。
3. 調査は、建設省の委託事業であり、栃木県教育委員会事務局文化課の指導により、財団法人栃木県文化振興事業団が実施したものである。
4. 本遺跡の調査および整理報告期間は以下の通りである。

調査 1982(昭和57)年10月8日～1983(昭和58)年3月15日
整理報告 1996(平成8)年4月1日～1997(平成9)年3月31日
5. 遺跡名は八幡根(やはたね)遺跡であるが、発掘調査時の遺跡名は「中久喜(なかくき)遺跡」である。
6. 発掘調査は、財団法人栃木県文化振興事業団文化財調査部調査第二課(昭和57年度当時)の川原由典・藤田典夫が担当した。
7. 整理・報告書作成作業は、財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査部調査第2課で行い、齋藤弘・飯塚俊昭・内山敏行・亀田幸久が担当した。
8. 本書の執筆は第1章第1節を岩上照朗、第3章の遺構関係を飯塚俊昭、第3章第1節、第3章第8節、第4章第3節の旧石器・縄文・弥生時代の遺物関係を亀田幸久、その他を内山敏行が担当した。遺構の写真撮影は川原由典・藤田典夫、遺物の写真撮影は亀田幸久・内山敏行、編集は内山が行った。
9. 発掘調査と整理作業に関して、次の方々から御指導・御協力を頂いた(敬称略)。

建設省宇都宮国道工事事務所・栃木県教育委員会文化課・小山市教育委員会・小山市立博物館
赤井博之、穴沢義功、井上喜久男、齋藤孝正、柴垣勇夫、城ヶ谷和広、三沢正善。
10. 本書に掲載した調査については「一般国道4号(新4号国道)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過」(岩上他1988)と「小山市史 通史編1 史料補遺編」(川原他1984)でそれぞれ概要を公表しているが、本書を正式報告とする。
11. 本遺跡の出土遺物・資料類は、財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センターに保管している。
12. 発掘調査および整理作業の参加者は次の通りである。

(発掘調査) 阿久津英子・阿久津政徳・安藤マサ・内田真紀子・小川原加代子・齋藤弘・坂本ウメ・坂本トシ子・坂本マキ・坂本幸広・左巻アサ子・左巻好江・諏訪シチ・諏訪ソメ・諏訪トミ・諏訪ヨツ・関マサ・高森広子・田村幸子・中田イチ・中田キヨ・中山より子・野沢英子・引橋磯次郎・引橋正・藤咲勝子・藤本喜美子・藤本ミチ子・本間和子・峯ミキ・武笠美江子・持田菊江・山中悟・山中セン・横山久子・吉川初江。

(整理作業) 赤萩タマエ・荒井光枝・生駒幸子・池沢恵子・池沢ヨシ子・池杉映子・池田留美子・板垣きみ子・岩本文子・上杉玲子・大平洋子・大滝久子・奥貫ミイ・川村太加子・北島洋子・北野登美子・小瀬洋恵・佐伯智恵子・佐山延子・菅原澄子・鈴木キクイ・鈴木典子・関ハル・瀬野佳代子・高橋春恵・高橋ユリ子・館野キヨ子・鳥山初枝・鳥山泰子・中野里子・中村しま子・根本ひろ子・信末シナ・長谷川明美・藤田八重子・峯容子・宮野美智子・山口啓子・山滝光枝・山中菊枝・山中さわ・山中治子・山中真弓。

凡 例

〔遺構〕

方位 図中の方位は、小縮尺の地形図(第1・2図)では真北を示す。大縮尺の地形図(第3図・第4図)では座標北(国土調査法に基づく平面直角座標第IX系のX軸方向)を示す。その他はすべて磁北を示す。現地調査時の磁針方位はTN-6°40′-Wである。

縮尺 遺構図の縮尺は、竪穴建物跡1/80、竪1/40、土坑・井戸を1/60とした。

標高 遺構実測図に示した断面水準線の数値は、東京湾の平均海面を基準とした海拔標高を示す。

遺構名 遺構種類は、竪穴建物跡をSI、土坑をSKの略号で表し、各種類ごとにそれぞれ通し番号をふった。また、重複する遺構の一部はA・Bとした。井戸は略号を使わず、1号井戸・2号井戸とした。調査の過程で欠番になった番号もあるが、現地調査時の遺構名称・番号をそのまま使用している。遺構一覧は本文末の第160・161表に示した。

〔遺物〕

縮尺 遺物図の縮尺は、完形または図上復原の土器を1/4、土製品・鉄器・鉄滓・砥石を1/2とした。また、石製模造品は白玉と製作剥片を1/1、その他を1/2とした。縄文土器は1/3、旧石器時代の石器は2/3、縄文時代の石器は1/2または1/3である。これは原則であり、例外もある。

器質 須恵器は断面黒塗り、織織入りの縄文土器は断面網かけ、織織のない縄文土器と土師器・土師質土器・灰釉陶器・石器・石製品・金属器は断面白抜きで示す。金属器で、断面図と側面図を区別しにくいものは、断面に斜線を記入した。

器面調整と施釉 土師器・須恵器は撫での範囲を破線、削りの範囲を実線で示し、必要に応じて削りの方向を矢印で示した。漆仕上げと施釉の範囲は一点鎖線で示す。施釉・赤彩色・黒色処理は黒地、油煙の範囲は砂目のトーンでそれぞれ示した。

色調 農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1967『新版 標準土色帖』の12版(1992年)を用いて、色相・明度・彩度を表示する。土器の場合は、焼成当初の色調に近い部分で観察し、二次的についたスス・おこげ・加熱赤化・塗彩は別の特徴として扱う。

胎土 混和材の多少を基準に、「粗い/やや粗い/やや緻密/緻密」とする。分類基準は次の通り。

・混和材が鉱物・岩石の場合：長径0.5mm未満は「細砂」、0.5～2.0mmは「砂」、2.0mm以上は「礫」とする。ただし、雲母の場合は「細片」・「片」・「粗片」とする。

・鉱物・岩石以外の場合：長径0.5mm未満は「細粒」、0.5～2.0mmは「粒」、2.0mm以上は「粗粒」とする。

・混和材の色は「灰・白・黒・赤・透明」とする。半透明のものは「透明」に含めた。

・古墳時代終末期の遺物では、八幡根遺跡周辺の土師器の胎土を1a類・1b類・2類に区別した。胎土分類の説明は第4章第1節(4)「古墳時代終末期の土師器生産」で述べる(p.272)。

焼成 「硬質/やや硬質/やや軟質/軟質」に分類する。その種類の遺物として普通のものは特に記載しない。縄文土器・弥生土器・土師質土器の場合、高温で焼き、陶器質により近くて硬いものが「硬質」で、芯に黒色が残らないことが多い。

遺物の出土数 遺構ごとに出土遺物数を一覧表で示した。

- ・器質(土師器・須恵器など)と器種ごとに、口縁部・底部・高坏脚部など、特定部位の破片数を集計した。
 - ・体部の破片は、数を数えないで、単に「有」とだけ示した場合が多い。破片の大きさや土器の壊れかたによって極めて大きく変動する体部破片数は、口縁部破片数や底部破片数にくらべると定量的な意味が低い。例えば、1個の壺の胴部は、3片にでも50片にでも、どのようにでも壊れて出土する。口縁部や底部の場合はこれほど誤差が大きい。また、土器の特徴が最も良く現れる口縁部と底部の破片に注目して集計したことで、時期が異なる遺物の混入品を識別して集計から除外することがほぼ徹底できた。
 - ・複数の破片が接合した土器でも、すべて接合する前の破片数で示している。理由は、次の2点である。
 - 1) 接合作業にかけた時間の長短によって出土遺物数が変動することを避けるため。
 - 2) 大量の出土破片を完全には個体識別できない状況の中で、集落で使用・廃棄された遺物の量比をできるだけ正しく定量的に把握するため。例えば、口縁部8片が接合した土師器坏1個と、接合できない須恵器坏の口縁部3片とが出土した場合、土師器と須恵器の構成比を1:3ではなく8:3として集計する。個体識別が徹底できないかぎり、「3片」は「3個体」としては扱えない。
 - ・平底無台の土器と高台を持つ土器の破片数とを、底部破片数の欄内で分けて示した。
 - ・丸底の土器は、底部破片を客観的に抽出できないので、底部破片数を表示していない。
 - ・異なる時期の遺物の混入品は集計から除外し、「混入」と明記して一覧表の下の欄で簡単に紹介した。
 - ・平安時代の須恵器は、形態・技法・胎土の特徴から、生産産を判別して示した。
- 弥生土器の附加条縄文の表記について
- ・附加する縄は、軸縄の各条に対して1本ずつ絡めるという意味で、L_i、R_iと表現した。

第1章 発掘調査に至る経緯および経過

第1節 発掘調査の経緯

新4号国道は、関東・東北を貫く我が国における最重要幹線のひとつである。栃木県においても、ほぼ中央部を縦断するように設定されており、小山・宇都宮・矢板・黒磯市など5市7町を結ぶ最も長大な幹線となっている。交通量も他を圧して多く、近年の地域開発を契機として今後更に増加が見込まれる路線である。しかし、各市町の中心部を通るため、交通量の増加に対し、例えば現道の拡幅で対応することは極めて困難な状況にあった。とくに、宇都宮市以南の地区については、市街化の進行が著しく現国道の拡幅は不可能に近い。これらの状況を踏まえた建設省においては、新たな路線の策定が急務とされ、昭和39年度より国道4号バイパス(新4号国道)として計画線の調査及びそれに関する諸事業に着手していたところである。

計画路線の大略決定に従い、昭和44年7月7日付け宇国発第2041号により建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所長より栃木県教育委員会教育長あて、国道4号バイパス(新4号国道)建設計画が提示された。併せて、当該路線上の埋蔵文化財の有無とその位置並びに取り扱いについて照会がなされている。

県教育委員会は、これを受けて宇都宮国道工事事務所(以下「国道事務所」と略す)と密接な連絡をとるとともに、道路建設予定地内の埋蔵文化財所在調査を実施した。実施時期は、昭和44年7月～8月と昭和53年9月の2回にわたり、主として県教育委員会事務局文化課職員がこれに当たった。初回は、主に国道50号以北に関わる地区について実施し、昭和44年9月4日付け文化第258号により国道事務所長あて回答している。昭和53年は、主に国道50号以南の地区についての所在調査を実施した。この結果、以下の16箇所にも及ぶ埋蔵文化財包蔵地(以下「遺跡」と略す)を確認した。

宇都宮市地区：

久部台古墳群 (宇都宮市石井町所在) 猿山遺跡 (宇都宮市下栗町所在)

南河内町地区：

薬師寺南遺跡 (河内郡南河内町薬師寺所在)

小山市地区：

鷹の巣前遺跡 (小山市鉢形所在)	本郷前遺跡 (小山市鉢形所在)
向野原遺跡 (小山市中久喜所在)	八幡榎東遺跡 (小山市中久喜所在)
八幡榎遺跡 (小山市中久喜所在)	横倉遺跡 (小山市横倉所在)
横倉戸館遺跡 (小山市横倉所在)	横倉宮ノ内遺跡 (小山市横倉所在)
田間東道北遺跡 (小山市田間所在)	西裏遺跡 (小山市田間所在)
塚崎遺跡 (小山市塚崎所在)	金山遺跡 (小山市東野田所在)
大城遺跡 (小山市東野田所在)	

遺跡所在調査終了後、これらの取り扱いについて建設省と事前協議に移った。1991(昭和66)年度供用開始を目処とする建設スケジュールと遺跡調査スケジュールとの間の調整を図ったわけである。その際、発掘調査より報告書刊行に至るまでの作業工程の概要を示し、建設省側の理解と協力を要請した。何回かの打ち合わせを実施したが、対象とする発掘調査対象面積がかなりの数量にのぼること、それに見合うだけの調査担当職員確保の困難さ、建設計画の緊急性などから、協議はしばしば難航した。

種々の議論を重ねた結果、大筋で次のような合意が成立した。新4号国道の全線開通は昭和66年度を目標とすること。新4号国道の開通は本県行政の立場からも重要事項のひとつであることから、発掘調査をこれに向けて効率良く実施するよう調査体制を整備していくことなどであった。具体的には、発掘調査は工事優先地区に応じ、用地取得の進捗を考慮しながら進めることとした。取り敢えず、小山市地区と小山市以北地区と県内全線を二分割して発掘調査を実施することとなった。これは、小山市以北地区の南河内町～宇都宮市間の工事を建設省としては先行させたいとの要望と、同時に用地取得についても当地区では既に交渉中であり、早期に達成できるとのことによる。これを受けて県教育委員会では、南河内町に所在する薬師寺南遺跡と宇都宮市に所在する猿山遺跡・久部台古墳群の発掘調査を優先させて実施することになった。

薬師寺南遺跡については、昭和48年度から50年度まで計3次にわたる発掘調査を実施している。その後、整理作業・報告書の作成を順次行い、昭和54年3月、栃木県埋蔵文化財調査報告第23集「薬師寺南遺跡」として公開した。猿山遺跡・久部台古墳群については、昭和49年度から53年度まで発掘調査を実施し、昭和56年3月、栃木県埋蔵文化財調査報告第38集「猿山遺跡 付久部台古墳群」として報告書刊行がなされている。

次いで、小山市地区内所在の各遺跡についても、その取り扱いについて建設省側と打合せが実施された。その結果、小山市地区内を一般国道50号を境としてその以北と以南に分け、優先工事区域である以北より、発掘調査を実施することになった。発掘調査は、鷹の巣前・本郷前・向野原・八幡根東・八幡根西の5遺跡について、昭和55年度より58年度まで4年間にわたり実施した。このうち、鷹の巣前・本郷前・向野原の3遺跡については、昭和60年3月、栃木県埋蔵文化財調査報告第70集「一般国道4号(新4号国道)改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 鷹の巣前遺跡・本郷前遺跡・向野原遺跡」を刊行し、一連の作業が完結している。尚、新4号国道に係わる各遺跡の概要・調査期間等については第1表に掲載した。

新4号国道改築工事関係の発掘調査は、昭和48年度より平成3年度まで実施した。この間昭和56年度は、県段階の埋蔵文化財行政にとって大きな転機となった年度である。

それ以前まで、調整・発掘調査・遺物等整理・報告書作成という一連の流れを県教育委員会文化課文化財調査係において一手に担っていた。昭和56年度は、効率的な埋蔵文化財行政を企図し、4月1日をもって財団法人栃木県文化振興事業団が発足した。以後、各種開発行為との調整協議は、主として県教育委員会が担当し、発掘調査・整理作業・報告書作成を当事業団が実施するとその明確な役割分担が整い、より緻密な埋蔵文化財行政が可能となったわけである。これにより、国・公社・公団に関わる発掘調査については、県教育委員会の指導・推薦を受けた当事業団が、当該諸機関と直接に受委託契約を締結する方向が定められた。第1表各遺跡のうち、薬師寺南遺跡から向野原遺跡までは当事業団発足以前のものである。八幡根東遺跡以後の発掘調査等については、当事業団がこれに当たっている。

尚、平成3年4月1日には埋蔵文化財センターが下都賀郡国分寺町に開所した。埋蔵文化財の調査研究及び保存・資料普及事業の充実を図り、より広範な埋蔵文化財行政の成果を高めようとするものである。当事業団事務局内にあった文化財調査部がこれに移行し、以後の発掘調査・整理作業・報告書作成は当センターで実施することになった。

さて、当事業団が設立された昭和56年度以降の調査の経過について記述する。調査工程を第2表に提示する。発掘調査対象地はすべて小山市地区にあり、旧石器・縄文時代から近世初期にかけての各時代の遺跡が所在する。当初の調査面積は約25万㎡に及び、計10箇所の遺跡が対象となっている。

調査は、八幡根東遺跡から着手している。次いで、昭和57年度八幡根遺跡と進むわけであるが、第2表調査工程表の通り、昭和58年度から59年度にかけて現地での調査は一時中断している。これは、国道50号以北

第1表 一般国道4号(新4号国道)改築工事に伴わる埋蔵文化財保護地一覧表

番号	遺跡名(旧名称)	所在地	種類(時代)	面積(m ²)	主な遺構	調査・報告(報告書)
1	久部台古墳群	宇都宮市石井町久部	古墳群(古墳)	18,500 (全対象面積)	円墳3基、前方後円墳1基	昭和60年度調査 昭和66年度報告書刊行(第38集)
2	嶺山遺跡	宇都宮市下栗町さるやま	集落跡(奈良～平安)	27,400 (全対象面積)	住居跡61軒、掘立柱建物跡3棟、円形周溝遺構3基、その他井戸跡、ビット群等	昭和49～53年度調査 昭和56年度報告書刊行(第36集)
3	薬師寺南遺跡	河内郡南河内町大字薬師寺	集落跡(古墳～平安)	18,000 (調査面積)	住居跡130軒余、掘立柱建物跡3棟、円墳1基、方形周溝墓、その他井戸跡、土坑等	昭和48～50年度調査 昭和53・54年度報告書刊行(第23集)
4	鷹の鼻前遺跡	小山市大字鉢形字鷹の鼻前		13,750 (調査面積)	遺構なし	昭和55年度調査 昭和60年度報告書刊行(第70集)
5	本郷前遺跡	小山市大字鉢形字鷹の鼻前	集落跡(旧石器～平安)	28,200 (調査面積)	旧石器ブロック2ヶ所、住居跡5軒、その他土坑等	昭和55年度調査 昭和60年度報告書刊行(第70集)
6	向野原遺跡	小山市大字中久喜字上野原	集落跡(古墳)	26,200 (調査面積)	住居跡5軒、その他土坑等	昭和56年度調査 昭和60年度報告書刊行(第70集)
7	八幡横東遺跡	小山市大字中久喜字八幡横	集落跡(旧石器～古墳～平安)	上層 25,100 下層 16,100 (調査面積)	旧石器ブロック9ヶ所、同層跡2ヶ所、住居跡62軒、井戸跡4本、掘立柱建物3棟、その他土坑等	昭和56～57年度調査 平成7年度報告書刊行(第181集)
8	八幡横遺跡(中久喜遺跡)	小山市大字中久喜字八幡横	集落跡(旧石器～古墳～平安)	7,700 (調査面積)	住居跡68軒、井戸跡2本、土坑44基	昭和57年度調査 平成8年度報告書刊行(第189集)
9	横倉遺跡(長谷遺跡)	小山市大字横倉字戸籠・長谷	集落跡(旧石器～古墳～室町)	10,000 (調査面積)	掘立柱建物跡12棟、地下式墳1基、井戸跡15本、溝跡9条、土坑16基、不明遺構・ビット群等	平成2年度調査 平成7年度報告書刊行(第182集)
10	横倉戸籠遺跡	小山市大字横倉字戸籠	集落跡(旧石器・縄文・古墳)	5,000 (調査面積)	住居跡2軒、埋藏墓2基	平成2年度調査 平成8年度報告書刊行(第190集)
11	横倉宮ノ内遺跡(横倉宮の内遺跡)	小山市大字横倉字宮ノ内	集落跡(旧石器・縄文～平安・室町)	19,600 (調査面積)	住居跡10軒、掘立柱建物跡8棟、井戸跡57本、地下式墳18基、方形壘1基、その他土坑等多数	平成2～3年度調査 平成6年度報告書刊行(第161集)
12	田間東道北遺跡(宿尻遺跡)	小山市大字田間字東道北	集落跡(旧石器～古墳～平安)	10,000 (調査面積)	住居跡10軒、土坑191基、埋藏墓6条、火葬墓1基、地下式墳2基、井戸跡13本	平成元年度調査 平成8年度報告書刊行(第149集)
13	西裏遺跡(谷中島遺跡)	小山市大字田間字西裏	集落跡(旧石器～古墳)	11,400 (調査面積)	住居跡44軒、円形周溝遺構8基、方形周溝遺構2基、溝跡、土坑等	昭和63～平成3年度調査 平成8年度報告書刊行(第180集)
14	塚崎遺跡(西野遺跡)	小山市大字塚崎字東塚	集落跡(旧石器・縄文・古墳)	12,000 (調査面積)	旧石器ブロック3ヶ所、溝跡2条、住居跡6軒、土坑127基、溝跡3条、現代の炭庫2基	平成元～3年度調査 平成8年度報告書刊行(第150集)
15	金山遺跡(東野田遺跡)	小山市大字東野田字金山・大門前	集落跡(旧石器～近世) 製鉄関連遺跡(平安) 墓地(中世)	57,100 (全対象面積)	旧石器ブロック12ヶ所、溝跡1基、方形周溝墓1基、住居跡482軒、掘立柱建物跡117棟、井戸跡140本、鉄生産関連炉1基、地下式墳82基、方形壘穴20基、土坑1930基、溝跡39条、柱穴10ヶ所、中世遺跡82、水田、ビット群等	昭和60～平成3年度調査 平成4～8年度報告書刊行(第135,148,160,179,187,188集)
16	大境遺跡(六軒遺跡)	小山市大字東野田字六軒	製鉄関連遺跡(平安)	5,400 (調査面積)	溝跡4条、土坑3基	昭和60・60年度調査 平成4年度報告書刊行(第136集)

※ これは建設予定路線内の遺跡について北から列記したものである。

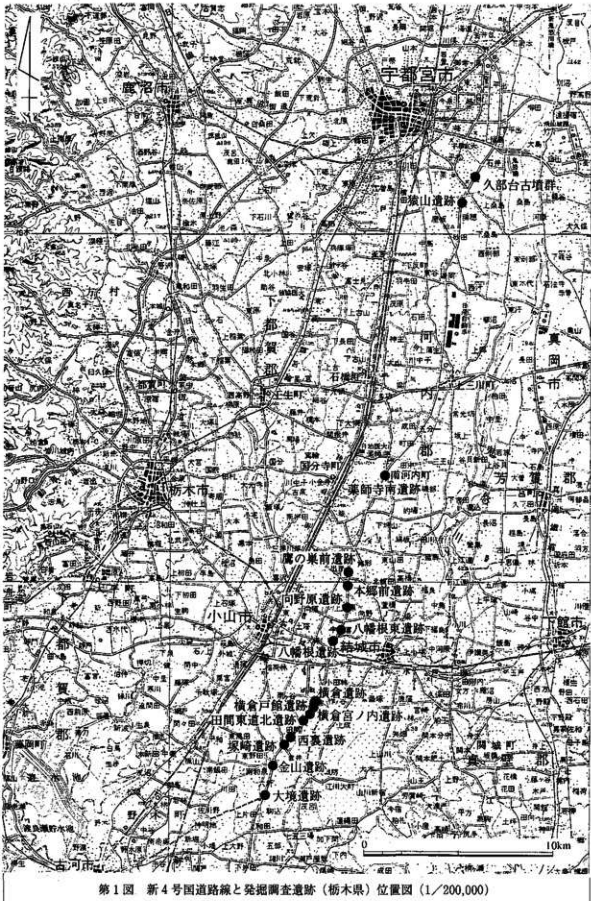
の道路建設工事を優先したいとの建設者側の意図によるものであった。つまりこの両遺跡は国道50号の北側に所在する遺跡であること、これより以北の遺跡調査及び用地取得が終了していること、国道50号が新4号国道全線の大きな結節点であることなどによる。2年間の中断の後、昭和60年度金山遺跡の調査を再開した。尚、昭和60年度には、茨城県との境に位置する大境遺跡の調査も併せて実施した。

金山遺跡については、当初都合3年間の調査期間を設定していた。しかし、確認した遺構・遺物量ともに予想量をはるかに上回り、調査開始間もなく調査予定期間の見直しが必要となった。また、その他の遺跡数及び調査対象面積と調査担当者数を勘案すると、国道全線開通昭和66年度内という計画に支障をきたすのは明らかとなったのである。この問題を解決するために必要なのは、今後調査対象とする各遺跡のより具体的な内容を確認し、それに沿って調査担当者数・経費などの調査計画を練ることである。具体的には、本調査以前に試掘を実施し、それによって得られた資料をもとに調査計画を見直すことであった。こうして、昭和62年度より、金山遺跡等の継続的な調査と併行して調査対象各遺跡の試掘を実施した。次いで、試掘の結果を基に、担当者の員数・調査経費・調査対象面積の確定(各遺跡の調査面積は、結果的には第1表のように移行した。)等調査計画の見直しを図った。同時に、出土遺物量などを勘案して、将来の整理・報告書作成の日程を見越し、整理作業の一部(出土遺物の水洗・注記・復元など)についても同年度より開始した。

新4号国道改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、平成3年度をもってほぼ終了し、暫定二車線ではある

第2表 調査工程表

番号	遺跡名	昭和56年	57	58	59	60	61	62	63	平成元年	2	3	調査担当者
7	八幡原遺跡												川原由典、藤田典夫
8	八幡原遺跡 (中大塚)												川原、藤田
9	真倉遺跡 (長谷)							試掘					若上規磨、片物茂、 藤原敬雄、赤羽孝浩、 本田剛弘
10	横倉戸遺跡							試掘					若上、赤羽
11	横倉戸/内蔵跡 (横倉戸の内)							試掘					若上、横田誠、藤原、 斎藤弘、片物、藤原孝 浩(旧姓赤羽)、本田
12	田代遺跡之遺跡 (田代)							試掘					若上、菊井和夫、藤原、 本田
13	真倉遺跡 (古中島)							試掘					若上、藤田、本田、 仲山英樹
14	横倉遺跡 (西郷)							試掘					若上、藤原宏光、藤田、 菅谷豊、片柳、藤原、 津野仁
15	金山遺跡 (東野田)												若上、赤羽、片原茂、藤原、 藤田、菅谷、小島部重隆、及 藤原孝浩、若上、(藤原)松本 昌久、(藤原)三沢基子
16	大塚遺跡 (六軒)												若上、阿原、松本
受託費(千円)		19,191	29,725			60,814	41,107	100,999	139,342	198,770	186,381.03	158,554.84	



第1図 新4号国道路線と発掘調査遺跡(栃木県)位置図(1/200,000)

が、当初の予定どおり平成4年4月全線供用開始したのである。

約20年にわたる新4号国道関連の発掘調査の間は、前述のように本県埋蔵文化財行政が大きく変容・発展する時期であった。金山遺跡発掘調査開始以後をみても、調査期間は7年間に及び、この間埋蔵文化財センターの設置に伴う組織改変も断行された。併せて、調査担当者の異動などもあり、一貫した体制のもとに調査が遂行されたとは言いがたい。但し当事業団としては、新4号国道開通の重要性を鑑みて、より多くの努力をこの事業に注いできたのもまた事実である。

これらに関する整理・報告書作成作業は、発掘調査の終了に引き続き平成4年度から本格的に開始している。但し、新4号国道関連の踏遺跡出土の遺構・遺物は、膨大な量にのぼる。平成4年度は金山遺跡Ⅰ（Ⅰ～Ⅲ区）・大境遺跡、平成5年度は金山遺跡Ⅱ（Ⅳ区）・田間東道北遺跡・塚崎遺跡・石神遺跡（抜幅工事高根沢町）、平成6年度は金山遺跡Ⅲ（Ⅴ区）・横倉宮ノ内遺跡、平成7年度は金山遺跡Ⅳ（Ⅵ区～Ⅷ区）・西森遺跡・八幡根東遺跡・横倉遺跡を刊行した。平成8年度は、金山遺跡Ⅴ・金山遺跡Ⅵ・八幡根遺跡（本書）・横倉戸館遺跡を刊行予定である。

尚、本章以降の各遺跡名は、『小山市遺跡分布図・地名表』（小山市教育委員会 1978）に登録された遺跡名称を使用する。従って、建設省との受委託に関わる契約遺跡名とは異なっているわけである。しかし、地名表登録遺跡名は永久保存される遺跡基本台帳に記載されたものであることから、こちらを使用するのが望ましい。建設省には、その旨を了解していただいている。遺跡名称の変更は以下のとおりである。

六軒遺跡→大境遺跡、 東野田遺跡→金山遺跡、 西浦遺跡→塚崎遺跡、
谷中島遺跡→西森遺跡、 宿尻遺跡→田間東道北遺跡、 横倉宮の内遺跡→横倉宮ノ内遺跡、
長谷遺跡→横倉遺跡、 中久喜遺跡→八幡根遺跡

発掘調査・本書の作成にあたり、建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所及び栃木県教育委員会の御指導を受けるとともに、長期間にわたり種々の御協力を戴いた。ここに記して謝意を表する次第である。

第2節 発掘調査の経過

（1）発掘調査の実施

文化財保護法の手続き 土木工事等のための埋蔵文化財発掘通知(57条の3)は、「中久喜遺跡他」として建設省関東地方建設局宇都宮国道工事事務所長から通知し、1982(昭和57)年3月20日付け文化第658号で県教育委員会教育長から文化庁長官へ進達された。

埋蔵文化財発掘調査届出(57条)は、八幡根東遺跡および中久喜遺跡として(財)栃木県文化振興事業団が調査主体となり、1982(昭和57)年4月26日から58年3月31日までの期間に記録保存調査をおこなうことで届出し、同年4月23日付け文化第57号で県教育委員会教育長から文化庁長官へ進達した。文化庁側の文書番号は、同年5月13日付け委保第5の514号である。

調査の手順 発掘調査は、北東に隣接する八幡根東遺跡の調査が終了した後に、1982(昭和57)年10月8日から1983(昭和58)年3月15日まで実施した。

台地上面の表土を除去すると、台地上部では関東ローム層が現れた(第5図右図の中央左寄りの、破線で囲んだ部分)。台地周縁では黒色腐植土層の堆積が厚いので、必要に応じてグリッドごとに黒色土を掘り下げて、遺構を確認するように努めた(第5図右図、写真図版1下)。台地上部では、いくつかのグリッドを掘り下げて旧石器時代の調査を試みたが、文化層は発見されなかった。

遺構は、堅穴建物跡・土坑・井戸の3種類に分け、おおむね北西から検出順に番号をつけた。中にはA・B等の遺構番号を用い、重複を表したものもある。また、後に欠番となった遺構等もある。巻末に、時代または種類ごとに遺構一覧表を掲載した。

原則として、堅穴建物跡は十文字にセクションベルトを残し、土坑は埋土を半載して調査を行った。

調査用グリッド まず、調査区内の国道センター杭〔No.759〕を通り、センターラインにほぼ沿う南北の基準線を設けた。この線から東側をA、西側をBと呼ぶ。遺構実測図に記入された磁針方位から計算すると、基準線の方位はMN-29°32′-Eである。この地域の磁針方位はTN-6°40′-Wであるから、グリッドの方位はTN-22°52′-Eとなる。

次に、調査区内に20m間隔で設置されている10本の国道センター杭のうちNo.758~764からそれぞれ南20mの間を各センター杭の番号で呼び、先に述べたA・Bの区画と合わせて、「758-Bグリッド」のように大グリッド名を決定した。第5図右下に例を示す。各々の大グリッドを4m四方の小グリッドに分割して1~25の番号を与え、「758-B-25グリッド」のように小グリッドを呼称した。なお、平面直角座標(公共座標)第IX系と調査時のグリッドとの位置関係は、基準点測量を行わなかったので不明である。

記録の方法 実際の現地作業では、時間的制約を考えた上で、住居跡等の遺構の付近にのみ、杭打ちを行った。杭はおおむね10m間隔である。結果として50本の杭を設置し、それぞれに通し番号を付けた(第6図・第7図)。遺構平面図の作成は、これらの杭をもとに1m方眼の水糸を張って行った。

水準点は、業者が行った水準測量を基準として、調査区内の各杭に移動してレベル原点に使用した。

遺構平面形のはかに、必要に応じて土層断面図および遺構外形断面図を作成した。必要と判断された遺物については、出土状況を平面図に記入し、出土した標高を計測した。遺物の出土標高値と、その付近の遺構断面図の底面の標高値から、遺構底面・床面から遺物までの高さを整理作業時に計算して、遺物観察表の右端に記載した。

(2) 発掘調査の組織

発掘調査(1982(昭和57)年度)

主体者 財団法人栃木県文化振興事業団

理事長 船田 謙 副理事長 手塚満雄・渡辺幹雄 常務理事 山崎孝介・宇敷民夫

事務局長(兼務) 山崎孝介 文化事業部長 坂本勇三郎

文化財調査部長職務代理者兼調査第二課長 海老原郁雄

調査第二課 技師 川原由典・藤田典夫

整理作業(1995(平成7)年度・1996(平成8)年度)

主体者 財団法人栃木県文化振興事業団

(本部) 理事長 石川 格 副理事長兼専務理事 丸橋武男 副理事長兼常務理事 西川 浄(平成8年度)

常務理事 野中ハツエ(平成7年度)・大島幸久 事務局長 関田敏一

(埋蔵文化財センター)

常務理事兼埋蔵文化財センター所長 大島幸久 管理部長 齋藤 進

調査部長兼資料整理課長 大金宣亮

(7年度) 調査第1課長 川原由典、同課主任 斎藤弘

(8年度) 調査第2課長 岩淵一夫、同課主査 飯塚俊昭、技師 内山敏行・亀田幸久

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

八幡根遺跡は、栃木県小山市大字中久喜字八幡根939番地ほかに所在する。栃木県の南端近くに所在する小山市と、茨城県域の西端に近い結城市との県境を流れる江川(西仁連川)が開析した支谷に面し、この谷の西側(小山市側)の台地上にある。

この台地は、関東平野の北部を東方(太平洋側)へ流れる鬼怒川と、南方(東京湾側)へ流れる思川・旧利根川水系の間に広がる。八幡根遺跡のある栃木県域側では「小山台地」と呼ばれ、宝木段丘面に属する。また、対岸の茨城県側では「結城台地」と呼ばれ、鬼怒川西岸にひろがる下総台地の最北端部にあたる。小山市・結城市は、中央部の小山台地と結城台地上に市街地が立地し、東を鬼怒川低地、西を思川低地ではさまれた平坦な地形である。関東平野の北縁まではまだ距離があるので、丘陵や山地は北方の栃木市・宇都宮市付近まで見られない。

八幡根遺跡の東に接する江川の開析谷はここから上流4km付近から始まる。八幡根遺跡付近では開析谷の谷底から台地中央部までの比高差は約7mである。谷底平野の幅は約200mで、「ヤト田」と呼ばれる谷水田に利用されている。南方は、下総台地を開析して茨城県岩井市・水海道市にまたがる菅生沼で飯沼川へ合流し、千葉県野田市で現在の利根川に入る。本来はこの付近で鬼怒川に合流していたのだろう。

八幡根遺跡の西側も、台地が開析され、東側と同様の谷底平野になっている。こちらの開析谷は、JR東北本線の東側に沿って北へさかのぼり、下野薬師寺跡(栃木県河内郡南河内町)のすぐ西を通り、八幡根遺跡から約12km上流の多功南原遺跡(河内郡上三川町大字多功)付近まで続く。

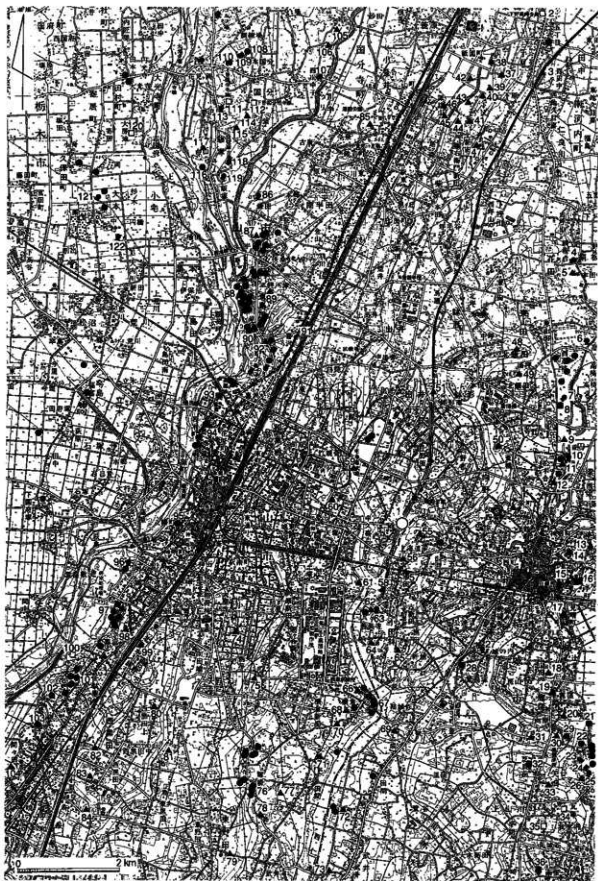
八幡根遺跡の地点では、南北に伸びる台地の上面が南へゆるく傾斜する。台地の東西幅は約500m、標高は38~39mである。北東側には狭い小開析谷が入り、八幡根東遺跡の台地と区別されている。

第2節 歴史的環境

八幡根遺跡は、縄文・弥生・古墳・平安の各時代にわたる遺跡である。〔小山市遺跡分布図・地名表〕

第2図 八幡根遺跡と周辺の遺跡

1 八幡根遺跡	22 神室岩塚古墳	43 谷畑野西遺跡	64 善長寺遺跡	85 北台遺跡	106 萬輪館遺跡
2 下野薬師寺跡	23 古山八幡塚古墳	44 上芝遺跡	65 塚越遺跡	86 本郷古墳	107 川西神社古墳
3 東輝寺南遺跡	24 上山川丸塚塚古墳	45 鳥森遺跡	66 横倉遺跡	87 成沢遺跡	108 丸塚古墳
4 宮地古墳	25 養中塚古墳	46 野助山遺跡	67 戸籍古墳群	88 東島田古墳群	109 山王古墳
5 藤原大穴遺跡	26 才光寺遺跡	47 栄工業団地内遺跡	68 横倉戸遺跡	89 東京遺跡	110 部分寺堂岩塚古墳
6 溝4号墳	27 天神山塚古墳	48 泉田遺跡	69 中曾保遺跡	90 妻沢古墳群-壘57号墳	111 下野部分寺跡
7 溝3号墳	28 築島塚古墳	49 小山浜遺跡	70 横倉宮ノ内遺跡	91 善沢海邊遺跡	112 下野部分寺跡
8 溝1号墳	29 富士塚野古墳	50 野ノ台遺跡	71 田岡末宮北遺跡	92 日光清原遺跡	113 部分寺塚古墳
9 寺野台遺跡・屋古墳群	30 内原遺跡	51 本郷(坂の東前)遺跡	72 権左遺跡	93 市原崎古墳群	114 山海遺跡
10 松木台後院塚古墳	31 沼沢内遺跡	52 約野原(上野原学城北)遺跡	73 香取遺跡	94 鳥久保遺跡	115 上野東遺跡
11 松木入遺跡	32 銀久保塚古墳	53 八幡根東遺跡	74 森山遺跡	95 泉塚塚跡古墳	116 飯塚古墳群
12 柳下丸遺跡	33 北平遺跡	54 四ツ沢遺跡	75 雨ヶ谷古遺跡	96 外城古墳群	117 泉塚塚跡古墳
13 本町遺跡	34 結城八幡瓦葺跡	55 ノ宮遺跡	76 塚崎古墳群	97 宮内古墳群-宮内北遺跡	118 琵琶塚古墳
14 藤原屋遺跡	35 結城御寺	56 上海遺跡	77 西武遺跡	98 宮内遺跡	119 康利支天塚古墳
15 曾我台遺跡	36 上山川堂岩山古墳	57 本田北遺跡	78 塚崎遺跡	99 宮内東遺跡	120 下野部分寺跡
16 曾我台古墳群	37 向台遺跡	58 本田遺跡	79 金山遺跡	100 千駄敷茂岡遺跡	121 鳩石古墳
17 観音台(反町町)遺跡	38 ノ谷遺跡	59 西山遺跡	80 西黒田遺跡	101 千駄敷茂岡山古墳	122 藤原館古墳
18 東塚遺跡	39 ノ谷東遺跡	60 野ノ台遺跡	81 鬼屋遺跡	102 坂ノ内古墳群	
19 東遺跡	40 谷畑野北遺跡	61 下塚遺跡	82 五科遺跡	103 岡々田八幡古墳	
20 坂の上遺跡	41 谷畑野東遺跡	62 小田村遺跡・小田村古墳群	83 治法遺跡	104 乙女不動原北遺跡	
21 保戸古墳	42 ノ谷遺跡	63 神明塚古墳	84 六本遺跡	105 萬輪館遺跡	



第2図 八幡根遺跡と周辺の遺跡(1/75,000) (●■は古墳、□は寺院・官衙・瓦窯、▲は集落等を示す)



第3図 八幡根遺跡周辺地形図 (1/13,000)

(小山市教育委員会1978)によると、市遺跡番号340・八幡根遺跡・規模500×475mの散布地で、縄文中期～後期初頭、古墳前期～平安時代、中世の各時代の遺物が採集されている。今回報告する発掘調査の結果、これに加えて、旧石器時代と縄文時代早期・前期と弥生時代中期・後期の遺物が確認された。

八幡根遺跡に最後の集落が営まれた平安時代までの各時代について、周辺の歴史的環境を解説する(第2図)。

八幡根遺跡の集落が最も栄えた古墳時代には、北西9kmの国分寺地域と、北東11kmの薬師寺地域に下毛野の政治的中心を示す大形古墳があり、南西7kmの間々田地域と、南東7kmの上山川地域にも有力古墳が造られる。この4地域の間中に八幡根遺跡が所在し、付近には小規模な後期古墳がわずかに見られる。

八幡根遺跡に再び集落が成立する平安時代には、都賀郡の国分寺周辺地域に下野国府・国分寺、薬師寺地域に下野国河内郡家と下野薬師寺、間々田地域に下野国桑川郡家、下総国結城郡の上山川地域に峯崎遺跡と結城廃寺がみられ、それぞれが各郡の中心地として続いている。八幡根遺跡は、下野・下総両国の境付近の開折谷に面した集落遺跡である。

次に、各時代の遺跡を紹介する。

旧石器時代

八幡根遺跡のすぐ北東に隣接する八幡根東遺跡(53)では9箇所のユニットからナイフ形石器・彫器・削器が出土し、北方の本郷前遺跡(県調査区)(51)では、ソフトローム中のブロック2箇所からナイフ形石器・尖頭器・搔器・彫器が出土している。周辺では、本郷前遺跡の別地点や、西ノ台遺跡(50)で尖頭器が採集されている。南河内町三ノ谷東遺跡(39)では、A T相当層でナイフ形石器を伴う1群、A T上位でナイフ形石器・搔器・削器を伴う石器群と、搔器・両面加工尖頭器を伴う石器群とが調査され、前者には礫群も伴う。谷館野北(40)・谷館野東(41)遺跡でも旧石器時代の遺物が知られている。寺野東遺跡(9)では3枚の文化層が確認された。赤城一鹿沼軽石層のすぐ上には剥片など7点があり、浅間板鼻軽石の上下の文化層からも、多数のナイフ形石器などが検出されている。

小山市城南部では、塚崎遺跡(78)でA T層の上下からナイフ形石器を伴う文化層が検出された。層位は不明であるが、横倉遺跡(66)でも石核・剥片が確認され、宮内遺跡(98)でナイフ形石器・尖頭器・削器などが採集されている。結城市域では才光寺遺跡(26)で尖頭器が知られている。

縄文時代

〔早期〕六本木遺跡(84)で弥生前期の住居跡が調査され、弥生文系土器が烏森(45)・横倉(66)遺跡で出土している。弥生文系土器は、北坪(33)・小田林(62)・横倉(66)・権根(72)・千駄塚浅間遺跡(100)で知られ、乙女不動原北浦遺跡(104)でこの時期の炉穴が調査されている。

〔前期〕関山式期の住居が乙女不動原北浦遺跡(104)で2棟知られ、烏森遺跡(45)でも遺物が知られる。黒浜式期には横倉宮内(70)・田間東道北(71)・萩山(74)・塚崎(78)の各遺跡で住居跡が調査され、中曾根(69)・香取前(73)・雨ヶ谷宮(75)・千駄塚浅間(100)・乙女不動原北浦B地点(104)の各遺跡でも遺物が知られる。

〔中期〕寺野東遺跡(9)は大規模集落で、中期の住居跡70棟以上と、700基以上の土坑が調査された。箱板大六天遺跡(5)では阿玉台～加曾利E I式期の袋状土坑と住居跡、三ノ谷東遺跡(39)で中期中葉の住居跡1棟、溜ノ台遺跡(60)で中期後半の土坑、雨ヶ谷宮遺跡(75)で中～後期の堅穴住居跡・袋状土坑・土坑群、乙

女不動原北浦遺跡C地点(104)で住居跡2棟が調査されている。この他にも遺物が採集された遺跡は多い。

〔後期・晩期〕八幡根遺跡の付近では烏森(45)・飯田浦(48)・小山派(49)、さらに南部では横倉(66)・千駄塚浅間(100)の各遺跡で後期前半の遺物が採集されている。溜ノ台遺跡(60)で後期初頭の住居跡が1棟知られる。寺野東遺跡では後期前半の水場遺構1箇所と住居跡約30棟が調査された。さらに、後期後半～晩期には外径165mの環状盛土遺構が形成され、大量の遺物が出土している。後期後半から晩期では松木合A(11)・坂の上(20)・三ノ谷(42)などの遺跡も知られている。乙女不動原北浦遺跡で後期安行式期～晩期の住居と、晩期前半を中心とした土壌墓群が調査されている。

弥生時代

前～中期の遺跡は少ない。自治区大周辺地区の発掘調査で、小規模な遺跡の状況が知られてきた。上芝遺跡(44)では中期の竪穴住居1棟と土坑2基、烏森遺跡(45)では中期後半～後期初頭の住居5棟と中期の土坑4基、谷館野北遺跡(40)では中期後半～後期前半の住居2棟が知られる。これらは大規模開発に伴う全面発掘調査で得られた遺構数である。柴工業団地内B地区(47)では、中期の住居2棟と、前期後半～中期前半の再葬墓が6基以上知られている。

後期になっても、集落数や、一集落あたりの建物数も少ない。谷館野東遺跡(41)に1棟と土坑3基、柴工業団地内遺跡B地区(47)で2棟、八幡根東遺跡(53)で2棟、金山遺跡(79)で1棟、乙女不動原北浦遺跡B地点(104)で竪穴住居跡1棟、その南西の乙女不動原亀田遺跡で2棟が調査されている。また、田間東道北遺跡(71)では集石を伴う後期前半の長方形土坑1基と円形土坑1基がある。江川の谷に面する遺跡としては、この他に権現遺跡(72)・香取前遺跡(73)がある。

古墳時代

八幡根遺跡では古墳時代前期の遺構が確認されていないが、中期以後の遺構に混入して前期の遺物が認められている。前期の集落は、薬師寺南(3)・寺野東(9)・烏森(45)・柴工業団地内A地区(47)・西山(59)・下大塚(61)・小田林(62)・善長寺(64)・西裏(77)・金山(79)の各遺跡が調査され、四ツ京遺跡(54)でも遺物が知られる。寺野東遺跡は大規模集落である。下大塚遺跡では方形区画溝の中に竪穴建物跡が群在し、「家族居館」とする意見もある。西裏遺跡では小銅鐸が発見されている。

前期古墳は八幡根遺跡の付近には確認されていない。北東へ10kmの南河内町三王山古墳群に前方後方墳の三王山南塚1・2号墳と方墳の朝日観音1号墳がある。また、薬師寺南・寺野東・三ノ谷(42)・溜ノ台(60)・金山・治松(83)の各遺跡と牧ノ内古墳群(102)では古墳前期のいわゆる方形周溝墓が調査されている。

和泉式期～鬼高式期初頭にあたる中期の集落は、二ノ谷(38)・谷館野北(40)・三ノ谷(42)・谷館野西(43)・烏森(45)・柴工業団地内A地区(47)・向野原(52)・西山(59)・八幡根(1)・本田(58)・善長寺(64)・横倉戸館(68)・田間東道北(71)・萩山(74)・西裏(77)・塚崎(78)・金山(79)・五科(82)・成沢(87)・喜沢海道間(91)・乙女不動原北浦(104)・乙女不動原亀田の各遺跡が調査されている。江川流域には石製模造品製作遺跡が集中し、向野原・西山・八幡根・善長寺・田間東道北・西裏・塚崎・金山の各遺跡がある。時期は中期後半が多い。中期後半の鍛冶工房跡は西裏遺跡、鍛冶関連遺物は喜沢海道間遺跡で知られている。成沢遺跡では辺長約57mの方形区画溝を伴う中期中～後半の竪穴建物群が調査され、一般に「家族居館」とよばれている。

中期後半の初期群集墳では梁古墳群(9)があり、松木合浅間塚古墳(10, 墳長35m)も一連の古墳群に含まれる。東島田古墳群(88)の大日山6号墳と、喜沢古墳群(90)の桑57号墳とが、穴窯焼成のB種ヨコハケの埴輪

を伴う。林・上山川地区では林愛宕塚古墳(22)が中期末葉の遺物を出土している。中期の大形古墳には、林・上山川地区の備中塚古墳(25, 径73m)があり、中期末に摩利支天塚古墳(119, 墳長120m)が出現する。

後期・終末期の集落は、向台(37)・薬師寺南(3)・谷館野西(43)・八幡榎東(53)・八幡根(1)・田間東道北(71)・金山(79)・善長寺(64)の各遺跡が調査されている。

古墳時代後期の江川流域には、西山(59)・小田林(62)・戸館(67)・塚崎(76)の各古墳群がある。首長墳と呼ばれるような大形古墳はなく、前方後円墳は江川対岸の小田林神明塚古墳(63, 墳長22m)がある。田川西岸には小形前方後円墳が多く、別処山(4)・紺4号(6, 墳長30m)・梁3号墳(7, 墳長41m以上)がある。後期古墳は思川流域の方が密度が高く、飯塚(116)・東島田(88)・稲葉郷(93)・外城(96)・宮内(97)・牧ノ内(102)・六本木(84)・間々田八幡(103)の各古墳群がある。外城古墳群の北方にある長福城跡(95)のSD-1は埴輪を伴う推定径36mのやや大きなものである。牧ノ内古墳群は終末期まで安定して継続する。

後期の首長墳は、国分寺周辺の琵琶塚(118, 墳長123m)・川西神社(107)・甲塚(113)・愛宕塚(110)・山王塚(109)の各古墳と、結城廃寺に近い上山川地区の古山八幡塚(28)・上山川瓢箪塚(24)古墳がある。

終末期の方墳は田川流域に多く、下野薬師寺跡(2)の北西にある多功大塚山(辺長53m)・多功南原1号墳(辺長約30m)と、梁13号墳(8, 辺長40m以上)が大きい。上山川愛宕山古墳(36)も方墳の可能性が高い。思川流域では宮内5号墳(97, 辺長35m)が方墳だが、丸塚(108, 径74m)・千駄塚浅間山(101, 径70m)のような円墳のほうが規模が大きい。

奈良時代・平安時代

八幡根遺跡の位置は、下野国都賀郡と下総国結城郡の境付近にあたと考えられる。東北側に接する小山市高椅地区周辺が下総国結城郡高橋郷、東南側の結城廃寺(35)周辺が結城郡結城郷、南西方向の小山市牧ノ内古墳群(102)周辺が下野国栗川郡真木郷にあたと考えられている。

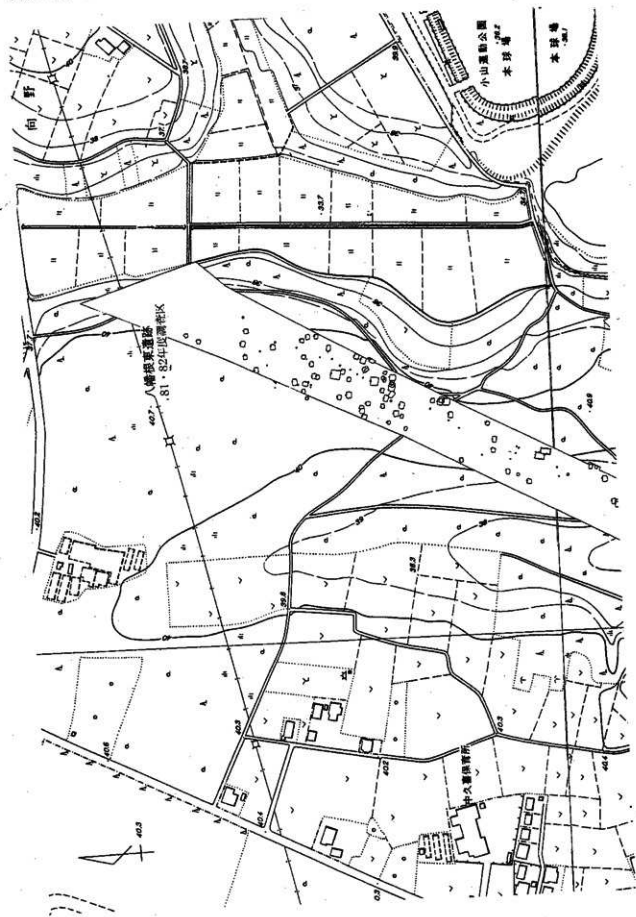
集落遺跡は、薬師寺南(3)・向台(37)・谷館野北(40)・谷館野東(41)・二ノ谷(38)・三ノ谷(42)・三ノ谷東(39)・上芝(44)・柴工業団地内A地区(47)・本郷前(県調査区)(51)・八幡榎東(53)・西山(59)・寺野東(9)・溜ノ台(60)・金山(79)・宮内東(99)遺跡などが調査されている。特に金山遺跡は大規模である。寺野東遺跡では8～9世紀代の竪穴住居跡91棟が調査され、方形周溝遺構や灰釉短頸壺を用いた火葬墓を含む墓域も伴う。上芝遺跡では庇付を含む大形の掘立柱建物群が8～9世紀に継続してみられる。

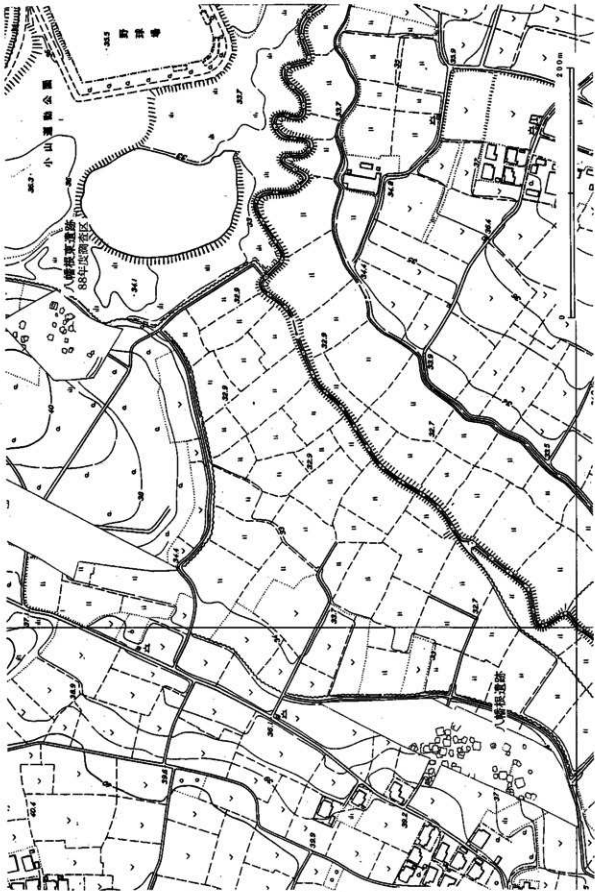
千駄塚浅間遺跡(100)は下野国栗川郡家の可能性が指摘され、峯崎遺跡(18)は下総国結城郡家に関係する遺跡か、あるいは寺院とする意見もある。八幡根遺跡から下野国府(120)は北西へ9.4kmの距離である。

寺院では結城廃寺(35)・下野薬師寺(2)・下野国分寺(111)・国分尼寺(112)がある。最も近い結城廃寺のものと思われる瓦が八幡根遺跡の平安時代建物跡から出土している。西山遺跡(59)では遺跡の一部で8世紀中～後葉の竪穴建物跡4棟を調査し、8世紀中葉の2棟から「寺」の墨書土器が合計9点出土している。

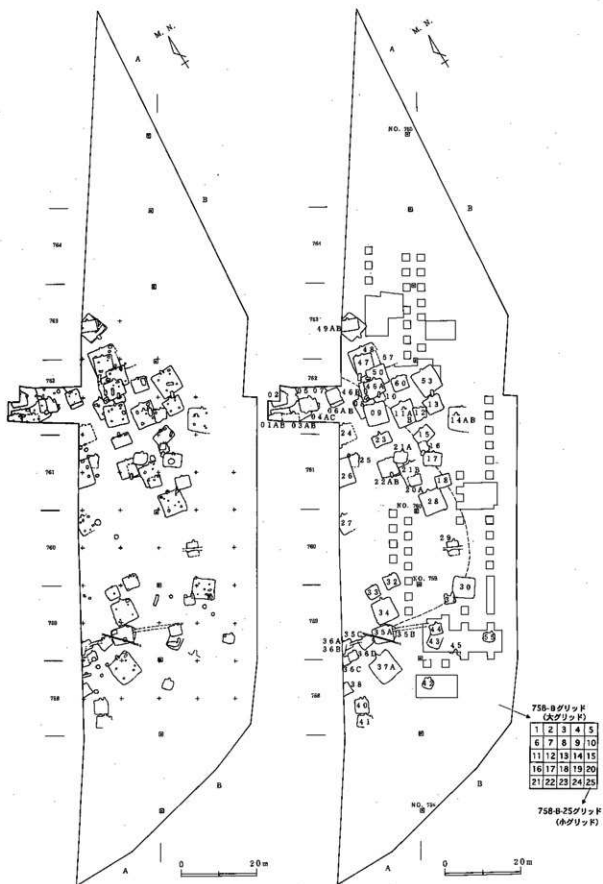
北台遺跡(85)と三ノ谷遺跡(42)では、東山道の道路遺構が調査されている。下野国府から下野薬師寺の方向へ向かう経路である。

手工業生産遺跡は、乙女不動原瓦窯跡(104)の南西が下野薬師寺、結城八幡瓦窯跡(34)が結城廃寺に供給した奈良時代の瓦専業窯である。須恵器は、奈良時代には南東約30kmにある茨城県新治村の窯跡群からこの地域に製品が多く供給される。平安時代になると八幡根遺跡から真南へ15kmの地点に三和窯跡群が成立し、この地域の須恵器の主体は新治窯製品から三和窯製品に転換する。平安時代の製鉄関連遺跡には金山(79)・大塚(79から南方へ1.8km)の阿遺跡がある。

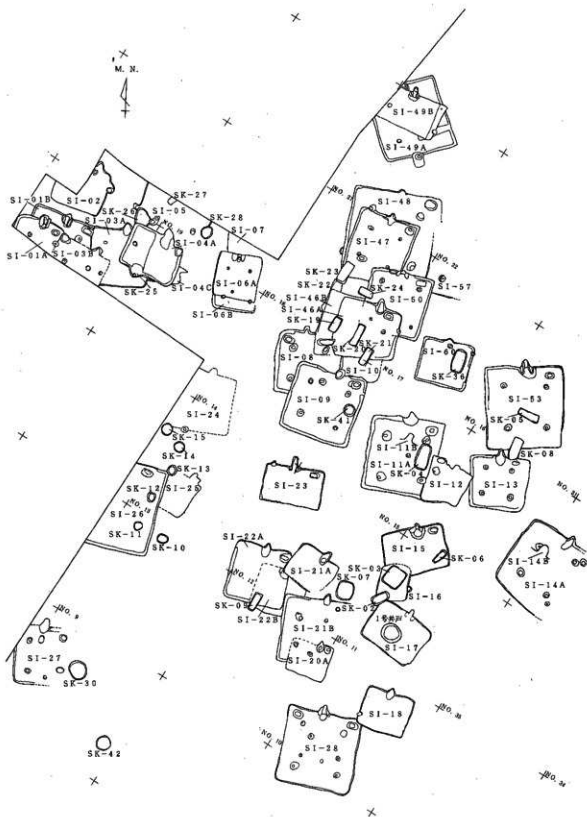




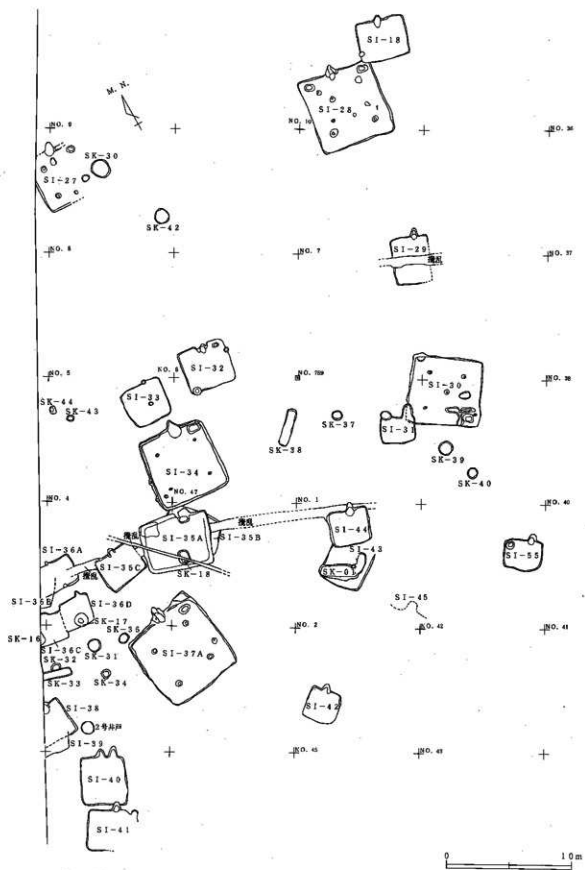
第4圖 八幡坂遺跡と八幡坂遺跡跡 (1/3,000)



第5図 八幡模遺跡 調査区全体図 (1/1,000)



第6図 八幡根遺跡 北半部遺構配置図 (1/300)



第7図 八幡根遺跡 南半部遺構配置図(1/300)

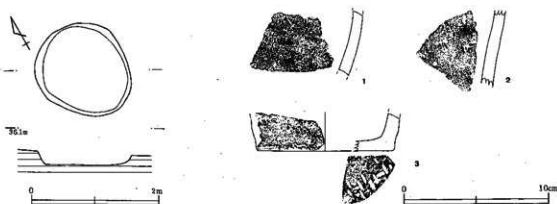
第3章 発掘調査された遺構と遺物

第1節 縄文時代の土坑

SK-30(第8図、写真図版10・49)

調査区の西西北寄りに位置し、古墳時代以降の土坑群から外に離れて存在する。古墳時代の竪穴建物跡SI-27の東壁にあたる付近に位置するが、SI-27の削平がひどいので、埴土同士の関係は不明である。平面形は円形で、壁は西壁で斜めに立ち上がり、東壁で緩やかに立ち上がっている。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。直径は1.5~1.6m、深さは0.2mである。遺物の出土状況は不明だが、出土した土器(第8図)は3片すべてが縄文中期のものなので、縄文時代の土坑と考えられる。

1・2は無文の胴部破片である。1は丸みをもって立ち上がり、胎土焼成とも良好である。2は直線的に立ち上がり、砂粒・小石を多量に含む。色調は黄褐色を呈する。焼成は良好である。3は、底部外面に網代痕を有する平底の土器である。胴部は無文で、接合部より破損している。色調は橙褐色を呈し焼成は良好である。土器は、いずれも胎土中に雲母を多量に含むことから、中期の阿玉台式期のものと思われる。



第8図 八幡根遺跡 SK-30 遺構・遺物

第2節 古墳時代中期の竪穴建物跡

(1) 石製模造品工房跡

SI-30 (第9~12図、写真図版11~12・35・51・53)

本建物跡は、調査区の南部にあり、台地上の東斜面に位置する。重複関係としては、SI-31より古く、南西コーナーをSI-31によって切られている。

この建物は、滑石製模造品工房跡である。平面形は、東西6.0m、南北5.9mのほぼ正方形を呈し、主軸方向はMN-34'-Eを示す。壁は西壁で60cm程、東壁18~20cm程、南壁で18~32cm程、北壁で28~44cm程遺存している。その立ち上がりは、西壁で70~82'程、東壁で70'程、南壁で75~85'程、北壁で65~75'程の傾きで立ち上がっている。周溝は検出されなかったが、南東コーナーにT字形をした間仕切り壁が検出された。南東コーナーの貯蔵穴(工作用ピット)を囲んでおり、その規模は東西244cm、南北146cmで、幅は22~59cm、高さ8~17cm程である。床面は北壁際が高く、南東部P5付近が低くなり、その比高差は17cmである。支柱穴は4本検出された(P1, P2, P4, P5)。P1は径31cm、深さ82cm、P2は径32cm、深さ59cm、P4は長径23cm、短径17cmの平面楕円形で、深さ20cm、P5は径22cm、深さ57cmである。いずれも断面円筒状である。この他に、建物跡の中央にピットが1本検出されており、径39cm、深さ45cmである(P3)。貯蔵穴は、南東コーナーに1基検出された。長径80cm、短径70cmの平面楕円形で、深さ34cmであり、断面楕円状で、底面は丸みを持ち、底面に焼土がみられる。工作用にかかわるピットの可能性もある。炉は、建物跡東側中央に1基検出された。長径90cm、短径61cmの平面楕円形で、深さ16cmの地床炉である。その断面はレンズ状で、底面は丸みを帯び、埋土は概ね焼土である。

埋土は2層に分層される。床面直上層は、焼土ブロック、焼土粒子、ローム粒子、炭化物を含む灰褐色土であり、上層はロームブロック、炭化物を含む黒褐色土である。

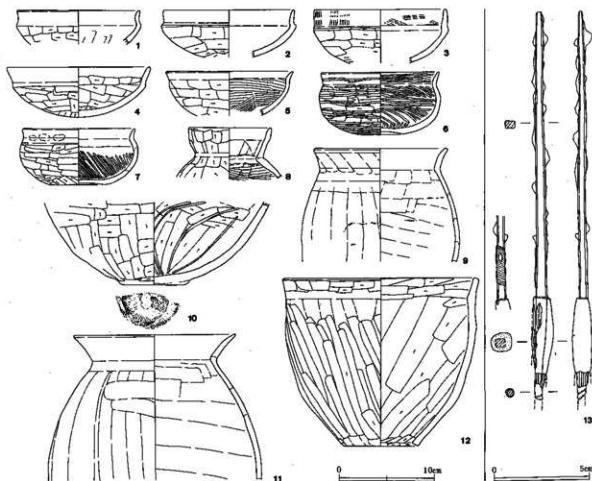
出土遺物 土器類はすべて土師器で、古墳時代中期末葉のものである。碗形坏は、6・7のように九底化しない点は古い要素だが、5の頸部径が広く、内面調整が粗雑化して撫でずに刷毛目を残す点は新しい要素である。模倣坏のうち1は身模倣坏の口縁端を土師器碗形坏のように外反させたもの。2も同様かまたは蓋模倣である。1~4は古墳時代中期末の模倣坏であり、古墳時代終末期の模倣坏類が混入したものではないと考えられる。体部上端を削り残さず、黄色味が弱くて赤味が強い色で、胎土に白細粒とチャートと思われる灰色細砂がやや目立つことが、中期末の碗形坏と共通し、古墳時代終末期の土師器とは異なっている。3は田辺福年1期後葉の須恵器蓋を模倣している。8は口縁部内面以外の最終調整を省いた粗雑なもので、小形壺(罎)としては最も新しい段階。壺はやや長胴化し、大形甔も伴う。鉄鑿は、石製模造品製作工具の可能性もあるが、それにしては身部が必要以上に長い。

第3表 SI-30 古墳時代中期 出土遺物数一覧表

	模倣坏	碗形坏	罎	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甔	大壺	焼土塊	その他
土	24	22	1					9	13	6			
口縁部	有	有						有	有	有			
体部		平底7						平底4	9	5			
底													
口縁部													
体部													
底													
底													

石製模造品製作関連遺物多量・鉄鑿1点。炭化材の小破片少量。
古墳時代前期・終末期と平安時代の土師器少量混入。

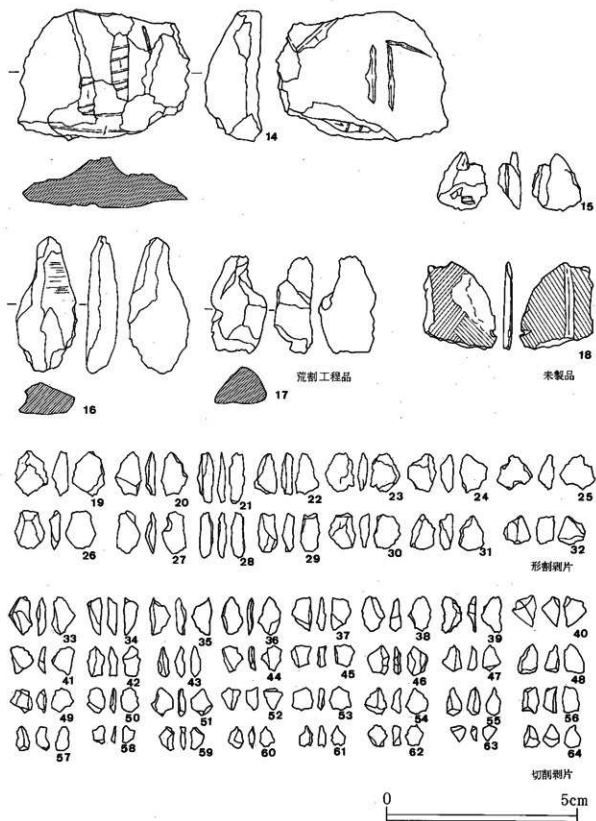
第3章 発掘調査された遺構と遺物



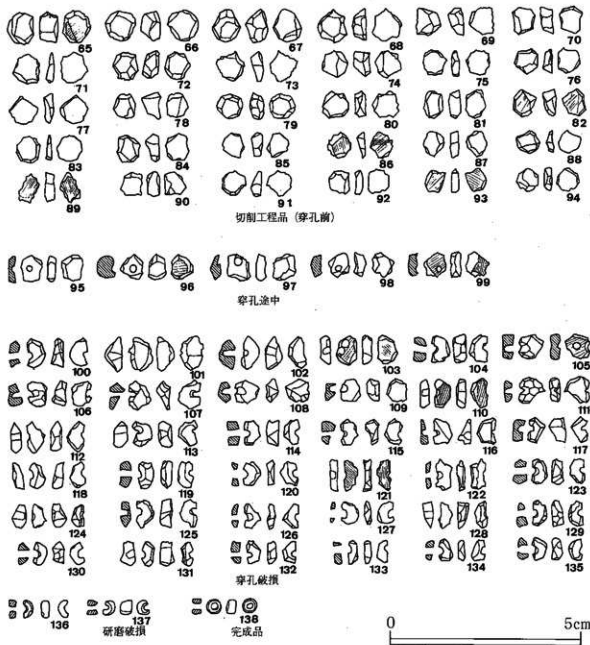
第10図 八槽杖遺跡 SI-30 (2) 遺物

第4表 SI-30出土遺物

番号 器種	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 復13.0 大 復13.2	内外面に明確な線を持って口縁部が内傾し、上半部で外反する。外面は体部更削り、口縁部横溝で。内面は体部更削り、口縁部横溝で。内面はやや暗褐色気味で、断面も内面寄りか暗い色。	2.5YR5/6 明赤褐色	やや粗い。白磁粒多量、黒・透明細砂少量。 やや硬質。	黒土中 口-体1/2間 「フク土」
2 坏 土師器	口 復13.8 残 5.0 大 復14.4	やや軽い。口縁部は内外面に明確な線と段を持ってやや外傾する。外面は体部に横方向の更削り。内面全面と外面口縁部に横溝で。	5YR7/8 橙色	やや粗い。白磁粒、灰色細砂少量、黒・透明細砂少量。 やや硬質。	不明 口1/3間
3 坏 土師器	口 復14.0 高 残 5.8 大 復14.5	口縁部は内外面にやや弱い段を持って直立する。口縁部は丸くおさめる。外面は口縁部更削り後横溝で、体部に横方向の更削り。内面は口縁部に横溝の後に、内面全面と外面口縁部に横溝で。	7.5YR6/6 橙色	やや粗い。灰色、透明、黒磁粒と白磁粒やや多量。 やや硬質。	黒土中 口-体1/3 「フク土」
4 坏 土師器	口 15.4 高 5.3	底部はやや厚く重い。丸底で、外面に段、内面に弱い段を持って口縁部が開き、内面上半部は外反気味。内外面ともに底部一方、体部横方向の更削り。口縁部内外面横溝で。外面上半にスズ?が付き、火にかけた可能性がある。	7.5YR6/6 橙色	やや粗い。黒・透明細砂と白磁粒多量、灰色砂少量。 軟質。	床直と貯蔵 穴が接合 完全 [40, 41, 42, 44貯蔵穴、 床直]
5 碗形坏 土師器	口 復13.6 高 残 4.7	薄く軽い。内面に弱い段を持って口縁部が開く。外面は体部更削り・口縁部横溝で。内面は体部更削り目の後、口縁部横溝で。	7.5YR7/6 橙色	やや粗い。白磁粒多量、黒・透明細砂と白砂やや多量。 やや硬質。	床直 口-体1/4 間 [65, 67床直]



第11図 八幡模遺跡 SI-30 (3) 石製模造品製作関連遺物



第12図 八幡根遺跡 SI-30 (4) 石製模造品製作関連遺物

現地の発掘作業およびその後の飾りかけ作業の時点ですでに抽出・別置されて、所在不明になってしまった可能性がある。

確認できた遺物は、主に白玉の製作にかかわるものが多い。その他に、発掘調査時の遺物出土状況図によると勾玉と有孔円板も認められたようであるが、所在不明である。材質はすべて滑石で、粘版岩は使っていない。

荒削り工程品・荒削り剥片は4点を抽出できた。上に説明したように、白玉の他に有孔円板や勾玉などの工程品も含むかもしれない。14~17は荒削り剥片。15は形削り剥片の可能性もある。14・15は鉄製工具の直線の刃先による加工痕が各所に残る。14の左図個の中央部はやや縦長方形の範囲が高く削り残されているが、意図

して残したものでどうかは明らかでない。16は弱い擦痕状の細かい研磨が1面に見られる。この面は、研磨する前に工具で加工している可能性がある。17は加工工具痕が明確ではない。

未製品は、1点を抽出できた(18)。大きさをみて有孔円板の未製品かもしれない。やや薄い剥片の両面をそれぞれ二方向に細かく研磨する。薄くて側面が狭く、側面の加工や研磨はみられない。

19~138は、形削工程品以降のもので、大きさをみてすべて白玉の製作に関わる遺物と考える。SI-30における白玉の製作工程は、荒削→形削→切削→(穿孔予定面を研磨)→穿孔→仕上げ研磨→完成品、の順と考えられる。穿孔予定面を研磨するものは少数である。

19~32は形削剥片、33~64は切削剥片。大きさをみて白玉の側面調整にともなうと思われるものを切削剥片、それより大きなものを形削剥片とした。形削剥片は18点、切削剥片は547点を抽出できた。

65~94は切削工程品で、54点を抽出できた。側面を切削して、平面円形に近い多角形に加工している。上下両面は形削時の剥離面のままのものが多く、一部の品は切削工程のうちに穿孔予定面にやや細かい研磨を行っている。その中には、側面に接する部分を少し斜めに分割研磨するものもある(65)。

95~99は穿孔工程の途中で放棄したもので、5点を抽出できた。基本的に片面穿孔で、穿孔途中で放棄した状態での初孔径は1.45~1.60mmで、およそ1.50mmである。

100~135は穿孔途中で破損したもので、74点を抽出できた。穿孔がうまくできなかったために穿孔をやりなおそうとして破損・放棄したものが103・105で、103は同じ面から、105は反対面から、それぞれ穿孔をやりなおしている。

136・137は研磨工程での破損品で、この2点を抽出できた。側面の研磨は横方向(上下面に直交し、穿孔方向と平行)である。136は、側面研磨はやや細かく、穿孔を行う小口の面(孔面)の両面も、不明瞭ではあるが研磨しているようである。残存幅3.45mm、高さ2.50mm、初孔径1.75mm、終孔径1.50mm。137は側面だけをやや粗く研磨して、研磨面と研磨面の間に弱い稜が残る。孔面は形削面のままで研磨していない。径3.40mm、高さ3.10mm、初孔径1.80mm、終孔径1.65mm。研磨工程の中では、137のほうが136よりも先に破損したのだろう。

138は完成品で、抽出できたのはこの1点だけである。径2.45mm、高さ3.60mm、初孔径1.70mm、終孔径1.50mmである。側面は横方向、孔面は一方に細かく仕上げ研磨している。

(2) 竪穴遺物跡

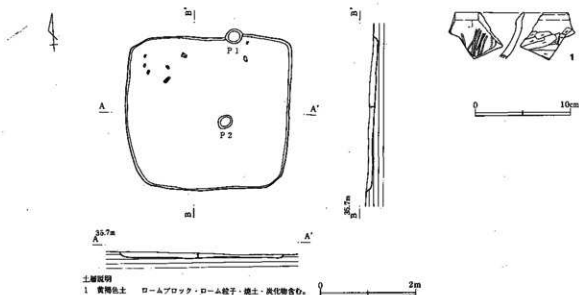
SI-33 (第13図、写真図版12)

本建物跡は、調査区の中央部南西寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係にある遺構はない。東にSI-32、南にSI-34が近接している。

平面形は、東西3.4m、南北3.5mの隅丸正方形を呈しており、主軸方向はMN-6°-Eを示す。壁は確認面から西壁で9cm程、東壁で10cm程、南壁で11cm程、北壁で7cm程遺存している。その立ち上がりは、南壁で40°程の傾きであるほかは概ね55~60°程である。周溝は検出されなかった。床面は東壁際が高く、西壁際に向かってゆるやかに傾斜しており、比高差13cmである。ピットは、西壁上やや北寄りに1本(P1)と、中央部に1本(P2)の計2本が検出された。P1は径37cm、深さ13cm、P2は径32cm、深さ15cmである。貯蔵穴は検出されなかった。竈も検出されなかったので、かわりに炉跡が存在すると思われるが、それらしい炉跡や焼土の広がりも確認されなかった。わずかに西側床面に、炭化材が散在するだけである。

埋土は1層で、ロームブロック、ローム粒子、焼土、炭化物を含む黄褐色土である。

出土遺物 遺物は非常に少ない。土師器はわずかに1片を図示できるだけである。このほかに、発掘調査時の建物跡平面図によると、西壁際の北部から紡錘車が出土している。しかし、残念ながら現物の所在が不明で、この紡錘車の材質もわからない。土師器が古墳時代中期後半の碗形坏であることと、建物に竈がないことからみて、古墳時代中期の建物跡と考える。



第13図 八幡根遺跡 SI-33 遺構・遺物

第5表 SI-33出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況 法記
1 碗形坏 土師器	口径14~ 16cm	深目の器形。口縁部は内面に明瞭な稜、外面に弱い稜を持って外へ折れる。口縁端部は上へ尖り気味。外面は口縁部横溝で後、体部は縦溝あり。内面は体部縦溝で後、横溝で・縦溝さ。口縁部横溝で。	2.5YR5/6 明赤褐色	緻密で白細粒やや 多量、透明細砂少 量、硬質。	埋土中 □I/18間

第6表 SI-33 古墳時代中期 出土遺物数一覧表

	碗形坏	横溝坏	壜	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甗	大甗	焼粘土	その他
土師器	1												
土師器													
須													
底													
土師器													
土師器													

紡錘車1点出土状況図にあり(現物は所在不明)。
古墳時代前期の土師器(壺)・平安時代の土師器少量混入。

SI-36C (第14図、写真図版13・37・54)

本建物跡は、調査区の南西部にあり、台地上の南斜面に位置する。重複関係としては、SI-36Dより古く、東壁中央から北側にかけてをSI-36Dによって切られている。また、SK-16とも重複するが、新旧関係は不明である。調査区西壁が写っている写真を見ると、SK-16の埋土中にSI-36Cの床面が見えないので、SK-

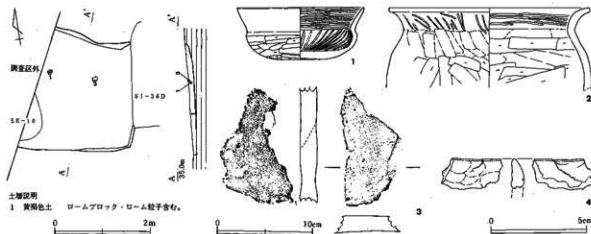
16の方が新しいのかもしれない。建物跡の西側は、調査区外である。

確認された部分では、東西2.5m以上、南北2.6m程であり、平面形は、東西に長い方形を呈していると思われる。主軸方向はMN-12' - E程度を示すと思われる。壁は確認面から南壁で7cm程、北壁で6cm程しか遺存していない。その立ち上がりは、南壁で垂直気味に、北壁でなだらかに立ち上がっている。周溝は検出されなかった。床面は、北壁際が高く南壁際に向かってゆるやかに傾斜しており、比高差19cmである。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。竈も検出されなかったので、かわりに炉跡が存在すると思われるが、それらしい炉跡や焼土の広がりは調査区内には確認されなかった。

埋土は1層で、ロームブロック、ローム粒子を含む黄褐色土である。

出土遺物 量は少ない。比較的大きな破片は古墳時代中期末葉のもので、図示した坏1点と甕1点だけである。床面直上から出土した坏(1)は、中央が弱く窪む外底面に古墳時代中期の椀形坏の特徴を残す。中期末から後期初頭の古式の坏である。甕も寛磨ぎが多く、同時期の遺物と考える。この甕は「貯蔵穴」と注記があるが、この建物には貯蔵穴はない。すぐ横に調査区西壁の土層断面が観察できるのに、重複する土坑SK-16を貯蔵穴と誤認した可能性も低いので、SI-36Cの遺物と考えておく。古墳時代中期末に限定できる遺物はこれくらいである。

古墳時代終末期の土師器がこの他に若干あるが(出土遺物数一覧表参照)、小破片ばかりで、SK-16の遺物などが混入したものと考えられる。4は古墳時代終末期の土師器の、製作失敗品が焼成された破片のようである。3は、刷毛目ふうに見える外面の痕跡を糸切り状条痕と考えれば、SI-36B・42・43・44などと同様の瓦が混入したとも考えられる。ただし、瓦としては赤く軟質に焼けて焼成が悪く、内面に布目痕もないので、形象埴輪片の可能性も残る。埴輪はSI-13からも出土している(第38表)。



第14図 八幡横遺跡 SI-36C 遺構・遺物

第7表 SI-36C 古墳時代中期 出土遺物数一覧表

	椀形坏	横壁坏	甕	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形甕	長甕	甗	大甗	焼結土塊	その他
土	口縁部	4							1				
師	体部												
器	底部												
須	口縁部												
磨	体部												
器	底部												

土師器未製品の焼製品1点・模造品素材の可能性のある粘版岩小割片2点・瓦または形象埴輪?1点混入。
古墳時代前期の壺1片と、終末期の土師器少量・焼結土塊13・土師器崩りかす1片混入。

第8表 SI-36C出土遺物

番号 種類	量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 注記
1 坏 土師器	口 復13.4 底 3.7 高 5.5	底部は厚く、わずかに上げ底気味。体部上端の内外面に明瞭な稜を持つ。外面は底面一方向裏削りの後に撫で、体部は円周方向の横裏削り、口縁部横撫で。内面は全面横撫での後に、体部放射状、口縁部横方向の裏磨き。	7.5YR6/6 橙色	やや緻密で灰色砂多量、黒・透明細砂と白雜粒やや多量。やや軟質。	底上 7cm 口1/2高、 底金剛 「床直」
2 土師器	口 復21.2	頸部内外面に明瞭な稜を持って、口縁部は頸部付近で強く外反する。外面は口縁部横撫での後、裏磨き。胴部裏削りの後、肩部裏撫で。内面は口縁部横撫での後裏磨き、胴部は裏撫での後に裏削り。外面口縁部～肩部にうすくスス付着。	5YR6/6 橙色	粗い。白粒・細粒、黒・透明細砂多量。白・灰色砂少量。硬質。	貯蔵穴 口～肩1/6 周 「貯蔵穴」
3 瓦または 形象 埴輪?	厚 1.8	板状で、円弧をなさないので埴輪だとすれば形象埴輪か。外面は 5本/cmの縦筋または赤切状条痕の後、残存破片下縁部に横撫で。内面はやや平滑しているが、右下→左上方向の斜め撫での可能性がある。	5YR7/6 橙色	粗い。灰色砂多量。白砂、白粒、黒・透明細砂やや多量。軟質。	底上11cm 基部付近の 破片か? 「2」
4 未製品 の焼成 品 土師器	幅 3.2 高さ 1.6 重 2.82g	おそらく坏の口縁部。内外面横撫で後、外面に指押さえ痕。内面から外面上半にかけて亀裂がみられる。失敗品をひきちぎったものが偶然焼成されたものか、または焼成時に亀裂部分から折れた破片のようである。古墳時代終末期の遺物が混入。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で黒・透明細砂少量、白雜粒ごく少量。やや軟質。1a類。	不明 焼成後は破 損なしか? 「SI-36」

第3節 古墳時代後期の竪穴建物跡

SI-36D (第15図、写真図版13)

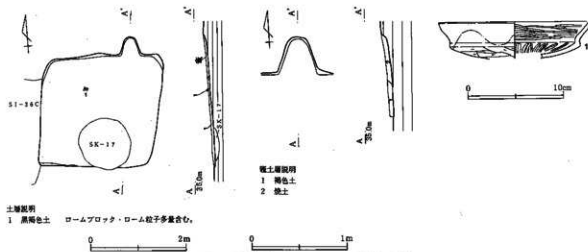
本建物跡は、調査区の南西部にあり、台地上の南斜面に位置する。重複関係としては、SI-36Cより新しく、SI-36Cの東壁中央から北側にかけてを切っている。また、SK-17とも重複するが、確実な新旧関係は不明である。SI-36Dの土層断面図をみると埋土層中にSK-17が現れていないことから、セクション図A-A'に図示したように、SI-36Dの方が新しくなる可能性がある。

平面形は南東隅が鈍角な平行四辺形で、東西2.9m、南北2.5m、主軸方向はMN-8°-Eを示す。壁は、確認面から南壁で4cm程と、ほとんど遺っていない。その立ち上がりもほとんど確認できないが、ゆるやかに立ち上がると思われる。周溝は検出されなかった。床面は北壁際が高く、南壁際に向かってゆるやかに傾斜しており、その比高差は16cm程である。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北壁東寄りに位置する。残りが悪く、掘形だけを確認した。掘形は、北壁を幅44cm、奥行き36cmの平面舟首形に掘り込む。その煙道は、竈前から6°程の傾きでゆるやかに立ち上がり、A'の南16cmの所からは65°程の傾きで立ち上がる。燃焼部から煙道奥にかけて、焼土が5cm程の深さで認められた。

埋土は1層で、ロームブロック、ローム粒子を多量を含む黒褐色土である。

出土遺物 極めて少ない。1は内面を丁寧に磨いて漆仕上げする内彎口縁杯。坏口縁部はこの他にもう1片だけあり、やはり内彎口縁の蓋模倣系坏で、同様に磨いて漆で仕上げている。この他に細片と体部小片だけで、詳しく検討できないが、丁寧に磨く坏を持つ点は古い要素である。古墳時代後期の建物の可能性が高い。



第15図 八幡根遺跡 SI-36D 遺構・遺物

第9表 SI-36D出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 土師器	口 径18.0 高 残 3.8	薄く軽い。体部上端は内外面に明瞭な段と後を持ち、口縁部上半はわずかに内彎気味。外面は体部多方向彫り、口縁部横溝で。内面は横溝で。その後、体部内面放射状、口縁部横溝方向の彫り。内面全面と口縁部外面に漆仕上げ。	5YR6/6 褐色	緻密で白細粒と黒・透明緑彩少量。 硬質。1b麻。	底上4cm □1/6 体1/4 [漆家]

第10表 SI-36D 古墳時代後期 出土遺物数一覧表

	坏	鉢・皿	壺	高坏	鉢	小形土器	豆・瓶	小形壺	長壺	甌	大壺	焼粘土	その他
土	2					1				1			
器	有												
部													
底													
須													
口													
底													
須													
底													

古墳時代前期の土器器1片と、平安時代の須恵器無台杯底部1片(三和爾産)混入。

SI-49A (第16~18図、写真図版16~17・45・55)

本建物跡は、調査区の北部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-49Bより古く、建物跡中央部やや北東寄りをSI-49Bによって切られている。また、北西部は調査区外である。

確認された部分では、東西6.0m程、南北6.3m程であり、平面形は、南壁上に方形の突出部を持つ方形を呈す。主軸方向はMN-30°-Wを示す。壁は確認面から西壁で32cm程、東壁で4cm程、南壁で0~24cm程、北壁で20cm程遺存している。その立ち上がりは、西壁で79°程、南壁で80°北壁で85°程の傾きで垂直気味に立ち上がっている。周溝は、壁際をほぼ全周していると思われる。幅は南東コーナーで42cmであるほかは、概ね13~23cm、深さは2~8cmである。断面は、東壁際でU字形を呈するほかは皿状で、底面は概ね平坦である。床面は、SI-49Bの重複による削平があるためはっきりしないが、西壁際がやや高く、東側がやや低くなっており、その比高差は14cmである。また、南壁突出部の床面もわずかに低く、中央部との比高差は11cmである。そのほかに、建物跡南東部東西方向に床下土坑が確認された。掘形は、床下に土坑を持つ。東西290cm程、南北60cm程の平面長方形で、断面は皿状、深さは床面から最深26cmである。そこをロームブロックとローム粒子を多量、黒色土を少量含む黄褐色土で埋め戻し、貼り床としていた。主柱穴は、4本認められた(P1~P4)。P1は径37cm、P2は径40cm、深さ52cm、P3は長径32cm、短径28cmの平面楕円形で、深さ50cm、P4は径42cm、深さは推定54cmである。その掘形は、いずれも断面円柱状である。この外に、P5のビットが1本検出された。P5は南壁の外側突出部にあり、長径54cm、短径44cmの平面楕円形を呈する。深さは51cmで、断面円柱状である。はっきりと貯蔵穴とわかるビットは検出されなかった。ただ、南壁中央部に外側に張り出すように、それらしいビット(突出部)が検出された。東西88cm、南北122cmの平面隅丸方形で、深さ48cmである。断面は深い皿状で、底面は北側に傾斜しており、比高差10cmである。底面北側にP5が見られる。遺物は、ビット北壁外に小壺が1個体出土しているのみである。したがって、貯蔵穴とは断定できないが、土層断面図からみて本建物跡に係わるビットであることは間違いない。

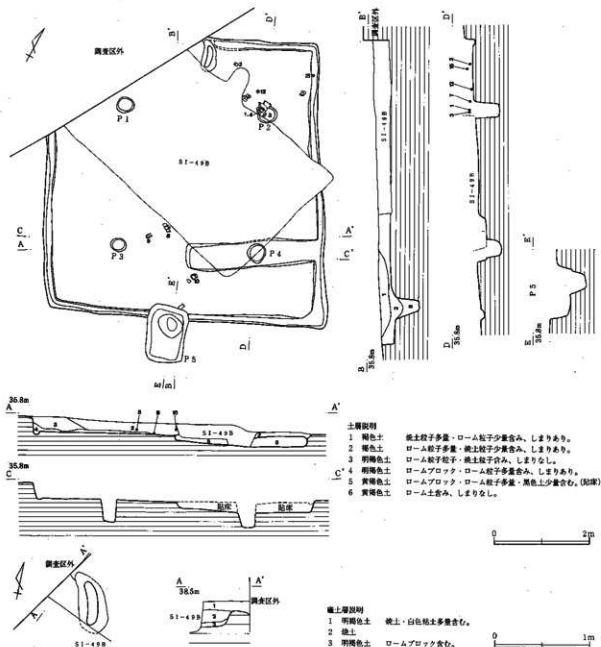
竈は、北壁中央付近に位置する。その左半分が調査区外にあり、竈セクションと右袖部だけを確認できた。竈セクションに、煙道天井部の構築材と思われる白色粘土が多量に混入していることから、同様に右袖も、白色粘土を用いて構築されていると思われる。煙道は平面U字形と推定され、燃焼部奥から60°程の傾きで立ち上がっている。焼土は、燃焼部から煙道にかけて、最深14cmの厚さで確認された。

埋土は、貼床部分を除いて5層に分層された。概ねローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む褐色土である。

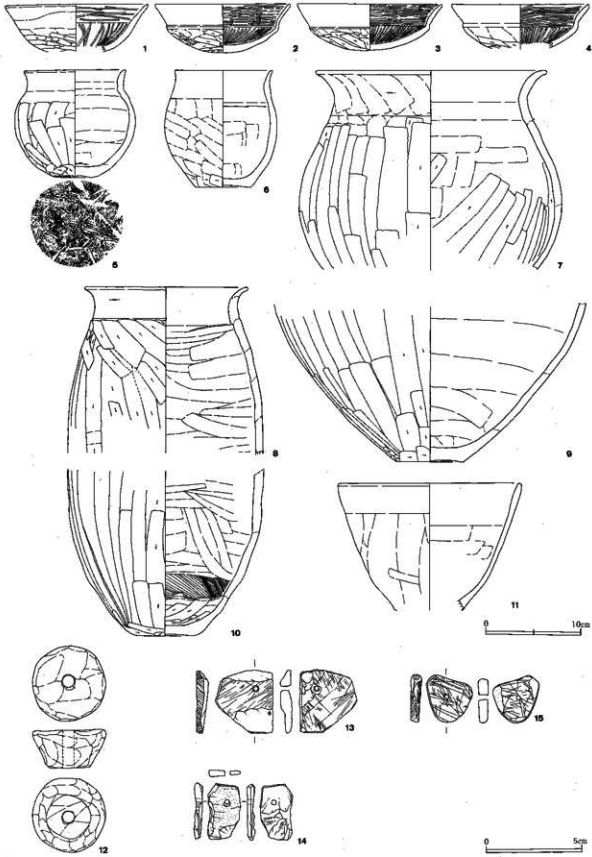
出土遺物 2・3・4は精良な作りの土器器坏。焼くと橙色になる土を使い、赤味を帯びた器を意図的に作っている。丁寧に密に施磨きし、漆は使わない。1も、赤彩色をする点や器形に、2~4と共通する部分がある。5・6はどちらも未完形で出土した同大の小形甕であるが、調整の丁寧さが全く違う。5は仕上げが雑で、6は丁寧である。7・9は胴部の丸い土器器甕で、明らかな煮炊痕跡はない。貯蔵用の器種だろう。

両者は別個体のようなものである。9は金色に発色した黒雲母を胎土に含む。八幡根遺跡で出土する古墳時代の土師器に普通は雲母を含まないので、搬入された土器と考えられる。白雲母を含む土師器の例は、古墳時代終末期の竪穴建物跡SI-49Bにある。12の紡錘車は、古墳時代終末期のこの地域で製作された土師器と共通する胎土(1b類)である。しかし、床面直上から出土したので、終末期の遺物が混入したとは考えにくい。同様な粘土を後期にも採取・使用していたとすると、土師器は外部調達でも紡錘車は在地で製作していたのだろうか。13~15は石製模造品で、滑石のかわりに粘板岩を用いる。14をのぞくと両面や側面を研磨していることは、この石材を使う模造品としては古い特徴かもしれない。14は勾玉形を意識している可能性もある。

第76図2~4も、SI-49Aに伴う可能性がある(p.151参照)。



第16図 八幡根遺跡 SI-49A (1) 遺構



第17図 八幡根遺跡 SI-49A (2) 遺物

第11表 SI-49A出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 復15.4 高 残5	口縁部は外面では体部との明瞭な境を持たずにゆるく外反する。内面ではごく弱い稜を持ってそこから外反する。外面は撫でた後、口縁部横撫で。体部下位は幅の広がった寛帯のような横撫で。内面は上半に横方向、下半で放射状の弱い寛帯。内面全面と外面口縁部は赤彩。	7.5YR6/6 褐色 黒斑あり	密着で白緑粒やや多量、赤粒・透明細砂少量、やや硬質。	床直 □1/周 底外周2/3 周 [7床直]
2 坏 土師器	口 14.3 高 大 11.8	体部上位と口縁部はかなり薄い。口縁部下端の外面の段と内面の稜線は明瞭。口縁部はわずかに内面側へ肥厚する。体部外面は撫での後、多方向裏割り、口縁部外側横撫で。内面は体部に放射状、口縁部に横方向の寛帯。着色に発色する土を意図的に選んで作っている可能性がある。赤彩はしていない。	7.5YR6/6 褐色 黒斑あり	密着で白緑粒若干、透明・黒斑粒少量、やや硬質。	床直 底□1/3 周 [12床直]
3 坏 土師器	口 16.4 高 3.0	非常に丁寧なつくり。口縁部は薄く、体部はやや厚い。口縁部下端の外面の段と内面の稜線は明瞭。体部外面撫での後、球心状裏割り。口縁部横撫で。内面は横撫での後、口縁部横方向、体部放射状の寛帯。着色に発色する土を意図的に選んで作っている可能性がある。赤彩はしていない。	5YR6/8 褐色	密着で透明細砂少量、白緑粒・黒斑粒ごく少量、やや硬質。	柱穴底より 上へ66cm 体2/3周 [6床直]
4 坏 土師器	口 復14.6 高 残 4.7	薄く、口縁部下端に内外面に明瞭な稜線と段を持って立ち上がって外傾し、肩部はごくわずかに内面へ肥厚する。外面は口縁部に横撫で、体部は撫での後、横方向の寛帯。内面は横撫で後、体部に放射状の寛帯。口縁部は横撫で、横方向の寛帯。着色に発色する土を意図的に選んで作っている。赤彩はしていない。	2.5YR6/8 褐色	密着で黒・透明細砂と白緑粒少量、やや硬質。	床直 □5/6周 体2/3周 [7床直]
5 小形 土師器	口 10.7 底 3.5 高 11.4 大 12.8	調整が全体に難いため、厚手でも器形もやや整っていない。肩部は内外面に弱い稜を持って直立する。外面は底面一方、体部に下方の縁な裏割り、体部下端～底面外周に縁な弱毛目状横撫で。内面は体部にやや弱い横撫で。口縁部内外面横撫で。	10YR7/4 にぶい黄褐色 体部外面の 1/4周に黒 斑あり	粗い。赤・灰色砂多量、黒・透明細砂と白緑粒少量、やや硬質。	床直 □1/2周 底一隅全面 □1/2周
6 小形 土師器	口 10.2 底 5.8 高 12.4 大 11.8	底部は厚い。肩部の両面だけに不明瞭な稜を持って口縁部へ外反する。外面は底面一方の弱い裏割り、肩部は丁寧な斜めの後に口縁部下端に斜め裏割り。口縁部は横撫で、内面は肩部と寛帯の後、口縁部横撫で。底面～肩部下の器面が少し剥離している。	10YR6/4 にぶい黄褐色	やや粗い。白・灰色の砂多量、黒・透明細砂と白緑粒やや多量、やや硬質。	床直 赤彩 [3床直]
7 要 土師器	口 24.2 大 復27.8	肩部は内外面にごく弱い稜を持つ。口縁部は外面へ軽く折れ、端面は丸くわずかに肥厚する。外面は肩部に撫での後に裏割り、口縁部は斜め裏割りに横撫で。内面は肩部に横撫での後、下半部に裏割り。口縁部横撫で。	5YR6/6 褐色	粗い。赤粒と白・灰色砂多量、白緑粒と黒・透明細砂やや多量、やや硬質。	床直 □1/2周 底一隅 [5床直]
8 要 土師器	口 17.0 高 残17.8 大 復20.2	頸部外面に固く浅い段を持つ。口縁部上手は稜を持たないで強く外反する。口縁部は丸くおさめる。外面は頸部横撫で後に、胴中に縦裏割りし、上位に斜め裏割り。内面は頸部横撫で後に、口縁部を覆い上げて横撫で。	10YR7/4 にぶい黄褐色	粗い。透明・白・灰色の砂多量、黒・透明細砂と白緑粒、赤粒やや多量、硬質。胴下位は加熱赤化。	床付近 □2/3周 胴1/3周 [2]
9 要 土師器	底 7.2	底部はやや厚い。外面は胴部縦裏割り。底面に一方方向裏割りから中央部を少し深く上げ底気味に開いたもの。胴部下端に斜め裏割り。内面は底面に縁な多方向横撫での後、胴部に横撫でまたは横撫で。破片にわたって内外面にスガが著く付着している。	7.5YR6/6 褐色	粗い。透明・白・灰色の砂多量、金色の黒斑薄片と黒・透明細砂、やや硬質。	竈と土中 底全面 胴1/2周 [竈と]7ク 土が接合
10 要 土師器	底 6.4 大 復21.6	柱粒土の積み上げ止面ではやや薄く、その間では少し厚くなる。外面は下へ裏割り。底面を一方方向裏割りとして少し上げ底にした後に、胴部下端に斜め裏割り。内面は底部を裏割り、胴部下位に弱毛目、中位に黒撫で。	2.5YR/3 淡黄褐色	非常に粗い。白・灰色の砂多量、黒・透明細砂と白緑粒やや多量、やや硬質。下位は加熱赤化。	底上23cm 底全面 胴1/3周 [4]
11 要または 土師器	口 復19.4 底 7.0 高 残13.5	底部はごくわずかに残っていないで幅とは断定できない。体部中～下位は薄い。外面は丁寧な横撫で、内面は横撫で、口縁部内外面横撫で。	10YR7/4 にぶい黄褐色 黒斑あり	粗い。赤・灰色の砂と黒・透明細砂やや多量、やや硬質。	竈□/4周 底全面 [竈]
12 土師器 製土 製品	径 4.0 高 2.1 重量 31.13g	円棒を通して焼成前に穿孔。孔径は両面とも0.70～0.72mm。全面に黒帯のようなツヤを持つ。寛帯で仕上げた。黒色処理はしていない。	10YR7/3 にぶい黄褐色	黒・透明細砂やや多量、白緑粒少量、やや硬質。 1b類。	床直 [9床直]
13 石製 織造 品	長 3.4 幅 3.0 厚 0.50 重 7.89g	撚織に沿った縦織面に、左図ではほぼ1方向、右図の面では2方向の粗い撚織。側面は1面のみ原石の自然面で、他は斜位の同じく粗い撚織。穿孔はそれぞれ片側からで、両孔とも径2.4mm。左図の面の右下には穿孔を拡大した孔が0.5mm径の深さで残存する。		撚織が密着な撚織物。	竈付近 [竈]

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 焼 土 威	出土状況 残存状況 注記
14 石製横 造品	長 3.0 幅 1.7 厚 0.45 重 2.28g	左側の面と上辺とは劈開に沿って割れた黒石の自然の割れ面。他の側面は割開後に縦方向(側面の長い方向)に研磨している可能性もあるが、風化して不明瞭。左側の左辺は刃部を持つ工具で削って少しえぐり込んでいる。したがって勾玉形を意図していた可能性もある。右側の面は劈開に沿って割れた面に、研磨面というよりも細く明瞭な中央がみられる。孔は片面穿孔で、右側の面からあけ、初径・終径ともに2.45mm。			不明 定形 [SI-49A]
15 石製横 造品	径2.3~2.6 厚 5.5 重 4.11g	両面とも劈開に沿った側面に3方向ずつの細かい研磨。片面穿孔で孔初径2.50mm、終径2.35mm。側面は黒石の自然面および切削加工時の加工面を残す。図示した側面では斜方向に研磨している。側面を研磨している面では一部で斜方向または縦方向の分割研磨が見られる。			底上10cm 完形 [11]

第12表 SI-49A 古墳時代後期 出土遺物数一覧表

	環	盤・皿	蓋	高環	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	瓶	丸壺	焼粘土塊	その他
土 口縁部	22							5		12			
器 体部	有				3					有			
底 部								平底1	4				
須 口縁部													
器 体部													
底 部													
土製紡錘車1点・粘板岩製の石製横造品3点。													

第4節 古墳時代終末期の竪穴建物跡

SI-01A (第18・21図、写真図版3・21)

本建物跡は、調査区の北西部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-03Bよりも古く、SI-01Bよりも新しい。建物跡の東壁はSI-03Bによって切られ、南半分は調査区外である。

確認された部分では、東西4.0m、南北2.4m以上であり、平面形は隅丸方形を呈し、主軸方向はMN-17°-Eを示す。壁は確認面から12cm程遺存しており、70°程の傾きで立ち上がる。周溝は、遺存している北壁西半部から西壁にかけての壁際に検出された。幅は概ね11~26cm、深さは5cm程で、断面はU字形を呈する。主柱穴は2本(P2、P3)が検出された。P2は長さ40cm、短径28cmの平面楕円形で深さ52cmであり、P3は径48cmである。貯蔵穴は竈と北東コーナーの間にあり、長さ60cm、短径51cmの楕円形を呈している。断面は楕円形で最深46cmであり、底面は平坦である。

竈は、北壁のほぼ中央に位置する。天井部が崩落するなど、残存状況はあまり良好でない。規模は袖幅181cm、奥行き220cmである。袖は粘土ブロック、粘土粒子を含む褐色土と白色粘土を用いて構築している。なお、左袖の先端に壘が1/3程、右袖の先端に壘が1/2程貼り付けられていたが、袖の補強材であろう。煙道は平面舟首形で、15°程の傾きでゆるやかに立ち上がっている。笑口、燃焼部から煙道にかけては焼土が20cm前後の厚さで認められ、長期間使用したものであると思われる。掘形は、北壁を幅140cm、奥行き80cm掘り込んでいる。また、床を南北196cm、東西124cmの不整な楕円形に掘り窪めており、断面は皿状で床面から最深10cmである。

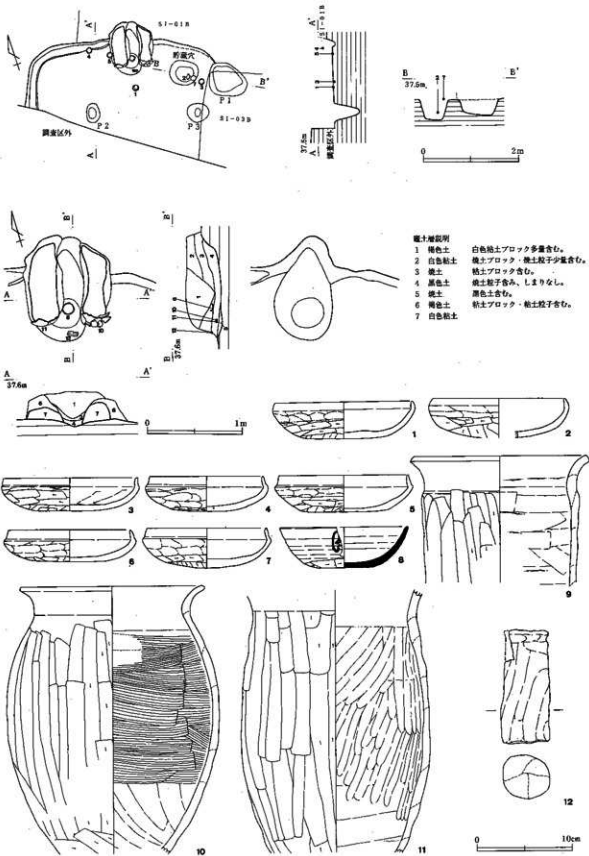
埋土は2層に分層され、概ねローム粒子を多量、焼土粒子・炭化物を少量含む黒褐色土である。

出土遺物 建物床面に遺された完形の土師器坏は、体部中位以下を削る、口縁部が内傾するものが多い。漆仕上げの坏では、外面有稜の1・2と身模様の4・5がある。漆を使わない坏では、口縁直立の3と身模様の6・7がある。胎土は1a類が多い。竈の袖先端に使う壘胴部片(10・11)は、胴中位が張る点と同じだが、内面調整が異なる。支脚(12)は粗雑で、土器と同列の作品とは思えないが、胎土は、古墳時代終末期の土師器坏に近い、緻密で精選された淡黄色軟質のものである。

8は墨書のある平安時代の須臾器で、出土位置の記録はないが、SI-03Bから混入した可能性もあろう。

第13表 SI-01A出土遺物

番号 器種 種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 組成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 14.4 高 3.9 大 15.0	薄く、やや平底気味で、体部は丸味を持ちながら開き気味に立ち上がり、口縁部は稜を持って内傾する。内面に3mm次の割離が多い。外面は雑な塗でその後底面一方向削り、体部中位横削り。内面全面と外面の口縁部に横塗で、漆仕上げ。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で赤粒・黒 煤砂やや多量。 やや軟質。1a類。	床面直上 完存 [4]
2 坏 土師器	口 覆14.0 高 4.2 大 覆14.9	薄く丸底で、口縁部は短く、口唇部は内傾する。外面口縁部に横塗が明瞭。外面中位以下横削り、口縁部外面と内面全面横塗で。内面全面と外面上位に漆仕上げ。	7.5YR7/3 にふい黄褐色	緻密で赤粒やや多 量、白煤粒・黒砂 少量。やや軟質。 1b類。	貯蔵穴直上 20cm 口1/3周 周 [5]
3 坏 土師器	口 14.3 高 3.5 大 14.6	薄く平底気味で、口縁部はごく弱い段を持って短く直立する。外面口縁部直下に横塗あり。外面底部一方向、体部縦方向削り、体部上端は無調整。内面横塗のうち内面全面と口縁部外面横塗で。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で黒・透明細 砂ごく少量。 1a類。	床面 完存 [7]
4 坏 土師器	口 12.0 高 3.7 大 13.0	薄く丸底で、底部が少し突出する。体部は開き気味に立ち上がり、外面に段を持って口縁部で内傾する。外面底部円筒方向削り、口縁部内外面と体部内面横塗で。内面全面と口縁部外面に漆仕上げ。	7.5YR7/4 にふい黄褐色	緻密で黒細砂・透 明細砂少量。 硬質。1a類。	床面25cm 完存 [1]



第18図 八幡根遺跡 SI-01A 遺構・遺物

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 注記
5 環 土 師 器	口高 13.6 大 14.6	薄く平底で、体部は開き気味に立ち上がり、口縁部は内傾し、短く直立する。外面に段、内面に横線あり。外蓋体部に横な溝での後、底面に円筒方向施削り。口縁部内外面と内面体部横溝で、内面全面と外面上半に溝作り。	7.5YR7/3 にぶい褐色	緻密で黒細砂・透明細砂やや多い。やや軟質。Ia類。	床直 ほぼ完存 「2」
6 環 土 師 器	口高 13.0 大 14.0	薄く平底気味で、体部は開き気味に立ち上がり、口縁部で短く内傾する。外蓋口縁部直下に段あり。外面体部上半に横な溝での後、底面一方向施削り。内面全面と口縁部外面横溝で。	7.5YR8/4 浅黄褐色	緻密で黒細砂・透明細砂少量。やや硬質。Ia類。	竈体土上面 底上8cm 完存「3」
7 環 土 師 器	口高 12.8 大 13.6	薄く丸底で、やや安定している。体部は開き気味に立ち、口縁部で段を持って短く内傾する。外面体部に横な溝での後、底面一方向の施削り。底面外周横溝あり。内面全面と口縁部外面横溝で。完形だが内面まで達する亀裂が底面中央に一条ある。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒細砂多量。やや軟質。Ia類。	貯蔵穴底上 45cm 完存「6」
8 環 須 恵 器	口高 13.6 底 5.9	薄く平底で、下半はやや内湾し、体部は開き気味に立ち上がる。内外面のロクロ目が強い。外面底部一方向の手持ち裏削り、体部下端に手持ち横溝あり。外面上位に墨書あり。三和煎度。平安時代遺物が混入。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白粒多量。やや軟質。Ia類。	竈土中 口1/12周欠 「フタ土」
9 壺 土 師 器	口 復18.4	腹部やや厚く胴部は薄い。胴部は直立気味にのび、口縁部はゆるやかに外反する。肩は張らない。口唇部に平直面あり。口縁部横溝で、内面頸部に粘土紐積み上げ痕。外面胴部縦溝あり、内面胴部横溝あり。	5YR6/4 にぶい褐色	粗い。灰色滑・砂・白砂多量。黒・透明細砂。金色の黒雲母片少量。硬質。	竈土中 口1/3周 「フタ土」
10 壺 土 師 器	口 復19.6 大 復22.4	やや薄く、胴部は丸球を持ち、口縁部は外反する。外面胴部縦溝あり、胴下縁横溝あり。内面胴部下斜の亀裂で、上半粗く浅い横溝目。口縁部内外面横溝で。	7.5YR6/4 にぶい褐色	粗い。灰色砂・細砂多量。白砂若干。硬質。外面下縁部にスス付着。	竈右袖 底上6cm 口一頭1/2 「2」
11 壺 土 師 器	大 20.0	やや薄く、胴部は下ぶくれで、口縁部は外反している。外面胴部に縦溝あり、内面下位横溝での後に縦溝あり、口縁部横溝で。	10YR7/3 にぶい黄褐色	粗い。白砂・灰色砂多量。硬質。外面下縁部にスス付着。	竈左袖 底上6cm 胴1/3周 「1」
12 土 製 支 脚	径 4.8 高 12.0 重 残240g	筒形を呈しており断面は楕円形。粘土塊を貼り合わせて成形。指頭圧痕あり。上面一方向施で、下面無調整。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で混和材は目立たない。やや軟質。全面二次焼成。2頭。	床直 上半1/2周 下半全周 「3」

第14表 SI-01A 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	環	鉢・皿	壺	高杯	鉢	小形土師	壺・瓶	小形壺	長壺	甌	大甌	焼粘土	その他
土師器	口縁部 182				2			1	16				器種不明
陶器	体部 有			脚柱4	有				有			14	
須恵器	底部			甌4	2			平座2					
須恵器	口縁部												
須恵器	体部												
須恵器	底部												
土製支脚1点。 古墳前期の土師器少量と、平安時代の土師器若干と須恵器が混入。 平安時代の須恵器は、環口縁部3・坏底2・体部1が3和煎度、坏底1が産地不明。													

SI-01B (第19~21図、写真図版3・21・55)

本建物跡は、調査区の北西部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-01A、SI-03Bより古い。SI-03Aの土師土の重複関係ははっきりしないが、出土遺物から判断してSI-03Aより古い可能性もある。建物南部をSI-01A、SI-03Bによって切られている。

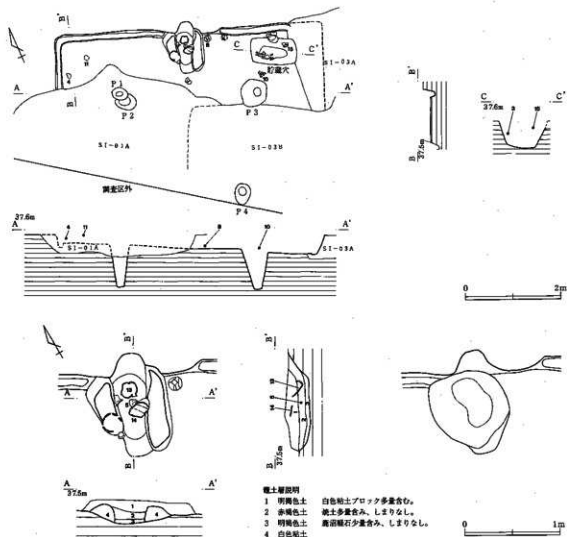
確認された部分では、東西5.0m以上、南北1.8m以上であり、平面形は方形を呈していると思われる。主軸方向はMN-20°-Eを示す。壁は確認面から16cm程遺存しており、80°程の角度で立ち上がる。周溝は、遺存している西壁と北壁の隙間で検出された。幅は概ね11~18cm、深さは10cm程で、断面はU字形を呈する。主柱穴は4本検出された(P1~P4)。P1とP2は重複しているが、前後関係はわからない。P1は、柱穴上部をSI-01Aの床面に切られているが、遺存している部分は径34cm、深さ64cmである。P3は径63cm、

深さ85cmであり、P1、P3いずれも円筒状に掘られている。P4は径46cm、深さ55cmである。P4の位置は少し北西に寄るので、この建物の柱穴であるとは断定できない。P1とP3は底面標高36.4mで、P4は底面標高36.5mと深さはほぼ等しい。

貯蔵穴は北東コーナーにあり、東西96cm、南北56cmの平面長方形を呈する。断面形は楕円状で、最深58cmで、底面は平坦である。

竈は、北壁ほぼ中央に位置する。煙道天井が崩落するなど、残存状況はあまり良好でない。規模は袖幅85cm、奥行き109cmである。袖は白色粘土を用いて構築している。なお、左袖の先端で、堯の胴部から口縁部にかけてが倒立した状態で出土したが、袖の補強材として使用されたものであろう。煙道は平面U字形で、30°～40°程の傾きでゆるやかに立ち上がっている。焚口、燃焼部から煙道にかけては焼土が5～9cm程の厚さで認められ、長期間使用したものと思われる。また、左袖の先端部で支脚が正立した状態で出土したが、所在不明で、材質等詳細も不明である。

掘形は、北壁を幅60cm、奥行き26cmにわたり掘り込んでいる。また、床面を東西86cm、南北90cmの円形に掘り留めており、断面形は皿状で床面から最深12cmである。



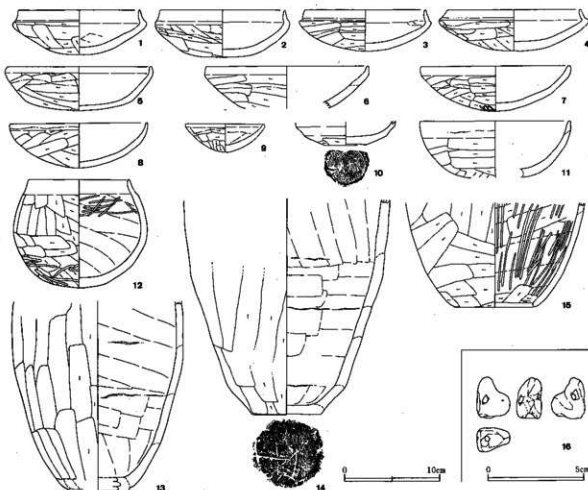
第19図 八幡根遺跡 SI-01B (1) 遺構

出土遺物 漆仕上げの土師器坏には、身模倣形の2・3・4と外面有稜の5・6・7・9がある。8・11も漆仕上げの可能性があるが不確定。漆仕上げをしないものでは身模倣形の1がある。八幡根遺跡に多い胎土である1a類・1b類がここでは少なく、2の他は混和材が少なくてきれいな橙色のものが多い。3・7・12は不規則な歪みや磨きがあり、焼成前に破損や変形部分を補修している可能性もある。16は3方から穴のあった不思議な製品。10は平安時代の遺物の混入品。

第15表 SI-01B 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	釜・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形甕	長甕	瓶	大甕	埴土埴	その他
土師器 口縁部	115			1	8				15				母体不明
土師器 体部	有								有			11	
土師器 底部									10	7			
埴土 口縁部													
埴土 体部													
埴土 底部													

材質不明の支脚1点・土玉1点。
古墳時代前期の土師器少量、平安時代の土師器・須器少量混入。



第20図 八幡根遺跡 SI-01B (2) 遺物



第21図 八幡根遺跡 SI-01A又は01B 遺物

第16表 SI-01B出土遺物

番号 種類	法 量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 土師器	口 復13.0 高 4.8 大 復14.3	やや厚く丸底で、口縁部は段を持って内傾する。外面の線縁は明確。体部横方向の後、底部多方向丸削り。内面横段後、内面全面から口縁部外面は横撫で。	7.5YR8/4 浅黄褐色	横帯で白細粒・透明細砂少量。 やや軟質。	埋土中 □1/4周 「フク土」
2 土師器	口 復13.4 高 5.0 大 14.3	やや厚く丸底で、体部は外へ開きながら立ち上がり、口縁部は帯の段を持って内傾する。端々縁の後、体部横、底部一方方向丸削り。口縁部外面から体部内面横撫で、漆仕上げ。	10YR8/3 浅黄褐色	横帯で赤粒若干、黒粒砂少量。 やや軟質。1a類。	埋土中 □1/12周 底へ体/2 「フク土」
3 土師器	口 12.8 高 4.4 大 14.0	丸底で、口縁部は短く内傾する。口縁部地の段は明確。外面底部一方方向、体部横方向丸削り。口縁部外延横段後、底部内面横段後、内面から口縁部内外面に漆仕上げ。口・体部境の内外面に補修痕あり。	7.5YR6/4 にぶい褐色	横帯で白細粒少量。 やや軟質。	貯蔵穴底上 27cm ほぼ完存 [3]
4 土師器	口 14.2 高 4.4 大 16.0	厚く重い。丸底で、体部は外へ開きながら立ち上がり、口縁部は段を持って内傾する。口縁部内外面直下後縁は明確。外面底部一方方向、体部横丸削り。口縁部内外面と体部内面は横撫で後漆仕上げ。	2.5YR6/8 黄褐色あり	横帯で黒細粒ごく少量。硬質。	床下13cm 3/4周 [1]
5 土師器	口 復15.4 高 4.7 大 復15.7	丸底で、体部は外へ開きながら立ち上がり、口縁部は段を持って短く内傾する。底部一方方向、体部外側横方向丸削り。内面と口縁部外面は横撫で後漆仕上げ。	7.5YR7/4 にぶい褐色	横帯で黒細粒若干、黄褐色少量。 硬質。	甕の裏の床下9cm □1/3周 [3]
6 土師器	口 復17.2	やや厚く重い。体部は外へ開きながら立ち上がり、口縁部は外面に明確な段を持ってわずかに内傾する。体部外延横丸削り、内面全面と口縁部外面は横撫で後に漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄褐色	横帯で白細粒ごく少量。やや軟質。	埋土中 □1/2周 「フク土」
7 土師器	口 復16.0 高 4.8	やや厚く丸底で、体部は外へ開きながら立ち上がり、口縁部は外面に帯の段を持ってほぼ直立する。外面底部一方方向の後に体部横方向の丸削り、底部中央に帯の範囲で集積さして、焼成前に生じた亀裂を補修している可能性もある。内面全面と外面口縁部は横撫で後に漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄褐色	横帯で白細粒ごく少量。やや軟質。	埋土中 □1/4周 「フク土」
8 土師器	口 14.8 高 4.8	やや厚く丸底で、体部は丸縁を持って立ち上がり、口縁部は外側に横段を持ってほぼ直立する。底部一方方向、体部横方向丸削り。口縁部内外面と体部内面は横撫で後漆仕上げ。	5YR7/6 褐色	横帯で赤粒・黒細砂少量。 やや軟質。	床直 □1/4周 [4]
9 土師器	口 8.4 高 3.0	尖り気味の丸底で、やや不安定である。体部は外へ開きながら立ち上がり、口縁部は外面に短く内傾する。内面に帯の段を持って直立する。外面体部横丸削り後底部一方方向丸削り。内面横段後、口縁部内外面は横撫で。内面全面と口縁部外面に漆仕上げ。	5YR6/6 褐色	横帯で白細粒・透明細砂少量。 硬質。	埋土中 □1/6欠、 帯は全周 「フク土」
10 土師器	底 4.4	体部は薄く、底部は厚い。平底で、体部はゆるやかに立ち、途中に横段を持つ。時計回りのロクコ成形。底部外周回転切削り、体部外面下端手持丸削り。体部外面中位はロクコ後、体部内面は高熱を受けて表面がスラック状に発泡する。破損前に貯蔵炉内に入った可能性あり。	2.5Y7/3 浅黄褐色	やや粗い。白粒少量。 やや硬質。二次焼成で還元。	床直 底部は1/2金 部、体部一 部 [3]
11 土師器	口 復16.0	やや厚く、体部は丸縁を持って立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。外面底部一方方向、体部横方向丸削り。内面全面と口縁部外面横撫で。内面に漆仕上げ痕がわずかに残存し、外面は不明。	5YR7/4 にぶい褐色 底部黒色	横帯で白細粒ごく少量。やや硬質。	床下18cm 底へ体/4 周、□1/6 周 [2]
12 土師器	口 10.8 高 11.5 大 14.2	やや厚く丸底で、体部は丸縁を持って立ち上がり、口縁部は外面にかすかな横段を持って短く内傾する。底部外面から体部外延丸削り後底部に帯の横段あり。口縁部内外面横撫で、体部内面横段後上部に帯の横段あり。内外全面は漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄褐色	横帯で白細粒ごく少量。 やや軟質。	甕右袖右側 底へ体/2金 部は全周 [4]
13 土師器	底 復 6.2 大 復18.0	胴部は厚く、底部で厚くわずかに円板状に突出。平底で、胴部は縦長のびのびしている。胴部外延丸削り、胴部下端横段後、底部外延一方方向丸削り。胴部内面横撫で。	7.5YR6/3 にぶい褐色	粗い。黒砂・灰色砂、赤粒・白粒が少量。硬質。底部付近は少しだけ加熱赤化。	甕にかけた状態 底へ12周 胴下へ中位 1/2周 [5]
14 土師器	底 7.4 大 復21.8	やや厚く平底で、弱く円板状に盛り出し、胴部はゆるやかに膨脹くのびる。胴部外延丸削り、内面横段後。底部外面から体部外延丸削り後に「X」形の集積あり。	7.5YR5/3 にぶい褐色	粗い。灰色砂・白粒少量。硬質。下半部加熱赤化。	甕にかけた裏が割れた状態 床下11cm 底部全周 胴1/2周 [3]
15 土師器	孔 8.6	やや厚く、胴部はやや丸縁を持って閉き気味に立ち上がる。穿孔。胴部外延丸削り、内面横段後一部丸削り。孔縁丸削り後横段で。	2.5YR5/6 明赤褐色	粗い。白・灰色・黒砂多量。硬質。	貯蔵穴底上 45cm 胴下半部全 周 [7]
16 土師器	長 22cm 幅 18cm 厚 13cm	不定形に手捏ねし、3面から穿孔。孔は中央で連続している。焼成前に穿孔していると思われるが、焼成後の可能性も残る。重量2.87g。	10YR6/4 にぶい赤褐色	粗和材はほとんど見られない。二次焼成を受け赤化。	出土位置不明 完全 「SI-11B」

S1-01AまたはBの出土遺物(第21図、写真図版3)

SI-01AとSI-01Bのどちらから出土したのか不明瞭な遺物を、2点図示した(1~2)。1の土師器は「SI-01カマド」と注記してあるが、AとBのどちらの建物のカマドの遺物なのかは不明である。土師の時間的な特徴から見ると、新しいほうのSI-01Aの遺物の可能性がある。SI-01Bの7や12と同じく、外面を不自然に磨いている点が注意される。

2は灰軸陶器の碗で、平安時代の遺物が周辺から流入したものであろう。出土状況が不明なので断定することはできないが、平安時代の竪穴建物跡SI-03Bから混入したことも考えられる。これとは全く別の個体だが、SI-03Bから出土した灰軸陶器碗と接合する口縁部小破片も、SI-01から1片出土している。

第17表 SI-01A又は01B出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 土師器	口 復14.0 大 復16.1	やや薄く、体部は丸球を持って開き、口縁部で内傾する。外面口縁部に盛りあり。外面体部中位位置開削り、体部上位は峰な端で後に粗い斜め位の磨き。口縁部内外面全面に横溝でと塗仕上げ。	7.5YR8/4 淡黄褐色	緻密で白粒・黒黒帯。硬質。1a類。	埋土中 □1/2周 「SI-01B」
2 碗 灰軸陶器	口 復14.0	薄く、体部は開き気味。口縁部は丸く肥厚。内外面口縁部で、外面中位以上と内面残存部全面に輪。	10YR6/2 灰色 輪は 灰黄褐色	緻密で黒黒粒やや 多量。硬質。	埋土中 □1/12周 「SI-01」

S1-03A(第22図、写真図版3・21)

本建物跡は、調査区の北西部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-03B、SI-04A、SK-25よりも古い。SI-01Bの埋土との重複関係ははっきりしないが、出土遺物から判断してSI-01Bよりも新しい可能性もある。また、SI-04Cとも重複するが、新旧関係は不明である。建物跡の南西コーナーをSI-03Bに、北東コーナーと東壁の大半をSI-04Aによって切られている。

規模は東西4.7m、南北4.7mであり、平面形は正方形を呈し、主軸方向はMN-3'-Eを示す。壁は確認面から16cm程遺存しており、北壁で70°、南壁で60°の傾きで立ち上がる。周溝は、検出されなかった。床面はほぼ平坦である。柱穴は4本検出された(P1~P4)。P1は径30cm、深さ64cm、P2は径35cm、深さ42cm、P3は径34cm、深さ74cm、P4は径30cm、深さ74cmであり、いずれも円筒状に掘られている。

竈は、北壁中央やや東寄り位置する。残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。掘形は、北壁を幅84cm、奥行き58cmにわたりU字形に掘り込んでおり、7'程の傾きでゆるやかに立ち上がっている。

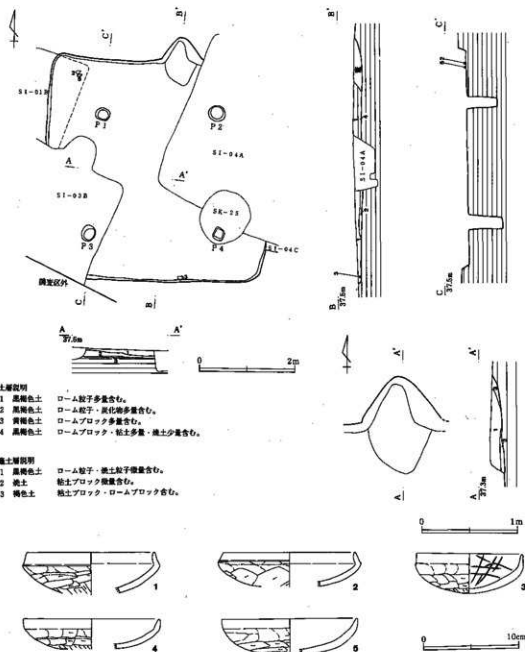
埋土は4層に分層できる。概ねローム粒子を多量に含む黒褐色土である。竈前床面直上に粘土を多量に含む黒褐色土が広がっていて、竈の袖材が崩落した土層の可能性もある。

出土遺物 3だけが完形品で、床面に遺棄されたものである。これは胎土が1a類で、八幡遺跡跡の中で製作した土師器の可能性が高く、内面には焼成前の不自然な傷がある。3と5以外は塗仕上げが見られる。

第18表 SI-03A 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	鉢・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	甕・瓶	小形甕	長頸	甌	大甌	備前土塊	その他
土師器	8												
口縁部	有												
体部													
底								3					
須恵													
口縁部													
体部													
底													

SI-03AかBか不明の古墳時代終末期の土師器多量(坏口縁部228片と体部多数・高坏胴部1片・長頸口縁部31片と底部2片と体部)および焼粘土塊15点あり。



- 土層説明
- 1 黒褐色土 ローム粒子多量含む。
 - 2 黒褐色土 ローム粒子・炭化物多量含む。
 - 3 黄褐色土 ロームブロック多量含む。
 - 4 黒褐色土 ロームブロック・粘土多量・土少量含む。

- 壙土層説明
- 1 黒褐色土 ローム粒子・粘土粒子微量含む。
 - 2 粘土 粘土ブロック微量含む。
 - 3 褐色土 粘土ブロック・ロームブロック含む。

第22図 八幡根遺跡 SI-03A 遺構・遺物

第19表 SI-03A出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 土成	出土状況 残存状況 注記
1 坏土師器	口 復13.5 高 残 4.3 大 復14.5	丸底で、口縁部は内傾する。体部との外面境に段を持つ。体部上位は雑な雑で、底部外面直削り、底部内面から口縁部内外面横溝で縁に漆仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で黒・透明細砂・白細砂少量。 やや軟質。1a類。	灰土中 底~口1/3 層
2 坏土師器	口 復13.8 高 残 3.5 大 復15.1	やや厚く、口縁部は短く内傾する。底部外面と口縁部の境に明確な段を持つ。底部外面は一方直削り、体部上位雑な雑で、口縁部外面と内面全面横溝で縁に漆仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色 黒差あり	緻密で透明細砂ごく少量。 淡黄色 やや軟質。	灰土と灰土の 2片縁合 底~口5/12 層 [2]
3 坏土師器	口 11.2 高 4.2	厚く丸底で、口縁部は外面に段を持ってわずかに内傾気味に立ち上がる。口縁部~底部内面横溝で、体部上位雑な雑で、中段直削り、底面不定方向直削り。焼成前と思われる、裏の当たったようなキズが内面に多い。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で白細砂と黒・透明細砂少量。 軟質。1a類。	灰土上 完存 [1]

番号 種類	法 量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
4 坏 土師器	口 復14.4 高 残 3.3	薄く、口縁部は短い。体部から口縁部は不明瞭な段を持ってほぼ直立する。外面口縁部～内面全面横撫で後に漆仕上げ。外面底部一方方向削り後体部縦削り。	2.5YR8/2 灰白色 黒斑あり	緻密で黒・透明細砂ごく少量。軟質。	竈 □1/4周 【蓋】
5 坏 土師器	口 復14.4 高 残 3.9	厚く丸底で、口縁部は明瞭な段を持って短く立ち上がり、わずかに外傾する。底部外面一方方向削り、体部上位縁全面で、内面全面と口縁部外面横撫で。	2.5YR8/2 灰白色 黒斑あり	緻密で黒・透明細砂ごく少量。軟質。	床直 底□1/4 周【3】

S1-05 (第23図、写真図版4・22～23・55)

本建物跡は、調査区の北西部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-04A、SK-27、SK-28よりも古く、南壁際をSI-04A、東壁の一部をSK-28によって切られている。また、SK-26とも重複するが、新旧関係は不明である。建物跡の北半分は調査区外である。

確認された部分では、東西5.8m、南北3.8m以上であるが、南東コーナーがはっきり検出されなかったため、平面形は確定できない。主軸方向はMN-28' - E程度を示すと思われる。壁もほとんど遺存しておらず、立ち上がりの傾きもはっきりしない。周溝は検出されなかった。床面は南壁際がやや高く、北に向かって傾斜しており、北高差8cmである。柱穴は2本検出された(P1・P2)。P1は径46cm程、深さ82cmであり、P2は径48cmである。貯蔵穴は、南壁際東寄りと思われる付近に検出された。平面形は、61×66cmの隅丸方形を呈する。断面形は逆台形で最深54cmであり、底面は平坦である。竈は調査区外と思われ、検出されなかった。

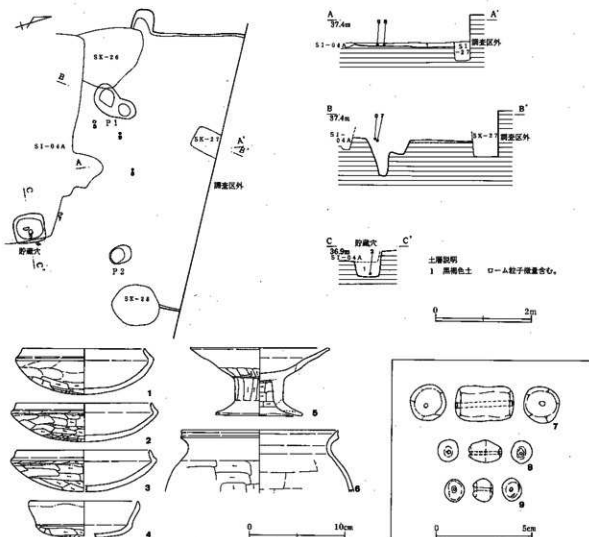
埋土は1層で、ローム粒子を微量含む黒褐色土である。

出土遺物 図示した土師器のうち1は漆仕上げを行わないが、2～5の坏と高坏は漆で仕上げる。4は埋土中から出土した内唇口縁部の小破片で、この集落ではあまり多くない。5の高坏は、脚部の内面調整が裾部横撫で→脚柱部削り、の順である。この順序は八幡根遺跡から出土した古墳時代終末期の土師器高坏の大半に共通している。栃木県城中央部の同時期の例では、この調整順序が逆になるという。土玉は7～9の3点があり、長い形の7は土師の可能性もある。SI-26にある類例が漆で仕上げているので、これも玉と考えておく。これらの土玉3点は床面付近から出土し、古墳時代終末期の土師器と胎土が共通しているの、おそらくこの建物に遺棄されたものである。6は平安時代の甕が混入したもの。

第20表 SI-05出土遺物

番号 種類	法 量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 12.8 高 4.9 大 14.6	薄く丸底で、口縁部は外面に段を持って短く内傾する。底部内面～口縁部外面横撫で、体部に漆塗の後、底部外面多方向の削り。黒斑あり。	10YR8/4 浅黄褐色	緻密で白細粒・黒細砂少量。やや硬質。1A類。	床直 ほぼ全面 【床直】
2 坏 土師器	口 14.4 高 4.1	厚く丸底で、口縁部は外面に明瞭な段を持って短く内傾する。外面底部一方方向の後に体部縦方向の削り。底部の削りは短い単位をくりがえして凹凸状に仕上げる。内面全面と口縁部外面横撫で、後に漆仕上げ。	7.5YR5/4 に白濁色	緻密で白細粒若干赤粒少量。硬質。1B類。	貯蔵穴床上 7cm 全面 【1】
3 坏 土師器	口 復14.2 高 4.4 大 復15.5	やや薄く丸底で、口縁部は外面に明瞭な段を持って内傾する。底部は多方向、体部縦方向の削り、内面全面と口縁部外面横撫で後漆仕上げ。	7.5YR7/1 明褐色	緻密で混和材は目立たない。やや軟質。	床直 □1/3周 【3】
4 坏 土師器	口 復11.5 高 3.9	底部は丸味を持ち、体部外面に段を持って立ち上がる。口縁部は内唇する。底部外面は塗塗の後削り。内面全面～口縁部外面横撫で後漆仕上げ。	10YR8/4 浅黄褐色 黒斑あり	緻密で黒細砂ごく少量。軟質。1B類。	埋土中 □1/4周 【SI-06】

番号 器種	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
5 高坏 土師器	口径 14.8 脚高 9.2 7.1	やや厚く、底部より内彎気味に立ち上がり、口縁部は長く、口唇部で外反する。脚部は直立した後直線的に開く。外面は脚部縦位のち坏底部を放射状に彫削りし、口縁部と脚部横溝で、内面は坏部横溝で、脚部は坏底面を優先して抉るように成形し、脚内部横溝削り。外面全部と坏部内面を塗仕上げ。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒細砂少量 軟質。1a類。	床直 □1/2周 脚5/6周 [7]
6 壺 土師器	口径 16.6	頸部は丸縁を持って外反し、口縁部は内外に明確な縁を持って短く立ち上げ、外面に凹縁を持つ。脚部上半部外面彫削り、内面横溝で、口縁部内外面横溝で、外面両部にスス付着。平安時代の遺物が混入。	5YR5/6 明赤褐色	やや粗い、白細砂 多、透明細砂少量 硬質。	床土中 □1/9周
7 土玉	径 19.0mm 長 31.0mm 重 11.60g	成形時に棒状の工具を通して穿孔。孔径2.5mm。側面に鋭い縁を持つ多面体状で、丁寧な輪で調整。	10YR7/3 にぶい黄褐色	やや緻密で黒細砂 多、透明細砂少量 軟質。1a類。	床直 完形 [4]
8 土玉	径 12.0mm 長 17.7mm 重 1.97g	成形時に棒状の工具または糸を通して穿孔し、孔径1.6mm。側面中位にごく鋭い縁を持ち、産玉状。輪で調整で、外面に塗仕上げをしていた可能性もある。両右側の孔の周面は焼成後に磨損。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で、徳和材は ほとんどみられない。 軟質。	床付近 完形 [5]
9 土玉	径 10.6~ 12.0mm 厚 10.4mm 重 1.25g	成形後、焼成前に片面から穿孔し、孔径1.6mm。やや不整形で表面は輪で。表面に塗仕上げをしていた可能性が高い。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒細砂ごく 少量。軟質。	床土2cm 完形 [6]



第23図 八幡根遺跡 SI-05 遺構・遺物

第21表 SI-05 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形甕	長甕	甌	大甕	焼粘土塊	その他
土口縁部	113			6					10				
器底部				脚柱1								12	
須口縁部				壺2					1				
壺底部											1		
須口縁部													
壺底部													

土鏝か玉1点・土玉2点。
古墳時代前期の土師器若干・中期の石製模造品の未製品1点混入。平安時代の土師器若干・鉄片1片混入。

S1-06A (第24～25図、写真図版4・5・23～24)

本建物跡は、調査区の北部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-06B、SI-07よりも新しく、SI-06Bの南壁際を除く大半と、SI-07の南西コーナーを切っている。

平面形は、東西3.6m、南北3.7mの正方形を呈し、主軸方向はMN-9°-Eを示す。壁は確認面から北壁で34cm、西壁で20cm、南壁で12cm程遺存しているが、東壁はほとんど残っておらず、わずかに4cmのみである。その立ち上がりも北壁で80°、西壁で60°、南壁で75°程であるが、東壁では確認できなかった。周溝は検出されなかった。床面は平坦であるが、西壁際から東壁際に向かってわずかに傾斜しており、比高差11cmである。柱穴はP1だけが検出された。径20cmであり、その位置から入口に係わるピットかと思われる。貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北壁のほぼ中央に位置する。残存状況は悪く、掘形を確認するだけで、規模はその残りから推定するにすぎない。その推定される規模は袖幅94cm、奥行き68cmである。袖は、ローム粒子を含む褐色土と粘土を用いて構築していると思われる。なお、左袖の中心部に21の壺が1/2程潰れた形で出土したが、袖の補強材として使用されたものかもしれない。燃焼部奥から煙道にかけて、焼土が12cm前後の厚さで認められたので、長期間使用したものと思われる。掘形は、北壁を幅33cm、奥行き6cmの断面皿状に掘り込んでいる。また、床を南北44cm、東西31cmの楕円形に掘り窪めており、B'の南24cmの所から60°程の傾きで急激に立ち上がっている。

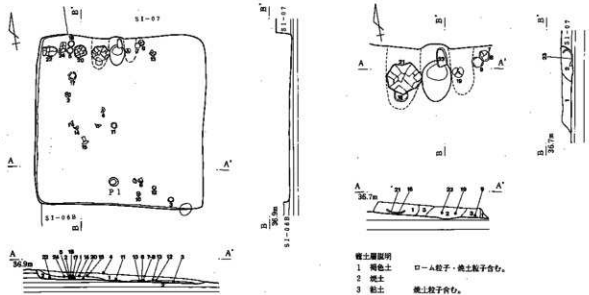
埋土は2層に分層され、概ねローム粒子・径10mmのロームブロック・焼土粒子・炭化物を少量含む黒褐色土である。

出土遺物 遺物は多量で、床面に遺棄された土師器類が豊富である。胎土は1a類が多く、八轆根遺跡で出土する土師器製作関連遺物と共通している。食器類は漆仕上げのものが多く、15の高坏だけは坏部内面を赤色に塗る。この高坏はSI-50の34と非常によく似ていて、同時に作って焼いたかのようなものである。これも胎土は1a類である。13と14はおそらく短脚高坏で、別個体である。鉢は16と17が漆仕上げで、18と19は漆を使わない。土師器壺(20・21)は、胴部径に対して頸部がやや狭く、加熱痕がないので、須恵器壺のような貯蔵具なのだろう。

第22表 SI-06A 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形甕	長甕	甌	大甕	焼粘土塊	その他
土口縁部	109			3	26				10				
器底部	有			脚柱?	有	有			有				
須口縁部				壺?	9	5			10				
壺底部													
須口縁部													
壺底部													

土製支脚2片。
平安時代の土師器少量混入。

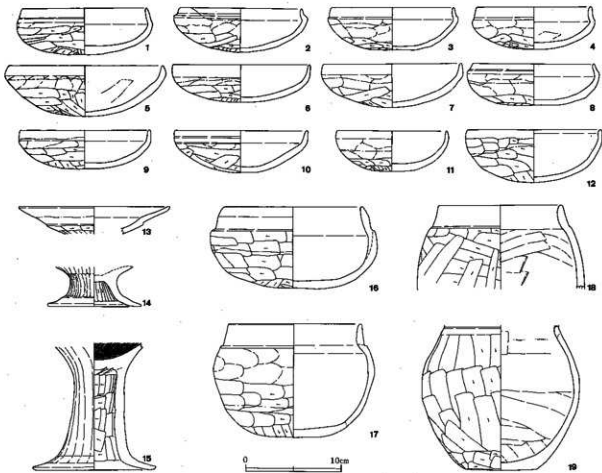


土層説明

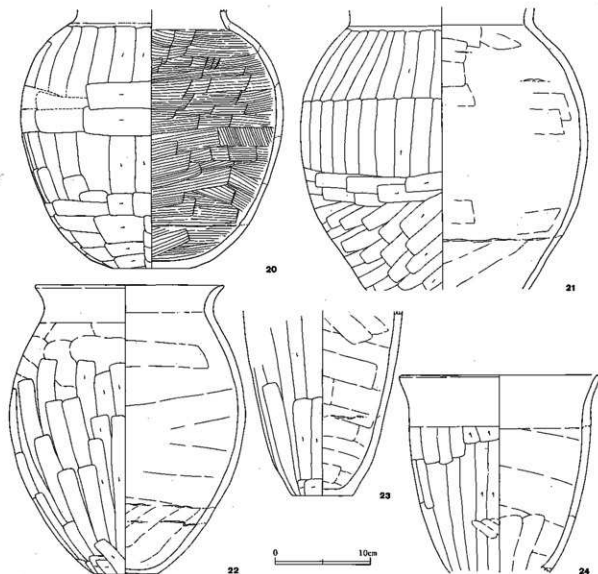
- 1 黒褐色土 ローム粒子・ロームブロック・鉄土粒子・炭化物少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒子少量含む。

0 2m

0 1m



第24図 八幡根遺跡 SI-06A (1) 遺構・遺物



第25図 八幡根遺跡 SI-06A (2) 遺物

第23表 SI-06A出土遺物

番号 器種	量 目	量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 質	出土状況 残存状況 注記
1 环 土脚器	口 高 大	13.2 4.9 14.4	やや厚く丸底。体部は丸味を持ち、口縁部外面に凹線状になる弱い段を持って内傾する。外面体部撫での後、底部に一方、体部横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面横撫で。	7.5YR7/3 ぶい橙色	やや緻密で黒・透明細砂やや多、白細粒少量。 やや軟質。1a類。	床直 口7/12周 [8]
2 环 土脚器	口 高 大	13.0 4.7 14.2	非常に厚く丸底。口縁部は外面にやや広い段を持って内傾する。外面体部に緩な撫での後、底面一方凹削り、体部横彫削り。内面全面と外面口縁部は横撫でで、律仕上げだった可能性もある。	10YR8/3 浅黄褐色	やや緻密で黒細砂多、白細粒・透明細砂少量。 やや硬質。1a類。	床直 先形 [11]
3 环 土脚器	口 高 大	13.0 4.5 13.9	非常に厚く丸底。口縁部外面に明瞭な段を持って内傾する。外面体部に撫での後、底部のやや突出した部分に中央部一方、周辺部横方向彫削り。内面全面と外面口縁部に横撫で律仕上げ。	7.5YR6/3 ぶい褐色	やや緻密で黒細砂やや多量。硬質。 1a類。	床直 口1/2周 [1]
4 环 土脚器	口 高 大	復12.0 4.5 復13.1	丸底で、口縁部は外面に弱い段を持ってやや内傾する。外面は体部撫での後、底部に多方向の彫削り。内面全面～口縁部外面は横撫で。	10YR8/4 浅黄褐色	緻密で黒細砂少量。 軟質。1a類。	床直 口1/6周 体1/4周 [4]

番号 種類	法 (量)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
5 土 師 器	口 16.4 高 5.4 大 17.1	丸底で、口縁部は外面に横を持って内傾する。外面は縁直で、底面は縁直で、内面は縁直で、内面全面と口縁部は横で後に漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒細砂少量、軟質。1a類。	床直 先形 【15】
6 土 師 器	口 14.4 高 4.0	薄く丸底で、口縁部外面にごく弱い縁を持って開き気味に立ち上がり、外面は縁直で、底面は縁直で、内面は縁直で、内面全面と口縁部外面は横で後に漆仕上げ。	7.5YR6/2 褐灰色	やや粗い。黒細砂多量、白細砂少量、軟質。1a類。	床直 口3/3周 【10】
7 土 師 器	口 14.8 高 4.6	やや薄く丸底で、口縁部は外面に明瞭な縁線を持たずにやや内傾する。外面は縁直で、底面には一方方向、内面全面と口縁部外面は横で後に漆仕上げ。	2.5Y6/2 灰青色	緻密で黒細砂・白細砂少量。やや軟質。1a類。	床直 口2/3周 体全面 【19】
8 土 師 器	口 12.9 高 4.4 大 14.1	やや薄く、安定した丸底で、口縁部は外面に明瞭な縁線を持って短く内傾する。外面は縁直で、底面は縁直で、内面は縁直で、内面全面と口縁部外面は横で後に漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄褐色 黒底あり	緻密で黒細砂少量、軟質。1a類。	床直 口7/12周 体2/3周 【19】
9 土 師 器	口 13.8 高 4.1 大 14.0	やや厚く丸底で、口縁部外面はごくわずかに内傾する。外面は縁直で、底面は縁直で、内面は縁直で、内面全面と口縁部外面は横で後に漆仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄褐色 黒底あり	やや緻密で黒細砂多量、白細砂やや多量、軟質。1a類。	床直3cm 先形 【電No.】
10 土 師 器	口 14.2 高 4.4	丸底で、口縁部は不明瞭な縁線を2段持ってほぼ直立する。外面は縁直で、底面は縁直で、内面は縁直で、内面全面と口縁部外面は横で、体部内面直で。	2.5Y8/3 淡黄褐色 黒底あり	緻密で白細砂・黒細砂少量。やや硬質。1a類。	床直 口、底部一部 欠くが、 ほぼ先形 【2】
11 土 師 器	口 11.6 高 12.0	薄く丸底。口縁部は外面にごく弱い縁線を持って短く内傾している。外面は縁直で、底面は縁直で、内面は縁直で、内面全面と口縁部外面は横で後に漆仕上げ。	7.5YR6/3 にぶい黄褐色	緻密で黒細砂やや多量。やや軟質。1a類。	床直 口、6欠損、 輪は全周 【5】
12 土 師 器	口 14.2 高 5.6 大 14.5	やや薄く丸底で、急角度で立ち上がり、口縁部は短く内傾して内面に横を持つ。外面は縁直で、底面は縁直で、内面は縁直で、内面全面と口縁部外面は横で後に漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄褐色 黒底あり	やや緻密で黒細砂やや多量、白細砂少量、軟質。1a類。	床直 ほぼ全周 【30】
13 高 土 師 器	口 16.0	薄く、外面縁直で明瞭な縁線を持ち、口縁部はわずかに内傾。内面底面は縁直で、底面は縁直で、内面は縁直で、内面全面と口縁部外面は横で後に漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で黒細砂少量、やや軟質。1a類。	床直 先形 【18】
14 高 土 師 器	脚 10.0	脚部は内面に明瞭な縁線を持って開く。脚部の先端は弱く尖り気味。脚部内外面直で、底面は縁直で、内面は縁直で、内面全面と口縁部外面は横で、脚部内外面直で。脚部外面は縁直で、脚部内外面直で、脚部内外面直で。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で黒細砂やや多量、やや軟質。1a類。	床直 脚全面 輪12/5周 【9】
15 高 土 師 器	脚 13.0	脚部との縁に横を持って開く。脚部は内外面ともに明瞭な縁線をもたずにわずかに外気味に開く。脚部内外面直で、脚部内外面直で、脚部内外面直で。脚部外面は縁直で、脚部内外面直で、脚部内外面直で。	2.5Y8/3 淡黄褐色	緻密で黒・透明細砂と白細砂少量、軟質。1a類。	床直 脚全面 輪1/2周 【6】
16 土 師 器	口 14.8 高 8.7 大 17.7	丸底で、底面中央が少しくぼむ。口縁部は外面に明瞭な縁線を持ってやや内傾する。底面は縁直で、内面は縁直で、内面全面と口縁部外面は横で後に漆仕上げ。	10YR7/3 黄褐色 黒底あり	やや緻密で黒細砂やや多量、やや軟質。1a類。	床付近 先形 【電No.5】
17 土 師 器	口 14.2 高 12.0 大 17.1	薄く丸底で、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部外面に明瞭な縁線を持って内傾する。全体に形が歪んでいて、外面は縁直で、底面は縁直で、内面は縁直で、内面全面と口縁部外面は横で、内面全面と外面中央位以上は漆仕上げ。	7.5YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で黒細砂やや多量、白細砂少量、やや硬質。1a類。	床直 ほぼ全周 【電No.】 やや硬質。1a類。
18 土 師 器	口 13.2	厚く、体部はゆるやかな丸味を持ち、口縁部は長くわずかに内傾。口縁部直下外面の段が明瞭。体部外面直で、体部内外面直で、口縁部内外面直で。	2.5Y8/3 淡黄褐色 黒底あり	やや緻密で、黒細砂やや多量、白細砂少量。やや軟質。1a類。	床直 口全面 【14】
19 小 形 壘 土 師 器	底 7.8 径 16.8	外面は平底で、底面中央が弱く突出気味。内面は丸底。頸部に沈着一糸が流る可能性がある。頸部外面直で、底面は縁直で、内面は縁直で、内面全面と口縁部外面は横で後に漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄褐色	粗い。灰色砂・砂赤細粒・粒・黒細砂多量。 やや硬質。底面加熱の可能性あり。	底上5cm 底8/9周 輪1/12周 【電No.2】
20 壘 土 師 器	底 8.2 径 27.6	内面は丸底で、外面は平底。胴部下位が少しくぼむ気味。胴部外面は縁の横直で、底面は不定方向直で、内面は縁直で、内面全面と口縁部外面は横で、内面全面と外面中央位以上は漆仕上げ。	10YR6/3 にぶい黄褐色 内外面 黒底あり	粗い。白粒と細粒多量、赤粒と黒・透明細砂若干。 やや硬質。加熱なし。	床直 底3/4周 輪1/3周 【13】
21 壘 土 師 器	大 16.3	やや薄く、胴部は下半部がやや下に伸びる形。胴部下位に小孔があるが、発掘調査時にいた孔と考えられる。胴部外面直で、内面は縁直で、内面全面と口縁部外面は横で、内面全面と外面中央位以上は漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄褐色 黒底あり	粗い。灰色砂と透明砂・細砂と白細粒多量。やや硬質。加熱なし。	床付近 輪1/3周 【電No.4】

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
22 瓦 土師器	口 復20.0 底 6.7 高 30.7 大 復25.0	ほぼ平底で、底部は薄い。胴部外面に段を持たない。口縁部は内面に明瞭な稜を持って外反する。外面の胴上半に輪文帯で、中位以下縦文帯、下位横文帯、底面一方向横文帯。内面は下位に横文帯、中位以上は横文帯で横文帯。口縁部内外面は横文帯。	2.5Y5/3 黄褐色 黒斑あり	粗い。赤色・灰色の礫と砂、白砂、白磁粒が少量。やや硬質。確実な加熱痕はない。	床直 底全周 胴～口1/3 周 [17]
23 瓦 土師器	底 6.2	平底で、胴部はわずかに外へ開きながら立ち上がる。外面縦文帯、下部の一部に横文帯の後、底部外面に一方向横文帯、内面下位は横文帯、中位以上は強い横文帯。	10YR6/3 にぶい黄褐色	粗い。赤・白・透明細砂少量、白磁粒少量。硬質。底面と外面全体にスス付着。	床付近 底部全周 胴下半1/2 周 [籠No.3]
24 瓦 土師器	口 21.2	やや厚く、胴部はゆるやかな丸味を持つ。口縁部は弱く外反して開く。口縁部内外面横文帯、胴部外面縦文帯、下位一部に斜め横文帯。内面は丁寧な横文帯。	10YR7/3 にぶい黄褐色	粗い。灰色砂多、黒磁砂・透明砂少量。硬質。	床直 口1/2周 胴下半全周 [18]

S1-06B (第26図、写真図版5)

本建物跡は、調査区の北部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-06Aより古い。SI-06Aによって建物跡の南壁際を除く大半を切られている。SI-07との前後関係は不明である。

確認された部分では、東西3.6m、南北1.1m以上であり、平面形は方形を呈していると思われる。主軸方向はMN-4°-E程度を示すと思われる。壁は、南壁で確認面から10cm程遺存しており、67°程の傾きで立ち上がる。周溝は、遺存している西壁と南壁の壁際で検出された。幅は概ね15～23cm、深さは10cm程で、断面はU字形を呈する。床面は南壁際がわずかに高く、比高差9cmである。柱穴は、4本検出された(P1～P4)。P1は径20cm、深さ16cm、P2は径26cm、深さ38cm、P3は長径38cm、短径27cmの平面楕円形で深さ84cmであり、P1、P2、P3いずれも円筒状に掘られている。P4は径42cmである。貯蔵穴、竈は検出されなかった。

出土遺物 北部を破壊されているため、遺物の出土量は少ない。図示した坏2点も小破片なので、この建物に確実に伴うとは決められないものである。1の坏は大形である。しかし、2の坏は小形で器高も低く、体部上半をやや広く削り残す。

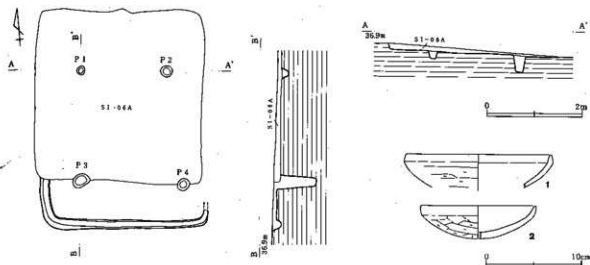
参考として、SI-06AとSI-06Bのどちらから出土したのか不明の遺物数についても一覧表を示しておく。

第24表 SI-06B 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甌	大壺	埴粘土	その他
土師器	口縁部	6											
土師器	体部	有							有		有		
土師器	底部				1								不明
須石土器	口縁部												
須石土器	体部												
須石土器	底部												
平安時代の土師器少量混入。													

第25表 SI-06(AかB不明) 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甌	大壺	埴粘土	その他
土師器	口縁部	95								5			
土師器	体部	有								有			8
土師器	底部												
須石土器	口縁部												
須石土器	体部												
須石土器	底部												
古墳時代前期と平安時代の土師器少量混入。													



第26図 八幡根遺跡 SI-06B 遺構・遺物

第26表 SI-06B出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 質	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 復15.4 大 復13.0	薄く、口縁部は内外面に明瞭な稜を持って内傾する。体部外面に横溝削り。内面全面と外面口縁部に塗で。	10YR8/3 淡黄褐色	胎土で赤細粒ごく少量。軟質。	壙土中 口/9周 「フタ土」
2 坏 土師器	口 復12.3 高 3.5	薄く、口縁部は外面にごく弱い稜を持ってほぼ直立している。外面体部に塗での後、下半部に多方向彫削り。内面全面と口縁部外面に横溝で。内外全面を塗仕上げ。	2.5YR/3 淡黄色	胎土で黒細砂少量。軟質。	壙土中 全体1/6周 「フタ土」

SI-07 (第27図、写真図版5)

本建物跡は、調査区の北部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-06Aよりも古く、南西部をSI-06Aによって切られている。また、建物跡の北半分は調査区外である。

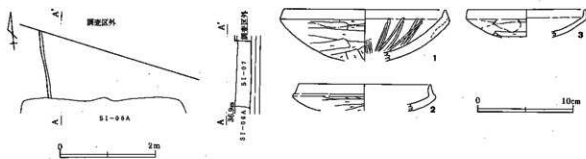
平面形は、西壁の一部しか確認できなかったため、詳細は不明である。主軸方向はMN-2'-W程度を示すと思われる。壁は確認面から32cm程遺存しており、垂直気味に立ち上がっている。周溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦と思われる。柱穴、貯蔵穴、竈は検出されなかった。

出土遺物 小破片だけしかなく、この建物に伴うとは言いがたい。厚手で重量感のある大形坏(1)は口縁部の形が特徴的である。本遺跡で見られる古墳時代終末期の土師器坏類は、内面施磨きを省略し漆だけで防水処理をする段階のものが大半だが、この坏は漆仕上げと放射状施磨きを両方行う。時期が古いと考えるより、入念に作ったからと考えたい。

第27表 SI-07 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	甕・瓶	小形甕	長甕	甗	大甕	焼粘土塊	その他
土	口縁部	9						1					
師	体部	有			有				有				
器	底部												
須	口縁部												
器	体部												
器	底部												

古墳時代前期と平安時代の土師器少量混入。



第27図 八幡根遺跡 SI-07 遺構・遺物

第28表 SI-07出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 質 地	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土器	口 径17.0 大 径18.0	非常に厚く丸底。口縁部は外面に明瞭な稜、内面に浅い段を持って三角形に立ち上げる。外面は底部一方、体部横方向の彫り。口縁部内外面横撫で。体部内面横撫でのち磨き。内面全面と口縁部外面は横仕上げ。	10YR8/3 に濃い黄褐色	緻密で黒・透明細砂少量。やや硬質。	掘土中 口/9周 底-体一部
2 坏 土器	口 径14.0 大 径15.1	やや薄く、体部は浅い。口縁部内外面の稜と段は明瞭。体部外面磨削り、内面全面と口縁部外面は横撫で。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒褐色ごく少量。軟質。	掘土中 口-体1/9 周
3 坏 土器	口 径12.4 大 径12.8	薄く、体部は浅く磨き、口縁部内外面に弱い稜を持ってわずかに内側に磨する。体部外面は横で後に底部磨削り。内面全面と口縁部外面横撫で後に塗仕上げ。	7.5YR8/6 褐色	緻密で白細砂少量。やや硬質。1a類。	掘土中 口/4周 底-体一部

SI-08 (第28図、写真図版5・24)

本建物跡は、調査区の北部東寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-09、SI-46A、SI-46Bより古く、SI-10より新しい。建物跡南東部をSI-09に、北東コーナーをSI-46A、SI-46Bによって切られている。また、SI-10の西側を切っている。

確認された部分では、東西5.4m、南北5.2mであり、平面形は方形を呈していると思われる。主軸方向はMN-4'-Eを示す。壁は確認面から西壁で42-46cm程、東壁で19cm程遺存しており、65°~75°程の傾きで立ち上がる。周溝は、竈の両脇を除き、壁際をほぼ全周していると思われる。幅は12~38cm、深さは4~7cm程で、断面はU字形を呈する。床面は西側がわずかに高く、東側がわずかに低くなっており、比高差12cmである。柱穴は4本検出された(P1~P4)。P1は、長径73cm、短径58cmの平面楕円形である。P2は長径72cm、短径48cmの平面楕円形で深さ36cmである。P3は径58cm、深さ60cmである。P4は、柱穴上部をSI-09の床面に切られているが、遺存している部分は長径58cm、短径50cmの平面楕円形で、深さ52cmである。P2、P3、P4は、いずれも摺鉢状に掘られている。

貯蔵穴は2箇所認められた。貯蔵穴1は北西コーナーにあり、東西86cm、南北60cmの隅丸方形を呈する。断面形は摺鉢状で、最深36cmであり、底面はわずかに内彎している。貯蔵穴2は北壁壁際の東寄りにあり、東西141cm、南北60cmの不整な隅丸方形を呈する。断面形は摺鉢状で、最深46cmであり、底面はほぼ平坦である。

竈は、北壁中央やや西寄りに位置する。残存状況は悪く、左袖部と掘形のみ確認することができた。天井部と右袖部の構築材と思われる粘土層がセクション面に現れているが、流れ出していて原形はとどめていない。燃焼部底面に草木灰が7cm程、燃焼部上面から煙道にかけては焼土が最深27cmの厚さで認められた。長期にわたって使用したのと思われる。掘形は、北壁を幅61cm、奥行き42cmの平面摺鉢状に掘り込んで

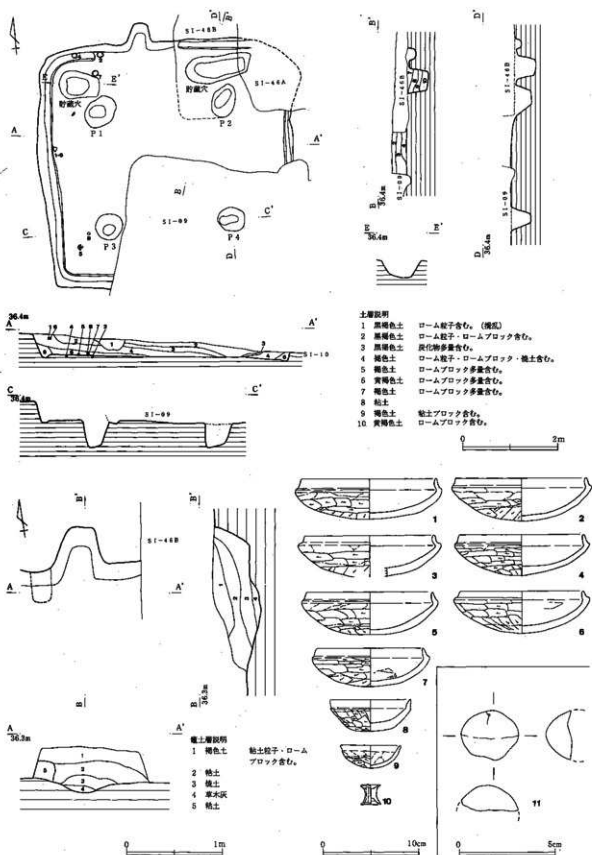
おり、煙道はB'の南40cmの所から60°の傾きで立ち上がっている。

埴土は6層に分層できる。壁際と床面直上は、壁から崩落と思われるロームブロックを多量に含む褐色土や黄褐色土である。中層はローム粒子、ロームブロック、焼土を含む褐色土、上層は概ねローム粒子を含む黒褐色土である。

出土遺物 西側の貯蔵穴1付近の床面に土師器が遺棄されていた。坏類は、すべて漆で仕上げられている。小形の坏2点(8・9)は、内面と口縁部外面の横線が通常の土器と同じく丁寧で、漆仕上げもされているので、「手捏ね土器」と言われるものとは異なる。普通の坏類も小形品も、底部上端を削り残す点が共通している。10は、この時代の土師器と同じ灰白色軟質の胎土で、縄文時代の耳飾りとは考えられない。上下で大小の差があり、脚の内部が深くくぼむので、高坏のミニチュアである可能性を考えておく。ただし、通常のミニチュア土器・手捏ね土器にくらべると、はるかに小形である。11も、胎土からみて古墳時代終末期の遺物と考えられる。

第29表 SI-08出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 復14.2 高 4.3 底 復15.5	やや厚く丸底で、口縁部は内外面に明瞭な段と段を持って内傾する。外面体部縁で後に底部多方向裏割り、体部横割り。内面全面と外面口縁部横線で後に漆仕上げ。	10YR7/6 明黄褐色 黒斑あり	緻密で黒細砂ごく少量。やや軟質。1a類。	壙土中 底-□1/3 周 [3]
2 坏 土師器	口 13.8 高 4.5 大 14.7	薄く丸底で、口縁部内外面に明瞭な段と段を持って内傾する。外面体部に線な溝で後突出気味の底部を一方内裏割り、体部横割り。内面全面と外面口縁部横線で後に漆仕上げ。漆仕上げは外面中位まで及ぶ。	10YR7/4 灰白色 黒斑あり	緻密で黒細砂少量。軟質。	床底 ほぼ全周 [7]
3 坏 土師器	口 13.8 底 15.0 高 4.4	体部がかなり厚く、重い。丸底で、口縁部は内傾し、内外面の段と段は明瞭。体部縁で後に底部多方向裏割り、体部横割り。内面全面と口縁部外面に横線で後に漆仕上げ。漆仕上げは外面中位まで及ぶ。	7.5YR5/1 灰白色 黒斑あり	緻密で混和材ほとんどなし。やや軟質。	壙土中 底-□3/4 周
4 坏 土師器	口 13.2 高 4.4 大 14.2	体部はやや薄く、底部は丸底で厚い。口縁部内面の段と外面の段は明瞭。外面体部縁で後に底部多方向裏割り、体部横割り。口縁部内外面に横線。内外全部を漆仕上げ。	10YR8/2 灰白色	緻密で混和材は目立たない。やや軟質。	床底 全周 [6]
5 坏 土師器	口 15.4 高 4.5 大 14.4	丸底で、体部上半が厚く、口縁部内外面の段と段はやや不明瞭。外面は体部縁で後に底部多方向裏割り、体部横割り。内面全面-口縁部外面は横線で後に漆仕上げ。漆仕上げは外面中位まで及ぶ。	7.5YR8/3 にぶい黄褐色	緻密で混和材ほとんどなし。軟質。	床底 □1/2周 5/6周 [1]
6 坏 土師器	口 復13.0 高 4.5 大 復14.4	厚く丸底で、口縁部外面に明瞭な段と内面に弱い段を持って内傾する。体部外面は指で後に横方向、底部外面は一方内裏割り。内面全面と体部中位以上の外面は漆仕上げ。	10YR8/2 灰白色	緻密で黒細砂少量。軟質。1b類。	床土35cm 底-□1/3 周 [3]
7 坏 土師器	口 11.4 高 4.1 大 12.4	やや厚く丸底で、口縁部は短く内傾する。内面の段はやや不明瞭。外面は体部縁で後に底部多方向裏割り、体部横割り。内面全面-口縁部外面は横線で後に漆仕上げ。漆仕上げは外面中位まで及ぶ。	7.5YR8/3 浅黄褐色	緻密で透明細砂ごく少量。やや軟質。	床底 ほぼ全周 [5]
8 小形坏 土師器	口 8.6 底 3.4	厚く、底部はヒレンズ状に突出する。口縁部は外面にごく弱い段、内面に弱い段を持って外傾する。外面は体部に線な溝で後に底部多方向裏割り、体部の所々を横割り。口縁部外面と内面全面は横線で後に漆仕上げ。	10YR5/3 にぶい黄褐色 土も構成に 混る。	緻密で混和材は目立たない。やや軟質。土も構成に混る。	床土7cm 口縁の水 1/3周 [2]
9 小形坏 土師器	口 復 6.4 高 2.4	薄く丸底で、体部は丸味を持って立ち上がる。口縁部は内外面に弱い段を持って外傾する。外面は体部縁で後に底部多方向裏割り。体部内面縁で後に、口縁部内外面を横線で後に漆仕上げ。	7.5YR6/4 にぶい黄色	緻密で白細砂少量。軟質。1b類。	壙底-□1/4 周 [壙]
10 不明品 土師器	口 1.8-2.0 底 2.1 高 2.1	脚部は直線的に立ち、脚部下端は「八」の字に開く。雑なつくりで口縁端部・脚部縁は欠けている。外面横線で、坪と脚の内面は指押さへ。	5Y8/4 淡黄色	緻密で黒細砂少量。軟質。	壙土中 ほぼ充形
11 土玉 土製品	長 残0.1 幅 残2.5 重 残7.7g	粘土塊を丸めて成形。球形を呈し、断面中位がやや張る。表面は丁寧な溝で。穿孔部分は残っていない。	2.5Y8/2 灰白色	緻密で混和材は目立たない。軟質。	壙土中 1/2次損



第28図 八幡根遺跡 SI-08 遺構・遺物

第30表 SI-08 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	埴	皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形甕	長甕	甗	大甕	埴輪土塊	その他
土口縁部	375				1	6				26				
胴体部	有				脚柱1	有				有			62	埴輪不明!
器底					菊1					11	1			
須口縁部														
底														
土玉1点。	坏と高坏の小形品を含む可能性あり。													
古墳時代前期の土師器少量、平安時代の土師器若干・中世の瀬戸天目碗高台部1片・近世陶器(灰釉)1片混入。														

S1-09 (第29図、写真図版5・24~25・55)

本建物跡は、調査区の北部東寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-08、SI-10より新しく、SI-08の南東部、SI-10の南壁を切っている。

平面形は、東西5.9m、南北6mのほぼ正方形で、主軸方向はMN-15°-Eを示す。壁は確認面から西壁で22~31cm程、南壁で19cm程、北壁で28cm程遺存しているが、東壁は残りが悪くほとんど遺存していない。傾きは西壁・北壁で75°~85°程、南壁で70°程である。周溝は、竈の両脇を除き、壁際をほぼ全周している。幅は南東コーナーで42cmであるものの、概ね14~30cm、深さは8~18cm程で、断面はU字形を呈する。床面は西側がわずかに高く、東側がわずかに低くなり、北高差12cmである。柱穴は、4本検出された(P1~P4)。P1は径46cm、深さ61cm、P2は長径54cm、短径40cmの平面楕円形で深さ92cmである。P3は径56cm、深さ60cm、P4は径36cm、深さ76cmである。P1、P4は円柱状に、P2は鋭角な二等辺三角形状に、P3は楕円状に掘られている。貯蔵穴は北東コーナーに検出された。平面形は、東西102cm、南北50cmの隅丸方形を呈する。断面形は西側に段を持つ楕円状で、最深54cmであり、底面はほぼ平坦である。

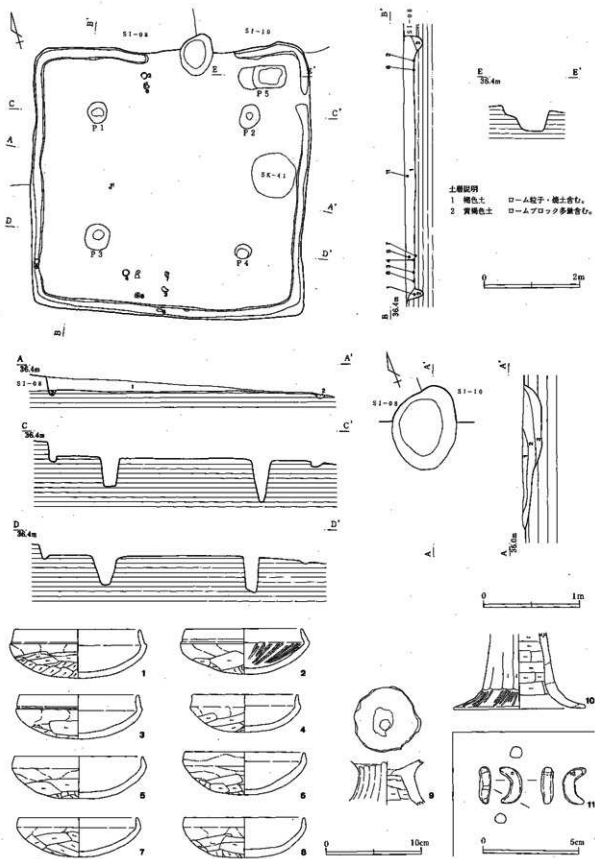
竈は、北壁中央やや東寄りに位置する。残存状況はきわめて悪く、掘形を確認するにとどまる。掘形は、北壁と床を東西68cm、南北91cmの平面楕円形に掘り込んでいる。壁外へ39cm程張り出しており、断面形は皿状で、深さは床面から最深9cmである。煙道はA'の南34cmの所から37°程の傾きで立ち上がっている。燃焼部の南から燃焼部、煙道にかけて焼土が最深12cmの厚さで認められた。掘形から判断すれば、いわゆる焚口ピットと呼ばれるものは掘られず、燃焼部に掘り込んでいたとすべきであろう。

埋土は2層で、壁際が壁からの崩落と思われるロームブロックを多量に含む黄褐色土であるほかは、概ねローム粒子、焼土を含む褐色土である。

出土遺物 図示した遺物のうち、11の土製勾玉を除くと他はすべて胎土1a類である。1・6・8の坏は漆仕上げがあり、他にはない。10の高坏は脚柱部外面を赤彩していたらしく、脚柱部外面の処理はよくわからない。このような赤彩の高坏の類例はSI-06AとSI-50にある。9の高坏は脚内面から穿孔していることが注意される。11の土製勾玉は、古墳時代終末期の土師器坏類と共通する胎土なので、この時期のものだろう。ただしこの建物の土師器1~11の胎土とは少々異なっている。

第31表 SI-09 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	埴	皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形甕	長甕	甗	大甕	埴輪土塊	その他
土口縁部	283									22				
胴体部	有				脚柱6	有				有			15	
器底					菊6					1	1			
須口縁部														
底														
土製勾玉1点。	古墳前期の土師器少量、平安時代の土師器少量、時期不明の陶器1片混入。													



第29図 八幡根遺跡 SI-09 遺構・遺物

第32表 SI-09出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 保存状況 注記
1 坏 土師器	口 復13.4 高 5.2 底 復14.6	薄く丸底で、外部は外へ開きながら立ち上がり、口縁部はゆるやかに内傾する。口縁部直下の外面の段と内面の段は明瞭。外面は外部に面する段の後、底部一方向後外部横方向に寛がり。内面全面と口縁部外面は横撫で。内面全面と外面上半は漆仕上げ。	10YR8/3 浅黄褐色 黒染あり	緻密で黒・透明細砂少量。軟質。1a類。	床直 径1/2周 口1/5周 「11」
2 坏 土師器	口 12.3 高 4.8 大 15.7	やや厚く丸底で、外部は外へ開き、口縁部は内傾する。外面の凹縁を伴う段と内面の段は明瞭。外面は外部に面する段の後、底部一方向、外部横方向に寛がり。口縁部内外面横撫で、内部内面横撫で後施磨き。	7.5YR7/3 にぶい褐色 黒染あり	やや緻密で白細砂・黒細砂やや多量。やや硬質。1a類。	床直 径1/4周 欠損 「1」
3 坏 土師器	口 12.6 高 4.7 大 13.4	やや厚く、底部は安定しており、外部は外へ開きながら立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部外面直下の段は明瞭を伴う。外面は外部に面する段の後、底部は一方向、外部横方向の寛がり。内面全面と口縁部外面は横撫で。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で黒・透明細砂と白細砂少量。やや硬質。1a類。	床直 径1/2周 口1/2周 外部全面 「9」
4 坏 土師器	口 11.2 高 3.8 大 11.7	やや厚く丸底で、口縁部は外面にごく浅い段と内面に弱い段を持ってほぼ直立する。外面底部～外部中位は一方向に寛がり。内面全面と口縁部外面は横撫で。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒細砂・白細砂少量。軟質。1a類。	床付近 全周 「4」
5 坏 土師器	口 13.6 高 4.5 大 14.2	丸底であるがやや偏平で、外部はゆるやかな丸縁を持って立ち上がり、口縁部はやや内傾する。口縁部内外面直下の段縁は不明瞭。外面は底部一方向、外部は横方向に寛がり。内面全面と口縁部外面は横撫で。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で透明細砂・白細砂少量。軟質。1a類。	床11cm 全面 「3」
6 坏 土師器	口 12.8 高 4.6	丸底で、外部は丸縁を持って立ち上がり、口縁部は内外面にかすかな段を持ってやや内傾する。外面は外部に面する段の後、底部一方向、外部に横方向の寛がり。内面全面と口縁部外面は横撫で後漆仕上げ。	10YR8/3 浅黄褐色 口縁 黒色	緻密で黒細砂ごく少量。軟質。1a類。	床直 径1/2周 径2/3周 「2」
7 坏 土師器	口 12.6 高 4.2 大 13.1	薄く丸底で、外部は外へ開き、口縁部内外面にごく弱い段を持って内傾する。外面は外部に面する段の後、底部一方向、外部横方向の寛がり。内面全面と口縁部外面は横撫で。	2.5Y8/2 灰白色 黒染あり	やや緻密で黒細砂・白細砂やや多量。やや硬質。1a類。	床直 径4/5周 欠損 「8」
8 坏 土師器	口 12.8 高 4.5	丸底で、外部は丸縁を持って立ち上がり、口縁部は段を持たずに内傾する。外面は底部一方向、外部横方向に寛がり。内面全面と口縁部外面は横撫で後、外面上半と内面に漆仕上げ。内外面とも刷毛が著しい。	2.5Y8/3 淡黄色	やや粗い。黒・透明細砂と白細砂少量。軟質。1a類。	床直 径1/6周 欠損 「6」
9 高坏 土師器	口 復14.0	胴部は低く、胴部は内面に段を持って外へ折れて開く。坏部は外へ開く。胴部は底部一方向、外部横方向に寛がり。内面全面と口縁部外面は横撫で後施磨き。脚柱部外面に赤彩痕か、わずかに残る。脚柱部外面は黒色を帯び、漆またはススか？	2.5Y8/2 灰白色 胴部と坏部の内面のみ 黒色	やや緻密で黒・透明細砂やや多量。黒細砂・白細砂少量。やや硬質。1a類。	埋土中 脚一坏底全周 「フク土」
10 高坏 土師器	口 復14.0	胴部はややふくらみのある円筒状で、胴部は明瞭に屈折して大きく開く。内面胴部は寛がり、胴部後、外面脚部寛がり後横撫で。外面胴部は横撫で後施磨き。脚柱部外面に赤彩痕か、わずかに残る。脚柱部外面は黒色を帯び、漆またはススか？	2.5Y8/2 灰黄色	緻密で透明細砂やや多量。黒細砂・白細砂少量。やや硬質。1a類。	埋土中 脚1/2周 脚一部
11 勾玉 土製品	長 20mm 幅 12mm 厚 6mm 重 0.95g	粘土紐を曲げて成形し、腹で調整で指紋が残る。腹部は撫でないので、粘土のシワが残る。横断面に片面から穿孔するので、断面の孔の周辺が少し盛り上がる。孔徑1mm。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で混和材がほとんどない。軟質。	底上17cm 埋土中 「12」

SI-10 (第30回、写真図版5)

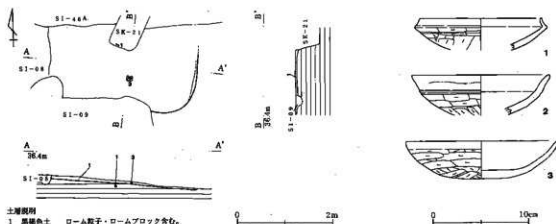
本建物跡は、調査区の北部東寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-08、SI-09、SI-46Aよりも古く、北面をSI-46Aに、西側をSI-08に、南壁際をSI-09によって切られている。

平面形は、南東部しか確認できなかったため、詳細は不明である。主軸方向はMN-5'-E程度を示すと思われる。壁は東壁で確認面から3cm程しか遺存しておらず、傾きも不明である。周溝は検出されなかった。床面は、確認された範囲内では西側が高く、東側が低くなっており、比高差は23cmである。柱穴・貯蔵穴・竈は検出されなかった。

埋土は1層で、ローム粒子、ロームブロックを含む黒褐色土である。

出土遺物量は少ない。2は深い形で、外部上端外面が2段ふうになる。形は変わっているが、混和材の少ない軟質胎土の土器を漆仕上げで処理する特徴は古墳時代終末期の栃木県産の土師器には特異なものではない。3は漆仕上げをしない、やや硬い器質である。

第3章 発掘調査された遺構と遺物



第30図 八幡根遺跡 SI-10 遺構・遺物

第33表 SI-10出土遺物

番号 復元 土器	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 土器	口 復12.7 大 復14.0	やや薄く、体部は外へ開く。口縁部内外面の焼成と段は明瞭。外面体部は一方角削り後に上位を横溝削り。内面全面と口縁部外面は横溝で後に修正上げ。	10YR7/3 にふい黄褐色 赤色土も 凝状に混 じる。	緻密で黒・透明細 砂ごく少量。 やや硬質。黒炭あ り。	口～体1/3 周 床付近から SK-21に著 ち込んだ状 況。「2」
2 土器	口 復14.6 高 残 4.3	外面口縁部と体部の境は浅いが明瞭な2段をなす。内面体部上縁の段は弱い。外面は底面一方角の後、体部横方向削り。内面全面と口縁部外面は横溝で修正上げ。	10YR6/2 灰黄褐色	緻密で白磁粒少量。 やや軟質。	埋土中 口/6周
3 土器	口 復16.0 高 4.0	口縁部は厚く、底部は深い。内外面ともに明瞭な段を持たずに内磨する。外面は磨きで削り後、底部多方向角削り後、体部横削り、口縁部外面と内面全面は横溝で。	2.5Y8/3 灰黄色。 黒炭あり	緻密で白磁粒ごく 少量。やや硬質。	床付近 口/4周 「1」

第34表 SI-10 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	埴	盤・皿	蓋	高埴	鉢	小形土器	壺・甕	小形壺	長壺	甗	大甗	焼粘土器	その他
土器	44									2			
土器	有			脚柱2	有					有			
土器				甗2									
土器													
土器													
土器													

SI-11A (第31～32図、写真図版6・25・53～54)

本建物跡は、調査区の北部東寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-12より古く、東壁の南側をSI-12によって切られている。

平面形は、東西5.9m、南北6.2mのほぼ正方形を呈し、主軸方向はMN-5°-Eを示す。壁の遺存状況は悪く、確認面から西壁で19～21cm程、南壁で8～11cm程、北壁で5cm程である。東壁は不明であるが、ほとんど遺存していないものと思われる。傾きは西壁で75°～80°程、北壁で45°～80°程、南壁で65～70°程である。周溝は、北壁際西側から西壁際、南壁際にかけて検出された。幅は16～41cm、深さは8～13cm程で、断面は皿状を呈する。床面は中央部西側が高く、東側が低くなっており、比高差18cmである。柱穴は

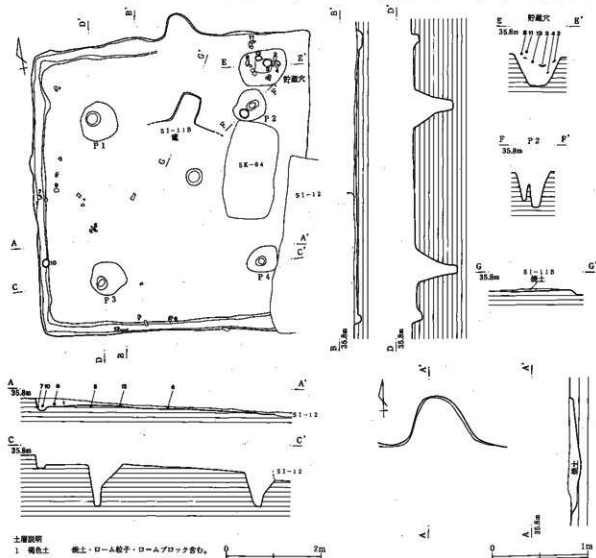
4本検出された(P1~P4)。P1は径84cm、深さ84cm、P2は径75cm、深さ76cm、P3は径76cm、深さ88cm、P4は長径68cm、短径54cmの不整な楕円形で、深さ72cmである。4本とも漏斗状に掘られており、柱痕も確認できる。P2は柱痕らしきものが2ヶ所あり、建て直された可能性もある。貯蔵穴は北東コーナーに検出された。平面形は、東西102cm、南北75cmの不整な隅丸方形を呈する。断面形は端正な槽鉢状で、最深67cmであり、底面はほぼ平坦である。

竈は、北壁ほぼ中央に位置する。残存状況はきわめて悪く、掘形を確認するにとどまる。掘形は、北壁を幅86cm、奥行き48cmの平面U字形に掘り込んでいる。燃焼部の南から燃焼部、煙道にかけて焼土が最深13cmの厚さで認められた。

埋土は1層で、ローム粒子、ロームブロック、焼土を含む褐色土である。

出土遺物 SI-11Bの項で述べる事情のため、SI-11AとSI-11Bの遺物は一括して取り扱う。

土師器坏では、5の停止糸切りが注意される。坏の底部を削りわすれたために、糸で切り離していることが明らかになった。SI-53の17にも同様の例がある。19は作りかけてやめた土器の口縁部の粘土片が焼かれたもの。薄さからみて、手捏ね成形の小形土器らしい。SI-14Aの土師器削りかすとともに、この付近で土



第31図 八幡根遺跡 SI-11A・B (1) 遺構

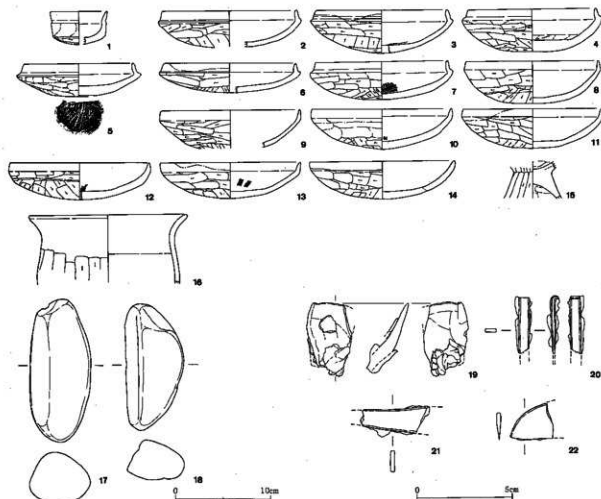
器を作っていたことを示している。12は焼成前に生じた亀裂を磨きで補修しているが、大きな亀裂が結局残ってしまった不良品。3も、破損はしていないが底面に亀裂があり、飲み物には使えない。7の坏も底面中央を局部的に磨いているので、補修用磨ききの可能性が高いが、現存する破片の範囲では亀裂の生じた部分を確認できないので、補修品であるとは断定できない。坏類の胎土は1a類よりも1b類が多い。1b類や2類の胎土のものにも不良品やそれに近いものが見られるので、この八幡根遺跡で製作していた土師器にこれらの胎土のパラエティがあることを示している。この点は、まとめの章(p.272)で再度検討する。

土器のほかに、鍛冶炉の炉壁に近い部分に生成したと思われるガラス質滓の小破片が2片出土している。鍛冶工程としては前半に近い段階の遺物の可能性が高いので、平安時代の遺物が混入したのだろう。

第35表 SI-11AおよびB 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	甕・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	甕・瓶	小形甕	長甕	甌	大甕	幾帳土器	その他
土	口縁部	269				1			2	7			
器	体部	有		罎柱2	有					有		7	器種不明
類	底面												
須	口縁部												
磨	体部												
器	底面												

鉄製刀子1点・鎌? 1点・不明鉄製品1点・礫物石2点・土師器の未製品の焼成品1点。
平安時代の鍛冶滓2点と、須磨器2片(新治窯産の長甕胴部、未切りの坏底1片産地不明)・土師器少量混入。



第32図 八幡根遺跡 SI-11A・B (2) 遺物

第36表 SI-11A・B出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 小形 土師器	口 復6.0 高 3.5	やや厚く丸底。体部は外面に稜を持って急に立ち上がる。外面口縁部の段は明瞭。外面底部彫削り、内外面横撫で。外面上半と内面全面に漆仕上げ。	7.5YR8/3 浅黄褐色	緻密で混和材は目立たない。軟質。1b類。	塚土中 底1/2周 口1/3周 「SI-11B フタ土」
2 大 土師器	口 14.2 高 3.8 大 15.2	薄く丸底で、口縁部は外面に強い段、内面にゆるい稜を持って内側。外面は底部一方彫削り、体部上位横撫で。内面～口縁部外面は横撫で。底面中央に乾燥時が焼成時の亀裂があり、内面から外面まで貫通している可能性が高い。補修痕は見られない。	10YR7/3 灰白色 黒斑あり	緻密で透明細砂ごく少量。軟質。1b類。	貯蔵穴底上 5cm 口5/12周 「SI-11Aa 22」
3 大 土師器	口 14.0 高 4.5 大 15.1	薄く丸底で、口縁部は内外面に明瞭な稜線と段あり。外面は体部横撫で後、底部多方向彫削り、体部横撫削り。内面～口縁部外面横撫で。漆仕上げ。底面中央に乾燥時が焼成時の亀裂があり、内面から外面まで貫通している可能性が高い。補修痕は見られない。	10YR7/3 灰白色 黒斑あり	緻密で透明細砂・白細粒少量。やや硬質。1b類。	貯蔵穴底上 45cm 全面 「SI-11Aa 20」
4 大 土師器	口 復13.6 高 4.5 大 復14.9	厚く丸底で、なだらかに立ち上がり、口縁部でまっすぐ立ち上がり、口唇部で少々内彎する。外面に段あり。底部外面彫削り、内面～口縁部外面横撫で後、漆仕上げ。	2.5Y8/3 灰黄褐色 黒斑あり	緻密で白細粒・透明細砂少量。やや軟質。1a類。	貯蔵穴底上 28cm 底～口5/12周 「SI-11Aa24」
5 大 土師器	口 復12.0 底高 4.6 大 3.5 高 13.2	底部はやや厚く、外底面中央は静止糸切り後、未調整で窪む。体部は開き気味に立ち上がり、口縁部外面の段と内面の稜線が明瞭。外面体部横撫で。内面全面と口縁部外面に横撫で後、漆仕上げ。	5YR7/6 褐色	緻密で白細粒ごく少量。やや硬質。2類。	床直 口1/4周 底5/12周 「SI-11Bb 6」
6 大 土師器	口 復14.0 高 3.1 大 復15.0	薄く丸底で、口縁部外面の段と内面の稜線明瞭。外面底部に一方彫削り後、体部横撫削り。内面全面と口縁部外面に横撫で後、漆仕上げ。	5YR7/4 灰白色	緻密で白細粒少量。軟質。	床直 口1/3周 「SI-11Ba 1」
7 大 土師器	口 復14.0 高 4.0 大 復15.2	薄く丸底で、体部はゆるく開く。口縁部外面の段と内面の稜線明瞭。外面底部は縁なしで、後、多方向彫削り、体部横撫削り。口縁部内面と内面全面と口縁部外面に横撫で。内面底部中央に直交方向彫削り。補修用磨きかきどうかは不明。	5YR8/4 淡褐色	緻密で、透明細砂と赤粒が少量。やや硬質。1b類。	床付近 口1/2周 「SI-11Bb 9」
8 大 土師器	口 14.2 高 4.5 大 14.5	丸底で、口縁部外面の稜は明瞭。内面の稜線もやや明瞭。外面は底部一方彫削り後、体部横撫削り。内面～口縁部外面横撫で後、内面全面と外面上半に漆仕上げ。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒細砂ごく少量。やや軟質。	貯蔵穴底上 70cm 全面 「SI-11Aa 17」
9 大 土師器	口 16.8 高 4.0 大 15.0	薄く、体部はゆるく開き気味。口縁部外面の稜線が明瞭。外面は体部に縁なしで、後、底面一方彫削り、体部横撫削り。内面全面と口縁部外面横撫で。	5YR7/6 褐色	緻密で黒細砂・白細粒がごく少量。硬質。1b類。	床直 口5/12周 「SI-11Bb 10」
10 大 土師器	口 15.0 高 4.3	丸底で不安定。体部はゆるやかに開き、口縁部外面の稜線は明瞭。外面底部～体部に彫削り。内面全面と口縁部外面に横撫で。平織の粗い布の任意が内面にあり、横撫で工具の痕跡か。内面全面～口縁部外面に漆仕上げ。	7.5YR7/3 灰白色	緻密で白粒ごく少量。やや軟質。1a類。	床直 全面 「SI-11Ba 5」
11 大 土師器	口 14.8 高 4.2	底部は厚く、口縁部外面に明瞭な稜線を持ち、内面はゆるく内彎する。外面は底部は一方のち体部横撫削り。内面～口縁部外面は横撫で後、漆仕上げ。	7.5YR7/4 灰白色 と浅黄褐色 10YR8/3 の土が混入	緻密で透明細砂ごく少量。やや軟質。1a類。	貯蔵穴北側の 床付近 「SI-11Aa 14」
12 大 土師器	口 14.8 高 3.9 大 15.0	やや厚く丸底。体部はゆるやかな気味を持ち、開く。口縁部は外面の稜が明瞭。外面は底部に一方彫削り、体部横撫削り。内面全面と外側口縁部に横撫で後、漆仕上げ。底面中央に焼成面に生じた亀裂と補修している。	10YR8/2 灰白色	緻密で白細粒ごく少量。軟質。1a類。	床直 口2/3周 「SI-11Aa 8」
13 大 土師器	口 14.8 高 3.8	薄く丸底で、口縁部外面に明瞭だが弱い稜を持つ。外面は底部一方彫削り、後体部横撫削り。内面～口縁部外面は横撫で、内面に平織の粗い布の任意が数箇所あり、経緯ともに10本/cmで、横撫で工具の痕跡か。内面～外面口縁部に漆仕上げ。	7.5YR7/4 灰白色	緻密で混和材は目立たない。軟質。やや軟質。	貯蔵穴底上 51cm 全面 「SI-11Aa 18」
14 大 土師器	口 復15.4 高 4.0	やや厚く丸底で、口縁部内外面の稜は不明瞭でゆるく内彎する。外面は底部一方彫削り後体部横撫削り。内面～口縁部外面は横撫で後、漆仕上げ。	2.5Y8/2 灰白色 黒斑あり	緻密で混和材は目立たない。軟質。	塚土中 口1/3周 「SI-11A フタ土」

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
15 高坏 土師器		脚のつけねは強く明瞭にくびれる。坏部内面は丸底。脚部外面は縦方向裏割り、内面裏撫で。坏部内面は裏撫で後撫で。	5YR5/6 明赤褐色	やや粗い。白砂・ 白細粒・透明細砂 多量。やや硬質。	不明 脚部のつけ ね全周 「SI-11A」
16 甕 土師器	口 径17.0	薄く、頸部は明確な稜を持たずに外反する。胴部外面裏割り、口縁部 内外面横撫で。胴部内面は刮削して調整不詳。	10YR7/3 にぶい黄緑 色	粗い。灰色塵・砂 白粒・細粒多量。 硬質。	甕 口1/6周 「SI-11A」
17 扁物石 鏝	径 6.1×5.1 長 15.2	自然の河川礫をそのまま利用。図の上端が叩いたように少しつぶれて 剥離している。全体に表面が密着気味。重量752.11g。		緻密で硬質の安山 岩。	埋土中 変形 「SI-11B フタ土」
18 扁物石 鏝	径 6.1×4.2 長 13.5	自然の河川礫をそのまま利用。加工はない。重量423.91g。		緻密で硬質の流紋 岩。	埋土中 変形 「SI-11B フタ土」
19 未製品 土師器	長 3.9 幅 残 2.4 厚 残 1.2	失敗して丸めた土器が壊れたもの。器壁が薄いのでおそらく手捏ね 成形の小形土器の未製品。器の上縁が口縁部で、左辺が内面、右辺が 外面。破線は焼成後の破損部。内外面ともに体部撫で後、口縁部横撫 で。左辺の左縁と下縁は粘土をちぎり、下縁は指で押して変形させる。 右辺の下縁は刷状工具で右下から器壁に切れ目を入れ、左下は粘土を 丸めている。	7.5YR7/6 灰色	緻密で透明細砂少 量。やや軟質。	不明 成形に隅 部が少し破 損 「SI-11A」
20 不明鉄 製品	幅 6.3mm 厚 1.5mm 重量 1.81g	扁平で上端は短く折り曲げられており、下端は欠損している。上端も 曲げた先が欠損している可能性も残る。			不明 下部欠損 「SI-11A」
21 刀子 鉄製品	重量 4.54g	刃部が見られないので、刀子とすると柄部の可能性がある。柄部はほ ぼまっすぐである。厚さは2.5mmで均一。木質等は残っていない。			埋土中 両端欠損 「SI-11A フタ土」
22 鏝? 鉄製品	厚 2.8mm 重量 2.34g	片側だけに刃を持つ。柄部は厚さ2.8mmで、切先へ近づくと幅は2mm 弱まで狭くなる。			不明 刃先部のみ 「SI-11A」

S I - 1 1 B (第31~32図)

SI-11Aの埋土中にもう1基の甕が確認されている。建物跡中央部北側に位置するが、残存状況は同様に悪く、掘形を確認するととどまる。掘形は、北側の埋土を幅56cm、奥行径62cmの平面方形に掘り込んでいる。燃焼部の南から燃焼部、煙道にかけて焼土が最深5cmの厚さで認められた。

ただし、この甕については、付随する壁や柱穴、周溝、貯蔵穴などが確認できず、誤認の可能性もあると思われる。SI-11AとSI-11Bの遺物は注記で区別されているが、遺構の範囲が明らかでないので、両者を区別した基準もよくわからない。遺物はSI-11Aと一括して図示し、土器の注記を観察表に示した。

S I - 1 1 3 (第33~34図、写真図版6・25~27)

調査区北東部の台地上の平坦面に位置する。重複関係は、SI-12、SK-08より古く、SI-53より新しい。西壁中央をSI-12に、竈東側の北壁をSK-08に切られる。また、SI-53の南壁の一部を竈の先端が切る。

平面形は、東西4.8m、南北4.4mの南東コーナーのみ隅丸な方形を呈し、主軸方向はMN-0°-Eを示す。壁は確認面から西壁で18~23cm程、南壁で15cm程、東壁で8~16cm程遺存しており、傾きは西壁で70~75°程、東壁で60~65°程、南壁で70°程である。周溝は、北壁際西側から西壁際、南壁際にかけて検出された。幅は15~36cm、深さは5~13cm程で、断面はU字形を呈する。床面は北東コーナーが高く、竈前と南東コーナーが低くなっており、その比高差は竈前で36cm、南東コーナーで30cmである。床面中央部が低い例としては、中央に土坑を持つSI-28がある。柱穴は、4本検出された(P1~P4)。P1は径36cm、深さ58cm、

P 2 は径38cm、深さ55cm、P 3 は径49cm、深さ48cm、P 4 は長径60cm、短径48cmの楕円形で、深さ64cmである。4本とも断面円筒状に掘られている。貯蔵穴は竈の東側に検出された。平面形は、東西58cm、南北32cmの隅丸方形を呈する。断面形は楕鉢状で、写真によれば東側に段を有していたものと思われる。最深44cmであり、底面はほぼ平坦である。

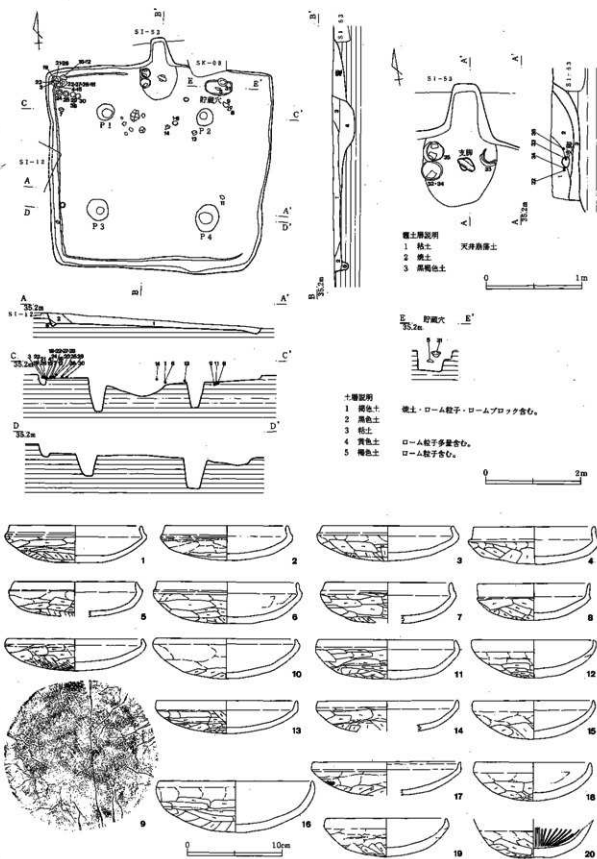
竈は、北壁はほぼ中央に位置する。残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。竈の断面図上層に天井部の構架材と思われる粘土が堆積していたが、形はとどめていない。竈埋土の最下層は、調査時の現地での観察によると、竈を構築する前に埋め戻した黒褐色土である。掘形は、北壁を幅55cm、奥行き65cmの平面台形に掘り込んでおり、A'の南58cmの所から42'程の傾きで立ち上がっている。左袖にあたる箇所から甕が2～3個体分、右袖にあたる箇所から1/2個体分出土したが、袖の芯材として使用されたものと思われる。また、燃焼部中央から川原石と土が出土したが、支脚として使用されたものと思われる。さらに、燃焼部中央から煙道にかけて、焼土が最深31cmの厚さで認められた。長期間にわたり使用されていたものであろう。

埋土は5層に分層された。竈前の低くなった箇所に、床面の高さをそろえるかのようにローム粒子を多量に含む黄色土の層が検出されたが、あるいは、その部分だけ人為的に埋め戻されたのかも知れない。SI-28に類例がある。その他は概ね、ローム粒子、ロームブロック、焼土を含む褐色土である。

出土遺物 遺存度の良い土師器が北西部に多く遺棄されている。食器類の胎土は1a類より1b類が少し多い。20は旋盤きと赤彩を行う坏で、搬入品の可能性がある。ほぼ完形品の土師器高坏が8点あり、この建物に遺棄したものと考えられる。口縁部の内傾するもの2点(21・22)と、外反するもの6点(23～28)がある。外反するものうち、とくに漆を塗らない24と25は同じ作者の作品と見られ、脚部を欠く28も坏部の特徴からみてその可能性が高い。29と30は鉢としたが、短頸壺にも似た形である。胎土や頸部外面の段からみて古墳時代後～終末期のもので、古墳時代中期後葉の土師器が混入した品ではない。35は胴部下半を磨く常盤型甕で、この遺跡ではめずらしい。

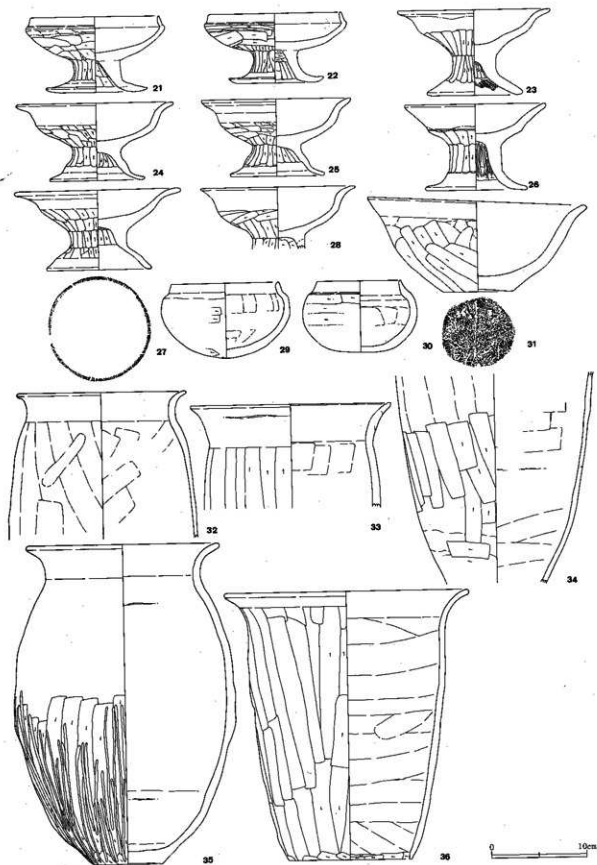
第37表 SI-13出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成 分	出土状況 残存状況 注記
1 土師器	口高 13.9 大 4.0 大 15.0	薄く丸底で、口縁部外面の段と内面の段縁が明瞭。外面は体部に強での後、底部に多方向磨削り、体部に横磨削り。内面全面と外面口縁部に横磨で後、漆仕上げ。	5YR7/4 に灰褐色	緻密で白磁砂少量、やや軟質。1a類。	床上 7cm 口1/2部 定室全 No.17と甕が 接合
2 坏	口高 13.0 大 3.7 大 14.1	薄く丸底で、体部上半は丸球やや強い。口縁部内外面の段縁と段は明瞭。外面体部強での後、底部に一方方向磨削り。内面全面と口縁部外面に横磨での後、漆仕上げ。	5YR8/4 に灰褐色	緻密で黒磁砂ごく少量、やや軟質。赤白の粘土が細かい織状。	埋土中 口1/6部 体1/3部 「フク土」
3 土師器	口高 13.8 大 3.8 大 15.0	底部は厚く、体部は薄く、弱い丸底。口縁部外面にゆるい段。内面は明瞭に内傾。外面体部に強な後での後、底部に多方向磨削り。内面全面と外面口縁部横磨で。内外全面に漆仕上げ、底面まで塗っている可能性あり。	7.5YR5/2 灰褐色	緻密で黒磁砂ごく少量。軟質。1b類。	床面 全面 「13」
4 坏	口高 12.8 大 4.0 大 14.0	薄く丸底で、体部は開き、口縁部内外面に明瞭な段と広い段を持つ。外面体部強での後、中位以下に直交方向の磨削り。内面全面と外面口縁部に横磨で。	2.5Y7/3 淡黄色	緻密で黒磁砂ごく少量。軟質。1a類。	床面 ほぼ全面 「7」
5 坏	口高 12.9 大 4.4 大 14.2	薄く、体部上位の丸球がやや強く、口縁部は外面に明瞭な段、内面にゆるい段を持つ。外面体部は強な後、底面一方、体部下位方向の磨削り。体部横磨削りの方向は通常と逆。内面全面と口縁部外面に横磨で。	2.5YR8/3 淡黄色	緻密で黒磁砂少量。軟質。1a類。	甕最大12cm 口～底1/3 部 「23」
6 坏	口高 14.8 大 15.7	薄く丸底で、体部は開き、口縁部は内外面に明瞭な段と段縁を持って内傾する。外面底部は多方向、体部横方向磨削り。口縁部内外面横磨で、内面体部強での後横磨で。	10YR7/4 にふい黄褐色	緻密で黒・透明明砂ごく少量。軟質。	地上 7cm 口～底2/3 部 No.17と甕が 接合



第33図 八幡根遺跡 SI-13 (1) 遺構・遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
7 環 土 師器	口 復12.4 高 4.3 大 復14.4	やや薄く明瞭な丸底で、口縁部の内外面に明瞭な稜線と段を持つ。外面体部に雑な塗での後、底部一方方向彫削り、体部横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面に横撫で。	7.5YR7/4 にぶい橙色	緻密で黒磁砂ごく少量。やや軟質。	床直 口～体5/12周 [12]
8 環 土 師器	口 復12.0 高 3.9	薄く丸底で、口縁部は外面に明瞭な段、内面に弱い段を持って内傾する。外面底部一方方向、体部横方向彫削り。内面全面と口縁部外面に横撫で。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で白磁砂・黒・透明磁砂少量。軟質。1b類。	床付近 口1/3側 体1/2周 [12]
9 環 土 師器	口 14.4 高 3.5 大 15.0	薄く丸底で、口縁部外面に強い段、内面にゆるい段をなして内傾する。内面全面と口縁部外面に塗仕上げ。外面底部に横段、交叉する平行刻線が多数。外面底部に彫削りの後体部横段彫削り。内面全面と口縁部外面に横撫で。	5YR8/4 淡黄色	緻密で黒・透明磁砂少量。	床付近 口5/6周 他は全周 No.20と貯蔵 穴が接合
10 環 土 師器	口 復15.0 高 4.3 大 15.6	かなり薄い。丸底で、内外面に明瞭な稜線を持って口縁部は内傾する。外面は体部に塗での後、底部一方方向彫削り。内面全面と口縁部外面は横撫で。全体が薄減して、塗仕上げの有無は不詳。	2.5YR8/3 淡黄色	緻密で黒・透明磁砂少量。軟質。	甕 口全周 底全周
11 環 土 師器	口 復14.4 高 4.2 大 15.3	丸底で、口縁部は内外面に弱い段を持って内傾する。外面底部は多方方向彫削り後、体部横段彫削り。内面全面と口縁部外面に横撫で。内面全面と外面中位以下に塗仕上げ。	7.5YR7/6 橙色	緻密で黒磁砂ごく少量。やや軟質。	床付近 口1/4周 [24]
12 環 土 師器	口 13.0 高 4.1 大 13.2	やや薄く丸底で、体部は丸味強い。口縁部は内外に明瞭な稜線を持たずにやや強く内傾する。外面体部に雑な塗での後、底部一方方向彫削り。口縁部内外面に横撫で。	2.5YR7/2 灰黄色	緻密で白磁粒少量・黒・透明磁砂ごく少量。1b類。	床直 口1/5欠損 他はほぼ 全周 [5]
13 環 土 師器	口 復14.9 高 3.5 大 15.2	薄く丸底。口縁部外面は弱い段を持ってわずかに内傾し、内面はやや強く立ち上がる。外面口縁部と内面に塗仕上げ。外面底部は多方方向彫削り後、体部は横段彫削り。内面全面と口縁部外面に横撫で後、塗仕上げ。	7.5YR7/4 にぶい橙色	緻密で、混和材は目立たない。やや軟質。1b類。	底上 5cm 口～体1/4周 [18]
14 環 土 師器	口 復15.0 大 復15.1	薄く、口縁部内外面に段を持ち、内面はゆるく内傾する。外面底部は一方方向彫削りの後、体部横段彫削り。内面全面と外面口縁部に横撫で。内面全面と外面中位以上に塗仕上げ。	7.5YR8/4 淡黄褐色	緻密で混和材は目立たない。	底上20cm 口1/4周 [16]
15 環 土 師器	口 13.0 高 4.2 大 13.1	丸底で、口縁部は内外面に明瞭な稜線を持たずに弱く内傾する。外面体部に塗での後、底部に多方方向彫削り。口縁部外面と内面全面に横撫で。	10YR7/2 にぶい橙色	緻密で、黒磁砂ごく少量。軟質。	床直 全周 [7]
16 環 土 師器	口 16.4 高 5.5 大 16.9	厚く重い。丸底で、やや安定している。体部は丸味を持って開き、口縁部は外面に弱い段を持って内傾する。外面は体部に雑な塗での後、底部多方方向彫削り、体部横段彫削り。内面全面と外面口縁部に塗での後塗仕上げ。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で混和材は目立たない。軟質。	床直 ほぼ全周 [5]
17 環 土 師器	口 復15.6 高 3.5 大 復15.9	薄く、口縁部内外面に弱い段を持つ。口縁部内面縁部は弱い面取り状。外面体部に雑な塗での後、一方方向彫削り。体部は彫削り、時に平行素線状の段差をなす部分あり。内面全面と口縁部外面に横撫で。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で混和材は目立たない。軟質。1b類。	甕 口～底1/3周 [1]
18 環 土 師器	口 12.4 高 4.1 大 12.6	やや厚く、丸底で不安定。体部は丸味を持ち、口縁部内外面に明瞭な稜線を持たずに内傾する。口縁部はやや歪んでいる。外面体部に雑な塗での後、底部一方方向、体部横方向の粗い彫削り。内面体部彫削り後、口縁部外面と内面全面に横撫で。	2.5YR7/2 灰黄色	緻密で白磁粒・透明磁砂少量。軟質。1b類。	床直 全周 [6]
19 環 土 師器	口 13.0 高 4.1 大 13.2	体部はやや厚く、底部は厚く丸底。口縁部は内外面に明瞭な稜線を持たずに内傾する。外面体部に雑な塗での後、底部多方方向彫削り。口縁部外面と内面全面に横撫で。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒磁砂少量。軟質。	床直 ほぼ全周 [1]
20 環 土 師器	高 残 4.2	底部は厚く丸底。底面は丸味が弱く、体部は開き気味。外面体部雑な塗での後、底部に隅の内側の彫削り、内面体部に彫削り。口縁部内外面横撫で。内面に細かい割線が多い。口縁部外面と内面全面に赤彩。	7.5YR7/4 にぶい橙色	緻密で透明砂・白磁粒少量。やや硬質。	床 上 6cm 底全周 体一部 [13]
21 高 環 土 師器	口 13.8 脚 10.7 高 8.0 大 14.8	胴部上半は弱く開き、裾部との境に明瞭な稜線を持つ。環部は口縁部内外面の稜線と段が段状。外面は環部底での後、坏底～脚柱部彫削り。坏内面全面と口縁部と脚柱部は横撫で。脚柱部内面は塗仕上げ。口縁部外面と坏内面は塗仕上げ。	5YR8/4 淡黄色	緻密で混和材は目立たない。やや軟質。	床直 口 3/4周 他はほぼ 全周 [2]
22 高 環 土 師器	口 14.0 底 10.0 高 7.4	胴部上半はゆるく開き、裾部との境は不明瞭。環部は口縁部内外面の稜線と段が明瞭。外面は坏底～脚柱部彫削り。坏内面全面と口縁部と脚柱部は横撫で。脚柱部内面は彫削り。坏内面と外面口縁部に塗仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で混和材は目立たない。軟質。黒灰あり。	床直 口 2/3周 他はほぼ 全周 [6]
23 高 環 土 師器	口 16.2 脚 復10.2 高 9.1	やや厚く、胴部は内外面に段を持って開く。環部は外面に弱い段を持って立ち、口縁部は大きく反折する。口縁部・脚柱部外面・坏内面に塗での後、坏底～脚柱部外面彫削り。脚柱部内面は彫削り。坏内面～口縁部外面は塗仕上げ。	2.5YR8/3 淡黄色	緻密で混和材は目立たない。軟質。胴内に黒灰あり	床直 脚～裾1/3周 坏全周 [4]



第34図 八幡根遺跡 SI-13(2) 遺物

番号種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土成	出土状況 保存状況 注記
24 高坏 土師器	□ 脚 高 16.7 10.0 8.2	脚部は内外面に明瞭な線をなして三段に開く。坏底部は内外面がゆるく立ち上がり、口縁部は弱い線を有して外反する。外面は坏底～脚柱部に施釉り。口縁部外面と坏内面は施で、脚部は裾部に横施での後、内面施釉り。	10YR8/2 灰白色	緻密で黒磁砂ごく少量。軟質。脚内面と坏外面に黒染あり。15%。	床直 脚 4/8周 他は全周 「8」
25 高坏 土師器	□ 脚 高 15.9 10.0 8.2	脚部は内外面に明瞭な線をなして三段に開く。坏底部は内外面がゆるく立ち上がり、口縁部は弱い線を有して外反する。外面は坏底～脚柱部に施釉り。口縁部外面と坏内面は施で、脚部は裾部に横施での後、内面施釉り。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で黒磁砂ごく少量。軟質。脚内面に黒染あり。	床直 脚 3/4周 他は全周 「9」
26 高坏 土師器	□ 脚 高 14.8 9.1 10.8	かなり厚手。脚部は外面に段、内面に線を明瞭に持て開く。坏部外面の段が明瞭。外面は坏底と脚部に施釉り。口縁部と裾部の内外面は横施で、脚柱内面は横施施り後、縦施施り。坏部内面全面と外面口縁部は施仕上げ。坏部内面は使用により摩滅。	5YR8/3 淡黄色	緻密で黒磁砂ごく少量。軟質。	床直 ほぼ全周 「2」
27 高坏 土師器	□ 底 高 17.6 11.2 8.5	脚部の内外面と坏部外面は明瞭な内面に施施を持って開く。坏部は閉き気味に立ち上がり、口縁部は内面に段を持たずに外反し、口唇部は丸い。坏部内面に施仕上げ。全体に歪んでいる。坏底部外面と脚部内外面に施釉りした後、口縁部内外面、坏部内面、裾部内外面横施で、脚部内面施釉り。	7.5YR7/3 にぶい黄色	緻密で黒磁砂少量。軟質。	床直 ほぼ全周 「6」
28 高坏 土師器	□ 16.4	坏部は内外面に明瞭な線を有して立ち、口縁部は外反する。脚部は坏底から明瞭な線を有して立ち、口縁部は内面に段を持たずに外反し、口唇部内外面に横施で、下部は施釉り。口縁部内外面は横施で、外面口縁部は施仕上げがわずかに残るの、もとは内面に施仕上げの可能性あり。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で黒磁砂ごく少量。軟質。脚内面に黒染あり。15%。	床直 口 1/18欠損。 脚以下欠損 「6」
29 鉢 土師器	□ 高 大 11.6 8.0 13.6	丸底で、脚部が弱く張り、口縁部は外面に不明瞭だが幅の広い段を持つ。底～脚部外面は横施施りの可能性があるが、施滅して不詳。口縁部内外面横施で、体部内面は横施施で。外周口縁部に施仕上げがわずかに残るの、もとは内面に施仕上げの可能性あり。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で薄灰白は目立たない。軟質。	床直 全面 「10」
30 鉢 土師器	□ 高 大 8.7 7.6 12.1	丸底でやや不安定。口縁部外面の段と内面の線は明瞭。口縁部内外面横施で、内面体部横施で。体部上半横施不明。内面全面と外面中位以上に施仕上げ。中位以下は摩滅して調査不明。	7.5YR7/4 にぶい黄色	やや緻密で赤・白砂と黒・透明磁砂やや多量。 やや硬質。	床直 ほぼ全周 「11」
31 大形鉢 土師器	□ 底 高 23.2 7.4 10.2	厚く重い。平底で、底部周辺はわずかに突出気味。外面は施で後、口縁部横施で、下半部は施釉り。口縁部内外面は横施で。体部内面は丁寧な施で。底部外面は木葉度が1回付く。カシワの可能性があるので、3次検が不明瞭で確定できない。素灰面圧痕かもしれない。	5YR6/6 橙色	粗い。白・灰色砂多量、黒・透明磁砂やや多量。 硬質。下半部を加熱した可能性あり。	底上32cm 口全周 「22」
32 甕 土師器	□ 18.0	脚部は厚手。口縁部は輪付近で外反が強い。外面脚部は施釉り後、施で。内面脚部施釉り後、施で。口縁部内外面横施で。外面脚部中位にスス付着。	10YR7/4 にぶい黄褐色	粗い。灰色磁砂・砂多量、白磁粒やや多量、赤粒少量。 やや硬質。	底上16cm 口1/2周 胴3/4周 「甕No4左袖」
33 甕 土師器	□ 径21.2	やや厚手。脚部と口縁部の境の外面にごく弱い段あり。口縁部は少し上へつまみ上げる。脚部外面は施釉り、内面は施で、口縁部内外面横施で。	2.5YR6/6 橙色	粗い。白・灰色砂多量。硬質。	底上14cm 口1/2周 胴上半2/3周 「甕No1右袖」
34 甕 土師器	□ 20.4 28.5 34.0	薄く軽い。脚部下半部はゆるやかな丸味を持って立ち上がり、上半はほぼまっすぐ立つ。脚部外面は施で後、中位に縦施施り、下位は部分的に縦施施り。内面は横施施で。外面脚部下位が加熱赤化し、中位にスス付着。	10YR7/3 にぶい黄褐色	粗い。赤・灰色の砂・砂と白磁・細粒が多量。硬質。	甕左袖付 胴上3周 「甕No4左袖」
35 甕 土師器	□ 底 高 20.4 23.4	厚く平底で、脚部はゆるやかな丸味を持ち、脚部は段や線を有して外反する。外周脚部はやや丁寧な施で、下半部施釉り、縦施施り。外面は一方施釉り。内面脚部施で、内外面口縁部横施で。	5YR5/4 にぶい赤褐色	粗い。半透明・赤・白砂・白磁・細粒多量。 やや硬質。加熱の有無は不明。	甕左袖付 胴上半1/2周 欠損。他はほぼ全周 「18」
36 甕 土師器	□ 径25.8 高 28.5 径12.5	薄く、脚部に段を持たずに口縁部はゆるく外反し、端部を丸くおさめる。外周胴下半部を下へ施施り後に、上半を上方向、下を斜めの施施り。内面および底面に丁寧な施で後に、内面下端を横施施り。口縁部内外面横施で。	10YR7/4 にぶい黄褐色 黒染あり	粗い。赤粒・灰色砂・白磁粒多量。 黒・透明磁砂少量。 硬質。	床直 口1/4周 「10」

第38表 SI-13 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	杯	盤・皿	蓋	高杯	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甌	大甌	埴輪土器	その他
土口縁部	165			32	5			2	38				
器底部	有			脚柱12	有	1			有			13	
須口縁部				26	1				5	4			
器底部													

円筒輪軸タガ小片1点と古墳時代前期の土師器少量混入(二重口縁壺の口縁部1片も混入)。平安時代の土師器少量混入。

S1-14A (第35~39図、写真図版6~7・27~30・53~55)

本建物跡は、調査区の北東部にあり、台地上の平坦面に位置する。北東にSI-13が近接している。確実に重複関係のある遺構はない。最初は2軒が重複していると考えて一方を「SI-19」と名付けたが、最終的には「SI-19」は欠番にしてSI-14Aに統合した。また、SI-14Aの竈とは別に、埋土の中に竈状の部分が認められたが、確かに竈穴建物跡であるかどうかは疑わしい(SI-14Bの項を参照)。

平面形は、建物跡東側の範囲が攪乱のためはっきりしない。確認している部分では、東西5.7m以上、南北6.6mであり、平面隅丸方形を呈していると思われる。主軸方向はMN-34°-Eを示す。壁は確認面から西壁で36cm程、南壁で19~28cm程、北壁で22cm程遺存しており、傾きは西壁で75°程、南壁で65~80°程、北壁で55°程である。周溝は検出されなかった。床面は西壁際と南北壁際が高く、東側が低くなっており、拡張している可能性がある。その比高差は西壁際で26cm、南壁際で16cmである。柱穴は6本が検出された(P1~P6)。P1は長径76cm、短径54cmの平面楕円形で、深さ70cm、P2は径56cm、深さ36cm、P3は径59cm、深さ38cm、P4は長径72cm、短径58cmの楕円形で、深さ70cm、P5は径47cm、深さ58cm、P6は径38cm、深さ25cmである。P1、P4は断面円筒状に、P2は断面錐錐状に掘られている。

竈は、北壁ほぼ中央に位置すると思われる。残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。竈の断面図上層に天井部の構架材と思われる粘土が堆積していたが、形はとどめていない。掘形は、北壁を幅73cm、奥行き68cmの平面舟首形に掘り込んでおり、さらに、床面と北壁を長径125cm、短径50cmの不整な楕円形に掘り窪めている。その深さは最深14cmであり、底面は深い皿状である。その煙道奥の壁はB'の南82cmの所から27°程の傾きで立ち上がっている。両袖の付け根にあたる箇所から、甕が1個体ずつ倒立した形で出土したが、袖の芯材として使用されたものと思われる。また、燃焼部から煙道にかけて、焼土が最深20cmの厚さで認められた。長期間にわたり使用されていたものであろう。

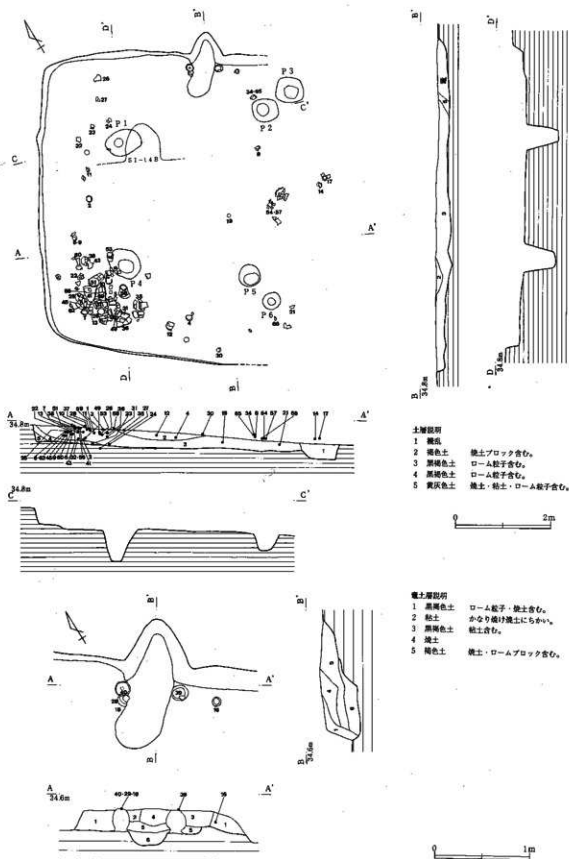
埋土は5層に分層される。大半は、ローム粒子を含む黒褐色土である。攪乱を除く4層は、いずれもレンズ状堆積をしており、自然堆積の可能性がある。

出土遺物 SI-14Aからは遺物が大量に出土した。西コーナーに積み重なるように廃棄されている。

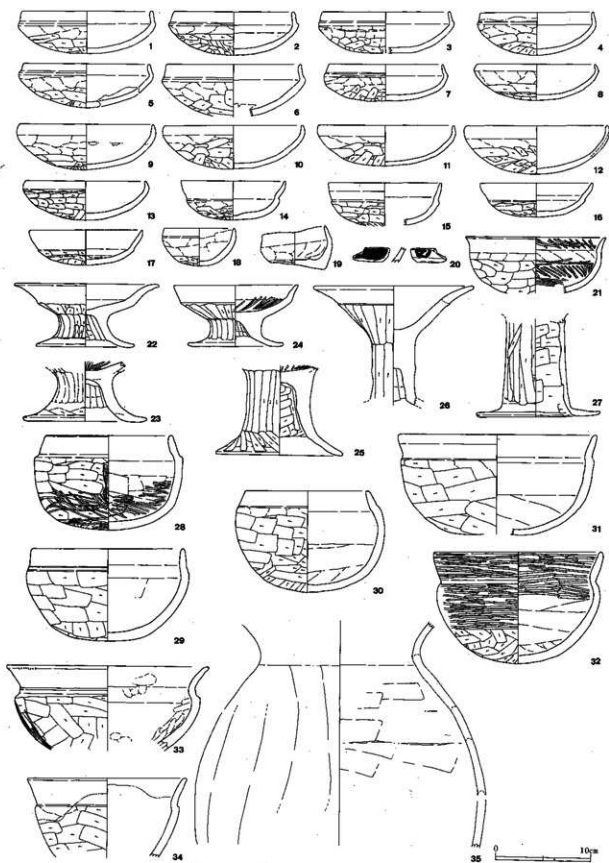
食器類の胎土は1a類が圧倒的に多い。漆仕上げの坏類は小さめのものが多い。口縁部が外傾後内彎する14~17、内傾する8・13、身模倣形の4・7があり、小形の手控ね品(19)もある。15は内彎口縁環としては古い特徴である深いものだが、「SI-14?」という注記なので、間違いないこの建物跡から出たとはいえない。

漆を使わない坏では大きめのものが多く、蓋模倣系の9・10・11・12と身模倣形の1・2・5・6がある。6は深く口縁が長い古い形だが、体部上位を削り残す点は新しい要素の可能性がある。

22・23・24は短脚高杯で、24は特に丁寧な作り。25・26・27は珍しく長脚で、25・27の白黄色胎土と27の漆仕上げはこの時期によく見られる特徴なのに対し、26は特異で、坏部が脚のような形である。胎土・色調も他の土器と異質である。



第35図 八幡根遺跡 SI-14A (1) 遺構



第36図 八幡根遺跡 SI-14A (2) 遺物

28と33は焼成前の亀裂部分に匏磨き補修を行う鉢。33は、SI-22Bの匏磨き補修を持つ鉢2点と調整技法が似る。18は小形土器としては薄くよいつくりで、手捏ね成形ではない。35は頸部が狭い(胴径の1/2に近い)器形なので、大形壺とみなしておく。貯蔵具だろう。63は土師器製作時の削りかすが焼成されたもの。胎土は坏・鉢類と共通する1a類である。径6~7cmの柱状底部の土器(おそらく坏類)をつくり、寛削りで九底に仕上げたものだろう。匏磨き補修のある土器28・33とともに、この遺跡付近で土師器を作っていたことを示している。64と65の土玉は、混和材が目立たない精選された土で、7世紀の土師器坏類の胎土と共通する。

21の碗形坏と66の勾玉形石製模造品は古墳時代中期後半、20の墨書土師器坏は平安時代の遺物が、それぞれ混入した品だろう。68の柄杓も平安時代の可能性もある。この他に平安時代の遺物は、灰釉陶器の瓶の胴部小破片などがあるが、いずれも小破片で量は少ない。

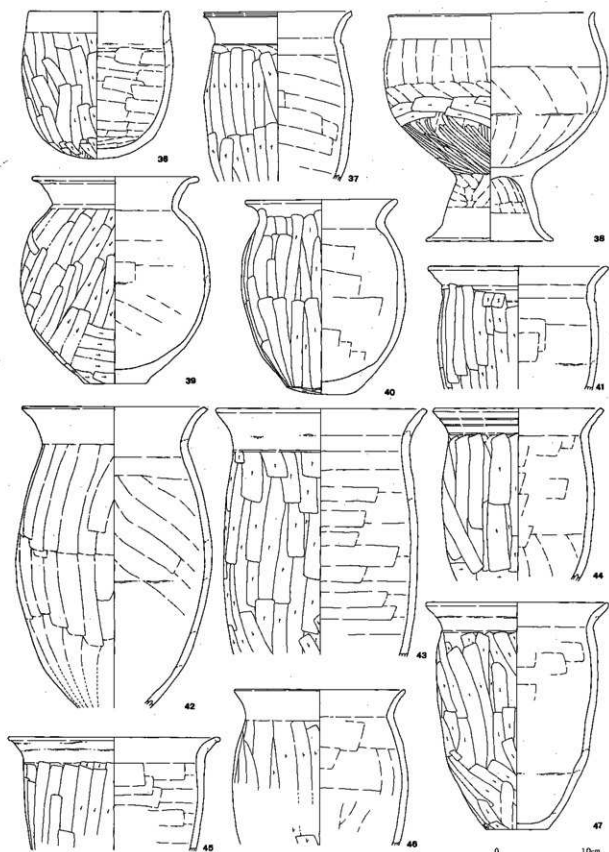
第39表 SI-14A出土遺物

番号 種類	量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口高 13.8 大 4.5 14.6	九底で底部は丸味を持ち、口縁部は内外面に縁線とゆるい段を持ち、わずかに内傾する。外面は雄な態での後、底部多方向、体部横方向廻り。口縁部外面~内全面は横線で。	2.5Y8/1 黄灰色	やや緻密で黒磁砂多量、白磁粒やや多量、軟質。1a類。	底上26cm 底~口15/12周 [16]上[22] が接合
2 坏 土師器	口高 12.8 大 13.8	やや厚く、九底で口縁部外面にゆるい段を持って内傾する。外面は体部に雄な態での後、底部一方方向の廻り、体部横削り。内面~口縁部外面は横線で。	2.5Y8/3 淡黄色 黒斑あり	やや粗い。黒磁砂・白磁粒多量。 やや軟質。1a類。	底上9cm 口1/4周 欠損[39]
3 坏 土師器	口高 4.4 大 14.4	薄く九底で、口縁部は内外面に縁と段を持って内傾する。外面は体部に雄な態での後、底部多方向、体部下位横方向廻り。内面全面と口縁部外面は横線で後、漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒・透明細砂やや多量。 やや軟質。1a類。	底上34cm 口1/5周 底~4/4周 [13]
4 坏 土師器	口高 12.0 大 4.6 12.5	九底で、口縁部は外面にゆるい段、内面に縁線を持ってほぼ直立。内面側縁あり。外面は雄な態での後、底部一方、体部横方向廻り。口縁部内外面~底部内面横線で、漆仕上げ。口縁部内面に凹みを補修した跡が見られる。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で黒磁砂やや少量、軟質。1a類。	底上25cm 口12/全周 [7]
5 坏 土師器	口高 13.4 大 4.7 14.3	九底で、口縁部は内外にゆるい段と洗い段を持って内傾する。外面は体部に雄な態での後、底部一方、体部横方向廻り。口縁部外面は横線で。底部外寄り部に3×4cmの孔が焼成後にあき、集の部位は全く割れていない。外面から叩いて底部穿孔している可能性がある。	2.5Y8/4 淡黄色	緻密で黒・透明細砂と白磁粒少量。 やや軟質。1a類。	底上19cm 口12/全周 [21]
6 坏 土師器	口高 14.2 大 5.5 15.2	九底で、体部上位はやや厚く、口縁部はゆるい明瞭な段と段を内外面に持ってまっすぐに内傾する。外面は体部に雄な態での後、底部一方、体部横方向の廻り。内面全面と口縁部外面は横線で。	10YR8/4 淡黄褐色	緻密で黒磁砂やや少量、透明細砂少量、やや硬質。1a類。	底上22cm 口15/12周 [36]
7 坏 土師器	口高 12.2 大 3.9 13.1	やや厚く九底で、口縁部外面にゆるい段、内面に明瞭な縁を持って内傾する。外面は雄な態での後、底部一方方向の廻り。内面全面と口縁部外面は横線で後、漆仕上げ。口縁部端部は全周が厚縁。	10YR7/3 にぶい黄褐色 黒斑有	やや緻密で黒磁砂やや多量。 やや軟質。1a類。	底上38cm 口13/全周 [30]
8 坏 土師器	口高 12.5 大 3.9 13.2	薄く軽い。九底で、口縁部は外面に弱い段を持って内傾する。外面は体部に雄な態での後、底部多方向廻り、体部中位横削り。内面全面と口縁部外面は横線で。外面上半と内面は漆仕上げ。	10YR5/2 灰黄褐色	やや粗い。黒・透明細砂多量。 やや軟質。1a類。	底上31cm 口12/全周 [8]
9 坏 土師器	口高 14.2 大 4.8 14.8	やや厚く九底で、口縁部は外面にごく弱い縁線を持って内傾する。外面は体部に雄な態での後、底部は一方、体部横方向廻り。口縁部内面直下に輪痕あり。内面全面と口縁部外面は横線で。	10YR8/4 淡黄褐色	やや緻密で、黒・透明細砂やや多量。 やや硬質。1a類。	底上23cm 7/12周 [35]
10 坏 土師器	口高 14.6 大 4.6 15.1	薄く九底で、口縁部は内外面に縁を持たずに、わずかに内傾味になる。外面は体部に雄な態での後、底部多方向、体部横方向の廻り。内面は横で、口縁部内外面は横線で。口縁部内面は指痕押圧。	2.5Y8/4 淡黄色	緻密で黒磁砂やや多量、白磁粒やや少量、軟質。1a類。	底上36cm 口1/3周 [27]
11 坏 土師器	口高 14.4 大 4.4	薄く九底で、口縁部は内外面に縁を持たずに直立する。外面は体部に雄な態での後、底部が一方、体部に横方向の廻り。内面全面~口縁部外面は横線で。	2.5Y6/1 黄灰色 黒斑あり	緻密で黒・透明細砂やや多量。1a類。	底上11cm 口12/3周 [38]
12 坏 土師器	口高 15.0 大 5.2 15.4	九底で、口縁部は内外面に縁を持たずに内傾する。外面は体部雄での後、底部一方、体部横方向廻り。口縁部内外面~底部内面は横線で。	2.5Y7/2 灰黄色	やや緻密で黒磁砂・白磁粒やや多量。 やや硬質。1a類。	底上26cm 口12/全周 [9]

第3章 発掘調査された遺構と遺物

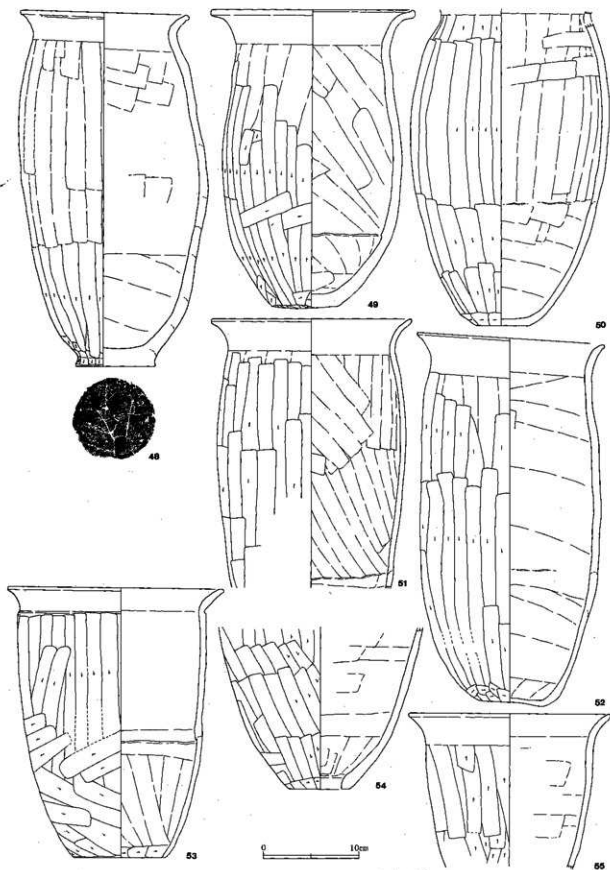
番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
13 土師器	口 12.6 高 4.2 底大 13.4	やや厚く丸底で、口縁部は外面に線を付けて短く内彎する。外面は底部中央のわずかに内彎する。内部全面→口縁部外面は横溝で、後、漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄褐色	やや緻密で黒・透明細砂多量。軟質。1a類。	底上24cm [19]
14 土師器	口 11.0 高 4.1	丸底で、底部中央はやや厚い。口縁部上半は内彎する。外面体部上端の段は明瞭。外面は体部に施された後、底面に多方向の彫刻あり。内面全面→口縁部外面は横溝で、後、体部中位外面まで漆仕上げ。	10YR7/6 明黄褐色 黒灰あり	緻密で黒細砂・白細粒やや多量。軟質。1a類。	底上42cm [1]・6欠損 [45]
15 土師器	口 11.9 高 残 4.5	やや厚い。胴部外面に明瞭な段を持ち、口縁部の上半は不明瞭に弱く内彎する。外面は後で後に、底部は同一方向、体部横方向の彫刻あり。内面全面と口縁部外面は横溝で、後、漆仕上げ。	10YR8/3 淡黄褐色	やや緻密で黒細砂多量。透明細砂少量。軟質。1a類。	不明 底中央欠損 [SI-14?]
16 土師器	口 11.8 高 3.6	薄く平底に近い丸底で、胴部外面に明瞭な段を持ち、口縁部上半が内彎する。外面は底部は厚城で彫刻不明、体部横方向の彫刻あり。口縁部外面は横溝で、口縁部内外面は漆仕上げ。内面底部は塗成して漆仕上げの者無不明。	2.5YR8/3 淡灰色	やや緻密で黒細砂多量。透明細砂・白細粒やや多量。軟質。1a類。	底上 7cm 全周 [No.1載]
17 土師器	口 径11.8 高 3.8	薄く丸底で、外面体部上端の段は明瞭。口縁部上半は内彎する。外面は底部一方の横、体部に縦方向の彫刻あり。内底面に横溝で、後、口縁部外面と内面全面に横溝で、漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄褐色	やや緻密で黒細砂・白細粒やや多量。やや軟質。1a類。	底上45cm 底全周 [1]・2周 [46]
18 小形土師器	口 径 7.4 大 径 7.9	薄く、小形土師器としては良いつくり。丸底で、胴部外面に浅い線を持つ。口縁部はわずかに内彎する。外面は体部施された後に底部多方向彫刻あり。口縁部内外面から体部内面は横溝で、内面の施ではやや疎。	7.5YR7/8 褐色	やや粗い。黒細砂・白細粒多量。透明細砂やや多量。軟質。1a類。	床直 1/4周 [No.5左載]
19 小形土師器	口 6.9~7.1 底 5.9~7.1 高 3.1~4.5	手捏成形。厚く平底で、体部はやや丸味を持ち、体部上縁に低く凹い線を持つ。口縁部はやや内彎。底部は片背が厚いが、内面全面は口縁部に対してそれほどひどく斜めではない。底部外面は施された後、体部内面は施された後、指頭残を残す。口縁部内外面は横溝で、内面全面と底部を漆く体部内面に漆仕上げ。	2.5YR8/2 灰白色	やや緻密で黒細砂やや多量。透明細砂少量。軟質。1a類。	底上14cm 全周 [41]
20 土師器		体部はますつぐにのびる。外面に磨き「田」あり。体部外面ロク口施で、内面磨き後、黒色処理。平安時代の遺物が混入。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒細砂・白細粒少量。やや硬質。	不明 破片 [SI-14]
21 土師器	口 16.0 高 残 6.2	やや厚く、体部上半はわずかに内彎し、口縁部は内面全面に明瞭な段を持つ。外面は厚城で、後、裏面。内面全面と口縁部内外面横溝で、後、裏面。古墳時代中期後半の遺物で、混入品か。	7.5YR6/6 褐色	やや粗い。灰色砂と白砂・細砂多量。硬質。	底上15cmと 破土中が混 入。体→口 1/4周 [No.1]と [フ土]
22 高坏土師器	口 15.3 高 10.4 底 6.7	坏部は厚く、彫刻りによる段を外面に持って開く。脚部は外面にごく凹い段、内面に線を持って開く。外面は横溝で、後、坏底面と脚柱部は彫刻り。脚部横溝で、坏内面は横溝で、脚内面は、脚部横溝で後に脚柱部横溝あり。	2.5Y7/2 灰黄色	緻密で黒・透明細砂・白細粒やや多量。やや硬質。1a類。	底上23cm 全周 [29]
23 高坏土師器	口 径13.2	脚部は少し尖り気味。坏部・脚柱部・脚部は線を持つたずゆるやかにつながる。外面は坏底面彫刻り。脚柱部は縦方向の彫刻り後、裏面、脚部横溝で後に線横溝で、坏部内面は放射状の彫刻り。脚柱部内面は横溝あり、脚部内面は横溝あり後、横溝。	10YR8/2 淡黄褐色	やや緻密で黒・透明細砂と白細粒やや多量。軟質。1a類。	床付近 周1/4周 脚全周 坏中央部残 [2]
24 高坏土師器	口 13.3 高 10.2 底 6.5	全体にシャープなつくりでやや厚い。外面坏中位および脚との境は段が明瞭。外面は坏部横溝で、坏部中央方向彫刻りし脚部横溝で、後に脚部横溝で、坏内面は横溝で、放射状彫刻り。口縁部内面一部に漆あり。	5YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で透明細砂少量。やや軟質。	床付近 周2/3周 脚→坏全周 [SI-19No.1]
25 高坏土師器	口 径 13.4	脚部はやや太い。坏部は粘土を上下二重に合わせて作る可能性がある。脚部に縦溝あり。脚部は横溝で後に斜め彫刻り。内面は脚柱部の上位に縦溝で、脚部横溝で後に、下位横溝あり。坏部内面に放射状彫刻り。	10YR7/3 にぶい黄褐色	やや粗い。黒・透明細砂やや多量。白細粒少量。やや硬質。1a類。	底上23cm 脚→坏全周 [23]
26 高坏土師器	口 17.0	やや厚く、坏部は脚のような形。口縁部横溝で下縁に明瞭な段を立す。外面坏底→脚部横溝で、下へ彫刻り。外面口縁部横溝で、坏部内面横溝で、後、坏中、内面脚部横溝で、後、脚柱部横溝あり。	5YR3/1 黒褐色 新部7YR8/6 褐色	粗い。白・灰色砂・白細粒・黒細砂やや多量。軟質。	底上22cm [1]・2周 脚全周 [SI-19No.4]
27 高坏土師器	口 径 13.0	脚柱部はあまり開かず、脚部は少し反る。薄いつくり。脚柱部内外面に彫刻りの後、坏部内外面に横溝で、外面全面と内面脚部外縁に漆仕上げ。	2.5YR8/2 淡灰色	緻密で黒・透明細砂・白細粒少量。やや軟質。1a類。	床付近 周1/2周 脚1/4周 [3]

番号 種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎 土成	出土状況 残存状況 注記
28 鉢 土師器	口 13.4 高 10.0 大 15.7	やや厚く丸底。口縁部はやや厚く内傾し、外面に明瞭な段、内面に弱い稜線あり。底部～体部外面は磨削り後、磨面。調整は裏面だけで、中～下に集積。口縁部内外面横溝で。成形・調整後に体部に長い亀裂が入った部分の内外面を集中的に磨削されて補修し、亀裂のないところには亀裂があまり見られない。図示の釉にもう1箇所、縦位の亀裂が生じ、外面縦溝部・内面粘土起り後、縦磨きで補修している。	25Y7/2 灰黄色 黒斑あり	緻密で黒・透明細砂や多量、白磁粒や少量。 やや軟質。1a類。	底上32cm 全周 [15]
29 鉢 土師器	口 16.2 高 9.8	やや厚く丸底で、頸部外面に浅い明瞭な段を2段持ち、内面は弱い段をなす。外面はおそらく底部一方、体部横方向の磨削り。体部上端だけ右方向へ割る可能性がある。口縁部内外面横溝で。体部内面は横溝で。全面磨削して調整が不明。	25Y8/3 淡黄色	緻密で黒・透明細砂や少量、白磁粒や少量、軟質。1a類。	床直 口上9面 体2/3周 [No.左箱]
30 鉢 土師器	口 12.8 高 15.8	厚く、口縁部の外面に明瞭な浅い段、内面に弱い稜線を持って内傾する。外面は体部上に緩な横溝を残し、底部一方の後、体部横方向の磨削り。内面全面と口縁部外面は横溝で。	10YR8/3 淡黄褐色 黒斑あり	やや緻密で黒・透明細砂の少量、白磁粒少量。 やや軟質。1a類。	底上27cm 2/3周 [5]
31 鉢 土師器	口 復21.0 高 10.5 大 復20.5	丸底でやや厚く、口縁部は外面に明瞭な段を持ち、内面は不明瞭な段を持って長く外反する。外面は底部一方、体部横方向の磨削り。口縁部内外面は横溝で。体部内面は横溝で。	25Y8/3 淡黄色 黒斑あり	緻密で黒磁砂、白磁粒少量。 やや硬質。1a類。	底上20cm 口上12周 体1/2周 [5]
32 鉢 土師器	口 17.8 高 11.8 大 17.3	丸底で、頸部は外面に明瞭な段を持ち、内面はS字状にゆるくカーブする。外面は底部一方、胴部中央方向の磨削り。内面は底部多方向、胴部横方向の磨削で。外面底部中央～内面頸部は口縁部も含めて横溝でのち磨削。	10YR8/4 淡黄褐色	緻密で黒磁砂・白磁粒・透明細砂や多量。 やや軟質。1a類。	底上9cm 口上5周 体1/3周 [40]
33 鉢 土師器	口 復21.4	体部はやや厚く、頸部外面は2段をなして狭まったものに明瞭に口縁が外反し、内面は二条のやや明瞭な段をなして屈曲する。体部外面は多方向磨削り。口縁部内外面～体部内面は横溝で。口縁部内面と体部内面下部に指環状あり。胴部が削り足りないために頸部が1段でなく2段になってしまった可能性あり。全体として調整の最終段階で中央半端で、緩な仕上げ。縦方向の亀裂が境域部に胴部に一入った部分を外には磨削、内面をやや緩な横溝で補修している。	25Y8/3 淡黄色 黒斑あり	やや緻密で黒・透明細砂や白磁粒や多量。 やや軟質。1a類。	埋土中 口上6周 体1/4周 [ク土]
34 鉢 土師器	口 復16.8	体部は厚く、頸部外面に明瞭な段を持ち、内面は緩を持たずS字状にカーブする。体部外面は緩な段の後、磨削り。口縁部内外面～体部内面は横溝で。口縁部内面は緩な仕上げ。体部内面には横溝が見られない。	10YR5/1 褐灰色	やや緻密で黒・透明細砂や白磁粒。 やや軟質。1a類。	底上34cm 口上1/4周
35 大形壙 土師器	頸 復16.9 大 30.6	胴部がやや楕円に長い。頸部内外面は緩を持たない。口縁部内外面は横溝で。胴部外面はおそらく斜め磨削りの後に、斜め横溝で。胴部内面は横溝で。横溝は横溝で。横溝は横溝で。	10YR7/3 ぶい、黄褐色 黒斑あり	粗い。灰色砂・赤粒と黒・透明細砂や多量。 やや軟質。	底上37cm 頸上半2/3周 胴1/4周 [10]
36 小形壙 土師器	口 15.0 高 15.6 大 16.0	丸底だが、底部がやや厚いので置くとき直立する。ただし安定は悪い。口縁部は外反しない。内面は口縁部横溝の後、胴部・底部内面は緩な横溝で。外面は底部多方向、体部縦方向の磨削り。口縁部内外面横溝で。	25Y8/4 淡黄色 黒斑あり	やや緻密で黒磁砂・白磁粒少量、透明細砂少量、軟質。1a類。	底上26cm 口上12周 頸9/5周 [12]
37 小形壙 土師器	口 15.6 大 20.4	頸部は外面に明瞭な段、内面に弱い稜線を持つ。口縁部はわずかに下へ拡張して明瞭な段面をなし、浅いが明瞭な凹線を一糸入れる。外面は緩な横溝の後、胴上半は下方へ、胴下半は上方へ磨削り。内面は胴部横溝で。口縁部内外面は横溝で。	5YR7/4 ぶい、褐色 黒斑あり	粗い。白色の粗～細粒と灰・白砂少量。黒・透明細砂や多量。 硬質。胴下位は加熱率化。	底上31cm 胴下位下位 [ク土]
38 脚付壙 土師器	口 21.8 頸 13.5 高 24.3	口縁と脚の外反は弱く、明瞭な段を内外面に持たない。脚部を別に作って胴部に接合したのち、胴部外面下平と脚部内面を調整する。脚外面は緩な段で、脚内面は横溝で。後、脚部外面を横溝で。胴部は外面横溝および斜め横溝で、胴部を接合し、下位に黒の裏面を磨き出すようなやや丸磨きと、中に強い横溝で、光沢を出す。胴部内面は下位に斜め横溝で、上位～口縁部外面に横溝で。	25Y8/3 淡黄色	粗い。灰・白・赤の内面に砂を多量。黒・透明細砂・赤粒をやや多量。全周磨削り。 被熱度低。	底上33cm 口上頸上半 2/3周 胴下半～脚 全周 [30]
39 壙 土師器	口 17.6 底 6.5 高 22.0	薄く平底。胴部内外面にゆるい稜線を持って口縁部に「コ」の字に外反する。外面は口縁部横溝の後、底部には一方へ磨削り。口縁部内外面は胴部調整後に横溝で。内面胴部横溝で。	5YR7/6 褐色 黒斑あり	やや粗い。白・白磁粒や多量。黒・透明細砂若干。 やや軟質。	床直 口全周 頸上半3/4周 下半～底1/2周
40 壙 土師器	口 16.2 高 20.4 大 17.2	底部は厚く円盤状で不安定。口縁部～頸部は全体に歪んでいる。外面は口縁部横溝の後、体部上半を上下へ下へ磨削り。底面は一方へ磨削り。内面横溝横溝で。口縁部に横溝で。	10YR7/3 ぶい、黄褐色	粗い。白・灰色砂多量。黒・透明細砂や白磁粒や多量。硬質。	床直 口上全周 [No.4埋]
41 壙 土師器	口 19.0 大 17.1	頸部外面にゆるい段を2箇所持ち、対応する内面にそれぞれ弱い稜線を持つ。口縁部は丸く仕上げられる。内面胴部横溝で。口縁部内外面を横溝で。外面胴部を場所により頸部中央または上位まで磨削り。口縁部～頸部内外面にコゲが薄く付着。	7.5YR7/6 褐色	粗い。灰色砂・赤と白・赤砂多量。黒・透明細砂や多量。硬質。	底上32cm 上半部全周 [34]



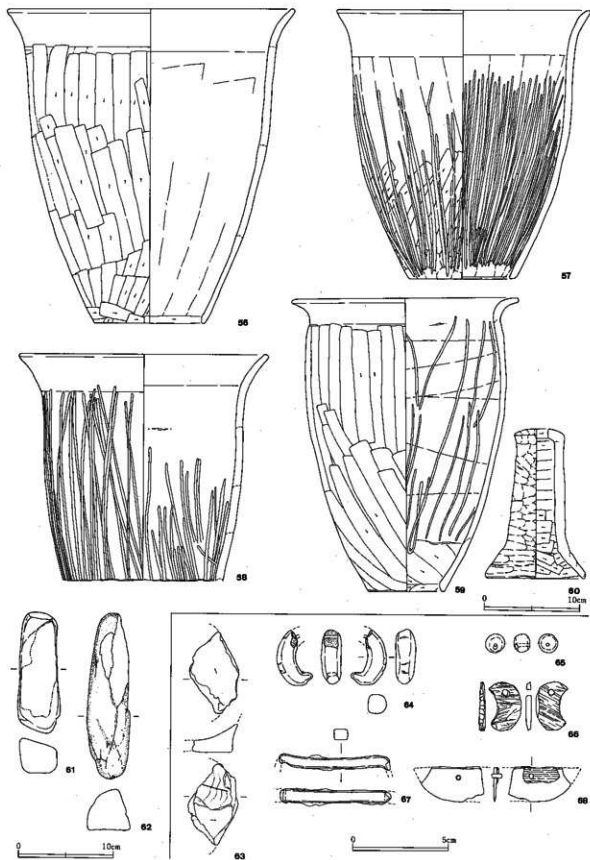
第37図 八横根遺跡 SI-14A (3) 遺物

番号 種類	法 量 (m)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
42 美土師器	口大 19.5 底大 20.9	やや深く、頸部内外面に段や段を持たないでゆるく外反する。口縁部は明瞭な平坦面であらゆる面に窪み気味。胴部外面はおそらく下から上へ差削りの後に、縦線で、胴部内面は丁寧な施施で、口縁部内外面は横線で、胴中位ス付着。	10YR7/4 にぶい黄褐色	粗い。赤、灰色の礫と透明細砂と白砂・細粒がやや多量。やや硬質。胴下位は加熱赤化。	壙土中 口11/2間穴 胴下位5/6 馬久根 「フク土」
43 美土師器	口大 復24.4 底大 復20.5	頸部は外面に倒れ縁を持ち、内面はゆるやかに外反する。胴部外面は胴部を上へ差削りの後、胴下位を下へ差削り。内面は横線で、口縁部内外面は横線で、胴部外面にス付着。	10YR7/3 にぶい黄褐色	粗い。灰色の礫・砂多量、黒・透明細砂と白砂・細粒がやや多量。やや硬質。胴下位は加熱赤化。	底上20cmと 33cmの接合 胴1/2間 口11/3間 「31」と「51」 が接合
44 美土師器	口大 18.0	頸部内外面に明瞭な段を持って口縁部が外傾する。外面頸部と口縁部に横位の凹線三条、外面は口縁部横線で、胴部無筋り。内面は胴部下位段の後、中位以上横線で、口縁部内外面は横線で。	10YR7/4 にぶい黄褐色	粗い。赤、灰色の礫と灰色砂多量、白・透明砂、黒・透明細砂と白砂・細粒がやや多量。やや硬質。胴下位は加熱赤化。	壙土中 口11/5間 胴中位以上 ほぼ全周
45 美土師器	口大 復22.3	頸部外面に浅いが明瞭な段を持ち、内面は段を持たずにゆるく外反する。口縁部外面は外面へ丸めるように肥厚させる。胴部外面に横線で、外面に差削りの後、口縁部内外面に横線で、口縁部外面に輪郭より張り。	10YR7/6 浅黄褐色 黒底あり	粗い。灰色の礫・砂と赤褐色・粒が多量、黒・透明細砂と白砂・細粒がやや多量。硬質。	底上15cm 胴上半・口 11/2間 「No49フク 土」
46 美土師器	口大 18.0	頸部は外面でほとんど段をなさず、内外面に倒れ縁を持つ。口縁部は浅い。胴部外面は差削り、内面は横線で、口縁部内外面は横線で。	5YR6/3 明赤褐色	粗い。灰色の礫と灰色砂多量、白・透明砂と白粒・細粒がやや多量。やや硬質。胴中位は加熱赤化。	壙土中 口11/9間 胴1/6間
47 美土師器	口底 19.2 底面 6.4 高 24.1	薄く平底。外面は口縁部横線で、胴部上半を上へ、下半を下へ差削り。底面一方内差削り。口縁部内外面横線で、内面胴部横方向の施施で。	10YR7/4 にぶい黄褐色	粗い。白粒・細粒と灰色砂多量、黒・透明砂がやや多量。やや硬質。	壙底1/2間穴 ほぼ全周 「壙」
48 美土師器	口底 18.1 底面 8.2 高 38.0 底大 19.5	底面は厚い粘土板。頸部内外面に段や段を持たずに外反する。口縁部は外へ巻くように成形。差部外面は木葉状の後に少し差削り。外面は底面付近を下へ差削りの後、胴部下位以下を上へ差削りしてから中位以上を上へ差削り、口縁部横線で、胴部内面は横線で、口縁部外面にス付着。	2.5Y7/3 浅黄褐色 黒底あり	粗い。赤、灰色の礫・砂多量、黒・透明細砂と白砂・細粒がやや多量。やや硬質。	壙土中 口11/3間 胴一底1/2 「31」 「50」
49 美土師器	口底 21.5 底面 7.0 高 32.8 底大 15.9	底面は厚く、口縁部はやや薄い。口唇部は外面に丸味を持ち、内面は明瞭に上面へ肥厚する。外面頸部は、上位を下へ差削り後、中位を下へ、下位を上へ、下層を斜位に差削りし、底面をほぼ一方内差削り。胴部内面は横線で、口縁部内外面は横線で。	7.5YR7/4 にぶい橙褐色	粗い。赤、灰色の礫と砂多量、黒・透明細砂と白粒・細粒がやや多量。硬質。加熱赤は認められない。	底上26cm 口11/6間 胴一底ほぼ 全周 「50」
50 美土師器	底大 5.4	やや厚い。外面は胴部縦差削り後に口縁部横線で、胴部下層斜方向差削り。底面一方内差削り。外面胴部は途中で削りの向きが変わるので土器を上へ倒立させる可能性がある。胴部内面横線で、口縁部横線で。	10YR7/4 にぶい黄褐色	非常に粗い。赤、白、灰色の礫・砂多量、黒・透明細砂と白砂・細粒がやや多量。やや硬質。下位は加熱赤化。	壙土中 胴1/2間 胴1/6間 「フク土」
51 美土師器	口大 21.9	薄く、頸部は内外面に段や段を持たずになだらかに外反する。外面口縁部は横線で、胴部は上削り後に縦線の後、下へ差削り。内面斜め方向の施施の後、口縁部横線で。	10YR7/3 にぶい黄褐色	粗い。赤、灰色の礫多量、黒・透明細砂と白細粒がやや多量。やや硬質。胴下位はおそらく加熱赤化。	底上25cm 胴一底1/3間 周「26」
52 美土師器	口底 19.9 底面 6.9 高 38.8	やや深く、胴部下端の角を調整時に削り落としている。頸部内外面に段や段を持たず、ゆるやかに外反する。胴部外面は上半部横線で、下へ差削り、下半部を下へ差削り、胴下層斜方向差削り。底面一方内差削りで少し窪む。口縁部内外面は横線で、内面胴部横線で。	10YR7/4 にぶい橙褐色 黒底あり	粗い。灰色の礫・砂多量、白砂・細粒・黒・透明細砂がやや多量。やや硬質。胴下位は加熱赤化。	壙土中 口11/12間 胴1/6間 底面高 「フク土」
53 美土師器	口底 28.8 底面 9.8 高 28.8 底大 9.0	薄く、胴部下半の隅がやや強い。胴部外面に段を持ち、内面は強く反る。胴部外面は上位・下位・中位の順に差削り、胴部内面下半は横線で、上半は丁寧な横線で。底面穿孔後に、内面下層を差削り。口縁部内外面は横線で。底面は平坦で、横でか?	2.5Y8/3 灰黄色 黒底あり	やや緻密で黒・透明細砂がやや多量。軟質。1a。	底上28cm 口11/3間 胴下全周 「34」
54 美土師器	底大 4.9	底面は厚く、平坦面を持ち、おそらく穿孔したものでなく成形時から孔をつくる。胴部は薄い。底面に施施の後、外面を斜め差削り、内面を横線でし、孔部内面を横線で。	7.5YR6/6 橙褐色 黒底あり	粗い。赤、灰色の礫・砂。黒質。	壙土中 底面全周 胴1/3間 「フク土」



第38図 八幡根遺跡 SI-14A (4) 遺物

番号 種類	号 種類	法量 (cm)	特 徴	色調	胎土 土成	出土状況 残存状況 注記
55	瓦 土師器	口 21.4	胴部は内外面ともに壁を持たないでゆるく外反する。口縁部は丸い。胴部内面直線で、外面直線の後、口縁部横断。	10YR8/3 淡黄褐色 黒灰あり	粗い、灰・白砂多量、透明・黒細砂と白砂やや多量。軟質。	底上27cm 胴上半一 口 1/3周 [43]
56	瓦 土師器	口 30.6 底 11.8 高 33.3	胴部外面直線にごく弱い後縁を持って口縁部は外反する。孔縁部はやや丸味を持つ。外面は口縁部横断の後、胴部直立をへ、中位を上へ、下位を下へ流回り。内面は丁寧な縦線で、口縁部横断で、胴部下縁横断削り。孔縁部はおそらく兼で、内外面にスス付着。	10YR8/4 淡黄褐色 黒灰あり	粗い、灰色内裏・砂多量、白砂・細砂と透明細砂や多量。硬質。	底上24cm 口1/3周 上半部2/3 他は全周 「フク土4」
57	瓦 土師器	口 27.0 底 11.2 高 28.5	胴部内外面に壁を持たずにゆるく外反する。外面胴部は下位に横線で、上・中位に縦線の後、下半部斜め流削りし、全体を縦線書き。底面と内面下縁は内周方向直削り。内面胴部縦線で、口縁部内外面横断。	10YR8/4 淡黄褐色 黒灰あり	粗い、灰色内裏・砂多量、白砂・黒細砂・白細砂や多量。やや軟質。	底上27cm 口1/3周 胴1/3周 「フク土4」
58	瓦 土師器	口 26.4 高 残24.0	胴部は直立気味に立ち上がり、胴部は内面にごく弱い後縁を持ち、外面はゆるく外反する。胴部外面はおそらく縦断削りの後に密な流削りし、胴部内面は丁寧な横断で、縦の流削り。口縁部内外面は横断で、胴下部の粘土面が割って再使用している可能性あり。	10YR8/3 淡黄褐色	やや粗い、灰色赤多量、黒細砂と赤・白細砂や多量。やや軟質。	底上38cm 口1/3周 胴一全周 「11」
59	瓦 土師器	口 24.1 底 8.2-9.0 高 31.0 孔 6.8-7.5	胴部は外面に強い明瞭な段を持ち、外面は壁を持たずに外反する。底面は平直。内面は口縁部横断の後、胴部直削り。内面は胴部下位および孔部直削りの後に体部を横断で、口縁部を横断でした後に、胴部に非常に粗い流削り。	2.5Y8/3 淡黄色 黒灰あり	緻密で黒・透明細砂や多量。やや軟質。1a類。	底上29cm 口全周 胴一底5/6 周 [18]
60	土 土師器	上面 5.1 高 10.4 底 15.8	断面円形で、おそらく粘土円板の上に直立方向に積み上げながら内面を横方向に流削りすることをくりかえして成形。下縁外面に積み上げ底がある。脚下面面は横断で、成形後上面面から丸く切るとように型孔して中空部分を貫通させる。上面は無で。孔上面径1.7cm、下直径4.6cm。	7.5YR6/6 黄色	やや粗い、灰色砂と白細砂多量、透明・黒細砂や多量。硬質。全面被熱。	底上18cm 完形 [31]
61	瓦 土師器	長 4.5×3.7 幅 12.7 重 358g	断面隅丸方形の自然の河原石を使用。指示した面の一点鉄線の範囲に黒色のススが付着して、わずかに熱による赤化もみられる。	緑青で硬質の土紋 色	緻密で硬質の石英安山岩。	埋土中 ほぼ完形 「フク土」
62	瓦 土師器	長 17.5 径 4.5×4.3 重 450g	断面三角形気味の自然の河原石を使用。全面が熱を受けて赤化しているので、電の支柱などに使われた可能性もある。ある程度加熱されたから、指示した面の右側が剥離して、さらに熱を受けている。鉄線の痕跡は中央付近でやや弱くなっている。ここに壁をかけて瓦石に使った可能性あり。	緑青で硬質の土紋 色	緻密で硬質の石英安山岩。	底上13cm ほぼ完形 [49]
63	瓦 土師器	長 4.3 幅 2.6 厚 10.5 重 7.14g	木葉の上に柱状の土師器を作り、裏側で底を削った削片が焼成されたもの。柱状底部は径6-7cmで、木葉底の一部をまですり削り(下図)、次にさらに削り削って(上図)、この削片ができたと考えられる。図の左縁は、焼成前の軟らかいうちにちぎれている。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒・透明細砂や多量。軟質。1a類。	不明 焼成後の破損はない [S1-14]
64	瓦 土師器	長 2.9 幅 2.9 厚 0.11 重 4.0g	粘土板を削いた時に背の部分に少しと割れが生じている。後で調整。孔は焼成前に穿孔。孔を通る面が胴部が割れている。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で黒細砂ごく少量。軟質。1b類。	不明 上縁欠損 [S1-14]
65	瓦 土師器	径 1.0 厚 0.74g	手形丸底形。後で調整。焼成前に片面から穿孔。孔初径3.0mm、孔終径1.7mm。表面は縦断で、側面だけに少し残る。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で混和材ほとんどなし。軟質。	不明 完形 [S1-14]
66	瓦 土師器	長 2.6 幅 1.7 厚 0.3 重 2.19g	表面は一方の粗い研削。頂・背・尾節側面は表面面に直交する一方方向の粗い研削。腹節側面はおそらく鉄製刃部による切削痕のまま。孔は片面穿孔で径3.2mm、終径3.0mm。滑石。古墳時代中期の遺物が混入。	緑青で硬質の土紋 色	緻密で硬質の石英安山岩。	埋土中 ほぼ完形 [3]
67	瓦 土師器	長 5.9 幅 0.7 厚 0.6 重 残8.5g	両端はやや鈍角気味に削られている。断面方形。	緑青で硬質の土紋 色	埋土中 両先端欠損 「フク土」	
68	瓦 土師器	長 3.3 幅 1.8 厚 0.15 重 残 3.11g	片面だけに水質が遺存する。水質は図上端まで残るが背節部には見られない。また、図右側部まではおよばない可能性がある。径3mmの鉄製目釘が水に落ちるがその先端は欠失。反対面は目釘の跡部破面または顔部が見られる。しかし水質は現状では見られない。	緑青で硬質の土紋 色	埋土中 両先端欠損 [3]	



第39図 八幡根遺跡 SI-14A (5) 遺物

第40表 SI-14A 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

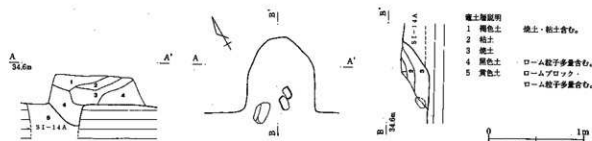
	坏	壺・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・甕	小形甕	長甕	甗	大甕	焼土器	その他
土師器	口縁部 615			11	35	5		19	165				
器	体部	有		脚柱11	有	有	有		有			66	
器	底部			裾8	2				41	27			脚付甕1
須恵器	口縁部												
器	体部												
器	底部												

土製支脚1点・土製勾玉と玉各1点・鉄釧1点・鉄鏡1点・銅物石2点・土師器刮りかす1点。脚付甕は同一個体。
古墳時代前期の土師器若干と、中期後半の土師器少量と滑石の勾玉1点が混入。
平安時代の土師器若干と須恵器少量(新吉原産の長甕胴部2、三和原産の長甕胴部1と坏体部2)混入。

SI-14B (第40図、写真図版7)

SI-14Aの埋土中にもう1基竈が記録されているので、参考としてここで記述しておくこととする。ただ、この竈については、付随する壁や柱穴、周溝、貯蔵穴などが確認できず、誤認の可能性もある。SI-14Aの建物跡北西部に位置し、SI-14AのP1の埋土中に確認されているところから、本当に竈ならば、SI-14Aより新しいと思われる。しかし、SI-14Aの埋土断面には、他の建物が重複している状況はみられないし、出土遺物にも時期差がみられないので、時期の違う建物が重複している確証は得られない。

残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。竈断面の上層に天井部の構築材と思われる粘土層を確認したが、流れてしまっていて原形をとどめていない。掘形は、北側の埋土を幅79cm、奥行き78cmの平面U字形に掘り込んでおり、B'の南55cmの所から38°程の傾きで煙道を立ち上げている。燃烧部上面から煙道にかけて、焼土が最深18cmの厚さで認められた。長期間使用したものかもしれない。また、左袖にあたる箇所から長大な石が出土している。



第40図 八幡根遺跡 SI-14B 遺構

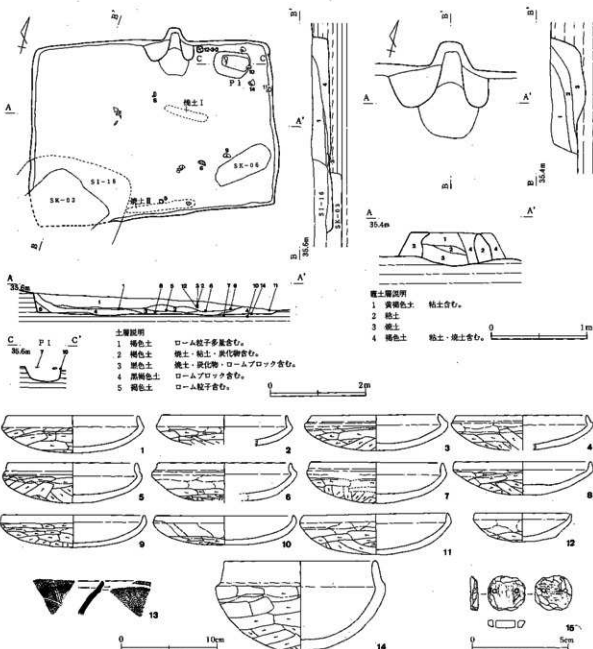
SI-15 (第41図、写真図版7・30・55)

本建物跡は、調査区の中央部北東寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-16より古く、SK-03より新しい。建物跡の南西コーナーでSK-03の北半分を切り、SI-16によって切られている。また、SK-06とも重複し、土層断面の記録はないので厳密には新旧関係は不明であるが、長方形土坑のSK-06のほうが新しい可能性がある。

平面形は、東西5.3m、南北3.8mの東西に長い方形を呈しており、主軸方向はMN-17'-Wを示す。壁は確認面から西壁で42cm程、北壁で31cm程遺存しているものの、東壁の遺存状況は悪く、わずかに8cm程しかない。傾きは西壁で79°程、北壁で81°程である。周溝は検出されなかった。床面は北壁際がわずかに高く、南壁際がわずかに低くなっており、その比高差は約10cmである。また、竈前に94×19cm、南壁際中央に146×18cmの焼土の広がりが見られた。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は北東コーナーに検出され、

東西77cm、南北54cmの平面隅丸方形を呈する。断面は皿状で、最深31cmであり、底面はわずかに内彎する程度で、ほぼ平坦である。

竈は、北壁中央やや東寄りに位置する。煙道天井部が崩落しているものの、両袖が残るなど本両室区のもの、残存状況は良いほうである。規模は、袖幅107cm、奥行き102cmである。袖は粘土と粘土を含む褐色土を用いて構築している。煙道は平面楕円形で、60°程の傾きで立ち上がっている。焚口、燃焼部から煙道にかけては焼土が最深25cmも認められ、長期間使用したものと思われる。掘形は、北壁を幅50cm、奥行き27cmにわたり掘り込んでいる。また、床面を直径64cmの円形に掘り窪めており、断面形は皿状で床面から最深で9cmである。



第41図 八幡根遺跡 SI-15 遺構・遺物

埴土は5層に分層される。概ね、床面直上はロームブロックを含む黒褐色土であり、上層はローム粒子を多量に含む褐色土である。

出土遺物 遺物の多くは、床面から少し浮いて出土した。土師器坏類は、底面中央がかなり平らな浅いものが多い。漆仕上げをしないものには身模倣の6と口縁部が直立する9がある。漆仕上げのものでは身模倣の1-5・7と口縁部直立の8・10・11がある。12は小ぶりの坏で、漆の有無は不明。体部外面はやや雑だが、口縁部や内面は普通の坏と同じく丁寧に調整する。14の鉢も漆仕上げで、混和材の少ない白色軟質胎土である。13の須恵器甕は古墳時代の関東在地産須恵器で、奈良～平安時代の益子窯製品に胎土がよく似ている。内面に笥記号がある。15の石製模造品は、古墳時代中期の遺物が混入したものと考えられる。

第41表 SI-15出土遺物

番号 器種 種類	注 量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 或 施 土	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 14.0 高 4.0 大 14.9	薄く丸底で、口縁部は内外面に明瞭な段と段を持って内傾する。外面は底部一方方向彫削り、体部横方向彫削り。内面全面と口縁部外面は横撫での後、漆仕上げ。	2.5YR6/6 褐色	織密で黒・透明細砂ごく少量。 軟質。1b類。	底上14cm 口-2周 体全面 [12]
2 坏 土師器	口 復13.4 大 復14.4	丸底で、内外面に段を持って内傾する。外面は段にはならない。内面～口縁部外面は横撫で。外面は体部撫での後、中位に横削り、底部多方向彫削り。内外面の残存部はすべて漆仕上げ。	10YR8/3 淡黄褐色	織密で黒細砂・白細砂ごく少量。 軟質。	底上18cm 体-口/2 周 [1]
3 坏 土師器	口 13.7 高 3.8 大 15.2	丸底で、口縁部は内外面にゆるい段と段を持って内傾する。外面は体部直立でゆるい中位横削り、底部一方方向の彫削り。口縁部内外面は横撫で後、漆仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色	織密で混和材はほとんど見られない軟質。1b類。	底上19cm ほぼ全面 [1]
4 坏 土師器	口 復13.9 高 3.7 大 復15.0	やや厚く、口縁部は外面部に明瞭な段と凹線、内面に明瞭な段を持って内傾する。外面は体部に撫での後、おおよね底部一方方向の後に中位横方向の彫削り。内面全面～口縁部外面は横撫で後漆仕上げ。	10YR6/3 に灰・黄褐色 黒灰あり	織密で透明細砂・白細砂ごく少量。 軟質。	不明 底-口/3 周 [1]
5 坏 土師器	口 13.9 高 4.3 大 14.7	底部はやや厚く、平底に近い丸底で、口縁部は内外面にゆるい段と段を持って内傾する。外面は体部横削り後、底部多方向彫削り。口縁部内外面から体部内面は横撫で後漆仕上げ。	10YR8/3 淡黄褐色	織密で混和材はほとんど見られない軟質。1b類。	底上 7cm 口-体/2、 体部全面 [14]
6 坏 土師器	口 14.0 高 4.0 大 15.3	丸底で、口縁部はゆるい段と内面に明瞭な段を持って内傾する。外面は体部撫での後、底部多方向、中位横方向彫削り。内面全面は横撫で。口縁部内外面は横撫で。内面に若干スチ付着。	10YR8/4 淡黄褐色	織密で混和材がほとんど見られない軟質。	底上 9cm 底-口/2 周 [8]
7 坏 土師器	口 復14.2 高 4.4 大 復14.9	底部は厚く、口縁部は外面に浅い沈線を伴う段、内面に弱目の段を持って内傾する。外面は体部撫での後に底部一方方向、体部横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面は横撫で後、漆仕上げ。	2.5Y7/2 灰青褐色 黒灰あり	織密で白細砂と黒・透明細砂少量。 軟質。1b類。	床付近 底全面 体-口/4 周 [2]
8 坏 土師器	口 14.4 高 3.5 大 14.8	底部は厚く丸底で、底部内面は平底凹状。口縁部は内外面に横線を持って短く内傾する。外面の横線は明瞭。外面は体部撫での後、底部は一方方向彫削り、体部横削り。内面全面と口縁部外面は横撫で後、漆仕上げ。	10YR8/4 淡黄褐色 黒灰あり	織密で白細砂ごく少量。軟質。1b類。	底上 5cm 口-口/4欠損 [11]
9 坏 土師器	口 復15.0 高 3.8 大 復15.8	丸底で、口縁部の縁は外面が明瞭で内面は弱い。口縁部外面はわずかに内傾する。外面は体部撫での後、底部多方向、体部は横方向の彫削り。口縁部外面と内面全面は横撫で。	2.5Y8/3 淡黄色	織密で透明細砂ごく少量。軟質。	底上11cm 口/3周 底/4周 [17]
10 坏 土師器	口 14.6 高 3.1 大 15.2	薄く丸底で、底面中央はかなり平たい。口縁部は内外面に明瞭な段を持つたず内傾する。外面は体部撫での後、底部多方向彫削り。内面全面と口縁部外面は横撫での後、漆仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色	織密で透明細砂ごく少量のみ。 軟質。1b類。	床付近 口-底/3 周 [4]
11 坏 土師器	口 復15.4 高 4.3 大 復16.0	丸底で、口縁部は内外面に弱い段を持って内傾する。外面は体部撫での後、中位を横方向、底部を多方向の彫削り。底部内面～口縁部内外面は横撫で後、漆仕上げ。	10YR8/3 淡黄褐色	織密で混和材はほとんどない。 軟質。1b類。	底上 9cm 底-口/4 周 [6]
12 坏 土師器	口 10.2 底 6.9 高 3.0	やや厚く、丸底だが底部と体部の境は明瞭。口縁部は外面に明瞭な段を持つ。内面はゆるく内傾する。外面は体部にやや雑な撫での後、底部彫削り。内面全面と口縁部外面は横撫で。内外面漆仕上げの可能性もある。	2.5Y7/2 灰黄色	織密で白細砂と透明細砂ごく少量。 軟質。1b類。	底上17cm 口/3周 底/4周 [13]
13 小形 須恵器	口 復25.0	口縁部がやや内傾し、外側に凹線一条。撚磨6本の工具で、器面に向かって右から左へ、放射状を回転軸とし、1周して、つながらず少し空いた部分に、最後に残り足した部分である。内面に焼成前の笥記号あり、凹線3本が1箇所に見える。	5B6/1 青灰色	やや粗い。白砂・粘・細砂やや多量。 硬質。	不明 口/18周 [18]

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
14 土師器	口 径16.2 底 径18.9	厚く丸底で、口縁部内面に細かい粒、外面に明確な段を持つ。外面は底部多方向の粒、体部前方の粒あり。体部内面は細で、口縁部内外面は横溝で、口縁部内外壁～体部内面は漆仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で黒粒砂ごく少量。軟質。	実直 C1/2 底 径15
15 有孔円板 石製模造品	径 18.7~ 20mm 厚 4.0mm 重量 2.60g	表裏ともに一方へ傾かい研磨痕。裏面は斜方向に細かい研磨。形割の剥離痕を表裏面に、切削痕を裏面付近に、それぞれ残す。孔は2孔とも同大でお径・終径ともに1.8mm。片面穿孔。		滑石	不詳 完形 [SI-15]

第42表 SI-15 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	鉢・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	瓶	大壺	焼土器	その他
土師器	口縁部 296				1	5	1			2	10		
土師器	体部	有		脚柱1						有			73
須恵器	底部				2	1			4				
須恵器	口縁部												
須恵器	体部							有					
須恵器	底部												

古墳時代前期の土師器少量、中期の石製模造品の有孔円板1点、平安時代の須恵器杯口縁部1片(三和窯産)と土師器少量混入。

S1-16 (第42図、写真図版7・31)

本建物跡は、調査区の中央部北東寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SK-02より古く、SI-15、SK-03より新しい。建物跡の南西コーナーをSK-02によって切られ、SI-15の南西コーナー、SK-03の全部を切っている。また、SI-17ともわずかに重複するが、新旧関係は不明である。

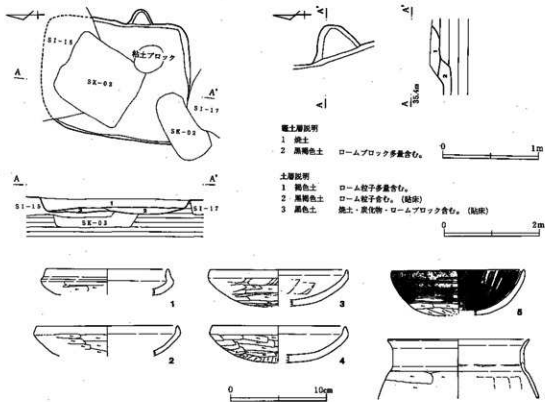
平面形は、東西2.6m、南北3.2mの南北に長い隅丸方形を呈しており、主軸方向はMN-3'-Eを示す。壁は確認面から南壁で18cm程、北壁で31cm程遺存しており、傾きは南壁で65~70°程、北壁で60~65°程である。床面は中央部がわずかに高く、南側がわずかに低くなっており、その比高差は約8cmである。建物跡南側に、ローム粒子を含む黒褐色土の貼床が、最深15cm程確認された。同様に北側に、焼土・炭化物・ロームブロックを含む黒色土の貼床が、最深11cm程、電前に、ロームブロックを多量に含む黄褐色土の貼床が、最深9cm程確認された。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。なお、竈の南方に長径66cm、短径55cm程の平面楕円形の粘土ブロックの広がり方が確認されている。土層断面図はないが、この粘土ブロックはSK-03を切った上に載っているようであり、第2層と同じくSK-03・SI-15との重複部分に貼床をした土の一部なのかもしれない。

竈は、東壁中央南寄りに位置する。残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。掘形は、床面より6cm程高い位置で東壁を幅56cm、奥行き32cmの平面舟首形に掘り込んでいる。その煙道は、A'の西22cmの所から30°の傾きでゆるやかに立ち上がっており、最深11cmの焼土が確認された。

埋土は1層で、ローム粒子を多量に含む褐色土である。

出土遺物 古墳時代の土師器坏類と、平安時代の小形甕1点がある。土師器坏のうち5は底部外面以外を焼きして赤く塗るもので、地元の土器とは異なる。この他の坏類は、普通に見られるもので、漆仕上げの1・3・4と無処理の2とがある。

6は平安時代の土師器甕である。平安時代の遺物は量が少ないので、混入品と判断した。ただし、SI-15とSI-16の古墳時代終末期の土師器は近い時期のもので、これらをすべてSI-15から流入したものと判断するのであれば、この建物が平安時代のものである可能性を全く否定することはできない。



第42図 八幡模遺跡 SI-16 遺構・遺物

第43表 SI-16出土遺物

番号 器種 種類	法 量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 復12.8 高 残 2.8 大 復14.0	やや厚く、口縁部内外面に段と後縁を持って内傾する。外面は体部横溝で後、体部横溝削り。内面全面と口縁部外面に横溝で。残存外面全面に漆仕上げ。内面は現状では漆が残っていない。	7.5YR7/6 褐色	緻密で混和材は目立たない。やや硬質。	埴土中 口一休上半 1/9周
2 坏 土師器	口 復15.0 大 復15.4	薄く、口縁部外面に明瞭な段を持ち、内面はゆるく内傾する。外面体部横溝削り。口縁部内外面と内面体部に横溝で。	5YR8/4 淡褐色 赤色土も筋状に混じる	緻密で黒黒砂少量。軟質。黒炭あり。	埴土中 口一休上半 1/7周
3 坏 土師器	口 復14.5 高 残 3.9 大 復14.9	やや厚く、口縁部は内外に弱い段を持って内傾する。外面は体部に段な溝での後、体部横溝削り。口縁部内外面に横溝で、内面体部に横溝で後、横溝で。外面上半と内面全面に漆仕上げ。	7.5YR7/6 褐色	緻密で黒・透明面砂と白細粒少量。やや軟質。1b項。	埴土中 底5/12周 口1/8周
4 坏 土師器	口 復14.1 高 残 4.2 大 復14.7	やや厚く丸底。口縁部は外面に明瞭な段、内面に弱い後縁を持って短く内傾する。内外面に漆仕上げ。外面底部一方の削り、体部横溝削り。内面全面と口縁部外面に横溝での後、漆仕上げ。	7.5YR6/3 におい褐色	緻密で黒黒砂少量。やや硬質。	埴土中 口一底1/4周
5 坏 土師器	口 復14.1 高 残 4.8	厚く丸底。内外面に段を持たない。外面溝での後に、底部一方の削り、体部横溝削り。内面全面と口縁部外面に横溝での後、放射状横溝削り。外面の上半部と内面全面に赤彩。	10YR7/4 におい黄褐色	緻密で白細粒少量。やや軟質。	埴土中 口一底1/5周
6 小形 土師器	口 復15.0	非常に厚く、頸部はゆるい段を持ってからコの字に外反している。胴部外面横溝削り。胴部内面横溝削り。口縁部内外面横溝で。外面胴部スス付着。平安時代の甕が混入。	7.5YR4/6 褐色	緻密で黒・透明細砂、白細粒少量。硬質。	埴土中 口一底1/3周 「フク土」

第44表 SI-16 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	壺・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甌	大甌	埴輪土器	その他
土	36					1		2					
器				脚柱2					有			12	
器								1					
甌													
壺													
器													
器													

古墳時代前期の土師器少量と、平安時代の須恵器杯口縁部1片(益子窯産の可能性が高い)と土師器少量混入。

S1-17 (第43図、写真図版8・31)

本建物跡は、調査区の中央部北東寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SK-02、1号井戸より古く、建物跡の北西コーナーをSK-02に、中央部を1号井戸によって切られている。また北西コーナーで、SI-16ともわずかに重複するが、新旧関係は不明である。

平面形は、東西5.1m、南北3.8mの東西に長い隅丸方形を呈しており、主軸方向はMN-34' - Eを示す。壁は確認面から西壁で34cm程度遺存しているものの、東壁の遺存状況は悪く、わずかに12cm程度であるにすぎない。傾きは西壁で80°程、東壁で65°程である。周溝は検出されなかった。床面は西壁際がわずかに高く、東壁際がわずかに低くなっており、その比高差は12cmである。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北壁ほぼ中央に位置する。煙道天井部が崩落しているものの、その構築材が断面に確認でき、両袖も確認できる。本調査区のみでは、竈の残存状況はやや良いほうである。規模は、袖幅71cm程度、奥行き79cm程度と推測される。袖は粘土を用いて構築している。煙道は平面円筒状で、B'の南79cmの所から北壁を37°程の傾きで立ち上がり、南45cmの所からはほぼ平坦に立ち上がっている。竈前から煙道先端にかけては焼土が最深23cmも認められ、長期間使用したものと思われる。掘形は、北壁を幅160cm、奥行き22cmの断面浅い皿状に掘り込んでおり、さらにその中央部を幅44cm、奥行き44cmの断面円筒状に掘り込んでいる。

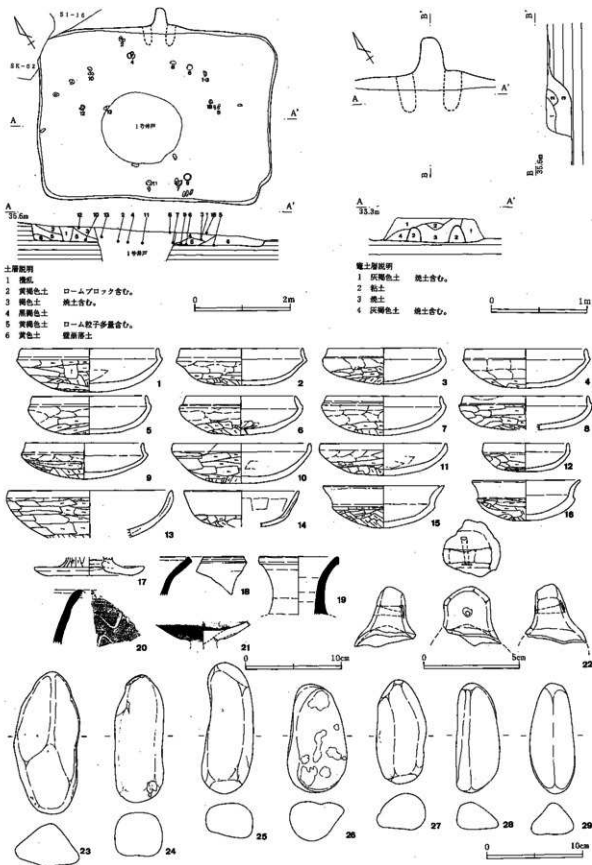
埋土は、攪乱を除き5層に分層される。壁際に壁崩落土である黄色土がみられるほか、概ね、床面直上はローム粒子を多量に含む黄褐色土であり、上層は西から黄褐色土、褐色土、黒褐色土である。

出土遺物 漆仕上げをしない土師器坏類には1~6のような身模倣形が多く、他に14がある。漆仕上げの土師器坏は、身模倣形と蓋模倣系がある。身模倣形は7~9、蓋模倣系には口縁部外面が内傾する10~13と、外反する15・16とがある。なお、8は漆仕上げと判断したが、確実ではない。坏類は、体部を上端まで鉋削りするものが若干みられる。短脚高坏(17)は漆仕上げである。22の土鈴は、軟質白黄色系の粘土1類が7世紀代の土師器坏類と同じなので、古墳時代の遺物と考えられる。21は古墳時代前期の高坏が混入したものである。

図示した須恵器は古墳時代の可能性が高いと考える。19は短頸なので提瓶か平底短頸瓶で、平安時代の長頸瓶の混入品とは考えないでおく。奈良~平安時代の益子窯製品の粘土によく似る。18の壺は、端部形が高坏脚裾と共通する。テフラ起源?の白細粒が多い点で奈良時代の栃木県宇都宮窯製品や平安時代の茨城県三和窯製品の粘土に近い。20は、口縁部形と匏播波状文からみて、栃木県下石橋愛宕塚古墳(常川1974)や御鷲山古墳(南河内町史編さん委員会1992)などと同種の在地産須恵器甕で、栃木・茨城県域で7世紀代の資料に見られる。匏播波状文は、SI-46Bにも類似がある。

23~29は一般に「編物石」と呼ばれる遺物で、埋土中から出土している。北西壁際の中央や、遺物5の西、7・9・11の南に出土状況が示されている石が、これらに該当するものだろう。

第4節 古墳時代終末期の竪穴建物跡



第43図 八幡様遺跡 SI-17 遺構・遺物

第45表 SI-17出土遺物

番号 種類	法 量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 土師器	口 覆14.4 高 4.5	丸底で、口縁部は内外面に稜と段を持って内傾する。外側は底部に多方向、内部におおむね横方向の寛り。口縁部外面と内面全面は横撫で。	2.5YR/3 淡黄褐色 黒斑あり	緻密で黒・透明細砂やや多量、やや軟質。1a類。	底上15cm 底5、12周 口1、3周 口13
2 土師器	口 高13.0 高 3.9 大 13.8	丸底で、口縁部は外面に鈍い稜の段、内面に稜を持って内傾する。底部外面は体部に雑な横撫で後、やや突出稜の体部下位に横方向の一方、体部横方向の寛り。内面一口縁部内外面は横撫で。	7.5YR/6 褐色 黒斑あり	緻密で黒・透明細砂と白細粒やや多量、やや硬質。1a類。	床直 口1、4欠損 口15床直
3 土師器	口 覆11.8 高 3.8 大 覆13.2	丸底で体部は薄い。口縁部は外面に段、内面に稜を持って内傾する。外側は体部に雑な横撫での後、底部多方向、体部中位に横方向の寛り。口縁部外面と内面全面は横撫で。	2.5YR/3 淡黄褐色	緻密で黒・透明細砂少量。 やや軟質。1a類。	底上15cm 底1、2周 口1、3周 口13
4 土師器	口 高12.8 高 4.2 大 13.4	丸底で中央の丸味が弱いので安定している。口縁部は外面に浅い段、内面に稜をもつて内傾する。外面は体部に雑な横撫での後、底面一方、底部外周横方向の寛り。口縁部外面と内面全面横撫で。	10YR/3 淡黄褐色 黒斑あり	緻密で黒・透明細砂やや多量、白細粒少量。 やや軟質。1a類。	床直 底全周 口1、2周 口1、12周 口16
5 土師器	口 高13.2 高 3.9 大 13.1	薄く丸底で、中央は平坦に近い。口縁部は内外面に稜と段を持って内傾する。外側は体部に雑な横撫での後、底部一方、体部下位に横方向の寛り。内面全面と口縁部外面は横撫で。	10YR/8/4 淡黄褐色 黒斑あり	緻密で黒・透明細砂と白細粒やや多量、やや硬質。1a類。	床直 底1、8周 体口1、2周 口11床直
6 土師器	口 高11.6 高 4.2 大 13.0	やや薄く丸底で、口縁部は外面にゆるい段、内面に鋭い稜を持って内傾する。外側は体部に雑な横撫での後、底部多方向の寛り。口縁部内外面は横撫で。体部内面は横撫での後、亀裂が生じたので底面を一方に指撫で、しかし亀裂は横撫でないので、この器は液体を入れるには使えない。	10YR/8/3 淡黄褐色	緻密で黒・透明細砂やや多量。 やや軟質。1a類。	床直 全周 口14床直
7 土師器	口 高12.1 高 4.2 大 13.3	やや厚く丸底。口縁部は外面に浅い凹線の差う段、内面にゆるい稜を持って内傾する。外側は体部に雑な横撫での後、底部多方向、体部下位横方向の寛り。内面全面と口縁部外面は横撫での後、磨仕上げ。	10YR/7/3 にぶい黄褐色 軟質。1a類。	やや緻密で黒・透明細砂多量、白細粒やや多量。 やや軟質。1a類。	床直 ほぼ全周 口9床直
8 土師器	口 覆13.2 高 残3.5 大 覆14.1	やや厚く丸底で、口縁部は内面に鋭い稜と外面に明瞭な段を持って内傾する。外側は底部一方、体部横方向の寛り。内面全面と口縁部外面は横撫で。外口縁部の一部に稜の痕が残っており、おそらく内面口へ体部も漆仕上げだったと思われる。	10YR/7/3 にぶい黄褐色	やや緻密で黒・透明細砂やや多量、白細粒少量。 やや軟質。1a類。	底上24cm 底外縁一 口1、4周 口15
9 土師器	口 高12.6 高 3.9 大 13.3	丸底で、口縁部は外面にゆるい段、内面に明瞭な稜を持ち、少々内傾する。内面全面一口縁部外面は横撫での後、漆仕上げ。外側は体部に雑な横撫での後、底部多方向、体部横方向の寛り。	10YR/6/3 にぶい黄褐色 黒斑あり	緻密で黒細砂多量、白細粒やや多量、軟質。1a類。	床直 ほぼ全周 口10床直
10 土師器	口 高14.4 高 4.2 大 14.8	丸底で、口縁部は外面に鋭い稜を持って内傾し、内面にごく弱い稜を持って内傾する。外側は体部横方向、底部一方の寛り。内面は横撫での後、横で、口縁部内外面は横撫で。口縁部外面に漆が少し残り、内面も漆仕上げだった可能性あり。	5Y/6/1 灰色	緻密で黒細砂、白細粒やや少量、透明細砂少量。 軟質。1a類。	底上4cm 底全周 口1、2周 口14
11 土師器	口 高13.3 高 3.4 大 13.6	やや薄く、中央部が広く平坦気味の丸底。口縁部は外面が鋭い稜をもつて内傾する。外側は体部に雑な横撫での後、底部は一方、体部横方向の寛り。内面は横撫で。内面全面と外面上側に漆仕上げ。	10YR/8/3 淡黄褐色	緻密で黒・透明細砂多量、白細粒やや多量、やや軟質。1a類。	床直 口1、4周の 欠損 口8床直
12 土師器	口 覆 9.0 高 薄く	薄く丸底で、口縁部は内外面にやや弱い稜を持って直立する。外側は体部に雑な横撫での後、底部一方、中位横方向の寛り。内面全面と外面口縁部は横撫での後、漆仕上げ。	10YR/8/3 淡黄褐色	緻密で黒細砂多量、透明細砂、白細粒少量。軟質。	底土中 体1、2周 口5、12周 口7、土
13 土師器	口 覆17.2 高 覆 5.0	やや厚く丸底で深く、口縁部は内外面に丸味を持って内傾する。外側は体部横方向の寛り、体部横方向の寛り。内面一口縁部内外面は横撫で。内面全面と外面上側は漆仕上げ。	10YR/8/3 淡黄褐色	緻密で黒・透明細砂と白細粒やや多量、やや軟質。1a類。	底上11cm 体口1、3周 口7
14 土師器	口 覆12.2 高 残 3.8	全体がやや薄い。口縁部は外面に鋭い稜を持って外傾する。体部上端が少し突出する部分があり、外面有段の体部を深く削って使だけしている可能性あり。外側は底部多方向、体部横方向の寛り。内面口縁部横撫での後、内面全面と口縁部外面は横撫で。	7.5YR/4 にぶい褐色	緻密で黒細砂やや多量、透明細砂、白細粒少量。 やや軟質。1a類。	底土中 体口1、12周 口7、土
15 土師器	口 高12.9 高 4.5	扁平丸底で、縁口反する口縁に、鋭い稜を持って移行する。外側は体部横方向の寛り、底部一方の寛り。内面全面一口縁部外面は横撫で。口縁部内外面に漆が残っており、内面体部にも漆仕上げをしていた可能性がある。	10YR/8/3 淡黄褐色 黒斑あり	緻密で黒・透明細砂やや多量、やや軟質。	底上28cm 口2、3周 体全周 口2

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成 色	出土状況 残存状況 注記
16 坏 土師器	口 径11.6 高 4.3	口縁部は薄く、体部はやや厚い。口縁部外面の段と内面の稜線は明確。外面底部から体部は多方向の彫削り。口縁部内外面と体部内面は横溝で後、漆仕上げ。	7.5YR8/4 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂少量、白細粒やや多量。軟質。	埴土中 口一底/4周 「フク土」
17 高坏 土師器	径 11.6	やや厚い。脚部は外縁接合。おそらく上下逆の状態でドーナツ状の粘土を積み上げてつくる。脚部内面一外面底部は横溝で後、脚柱部外面彫削り。外面全体と内面脚柱部に漆仕上げ。	7.5YR8/4 浅黄褐色 黒斑あり	緻密で黒細砂やや多量。軟質。	埴土中 裾全周 「フク土」
18 須恵器	口 24前後	口縁端部に凹線一線をもち、溝部上縁は弱くつまみ上げ気味。外面に粘土積み上げ例二条あり。内外面口ロ口無で。高坏跡とみるには径が大きすぎる。	5G6/0.5 緑灰色	やや緻密で白粒・細粒やや多量、白砂少量。硬質。	埴土中 口1/12周 「フク土」
19 須恵器	口 径 8.2 高 残 6.1	体部との接合面で割離している。口縁部上縁は狭い面を持つ。口縁端部の下縁はわずかに垂下気味。体部に窯を接合した後、器内面下部に粘土を補充して口ロ口無で。奈良～平安時代の埴土類と同様の粘土。	5B6/0.5 青灰色	やや軽い。白細・砂やや多量、白細粒やや少量。やや硬質。	埴土中 第一/全周 「フク土」
20 須恵器	口 径50～ 60?	口縁端部付近で強く外側にL字形に曲がる。その先は剥落している。外面は口ロ口無でその尾端波状文を器面に向かって右から左へ書く。内面は口ロ口無で。	5GY7/0.5 灰白色	緻密で透明細砂、白細粒少量。黒色油状粒やや多量。硬質。	埴土中 口一部
21 高坏 土師器		おそらく脚部の上に坏部を成形後、内面坏部底面に粘土を充填する。外面坏底面にも粘土を補充してわずかに垂下する壁をつくり出す。内外全面横溝で後赤彩。古墳時代前期の遺物が混入。	10YR5/4 にぶい黄褐色	やや緻密。白粒・細粒やや多量、白砂・透明細砂少量。やや硬質。	産地 坏逆2/3周 「12米」
22 土師 土師器	孔長 1.4 孔径 0.3 紐 2×2.4	底部は手摺ね成形で中央。図示の面から棒状工具で穿孔し、対面では工具が上下に動いたため孔が長径6mmまで細長くなる。鈴部は厚さ3～4mmで薄い。表面および内面はすべて雑な滑磨で。	10YR8/4 浅黄褐色	緻密で黒細砂やや多量、透明細砂・白細粒やや少量。軟質。1a系。	埴土中 口上部と紐 が残存 「フク土」
23 編物石 器	長 15.1 径 6.9×4.4 重 568g	断面隅丸三角形の自然の河原石をそのまま利用。		緻密で硬質の流紋岩。	埴土中 完形 「フク土」
24 編物石 器	長 13.6 径 5.1×4.8 重 600g	断面四角形の自然の河原石をそのまま利用。他の編物石にくらべて重量がある。底の上面に長1.7×長2.3cmの割離面が1枚あり、使用とかわかって破損した部分と考えられる。		緻密で硬質な層状の理理が発達したホルンフェルス。	埴土中 ほぼ完形 「フク土」
25 編物石 器	長 13.9 径 5.5×4.0 重 451g	断面隅丸四角形の自然の河原石をそのまま利用。中央がややくびれていて紐をかけるやすい形状。		緻密で硬質の石英質岩。	埴土中 完形 「フク土」
26 編物石 器	長 11.5 径 6.2×4.3 重 408g	断面不整形四角形の自然の河原石をそのまま利用。図示の面にはくぼみが多いが、人為的な加工ではない可能性のほうが高い。他の面はより平滑である。		緻密でやや硬質の安山岩。	埴土中 完形 「フク土」
27 編物石 器	長 11.0 径 5.3×3.8 重 335g	断面不整形四角形の自然の河原石をそのまま利用。中央部付近の金属の突出した部分はやや摩滅気味。		緻密で硬質の流紋岩。	埴土中 完形 「フク土」
28 編物石 器	長 11.6 径 4.5×2.9 重 200g	自然の河原石をそのまま利用。図の左側縁寄りがやや厚い。全体に少し赤味を帯びるので熱を受けた可能性もある。		緻密で硬質の流紋岩。	埴土中 完形 「フク土」
29 編物石 器	長 11.7 径 4.7×3.3 重 235g	断面隅丸三角形の自然の河原石をそのまま利用。図の右半部と下面が少し熱を受けて赤化した可能性がある。		緻密で硬質の石英質岩。	埴土中 完形 「フク土」

第46表 SI-17 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	鉢・皿	蓋	高坏	鉢	小形土師	甕・瓶	小形壺	長壺	甌	大甌	焼粘土	その他
土										6			
口縁部	261			1	6			1					
器										有			52
底									2				
須恵											1		
器													
底													

土鈴1点、編物石7点。
古墳時代前期の土師器少量と、平安時代の灰粒1片・須恵器3片(同一個体かもしれない)瓦か壺で三和窯産か)・土師器少量混入。

SI-21B (第44図、写真図版8・31~32)

本建物跡は、調査区の中央部北寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-20AおよびSI-22Bよりも古い。建物跡の南側を平安時代のSI-20Aによって切られ、また、北西部の上部を古墳時代終末期のSI-22Bに切られている。

平面形は、東壁から南東コーナーにかけてがはっきりしていないが、確認している範囲では、東西5.3m以上、南北5.5mのほぼ正方形を呈しているようである。主軸方向はMN-5°-Eを示す。壁は確認面から西壁で26~28cm程、北壁で16cm程遺存しており、傾きは西壁で75~82°程、北壁で75°程である。周溝は、北壁際西側から西壁際、南壁際にかけて検出された。幅は北西コーナーで37cmであるほかは、概ね12~23cm、深さは8~11cm程で、断面は皿状を呈する。床面は北西コーナーがやや高く、東側がやや低くなっており、その比高差は16cmである。主柱穴は4本検出された(P1~P4)。P1は長径69cm、短径50cmの平面楕円形で、深さ32cm、P2は径28cm、P3は径46cm、深さ43cm、P4は径64cm、深さ78cm。断面はP1がU字形、P3が楕円状、P4が漏斗状に掘られている。P5は長径44cm、短径34cmの平面楕円形で、深さ34cmである。貯蔵穴は竈の東側に検出された。平面形は、長径36cm、短径30cmの楕円形を呈する。断面形は楕円状で、最深24cmであり、底面は平坦である。

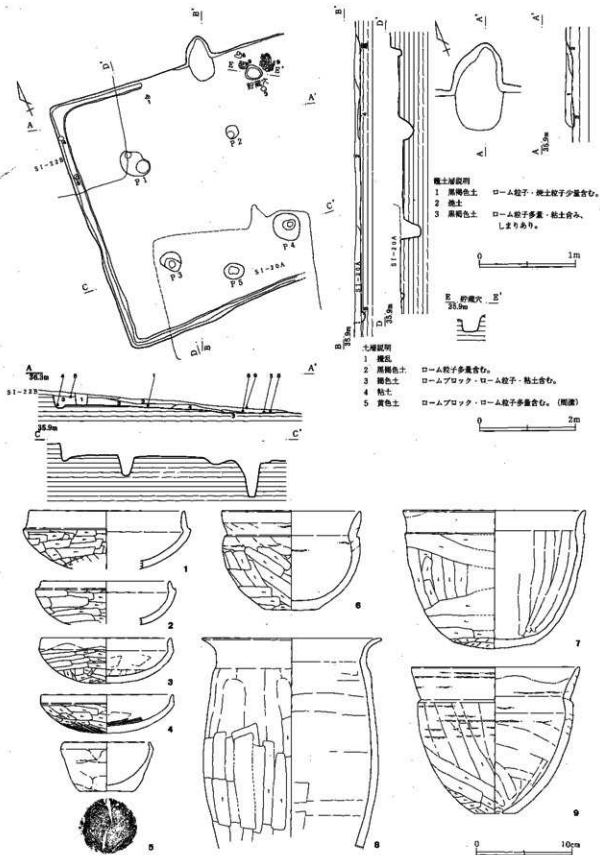
竈は、北壁中央やや東寄りに位置すると思われる。残存状況は悪く、掘形を確認することとどまる。掘形は、北壁を幅56cm、奥行き45cmの平面U字形に掘り込んでおり、さらに、北壁と床面を幅51cm、奥行き88cmの平面楕円形に掘り窪めている。その断面は皿状で、最深5cmであり、煙道の床面は、笑口から途中に段をもって5°程の傾きで非常にゆるやかに立ち上がっている。また、煙道奥に、焼土が最深9cmの厚さで認められた。

埋土は5層に分層される。竈前に、竈の構築材と思われる粘土層が検出されたほかは、概ね床面直上と西壁際が、ロームブロック、ローム粒子、粘土を含む褐色土で、東側と上層が、ローム粒子を多量に含む黒褐色土である。

出土遺物 遺物は、貯蔵穴の周辺の床面に多い。1・2は漆仕上げをしていない。4は製作中に生じた亀裂を磨きで補修したらしい。亀裂部の防水には漆仕上げが有効と思えるが、これには確実な痕跡は見られない。5は外面が粗雑だが、内面は撫で・漆仕上げがきれいなので、サイズが小さいことをのぞけば、実用にも使える。7は底面の残存部から判断して中央に1孔があるとは考えられず、また、瓶とするには内面調整がやや雑なので、鉢と考えた。普通は瓶には漆仕上げをしないが、9の瓶の内面は、坏類の漆仕上げがやや剥げた状態と同様である。

第47表 SI-21B出土遺物

番号 器種 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成 成	出土状況 現存状況 注記
1 坏 土器大	口 復16.6 高 残 6.2 大 復17.8	丸底で、深い。口縁部は内外面に明瞭な稜と段を持って内傾する。体部外面は横方向施刷り。内面~口縁部内外面は横撫で。	7.5YR8/4 浅黄褐色	緻密で透明磁砂ごく少量。軟質。	床直 径~口/5 周 [1]
2 坏 土器大	口 復13.4 高 残 4.7 大 復14.9	やや厚く深目。口縁部は外面にひろくゆるい段、内面にやや明瞭な稜を持って内傾。外面は体部に横方向の施刷り。内面~口縁部内外面は横撫で。	10YR8/4 浅黄褐色	緻密で混和材は目立たず、黒磁砂ごく少量。軟質。	埋土中 径~口/3 周
3 坏 土器大	口 復13.8 高 残 4.8 大 復14.2	丸底で、口縁部は内外面に弱い稜を持って内傾する。外面は底部一方向、中位多方向、上位多方向の施刷り。底部内面は一方向撫で、体部内面は施刷りで、横撫で、口縁部内外面横撫で。内面全面と口縁部外面は漆仕上げ。外面の漆は体部にも全体にうすく使っている可能性あり。	5YR5/6 明赤褐色	緻密で黒・透明磁砂やや少量。やや硬質。	床直 径~口/4 周 [7]



第44図 八幡根遺跡 SI-21B 遺構・遺物

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号 種類	法 量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
4 坏 土師器	口 14.0 高 4.1	口縁部は外面がごく弱い浅い段を持ってほぼ直立し、内面は段を持って平に立ち上がる。外面は体部に隆な輪で、底部一方、体部はほぼ横方向の彫削り。内面体部は横溝で、撫で、口縁部内外面横溝で。地成前に底面に入った亀裂の表面両側面を、彫削りをして補強している。確実な隆は現状では認められない。	25Y7/3 浅黄褐色 黒斑あり	やや粗い。黒・透明細砂と白細砂やや多量。 やや軟質。1a類。	底上 7cm 底-口1/3 周 [2]
5 小形土 師器	口 9.2 底 5.6 高 5.2	口縁部は外面が明瞭な隆を持って内傾し、内面はゆるく内傾する。体部外面は指張正直および隆な輪で、口縁部横溝で、底部外面は本業産の隆に輪で消している。内面全面と口縁部外面は撫で後、漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄褐色 黒斑あり	緻密で白細粒・黒細砂やや多量。 軟質。1a類。	底上18cm 口1/2周 底全周 [3]
6 钵 土師器	口 14.5 底 5.6 高 10.5 大 14.3	厚く、平底で安定する。口縁部は内面に弱い段と外面に深い段を持って外傾する。外面は体部上位部での後、底部一方彫削り、体部斜彫削り。内面全面と口縁部外面は横溝で。内外面に粘土積み上げ痕が少しずつ残る。内面全面を漆仕上げしていた可能性もある。	7.5YR7/6 褐色 黒斑あり	緻密で黒細砂少量。 軟質。	床直 底全周 体-口3/8 周 [4]
7 钵 土師器	口 19.4 高 14.6	底面はレンズ状に突出する。体部はやや厚く、口縁部は深い。口縁部外面に明瞭な段を持つ。外面は体部縦方向の後に横方向彫削り、底部一方彫削り後、体部下端多方向彫削り。内面は横溝で。口縁部内外面横溝で。内面全面と外面口縁部に漆仕上げの可能性があるが、確実ではない。	7.5YR7/4 にぶい褐色	緻密で赤粒と黒細砂少量。 やや軟質。	埋土中 底1/2周 口1/3周
8 壺 土師器	口 19.0 大 18.5	胴部は少し下ぶくれ気味で、胴部内面に弱い段を持ち、外面は段や段を持たずに外反する。口縁部は弱く尖り気味。外面は上半部縦溝で、下半部を彫削り、口縁部横溝で。内面は横溝で、外面は横溝での後に口縁部横溝で。外面胴部上～中位にスス付着。	7.5YR7/4 にぶい褐色	粗い。灰色砂・黒細砂多量、透明細砂と赤・白細砂やや多量。 やや軟質。	床直 胴1/2周 口2/3周 [6]
9 甗 土師器	口 17.8 底 4.3 高 15.5	やや厚く、口縁部は内外面に段と深い段を持って外傾する。外面胴部は、粘土積み上げ痕を残す隆な輪での後、主に下半部に斜め彫削り。底面は平坦で、隆な輪で、胴部内面は横溝で、口縁部内外面横溝で。底面は地成前に径15mmの1孔をあける。内面口縁部中位以下の全面を漆仕上げする可能性がある。	7.5YR6/6 褐色 赤色 土も凝状に 混じる。	緻密で透明細砂ごく少量。 軟質。	床直 口は全周 口5/8周 欠損 [5]

第48表 SI-21B 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	弁	盤・皿	壺	高杯	鉢	小形土師	壺・瓶	小形埴	長埴	甗	大甗	埴輪土埴	その他
土 師 器	口縁部	92				10	1		5	19			
器	体部			脚柱1		有		有				13	
器	底部					4	1		3	3			
須 恵 器	口縁部												
器	体部												
器	底部												

土師器底部の削りかす?が1点。
古墳時代前期の土師器少量と、平安時代の土師器少量混入。

SI-22A (第45～46図、写真図版8～9・32・54)

本建物跡は、調査区の中央部北寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-21Aより古く、SI-22Bよりも新しい。東壁の北側をSI-21Aによって切られ、また、SI-22Bの西側を切っている。

平面形は、東壁から南東コーナーにかけて不明確だが、確認している範囲では、東西4.7m以上、南北4.8mのはほぼ正方形と思われる。主軸方向はMN-11'-Eを示す。壁は確認面から西壁で14cm程遺存して、65'程の傾きで立ち上がる。周溝は、西壁際から南壁際で検出された。幅は21～32cm、深さは12cm程で、断面U字形である。床面は中央部がやや高く、東側がやや低く、その比高差は10cmである。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、北東コーナーに検出された。平面形は、長径94cm、短径73cmの不整な楕円形である。断面図が無いが、北東から出土した7・13の出土レベルから考えて、少なくとも30cm以上の深さがある。

竈は、北壁は中央にある。残りが悪く、掘形だけを確認した。竈断面の最上層に、天井構架材と思われる粘土層(竈の2層)が確認されたが、竈前部に流れ出し、形をとどめていない。掘形は、北壁を幅76cm、奥行き41cmの平面舟首形に掘り込み、さらに、北壁と床面を幅67cm、奥行き110cmの不整な楕円形に掘り窪める。その断面は浅い逆三角形で、最深17cmであり、煙道床面は、燃焼部中央の最深部から19'程の傾きでゆ

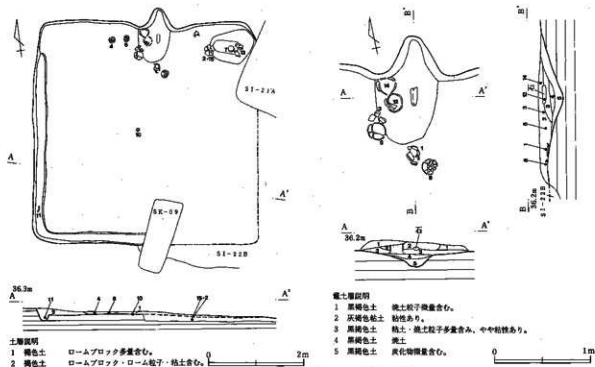
るく立ち上がる。焼土は、断面図の竈4層に5cm程の厚さで認められる程度である。竈の左袖にあたる部分から、甕が1/2個体ずつ倒立した状態で2基出土したが(12・14)、袖の芯材として使用されたものであろう。また、燃焼部上の中層から、支脚に使用されたと思われる円柱状の石も出土している。

西壁際の埋土は、ロームブロック・粒子と粘土を含む褐色土で、他はロームブロックが多い褐色土である。

出土遺物 漆仕上げの土師器坏には身模倣形(1~3)と蓋模倣系(6~9)がある。4・5は磨耗している、現状では漆を確認できない。なお、9の土師器坏は注記が「SI-22」だけで、SI-22AとBのどちらから出土した遺物なのか厳密にはわからないが、型式学的な特徴から、SI-22Aの遺物と判断した。

11の高坏は坏部内外面を磨き、混和材が多く、芯に黒色が残る。古墳時代終末期の高坏としては異質で、古墳時代中期の遺物の混入かもしれない。ただし、胎土は終末期の土師器の1a類にもやや類似している。15の甕は特徴的な浅い鉢形である。12・14は甕の上部が一層に竈柱に使われていた。口縁端や頸部などの細かい特徴は互いに異なる。

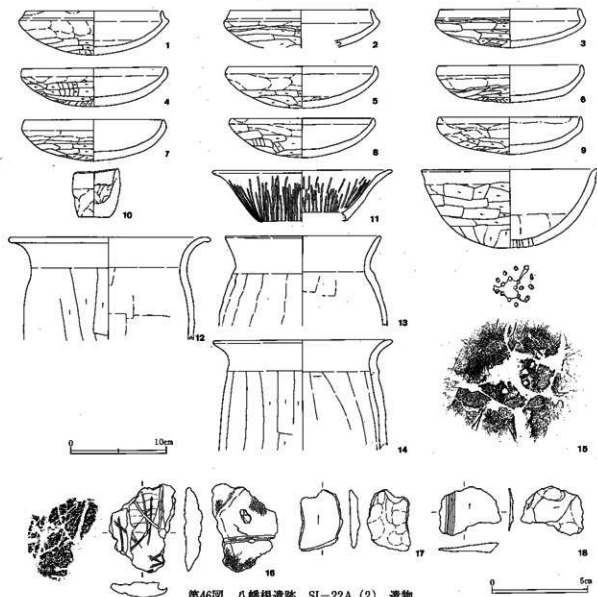
16はやや目の粗い布を介して粘土を平坦面に押しつけてこねた粘土塊であり、17と18は土師器製作時の粘土の削りかすである。いずれも土師器製作に関わる残滓が、偶然焼成されたものらしい。出土状況は不明であるが、土師器製作関連遺物はSI-22Bに多いので、そちらから流れ込んだ可能性がある。



第45図 八幡根遺跡 SI-22A (1) 遺構

第49表 SI-22A 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土師器	壺・瓶	小形甕	長甕	甕	大甕	焼成土塊	その他
土師器 口縁部	124			1	4	1		1		26			
土師器 体部	有				有			有				11	
土師器 底部				脚柱2		1			2	1			
須口縁部													
須体部													
須底部													
土師器削りかす2点。													
古墳時代前期の土師器少量と平安時代の土師器1片混入。													



第46図 八幡根遺跡 SI-22A (2) 遺物

第50表 SI-22A出土遺物

番号 器種 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 14.4 高 4.7 大 15.8	丸底で、底部はやや深い。口縁部は外面に段、内面に明確な線を持って内傾する。外面は体部裏面での後、底部一方向、体部横裏面。口縁部内外面に横撫で後、漆仕上げ。内面体部は撫で、磨滅して漆の有無は不明。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で焼和材はほとんど見られない。軟質。	底上4cm 口～体1/12 割欠損 〔6枚〕
2 坏 土師器	口 復15.0 大 復16.4	口縁部は外面にゆるい段と内面に明確な線を持て内傾する。外面は縁なし撫での後、体部横裏面。内面全面と口縁部外面に横撫で後、漆仕上げ。	7.5YR7/4 に白い微色	緻密で焼和材は目立たず、白細粒ごく少量。軟質。	床直 口～体1/3 割 〔5枚〕
3 坏 土師器	口 復14.6 高 4.1 大 復15.9	薄く丸底で、口縁部は外面の段が弱く、内面の線は明瞭に内傾する。外周底部一方向、体部横裏面。内面体部と口縁部外面は横撫で後、漆仕上げ。	10YR5/1 明褐色 黒灰あり	緻密で黒・透明細砂少量。軟質。1枚。	底上16cm 口～底1/2 割 〔罐内3〕
4 坏 土師器	口 15.2 高 4.2 大 15.5	丸底で、口縁部は内面に弱い線を持ち、外面は線を持たずに内傾する。外面は体部に撫での後、底部一方向、体部に横方向磨り。内面全面と口縁部外面に横撫で。現状では漆仕上げの有無は不明。	10YR5/1 明褐色	緻密で透明細砂少量。軟質。	床直 口2/3割 底全周 〔2枚〕

番号 器種 類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
5 坏 土師器	□ 15.5 高 4.4 大 16.2	丸底で口縁部は内外面に弱い稜線を持って内彎する。外面稜線は薄減してよくわからないが、体部部底の腹に底部はぼ一方角、体部横方向の裏側り、内面全面と口縁部外面横線で、現状では漆仕上げの有無は不詳。内面底部中央付近に使用痕?と思われる浅いキズが多い。	10YR7/2 にぶい黄褐色 黒底あり	緻密で透明細砂ごく少量。軟質。	底上 7cm 全面 【甕内 5】
6 坏 土師器	□ 15.0 高 4.4 大 15.6	やや厚く重い。底面中央はゆるい丸底で不安定。口縁部は外面に弱い稜線を持って内彎する。外面体部部底の後、底部多方向、体部は横線削り、内面全面と口縁部外面に横線で、漆仕上げ。外面の漆は中位まで及ぶ。	7.5YR7/4 にぶい褐色	緻密で透明細砂ごく少量。軟質。	底直 径は全面 【3底直】
7 坏 土師器	□ 14.7 高 4.4 大 15.3	底面はやや厚く丸底で、口縁部は外面にご弱い稜線を持って内彎する。外面体部部底の後、体部一方角横削り。内面全面と口縁部外面は横線で、漆仕上げ。内面底の漆は残りが悪い。	10YR8/4 淡黄褐色 黒底あり	緻密で黒細砂と白細砂やや少量。透明細砂少量。軟質。1a類。	貯蔵穴の口 から下32cm には全面 【6】
8 坏 土師器	□ 15.0 高 4.2 大 15.5	底面はやや厚く丸底で、口縁部は内外面に弱い稜線を持って外面が内傾している。全面が薄減して裏面が不詳。外面は体部におそらく底の後、底面はぼ一方角横削り、体部は斜方向に弱い削りを段状にくりかえす。内面全面と口縁部外面は横線で、口縁部外面にわずかに漆が残り内面も漆仕上げの可能性はある。	2.5YR8/2 灰白色	緻密で透明細砂ごく少量。軟質。	底上 2cm 【2】、3cm 底上全面 【甕 7】
9 坏 土師器	□ 径15.0 高 4.0 大 径15.4	やや厚く丸底。口縁部は内外面に明瞭な稜線を持たずに内彎する。外面体部部底でと薄く横削り。外面は体部部底の後、底面一方角、体部横方向の裏側り。口縁部内外面横線で、口縁部内外面に漆仕上げ。内面体部にも漆を使っていたかどうか不詳。	2.5YR5/1 黄灰色	緻密で透明細砂やや少量。軟質。	甕土中 【27、12間 【SI-22】
10 小形 土師器	□ 底 4.8 高 3.3 大 4.8	厚く平底で、口縁部で内彎する。中位以下を手摺りで成形した上に粘土線を1段積み上げ。体部内外面指塗りで、特に内面は鈍。口縁部内外面横線で、底面は無黄塗で、植物繊維圧痕?が少しみられる。	7.5YR6/4 にぶい褐色	やや緻密で白細砂多量、黒・透明細砂少量。 やや硬質。	床直 全面 【1床直】
11 高坏 土師器	□ 径19.8	外面底面は縁は厚く、内面底面も弱い稜線を持つ。口縁部は丸味を持つ。内外面横線で、坏体部に丸味あり。	7.5YR6/6 褐色	やや軽い。黒細砂多量、黒・白細砂と白細砂少量。 やや硬質。1a類。	底上 3cm 坏底1/4間 【1】、6間 【9間溝内】
12 壺 土師器	□ 21.4	頸部内外面に稜を持たずに口縁部が外反し、口唇部は少し下面が肥厚する。内面胴部縦削り後、横で、内面胴部縦削り後、口縁部内外面横削り。	7.5YR7/4 にぶい褐色	緻密で黒・灰色砂黒細砂、白細砂多量。白砂・透明細砂やや多量。 やや硬質。1b類。	底上18cm 口一頸全面 削り【11間 【甕 2】
13 壺 土師器	□ 16.4	薄く、外面胴部下端に弱い稜線を持って口縁部は外傾し、端は平坦面になる。内面胴部縦削り。外面胴部は粘土成形後無調整で、小さなヒビ割れが多い。口縁部内外面横削り。	7.5YR7/6 褐色	やや軽い。赤・灰・透明細砂やや多量。軟質。	貯蔵穴口か ら下30cm 【7】、8間 【8貯蔵穴】
14 壺 土師器	□ 18.8	頸部にかかすなをもち、口縁部が外反し、頸部はわずかに尖り気味。外面胴部縦削り後、口縁部内外面横削り。内面斜削り。	7.5YR7/6 褐色	軽い。赤・灰色・透明細砂と白細砂多量。やや硬質。	底上19cm 口一頸全面 削り【12間 【甕 1】
15 飯 土師器	□ 18.6 高 8.3	やや厚く丸底で、口縁部は外面に浅い稜線を持って外反する。外面は底部多方向、体部横削り。内面底部横削り。口縁部内外面と内面体部に横削り。底面に外側から埋定9-90ヶを、柔らかいうちに丸い棒で穿孔。内面に漆仕上げしている可能性もある。	10YR6/2 灰黄色	緻密で混和材は目立たず、白細砂・黒細砂ごく少量。軟質。1b類。	床直 【27、8間 底一部欠 【5床直】
16 粘 土 土師質	4.7×3.5 厚 0.8 重 9.97g	ワラ等を敷いた平面上に粘土を置き、織物をかぶせて押しつけたもの。左面側は平坦面に敷いた広葉樹葉面およびワラ状の植物繊維痕が重なって付く。右面側は中高の断面形で、織物圧痕で、ワラ状の植物圧痕。	10YR8/4 浅黄褐色	緻密で黒細砂やや多量、透明細砂・白細砂と白細砂少量。軟質。1a類。	不明 形状 【SI-22A】
17 磨りか す土師質	3.3×2.3 厚 0.5 重 3.26g	背割(右面)は指押え。面の右上部が土師器成形・乾燥時の底部付近の可能性あり。腹面(左面)は1回の磨り。面の上面は磨削後、焼成前にちぎられている可能性が高い。	7.5YR7/3 にぶい褐色	緻密で透明砂・黒細砂・白細砂少量。やや軟質。	不明 焼成後の破 損はない。 【SI-22A】
18 磨りか す土師質	3.3×2.6 厚 0.2 重 1.98g	背割(右面)は指押えの後、1ヶ所を浅く磨削り。腹面(左面)は1回で磨削りし、工具の凹凸が3本の条線状に残る。焼成されている。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で黒・透明砂やや少量、白細砂少量。やや軟質。1a類。	不明 形状 【SI-22A】

SI-22B (第47~48図、写真図版9・33~34・53・55)

本建物跡は、調査区の中央部北寄りの、台地上の平坦面に位置する。重複関係としてはSI-21A、SI-22Aより古く、SI-21Bより新しい。竈から北東隅を平安時代の建物SI-21Aに、西半分を古墳時代終末期の建物SI-22Aによって切られる。南東隅では、古墳時代終末期の建物SI-21Bの上部を切っている。

確認された部分では、東西4.1m前後、南北3.8mで、平面形はほぼ正方形と思われる。主軸方向はMN-24' - E程度である。壁は、SI-22Aに切られている西壁で確認面から14cm程、南壁で10cm程残り、西壁で75'程、南壁で60'程の傾きで立ち上がる。床面はほぼ平坦である。周溝・柱穴・貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北壁中央付近に位置すると思われる。残存状況は悪く、左袖と燃焼部の一部を確認するものの、煙道天井部や右袖はSI-21Aに切られている。左袖は、粘土を用いて構築されている。北壁の掘り込み形は確認できなかったが、床面は径77cm程の不整な円形に掘り窪められていると思われ、その断面は皿状で、最深8cmである。焼土は、竈前から燃焼部にかけて最深15cm程の厚さで認められた。

埋土は3層に分層される。おおむね、ロームブロックを多量に含む黒褐色土である。

出土土師器 (1~16) 遺物は、床面から出土したものが多く。

図示した土師器の胎土はすべて1a類である。残存度の多い、つまりこの建物に遺棄された可能性が高い土師器がすべて同類の胎土であることは、この建物が土師器製作工と深く関わっていることと対応している。

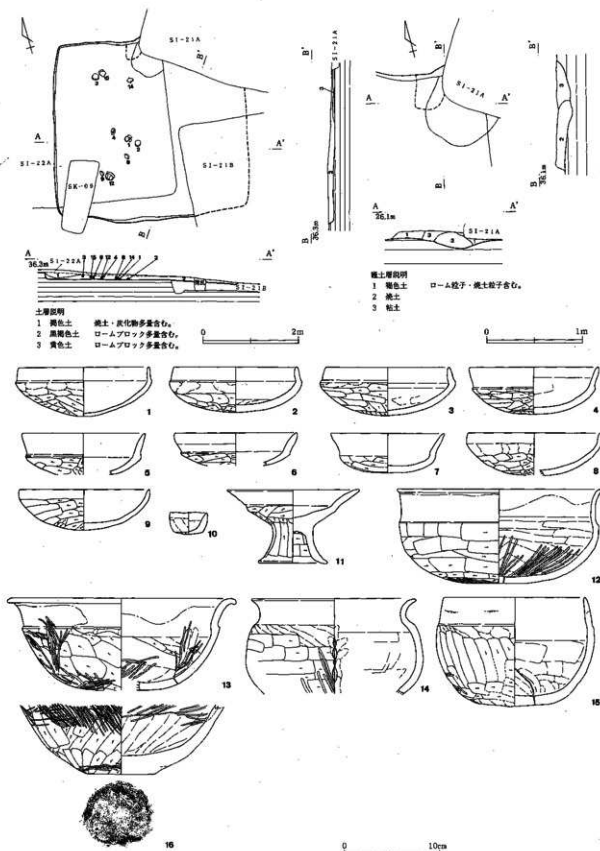
図示した土師器坏の中では、4だけが漆仕上げで、他には漆が見られない。4~7は、7世紀代の栃木県域中央部に多い内面口縁坏であるが、漆仕上げをしない5~7があることや、内面口縁部上半が内彎せずに外反気味である点は、典型的な内面口縁坏ではない。10の小形土器も同質の胎土である。八幡根遺跡出土の小形土器には、極端に粗雑ないわゆる手捏ね土器が少なく、きちんと横撫でや削りを行っているものがむしろ一般的である。

11の高坏は、脚部部を付けるのをやめたような器形で、脚が不自然に短い。短い脚部付近まで脚柱部を篋削りしたところで完成品にしている。鉢は、口縁部が外反するものが2点あり(12・13)、ともにSI-14A出土の33番と調整技法がよく似るが、三者ともに同一個体ではない。丸壺(16)は胴が丸く、塵・砂の少ないきれいな胎土なので、煮炊用の長壺ではなくて貯蔵・収納用器種だろう。

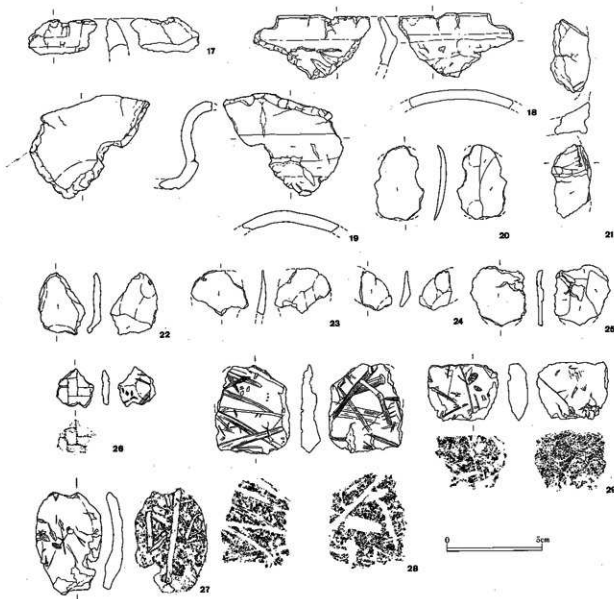
不良品土師器と土師器製作関連遺物 (12~28) この建物跡からは、不良品の土師器が5点まとまって出土している。12~16は、焼成前に生じた亀裂の部分篋削りして補修している。工人の立場からすると、他人に出荷できるような出来の製品ではない。

17~28は、土師器未製品・土師器削り時の削りかす・粘土塊などが、なんらかの事情で焼成されてしまったために残存したものである。この3品目ともに、八幡根遺跡ではこのSI-22Bからの出土量が特に多い。この建物が土師器製作工房か、または土師器製作と関わる人物の住居である可能性が考えられる。これらの遺物は、この他に、SI-28にも多い。

焼粘土塊には、稲藁の圧痕が表裏両面に付くものが多い。時には、糞りが悪い糞が付いたままの稲藁の圧痕もみられる(27~29)。土師器を製作した季節と関連する点に興味をひく。土師器の胎土中にはもちろん繊維を混入していないので、土師器製作とは違う意味を持つ製品に、粘土を転用した可能性も考えられる。また、この種の遺物については、土師器の焼成方法と関係する可能性がすでに指摘されている(竹田1995, 上村1995, 橋本他1996)。SI-28・47・50にも同様の例がある。SI-22Aにもあるが、これはSI-22Bから流入したものかもしれない。焼粘土塊を含めた土師器製作関連遺物については、「まとめ」(p.268)で再度検討する。



第47図 八幡根遺跡 SI-22B (1) 遺構・遺物



第48図 八輪根遺跡 SI-22B (2) 土器器製作関連遺物

第51表 SI-22B出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土器器	口高 13.9 大 14.4	体部は削りすぎたようで非常に薄い。丸底で、口縁部は内外面に發條と段を持って内傾する。外面体部無しの後、底にはほぼ一方、体部多方向の裏面。口縁部内外面と内面体部横條で。	7.5YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂やや多量、白細粒やや少量、やや軟質。1a類。	床直 □3/4周 底全周 [5]
2 坏 土器器	口高 12.8 大 14.0	やや厚く丸底。口縁部は内面に横、外面にごく浅い段を持って少し内傾する。外面体部無しの後、底部一方内傾。内面体部無しの後、口縁部内外面横條で。	10YR8/4 浅黄褐色	緻密で透明細砂多量、黒細砂・白細粒やや少量、やや軟質。1a類。	床直 □3/4周 体-底全周 [6]
3 坏 土器器	口高 13.0 大 14.3	やや厚く丸底。口縁部は内面に明瞭な横と外面にゆるく長めの段を持って内傾する。外面体部に横條無しの後、底部一方、体部は横條削り。体部内面横條で横條で。口縁部内外面横條で。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒細砂やや多量、透明細砂・白細粒やや少量、やや軟質。1a類。	床直 体-底全周 □5/6周 [1]

番号 種類	号 種類	法 量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
4	坏 土 脚 器	口 13.6 高 5.0 底 13.0	丸底で、口縁部は外面に明瞭な段を持ち、弱く外反する。外面は体部に離れ兼ねた後、底部一方、体部横方向内側。内面は体部裏側で、縁で、口縁部横溝で、外面口縁部と内面全面に漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒細砂やや多量、透明細砂・白細砂やや少量。 軟質。1a類。	床直 口一底7/3 周 [4]
5	坏 土 脚 器	口 13.1 高 4.4 底 12.2	体部は薄く、口縁部は外面に縁と段を持って、外面は直線的に外反し、内面は上半がやや外反する。外面体部にはほぼ横方向の内側。口縁部外側と内面全面横溝で、漆仕上げは縁部からしていないようである。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂多量、白細砂少量。 軟質。1a類。	床直 口一底1/3 周
6	坏 土 脚 器	口 13.0 高 4.2 底 11.0	体部は薄く、内外面に弱い縁と明瞭な段を持って、口縁部は外面が外反、外面上半が内側。外面体部横溝。口縁部外面と内面全面横溝で、漆仕上げはおこなっていないようである。	7.5YR 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂多量、白細砂やや多量。 軟質。1a類。	埴土中 口一底3/8 周
7	坏 土 脚 器	口 12.0 高 4.2 底 10.2	口縁部は薄く、底部はやや厚い。ゆるい丸底で、口縁部は外面の段が明瞭で内面は段を持たない。外面は底一体部に縁で、一方内側。口縁部内外面と体部内面は横溝で、漆仕上げは見られない。	7.5YR7/6 褐色	緻密で白細砂、黒・透明細砂少量。 やや軟質。1a類。	埴土中 口一3周 体1/4周 「フタ土」
8	坏 土 脚 器	口 14.0 高 4.6 底 14.3	やや厚く丸底で、口縁部は外面だけに弱い縁を持つ。外面体部は離れ兼ねた後、底部一方、体部横方向内側。口縁部外面と内面全面は横溝で、漆仕上げは認められない。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂と白細砂少量。 やや硬質。1a類。	床直 口一底5/12 周 [7]
9	坏 土 脚 器	口 13.6 高 4.3	やや厚く丸底。口縁部は外面に弱い縁を持って立ち上がる。外面底部多方向、体部横溝あり。内面全面と口縁部外面は横溝で、漆仕上げは認められない。	7.5YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂多量、白細砂やや少量。 やや軟質。1a類。	床直 口一底3/4 周 [8]
10	手 挖 ね 土 器	口 3.8 底 3.0 高 2.3	底面中央がゆるく下へ突出気味。口縁部はやや不整形で直打つ。体部内外面横溝で。外面底部手持ち差あり。	10YR6/4 にぶい黄褐色	緻密で透明細砂・白細砂少量。 軟質。1a類。	埴土中 口一底1/4 周
11	高 坏 土 脚 器	口 14.0 高 7.8 底 8.0	唇部は内面に縁を持って開き、唇上部一環底はやや厚く、口縁部は内面にゆるい縁、外面に縁を持って外反する。唇部内面～口縁部内外面に横溝で、唇部外側部に多方向内側。唇部内外面に横溝で、唇部外側部に一方内側。内面脚柱部は横方向内側。現状では漆仕上げは認められない。	2.5Y8/3 淡黄褐色	緻密で黒・透明細砂やや多量、白細砂やや少量。 軟質。1a類。	埴土中 口一底3/3 周、社会園 「フタ土」
12	鉢 土 脚 器	口 21.6 高 10.0 底 21.2	中央が扁平な丸底。外面口縁部下に明瞭な段を持ち、内面は段を持たない。口縁部は明瞭に小さく肥厚する。外面は底部一方、体部横溝あり。亀裂の入った部分を補修するために底面中央に一方内側。内面は裏側で、放射状亀裂。内面の亀裂も補修のためと思われ。口縁部内外面は横溝で、漆仕上げ。内面の漆は、口縁部中位以下には現状では認められない。	10YR7/3 黄褐色 黒度あり	やや緻密で黒・透明細砂やや多量、白細砂少量。 やや軟質。1a類。	床直 口一2周 底全面 [9]
13	鉢 土 脚 器	口 24.2 高 9.8 底 9.8	丸底で中央はやや扁平。外面は体部に離れ兼ねた後、体部斜削り後、底部周りを後傾し、体部下位に裏磨き。内面は体部裏削り後、裏磨き。口縁部内外面横溝で、体部上位に縦位の亀裂が焼成前に入った部分で、内面横溝で、短尾磨き。外面裏磨き状態で補修してから焼成。図は反転還元なので、対応する内外面の補修状況を表示している。	2.5Y7/2 灰黄色 黒度あり	やや緻密で黒・透明細砂多量、白細砂少量。 やや軟質。1a類。	埴土中 底一3/3 周 「フタ土」
14	鉢 土 脚 器	口 17.4 高 18.8 底 18.8	頸部外面に浅い弱い縁を持ち、口縁部ははやや尖り気味。外面は頸部に離れ兼ねた後、中位以下横溝あり。内面頸部は横溝で、口縁部内外面は横溝で、焼成前に体部に入った亀裂部分を、内面横溝で、外面斜削り磨きで補修している。図は反転還元で、対応する内外面を表示している。火にかけて使用した可能性もある。	5Y8/3 淡黄色	緻密で黒細砂多量、透明細砂やや多量、硬質。1a類。 頸中位以下は加熱赤化。	床直 頸上キ一0/3 周 [3]
15	鉢 土 脚 器	口 14.8 高 11.6 底 16.7	丸底で、口縁部は外面に浅い縁を持ってやや内傾する。外面は体部裏で、口縁部横溝で、縦削り。外面底部は離れ兼ねた後、体部裏削り、一部に裏磨き。内面は体部裏側で底部横溝で、口縁部横溝。焼成前に入った亀裂部分を、外面は局部的な裏磨き、内面は斜削り磨きで、補修する。	2.5Y8/4 淡黄色 黒度あり	緻密で黒細砂やや多量、透明細砂やや多量、やや軟質。 1a類。	床直 底全面 体一底5/12 周 [2]
16	大 土 脚 器	底 6.9	厚く、底部付近はごくわずかに下へ突出気味。外面体部斜削り後、裏磨き。底面はおそらく木裏裏面の木重を、多方向削りてかなり削してから、胴部下部を斜削り後、裏磨き。内面は縁で、粘土積み上げ部に粘土を塗った上を裏磨き。内外面の裏磨きは粘土接合部を補修するように施す。また、図示の反対側は縦位に亀裂が入った部分の外面だけに密な斜削り磨きを施して補修する。	10YR8/3 浅黄褐色 黒度あり	やや粗い。黒細砂多量、透明細砂・白細砂やや多量。 やや軟質。1a類。	埴土中 底全面 体1/3周 「フタ土」
17	未 製 品 土 脚 器	長 1.9 幅 3.7 重 3.77g	積み上げた粘土層が裏口縁で割断した粘土片が、焼成されたもの。外面横溝で、内面横溝で、裏口縁(右図)の左半部は焼成後の破断。	2.5YR5/4 にぶい黄褐色	緻密で白細砂、黒・透明細砂少量。 やや硬質。1a類。	埴土中 小破片 [SI-22B]

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
18 未製品 土師器	長 3.4 幅 5.2 重 11.06g	ほぼ形が出来上がった土師器の口縁部を引きちぎった粘土片が、焼成されたもの。口縁部以外の周囲はすべて焼成前の粘土の破断面。外面は体部にやや窪み、口縁部横溝で、内面は全面横溝で、角のある工具で体部に2本の傷が付けられている。全体に亀裂とゆがみが多い。そのため、坏の口は不明。	10YR8/2 灰白色	緻密で黒細砂やや多量、白細粒・透明細砂やや少量。やや軟質。1a類。	不明 焼成後の破損はほとんどない。 [SI-22B]
19 未製品の焼成 土師器	長 5.5 幅 6.4 重 20.49g	土師器未製品を引きちぎった粘土片が焼成されたもの。左が内面で、全面横溝で、右が外面で、口縁部横溝で、体部横溝あり。四角はすべて焼成前にちぎれた部。坏または鉢の未製品と考えられる。ゆがんでるので、製作時の直径や高さは不詳。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で白細粒と黒・透明細砂やや少量。軟質。1a類。	不明 焼成後の破損はほとんどない。 [SI-22B]
20 削りか す 土師質	長 4.0 幅 2.6 厚 0.6 重 2.33g	背面は指で、2回の彫削り。腹面は1回の彫削り。	10YR7/3 にぶい黄褐色	やや緻密で黒・透明細砂と白細粒少量。やや軟質。1a類。	不明 焼成後の破損に破損 [SI-22B]
21 削りか す 土師質	長 2.6 幅 3.9 厚 1.3 重 5.94g	柱状の底部の土師器を作り、裏削りで底を削った断片が焼成されたもの。底部は木重底の可能性があり(下部の上半部)、その一部を削っている。さらに深く削って(上面)、この断片ができたと考えられる。土師の右上端は焼成後の破損で、左側部は焼成前にちぎれた部。	7.5YR7/4 にぶい褐色	緻密で黒細砂やや多量、白細粒。透明細砂やや少量。軟質。1a類。	不明 上面と上端が焼成後の破損 [SI-22B]
22 削りか す 土師質	長 3.2 幅 2.5 厚 0.4 重 3.52g	背面は指で、裏削りが一箇所。腹面は所により内彎または反気味に1回の彫削りで、側部や端部は削り難し後に腹面側へやや反り返っている。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白細粒と黒・透明細砂やや少量。やや軟質。1a類。	不明 焼成後の破損はほとんどない。 [SI-22B]
23 削りか す 土師質	長 2.4 幅 3.0 厚 0.4 重 1.92g	背面は多方向の無で。腹面はやや内彎気味に1回の彫削り。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細粒と黒・透明細砂やや少量。やや軟質。1a類。	不明 下半と上端の一部欠損 [SI-22B]
24 削りか す 土師質	長 2.1 幅 1.7 厚 0.4 重 1.13g	背面は指で、腹面は1回の彫削り。背面の右側は焼成後に破損。	10YR8/3 にぶい黄褐色	緻密で黒・透明細砂やや少量。白細粒少量。やや軟質。1a類。	不明 一部破損 [SI-22B]
25 削りか す 土師質	長 3.2 幅 3.0 厚 0.3 重 2.76g	背面(右図)は4回の彫削りの後、粘土カスが2点付着。腹面(左図)は1回の彫削りで、ゆるく反返するように削る。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細粒と黒・透明細砂やや少量。やや軟質。1a類。	不明 下縁部欠損 [SI-22B]
26 焼粘土 土師質	長 2.1×2.0 厚 0.4 重 1.28g	平坦な面の上に粘土を押しつけ、背面には植物の茎の圧痕を残す。植物は幅5mmの糸を使い、2本越え・2本返り・1本返りで、網代状に編む。	7.5YR8/4 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂やや少量。白細粒少量。やや軟質。1a類。	不明 焼成後の破損はない。 [SI-22B]
27 焼粘土 土師質	長 5.5 幅 3.5 厚 1.0 重 11.06g	面の左が凹面、右が凸面。両面に植物の茎の痕が多い。左面には熱りの悪い陥凹痕がみられるので、箱蓋だと考えられる。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒細砂やや多量、白細粒と透明細砂少量。軟質。1a類。	不明 変形 [SI-22B]
28 焼粘土 土師質	長 4.7×4.0 厚 1.0 重 14.74g	面の左側が平坦で、右面はやや凹凸あり。両面にも植物の茎の圧痕を残す。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂やや多量、白細粒少量。軟質。1a類。	不明 焼成後に一隅を破損。 [SI-22B]
29 焼粘土 土師質	長 3.0×3.8 厚 1.0 重 10.22g	両面とも凸面気味。両面に植物の茎の痕が少量ずつ付着。片面には陥凹痕が二箇所見られるので箱蓋と考えられる。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒細砂やや多量、透明細砂・白細粒少量。軟質。1a類。	不明 変形 [SI-22B]

第52表 SI-22B 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	盤・皿	重	高坏	鉢	小形土器	甕・瓶	小形甕	長頸	甌	大甕	炭灰土	その他
土師器	191			6	22	1			9				
器 体部	有			脚柱1	有				有				124
器 底部				鋸4		1			2				
須 口縁部													
器 体部													
器 底部													

土師器の削りかす8点・土師器未製品の焼成品3点。
古墳時代前期の土師鉢2片入。

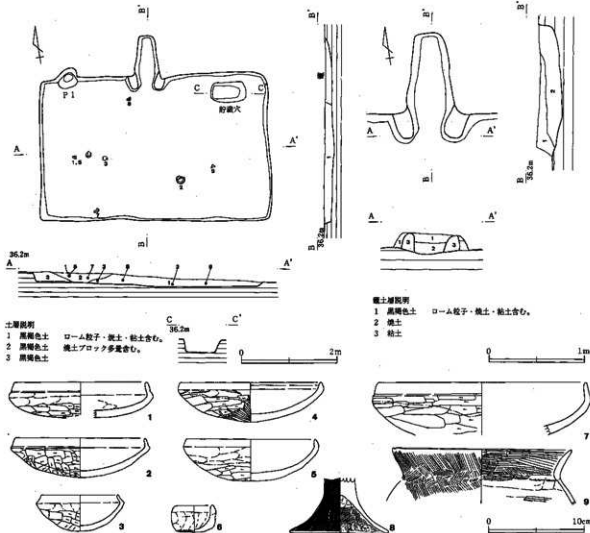
SI-23 (第49図、写真図版9・33)

本建物跡は、調査区の北部中央にあり、台地上の東へ弱く傾斜する平坦面に位置する。重複する遺構はなく、北に少し離れてSI-09が所在する。

長方形で、東西4.8m、南北3.0~3.1m、主軸方向はMN-10°-Eである。西壁は確認面から18cm程、東壁は8cm程が残り、立ち上がり角度は65~70°である。周溝は見られない。床面はほぼ平坦である。北壁に壁柱穴が1本あり(P1)、確認面で径42cm、深さ54cmである。この深さは、おそらく床面から測った値と思われる。貯蔵穴は北東隅にあり、東西75cm・南北43cm、床面からの深さ28cmで、断面は逆台形状である。

竈は、北壁のやや西寄りにある。掘形は北壁を幅52cm、奥行き86cm程の長U字形の平面形に掘り込み、東側だけは地山のローム層を少し掘り残して東袖の東半部とする。袖は粘土で作り、西袖は幅30cm・長さ30~32cm、東袖は地山削り出しの突出部の西側に幅20cm・長さ25cmの大きさの粘土が残存していた。粘土の北端は、竪穴の壁面から燃焼部の中に西袖が約10cm、東袖が約20cm入り込んでいた。焚口部から燃焼部へ少し下ったのに、2~3°のわずかな傾斜で煙道が上がりながら続き、北端で急に立ち上がって終わる。

竪穴の埋土は2層で、どちらも黒褐色土である。床面直上から出土した遺物は2の完形の土師器杯が1点



- 土層図例
- 1 黒褐色土 ローム粒子・粘土・粘土含む。
 - 2 黒褐色土 焼土ブロック多量含む。
 - 3 黒褐色土

- 竈土層図例
- 1 黒褐色土 ローム粒子・粘土・粘土含む。
 - 2 焼土
 - 3 粘土

第49図 八幡根遺跡 SI-23 遺構・遺物

で、ほかは埋土中から出土した。ただし、堅穴建物自体が、埋土の下部15cmほどしか残っていないので、どの遺物も埋土下部の遺物であることは確かである。

出土遺物 土師器は漆仕上げをするものに身模倣形の2・7と壺模倣系の4・5がある。漆を使わないものには身模倣形の1と3がある。3は小形だがきちんとした作りで、6のような手握ね成形の小形土師器とは違う。4は外面底部を不自然に磨いているので、焼成前の亀裂などを補修している可能性がある。ただし、現状で残存する破片部分に亀裂などを確認出来ないで、確実ではない。

この他に、古墳時代前期の高坏と甕も混入して見られる(8・9)。

第53表 SI-23出土遺物

番号 器種	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況 注記
1 土師器	口 復13.8 高 3.8 大 復15.3	外面にごく弱い稜状の段、内面には明瞭な稜を持って口縁部は少し内傾する。外面全体での後、底部一方向、体部横方向の磨削り。内面は体部横断の後、横断で。口縁部内外面横断で。	2.5Y8/4 淡黄色 黒灰あり	緻密で黒・透明細砂少量。 やや軟質。1b類。	底上14cm 底1/4周 口1/4周 [2]
2 土師器	口 13.8 高 4.2 大 14.8	丸底で、口縁部は内外面に明瞭な稜と段を持つ。外面は体部上位に横断の後、底部多方向、体部横方向の磨削り。口縁部外面と内面全面は横断で後に漆仕上げ。漆は外面中央位まで及ぶ。内面には細かい明瞭が多い。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で白緑粒・透明細砂少量。 軟質。	漆面 体全面 口11/12周 [5]
3 土師器	口 復 8.2 高 3.8 大 9.3	丸底で体部は深く急で、口縁部は内外面に明瞭な稜を持って強く内傾する。外面は体部に横断の後、底部に一方向の磨削り、体部下位に横断磨削り。口縁部外面と内面全面は横断で。	10YR7/4 にぶい黄褐色	やや粗い。灰砂と白粒・細粒多量、黒・透明細砂少量。 やや軟質。	底上 6cm 底一帯1/2周 口1/3周 [4]
4 土師器	口 15.0 高 4.2 大 15.5	丸底で、口縁部は外面が明瞭な稜を持って内傾し、内面は弱い稜を二条持つ外縁部。外面は体部に横断の後、横断磨削り。底部は一方向の磨削りの後、一方向の磨削り。磨削用磨盤がさうでないか不明。口縁部外面と内面全面は横断後に漆仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色 黒灰あり	緻密で黒細砂少量。 軟質。1b類。	口一帯1/2周 「電」
5 土師器	口 13.8 高 4.4 大 14.3	丸底で、口縁部外面に弱い稜を持つ。外面体部に横断の後、底部一方向、体部下位横方向の磨削り。内面全面と口縁部外面は横断の後、漆仕上げ。外面の漆は体部中央位まで及び、内面中央の漆は使用により薄くなっている。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒・透明細砂少量。軟質。 1b類。	底上14cm 体全面 口7/12周 [2]
6 小形土師器	口 4.0 底 3.5 高 2.8 大 4.7	体部下位はやや厚く、底部は中央が突出気味でやや窪み、体部は内磨する。中位以下を手握ねで成形した上に粒土紐を1段積み上げる可能性がある。体部内外面は横断で、外面はやや磨。口縁部内外面横断で、底面は手持り磨削り。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒・透明細砂少量。軟質。 1b類。	埋土中 口一帯1/2周 「フク土」
7 大形土師器	口 復29.0 大 復32.2	厚く丸底で、口縁部外面に弱い稜を持って内磨する。外面は体部横断磨削り。内面全面と口縁部外面は横断で、漆仕上げ。	2.5Y6/2 灰黄色	緻密で黒粒は目立たず、白細粒と透明細砂少量のみ。 軟質。	底上11cm 体1/6周 口1/8周 [1]
8 高坏土師器	高 10.5	粘土で押し集めて成形した中実の脚柱部を持つ。脚部～器部外面は横断する。内面は器部脚柱目の後、器部横断で、上部に横断磨削り。外面赤銅の可能性が高い。古墳時代前期の遺物が混入。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白砂・透明細砂少量。 やや軟質。	底上10cm 体全面 口7/12周 [7]
9 土師器	口 復19.0	胴部は内外に稜を持って折れる。口縁部内外面と肩外面刷毛目。内面は刷毛刷毛目、胴部上位横断の後、口縁部を成形して頸部以上に横断。古墳時代前期の遺物が混入。	10YR7/4 にぶい黄褐色	やや粗い。白砂・粒・細粒と黒・透明細砂やや少量。 硬質。	底上 7cm 口一帯1/4周 [6]

第54表 SI-23 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

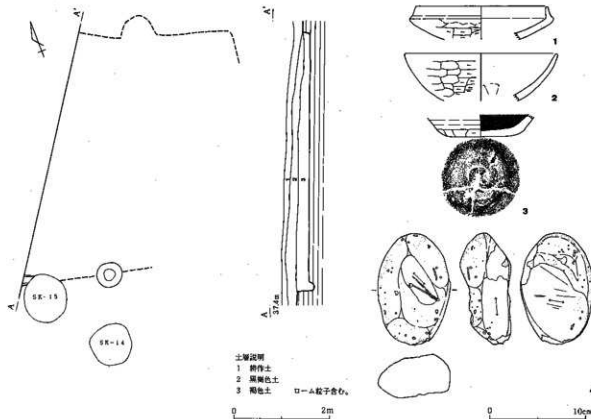
	罎・皿	蓋	高坏	鉢	小形土師器	壺・瓶	小形壺	長壺	瓶	大甕	焼粘土	その他
土 口縁部	189				1		2		10			
脚 体部	有		脚柱2						有			20
器 底部			壺4		2			5				
須 口縁部												
壺 体部												
器 底部												

土師器りかす1点。
古墳時代前期の土師器やや多い。古墳時代中期の土師器椀形杯の底片・近世陶器1片・近世磁器1片・平安時代の土師器少量混入。

S1-24 (第50図、写真図版9・52)

本建物跡は、調査区の北部やや西寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。SK-15と重複するが、新旧関係は不明である。また、西壁際は調査区外になっている。南にSI-25、SI-26が近接する。

平面形は、残存状況が悪いためはっきりしていない。推定部分では、東西5.2m以上、南北5.2m前後であり、平面形は、西側がやや広がる不整な方形を呈していると思われる。主軸方向もMN-10°-E程度を示す。壁は、西壁断面図から判断して、確認面から南壁で26cm程、北壁で16cm程遺存していたと思われる。また、その立ち上がりは、80~85°であったと推定される。周溝は、南壁際の西側に一部検出された。幅20~23cm程、深さ11cm程であり、断面は槽鉢状である。床面はほぼ平坦であると思われる。柱穴は、南壁推定ライン



第50図 八幡根遺跡 SI-24 遺構・遺物

第55表 SI-24出土遺物

番号 器種 種類	注量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 質	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 復14.0 大 復15.3	口縁部は内外面に明瞭な稜と段を持って少し内傾する。外面は体部に 縁な強の後、体部横溝あり。内面一口縁部内外面は横溝で。	10YR7/3 に灰黄橙 色	磁器で黒・透明細 砂少量。軟質。 1m。	埋土中 口一休1/9 周
2 坏 土師器	口 約16.0 高 残 4.8	小破片からの復元部なので形状は確実ではない。やや厚く、深身。口 縁部は稜線を持たずに内彎する。外面は、口縁部横溝で後に体部横溝 あり。内面は寛楕で後、横溝で。	2.5Y8/3 淡黄色	磁器で混和材は目 立たず。透明細砂 少量のみ。軟質。	埋土中 口1/12周
3 坏 土師器	底 7.0	やや厚く平底で、底面外周は少し下へ突出する。体部外面は口ク口楕 で。底部回転施切り難し後、無調整。体部下端手持ち施削り。底切り 時口ク口右回転。内面は底部一方向、体部横溝あり。内面は全面黒色 処理らしいが残りは悪い。平安時代の遺物が混入。	2.5Y8/4 淡黄色	やや粗い。黒細砂 多量、白細粒・透 明細砂やや多量。 軟質。	埋土中 底全周
4 磨石 石器	長 11.8 幅 7.7 厚 5.4	平らかめの石を使う。表裏両面の中央部で直線的な工作対象物または 刃を砥ぐように使用した可能性がある。図示した一側面を、縄文時代の の磨石と同様に対象物に磨り付けて使っている。重311gで水には浮か ない。		軟質で多孔質の安 山岩質の磨石。	埋土中 完形 「フク土」

上に1本検出された。径55cm、深さ54cmであるが、あくまでも推定ライン上のピットであるため、本建物跡に係わるピットかどうかは不明である。貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北壁中央付近に位置していたと思われる。残存状況は非常に悪く、竈の残存層土が約5mmであったため、掘形を推定するにとどまる。その掘形は北壁を幅82cm程、奥行き46cm程の平面U字形に掘り込んでいたと思われる。

埋土は1層で、ローム粒子を含む褐色土である。

出土遺物 遺物は少なく、どれも埋土中出土の小破片である。古墳時代終末期の土師器環2片と、平安時代の内面黒色処理の土師器環1片を図示した。3は焼切り離しの土師器である。

遺物の割合が多いので、古墳時代の建物跡であると判断した。

第56表 SI-24 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	環	壺・豆	蓋	高環	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甌	大壺	埴輪土器	その他
土師器 口縁部	38				1								
土師器 体部	有			脚柱1	有				有			2	
土師器 底部	平底4								1				
須恵土 口縁部													
須恵土 体部													
須恵土 底部													

多孔質安山岩の磨石1点。

古墳時代前期の土師器少量と、平安時代の土師器少量混入。

S1-26 (第51~52図、写真図版10・33~34・53・55)

本建物跡は、調査区の中央部北西寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。建物の西半分は調査区外である。南東コーナーをSI-25に切られていると思われるが、SI-25がほとんど削平されてしまっているため確認できない。出土遺物からみると、平安時代の建物であるSI-25のほうが新しい。

確認された部分では、東西5.2m以上、南北7.4m程であり、平面形は方形を呈し、主軸方向はMN-II' - Eを示す。壁は確認面から南壁で40cm程、北壁で38cm程遺存しており、その立ち上がりは、85°程の傾きで垂直気味に立ち上がっている。周溝は、南壁際から東壁際、北東コーナーにかけて検出された。幅は南東コーナーで32cmであるほかは、概ね15~29cm程であり、断面は皿状で、深さは10cmである。床面は、中央部南西寄りがやや低く、北壁際がやや高くなっており、比高差9cmである。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、北壁東寄りに検出された。長径45cm、短径33cmの平面楕円形を呈し、深さは最深59cmである。その断面は摺鉢状で、底面はやや内彎している。

調査区内では竈は検出されなかったが、北壁中央付近にあると推定される。北壁際の3層に、竈の存在を示すと思われる焼土・粘土を含む灰黄褐色土の流れ込みがみられる。

埋土は、耕作土層、黒褐色土層を除き、5層に分層される。壁際に、壁崩落土と思われるロームブロックを含む黒色土がみられるほかは、南側がロームブロックを含む褐色土、北側がロームブロック、粘土を含む黄褐色土である。

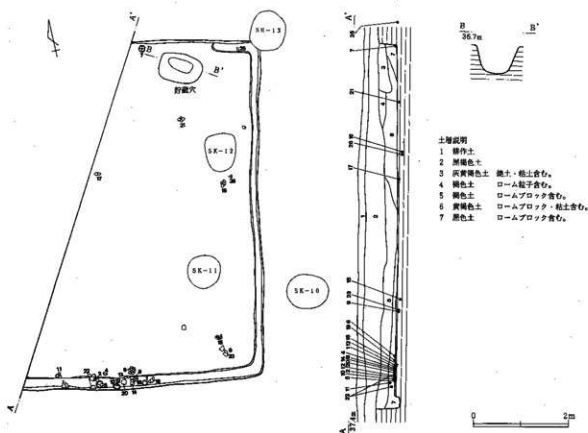
出土遺物 1の須恵器坏身は床面直上に遺棄された完形品。形態が崩れず、自然釉の厚い部分が二次林起源の緑灰色なので、早くから継続操業している窯跡群からの搬入品と考えられる。対応する壺の口径は推定10.5cmで、この段階にお口縁部が高く底部に同心円状2周の回転削りをする点は陶器産とは異なる。器高が低く、底中央の削りが平坦気味で、受部下位が強くくぼみ、口縁部と受部が高く、胎土の白色味が弱くて釉が赤褐色に発色する点は、猿投窯に類似があり(斎藤1988)、湖西窯製品とは異なる。猿投窯の製品

で、東山50号窯期に該当するという御教示を柴垣勇夫・井上喜久男・城ヶ谷和広氏から頂いた。

土師器は、竈付近が調査区外なので甕・瓶類が少ない。図示した土師器はどれも残存率が高く、床面出土品も多い。2～4は漆仕上げをしない身模倣形環である。他の環は16以外は漆仕上げで、身模倣形と蓋模倣系がある。20と21は口縁部上半が外面でやや内彎してはいるが、栃木県城中央部で見られる7世紀代の内彎口縁環にくらべると、底の丸味が強くて深く、口縁部が短い点異なる。

22の鉢は大形形で、SI-14や22Bのものにくらべて口縁の外反がみられない。23の鉢も大形で、焼成前に底部に入った亀裂を荒磨きで補修している。この鉢の胎土は、他の建物跡から出土している補修土師器・土師器削りかす・土師器未製品に多い1a類とはやや違つて、混和材がほとんど見られない、非常に軟質で緻密な浅黄褐色土(2類)である。

28は粘板岩製の粗雑な玉で、SI-53出土例と、平安時代の竪穴建物跡SI-04Aへの混入品に類例がある。

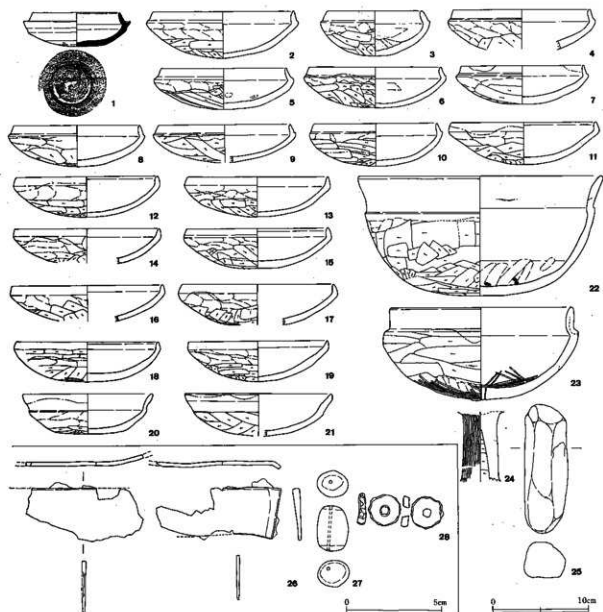


第51図 八幡根遺跡 SI-26 (1) 遺構

第57表 SI-26 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	甕・甌	壺	高坏	鉢	小形土師	甕・瓶	小形甕	長甕	甌	大甕	粘粘土塊	その他
土	口縁部	271			4	12		1		16			
師	体部	有		脚柱2	有					有		12	
器	底部			甗6	2				3				
須	口縁部	1											
應	体部												
器	底部												

土玉1点・粘板岩の玉1点・鉄製の鉢1点・磁物石1点。
古墳時代前期の土師器少量と、平安時代の土師器少量混入。



第52図 八幡根遺跡 SI-26 (2) 遺物

第58表 SI-26出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 土成	出土状況 残存状況 注記	
1 環身 須臾器	口底高 大	9.2 4.2 3.6 11.3	薄く丸底だが、底面中央は平坦に近い。外面は受部の下位が強くくぼみ、受部はやや長く上に伸びて、蓋受は深い。受部が貼り付け成型の可能性は低い。外面底面は外周の後に中央を回転彫削し、あわせて2層の同心円状。口径10.5cmと考えられる蓋を蓋せて焼成した痕跡あり。受部を中心に緑灰色の自然釉が付き、浅黄色に汚く溶ける部分の割合が高い。体部外面の釉は薄く緑黒色で、所によりにおい赤褐色に染色する。	N7/0 灰白色	緻密で白砂と透明 緑砂少量。硬質。	床直 口～底 [12]
2 環 土師器	口高 大	14.8 5.0 16.1	薄く丸底。口縁部は内外面に明瞭な稜と段を持って内傾する。外面は体部に施された後、底部一方向彫削り、体部横彫削りし、あわせて2層の同心円状。口径10.5cmと考えられる蓋を蓋せて焼成した痕跡あり。受部を中心に緑灰色の自然釉が付き、浅黄色に汚く溶ける部分の割合が高い。体部外面の釉は薄く緑黒色で、所によりにおい赤褐色に染色する。	10YR4/2 灰黄褐色	緻密で白砂とごく 少量。軟質。	床直 口～底3/4 周 [4]
3 環 土師器	口高 大	9.7 4.9 11.6	丸底で、口縁部は外面にゆるい段、内面に不明瞭な稜を持って内傾している。外面体部施された後、底部一方向、体部横方向彫削り。内面体部横彫削り後、内面全面と外面口縁部は横削り。	10YR2/4 浅黄褐色	緻密で黒黒砂ごく 少量。軟質。10順。	運土中 口～底3/4 周 「フク土」

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
4 環 土 師器	口 復14.4 高 4.3 径 15.6	底部はやや厚く、内外面に明瞭な縁と段を持って内傾する。外面は体部に隴な縁で、後、裏縁でして、下位に多方向彫削り。口縁部外面と内面全面は横縁で、漆仕上げ。	10YR8/3 淡黄褐色	織帯で黒縁粒・透明細砂ごく少量、やや軟質。	床直 口～底1/3 周 [6]
5 環 土 師器	口 12.9 高 4.4 径 14.8	薄く丸底で、口縁部は外面に広い段、内面に明瞭な縁を持って内傾する。外面体部に隴な縁で、後、底部をほぼ一方方向彫削り。内面全面と外面口縁部横縁で、漆仕上げ。内面体部に指圧痕あり。	7.5YR7/4 にぶい橙色	織帯で赤・白縁粒ごく少量、軟質。	床直 口～底6周 径 [6]
6 環 土 師器	口 13.8 高 4.3 径 15.0	薄く丸底。口縁部は内外面に明瞭な縁と段を持って内傾している。外面は体部に隴な縁で、後、底部多方向、体部および横方向彫削り。内面全面と外面口縁部横縁で、漆仕上げ。	10YR6/2 淡黄褐色	織帯で黒和泥は目立たず、透明細砂ごく少量のみ、軟質。	床直 口～底3/4 周 [11]
7 環 土 師器	口 13.0 高 4.1 径 14.0	丸底で、口縁部は内面に明瞭な縁、外面に浅い凹縁を伴う広い段を持って内傾する。外面は体部縁で、後、底部一方、体部は横方向彫削り。体部横削削りの方向は通常と逆。口縁部内外面から体部内面は横縁で、口縁部内外面のくぐくぐに漆が付着するが、内外面の広い凹縁を漆仕上げした様子はない。	2.5Y8/2 灰白色	織帯で白細粒ごく少量、軟質。	床直 体全周 口径/3周 径 [21]
8 環 土 師器	口 13.4 高 4.4 径 14.5	丸底で、口縁部は内面に明瞭な縁と外面にゆるい段を持って内傾する。外面体部縁で、後、漆仕上げ。内面全面と口縁部外面を横縁で、漆仕上げ。	7.5YR7/3 にぶい橙色	織帯で黒和泥は目立たない。軟質。	床直 口～底7/12 周 [8]
9 環 土 師器	口 復13.8 高 4.0 径 15.1	丸底で、口縁部は内外面に明瞭な縁と段を持って広く内傾する。外面は底部一方、体部横方向、または底～体部は一方方向の彫削り。口縁部外面と内面全面は横縁で、漆仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色	織帯で黒和泥は目立たない。軟質。	床直 口～底1/5 周 [16]
10 環 土 師器	口 12.9 高 4.5 径 14.1	薄く丸底。口縁部は内外面に明瞭な縁と段を持って内傾する。外面は体部に隴な縁で、後、底部一方、体部横方向彫削り。内面全面と外面口縁部横縁で、漆仕上げ。漆仕上げは体部中央まで及ぶ。	7.5YR7/3 にぶい橙色	織帯で黒和泥はほとんど見られない。軟質。	底上4cm 口～底6周 径 [7]
11 環 土 師器	口 復15.2 高 4.5 径 16.0	やや薄く丸底で、口縁部は外面に明瞭な縁、内面にゆるい丸縁を持って広く内傾する。外面は体部縁で、後、底部一方、体部は横方向彫削り。口縁部外面と内面全面は横縁で、漆仕上げ。	3.5Y8/3 淡黄色 黒底あり	織帯で黒和泥はほとんど見られない。軟質。	床直 底全面 口～底1/2 周 [1]
12 環 土 師器	口 15.0 高 4.3 径 15.4	薄く丸底。口縁部は内外面に不明瞭な縁を持ってわずかに内傾気味。内面口縁縁は弱い外傾。外面は体部縁で、後、底部一方、体部横方向彫削り。内面全面と口縁部外面は横縁で、漆仕上げ。	7.5YR7/3 にぶい橙色	織帯で白細粒・透明細砂ごく少量、軟質。	底上11cm 口～底2/3 周、底全面 径 [7]
13 環 土 師器	口 14.7 高 4.2 径 15.4	やや薄く丸底。口縁部内面は弱い縁を持って直立し、外面はやや明瞭な縁を持って内傾する。外面体部縁で、後、底部一方、体部横方向彫削り。内面全面と外面口縁部は横縁で、漆仕上げ。	10YR8/3 淡黄褐色	織帯で黒・透明細砂ごく少量、軟質。	床直2cm 全周 径 [9]
14 環 土 師器	口 復15.2 高 4.3 径 15.6	薄く、口縁部外面は弱い縁を持って内傾する。外面は体部に隴な縁で、後、下位に多方向、中央に横方向の彫削り。口縁部内外面と体部内面は横縁で、漆仕上げ。体部内面は薄く彫削るようになっている。	7.5YR8/3 淡黄褐色	織帯で黒和泥は目立たず、赤・白縁粒と透明細砂ごく少量、軟質。	床直 口～底1/4 周 [8]
15 環 土 師器	口 14.8 高 4.2 径 15.7	やや薄く丸底で、口縁部は外面に浅い凹縁状のくぼみを伴う縁を持ち、内面は不明瞭な縁を持って内傾する。外面は隴な縁で、後、底部一方、体部多方向の彫削り。内面全面と口縁部外面は横縁で、漆仕上げし、外面底部中央は漆がごく薄い。	10YR8/3 淡黄褐色	織帯で黒和泥はほとんど見られない。軟質。	床直 口～底7/12 周 [15]
16 環 土 師器	口 復15.8 高 3.8 径 16.4	薄く、口縁部は外面に明瞭、内面に弱い縁をそれぞれ持ってわずかに内傾する。外面は体部に隴な縁で、後、中位以下に多方向彫削り。口縁部内外面～体部内面は横縁で、漆仕上げ。	10YR8/3 淡黄褐色 黒底あり	織帯で透明細砂や少量、白縁粒少々、軟質。	床直 口～底1/2 周 [17]
17 環 土 師器	口 復16.0 高 4.3 径 16.9	薄く、口縁部は外面に縁を持って内傾している。外面は体部に縁で、後、底部一方、体部多方向の彫削り。内面全面と口縁部外面に、横縁で、漆仕上げ。	7.5YR8/3 淡黄褐色	織帯で黒和泥は目立たず、白縁粒少量のみ、軟質。	埋土中 口～底1/3 周 [8]
18 環 土 師器	口 復15.2 高 4.3 径 15.5	底部は厚く丸底。口縁部は外面に明瞭な、内面にやや弱い縁をそれぞれ持ってわずかに内傾する。外面は体部縁で、後、底部一方方向の彫削り、体部上端に横方向の彫削り。外面底部に寛着さみうの短楕が3本。口縁部内外面から底部内面は横縁で、漆仕上げ。	5Y8 / 3 淡黄色 黒底あり	織帯で黒和泥は目立たない。軟質。	床直 口～底1/6 周と底全面 径 [10]
19 環 土 師器	口 14.6 高 4.3 径 14.8	薄く丸底。口縁部は内外面にやや弱い縁を持って直立する。外面は体部縁で、後、底部多方向、中央横方向彫削り。内面全面と外面口縁部は横縁で、漆仕上げ。	7.5YR7/4 にぶい橙色	織帯で透明細砂ごく少量、軟質。	床直 底～口径2/3 周 [13]
20 環 土 師器	口 14.0 高 4.3	底部はやや厚く、ゆるい丸底。外面に段、内面に弱い縁を持って口縁部は隅き、内面上半部は外反気味。外面体～底部縁で、後、突出気味の底部には中央部～多方向の緩な彫削り、体部は横削削り。内面全面と口縁部外面は横縁で、漆仕上げ。	7.5YR7/3 にぶい橙色	織帯で白粒・細粒少々。透明・黒細砂ごく少量、軟質。	床直 完形 発掘時に破壊か [8]

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
21 坏 土師器	口 15.7 高 4.6	ややく丸底。外面にわずかな段を持って、口縁部の下半が外反し、上半の外面が内彎する。外面体一底部は多方向彫削り。口縁部内反し一底部内面は横溝で、漆仕上げ。	10YR8/3 浅黄褐色 黒度あり	緻密で白地粒少量。 軟質。	床直 口5/4周 体1/2周 「20」
22 鉢 土師器	径26.0 高 12.7 大 径24.4	厚く丸底。腹部外面に残り段、内面にごく弱い段あり。口縁部は厚く丸味を持つ。外面は体部上位置での後、体部はほぼ横方向、底部多方向の彫削り。内面は底部無地で、経線ともに8本/cm前後の平織物任意が多い。上半部内面一口縁部外面は横溝で。	7.5YR8/3 浅黄褐色	緻密で混和材はほとんど目立たず、透明細砂ごく少量。 軟質。	床直 口一底1/3 周「3」と 「3」
23 鉢 土師器	口 径19.6 高 9.8 大 径20.5	厚く丸底で、口縁部は外面に明瞭な段、内面に弱い段を持ってほぼ直立する。外面は体部横方向の彫削り。底部は亀裂部に推での後、彫削り。内面は体部横方向での後、亀裂部に彫削り。口縁部内面横溝で、内面全面と口縁部外面に漆仕上げ。底部付近から体部へ亀裂が入ったため、見磨きで補修している。	7.5YR8/3 浅黄褐色	緻密で混和材はほとんど見られない。 赤・白地粒少量。 軟質。2類。	床直 口5/12周 底全面 体1/3周 「16」
24 高坏 土師器	脚 3.5	脚部は円筒状で、坏部と脚部は段を持って外へ彫削る。脚柱部上面の粘土接合面は中央が欠くくぼむ。脚柱部外面は見磨きで、脚部内面は刃が長い工具で彫削り。古墳時代中期前半の遺物が混入。	7.5YR7/6 褐色	緻密で白・灰色彩多量、白・透明細砂やや多量。 やや硬質。	埋土中 脚柱部全面 「フタ土」
25 埋物石	長 13.6 径 4.4×3.7 重 362g	断面が不整四角形～五角形の自然の河原石をそのまま利用。加工は見られない。		緻密で硬質の流紋岩	埋土中 完形 「フタ土」
26 磨 鉄製品	長 6.2と6.7 幅 2.8 重 24.44g	刃部の破片である。出土時には1点であったが、現在は大破片2片と細片多数になり、これ以上接合できない。出土状況図によると長さ10cm未満だったらしい。棟幅は2mm。右端部(?)は鋭く短く手前が折り返す。中央部は破損時に変形して曲がったものと思われる。			埋土中 刃先欠損 「19」
27 土玉 土製品	径14～17mm 長 24.5mm 重 8.85g	手捏ね成形後、横溝で調整。孔径は図の上面で1.7mm、下面で1.5mm。焼成前穿孔で、片加穿孔孔、または成形時に通してあった帯を引き抜いて孔をつくる。表面全面横溝だったようで、各所に薄く漆が残る。	10YR6/2 灰黄褐色	緻密で混和材は目立たない。軟質。	床直 完形 「17」
28 玉 粘板岩	径16～17mm 厚 3.7mm 重 1.50g	表面面は彫削方向に沿った斜断面のまま、研磨痕なし。断面は工具による切削面で、所によって少し研磨している可能性もあるが、確実な研磨痕は認められない。孔径4.4mmで片面穿孔。		軟質の粘板岩。	埋土中 完形 「フタ土」

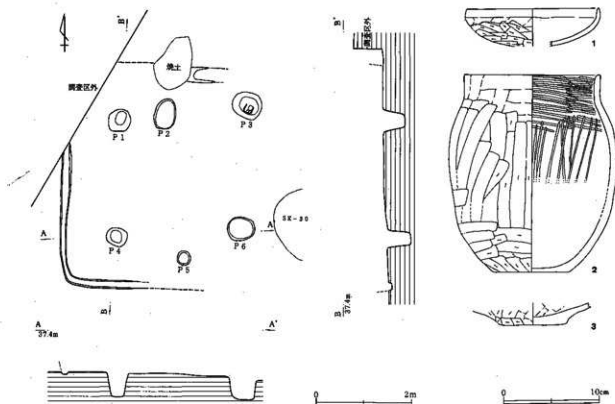
S1-27 (第53図、写真図版10・34)

本建物跡は、調査区の西部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複する遺構はない。北東にS1-26が近接している。本建物跡の北西コーナーは、調査区外である。

平面形は、西壁際から南西コーナーにかけてと竈東の一部以外、削平されてしまっていて、確認できない。残った部分から推定して、南北4.8m程の平面隅丸方形を呈し、主軸方向はMN-1'-E程度を示すと思われる。壁は遺存していなかった。周溝は、遺存している西壁際から南西コーナーにかけてと、竈東の一部に検出された。幅は竈東で33cmであるほかは、概ね9～20cm、深さは5cmであり、断面は皿状である。床面は西壁際が高く、東側に向かってゆるやかに傾斜しており、その比高差は18cmである。主柱穴は3本検出され(P1, P4, P6)、本来は4本であろう。P1は径52cm、深さ43cm、P4は径44cm、深さ52cm、P6は長径58cm、短径50cmの平面楕円形で、深さ44cmである。いずれも断面円筒状に掘られていた。P3は長径63cm、短径55cmの平面楕円形で、深さ35cmあり、貯蔵穴の可能性もある。この他にピットが2本検出された(P2, P5)。P2は長径64cm、短径46cmの平面楕円形で、深さ48cm、P5は径32cm、深さ30cmである。その位置から、P2は竈に係わるピットかもしれない。P5は入口に係わるピットと思われる。

竈は北壁中央付近にある。残りが非常に悪く、わずかに焼土が残存するにとどまる。北壁を北に掘り込む部分とその南の床面に、長径120cm、短径80cmの不整な平面楕円形に広がっているのが確認された。

出土遺物 図示した土師器のうち、坏と甕は小破片である。甕は底部が突出し、浅黄色～ぶい黄褐色の軟質なので、坏と同様に古墳時代終末期前半のものだろう。小形甕は残りが良く、貯蔵穴内に遺棄された品である。坏とともに胎土1a類である。甕・小形甕ともに加熱使用痕跡がないので、貯蔵容器の可能性がある。



第53図 八幡根遺跡 SI-27 遺構・遺物

第59表 SI-27出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 産地	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 径14.0 残 4.9 大 径14.4	口縁部外面は稜線を誇り、わずかに内傾する。内面の稜線は弱く、やや強だが確で、整っていない。外面は体部端の後に体部墳方向、底部一方方向の彫削り。内面全面と口縁部外面は焼後、磨仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄褐色 黒灰あり	やや緻密で黒輝砂 やや多量、白細粒 ・透明細砂少量。 軟質。1a類。	壺土中 □1/4周
2 小形壺 土師器	口 径 14.5 底 高 8.0 全 高 20.9	平底で、頸部は不明瞭。口縁部端は平面面をなす。外面は頸部端の後に、胴部彫削り、底面一方方向彫削り。内面は強で後、上半部磨き。口縁部内外面はあまり横線をしない。加熱使用痕はみられない。	2.5Y7/4 浅黄色	やや緻密で黒輝砂 多量、白細粒・透明 細砂やや多量。 軟質。1a類。	壺土中 底□2周 □11/12周 [7]
3 壺 土師器		平底で、下へ突出する。底部～胴部外面は強で後に斜め彫削り、底面は一方方向彫削り。内面は多方向彫削り。	10YR7/3 にぶい黄褐色	粗い。白灰色砂多 量、黒・透明細砂 やや多量。軟質。	壺土中 底全周

第60表 SI-27 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甗	大甗	焼粘土塊	その他
土 口縁部	26							7					
土 体部	有												
土 底部						1		平底3	2		2		
須 口縁部													
土 体部													
土 底部													

古墳時代前期の土師器ごく少量混入。

SI-28 (第54~56図、写真図版10・11・34~35・54)

本建物跡は、調査区の中央部東寄りにあり、台地上の東斜面に位置する。重複関係としては、SI-18より古く、北東コーナーをSI-18によって切られている。

平面形は、東西6.2m、南北6.5mの平面隅丸方形を呈し、主軸方向はMN-8°-Eを示す。壁は確認面から西壁で24~30cm程、南壁で18cm程、東壁で12~20cm程遺存しており、傾きは西壁で65~80°程、南壁で80°程、東壁で50~60°程である。周溝は検出されなかった。床面は西壁際が高く、東側に向かって傾斜しており、その比高差は26cmである。

主柱穴は4本検出された(P1~P4)。P1は径38cm、深さ93cm、P2は径57cm、深さ90cm、P3は長径74cm、短径61cmの平面楕円形で、深さ82cm、P4は長径57cm、短径44cmの平面楕円形で、深さ88cmである。掘形は、いずれも断面円柱状である。このほかに、ピットが4本検出されている(P5~P8)。P5は径45cm、深さ68cm、P6は径26cm、深さ34cm、P7は径40cm、深さ75cmである。P8は竈の項で述べる。

貯蔵穴は、北西コーナー(貯蔵穴1)と北東コーナー(貯蔵穴2)で検出された。貯蔵穴1は長径90cm、短径62cmの平面楕円形で、深さ44cmである。断面は鍋底状で、底面は平坦である。貯蔵穴2は長径93cm、短径62cmの平面楕円形で、深さ79cmである。断面は指鉢状で、底面は平坦である。

竈は、北壁中央わずかに西寄りに位置する。煙道天井部が崩落しているものの、両袖部が残るなど、本調査区の中では残存状況は比較的良好いほうである。規模は袖幅94cm、奥行き93cmである。袖は、粘土を用いて構築されている。両袖の先端に、瓶が1/2個体ずつ倒立した形で貼り付けてあったが、袖の補強材として使用されたものと思われる。煙道は平面円筒状で、燃焼部中央から14°の傾きでゆるやかに立ち上がり、B'の南11cmの所からは70°の傾きで急激に立ち上がっている。燃焼部から煙道にかけて、焼土が最深19cmの厚さで認められた。長期間使用していたものと思われる。掘形は、北壁を幅90cm、奥行き61cmの平面段を持つ溜斗状に掘り込んでおり、さらに北壁前の床面を東西60cm、南北50cmの平面端正な楕円形に掘り窪めている。その深さは床面から最深13cmであり、断面は深い皿状である。また、左袖の付け根に径19cm、深さ17cmのピット(P8)が検出されたが、用途は不明である。

埋土は8層に分層される。大半は、ローム粒子を含む褐色土である。

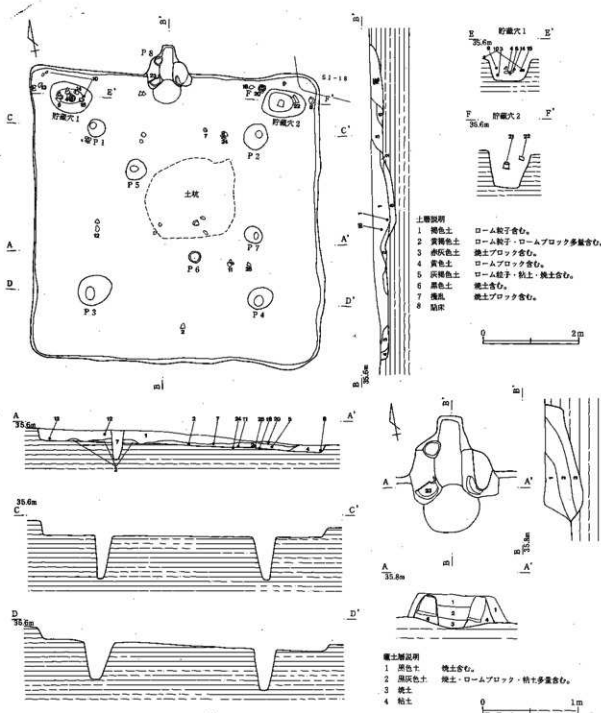
中央部の土坑 床面中央に土坑が1基ある。平面形は不整な隅丸方形、断面は皿状で、東西193cm、南北170cm、深さは最深26cmである。SI-13に類似がある。

発掘調査時の平面図には「全体にナベ底状に掘り下げており、貼り床としている部分」と記載されているので、床下土坑だと考えられる。埋土はローム粒子とロームブロックを多量に含む黄褐色土である。断面図BB'の2層と8層は、断面図の原因では単一の層として記載されている。しかし、「貼り床としている」という平面図の記載を尊重して、土坑上面に貼床面を推定してそこを境に2層と8層に分割して図示し、貼床と思われる部分を8層とした。土層断面写真がないので、2層と8層についての上の判断は確実なものではない。

この土坑は、床面に開いていた可能性も残る。上記の断面図で埋土を単一としている点から、上面まで完全には貼床で埋められていなかったと判断した場合の解釈である。その場合は、土坑周囲の柱穴や、普通よりも一つ多い貯蔵穴とともに、何かの作業用施設の可能性がある。土師器製作に関わる施設と考えるのも一案である。この建物跡には、土師器不良品・土師器削りかす・焼粘土塊が多い。ただし、焼粘土塊や削りかすの出土位置・状況とこの土坑との関係は不詳で、土坑と土師器製作との関係ははっきりしない。

出土遺物 床面付近や貯蔵穴から出土した土師器には、遺存度の高いものが多い。漆仕上げのものでは、壺模倣系環(8~11・13~16)が、身模倣形環(3・5・7)よりも多い。漆を使わないものではこれと反対に、身模倣形環(1・2・4・6)のほうが壺模倣系環(12)より多くなる。24の甗は、鉢に穿孔したような形で、上部だけを見ると鉢と区別できない。22は貯蔵用の大形甗だろう。食器類の胎土は、1a類よりも1b類のほうが多い。

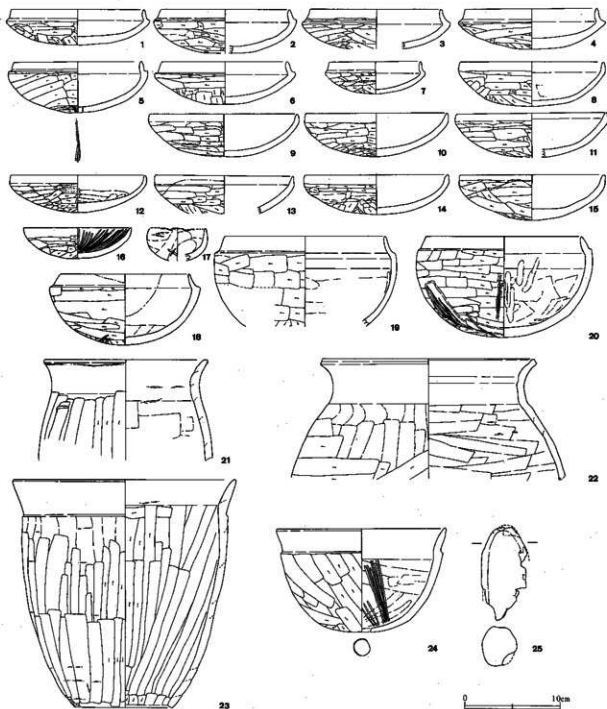
5・18・20は、製作・乾燥時に破損した土器を補修して製品にしている。24も、破損や亀裂を現状では観



第54図 八幡根遺跡 SI-28 (1) 遺構

察できないが、部分的に集中して磨くので、補修用磨き磨きの可能性もある。同様に補修している土器は、この八幡根遺跡に多くみられる。とくにこの20やSI-14Aの28のように、破損・補修がはなはだしい不良品は、その土器を製作した土地から遠く離れて流通するものとは考えにくい。

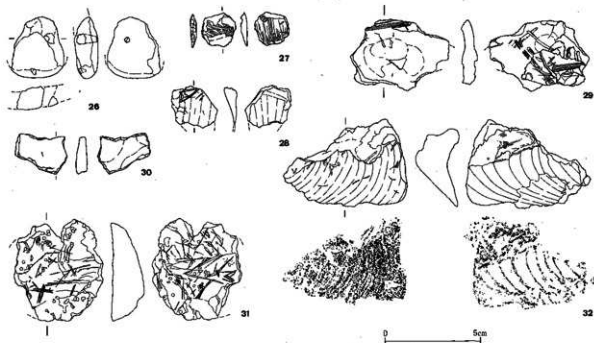
26の有孔土器製品は、白色針状物質を含むので、茨城県北部・東部、栃木県那須郡南部、埼玉県比企丘陵などの遠隔地から搬入されている可能性がある。ただし、補修孔を持つ縄文土器片などの可能性も残る。27は滑石模造品で、遺構の時期からみると混入品の可能性がある。



第55図 八幡根遺跡 SI-28 (2) 遺物

土師器製作関連遺物(28~32) 亀裂に補修用焼磨きをする不良品の土師器だけでなく、土師器削りかすや焼粘土塊もこの建物には多い。土師器未製品の焼成品は出土していない。32は粘土塊から糸で切り出した小粘土塊が焼成されたもので、SI-11・SI-53の土師器杯の糸切り離し痕跡とともに、7世紀前半の糸切り法を示す資料である。31は、焼粘土塊のうちでも、植物の茎の圧痕を表面に残すもの。SI-22AとB・SI-47・SI-50からも茎圧痕のある焼粘土塊は出土している。この31の場合には、さらに丸棒状工具で刺突している点が変わっていて、この建物跡からは他にも若干数が出土している。

不良品土師器を遺棄するので、土師器製作者と関係が深い建物であることは確かである。貯蔵穴が2基ある点を生活用と作業用、柱穴が多いことを作業施設として考えるならば、土師器製作工房または焼成後の仕分け場である可能性もある。また、甕を持つので同時に生活の場でもあるのだろう。



第56図 八横棧遺跡 SI-28 (3) 遺物

第61表 SI-28出土遺物

考 種 類	考 種 類	法 量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 環 土師器	口 高 大	復14.1 3.8 復15.2	ゆるい丸底で、整ったつくり。口縁部内外面に明瞭な稜と段を持つ。外面は体部側で、底面は底面と内面体部に横撫で。	5YR7/4 にぶい橙色	緻密で赤細粒少量、黒細粒ごく少量。軟質。1b類。	底上20cm □1/4周 体一底1/3 周 [5]
2 環 土師器	口 高 大	復13.6 4.7 復13.2	丸底で、口縁部は内外面に明瞭な稜と段を持つ。外面体部側で、底面は底面が多方向、体部横方向の横撫で。内面全面と口縁部外面に横撫で。	10YR8/4 浅黄橙色	緻密で透明細砂(または雲母細片)と白細粒少量。軟質。1b類。	床直 □一底1/4 周 [1]
3 環 土師器	口 高 大	復14.0 4.2 大復13.6	口縁部内外面に明瞭な稜と段を持ち、口縁部上半は少し外反気味。外面は底面一方向、体部横方向の横撫で。内面全面と口縁部外面は横撫で。内面全面と外面上半に漆仕上げ。外面底面にも漆が及ぶ可能性があるが、黒塗とかさなるのでよくわからない。	7.5YR8/3 浅黄橙色	緻密で透明細砂やや少量、黒細砂、赤細粒少量。軟質。1b類。	底上9cm □一底1/3 周 [20]
4 環 土師器	口 高 大	14.0 4.3 15.6	やや厚く重い。非常にゆるい丸底で、口縁部は内外面に明瞭な稜と段を持つ。内面は底面一方向、体部横方向の横撫で。口縁部内外面一底面は横撫で。	10YR8/3 浅黄橙色 黒斑あり	緻密で黒和材は目立たず、黒・透明細砂少量のみ。やや軟質。1b類。	底上17cm 底全面 □3/4周 [17貯蔵穴]

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土成	出土状況 残存状況 注記
5 坏 土脚器	□ 13.6 高 5.4 大 復14.8	丸底で、口縁部外面の段は明瞭な凹線状にくぼみ、内面は弱い段を持って内傾する。外面は底部一方の、体部横方向の彫削り。口縁部内外面と体部内面は滑で、外面底部は彫削り調整後に亀裂が入った部分を裏で削いで補修しているが、発成してみると亀裂はおおしくそのまま内面まで貫通していて、液体を入れるには使えない状態である。	10YR5/4 灰白色	緻密で白細粒と黒・透明細砂ごく少量。黄緑砂と赤細粒少量。軟質。1b類。	底上 6cm □～体1/4周、底全周 [27]
6 坏 土脚器	□ 13.4 高 4.5 大 15.0	丸底で、口縁部は内面に明瞭な段、外面に凹線状にくぼみ段を持って内傾する。外面は体部に施すの、底部を広く一方、体部に横方向の彫削り。口縁部内外面～体部内面は横滑で、	10YR8/3 浅黄褐色 黒底あり	緻密で白細粒と透明細砂やや少量。黒緑砂と赤細粒少量。軟質。1b類。	底上16cm □体3/4周 全周 [15貯蔵穴]
7 坏 土脚器	□ 9.7 高 3.4 大 10.5	薄く丸底。口縁部は内外面に明瞭な段を持ってわずかに内傾する。外面は底部一方、体部横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面に横滑で、後、漆仕上げ。外面の漆仕上げは体部中位まで及ぶ。	7.5YR7/4 にぶい褐色	緻密で赤細粒と黒・透明細砂ごく少量。やや軟質。1b類。	底上 7cm □～底1/2周 [21]
8 坏 土脚器	□ 15.1 高 4.7 大 15.5	薄く丸底。口縁部は外面が明瞭な段を持ってわずかに内傾、内面は弱い段を持ってわずかに外傾する。外面は底部に多方向の彫削り後、体部に横方向の彫削り。体部内面横滑で、内面全面と口縁部外面に横滑で、内外全面を漆仕上げ。	2.5YR/2 灰白色	緻密で透明細砂と白細粒ごく少量。軟質。1b類。	底上 5cm □～体1/12周、底全周 [32]
9 坏 土脚器	□ 15.8 高 4.4 大 16.0	やや薄く丸底。口縁部は外面が段を持って直立し、内面はやや外傾。外面は体部施すの、後、底部は一方、体部横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面は横滑で、後、漆仕上げ。外面の漆は体部中位まで及ぶ。	10YR8/4 浅黄褐色	緻密で透明細砂やや少量。軟質。1b類。	底上21cm □～体7/12周、底全周 [19]
10 坏 土脚器	□ 15.1 高 4.6 大 15.2	丸底で、口縁部は外面に段を持ってやや外傾気味に立ち上がる。外面は体部施すの、後、口縁部を横滑で、底部一方、体部横方向の彫削り。内面全面は横滑で、外面体部上半と内面全面は漆仕上げ。	10YR8/4 浅黄褐色 黒底あり	緻密で黒・透明細砂ごく少量。軟質。1b類。	底上21cm □～体7/12周、底全周 [22漆直]と「14貯蔵穴」が嵌合
11 坏 土脚器	□ 15.7 高 4.7 大 16.2	やや厚く、丸底。口縁部は内外面にごく弱い段を持って広く立ち上がる。外面は体部施すの、後、底部多方向、体部横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面は横滑で、後、漆仕上げ。	10YR8/4 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂ごく少量。軟質。1b類。	底上 3cm □～底5/12周 [2]
12 坏 土脚器	□ 復14.4 高 4.0 大 復14.5	体部は厚く、底部は厚く丸底。口縁部は外面にごく弱い段を持ち、内面はわずかに外傾する。外面は体部施すの、後、底部多方向、体部横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面は横滑で、	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂と白細粒ごく少量。軟質。1b類。	底上16cm □～体1/3周 [9]
13 坏 土脚器	□ 復14.6 高 4.4 大 復14.8	やや厚く、口縁部は外面に段を持って立ち、内面はゆるく外傾。外面は底部一方、体部横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面は横滑で、後、漆仕上げ。内面は使用により漆が剥がれたか、又は最初から塗らなかった可能性もある。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で混粒材は目立たず、透明細砂少量のみ。軟質。1b類。	底直 □～体1/12周 [21]
14 坏 土脚器	□ 15.2 高 4.2 大 15.4	薄く丸底。口縁部外面は段を持って直立し、内面はゆるく内傾気味に傾く。外面は体部に施すの、後、底部一方、体部横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面に横滑で、後、漆仕上げ。外面の漆は体部中位まで及ぶ。	7.5YR8/3 浅黄褐色	緻密で白細粒と透明細砂ごく少量。軟質。1b類。	底上21cmと23cmが嵌合 □～体1/8周、底全周 [14]と[16]
15 坏 土脚器	□ 復15.4 高 4.8	底部は厚く、丸底。口縁部は外面にごく弱い段を持ってほぼ直立気味である。外面は体部施すの、後、口縁部横滑で、後、底部一方、体部横方向の彫削り。口縁部内外面と内面全面は横滑で、後、漆仕上げ。	2.5YR/3 淡黄白色 黒底あり	緻密で白・赤細粒と黒・透明細砂ごく少量。軟質。	底上21cm □7、12周 底全周 [14貯蔵穴]
16 坏 土脚器	□ 復11.4 高 3.3	口徑にくらべればやや厚く、口縁部内外面に横滑を持たないでゆるく内傾する。外面は口縁部横滑で、底部一方、体部横方向の彫削り。内面は全面横滑で、放射状亀裂さ。内面全面と外面口縁部に漆仕上げ。	7.5YR7/4 にぶい褐色	緻密で透明細砂少量。白細粒ごく少量。軟質。1b類。	底上23cm □～底1/4周 [4]
17 小形土 器	□ 復 6.0 高 3.4	やや厚く、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁部はほぼ直立する。手揉み成形。体部内面は指施で、体部外面は横滑調整後、脱土工具のキズが付く。	7.5YR6/4 にぶい褐色 黒底あり	やや緻密で白細粒と透明細砂やや多量。黒砂と赤細粒やや少量。やや軟質。1b類。	不明 □～体1/4周 [SI-28]
18 鉢 土脚器	□ 13.6 高 7.6 大 15.9	やや厚く丸底で、口縁部は内外面に明瞭な段と広い段を持って内傾する。外面は底部一方、体部横方向の彫削り。内面体部から外面口縁部は横滑で、底部外面に長4cmの亀裂が2本あり、発成前に発掘されて補修している。内外全面を漆仕上げする可能性があるが、残りが悪いので確定ではない。	7.5YR8/3 浅黄褐色 黒底あり	緻密で白細粒と黒・透明細砂ごく少量。やや軟質。1b類。	底直 □～体全周 底2/3周 [33貯蔵穴]

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
19 鉢 土師器	口 復16.8 大 復19.2	口縁部は外面に明瞭な段、内面に弱い段を持ってやや内傾する。外面は体部3/4まで、底部多方向差開りの可能性あり。体部は一方方向差開り。内面体部は裏面後、撫で、口縁部内外面横撫で。	10YR8/3 淡黄褐色 黒灰あり	緻密で透明細砂少量。黒細砂・白細粒ごく少量。軟質。1b類。	不明 口一帯1/3周 [S1-28]
20 鉢 土師器	口 復16.4 高 10.8 大 復18.6	丸底で、口縁部は外面に明瞭な段、内面に弱い段を持ってやや内傾する。口縁部内面に印籠をもち、土蓋は短くつまみ上げ、断面は浅くくぼむ。胴部は外面に明瞭な段、口縁部は裏面後、裏面後に、体部付近から体部へ放射状に三条の亀裂が入ったため、内面に縦方向の指撫で、外面に粘土貼り付けや裏撫でを行って補修している。実測図は残存部の反転復元図なので、対応する裏面の補修状況を指示した。指示のほかに粘土貼り付け補修がもう1ヶ所ある。	2.5YR8/3 淡黄褐色 黒灰あり	緻密で透明細砂と白細粒やや少量。赤細粒と黒細砂少量。やや軟質。1a類。	底上14cm 口一帯1/3周 底一帯1/3周 [28]
21 美 土師器	口 17.2	胴部外面にごく弱い段を持ち、内面は段を持たないで外反する。口縁部は粘土を外側へ少し巻出ようとして処理する。外口縁部横撫で後、胴部差開り。内面は輪横撫で少し残し、胴部裏面後、口縁部横撫で。内面は口縁部までよい褐色に汚れている。	10YR8/3 淡黄褐色 黒灰あり	粗い。透明細砂少量。白・赤・灰色の輝・砂少量。赤粒と白細粒やや多量。やや軟質。	底上28cm 口一帯上の全周 [30貯蔵穴]
22 美 土師器	口 22.5	胴部は外面にわずかな段、内面に弱い段を持って外反する。口縁部内面に印籠をもち、土蓋は短くつまみ上げ、断面は浅くくぼむ。胴部は外面に印籠および段で、縦断面で、肩以下は差開り。内面は胴部に少し剛毛目みの裏撫で、口縁部内外面は横撫で。	7.5YR6/6 褐色	粗い。赤細粒と白細粒と半透明灰色色少量。白細粒・黒細砂やや多量。やや硬質。	底上56cm 口1/3周 底一帯1/3周 [31貯蔵穴]
23 鉢 土師器	口 23.6 底 高 24.2	胴部は外面に明瞭な段を持ち、内面は段を持たない。外面は胴部上位撫で、胴部下部を所より横撫で、胴部縦断面あり。口縁部は横撫で、内面は裏面後、口縁部横撫で。胴部下部は短く斜めの差開りし、孔縁はおそらく差開り後、撫で。	10YR8/3 淡黄褐色 黒灰あり	緻密で黒・透明細砂少量。軟質。1b類。	底上13cm 全周 差開れ軸1と2が接合
24 鉢 土師器	口 18.0 高 大 17.9	外口縁部下に明瞭な段を持ち、内面の縁はごく弱い。口縁部下半がやや強く外反する。外面は口縁部横撫で後、体部斜方向、底部多方向差開り。内面は差撫で、撫で。一箇所だけを狭い幅で磨くのでヒビ割れを補修した可能性がある。口縁部内外面は横撫で。現状では確実な法量のみならぬが、内面を磨き上げている可能性もある。	2.5YR8/3 淡黄褐色 黒灰あり	緻密で白細粒少量。軟質。1b類。	床直 口一帯 11/12周 底全周 [28貯蔵]
25 土製 土師	長 残 9.9 径 残 4.7	さまじりの粘りで手捏成形。やや細長く断面は隅丸気味の円形で、下方に向かい太くなる。上部の図で一点銀線で示した範囲にスス付着。古墳時代終末期の土師器群と同質の胎土で、より硬く焼けているので、二次焼成を受けている可能性がある。	2.5YR8/4 淡黄色	緻密でスス多量。透明細砂ごく少量。硬質。	底上 5cm 上部のみに残 [3]
26 有孔土 製品	長 残 3.3 幅 残 2.8 厚 1.3 重 残7.30g	粗雑な土質または土製品の破片で、転用したものらしい。器の下部も摩滅した面が見られる。孔は内面の土色が器表面の色とは違い、緑面と面淡黄褐色なので、焼成後に器に孔がある可能性が高い。左図の下部にも小さな孔が途中まであいているが、意図的なものかどうかは確かではない。	5YR6/6 褐色	やや緻密で白色針状物質多量。黒細砂ごく少量。軟質。	不明 破片 [S1-28]
27 未製品 石製模 造品	径 厚 1.8 おむね 0.3 厚 1.55g	有孔円板の穿孔工程前か。両面は劈開方向に沿った割れ面にそれぞれおむね一方方向の研磨痕。右図の面はやや粗く、左図の面は細かい研磨。右図は研磨後に先の細い工具で刺突するように2ヶ所を加工している。穿孔予定位置の可能性あり。図の左右両側縁はやや厚味が有り、両縁から切開加工する。上下両側縁は新断面が薄くなって終わる。滑石製。古墳時代中期の遺物が混入。		滑石。	不明 実形 [S1-28]
28 削りか す土師 質	長 残 2.2 幅 2.4 厚 0.7 重 2.01g	背面(右図)・腹面(左図)ともに1面の差開り。背面側は差開り方向不詳。両面とも1面に差開り痕が染染状になり、特に背面はそれが明瞭な形で、糸で切り離した時のカスかもしれない。	赤色・白色 の2種の粘土 がやや混ざ り合っ たようになっ ている。	緻密で混和材がほとんどない。やや硬質。2類。	不明 焼成後以下 半部欠損 [S1-28]
29 削りか す土師 質	長 残 3.8 幅 残 5.3 厚 0.8 重 10.85g	背面は雑な指撫での上に、他の粘土削りかすが貼り付き、その上からさらに植物繊維状皮が付く。腹面は1回の差開り、中央付近に差開りかすの小破片が付き、その周囲は指撫でさへ痕。	10YR8/4 淡黄褐色	緻密で混和材がほとんどない。やや硬質。2類。	不明 一箇所を焼 成後欠く [S1-28]
30 削りか す土師 質	長 残 2.2 幅 2.8 厚 0.6 重 2.84g	背面はやや凹凸のある指撫でおおむね指撫さへ面。腹面は1回の差開り。右図右側縁と上側縁は焼成前の破断面、左側縁と下側縁はおそらく焼成後の破断面。	7.5YR7/6 褐色	緻密で黒細砂・白細粒少量。透明細砂ごく少量。やや軟質。1a類。	不明 焼成後に二 箇所縁を欠く [S1-28]
31 焼結土 塊土師 質	径 4.7×5.5 厚 1.7 重 28.74g	左図面はやや平坦。右図面は中高。こねた粘土の表裏両面に植物繊維の凹凸が認められる。径4.7mmの丸形、深さ1mm程度の浅い刻痕をやはり両面に行う。粘土の内部には植物繊維は混ざってこまれている。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で混和材はほとんどない。軟質。2類。	不明 おそらく焼 成前に一箇 所縁を欠く [S1-28]

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
32 焼粘土 塊 土師質	長さ 幅 厚 重 4.7 6.6 2.3 1.55g	大きな粘土塊から糸で切り出した小塊が焼成されたもの。右面は先に切り出した粘土塊の裏面の面、断面が弧を描くように切り、面の下縁部は糸切り痕が少し残されている。左面はこの粘土塊を切り出した面で、平面をなして切り、その後に植物繊維圧痕が付いて糸切り痕を不明瞭なものとしている。面の上部は粘土を縁にこねたままの面。	25YR/3 淡黄色	観音で黒、透明細砂と白細粒少量。軟質。1a類。	不明 焼成後の破損はない [SI-28]

第62表 SI-28 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	環	盤・皿	重	高環	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長巻	甌	大甕	焼粘土	その他
土師器	口縁部	330		1	18					14			
須恵器	口縁部	有			有				有			121	
須恵器	底部			類1	1				3	15			
須恵器	口縁部												
須恵器	底部												

土師支脚1点・有孔土製品1点・土師器類りかす3点。
古墳時代前期の土師器少量、古墳中期の石製標温品の未製品1点、平安時代の土師器少量混入。

SI-32 (第57図、写真図版12)

本建物跡は、調査区の中央部南西寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。重複する遺構はない。西にSI-33、南西にSI-34が近接している。

平面形は、南北3.7m、東西4.1mの東西にやや長い方形を呈しており、主軸方向はMN-7°-Eを示す。壁は確認面から南壁で4cm程、西壁で14cm程、東壁で6cm程遺存している。その立ち上がりは、西壁で70°程の傾きである。周溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。ピットは、東壁上北寄りに1本(P1)と、南壁上南西コーナー寄りに1本(P2)の計2本検出された。P1は径40cm、深さ31cm、P2は径70cm、深さ51cmである。貯蔵穴は、北東コーナーに検出された。東西34cm、南北52cmの平面隅丸方形である。

竈は、北壁中央に位置する。煙道天井部が崩落しているが、両袖が残り、本調査区の中では残存状況は良いほうである。規模は袖幅106cm、奥行き64cmである。袖は、地山のローム土を掘り残し、さらに、右袖の右側と左袖の左側に粘土(竈の1層)を貼り付けて袖を補強していた。煙道は、燃焼部奥から不整な段を持って44°程の傾きで立ち上がっている。燃焼部から煙道先端にかけては、焼土が最深18cmも認められ、長期間使用したものであると思われる。掘形は、北壁を両袖残して幅56cm、奥行き64cmの平面舟首形に掘り込んでおり、さらに北壁と床面を長径55cm、短径46cmの平面楕円形に掘り窪め、その深さは最深14cmである。

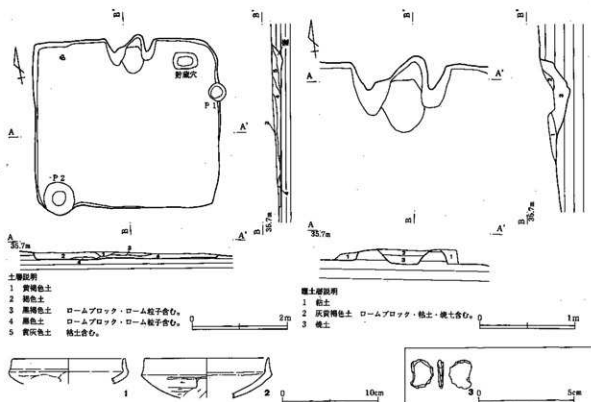
埋土は5層に分層される。概ね、床面直上がロームブロック、ローム粒子を含む黒色土、上層がロームブロック、ローム粒子を含む黒褐色土である。

出土遺物 どれも小破片ばかりである。竈またはその付近から出土した土師器環を2点図示した。2はやや深く、口縁部が高い。3は滑石製品の未製品で、古墳時代中期の遺物が混入した可能性が高い。

第63表 SI-32 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	環	盤・皿	重	高環	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長巻	甌	大甕	焼粘土	その他
土師器	口縁部	49			1			4		1			
須恵器	口縁部	有		脚柱2	有				有				
須恵器	底部			類4					5				
須恵器	口縁部												
須恵器	底部												

古墳時代前期・中期と平安時代の土師器少量、古墳中期の有孔円板未製品1点、中～近世7°のかわらけ1片・土師質土器1片混入。



第57図 八幡根遺跡 SI-32 遺構・遺物

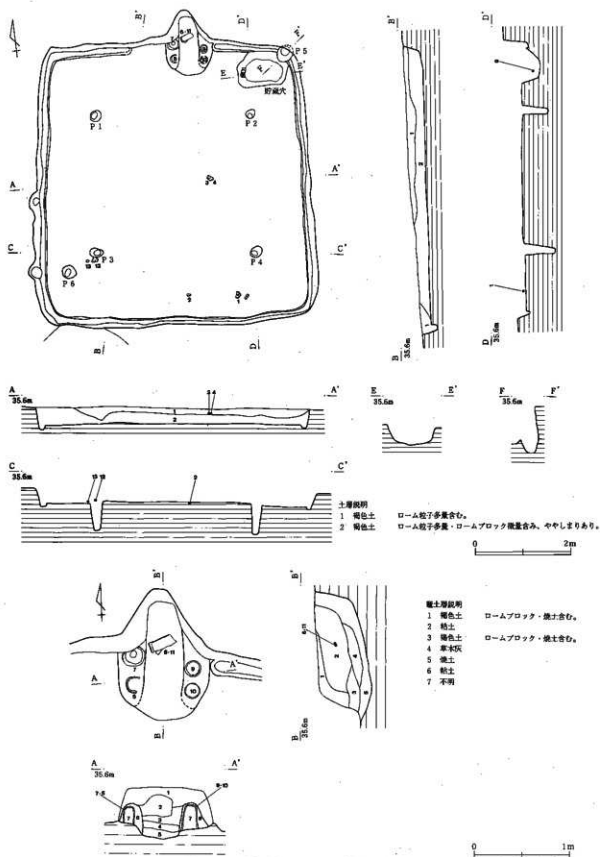
第64表 SI-32出土遺物

番号 器種 種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 或	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 径12.0 大 径12.6	口縁部は内外に明瞭な縁と段を持って少し内傾する。外面は体部に施す塗で、口縁部内外面と内面全面に横撫で。残存部の内外全面に横仕上げ。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で混和材はほとんど目立たず。黒磁砂ごく少量のみ。軟質。	口径1/3周 体1/7周 「甕」
2 坏 土師器	口 径12.0 高 残 4.3	体部は薄く、口縁部は内外面に縁を持って弱く外反気味。外面は体部集削りで、横方向が多らしい。口縁部外面と内面全面横撫で。口縁部内外面に横仕上げ。体部内面の漆は現状では残っていない。	2.5YR8/3 淡黄色	緻密で透明磁砂と赤磁砂ごく少量。軟質。	口径1/12周 「甕」
3 未製品 石製模 造品	長 15.5 厚 3.0mm 重 0.71g	上下面は劈開方向に沿った形制時の面のままで、研磨していない。主に右面の面から側面を切削した時点で放棄。左面の左側縁が破損した可能性がある。小形の有孔円板の未製品か。滑石製。	滑石。		不明 周縁2/3周 「SI-32」

S1-34 (第58~60図、写真図版12・35~36・52・54~55)

本建物跡は、調査区の南西部にあり、台地上の平坦面に位置する。SI-35Bと重複するが、確実な新旧関係は不明である。SI-35Bの埋土をSI-34が切っているようでもあるので、SI-34のほうが新しい可能性がある。

平面形は、東西6.1m、南北6.2mの平面正方形で、主軸方向はMN-6'-Eを示す。壁は確認面から西壁で32~38cm程、南壁で20cm程、東壁で28~33cm程、北壁で34~38cm程遺存しており、傾きは西壁で75~78'程、南壁で65~75'程、東壁で67~80'程、北壁で70~82'程である。周溝は、甕の西側を除く壁際全周で検出された。幅は14~40cm、深さは5~14cmであり、断面は皿状で底面は平坦である。床面は西壁際、北壁際が高く、東壁際、南壁際が低くなっており、その比高差は東壁際で8cm、南壁際で20cmである。主柱



第58図 八幡根遺跡 SI-34 (1) 遺構

穴は4本検出された(P1~P4)。P1は径24cm、深さ39cm、P2は径20cm、深さ54cm、P3は長径29cm、短径20cmの平面楕円形で、深さ59cm、P4は長径27cm、短径21cmの平面楕円形で、深さ63cmである。掘形は、いずれも断面円柱状である。このほかに、ビットが2本検出されている(P5、P6)。P5は径39cm、深さ19cm、P6は径30cm、深さ32cmであり、P5の断面は楕円状である。貯蔵穴は、北東コーナーに検出された。東西110cm、南北74cmの平面不整な隅丸方形で、深さ44cmである。断面は鍋底状で、底面はわずかに内彎している。

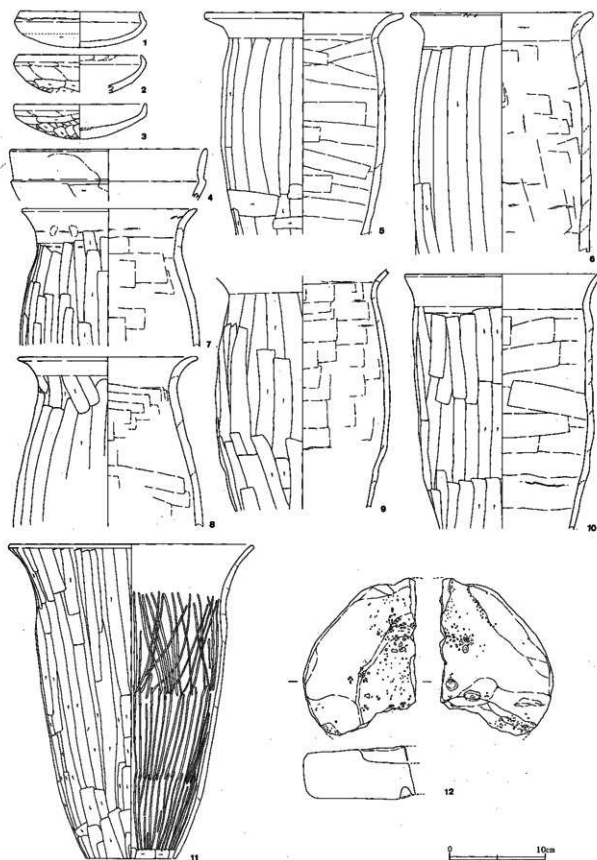
竈は、北壁中央わずかに東寄りに位置する。煙道天井部が崩落しているものの、断面にその構築材である粘土層(竈の2層)を確認することができ、さらに両袖部が残るなど、残存状況は比較的良好。規模は袖幅97cm、奥行き128cmである。袖は、粘土を用いて構築されている。左袖の中央部に、甌が1個体と甕が縦1/2個体、右袖の中央部に甕が2個体、いずれも倒立した形で出土した。袖の芯材として使用されたものと思われる。また、縦に長い硬破片が1枚、燃焼部奥のやや上層から横に倒れて出土した。これは天井構築材に使われた可能性もある。煙道は平面円筒状で、燃焼部中央から13'の傾きでゆるやかに立ち上がり、B'の南13cmの所からは7'の傾きで急激に立ち上がっている。燃焼部から煙道にかけて、焼土が最深41cmの厚さで認められた。かなり長期間にわたって使用していたものと思われる。掘形は、北壁を幅102cm、奥行き54cmの平面楕円状に掘り込んでおり、さらに北壁前の床面と北壁を、径100cmの平面不整な円形に掘り窪めている。その深さは床面から最深19cmであり、断面は中央に段を持つ皿状である。

埴土は2層に分層された。床面を覆う層は、ローム粒子を多量、ロームブロックを微量含む褐色土であり、上層はローム粒子を多量を含む褐色土である。

出土遺物 1の坏は床面に遺棄され、完形に近い。4は、この遺跡に多い大形鉢としては特に漆仕上げが厚い。他の鉢は漆が薄いか、または漆仕上げをしないものが多い。図示した甕と甌は、8が貯蔵穴から出土した他は、竈に遺棄されたものである。13は土師器成形時の削りかすが焼成されたもので、この1片だけが出土した。12は石皿ふのうの石製品で、中央が1段下がったのちに平坦になる。鎌形の石製模造品(14)は、古墳時代中期中葉の遺物が混入したものであろう。

第65表 SI-34出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成 熟	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 12.8 高 3.8 大 14.0	やや重く、底部は安定した丸底。口縁部は外面にゆるい段、内面に段を持って内彎する。口縁部先端は磨耗している。外部外面は磨滅して不詳だが、下半は黒潤り。内部内面は横で、口縁部内外面と内部内面は漆仕上げ。	10YR8/3 淡黄褐色	やや緻密で黒砂多量、透明細砂少量、白細砂少量、やや軟質。1A類。	床直 口~体5/6 周 [1床直]
2 坏 土師器	口 復13.0	やや厚く、口縁部は外面に段、内面にゆるい段を持って内彎する。外面は体部上半に鈍な段の後、わずかに下へ突出気味の下半を横方向、底部を一方方向の黒潤り。口縁部内外面と内部内面は横で、内面口縁部に歪みをなおした指痕で直と、乾燥時の亀裂が一面所すずあり。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で黒・透明細砂やや多量、白細粒ごく少量、やや軟質。1A類。	床直 口5/12周 [2床直]
3 坏 土師器	口 復14.0 高 3.7	やや厚く丸底で、口縁部は外面に不明瞭な段を持って、内面がわずかに外彎する。内面中央が薄く剥離している。外面は体部に鈍な段のの後、底~体部に多方向、体部上位に横方向黒潤り。口縁部内外面から内部内面は横で。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で透明細砂と白細粒少量。黒細砂ごく少量。軟質。1B類。	底上20cm 口/20周 体~底1/5 周 [3]
4 鉢 土師器	口 復20.8 大 復20.6	やや厚く、口縁部は直立気味に開く。頸部内外面の段と横は明瞭。外部外面は黒潤り。内面全面と口縁部外面は横で、やや厚く漆仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で白細粒・黒細砂やや少量、透明細砂少量、やや硬質。1A類。	底上20cm 口/6周 [3]
5 甕 土師器	口 復21.0	頸部は明瞭な段を持たずに外反し、口縁部先端に平坦面を持つ。外面は胴部黒潤りの後、口縁部横で。内面は胴部横で、口縁部横で。胴部下位外面は少し加熱赤化。	7.5YR6/6 褐色	粗い。白・灰色の砂と細砂、黒細砂多量。白細粒・透明細砂やや多量、やや硬質。	甕 口/6周 胴/2周 [2甕の袖材]



第59図 八幡模遺跡 SI-34 (2) 遺物



第60図 八幡根遺跡 SI-34 (3) 遺物

番号 種類	注量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
6 壙土師器	口 復19.0	胴部はほぼまっすぐに立ち上がり、胴部内外面に壁を持たないで外反する。外面は口縁部焼成後、胴部焼成。内面胴部は焼成後、口縁部焼成。胴部内面はやや汚れて灰褐色気味。	7.5YR7/6 褐色 黒度あり	粗い。黒・白・灰色の砂と細砂および白磁粒多量。透明細砂・赤磁粒やや多量。やや硬質。	壙の天井内 口一側1/6周 【庫3】
7 壙土師器	口 18.5	胴部内面に壁を持って直立した後、口縁部がゆるく外反する。外面には壁を持たない。口縁部はわずかに尖り気味。外面は胴部以上にやや鋭な焼成の後、胴部焼成。内面は胴部焼成の後、口縁部にやや鈍な焼成で、胴部に黒質で。最後に仕上げる時にやや暗くしたらしい。胴部が壁で粘土積み上げ質を残す。口縁部内面上半にスまたはオコガが著しく付着。	5YR5/6 明赤褐色	粗い。黒・灰色砂、赤・透明細砂、白磁粒多量。やや硬質。	壙の袖付 口全周 焼成6周 【庫】
8 壙土師器	口 復19.0	胴部は下ぶくれ気味。胴部内外面に壁を持たないで外反する。胴部外面は黒質、胴部内面は黒質で、口縁部内外面は黒質で。	5YR6/6 褐色	粗い。黒・灰色の砂と細砂・白磁粒多量。透明細砂多量。やや軟質。	底上14cm 口1/9周 明1/4周 【6貯蔵穴内】
9 壙土師器	大 復18.4	やや薄い。胴部は内外面に削い壁を持って外反する。外面は胴部焼成後、口縁部焼成。内面胴部焼成後、口縁部焼成。残存下半は加熱して赤化する。	5YR7/4 にぶい褐色	粗い。黒・灰色砂、赤・透明細砂、白磁粒多量。やや軟質。	壙の袖付 口全周 下半3/4周 【4庫】
10 壙土師器	口 20.6 大 19.1	胴部外面が胴部から少しくぼんで直立したのちに、口縁部が外反する。外面は口縁部焼成後、胴部下半を上へ、上半を下へ焼成し、再び口縁部焼成。内面は胴部焼成後、口縁部焼成。外面中位の一部分にス付着。外面胴部下位は加熱赤化。	7.5YR7/4 にぶい褐色	粗い。灰色砂と白磁粒多量。赤砂と赤・透明細砂少量。やや硬質。	壙の袖付 底部以外 赤化 【庫】
11 壙土師器	口 25.6 底高孔 9.5 8.9	やや薄い。外面は上へ焼成後、下位を下へ焼成。底部孔周囲の下端面は平坦で、おそろい焼成。内面は焼成の後、焼成。	5YR8/3 浅黄褐色	緻密で白・灰色砂多量。黒細砂と白磁粒やや多量。透明細砂と赤磁粒少量。軟質。	壙天井内 口一上半 1/2周、下 半全周 【1庫】
12 石蓋?	長 13.8 幅 11.8 厚 5.2 重 51.0g	左の図は左へ上部よりも右下部が収をなして約14mm低くなる。波の下は比較的に平らな面をなし、中央へ向かってゆるくくぼむ。この部分は素材の粗石の気孔が多くて割れやすい部分加工して作っている可能性が高い。右側の面は2箇所の円形の孔を持ち、これも加工して作った可能性がある。やはり多量質で加工しやすい部位にある。横長の孔は深さ10mm、円形の大きな孔は深さ12mm、円形の小さな孔は深さ8mm。この石は水には浮かない。		軟質で多孔質の粗石。	底庫 庫の右辺 下の波が破 壊。破面 は新し 【4庫直】
13 すりか す土師質	長 4.0 幅 2.3 厚 0.7 重 2.89g	背面は壁の後、1個縁部に焼成。腹面は1個の焼成の後、両側縁が背面側に少し反って変形する。	7.5YR7/4 にぶい褐色	緻密で黒・透明細砂少量。白磁粒ごく少量。やや軟質。1a類。	不明 変形 【SI-34】
14 磨子 石製 遺品	長 4.4 幅 2.2 厚 0.5 重 7.18g	表面面に形彫刻痕跡と切削痕を残し、鉄製工具の刃痕を一部に残す。いずれも製作後の破損痕跡ではないようである。両面ともおおよそ同一方向にやや重く磨き。表面はほぼ四方の粗い研削で、一部は斜方向になる。底の下縁は2-3箇に分裂してやや屈曲し、縁の刃部を表現している可能性もある。穿孔はみられない。滑石製。古墳時代中期の遺物が混入。		滑石。	不明 変形 【SI-34】
15 砥石	長 4.1 幅 2.2 厚 2.3 重 46.0g	細長い砥石で両面方形。2個面を砥面とする。目は非常に細かい。他の2個面は筋道に沿った劈開面で、浅い溝痕がみられる。		繊維状の層理が発達した軟質の塊状滑石。結核密か。	底庫 底の下部を 欠損 【8庫直】

第66表 SI-34 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	甕・瓶	小形甕	長甕	罎	大甕	埴輪土境	その他
土口縁部	179			3	17	2		4		30			
胴体部	有			脚柱3	有				有			20	
器底部				冠7				平底4	11	2			
須口縁部													
胴体部													
器底部													

磁石1点・滑石の鉢?1点・削りかす1点。
古墳時代前期・中期と平安時代の土師器少量混入。
平安時代の須臾器4片混入(長甕体部1・大甕体部1・坏口縁1が新治窯、長甕体部1が三和窯)。

S1-35B (第61図、写真図版13・37・54)

本建物跡は、調査区の南西部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-35Aよりも古く、SI-35Aによって北西コーナーと北東部以外の大部分を切られている。また、SI-34とも重複し、新旧関係は不明であるが、SI-35Bの平面図から考えて、SI-34よりも古い可能性がある。

平面形は、確認された部分で東西4.6m、南北2.4m以上の方形を呈すると思われる。壁はほとんど遺存しておらず、わずかに東壁で確認面から8cmであり、その傾きも50°程と推測するにとどまる。また、残っている埋土の深さから26cm以上の壁があったと推測できる。周溝、柱穴、竈は、検出されなかった。北竈があったとすれば、すでにSI-35Aの北東コーナーによって破壊されているものと考えられる。

埋土は1層で、ローム粒子を含む黒褐色土である。

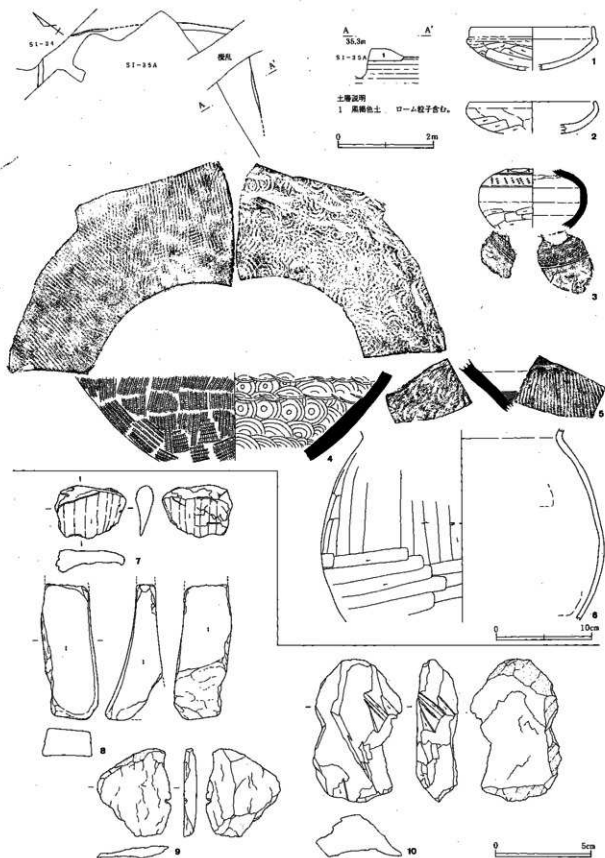
出土遺物 SI-35B出土と注記されている遺物は非常に少ない。取り上げ時にSI-35AとSI-35Bを区別しないで「SI-35」とだけ注記した遺物がかなり多い。SI-35Aは平安時代の建物なので、「SI-35」出土の古墳時代遺物はSI-35Bのものと考えられる。SI-35CはA・Bから離れ、遺物も一定量あるので、35Cの遺物は混在していないと思われる。

6は胴部の丸い甕で、被熱痕はなく、須臾器の甕に対応する土師器の貯蔵・収納用器種。2・4・7は「SI-35」出土で、SI-35Bの遺物だろう。3はおそらく関東産須臾器で、底部を手持ち匏形調整し、肩部に櫛刺突文を持つ甕。これはSI-37から同一個体の文様部小破片が出土しているの、その拓本も一緒に図示した。4は丸底に叩き出す手法がよくわかる須臾器大甕である。

7は土師器の削りかすが焼成されたもの。9・10は滑石製模造品製作関連遺物(原石から荒削したもので、古墳時代中期の遺物が混入したものでしょう。9は形制工程品かもしれない。

第67表 SI-35B出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況 注記
1 土師器	口 径13.0 高 残 4.6 大 復14.0	やや薄い。口縁部は内外面に明瞭な段と稜を持って内傾する。外面は体部に誰な溝での後、中位以下におおむね一方方向の寛削り。口縁部外面～内面全面は横溝の後、漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で黒・透明細砂と白粒粒少量。軟質。1a類。	不明 口1/6周 体1/4周
2 坏 土師器	口 径13.4 高 残 3.4	底部はやや厚く、口縁部は内外面に稜を持たないで内傾する。口縁部は少し内側へ肥厚。外面体部は横溝で、おそらく底部は一方方向削り。口縁部外面と内面全面は横溝で。	7.5YR7/4 にぶい橙色	緻密で白粒粒と黒・透明細砂や多量。軟質。1a類。	不明 口～体1/6周 「SI-35」
3 甕 須臾器	大 径11.4	厚く、肩部内面に弱い稜を持ち、外面の最下段の沈線部分で肩部が張る。胴部内外面口縁部で、胴下半手持ち彫削り。胴上半に平行近直線の櫛刺突文等を2箇所持つ。上段の文様帯は上半が欠失し、下半は下段の文様帯と同様。下段の文様帯は上下を各1本の沈線(幅1mm、深0.3mm)で区画した幅1.6cmの中位に、4歯の工具を左に傾けて右から左へ短く歯を動かしながら削突する。3歯だけしか削突していない部分も多い。	5G7/0.5 灰白色	緻密で透明砂少量、白粒粒と黒粒粒ごく少量。やや軟質。	埋土中 胴1/3周 「SI-35A フタ土」と 「SI-35フタ土」が接合し、「SI-37」が同一個体



第61図 八幡根遺跡 SI-35B 遺構・遺物

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
4 大須須器		底部中央が粘土接合できれいに欠損している。外面は木目直交の叩き板で網格子印き、内面は同心円文当具痕。胴部は径10cmの内面当具の下縁の痕を登く残すように当て、外周縁位の叩き目。その後、底部に当具を垂直に当てて、外面斜一横位の多方向の叩き目で丸底に叩き出す。	5BQ65/0.5 青灰色	網罟で白細粒ごく少量。硬質。	蓮土中 胴/3周 [SI-35フタ 土]
5 大須須器	頸 径30.0	やや厚くくだらかな肩の部分。外面胴部は木目直交の叩き板で網格子叩きの後、胴部に浅いカキ目。頸部は横線で。内面胴部は同心円文当具痕。	5Y6/1 灰色	網罟で白細粒ごく少量。硬質。	蓮土中 胴/24周 [SI-35Aフ タ土]
6 土師器	頸 径21.0 大 径20.0	大ききのわりに薄い。腹部は内外両面に痕を持って外傾する。外面胴部上半に縦走筋の痕。下半に斜走筋の痕。内面胴部無傷で。内底全面と外底上半は細かい調子が多くて調整不明瞭。	7.5YR6/3 にぶい褐色	滑い。透明・白・灰色砂と白細粒多量。黒炭粉少量。軟質。	蓮土中 胴/4周 [フタ土]
7 磨りかす 土師器	長 径 2.8 幅 3.8 厚 0.9 重 7.25g	表面両面ともに1箇の磨削り(?)。どちらの面を先に削ったのかは不明。磨削り痕はやや条線状になるので、片面または両方の面が条切り痕である可能性もある。削り出し後に両面縁がやや変形して反っている。左側の右側面は幅4mmで、土器を磨る前の成形物で見られる。	2.5Y8/3 淡黄色	磨削で赤・白細粒と黒・透明磁粉ごく少量。軟質。11服。	不明 完形 [SI-35]
8 砥石	長 径 7.3 幅 2.5 厚 2.0 重 50.9g	上下面と1側面を使用し、他両面は素材を削り出したままの面。右周下位の面は使用時に破損した可能性がある。		軟質でやや粒の粗い凝灰岩。	蓮土中 下縁の片面 と上半部欠 [SI-35フタ 土]
9 寛削工 砥石 石製模 造品	長 径 4.7 幅 3.9 厚 0.7 重 11.24g	滑石製模造品製作関連遺物。形制工器具の可能性もある。割片の上下は自然面を残す。左側の左側縁に、この割片を磨離す前の原石7を裏面的な刃部を持つ工具で削った痕が残る。磨離後に左側の右側縁に1ヶ所の工具痕が残る。刃部の角または割削具を使用したと考えられる。古墳時代中期の遺物が混入。		滑石。	蓮土中 完形 [フタ土]
10 寛削工 砥石 石製模 造品	長 径 7.6 幅 4.8 厚 2.2 重 72.0g	滑石製模造品製作関連遺物。右側の上下と右縁の自然面で、幅約6cm前後の原石7からとった素材割片。左側の右上と右下に、直線的な刃部の痕跡があり、それより右～右上方の物面に沿ってこの素材を磨削した痕と考えられる。左側の左下の刃部はやや鋭くように見えるので、あるいは磨削や発掘調査の際の傷かもしれない。古墳時代中期の遺物が混入。		滑石。	蓮土中 完形 [フタ土]

第68表 SI-35B 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坪	盤・皿	蓋	高坪	鉢	小形土器	壺・瓶	小形埴	長壺	甌	大甌	埴輪土塊	その他
土 口縁部	3							2	1				
胴 体部	有								有				
器 底部											2		
須 口縁部													
底 体部							3						
器 底部													

磨りかす1点・砥石1点・滑石割片2点。
古墳時代前期の土師器1点混入。

第69表 SI-35 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坪	盤・皿	蓋	高坪	鉢	小形土器	壺・瓶	小形埴	長壺	甌	大甌	埴輪土塊	その他
土 口縁部	183			2	16								
胴 体部	有			脚柱10	有			有	有			34	
器 底部				裾8	3			平底1	10				
須 口縁部													
底 体部											6		
器 底部													

SI-35のA・B・C3種のうち、どの遺物から出土したかわからない古墳時代終末期の遺物。SI-35Bの遺物の可能性がある。
古墳時代前期の土師器若干あり・古墳時代中期の土師器1片(椀形坪の口縁部)、滑石割片1片混入。

S1-35C (第62図、写真図版13・37・53)

本建物跡は、調査区の南西部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複する遺構はない。東にSI-35Aが近接している。

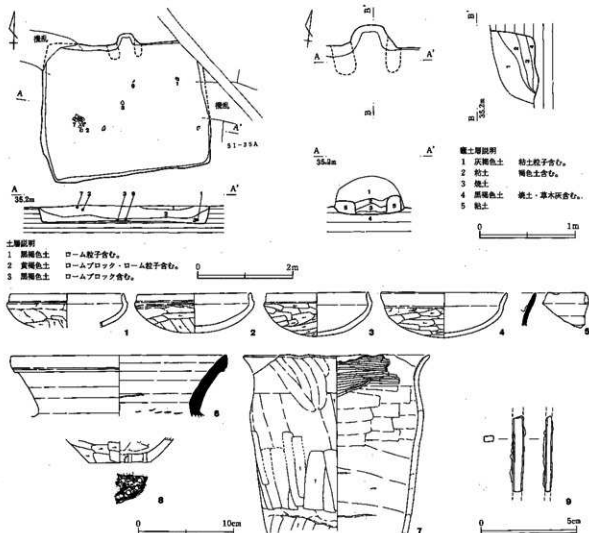
平面形は、東西3.6m、南北3.0mの東西にやや長い方形を呈しており、主軸方向はMN-8°-Wを示す。

壁は確認面から西壁で32cm程、東壁で37cm程遺存している。その立ち上がりは、西壁・東壁とも75°程の傾きである。周溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北壁中央に位置する。煙道天井部が崩落しているものの、断面にその構築材と思われる粘土層(竈の2層)が確認できるうえに、両袖が残っているなど残存状況は比較的良好いほうである。規模は、推定で袖幅75cm、奥行き52cmである。袖は、粘土で構築されている。煙道は、燃焼部奥B'の南15cmの所から78°程の傾きで急激に立ち上がっている。燃焼部から煙道にかけて、焼土が最深10cm認められた。掘形は、北壁を幅50cm、奥行き21cmの平面鍋底状に掘り込んでいる。

埋土は3層に分層される。床面直上がロームブロックを含む黒褐色土、中層がロームブロック、ローム粒子を含む黄褐色土、上層がローム粒子を含む黒褐色土である。各層はレンズ状に堆積しているの、自然堆積の可能性がある。

出土遺物 胎土が1a類で、八幡根遺跡産の可能性が高いと考えられる1~4のうち、漆で仕上げるものは2だけである。この建物の出土品に限らず、八幡根遺跡では漆仕上げ土師器の割合がやや低い。3は、やや深くて底部の全面を剝削りする点が古い要素である。



第62図 八幡根遺跡 SI-35C 遺構・遺物

第3章 発掘調査された遺構と遺物

7の甕は、乾燥中に口縁部に入った歪みまたは亀裂を、内面に粘土を補充して寛磨し、外面は指で撫でて補修している。図は反転復元したので、対応する内面と外面の状況を示している。7の胎土は、本遺跡産の土師器坯鉢類に多い胎土の混和材に加えて、灰色礫・砂(主にチャート)と赤粒を混ぜたような土質である。坯・鉢類の不良品は今回の発掘調査区の遺物に多いが、甕は少ない。この甕は、食器類以外に胎土の粗い煮炊具も八幡根遺跡付近で製作していた可能性を示している。

6の甕は、歴史時代の須恵器と区別しにくい。奈良時代以降のものならば釜子窯跡群産の可能性もある。

5は直口壺か脚付長頸壺の口縁部で、搬入品らしいが湖西産の胎土ではなく、産地不明。9は頸部が扁平化した7世紀代の鉄鍔の破片である可能性が高い。

第70表 SI-35C出土遺物

番号 種類	量 法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 坯 土師器	口 復12.0 高 残 3.6 大 復12.8	外面に明確な段、内面に弱い段を持って口縁部が内傾する。体部上位は雄な段での後、下位に多方向の磨削り。口縁部外面と内面全面は横撫で。	2.5Y8/4 淡黄色	やや緻密で黒細砂多量、白細砂・透明砂少量。軟質。	底上8cm 口1/4周 [3]
2 坯 土師器	口 12.2 高 4.1 大 12.7	丸底で、口縁部は外面に明確な段、内面に弱い段を持って内傾する。外面は体部に輪積み度を残す雄な段での後、底部一方、体部中央横方向の磨削り。内面全面と外面口縁部は横撫での後、確仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色	やや粗い。白細砂と黒・透明細砂やや多量。軟質。	底上27cm 底3周 口3/4周 [5]
3 坯 土師器	口 10.8 高 4.7 大 11.5	非常に厚く軽い。丸底で、口縁部は内外面に段を持って内傾する。外面は底部一方、体部横方向の磨削り。内面全面と口縁部外面は横撫で。	2.5Y8/3 淡黄色	やや粗い。黒細砂多量、白細砂・透明細砂少量。軟質。	底上3cm 体7/12周 口5/12周 [4]
4 坯 土師器	口 復13.4 高 4.8	薄くて軽い。丸底で、外面に明確な段、内面に弱い段を持って口縁部が開き、内面上半部は外気味。外面は体部横方向の、底部に一方、体部横方向の磨削り。内面全面と口縁部外面は横撫で。	10YR7/3 にぶい黄褐色 黒濁あり	緻密で黒細砂多量、白細砂・透明細砂やや多量。やや硬質。1a顆。	埋土中 底~口1/3 周 [フク土]
5 甕 須恵器	口 復約10	口縁部上半が少し内傾気味。口縁部内外面はロクロ撫で。内面に緑色の自然釉が厚く付着。	5B5/1 青灰色	緻密で白細砂少量。硬質。	埋土中 口1/12周 [フク土]
6 甕 須恵器	口 復22.8	口縁部に広い面を持ち、口縁部の直下に一条の凸帯を持つ。口縁部内外面はロクロ撫で。内面頸部に積み上げ痕を残す。	5B7/1 明青灰色	緻密で白細砂少量。硬質。	埋土中 口1/8周 [フク土]
7 甕 土師器	口 復19.7 大 復18.4	甕としてはやや薄い。頸部は内外面に段を持たないで外反する。外面は胴部雄での後、胴部下半磨削り。口縁部雄撫で、内面胴部雄撫で、口縁部横撫で、口縁部に焼成前に歪みが生じたかまたは亀裂が入り、内面は胎土を補充して横撫での後、寛磨し。外面は斜め指撫でで補修する。胴部下位は加熱赤化。	10YR8/3 淡黄褐色	軽い。灰色礫・砂多量、赤粒・白細砂と黒・透明細砂少量。軟質。	底上32cm 胴下位2/3 周、口1/12 周 [7]
8 甕 土師器	口 復 6.4	底部付近は厚い。底面は多方向、胴部下端は横方向の磨削り。内面は寛撫で。底部に棒状工具を通すようにして穿孔。現存11孔。	7.5YR6/4 にぶい褐色	軽い。灰色礫・砂多量。白・黒砂、黒・透明細砂、白細砂少量。硬質。	埋土中 底1/4周 [フク土]
9 鉄鍔 鉄製品	長 残 4.0 重 残2.6g	薄手で、断面6×3mmの長方形。正しい上下方向は不明。木質や有機質は見られない。発掘調査時の出土状況図では長さ10cm程であるが、現状はこの1片しか残っていない。			底上4cm 両端欠損 [2]

第71表 SI-35C 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坪	盤・皿	蓋	高杯	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甕	大甕	焼粘土	その他
土師器	81			1	13					7			
土師器	有			脚柱2	有			有	有				
須恵器				案1				平座1	2	1			
須恵器							壺1						
須恵器							1						
須恵器													

鉄鍔1点・須恵器壺1点。
古墳時代前期の土師器若干混入。平安時代の土師器少量、滑石割片4点混入。

SI-36A (第63図、写真図版13)

本建物跡は、調査区の南西部にあり、台地上の南斜面に位置する。SI-36Bと重複するが、新旧関係は不明である。セクション写真を見ると、SI-36Aの方が新しい可能性もあるが、確かではない。建物跡の西側は、調査区外である。

確認された部分では、東西2.6m以上、南北2.5m程であり、平面形は、東西に長い方形を呈していると思われる。主軸方向はMN-4°-Eを示す。壁は確認面から南壁で12cm程、北壁で18cm程遺存している。その立ち上がりは、南壁で30°程、北壁で60°程の傾きである。周溝は検出されなかった。床面は、南半分が平坦で、北壁際が高く建物跡中央部に向かってゆるやかに傾斜しており、比高差20cmである。ピットは、北壁上に1本(P1)と、南壁際に1本(P2)の計2本が検出された。P1は径34cm、P2は径30cmである。貯蔵穴は検出されなかった。竈・炉跡や焼土の広がりも確認されなかった。

埴土は、中央部を東西に貫く擾乱を除けば1層で、ローム粒子を含む黒褐色土である。

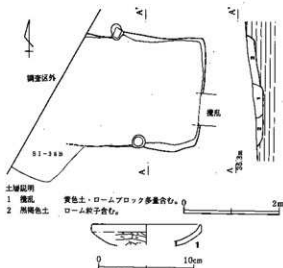
出土遺物 非常に少なく、しかも小破片ばかりである。調査区内に甕がみられないので、SI-36Cなどと同じく古墳時代中期末の建物かもしれないが、古墳時代の遺物は刷毛目を残す薄手の前期の甕胴部小破片と、図示した1のような終末期の模倣坏や甕の小破片だけしかない。最も多い遺物からみて、古墳時代終末期の建物跡と考えておく。

SI-36B (第64図、写真図版13)

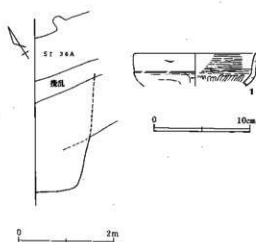
本建物跡は、調査区の南西部にあり、台地上の南斜面に位置する。SI-36Aと重複するが、新旧関係は不明である。セクション写真を見ると、SI-36Bの方が古い可能性もあるが、確かではない。建物跡の中央部から西側は、調査区外である。

確認された部分は、建物跡の南東コーナーのみで、規模や平面形は、推測すらできない。南東コーナーは108°程の鈍角な形を呈している。主軸方向はMN-30°-E程度を示すと思われる。

出土遺物 非常に少ない。図示した坏は内面の荒磨きが丁寧である。図示していない細片では、口縁部長が1cmまで短くなった終末期の土師器身模倣坏も出土している。



第63図 八幡根遺跡 SI-36A 遺構・遺物



第64図 八幡根遺跡 SI-36B 遺構・遺物

第72表 SI-36A出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 復11.5 高 残 2.3	薄く、口縁部外面は弱い稜を持って直立し、内面はゆるく外傾する。外周体部に縁立溝の残、体部上位は横方向、底部に一方?の発見あり。内面全面と外面口縁部は横溝で。	10YR7/3 にふい黄褐色	胎土 成	胎土 成 不明 口1/8割 [SI-36A]

第73表 SI-36A 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	鉢・皿	壺	高坏	鉢	小形土器	甕・瓶	小形甕	長壺	甗	大甗	焼粘土塊	その他
土 師 器	6								1				
須 恵 土 師 器	有								有				
須 恵 土 師 器													
須 恵 土 師 器													
須 恵 土 師 器													
須 恵 土 師 器													

古墳時代前期の土師器少量と、平安時代の土師器少量混入。

第74表 SI-36B出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 復12.8 大 復12.9	薄く、内外面に弱い稜を持って口縁部がわずかに外傾する。体部外面は横溝で、口縁部外面は横溝で。内面は口縁部稜角磨き、体部放射状裏磨き。内面全面と外面口縁部に黒色の厚い塗仕上げ。	7.5YR7/3 にふい褐色	胎土 成	胎土 成 不明 口1/12割 [SI-36B]

第75表 SI-36B 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	鉢・皿	壺	高坏	鉢	小形土器	甕・瓶	小形甕	長壺	甗	大甗	焼粘土塊	その他
土 師 器	7							1					
須 恵 土 師 器	有								有			1	
須 恵 土 師 器					細1	1			1				
須 恵 土 師 器													
須 恵 土 師 器													
須 恵 土 師 器													

古墳時代前期の土師器少量と、平安時代の須恵器1片(三和甗産の長壺の底部)が混入。

SI-37A (第65~68図、写真版13~14・37~39・52~55)

本建物跡は、調査区の南西部にあり、台地上の南斜面に位置する。重複する遺構はない。平安時代の竪穴建物跡(SI-37B)に切られていると最初は考えたが、平安時代の土器が上部に廃棄されたものと判断して、SI-37Bは欠番とした。北にはSI-35Cが近接する。

平面形は、東西6.8m、南北7.3mの南北にわずかに長い方形を呈し、主軸方向はMN-9°-Wを示す。北東コーナーに三角形の突出部を持つ。この突出部は調査時に「SI-37B」と考えた部分である。壁は確認面から西壁で9~14cm程、南壁で20cm程、東壁で33~43cm程遺存しており、傾きは西壁で60~65°程、南壁で62°程、東壁で70~79°程である。周溝は、竈の西側から西壁北側にかけてと、東壁中央や南寄りの壁際で検出された。幅は最大32cm、深さは4cm前後であり、断面は皿状で底面は平坦である。床面は北壁際が高く、南壁際に向かってゆるやかに傾斜しており、その比高差は20cmである。主柱穴は4本検出された(P1~P4)。P1は径44cm、深さ59cm、P2は径44cm、深さ60cm、P3は径50cm、深さ55cm、P4は径50cm、深さ56cmである。掘形は、いずれも断面円柱状である。このほかに、ビットが1本検出された(P5)。P5は径51cm、深さ37cmである。貯蔵穴は、北東コーナーに検出された。東西94cm、南北70cmの平

面楕円形で、深さ46cmであり、断面はU字形である。

竈は、北壁中央に位置する。煙道天井部が崩落しているものの、断面に、その構築材であると思われる粘土ブロックを多量に含む暗灰色土層(竈の4層)を確認することができた。さらに両袖部が確認できるなど、残存状況は比較的良好。規模は、推定で袖幅106cm程度、奥行き125cm程度と思われる。袖は、粘土を用いて構築されている。左袖・右袖の先端にあたる箇所、竈が1個体ずつ計2個体、いずれも倒立した形で出土し、袖の芯材として使用されたものと思われる(23・26)。また、焚き口に竈が2個体横倒しした形で出土したが、焚き口付近の天井部のブリッジの芯材として使用された可能性が高い(22・25)。煙道は平面円筒状であるが、燃焼部から煙道にかけての立ち上がりの箇所が躍りすぎのため確定できず、その傾きははっきりしない。竈の6層が地山である可能性が残るからである。ただ、断面にみられる焼土(竈の5層)の残り具合から、燃焼部奥で急激に立ち上がっているものと思われる。また、燃焼部から煙道にかけての竈5層では、焼土が最深42cmもの厚さで認められた。かなり長期間にわたって使用していたものと思われる。掘形は、北壁を幅112cm、奥行き81cmの平面段を持つ漏斗状に掘り込んでおり、さらに北壁前の床面と北壁を、長径104cm、短径61cmの平面不整な楕円形に掘り窪めている。その深さは床面から最深10cmであり、断面は皿状である。

埋土は3層に分層され、竈前・南壁際が焼土粒、ロームブロック、ローム粒子を多量に含む灰褐色土であり、床面直上が焼土粒、ロームブロック、ローム粒子を多量に含む黒褐色土であり、上層が焼土粒、ローム粒子を含む黄褐色土である。

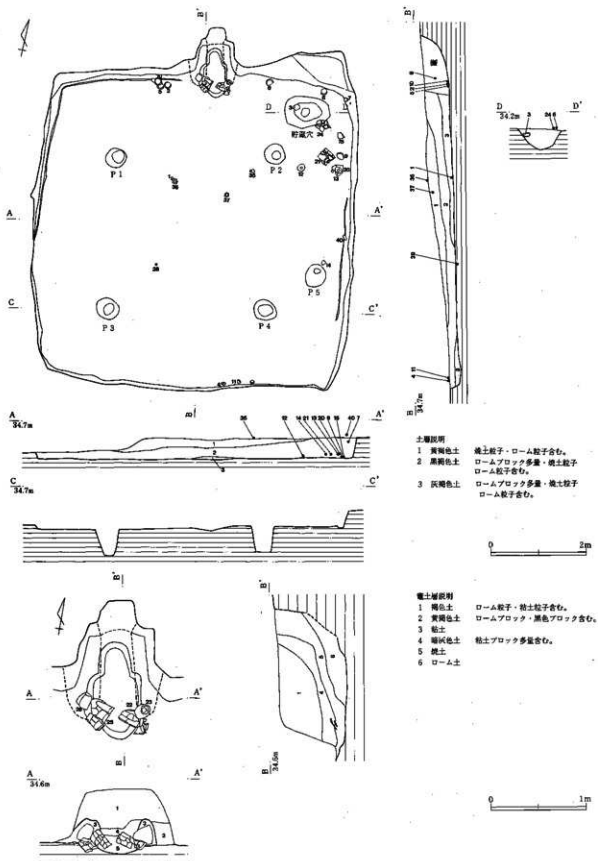
出土遺物 貯蔵穴周囲の床面付近の土師器が多い。床面直上に壘片(20)があり、その上に脚を失った高坏(13)を伏せてあった。この高坏は脚をきれいに打ち欠いているわけではないけれども、脚の破面を下に置いても安定する。そのすぐ南西の床面にもやはり高坏(12)を伏せていた。

残存率の多いものや、床面付近に遺棄されたと考えられる土師器食器類は、すべて胎土が1a類であり、八幡模造鉢内で生産された可能性が高い。食器は漆仕上げのものがやや多く、蓋模倣系坏(8・11)、身模倣系坏(3・4・6)・鉢(14・15)・高坏(12・13)がある。漆を使わないものでは身模倣系坏(1・2・5)と、蓋模倣系坏(7・9・10)とがある。土玉(28)も胎土1a類で、この遺跡の製品と考える。この建物には土師器の削りかすは2点しかない(29・30)が、焼粘土塊の出土量が51点と多く、また、遺棄された食器類の胎土が統一されているので、土師器製作と関わる建物の可能性もある。

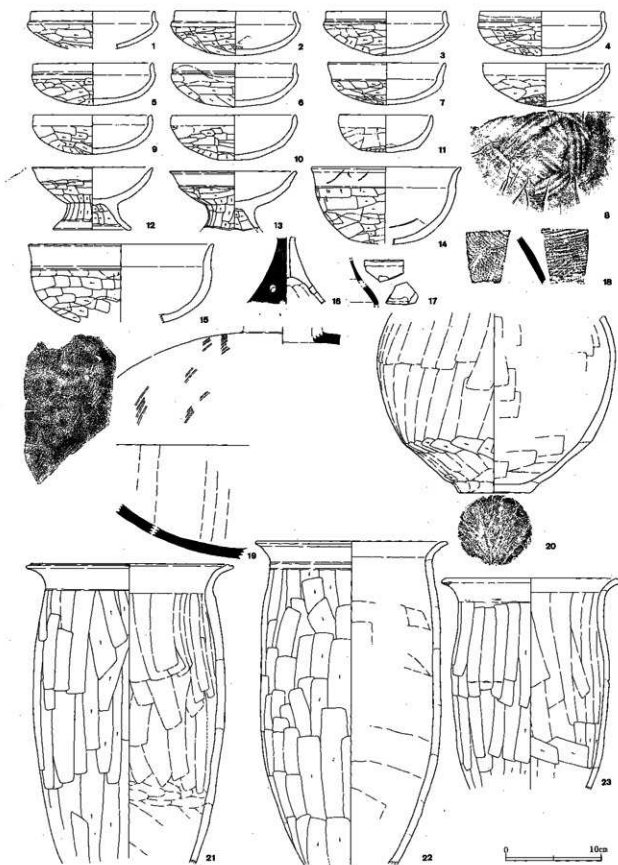
須恵器では、竈付近から出土した19が横瓶破片、17の2片が同一個体の壺、18はやや薄いので小形または中形の壺である。この他に、SI-35Bの須恵器壺と同一個体の、文様部の小破片がこの建物から出土している(第61図3の下側の拓本2点のうち、左側に掲載したもの)。この土器はSI-35Bの2片のうち1片が平安時代の壑穴建物SI-35Aに焼乱されて出土したらしく、SI-37Aの1片も出土状況は不明である。SI-35BとSI-37Aの位置は近いが、建物の主軸方向は異なる。

これらの他に、古墳時代前期の器台が混入している(16)。

平安時代の遺物(第68図) 最初に述べたとおり埋土上層に廃棄されたもので、やや量が多い。土師器坏は体部下端に斜位の手持ち筥削りを行う(35・36)。この坏2点と高台付坏(37)は床面から34cm、鉄斧(40)は床面から50cm上から出土していて、調査時に「SI-37B」の遺物と考えたものである。この所見からすると、鉄斧も平安時代に廃棄された遺物であろう。墨書は「土」などがあるようで、37の高台内の文字も「土」か「大」の可能性が高い。土師器片製紡錘車の未製品もある(39)。38はSI-42・43・44から出土している瓦と同類で、結城八幡瓦窯産品の胎土である。他に小片が1片ある。



第65図 八幡根遺跡 SI-37A (1) 遺構

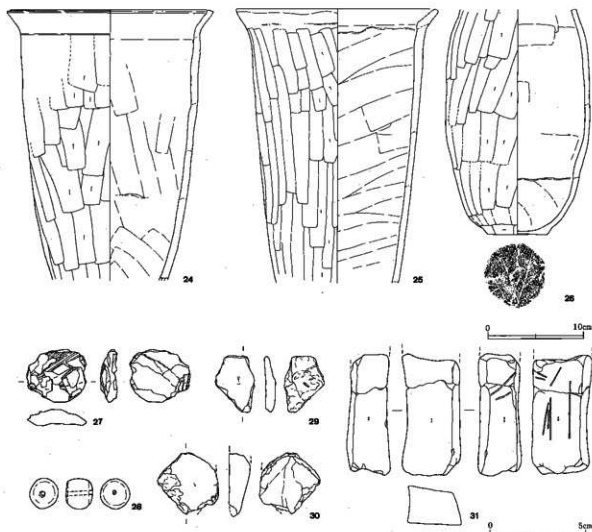


第66図 八幡根遺跡 SI-37A (2) 遺物

第76表 SI-37A出土遺物

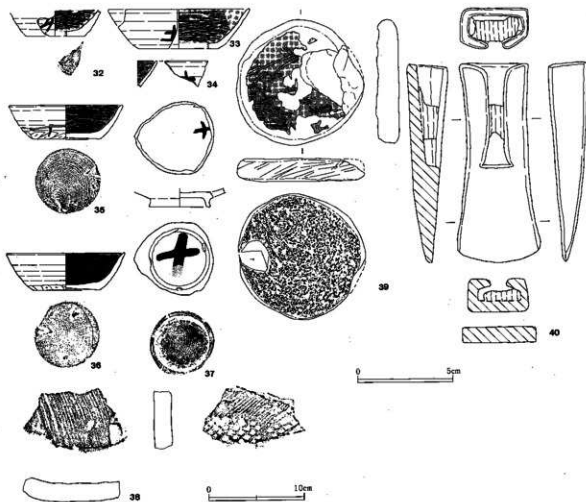
番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 環土師器	口 復13.0 大 13.9	薄く丸底で、口縁部は外面に段を持ち、体部上半はわずかに段を持ってやや内傾する。体部外面は縁直線の後に一方方向彫り、口縁部外面→内面全面横溝で。	10YR8/3 淡黄褐色 黒灰あり	やや粗い。黒細粒多量、白細粒少量。やや軟質。	底直 体→口1/3 周 [20枚直]
2 環土師器	口 13.0 高 4.7	薄く丸底。口縁部は内外面に明確な段を持って内傾する。外面は体部上位→口縁部を横溝での後、底部一方、体部横方向の彫り。内面は体部に横溝での後、内面全面と口縁部外面に横溝で。	2.5Y8/3 淡黄色 黒灰あり	縦溝で黒・透明細砂と白細粒やや多量。やや軟質。	底直 口縁部にヒビが入るに 比 以外は完形。 [13枚直]
3 環土師器	口 12.8 高 4.7 大 13.3	丸底で不安定。内外面に明瞭な段と段を持ち、外面口縁部下縁は浅い凹線状。外面体部に縁直線の後に、底部一方、体部横方向の彫り。底部の彫りが浅いので中央が少し下へ突出する。内面全面→口縁部外面は横溝での後漆仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色 黒灰あり	やや縦溝で黒・透明細砂多量、白細粒少量。軟質。	底上23cm 口6/7周 体全周 [11野蓋穴 内]
4 環土師器	口 13.2 高 4.7 大 13.7	丸底で、口縁部は外面に浅い凹線を伴う段、内面にやや弱い段を持って内傾する。外面は体部中位に縁直線の後に、底部一方、体部横方向の彫り。内面全面と口縁部外面は横溝での後、口縁部内外面漆仕上げ。底部内面は縁がみられないが、使って剥落した可能性あり。	2.5Y8/3 淡黄色 黒灰あり	縦溝で白・黒細砂多量、白細粒少量。軟質。	底上23cm 口6/7周 体全周 [18]
5 環土師器	口 12.8 高 4.5 大 13.0	丸底で、口縁部外面に浅い凹線を伴う段を持ち、内面に不明瞭な段を持って内傾する。外縁は体部上位以上に横溝での後、底部多方向、体部一方方向の彫り。内面全面→口縁部外面は横溝で。	10YR8/3 淡黄褐色 外底に大 黒灰あり	縦溝で透明細砂多量、黒細砂・白細粒やや多量。軟質。	底直 完形 [15枚直]
6 環土師器	口 12.0 高 4.7 大 13.5	ゆるい丸底で、底部中央部がかなり平坦に近い。口縁部は外面に浅い凹線を伴う段、内面に不明瞭な段を持って直立する。外面は体部上面での後、底面一方、体部中位横方向の彫り。口縁部内外面と体部内面は横溝での後、漆仕上げ。	10YR8/3 淡黄褐色	やや縦溝で、白細粒と黒・透明細砂多量。やや軟質。	底上47cm 口5/12周 底全周 [10]
7 環土師器	口 復12.6 高 4.5	ゆるい丸底。外面に残り明瞭な段、内面に弱い段を持って口縁部が外傾する。外面は底部一方方向の後、体部横方向の彫り。内面全面と外面口縁部は横溝で。	2.5Y8/3 淡黄色	縦溝で白細粒多量。黒・透明細砂少量。やや軟質。	底上36cm 口5/12周 [9]
8 環土師器	口 13.4 高 4.7	薄く丸底。口縁部は外面が明瞭な段を持たないで直立した後には端部が弱く外反し、端部内面がやや弱い段を持って外傾する。外面体部は上位に縁直線の後に、底部一方、体部横方向の彫り。内面全面→口縁部外面は横溝で、底部に焼成前の鋭い縦刻多量あり。内面全面と体部中位以上は漆仕上げ。	10YR8/3 淡黄褐色 黒灰あり	縦溝で黒・透明細砂少量、白細粒少量。軟質。	底上27cm 口5/12周 [12]
9 環土師器	口 12.6 高 4.2 大 12.7	口縁部は外面にやや弱い段を持って直立し、内面上半はゆるく外傾する。外面は底部多方向、体部横方向彫り。内面全面と口縁部外面は横溝で。	10YR8/3 淡黄褐色	やや縦溝で黒細砂多量、白細粒・透明細砂少量。軟質。	底直 完形 [6枚直]
10 環土師器	口 13.2 高 4.5 大 13.4	丸底で、口縁部は外面にごく弱い段を持って内傾する。外面は体部に横溝での後、底部多方向、中位横方向彫り。内面全面と外面口縁部は横溝で。	10YR8/3 淡黄褐色	縦溝で黒細粒多量、白細粒・透明細砂やや多量。やや軟質。	底直 完形。口～ 体部のヒビ 1本以外は 破損なし。 [14枚直]
11 環土師器	口 9.8 高 4.0	丸底で外面は厚く、体部と底部の境は明瞭。口縁部は内外面で体部との境に段を持たないで外面は直立し、内面は外傾する。外面は体部上面での後、底部一方方向彫り。内面全面と外面口縁部は横溝での後、漆仕上げ。	2.5Y8/2 灰白色	縦溝で黒・透明細砂と白細粒やや多量。軟質。	底上24cm ほぼ完形 [17]
12 高環土師器	口 12.9 底 8.3 高 6.7	脚部は内外面に段を持たないで外反して開く。環部は外面体部との境に弱い段をもって口縁部が外傾する。環部内面横溝で、外面は脚部に縦溝彫り、脚部横溝で、環部は下半段彫り後に体部横溝彫り、口縁部横溝で。環部内面全面と外面口縁部および外面脚部部に漆仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色 黒灰あり	縦溝で黒細砂多量、透明細砂と白細粒少量。軟質。	底上9cm 完形 [SI-37 No 2]
13 高環土師器	口 13.7 高 残 6.7	環部外面に浅い段を持ち、内面は段を持たないで、口縁部が開き、上位が弱く外反する。口縁部平面形は歪み、13.3×14.1cmの楕円形。脚部→環部外面は横溝彫り。脚部内面横溝彫り。環部内面全面→口縁部外面は横溝で、漆仕上げ。その他にも環底部→脚部まで外面全体を薄く漆仕上げする可能性が高い。	2.5Y8/3 淡黄色 外面に小 さな 黒灰あり	やや縦溝で黒細砂多量、白細粒・透明細砂少量。やや軟質。	底直 脚下半穴、 [3は全開 [3枚直]
14 鉢土師器	口 復15.8 高 8.2	外面口縁部下に浅い段を持ち、内面はかすかな段を持って外反する。外面は底部→体部に横方向の彫り。体部上位は削りが浅く、成形時の粘土のヒビが残っている。この点は口縁部の溝でも同様。内面体部横溝での後、内面全面→口縁部外面横溝で。内面全面と外面上半は漆仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色	やや縦溝で黒細砂多量、透明細砂と白細粒少量。軟質。	底上6cm 口1/6周 [1]

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	焼 成 土 成	出土状況 残存状況 注記
15 鉢 土師器	口 復19.6 高 残 8.3	外面口縁部下に明瞭な段を持ち、2本の浅い沈線状になる。内面はごく弱い線を持つて外反する。外面は肩部に横線での後、腰部中に縦方向の彫り。内面全型と口縁部外面は横線で、内面全型と外面上半は直仕上げ。外面下半も直で仕上げていた可能性もある。	10YR5/3 浅黄褐色	やや緻密で黒細砂や赤土、透明細砂や少量。黒細砂ごく少量。軟質。	床直 底1口/5 [6床直]
16 唇台 土師器		裾部で薄くなる。受部は粘土接合面で作製。受部中央は焼成前に穿孔をして、内面を細い工具で横に施す。脚部の3方に径8mmの円形穿孔を外周から穿す。脚部外面は直仕。脚部内面は上部にやや強い凹線で、下部に横線。外面に赤色塗彩。古墳時代前期の遺物が混入。	7.5YR7/4 にぶい藍色	緻密で白細砂やや多量。白・半透明小さな黒炭あり	埴土中 脚部部全周 [7ク土]
17 蓋 須恵器	頸 復約9.0 蓋 復約	短頸蓋または長頸蓋の、同一個体と思われる破片が2点。破片上端がかなり薄いのでは短頸蓋の可能性が高い。器厚は薄い。肩部内外面に不明瞭な線を付す。外面全面に緑色の自然釉が厚くかかる。	10B6G/1 青灰色	緻密で白細砂ごく少量。硬質。	不明 頸1/7周
18 甕 須恵器		甕としてはやや薄い。器の天地は逆の可能性もある。胴部外面は木目直文の菱格子写す。胴部内面は同心円文器具痕。	2.5GY8/1 灰白色	緻密で白細砂と透明細砂ごく少量。硬質。	埴土中 胴部が胴下 半部 [7ク土]
19 横須 須恵器	頸 復 8.6 大 復24.0	胴部外面は木目平行の平行引き後、横で削し。内面は回転を利用しない横線。頸部は内外面口縁部。	5B5/1 青灰色	緻密で少量多量、透明砂・細砂・灰色塵・砂やや多量。硬質。	甕 頸1/8周 [7ク土]
20 蓋 土師器	底 7.7 大 復25.4	底部は平底で、粘土円盤上に成形する。胴部下位の積み上げ休止面が外面に弱い線を付す。外面は胴部下位指張で、中位角張線での後、積み上げ休止部に斜削り。内面は横線。底部外面は木葉痕で、広葉裏面圧痕が二重に付く。側面から出た3次環状土が混雑し、細眼も残るのでカシラの可能性が高い。	2.5Y7/3 灰黄色 黒炭あり	やや緻密で赤と灰色の塵・砂多量。透明・黒細砂と白細砂少量。軟質。	床直 底全周 頸5/12周 [4床直]
21 蓋 土師器	口 22.0 大 20.4	胴部外面に浅い段を持ち、内面は線を付した上で強く外反する。口縁部内面は少し上につまみ上げ、端部に深い沈線を一帯をもつ。外面胴部は彫り後、口縁部横線。内面は下位段で、上~中位黒線で、口縁部横線。下半部が明瞭に加熱赤化。	7.5YR5/6 明褐色 黒炭あり	粗い。半透明の粗粒と赤土・砂多量。赤粒・黒・透明細砂やや多量。やや硬質。	床直 口~胴5/6周 [7床直]
22 蓋 土師器	口 20.4 高 残34.3 大 19.2	胴部外面に2段、内面に弱い線を持つて外反し、肩部付近で外面がさらに少し外へ折れ、肩部はわずかに尖り気味。外面は胴部彫り後、口縁部に横線と2周回つて頸部が2段になる。内面は胴部横線での後、口縁部横線。	5YR6/6 褐色	粗い。白細砂~細粒と灰色砂非常に多量。赤粒・黒・透明の砂・細砂多量。やや硬質。	底上4cm 口7/13周 頸1/3周 [1甕] 床に倒立して右軸に使用
23 蓋 土師器	口 19.0 大 16.6	頸部は内外面に明瞭な線を付した上で外反し、口縁部先端を丸くおさめる。外面胴部彫り後、口縁部横線。内面胴部上位置での後、下位の粘土積み上げ痕が盛り上がった部分の跡を認め、口縁部内面横線。	2.5YR6/5 明赤褐色 黒炭あり	粗い。白細砂非常に多量。白・灰色砂・黒・透明細砂多量。軟質。	底上55cm 口~全周 [1甕]
24 蓋 土師器	口 復22.0 高 残28.7	外面は頸部に浅い凹線状の段を持つて口縁部が外反し、端部は内面が明瞭に彫りして端部は浅い沈線を持つ。外面胴部は彫り後の後、口縁部横線。内面は胴部横線での後、口縁部横線。口縁部は全体にゆがみが強い。胴部下位は加熱赤化。	7.5YR5/6 明褐色	非常に粗い。白細砂~粗粒非常に多量。灰色砂・赤粒・黒・透明細砂やや多量。やや硬質。	床直 頸2/3周 口1/4周 [8床直]
25 蓋 土師器	口 21.5	頸部は内側だけに明瞭な線を持つ。外面は口縁部~頸部を線に施した後、胴部は彫り。外面は口縁部の横線と直仕を省略している。内面は横方向の横線での後、口縁部内面に横線。	5YR6/5 明赤褐色	粗い。半透明の粗粒と砂が非常に多量。灰色砂と金色の黒炭母片多量。軟質。	底上48cm 上半全周 下半1/2周 [3甕]
26 蓋 土師器	底 6.7 大 16.4	底部は円盤状に突出し、底面はわずかに上げ底気味で、広葉裏の裏の裏面が向きを変えて2回付く。裏は側縁の間隔がやや広く、主眼から2cmおきになる。外面は胴部横線での後、縦線彫り。下端彫り。内面は胴部下位に施す。内面下位に積み上げ休止面。内面は胴部下位に施す。中位以上は横線。内面下位に積み上げ休止面。下半部は加熱赤化。	2.5YR4/4 にぶい赤褐色	粗い。白と半透明の塵と砂多量。黒細砂と金色の黒炭母片少量。軟質。	底上57cm 底全周 頸2/3周 [4甕]
27 未製品 石製模 造品	径 3.2×2.8 厚 0.9 重 9.44g	円形に近い製品の、形制工程品。左側の面は中高形。右側の面はどちらかといえば平坦な、背面に沿った割線。刃の直線的な工具で主に左側の面を加工し、また、粗研磨も併用して成形している。古墳時代中期の遺物が混入。		滑石。	不明 完形 [SI-37]
28 土 土師器	径 10.6mm 厚 14.0mm 重 3.55g	手捏ね成形で、表面は滑らかな指痕で、成形時に九球を通して径2.0~2.2mmの穿孔を行う。表面が滑らかになっているの後の有無は不詳。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒細砂やや多量。透明細砂少量。軟質。1a類。	床直 底直 [19床直]



第67図 八幡根遺跡 SI-37A (3) 遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
29 削りか す 土師器	長 3.0 幅 2.1 厚 0.5 土師重 2.73g	背面は縄文様で、細かい凹凸が多い。腹面は1回の磨削り。器面がやや掌感しているので磨削り方向は不確か。周縁はすべて削片佩条または焼成前の破断面と思われる。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で白砂と黒細砂少量。白細粒と透明細砂と少量。軟質。	不明 焼成後の破損はない [SI-37]
30 削りか す 土師器	長 残3.2 幅 残3.2 厚 1.1 土師重 6.72g	背面は指撫で、かすかに指紋の一部が残る。腹面は1回の磨削り。左腹の右下は磨削り時の破線で、他は大半が焼成前の破面。	10YR7/4 にぶい黄褐色	黒・透明細砂と白細粒やや多量。軟質。la類。	不明 焼成後はほぼ破損なし [SI-37]
31 砥石	長 残6.3 幅 3.1 厚 2.3 重 残85.0g	扁平な細長い砥石で、砥面は4面。所により浅い擦痕が見られる。両端部は欠損しているようだが、図の下端は本来の端部である可能性が残る。		軟質で緻密な緑色凝灰岩。	不明 上端欠損 [SI-37]
32 坏 土師器	底 径 6.2	体部上位はやや厚く、平底。外面は体部ロクロ撫で、やや凹凸が強い。体部内面磨きの後、黒色処理。底部周縁糸切り磨しの後、外面に反時計まわりの手持ち磨削り。切り磨し時のロクロは右回転。体部外面に墨書あり。平安時代の遺物が混入。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白細粒多量。黒・透明細砂少量。やや硬質。	埋土中 底し6面 [「フク土」]
33 坏 土師器	口 径 15.0 底 径 8.2 高 4.2	平底。外面のロクロ目は凹凸があまり強くない。外面は体部ロクロ撫で、底部外周は内周方向の磨削り、底部中央の磨整は破壊して不明。内面は体部に磨きの後、黒色処理。体部外面に墨書。平安時代の遺物が混入。	7.5YR7/4 にぶい橙色	緻密で白細粒多量。黒・透明細砂やや多量。やや硬質。	不明 口1/9面 底1/8面 やや硬質。



第68図 八幡根遺跡 SI-37A (4) 遺物

番号 器種	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
34 坏 土師器	口径約13.5	やや薄手。体部外面はロクロ撫で、凹凸は弱い。体部内面磨きの後、黒色処理。体部外面に墨書あり。平安時代の遺物が混入。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白細粒やや多量、黒・透明細砂少量。硬質。	埋土中 □1/9間 「フク土」
35 坏 土師器	口径12.2 底高 3.5	体部は薄く、底部はやや厚い。外面はロクロ撫での後、体部下端手持ち痕残り。底部外面回転糸切り磨し後、無磨。糸切り時のロクロは右回転。内面は体部横方向、底部一方の磨きの後、黒色処理。体部外面に墨書あり。上層に廃棄された平安時代遺物。	7.5YR7/6 褐色	緻密で白細粒やや少量、黒・透明細砂少量。硬質。	底上46cm □1/8間 底全周 [SI-37BNo 1]
36 坏 土師器	口径12.4 底高 6.9 底高 3.9	下半がやや厚い。外面は体部のロクロ撫での凹凸が顕著。底部外面回転糸切り磨し後、底部外面の約1/3間と体部下端の全周を手持ち磨り。切り直し時のロクロは右回転。内面体部横方向、底部一方の磨きの後、黒色処理。上層に廃棄された平安時代遺物。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細粒やや多量、黒・透明細砂少量。やや硬質。	底上52cm □3/12間 [SI-37BNo 3]
37 高台付 坏 土師器	台 6.5	高台は少し外反気味で、底面は高台外周で接地する。内外面ロクロ撫で。底部外面回転糸切り磨し後、高台を貼り付け、高台内外の両面をロクロ撫で。糸切り時のロクロは右回転。内面底部と外面高台内に墨書。高台内の墨書は薄く、確実な字形が不詳。上層に廃棄された平安時代遺物。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細粒多量、白・灰色砂と黒・透明細砂少量。やや硬質。	底上46cm 台～底全周 [SI-37BNo 2]
38 平瓦	厚 1.8	粘土板を素材として、おそらく轆轤作り。凸面は糸切り状条痕の後、一辺4×5cm前後の斜格子印き。凹面は糸切り状条痕の後、布目痕。結核八幡瓦断面。平安時代の遺物が混入。	2.5Y7/3 淡黄色	やや粗い。黒砂・細砂多量、白細粒・透明細砂少量。軟質。	不明 断面は残存しない

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土成	出土状況 残存状況 注記
39 紡錘車の 未製品	径厚 6.8 1.2 重 5.90g	底部がやや厚い土師器の底を再利用して全周の側面を粗く斜位に研削。穿孔はみられぬ。内面輪は底部の洞眼がひどく、特に金属のノコギリなどは深く破壊しているので、このために製作を途中でやめたと考えられる。底面輪は刃先で加工したような痕が1ヶ所あるが、後世の所作や発掘時の傷である可能性がある。もとの環は、底面回転糸切り難し後、無調整で、糸切り時のロクロは右回転。底面は器面が荒れて観察しにくい。内面の底面はほぼ一方方向の磨ききの後に黒色処理。平安時代の遺物が入入。	10YR8/2 浅黄褐色	緻密で黒黒砂・白 磁粒やや多量、透 明細砂・赤磁粒少 量。軟質。	不明 1/3層が刷 疵層 [SI-37]
40 斧 鉄製品	長 10.6 刃幅 4.4 厚 2.2 重 156.1g	刃部は、縦断面が片丸形で袋の合わせ目側が直線的で、対面側がややふくらみを持って刃部に至る。また、平面形は左右に均等な弧状をなすので、横斧の可能性が高い。縦断面図に示したように、刃部縦断面の上端は袋部の中へ直角に近く落ち込むので、別の板状鉄片を重ねていると考えられる。袋部はこの板状材より上の部分だけを左右から折り返し、下部では横断面長方形、上部では側面高を増して上部で幅2.7×高さ2.2cmの五角形状になる。縦断面図では袋部の上方ほど鉄製の厚みが減る。木質は袋部上端から下へ4.0cmの範囲まで挿入している。上層に埋藏された平安時代遺物。			底上50cm 変形 [SI-37B]

第77表 SI-37A 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坪	盤・皿	蓋	高坪	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甌	大甌	粘粘土	その他
土口縁部	470			4	21			1		82			
胴体部	有			脚柱6	有					有			51
底面	平4 台1			柄8						20			
須口縁部													
胴体部							壺2 瓶1						
底面												有	

滑石製模造品の未製品1点・磁石1点・土玉1点・土師器の削りかす2点。
古墳時代前期土師器少量混入。

第78表 SI-37A 平安時代 出土遺物数一覧表

	坪・筒	盤・皿	蓋	高坪	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甌	大甌	粘粘土	その他
土口縁部	43								10				
胴体部	有								有				
底面	平40 台1							台1	7				
須口縁部	5	1	1										
胴体部	2									3			
底面	平3 台1												

平瓦片1・瓦小片1・鉄片1・土師質紡錘車の未製品1。古墳時代の壱穴に埋藏された平安時代遺物。
須臾器は集台底部1片が3割埋藏、重口縁部1片と有台底部1片は産地不明、他はすべて三和埋藏。

S1-38 (第69図、写真図版14・39・55)

本建物跡は、調査区の南西部にあり、台地上の南斜面に位置する。重複関係としては、SI-39より古く、南側をSI-39によって切られている。建物跡の西側は、調査区外である。

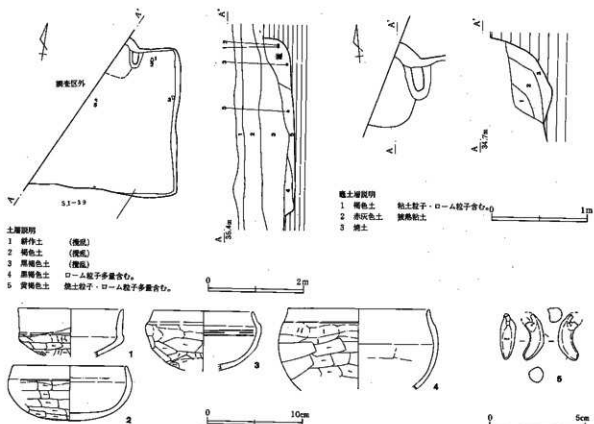
確認された部分では、東西3.1m以上、南北3.2mであり、平面形は方形で、主軸方向はMN-5°-Wである。壁は、確認面から南壁で20cm程遺存している。その立ち上がりは55°程の傾きで、ゆるやかに立ち上がっている。周溝は検出されなかった。床面は竈前がわずかに高く、南壁前に向かってわずかに傾斜しており、その比高差は10cmである。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北壁やや東寄りに位置すると思われる。竈の左半分が調査区外のうへ、煙道天井部が崩落しているが、断面にその構築材と思われる被熱した粘土層が確認でき、さらに右袖が残っているなど残存状況は比較的良いほうである。規模は、推定で袖幅78cm前後、奥行き61cm前後である。袖は、ローム土を掘り残して作り出している。煙道は平面舟首形で、燃焼部中央から45°程の傾きで立ち上がっている。燃焼部から煙道にかけて、焼土が最深29cm認められた。天井崩落層の粘土も良く焼けていることから、長期間使用していた

ものと思われる。掘形は、北壁を推定幅58cm前後、奥行き推定21cm前後の平面楕底状に掘り込んでいる。さらに、北壁とその前の床面を推定長径76cm前後、推定短径61cm前後の平面楕円形に掘り窪めている。その断面は皿状で、床面から最深8cmである。

埋土は2層に分層される。南壁前上層に、ローム粒子を多量に含む黒褐色土がみられるほかは、焼土粒子、ローム粒子を多量に含む黄褐色土である。

出土遺物 量は少ない。1は一見すると古墳時代中期末～後期初頭の坏のようであるが、外面体部上端を削り残し、鈍磨きを全くしないで漆で器面を仕上げることからみて、終末期まで下る可能性がある。胎土も、八幡根遺跡で生産している古墳時代終末期の土師器と同じ1a類である。この他の図示しなかった坏口縁部はどれも小片だが、やはり古墳時代終末期と考えられる。2～4も同じく八幡根遺跡産の胎土である。3は坏としたが、深いので鉢と考えたほうがよいのかもしれない。4は坏と同じく外面体部上端を削り残す鉢である。5は丁寧なつくりの勾玉である。



第69図 八幡根遺跡 SI-38 遺構・遺物

第79表 SI-38 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甌	大壺	焼土塊	その他
土師器	15				3			1	2				
口縁部	有				脚柱 1	有							
体部									有				1
底部													
須恵器													
口縁部													
体部													
底部													

蛇紋岩製(?)勾玉1点。
古墳時代前期の土師器少量と平安時代の土師器少量・須恵器1片(三和窯産の長壺胴部)混入。

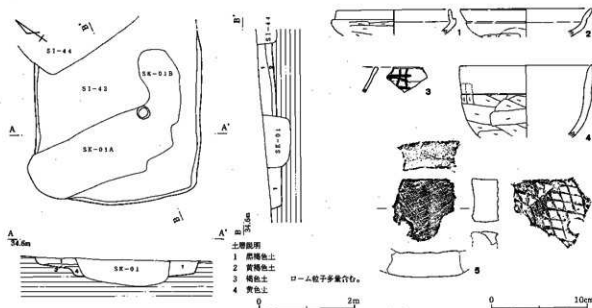
第80表 SI-38出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 11.2 高 残 5.1	口縁部下側の内外面に明瞭な稜と段を持つ。外面体部に鎌倉での後、 体部中位以下を横置割り。内面全面と外面口縁部は横溝で後津仕上げ。 内は内外面ともに口縁部が平らである。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒細砂やや 多量、透明細砂・ 白細砂少量。 軟質。1a類。	底上12cm 口~体1/2 周 [7]
2 坏 土師器	口 復12.0 高 5.8	丸底で、口縁部は外面に浅い段を持ち、内面は稜を持たずに内傾する。 外面は体部に横方向、底面に一方または多方向の寛削り。内面全面 と外面口縁部横溝で。口縁部内外面を漆仕上げする。内面体~底部に は現状では漆が見られないが、新漆した可能性もある。	10YR8/4 浅黄褐色	やや粗い。黒・透 明細砂・白細砂や や多量。軟質。 1a類。	底上12cm 底~口1/8 周 [2]
3 坏 土師器	口 復10.7 高 残 6.3 大 12.3	薄く、外面に明瞭な段、内面に細い稜を持って口縁部が内傾する。外面 は体部に鎌倉での後、体部下位は横方向か多方向、中位は横方向 の寛削り。内面全面と口縁部外面横溝で、内面体部上位は地成層の 稜が平行状線状にめぐる。内面全面と外面体部中位以上は漆仕上げ。	2.5Y7/6 明黄褐色	緻密で黒・透明細 砂と白細砂少量。 軟質。1a類。	底上8cm 口5/12周 体1/2周 [3]
4 钵 土師器	口 15.0 高 残 8.5 大 17.0	外面に浅い段を持ち、内面は稜を持たないで口縁部が内傾する。外面 は鎌倉での後、体部中位以下に横方向の寛削り。内面体部鎌倉で後 に内面全面と口縁部外面を横溝でし、漆仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色	やや緻密で黒・透 明細砂やや多量、 白・赤細砂少量。 軟質。1a類。	底上13cm 口~体1/3 周 [確]
5 勾玉 蛇紋器	長 残2.45 厚 0.8 幅 1.05 重 2.6g	頭部は両面が窪んで厚さ2.5~3.0mmまで薄くなり、片面から穿孔して いる。全面が丁寧に研磨されて光沢を持つ。腹部と頭部のくぼみの 内側は細い研磨痕をやや残している。孔は初径2.0mm、終径1.8mm、穿孔 後に頭部両面の窪みの中を研磨している可能性がある。		濃緑~黒緑色で緻 密。硬質、良質 の蛇紋岩(?)。	底上13cm 頭部を欠く [1]

S1-43 (第70図、写真図版15・40~41)

本建物跡は、調査区の南西部南寄りにあり、台地上の南斜面に位置する。重複関係としては、SI-44、SK-01より古く、北西コーナーから北壁西側にかけてをSI-44に、南西コーナーから建物跡中央部東側にかけてをSK-01によって切られている。

本建物跡は、北壁付近がすでに削平されており、平面形は確定できない。確認された部分では、東西3.6m程、南北3.7m以上であり、ほぼ方形を呈していると思われる。主軸方向はMN-55° - E程度を示す。壁は確認面から、西壁で16cm程、東壁で25cm程、南壁で23cm程遺存している。その立ち上がりは、西壁で55°



第70図 八幡根遺跡 SI-43 遺構・遺物

程、東壁・南壁で70°程の傾きである。周溝は検出されなかった。床面は、北壁際が高く南壁際に向かってゆるやかに傾斜しており、その比高差は18cmである。また、SK-01によって床面中央部を切られているのではっきりしないが、床面中央部が一段低く掘り窪められているようで、その比高差は西壁際との間に18cmである。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。竈も検出されなかったが、おそらく、削平されてしまった北壁際に存在していたものと思われる。

埴土は4層に分層されるが、北側床面直上に黄褐色土がみられるほかは、概ね黒褐色土である。

出土遺物 小片が多い。2は胎土1a類なので、この遺跡で製作した土師器と考えられ、4もその可能性が高い。1はその可能性もあるが、混和材が少し異なるので、正確な産地は不詳である。2は口縁上半が外面でやや内彎するが、栃木県域中央部で見られる7世紀代の内彎口縁環とは口縁部が短い点が異なる。

遺物中には平安時代の遺物が若干ある。この中にはSI-44からの流入品を含む可能性が高い。3は墨書土器。瓦も1片だけあり(5)、穿孔が見られるものである。SI-37A・SI-42・SI-44の出土例と同質の胎土で、同じく斜格子叩きを持つ。

第81表 SI-43出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 焼	出土状況 残存状況 注記
1 環 土師器	口 復12.0 大 復13.3	口縁部内外面直下の段は明瞭で、外面の段は下へくぼみ気味。体部外面彫削り、口縁部外面と内面全面は横溝で。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で赤褐色と透明細砂ごく少量。やや軟質。1b類。	不明 口一休1/6 周
2 杯 土師器	口 復約14	やや薄く、口縁部外面直下の段は明瞭で、内面に弱い段を持つ。体部外面は上位に強いの後、下位に彫削り。内面全面と口縁部内外面は横溝での後、漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒細砂と白細砂少量。やや硬質。1a類。	不明 口一休1/12 周
3 杯 土師器	口 復約13	薄く、外面だけ口縁部での凹凸が強い。口縁部から体部外面に墨書あり。器面が高まる部分では墨書が彫削して消えている。内面はワケ口縁部だけで、磨きや黒色気味はしていない。平安時代の遺物が混入。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂少量。軟質。	不明 口一休1/12 周
4 鉢 土師器	口 復14.2 高 残 7.6	口縁部は厚く、体部下位はやや薄い。口縁部は外面に浅いが明瞭な段を持つて弱く外傾する。外面体部は彫削りの後、口縁部横溝で。内面は全面横溝で。内外面の残存部は全面漆仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で透明細砂やや多量。黒細砂・白細砂少量。やや軟質。1b類。	不明 口一休1/4 周
5 平瓦	長 残 7.4 幅 残 8.0 厚 2.5	粘土板を素材として捲き作り。凸面は糸切状条痕の後に、斜格子叩き目。凹面は同じく糸切状条痕の後に横溝及び布目痕。孔は一個所で、焼成前に両先を面してくりぬくように凹面から半分ずつ穿孔。結城八種瓦産地。平安時代の積層に伴う遺物が混入。	2.5Y7/3 淡黄色	やや粗い。黒砂・細砂多量、白細砂・透明細砂少量。軟質。	不明 断面6cm残

第82表 SI-43 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	環	壺・甕	蓋	高杯	鉢	小形土器	壺・甕	小形壺	長壺	甌	大壺	埴土塊	その他
土師器	45				7			2		1			
須恵器	有				有								2
須恵器									5	1			
須恵器													
須恵器													
須恵器													

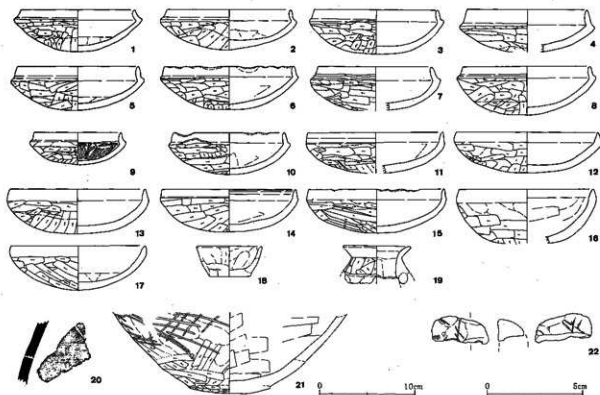
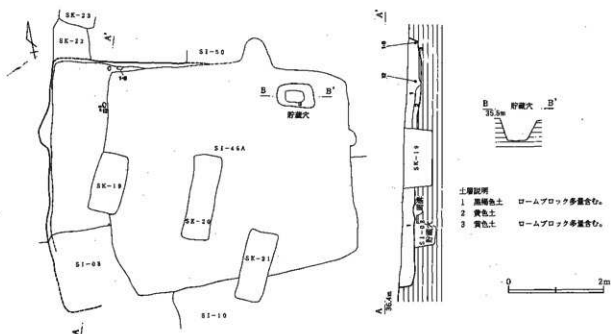
平瓦1点。
古墳時代前期の土師器3片、平安時代の土師器若干と須恵器少量混入。

SI-46B (第71図、写真図版16・43・54)

本建物跡は、調査区の北部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-46Aより古く、建物跡の中央部から東側をSI-46Aによって切られている。また、SI-08より新しく、SI-08の北東部を切っている。さらに、SI-50とも重複すると思われるが、新旧関係は不明である。

確認された部分では、東西5.8m以上、南北5.4m程であり、平面形はやや東西に長い方形を呈しており、主

軸方向はMN-14' - Eを示す。壁は確認面から南壁で28cm程、北壁で20cm程遺存している。その立ち上がりは、南壁で77'程、北壁で68'程の傾きである。周溝は検出されなかった。床面は、南壁際がやや高く、建物跡北側がやや低くなっており、その比高差は19cmである。柱穴は検出されなかった。貯蔵穴は、北東コーナーと思われる付近に、上部をSI-46Aに削平された状態で検出された。東西81cm、南北51cmの平面隅丸方



第71図 八幡棋遺跡 SI-46B 遺構・遺物

形を呈し、断面は逆台形であり、最深48cmであり、その底面はほぼ平坦である。

竈は検出されなかった。おそらく、北壁東寄りに位置していたものと思われる。

埋土は3層に分層される。概ねロームブロックを多量に含む黒褐色土である。

出土遺物 遺物は、SI-46AとSI-46Bを区別しないで取り上げたものが大半である。両建物は時期が違うので、平安時代の遺物をSI-46Aに伴うもの、古墳時代終末期の遺物をSI-46Bに伴うものとして扱った。出土遺物数一覧表(第84表)に示した破片数も、この扱いによる値である。

土師器坏は、身模倣形は漆で仕上げられるものが多く、蓋模倣形は漆で仕上げないものもある。

6・10・15は口縁部に歪みや剥離のある不良品の土師器で、剥離部にはその上から漆仕上げをしてあるので、製作途中で破損したものである。この遺跡の製品であろう。胎土は1b類が多い。10はやや出来も悪い。1は形状・調整技法が異なるので、この遺跡の製品ではない可能性がある。22は粘土紐を積み上げたものが割れが落ちた状態で焼成されたものと思われ、土師器の未製品の断片と考えておく。20は鹿沼液状文のある古墳時代終末期の在産須恵器甕で、SI-17の例と同類である。

これらの他に鉄滓が1点出土し、「SI-46」として取り上げられていて、出土状況からは平安時代のものか、古墳時代のSI-46Bに伴うものかは明らかでない。これは滓の質感からみて平安時代の遺物と考え、SI-46Aの項で掲載した。

第83表 SI-46B出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 覆12.0 高 4.4 大 覆13.5	体部下半がやや下へ突出気味の強い丸底。口縁部は内外面に明瞭な稜線と段を持って内傾する。全体としてシャープで丁寧な作り。外縁は体部に漆の後、底部に一方、体部上位と中位に横方向の彫り。体部中位の窪んだ部分には残りがあがる。内面全面と外面口縁部は横撫で後、漆仕上げ。漆仕上げは濃く、外面の漆は体部中位まで及ぶ。	2.5YR/3 淡黄色	緻密で混和材はほとんど目立たない。やや硬質。	貯蔵穴 底～口3周 「貯蔵穴」
2 坏 土師器	口 覆13.0 高 4.3 大 覆14.5	底部はやや厚く、重い。口縁部は内面に明瞭な稜線と外面に広く長い段を持って内傾する。外面は底部一方の彫り。体部上位に少し横方向の彫り。内面は底部に彫りした後、内面全面と口縁部外面横撫での後、漆仕上げ。外面の漆は体部上半まで及ぶ。	10YR8/2 灰白色	緻密で黒・透明細砂少量。軟質。1b類。	貯蔵穴 底～底全面 口3/4周 「貯蔵穴」
3 坏 土師器	口 覆13.1 高 4.7 大 覆14.2	底部は厚い。口縁部内外面に明瞭な稜線と段を持って内傾する。底部外周に、粘土接合部に沿った亀裂がある。底部多方向、体部横方向の彫り。内面全面と口縁部外面横撫での後、漆仕上げ。	2.5YR/3 淡黄色 黒変あり	緻密で混和材はほとんどなく、黒・透明細砂ごく少量。軟質。1b類。	貯蔵穴 底～口3/4 周 「貯蔵穴」
4 坏 土師器	口 覆12.4 高 覆4.5 大 覆14.3	体部はやや厚い。口縁部は内外面に明瞭な稜線と広い段を持って内傾する。底面一方、体部横方向の彫り。内面全面と口縁部外面横撫での後、外面の底部を除いて全面を漆仕上げ。	2.5YR/2 灰白色	緻密で混和材は目立たず、黒・透明細砂少量のみ。軟質。1b類。	貯蔵穴 底～底全面 口1/4周 「貯蔵穴」
5 坏 土師器	口 覆12.8 高 4.3 大 覆14.0	やや厚く軽い。口縁部は内外面に明瞭な稜線と段を持って内傾する。外面は体部に一方の彫りの後、底部におおむね一方の彫り。内面は体部に彫りした後、中位以上と外面口縁部とを横撫で。内面全面と外面上半は漆仕上げ。	10YR8/2 灰白色	緻密で白細砂と黒・透明細砂少量。軟質。1b類。	貯蔵穴 底～口3/4 周 「貯蔵穴」
6 坏 土師器	口 覆13.8 高 4.6 大 覆14.6	丸底で、口縁部内外面に明瞭な段を持ってやや内傾する。外面は底部一方、体部横方向の彫り。内面は体部に彫りした後、内面全面と口縁部外面を横撫で。外面中位以上と内面を漆仕上げ。全体に漆仕上げが濃い。内面底部の漆はおそらく使用によって摩耗している。口縁部に大きな角が一面と小さな新築三面所があり、いずれもその上に漆が載るので、製作途中で変形・破損した不良品を漆で仕上げたもの。	2.5YR/3 淡黄色	緻密で白細砂と黒・透明細砂少量。やや硬質。1b類。	貯蔵穴 底～口3周 「貯蔵穴」
7 坏 土師器	口 覆12.2 高 覆4.5 大 覆13.7	全体に厚く重い丸底で、口縁部は内外面に明瞭な稜線と段を持って内傾する。底部一体部は全面を6単位程に分割して横方向彫り。内面全面と外面口縁部は横撫で後、漆仕上げ。口縁部外面に亀裂の浅い凹線一帯をめぐらしている。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒・白細砂多量。軟質。1a類。	貯蔵穴 底～口5/12周 「貯蔵穴」
8 坏 土師器	口 覆13.5 高 4.5 大 覆14.6	底部は厚目でやや重い。口縁部は内外面に明瞭な稜線と段を持って内傾する。外面は底部におおむね一方、体部に横方向の彫り。内面全面と外面口縁部は横撫で。外面上半と内面は漆仕上げで、内面底部中央は器面が摩滅して漆もとれている。	5Y7/1 灰白色	緻密で白細砂と黒・透明細砂少量。軟質。1b類。	不明 底～口5/6周

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号 種類	法 量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
9 環土師器	口高 9.2 底高 3.4 大 10.1	薄く丸底で、口縁部は内外面に明確な稜線と段を持って少々内傾する。外面は体部上端を撫でた後、底部一方、体部横方向の彫削り。内面は中央におおむね放射状、体部上端に縦方向の彫削り。口縁部内外面横線。外面上半・内面口縁部漆仕上げ。内面体部には漆が見られないが、もたら漆を使わなかったのか、体部は密な塗層の上を漆で仕上げたので漆が剥げやすかったのかのどちらかであろう。	7.5YR8/3 淡黄褐色 外底面に小黒斑あり	緻密で白細粒と黒・透明細砂ごく少量。やや軟質。1b類。	貯蔵穴 底形 「貯蔵穴」
10 環土師器	口高 11.8 底高 4.4 大 12.8	体部が全体に厚く重い。口縁部外面に明確な段を持ち、内面に弱い稜線を持つ。外面は体部横方向の後に、底部に多方向の彫削り。内面体部を横撫でし、内面全面と口縁部外面に横撫での後、漆仕上げ。口縁部の粘土がゆがんだ部分や欠損部が4箇所ある。これらは漆仕上げ以前に変形や破損をしている、不良品の土師器である。	10YR8/2 灰白色	緻密で白細粒・透明細砂やや多量、黒細砂・白細砂少量。軟質。1b類。	貯蔵穴 底・口3/4 周 「貯蔵穴」
11 環土師器	口高 復14.2 底高 4.3 大 復14.7	丸底で、口縁部は外面に浅い段、内面にごく弱い稜線をもって外面で直立する。外面は体部に撫での後、底部一方、体部横方向の彫削り。内面体部を横撫でし、内面全面と口縁部外面横撫での後、漆仕上げ。外面の漆仕上げは中位まで及ぶ。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で透明細砂やや多量、黒細砂・白細砂少量。軟質。1b類。	貯蔵穴 口・3周 「貯蔵穴」
12 環土師器	口高 15.0 底高 4.3 大 15.8	丸底。口縁部は内外面にやや弱い稜線をもって、外面が内傾し、内面が外傾する。外面は体部に撫での後、底部一方、体部横方向の彫削り。内面全面と外側口縁部は横撫で。	2.5Y6/1 灰白色	緻密で白細粒と黒・透明細砂少量。軟質。1b類。	床直 底・口1/2 周 「2床直」
13 環土師器	口高 14.4 底高 4.7 大 15.1	全体に厚く重い。口縁部は内外面に明確な稜線をもって外面が内傾し、内面が外傾する。外面は体部に撫での後、底部一方、体部横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面横撫での後、漆仕上げ。漆は濃い。外面の漆は体部中位まで及ぶ。	10YR2/3 淡黄褐色	緻密で透明細砂・白細砂少量。やや硬質。1b類。	貯蔵穴 はは定形 「貯蔵穴」
14 環土師器	口高 14.2 底高 4.5 大 14.5	全体に厚く重い。丸底で、口縁部下端は外面に浅い段、内面にごく弱い稜線を持つ。外面はやや外傾する弱い面を全す。内面上端近くに浅い凹線を持つ。外面は体部横方向、底底はおおむね一方の彫削り。内面は体部横撫での後、内面全面と口縁部外面横撫で。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で透明細砂少量、黒細砂ごく少量。軟質。1b類。	貯蔵穴 底・体全面 口・体全面 「貯蔵穴」
15 環土師器	口高 14.4 底高 4.6 大 14.8	体部はやや厚く、口縁部は外面にごく浅い弱い稜線、内面に弱い稜線をもって直立する。外面は体部に撫での後、底部一方、体部横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面横撫での後、漆仕上げ。口縁部部に幅6~10mmの彫削りが箇所あり、その彫削面上が漆で仕上げられている。漆仕上げ工程より前に破損していた不良品。	7.5YR8/3 淡黄褐色	緻密で白細粒やや多量、黒・透明細砂ごく少量。軟質。1b類。	貯蔵穴 底・口2/3 周 「貯蔵穴」
16 環土師器	口高 復14.2 底高 残 5.7 大 復14.8	厚く重い。口縁部は、内外面にやや弱い稜線をもって外面が内傾し、内面が外傾する。外面は体部上位に撫での後、底部おそく一方、体部中位に横方向の彫削り。内面は横撫での後、横撫で。口縁部内外面横撫で。	10YR8/3 外底面中央 に黒斑あり	緻密で白細粒と黒・透明細砂少量。軟質。1b類。	貯蔵穴 口5/12周 「貯蔵穴」
17 環土師器	口高 14.2 底高 4.7 大 14.4	厚く重い。口縁部は外面が弱い稜線をもって直立し、内面は頸部だけが多少外傾する。外面は体部上端に横方向の彫削り、体部中位から底面全体を一方の彫削り。内面は底部に多方向撫での後、内面体部と口縁部外面に横撫で。	2.5Y8/2 外底面に大 黒斑あり	緻密で白細粒やや多量、黒・透明細砂ごく少量。軟質。1b類。	貯蔵穴 定形 「貯蔵穴」
18 小形土師器	口高 復 7.0 底高 4.5 大 3.2	底面は安定した平底で、おそく成形時の粘土板のまま無調整。体部外面は綿々撫で、粘土の積み上げ痕を少し残す。口縁部端は、残存部分でこぼれ部分の窪みではないが、体部と同様な仕上げであり、復元よりももっとゆがんでいた可能性も考えられる。内面は底部一方、体部斜方向の綿々撫で。環頸のような粘土ではなく、泥和材が多い薬類と同様の粘土。	10YR6/2 灰黄褐色	粗い・白粒・細粒やや多量、赤・灰色砂粒多量。軟質。	貯蔵穴 底・体1/2 周 口・30周 「貯蔵穴」
19 小形土師器	口高 7.2	ミニチュアの定形土師器。全体として大きさにわりに厚く、特に胴部は厚い。頸が弱いので胴部の内面調整がきちんとできず、胴部は粘土の丸座を積み上げた部分で新築している。外面は口縁部に横撫での後、環頸彫削り。内面横方向の撫で。外面残存部全面と内面口縁部を漆仕上げ。	7.5YR4/1 褐灰色	緻密で白粒・細粒やや多量、黒・透明細砂少量。軟質。1b類。	不明 胴上 1/4周 「S1-46」
20 大須意器	頸 復約40	頸部外面に平行沈線二条を回転施文。その上に1本工具による縦線波状文。これらの施文は、幅1~2mmで先が平に近い工具による。内面は回転によらない横撫で。ロクロの回転方向は不詳。外面は黒色の自然釉が薄く付着する。	5B6/6/1 青灰色	緻密で白粒・細粒やや多量、白砂・透明細砂少量。硬質。	不明 胴部一部 「S1-46」
21 壺土師器	底 8.6	底面は厚く突出し、中央部が丸く、安定しない。外面は胴部に撫での後、胴部下端付近と底面多方向の彫削り、胴部中央位りに弱い彫削り。内面は底部に多方向、胴部に横方向の横撫で。	7.5YR6/4 にぶい褐色	粗い。白粒・細粒と黒細砂多量、赤と底色の礫と砂若干。やや硬質。	貯蔵穴 底全面 胴下位1/2 周 「貯蔵穴」
22 製土師器 未製品の 焼成 土師器	長さ 残 3.0 厚さ 1.5 重量 1.4g 大 1.0	全面横撫で。もとの粘土のつぎめが下面にみえる。器の下層部は丸い断面形状で、頸口縁部に積み上げた粘土粒がはがれ落ちた可能性がある。左右端は現状であるかと破損していない。丸い径程度の焼成土塊の可能性もある。	2.5Y8/2 灰白色	緻密で白細粒・黒・透明細砂やや少量。軟質。1a類。	不明 定形 「S1-46」

第84表 SI-46B 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

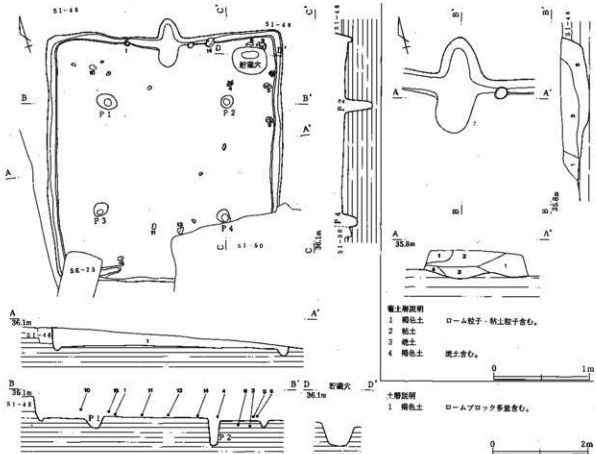
	杯	壺・皿	蓋	高杯	鉢	小形土器	壺・瓶	小形甕	長甕	甌	大甕	焼酎土壺	その他
土口縁部	268			1	20	3		5		14			
土体部	有			脚柱?	有					有			33
土口縁部				壺1		1				6	4		
土体部												2	
土口縁部													
土体部													

土器未製品の焼成品1片。粘板岩の小副片(石製模造品素材)1片。須恵器壺は在地産。
古墳時代前期の土器が少量混入。

SI-47 (第72~73図、写真図版16・43~44・54~55)

本建物跡は、調査区の北部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-50より古く、南壁東側から南東コーナーにかけてをSI-50によって切られている。また、SI-48より新しく、SI-48の中央部から南西コーナー寄りまでを切っている。

平面形は、東西5.0m、南北5.3mのわずかに南北に長い方形を呈し、主軸方向はMN-17°-Eを示す。壁は確認面から西壁で38~46cm程、東壁で0~4cm程、北壁で13cm程遺存しており、傾きは西壁で77~86°程と垂直気味に立ち上がり、北壁でも77°程である。周溝は、南壁際中央部を除く壁際全周で検出された。幅は14~25cm、深さは6~16cmであり、断面は皿状で、底面は平坦もしくはやや内彎している。床面は中

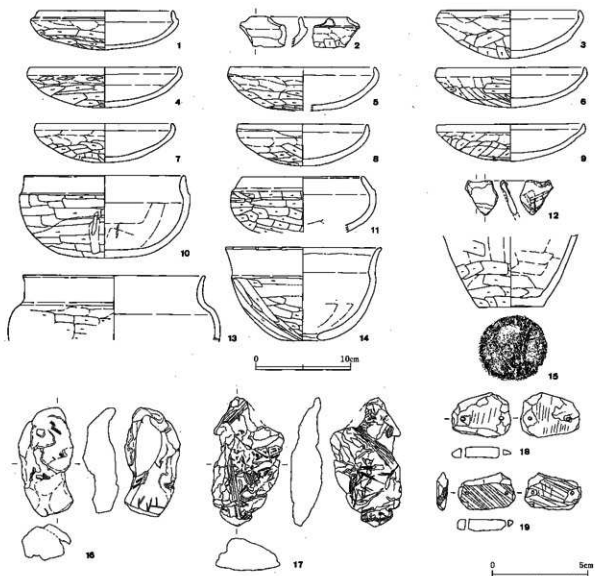


第72図 八幡根遺跡 SI-47 (1) 遺構

中央部西側、中央部南側がわずかに高く、東壁際、北壁際がわずかに低くなっており、その比高差は東壁際で8cm、北壁際で12cmである。

主柱穴は4本検出された(P1~P4)。P1は長径43cm、短径32cmの平面楕円形で、深さ30cm、P2は径28cm、深さ58cm、P3は長径34cm、短径27cmの平面楕円形で、深さ72cm、P4は長径33cm、短径26cmの平面楕円形で、深さ35cmである。掘形は、P1、P4が断面楕鉢状で、P2、P3が断面円柱状である。貯蔵穴は、北東コーナーに検出された。東西74cm、南北57cmの平面不整な隅丸方形で、深さ48cmである。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦である。

竈は、北壁中央に位置する。煙道天井部が崩落し、断面に、その構築材である粘土層を厚さ38cm程確認することができるものの、残存状況は比較的悪く、掘形を確認するにとどまる。その掘形は、北壁を幅55cm、奥行き40cmの平面舟首形に掘り込んでおり、さらに北壁前の床面と北壁を、長径102cm、短径45cm程の平面楕円形に掘り窪めている。その深さは床面から最深6cmであり、断面は皿状である。煙道は、燃焼部中央か



第73図 八幡根遺跡 SI-47 (2) 遺物

ら10°の傾きでゆるやかに立ち上がり、B'の南27cmの所からは62°の傾きで急激に立ち上がっている。焼土部前から運道奥にかけて、焼土が最深25cmの厚さで認められた。かなり長期間にわたって使用していたものと思われる。

埋土は1層で、ロームブロックを多量に含む褐色土である。

出土遺物 土師器は蓋模倣系のもので大半である。胎土からみて八幡根遺跡産とわかる1a類も若干あるが、胎土1b類や2類のものは、はっきりとは断定できないものも多い。10は八幡根遺跡産の中型の鉢で、乾燥時の亀裂を補修している可能性もあるが、確実ではない。13はこの遺跡に多く見られる大形鉢で、SI-06・14・22B・28・34・37などに見られ、八幡根遺跡の中で多く生産している器種と考えられる。胎土が1a類なので、これも八幡根遺跡の製品と考えられる。14は鉢と同様の胎土・器形の瓶で、上半部の破片だけでは鉢と区別できない。

2の環と12の鉢は、口縁部が歪んだ不良品なので、やはりこの遺跡の製品の可能性がある。この建物には土師器の削りかすはないが、焼粘土塊が多いので、土師器製作と関わる建物である可能性もある。16と17が焼粘土塊である。混和材が少ない精選された胎土(2類)である。17には稲藁と稻柄の圧痕が見られ、SI-22B・28・50の例と同様である。

須恵器は大甕の胴部が1点あり、細片なので図示していない。外面は叩き?の後にカキメを施し、内面は同心円文当具痕かと思われるもので、産地は不明である。

第85表 SI-47出土遺物

番号 器種	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 成	出土状況 残存状況 注記
1 環 土師器	口 14.1 高 4.1 大 15.6	薄く軽い。口縁部は内面に明瞭な稜線と外面にゆるく広い段を持って内脣する。外面は体部に撫での後、底部多方向、体部中位横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面に横撫で。	10YR8/3 浅黄褐色 外底面に黒 斑あり	緻密で黒・透明細 砂やや多量、白細 砂少量。軟質。 1b類。	底上6cm 底-口2/3 周 [16]
2 環 土師器	口 復約15 大 復約16	内外面に明瞭な稜と段を持って口縁部が内脣する。外面は体部撫での後に底部彫削り、口縁部横撫で。内面は全面横撫で。口縁部外面に成形時に付着または変形した部分と見られる粘土塊がみられる。このまま焼成されてしまった不良品。破面は焼成後の破損と思われる。	10YR7/3 にぶい黄橙 色	緻密で透明細砂や やや多量、黒細砂・ 白細砂少量。 軟質。1b類。	不明 口1/24周 [SI-47]
3 環 土師器	口 14.8 高 5.1 大 復15.7	丸底で、口縁部内外面に弱い稜を持って内脣する。体部外面に撫での後、底部一方、体部横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面に横撫での後、漆仕上げ。	2.5Y7/2 灰黄色	緻密で白細粒・透 明細砂少量、黒細 砂ごく少量。 やや硬質。1b類。	床直 底-口7/12 周 [10]
4 環 土師器	口 15.9 高 4.3	やや薄く軽い。口縁部は内外面に稜を持って内面が直立する。外面は体部に撫での後、少し突出気味の体-底部を底部一方、体部横方向の彫削り。内面底部に多方向撫で、口縁部内外面に横撫で。内面全面と外面口縁部に漆仕上げ。	2.5Y8/4 淡黄色	緻密で白細粒と透 明・黒細砂ごく少 量。軟質。1b類。	床直 底-口3/8 周 [13]
5 環 土師器	口 15.2 高 4.5 大 16.0	やや薄く軽い。口縁部は内外面に不明瞭な稜を持って内面が直立する。外面は体部に撫での後、底部一方、体部横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面に横撫での後、漆仕上げ。	2.5Y7/2 灰黄色	緻密で白細粒・透 明多量。 やや硬質。1b類。	床直 底-口2/8周 [8床直] [9床直] [16床直] が接合
6 環 土師器	口 15.6 高 4.2 大 16.1	底部はやや厚く、体部は薄い。口縁部内外面に弱い稜を持って外面が内脣し、内面に外脣する。体部外面撫での後、底部一方、体部の一部を横方向に彫削り。内面全面と口縁部外面に横撫での後、内面全面と外面上半を漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄橙 色	緻密で白細粒・透 明細砂やや多量、 黒細砂少量。 軟質。1b類。	床直 口1/2周 底全指 [12]
7 環 土師器	口 14.4 高 4.1 大 14.9	やや薄く軽い。口縁部は内外面にやや弱い稜を持って、内面が直立する。体部外面に撫での後、底部一方、体部中位に横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面に横撫で。	5Y6/1 灰色	緻密で透明細砂少 量。軟質。1b類。	不明 口1/12周 底全面
8 環 土師器	口 復13.6 高 4.4 大 復14.0	口縁部は内外面にわずかな稜を持って内面がほぼ直立する。外面は体部に撫での後、底部におおむね一方の彫削り。口縁部は稜よりさらに下方まで横撫で。内面は横撫で。内面全面と外面口縁部に漆仕上げ。	10YR7/2 にぶい黄橙 色	やや緻密で白粒・ 細粒と透明細砂多 量、黒細砂やや多 量。軟質。1a類。	不明 底-口5/12 周 [SI-47]

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土成	出土状況残存状況注記
9 土師器 坏	口 15.5 高 3.9 大 15.8	薄く軽い。口縁部は内外面に明確な線を持って直立する。外面は体部に施すの後の、底部部より、体部中心に斜方向の彫削り。内面全面と外面口縁部は横線で、平仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で混和材は目立たず、白細粒と黒細砂少量。 やや硬質。1b類。	底直 底—口/12周 [7]
10 鉢 土師器	口 復16.7 高 8.7 大 復18.0	内面には線をもち、口縁部は外面に明瞭だが浅い段を持って直立する。外面は口縁部横線で、底部におそらく多方向、体部から適量と並外削りと常備で、内面は体部に集積の後、口縁部に横線で、内面のおそらく全面と外面の上半に仕上げ。体部の一部所に外面横線で、内面集積を施している部分があるが、製作時の集積を焼成前に施した痕かどうかは確かではない。	10YR6/3 淡黄褐色	緻密で透明細砂若干、白細粒・黒細砂少量。 軟質。1b類。	底上21cm 口/3周 底全面 [19]と[17] が複合
11 鉢 土師器	口 復12.8 大 復18.4	やや厚く、口縁部は外面にゆるい段、内面に不明瞭な横線を持って内傾する。外面は体部横削り。内面は底部に多方向と、体部から口縁部にかけては横削り。外面は口縁部に平仕上げ。外面が浅いので、平仕上げが体部まで及んでいるかどうかは不明瞭。内面の線は現状では見られない。	2.5Y8/2 灰白色	緻密で透明細砂やや多量、白細粒・黒細砂少量。 軟質。1a類。	底直 底—口/5周 [2底直]
12 鉢 土師器		おそらく口縁部が内傾する中形の鉢の、不良品の破片。口縁部が外へ大きくゆがむ。外面は口縁部横削りの後に、体部横削り。内面は横削り。周縁の破面はすべて焼成後と思われる。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で混和材はほとんど目立たず。黒・透明細砂少量。 やや軟質。	不明 口/18周 [SI-47]
13 壺 土師器	口 復19.4 大 復22.6	肩部は強く丸く張り、肩部内面と胴部外面にやや明確な線を持って口縁部が立ち上がる。外面は肩部に横削りの後、胴部上半に彫削り。内面全面と口縁部外面は横削り。	2.5Y8/2 灰白色	緻密で黒細砂多量、白細粒・透明細砂やや多量。 軟質。1a類。	底直 口/4周 [3底直]
14 甗 土師器	口 16.5 高 9.9	やや厚い。胴部は内面に不明瞭な線、外面に浅く弱い段を持つ。外面は口縁部横削り。体部横削り。底部に長く二方向の彫削り。口縁部付近を横削り。内面は体部集積で、口縁部横削り。口縁部付近と底部口縁部を除いて内面全面が黒色で、おそらく平仕上げ。	5YR7/6 褐色 外底面に10cm大の黒斑あり	緻密で混和材は目立たず、透明細砂・白細粒と黒細砂ごく少量。 やや硬質。1b類。	底直 口/4周 底全面 [14底直]
15 壺 土師器	底 6.8	やや厚く、わずかに上げ底気味。外面胴部は横削りの後、彫削り。底面は裏裏面の木炭痕の後に、一方の縁を彫削り。内面は横削り。平安時代の遺物の混入の可能性がある。	10YR6/4 にぶい黄褐色	粗い。白細粒と灰色砂多量、赤細粒と黒細砂と黒・透明細砂少量。 やや硬質。	底上10cm 口/6周 底全面 [1]
16 焼粘土塊 土師器	長 5.8 幅 2.4 厚 1.9 重 22.50g	不整形の粘土塊の一端を器の上面で折り返し、他端を器の下面で切り離したもの。表面に植物繊維圧痕がまばらに付くが、胎土内には入っていない。下層は焼成前の破断面。右側の上部左半は大きな破面で、これ他焼成前の可能性がある。	2.5Y6/1 黄灰色	緻密で白細砂少量。 軟質。2個。	不明 焼成後はおそらく劣形
17 焼粘土塊 土師器	長 6.9 幅 3.8 厚 1.6 重 23.36g	混和材の少ない良質の粘土を不整形にこねて、両面に縦線に押しつけたもの。胎土の内面には黒や横線は見られない。左側の中央やや下寄りと右側の右上と一箇所ずつ粗の圧痕が見られ、縦線に結び付いているようである。図上側の破断部分は焼成後の破面。左図左側の縁辺は焼成前の破面。その他の縁辺は粘土塊の縁部で、自然に薄くなる。	7.5YR8/6 淡黄褐色	緻密で混和材は全く見られない。 軟質。2個。	不明 焼成後にごく一箇所破断 [SI-47]
18 有孔片 灰 石製模造品	長 3.1 幅 2.4 厚 0.65 重 5.93g	表裏両面の研ぎ痕は不明瞭なので、形削時の平坦な劈面をあまり加工せずに利用しているかもしれない。左側の下側の断面は底面的な劈面で初期加工している。他の断面はおおむね右図の頂の傾から形成しているが、刃部痕は明確ではない。側面には研ぎ痕が見られない。孔は2孔とも片面穿孔で、孔径1.9mm、孔径1.7mm。古墳時代中期の遺物が混入。		非常に軟質で光沢のある清石。	不明 劣形 [SI-47]
19 有孔片 灰 石製模造品	長 3.0 幅 1.6 厚 0.6 重 5.13g	側面の大半は切削面で、図示した短側面に2箇だけ粗く研削した部分がある。表面は一方、裏面はおおむね一方(一部で二方向)の粗い研削面。孔は2孔とも片面穿孔で孔径1.9mm、孔径1.8mm。古墳時代中期の遺物が混入。		非常に軟質で光沢のある清石。	不明 劣形 [SI-47]

第86表 SI-47 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	壺・甗	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甗	大甗	焼粘土塊	その他
土師器	226			5			7	18				
土師器	有			有				有				77
土師器			縦3	3				4	3			
土師器										1		
土師器												
土師器												

時期不明の鉄器小片1点(器種不明)あり。須恵器の大甗体部細片1点は産地不明。
古墳時代前期の土師器少量、中期の滑石製有孔片2点、平安時代の土師器少量と瓦細片1・近世以降の瓦小片1点混入。

SI-48 (第74図、写真図版16)

本建物跡は、調査区の北部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-47、SI-50より古く、中央部から南西コーナー寄りをSI-47に、南壁中央から南東コーナーにかけてをSI-50によって切られている。また、SI-57とも重複するが、新旧関係は不明である。

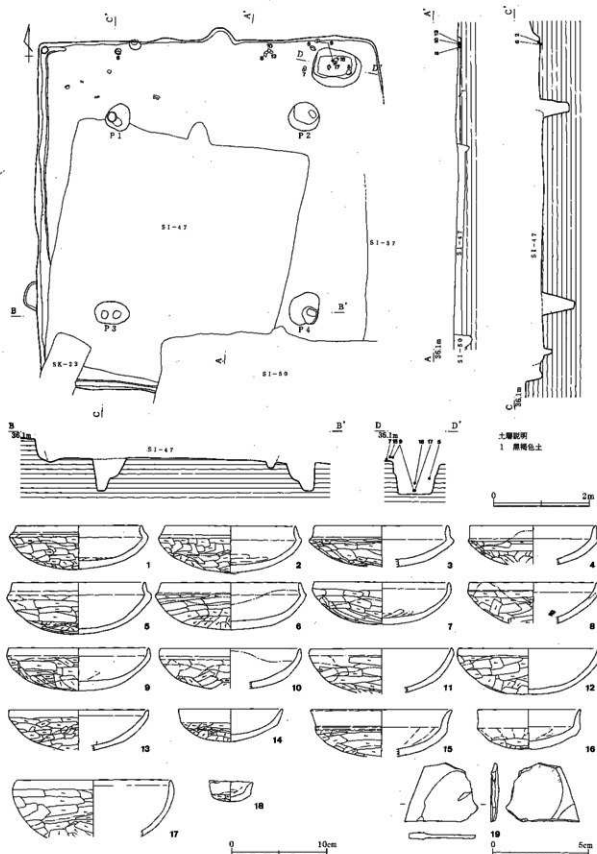
東壁の大部分が削平されているため、平面形は確定できないが、東西7.2m程、南北7.3m程の平面正方形を呈しているものと思われる。主軸方向はMN-1'-Wを示す。壁は確認面から西壁で40cm程、南壁で30cm程、北壁で8~10cm程遺存している。その立ち上がりは、西壁で73°程、南壁で78°程と垂直気味に立ち上がり、北壁では推定で50~60°程の傾きである。周溝は、北西コーナーから西壁際、南壁際にかけて検出された。幅は10~28cm、深さは4~8cmで、断面は皿状で、底面はやや内彎している。床面は、SI-47、SI-50の切り合いによる削平があるためはっきりしないが、西側がわずかに高く、東側がわずかに低くなっており、その比高差は推定で12cm程と思われる。

支柱穴は4本検出された(P1~4)。P1は径58cm、深さ67cm、P2は径64cm、深さ64cm、P3は長径74cm、短径47cmの平面楕円形で、深さ71cm、P4は長径76cm、短径66cmの平面楕円形で、深さ67cmである。掘形は、P1が断面円柱状、P3が断面東側に段を持つ逆台形、P4が断面西側に段を持つ逆台形である。貯蔵穴は、北東コーナーに検出された。東西101cm、南北80cmの平面楕円形に近い隅丸方形で、深さ69cmである。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦である。竈は、北壁中央に位置する。残存状況は非常に悪く、北壁上にわずかな掘り込みを確認するにとどまる。その掘形は、北壁を幅74cm程、奥行き27cmの平面楕円形に掘り込んでいた。埋土は、黒褐色土1層である。

出土遺物 土師器が少なく、竈の残りが悪かったためか壺・飯類は少ない。埴輪の胎土は、混和材が少なめの1b類や、胎土がきれいなものが多い。そのため、八幡根遺跡で製作された土師器かどうかを判定する手がかりが少なく、どちらとも断定できないものが多い。5・10・11・16のように体部上端を削り残す埴がこの建物では少なく、上端付近まで削る埴が多い。また、深めの埴が多い。埴類を漆で仕上げる割合が高く、16の埴を除いて、図示したものはすべて漆仕上げである。2の底面中央を見ると、削り時の粘土の削りかすが付いたままで焼成されたようである。19の粘板岩剥片は、石製模造品の終末段階の製品(または未製品)である。古墳時代終末期にもこの種の遺物を使用していたのか、あるいは古墳時代後期の遺物が混入したのだろう。

第87表 SI-48出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 埴 土師器	口高 13.2 大 4.6 14.6	底部が厚く、体部は薄い。口縁部は内外面に明瞭な段と段を持って内傾する。外面は底部一方向、体部横方向の裏側に口縁部内外面と体部内面は横撫で、内面全面と外面上位に漆仕上げ。	10YR7/4 にぶい黄褐色 外底面に黒塵あり	緻密で黒・透明細砂と白細砂少量。軟質。1b類。	床底 口~体2/3層 「床底」
2 埴 土師器	口高 13.8 大 4.9 15.1	体部は薄い底部は厚く、やや重い。口縁部内面に明瞭な段、外面に長くゆるい段を持って少し内傾する。外面は底部~体部の全体を横方向(円周方向)に裏削り。体部内面横撫での後、底部内面に多方向の撫で。外面上宇と内面全面に漆仕上げ。外面底部は広い黒塵のため、漆の有無が不明瞭。外面底部に焼成前の乾燥時に付いたと思われる3mm×15mm×厚1mmの粘土が付着していて、おそらく土師器の削りかすと思われる。	10YR4/1 褐色	緻密で透明細砂少量。やや軟質。	床底 完形 [14]
3 埴 土師器	口高 14.0 大 4.3 15.3	口縁部は内外面に明瞭な段と段を持って内傾する。外面は底部多方向、体部横方向の裏削り。口縁部外面と内面全面は横撫での後に漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒・透明細砂と白細砂や少量。やや軟質。	貯蔵穴 口~3層 体1/2層 「貯蔵穴」



第74図 八幡根遺跡 SI-48 遺構・遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 土 成	出土状況 残存状況 注記
4 環 土師器	口 復13.2 残 4.1 大 復13.6	底部は薄く、体部は薄い。口縁部は外面が段を持って直立し、内面は弱い段を持って外傾する。外面は底部一方、体部横方向の寛削り。口縁部外面と内面全面は横溝の後、漆仕上げ。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂少量。軟質。1b類。	底直 口～底1/3周 【「環」】
5 環 土師器	口 高 14.0 大 5.5 大 15.3	薄く軽い。口縁部は内面に明瞭な段と外面にゆるい段を持って内傾する。外面は体部に塗での後、底部多方向・体部横方向の寛削り。口縁部内外面と内面全面は横溝で。外面中位以上と内面全面は漆仕上げ。	5YR7/4 にぶい橙色	緻密で白細粒・透明細砂少量。 やや軟質。1b類。	底直33cm 口～体全面 底～3周 【「環」】
6 環 土師器	口 復14.6 大 5.0 大 15.9	底部はやや厚い。口縁部は内外面に明瞭な段と段を持って内傾する。外面は口縁部横溝の後に、底部一方、体部横方向の寛削り。内面は全面横溝で、内面は内面の上半部に漆仕上げ。内面全面と外面全面に漆がのびない。使用によって落ちたものかもしれない。	7.5YR7/4 にぶい橙色	緻密で透明細砂若干、白細粒少量。 やや軟質。1b類。	床直 口～3周 底～12周 【9床直】
7 環 土師器	口 復14.2 大 4.5 大 14.7	やや薄い。口縁部は外面に横、内面にかすかな段を持って、内面が直立する。外面は口縁部横溝の後に、底部一方、体部横方向の寛削り。内面は全面横溝の後に、底部一方の横。内面全面と外面上半部に漆仕上げ。	7.5YR7/3 にぶい橙色	緻密で透明細砂・白細粒やや多量、黒細砂ごく少量。 軟質。1b類。	床直 口～底1/3周 【15床直】
8 環 土師器	口 復13.4 大 4.3 大 13.9	薄く軽い。口縁は内面に浅く明瞭な段、内面にかすかな段を持って、外面がほぼ直立し、内面が外傾する。外面は口縁部横溝の後に、体部に横～斜方向の寛削り。内面は全面が横溝で、横溝で工具と思われる軽い織物の圧痕（経緯ともに10本/cm）が見られる。	7.5YR8/4 浅黄褐色	緻密で白細粒若干、透明細砂ごく少量。 軟質。	床直 口～3周 【16床直】
9 環 土師器	口 高 14.7 大 4.5 大 15.2	体部はやや厚く、底部は厚い。口縁部外面に弱い段または段、内面にかすかな段を持って、内面が外傾し、外面が内傾する。外面は体部塗での後に、底部多方向・体部横方向の寛削り。口縁部に横溝で、内面は底部横溝の後に、全面横溝で。内面全面と外面上半部に漆仕上げ。	7.5YR8/4 浅黄褐色	緻密で透明細砂少量、白細粒と白細粒ごく少量。 軟質。1b類。	床直と埋土 口～6周 【4貯蔵穴】 と【6床直】 と【フタ土】 が接合
10 環 土師器	口 復14.8 大 残 4.2 大 復15.0	薄い。口縁部は外面がかすかな段を持って内傾し、内面はほとんど横溝を持たないで外傾する。外面は体部に塗での後、口縁部に横溝で、底部におおむね内面方向の寛削り。内外面の口縁部に漆仕上げ。内面底部は器面の残りがよいにもかかわらず、現状では漆が見られない。	5YR7/4 にぶい橙色	緻密で透明細砂少量、白細粒ごく少量。 やや硬質。	床直 口～4周 【17】
11 環 土師器	口 復15.0 大 残 4.6 大 復15.3	薄く、軽い。口縁部は外面にごく弱い段を持つ。外面は体部塗での後に口縁部横溝で、底部一方の後に、体部横方向の寛削り。内面は全面横溝で、内面全面と外面上半部に漆仕上げ。	10YR7/2 にぶい黄褐色	緻密で、混和材は目立たず、透明細砂と黒細粒ごく少量。 軟質。	床直 口～3周 【「床直」】
12 環 土師器	口 高 14.8 大 15.0	薄く軽い。口縁部は外面がやや弱い段を持って内傾し、内面は外へゆるく開く。外面は口縁部横溝の後に底部一方、体部横方向の寛削り。内面は全面横溝で、内面全面と口縁部外面に漆仕上げ。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で透明細砂少量、黒細粒と白細粒ごく少量。 軟質。	底直 口～底1/2周 【「環」】
13 環 土師器	口 復14.7 大 残 4.3 大 復14.8	体部下位は薄い。口縁部は外面端部が段を持って直立し、内面端部にかすかな段を持って外傾する。外面は体部横溝の後に、口縁部横溝で、内面は全面横溝で。内面全面と外面上半部に漆仕上げ。	7.5YR8/6 浅黄褐色	緻密で白細粒・透明細砂若干。 軟質。1b類。	床直 口～体1/4周 【17床直】
14 環 土師器	口 高 11.0 大 3.4	口縁部は外面に横を持ち、内面には持たないで開く。外面は底部一方の後に、体部横方向の寛削り。口縁部外面と内面全面は横溝の後に、漆仕上げ。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で白細粒と透明細砂若干、黒細砂少量。 軟質。	床直 口～底3/4周 【「床直」】
15 環 土師器	口 復14.9 大 残 4.9 大 復14.0	口縁部は外面に浅い段を2段と、内面に弱い段を持って外反する。外面の2段のうち下段のほうはあまり変っていないが、意図的な成形ではないかもしれない。外面は口縁部横溝で、体部塗での後、底部多方向・体部横方向の寛削り。内面は体部横溝の後に、全面横溝で。内面全面と外面中位以上に漆仕上げ。	7.5YR7/3 浅黄褐色	緻密で混和材は目立たず、透明細砂やや少量と白細粒少量。 軟質。1b類。	床直 口～底5/12周 【「床直」】
16 環 土師器	口 高 10.8 大 4.2 大 10.6	体部はやや厚く、大きめのわりに重い。口縁部内外面と体部の寛削り上部の段が明瞭。体部に塗での後、底部に多方向寛削り。体部内面全面横溝の後に、内面全面と口縁部外面に横溝で。	5YR7/4 にぶい橙色 底外面に5cm大の黒痕あり	緻密で白細粒・透明細砂やや多量、黒細砂少量。 やや硬質。1b類。	底直23cm 口～底1/4周 体～全面 【3貯蔵穴】
17 環 土師器	口 復16.4 大 残 6.0	柄状の大形の環であるが器厚は薄い。口縁部内外面にそれぞれ弱い段を持ち、内面端部を斜めに仕上げる。外面は口縁部横溝の後に、体部横方向、底部におおむね一方の寛削り。内面は全面横溝で、内面全面と外面上半部に漆仕上げ。	7.5YR8/4 浅黄褐色	緻密で混和材は目立たず、透明細砂と白細粒ごく少量。 軟質。1b類。	底直8cm 口～底5/12周 【「貯蔵穴」】
18 小形土師器	口 復 4.6 大 4.1 大 2.1	体部はやや厚く、丸い底形。外面は体・底部地に明瞭な段を持つ。底面は内外面ともに丸味が強い。外面は底部に多方向寛削り。口～体部はおおむね横方向の横。内面は縁不定方向横。口縁部外面に漆仕上げ。内面には現状では漆が見られない。	10YR8/4 浅黄褐色	緻密で混和材は目立たず、黒細砂と白細粒ごく少量。 やや軟質。	不明 口～12周 体全面 【「床直」】
19 剥片 粘板厚	長 3.9 幅 3.1 厚 0.45 重 4.12g	内面の上辺と下辺は原石の自然面。左側の左辺は原石を折断した割縁らしい。割縁に沿って表面面を板状に剥離。左側の右辺は、板状にこの剥片を削り出してから縁辺を3単位に分けて折断した面。穿孔や研磨は全く見られない。		特徴が発達した軟質で緻密な粘板質。	床直 完形 【「床直」】

第88表 SI-48 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	坏	甕・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形甕	長甕	甌	大甕	焼酎土器	その他
土	169				7	1		1	7				
口縁部													
胴部	有				有				有			12	
底部					2				3	1			
口縁部													
胴部													
底部													
粘板岩の剥片3片。													
古墳時代前期の土師器少量遺入。													

SI-49B (第75~76図、写真図版17・45)

本建物跡は、調査区の北部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-49Aより新しく、SI-49Aの建物跡中央部やや北東寄りも切っている。また、西側は調査区外である。

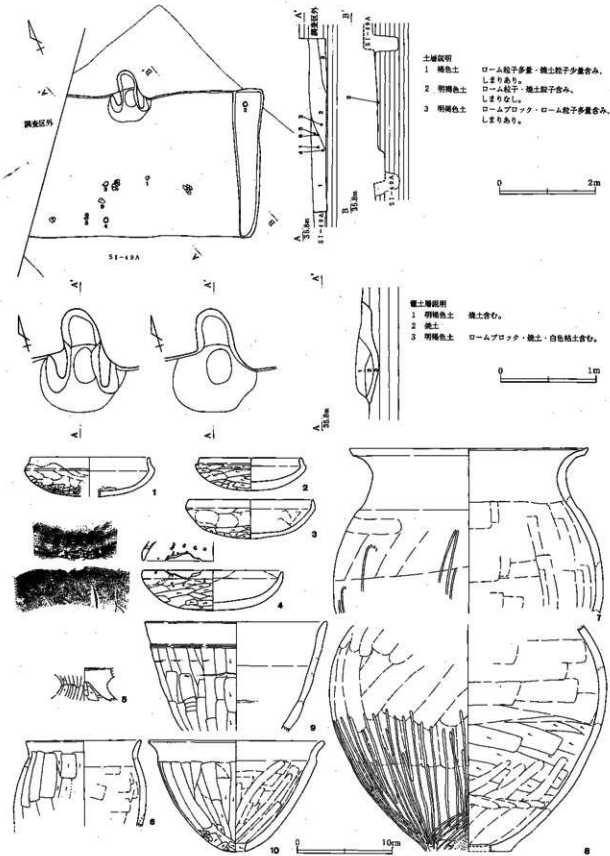
確認された部分では、東西4.8m以上、南北3.3m程であり、平面形は、東西に長い方形を呈する。主軸方向はMN-21°-Eを示す。壁は確認面から東壁で推定24cm程、南壁で29cm程、北壁で推定22cm程遺存している。その立ち上がりは、東壁で推定74°程、南壁で83°程、北壁で推定79°程の傾きで垂直気味に立ち上がっている。周溝は検出されなかった。床面は、東壁前が南北方向に床下土坑的に掘り窪められている。この土坑状の掘形は、東西66cm程、南北338cm程の南辺のやや短い長方形で、断面は皿状、深さは床面から最深17cmである。埋土の状況は詳しくはわからないが、あるいは土を埋め戻して、上面を貼床としていたのかもしれない。柱穴や貯蔵穴は、検出されなかった。

竈は、北壁中央付近に位置する。煙道天井部が崩落しているものの、両袖部が残っているなど、残存状況は比較的良好。規模は袖幅74cm、奥行き95cmである。袖は、白色粘土で構築されていると思われる。煙道は平面舟首形で、その立ち上がりは、燃焼部中央から13°程の傾きでゆるやかに立ち上がり、いったん平坦になった後に、A'の南26cmの所からは42°程の傾きで立ち上がっている。焼土は、燃焼部中層に、最深8cmの厚さで確認された。掘形は、北壁を幅69cm、奥行き72cmの平面U字形に掘り込んでおり、さらに、北壁とその前の床面を東西90cm、南北72cmの平面楕円形に掘り窪めており、その断面は皿状で、深さは床面から最深10cmである。

埋土は3層に分層され、北西コーナーの床面直上は、ロームブロック、ローム粒子を多量に含む明褐色土、中央部床面直上から北西部上層にかけては、ローム粒子・焼土粒子を含む明褐色土、そのほかの部分、ローム粒子を多量、焼土粒子を少量含む褐色土である。

出土遺物 第75図2は小形化した坏で、胎土は混和材がやや少ないb類なので八幡根遺跡の製品かどうかを断定できないが、可能性はある。4は、製作する途中で乾燥前に、犬のような小動物がくわえた痕が残る不良品の坏で、この遺跡の製品か、製作地に近いものと考えられる。くわえた部分より少し上が壊れているのが、焼成前の破損なのか焼成後なのかは、良くわからない。破面に漆は見られない。5は内面を放射状に密に磨く点が八幡根遺跡の他の土師器にくらべて古い特徴を持つ。第76図1もSI-49Bに伴う可能性がある。

7と8は胴部の丸い土師器甕で、煮炊痕跡のない貯蔵用の器種。7と8は直接には接合しないが、同一個体である可能性もかなり高い。胴部下半を磨く点と、胎土に白雲母を多く含む点が、八幡根遺跡の普通の土師器甕と異なるので、搬入品と考えられる。八幡根遺跡で出土する古墳時代の土師器に普通は雲母を含まず、黒雲母を含む例が古墳時代後期の壑穴建物跡SI-49Aと終末期のSI-37Aにある。白雲母と黒雲母とを含む胎土では、茨城県域の中でもさらに地域差があるのかもしれない。10は甌としては粗い胎土で、甕と同様の粗い胎土である。9は10に似るので甌と考えた。こちらは、坏や鉢と同様の緻密できれいな胎土である。



第75図 八幡根遺跡 SI-49B 遺構・遺物

第3章 発掘調査された遺構と遺物

第89表 SI-49B出土遺物

番号 種類	量 目録	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 土 師 器	口 径12.5 高 大 4.2 径13.8	薄く丸底。口縁部は内面に横と、外面に不明瞭なゆるい段を持って内傾する。外面は体部に斜な面での後、下位を多方向に斜な見開り。内面底部に横溝の後に、内面全面と口縁部外面を横溝でして隆仕上げ。底部内面は使用して磨かれた可能性がある。全体に外面調査が概観である。	10YR8/4 淡黄褐色	緻密で白細粒と透明細砂やや多量、黒細砂少量。やや軟質。	底上16cm 底-口1/4 周 「8」
2 土 師 器	口 径10.8 高 大 3.4 径11.7	底部が厚く丸底。口縁部もやや厚く、内外面に明瞭な横溝と段を持って内傾する。外面は体部に横での後、底部多方向・体部横方向の見開り。内面全面と口縁部外面は横溝での後、隆仕上げ。	2.5YR8/3 淡黄色	緻密で黒・透明細砂少量、赤・白細粒ごく少量。軟質。1B類。	床直 体完形 口5/6周 「10床直」
3 土 師 器	口 径13.2 高 大 4.1 径13.7	体部に途中でやや横を持って底部が丸底になる。口縁部は外面が横を持って内傾し、内面はごく弱い横を持って直立する。外面は体部にやや横な面での後、底面におおむね一方の見開り。内面全面と口縁部外面は横溝で。	2.5YR8/4 淡黄色	緻密で黒細粒と透明細砂やや多量。軟質。	底上10cm 口5/6周 底全面 「6」
4 土 師 器	口 径14.9 高 大 15.1	底部は丸底で、口縁部はまっすぐ立ち上がり、外面に弱い横あり。内面はごく弱い横をもって外へ開く。外面は体部に横での後、底部一方見開り。内面全面と口縁部外面は横溝で。口縁部内外面は隆仕上げ。図示したとおり内外面の対応する位置に外面7個、内面9個の小孔が現存。土器が成形する前の軟らかい時点の孔で、火などの小動物がくわえた痕の可能性もある。	5YR7/6 褐色 黒斑あり	緻密で粗粒は非常に少なく、黒・透明細粒ごく少量。やや硬質。2類。	床直 ほぼ完形 「7床直」
5 土 師 器	脚上端 4.8	やや厚い。残存する脚部は裾がやや厚くなって、内面に横溝でが少し見られるので、脚端が近い。坏底部と脚部の外面は見開り。坏部内面は放射状見開り。脚部内面は横溝で横溝での後、脚部内面見開り。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細粒と黒・透明細砂少量。硬質。1A類。	底上23cm 坏底-脚上 部の全面 「3」
6 土 師 器	口 径12.3 高 大 9.2 径13.9	薄く、頸部内外面に明瞭な横を持って内傾し口縁部が外反する。外面は口縁部に横溝での後、頸部を上へ見開り。内面は全面見開りでの後、口縁部を横溝で。外面は頸部下位が加熱で赤化し、中位にスス付着。	10YR5/2 灰黄褐色	やや粗い。灰色砂と白細粒やや多量、黒・透明細砂少量。やや硬質。	不明 胴-口5/6 周
7 土 師 器	口 径25.2 大 径28.5	頸部内外面にかすかな横を持って外反する。口縁部は外面に平たい面をもち、内面は横溝を持って上へつまみ上げる。頸部外面は丁寧な横での後、中位にまばらな見開り。内面はかなり幅の広い工具で横溝で。口縁部内外面横溝で。肩-胴部がすこし暗褐色が、火にかけて使ったかどうかは確実にはわからない。	10YR7/3 にぶい黄褐色 黒斑あり	やや緻密で白雲母細片と透明細砂やや多量。やや軟質。	腹土中 口1/3周 頸-胴上位 7/11周 「フタ土」
8 土 師 器	底 径9.0 大 径29.4	外面は平底、内面は丸底で、底部付近は薄い。外面は体部横溝での後、胴部下位を横見開り。胴部上-上位にやや丁寧な面での、その後には胴部下位を縦見開り。底面は外面部に両方向の見開り。内面は胴部下位に見開り、胴部中位の下半を横み上げ後に斜な見開りと横で、胴部上半に横溝で。加熱して使用した可能性は低い。	10YR7/4 にぶい黄褐色	粗い。白・透明砂と白雲母細片多量。やや軟質。	腹土中 胴中位1/4 周 底3/4周 「フタ土」
9 土 師 器	口 径19.2 高 径11.7	口縁部外面に二条の沈線を持つ。底部が欠けているので強くないが、器形から見て鉢よりも瓶の可能性が高い。外面は胴部に縦方向の見開りの後に、口縁部に横溝で。内面は全面に横溝で。胴部外面に粘土積み上げ時の接合痕や凹凸がかなり明瞭に見られる。	7.5YR8/2 灰白色	緻密で黒細砂やや多量、白細粒と透明細砂ごく少量。軟質。	底上16cm 口-胴7/12 周 「4」
10 土 師 器	口 径18.8 孔 径1.8 高 径11.8	口縁部は外面に明瞭な段、内面に浅いくほみを持って外反する。外面は口縁部に横溝での後に、胴部見開り。内面は胴部に横方向の見開りでの後に軽い縦方向の横で。口縁部は横溝で。底部に外面から見たまたは刀子で穿孔。	5YR5/6 明赤褐色	やや粗い。赤細粒・白・灰色砂多量と透明細砂少量。硬質。	腹土中 底1/4周 口5/12周 「フタ土」

第90表 SI-49B 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

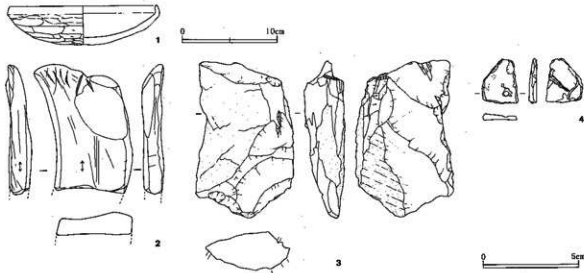
土 師 器	坏	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	瓶	大壺	焼土塊	その他
口縁部	25				2			6	11				
体部	有			脚柱1	有				有			6	
器底					1				4	2			
口縁部													
体部													
器底													

平安時代の土師器少量混入。

SI-49AまたはBの出土遺物 (第76図、写真図版17・45)

「SI-49」の遺物として取り上げたもので、SI-49AとSI-49Bのどちらから出土したのかわからない遺物を、ここで紹介する。

1は、器高4.1cmで体部上位を削り残す終末期の土師器坏なので、建物の時期から考えるとSI-49Bから出土した可能性が高い。胎土はやや異なるが、大きさや形状はSI-49Bの4の坏に近い。古墳時代後期の建物跡であるSI-49Aとは時期が合わないであろう。2は砥石。3・4は滑石を使わない石製模造品の製作にかかわる遺物である。3は白雲母を多く含む硬質の変成岩の荒削り片。4は軟質の粘板岩の剥片で、穿孔を途中でやめたようなので、未製品の可能性もある。石質が異なるので、3と関係する遺物かどうかは決められない。粘板岩を使う石製模造品の製品はSI-49Aにも見られるので、そちらに伴う可能性もある。



第76図 八幡根遺跡 SI-49A又は49B 遺物

第91表 SI-49A又は49B出土遺物

番号 種類	注 量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 径15.4 高 4.1 底径16.2	口縁部内外面が鋭い線を持って内傾する。外面は体部に削った後、底面中央と体部上位を削り残して、他はすべて円周方向の彫削り。内面全面と口縁部外面は磨削後の後、漆仕上げ。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で透明細砂や や多量、黒鉄砂・ 白細粒ごく少量。 軟質。	SI-49Aか49 Bか不明 底〜口/2 周
2 砥石	長 残 6.8 幅 3.5 厚 1.2 重 残 50.0g	上面と右側面はやや凹凸を残し、図示した3面を使用した可能性があるが、右側面については確実ではない。表面と左側面には磨痕がみられる。左側面はよく使われて深く減り、砥面は非常になめらか。裏面は縦方向に割離して破損。		軟質でやや劈開の みられる粘板岩ま たは片岩。	SI-49Aか49 Bか不明 面の下部部と 裏面側を欠損。表面 の右上部も 割離破損。
3 重割の 剥片 片岩?	長 8.4 幅 5.3 厚 2.2 重 82.0g	自然面を広く残す。左面・右面ともに右寄り部分に見られるやや広い 割離は、形削り工程の副産とも考えられ、石製模造品製作の形削り工程の 石核として少し用いられている可能性がある。割離時に使った工具の 刃痕が各所に見られる(両面腹の矢印と断面腹のケバの部分)。穿孔痕 や磨痕はない。		白雲母薄片を多量 に含み、劈開が発 達した、やや硬質 で緻密な変成岩。	SI-49Aか49 Bか不明 変形 [SI-49]
4 未製品 石製模 造品	長 2.4 幅 1.9 厚 0.4 重 1.70g	左面の左辺と下辺は原石の自然面。劈開に沿って裏表面を板状に割離。 右側面の左辺から中央へ向かう帯は割離に使った工具の刃痕の可能性 がある。左面の先端と右端は割離後に縁辺を折断した面。左側面の左 寄りには鋭い磨痕があるが、磨痕が少なくほとんどしっかりした面では ない。左側面の右下部にあるくぼみは穿孔を途中で中止した痕と考え られる。		劈開が発達した、 軟質で緻密な粘板 岩。	SI-49Aか49 Bか不明 変形 [SI-49]

第92表 SI-49Aまたは49B 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	冚	甕・甕	甕	高冚	鉢	小形土器	壺・瓶	小形甕	長甕	甕	大甕	埴輪土塊	その他
土	198				17			7	44				
口縁部	有				有				有			45	
体部													
底				裾1	1	1		平底2	10	3			
須													
口縁部													
体部													
底													

砥石1点、粘板岩製の石製模造品製作関連遺物若干(未製品1・完成削片1・削片7)。

古墳時代前期の土師器少量、平安時代の土師器少量と須恵器の大甕体部1片(三和甕産)が混入。

SI-50 (第77~79図、写真図版17・18・45~47・52・54)

本建物跡は、調査区の北部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-46Aより古く、南側中央部から南西部にかけてをSI-46Aによって切られている。また、SI-47・SI-48より新しく、SI-47の南側中央部から東側と、SI-48の南側中央部から東側を切っている。さらに、SI-57とも重複する。土層断面からは新旧関係はわからないが、出土した土器から考えるとSI-50の方が新しく、SI-57の南西コーナーを切っていると推定される。また、SI-46Bとも重複するが、土層断面からは新旧関係は不明であり、たがいに近い時期と考えられる。

平面形は、東西5.3m、南北5.4mのはほぼ正方形を呈し、主軸方向はMN-9°-Eを示す。壁は確認面から西壁で10cm程、東壁で8cm程、南壁で12cm程、北壁で2~17cm程遺存しており、その立ち上がりは、西壁・東壁で40°程、南壁で85°程、北壁で70~85°程の傾きである。周溝は、竈の東側を除く壁際全周で検出された。幅は10~32cm、深さは6~14cmであり、断面は皿状で、底面は平坦もしくはやや内彎している。床面は建物跡西側が高く、東側が低くなっており、その比高差は18cmである。主柱穴は4本検出された(P1~P4)。P1は径44cm、深さ67cm、P2は径40cm、深さ45cm、P3は長径28cm、短径23cmの平面楕円形で、深さ54cm、P4は径29cm、深さ58cmである。掘形は、いずれも断面円柱状である。貯蔵穴は、北東コーナーに検出された。東西83cm、南北48cmの平面隅丸方形で、深さ48cmである。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦である。

竈は、北壁中央わずかに西寄りに位置する。煙道天井部が崩落するものの、断面に、その構築材である粘土層を厚さ28cm程確認することができるうえ、阿袖部が残るなど残存状況は比較的良好。規模は、袖幅101cm、奥行き63cmである。袖は、粘土を用いて構築されていると思われる。煙道は平面舟首形で、燃燒部中央から22°程の傾きでゆるやかに立ち上がっている。燃燒部から煙道奥にかけて、焼土が最深15cmの厚さで認められた。掘形は、北壁を幅44cm、奥行き16cmの平面不整形に掘り込んでいる。

掘土は1層で、ローム粒子、焼土、粘土粒子を含む黒褐色土である。

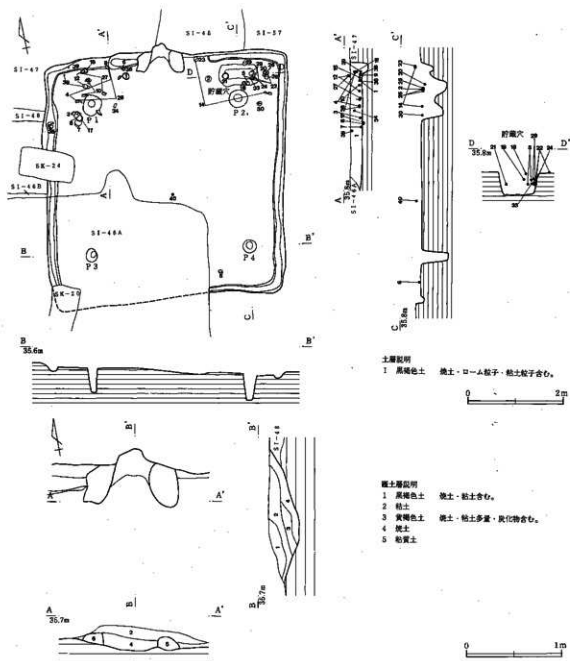
出土土師器 遺物は非常に多い。土師器食器類はほとんどが胎土1a類で、八幡根遺跡の製品である。坏類は、須恵器坏身模倣形と壹模倣形のもので中心で、漆仕上げをしないものの割合が高い。7は内面に漆のような物質がなでつけてあるので、口縁部が破損した坏を、漆塗作業の工具に転用したのかもしれない。30は、寛削りや横撫でが雑で、口径が小さめで体部が厚く、坏とミニチュア品との中間的な作り。31・32はミニチュア品。

25は口縁部が歪み、内面調整が雑で、体部が削り足らなくて厚く重い。26に比べると同じ小形の坏でもやや出来が悪い。8は焼成前に外面底部に生じた亀裂を磨きで補修している。亀裂が小さくて目立たず、内面にも達していないので、使ううえで差し支えない。11も亀裂を軽く補修している。

16・18・19・22は内彎口縁坏で、口縁部上半の外面が内彎気味の形状になる。この種の坏は7世紀代の柄

木原域中央部に多く、一般的には漆で仕上げるが、16・18は漆仕上げをしていない。八幡根遺跡周辺では内罨口縁環は主体的にはみられないので、SI-50にこの環がやや多いことはむしろ特徴的である。4点とも八幡根遺跡産土師器の胎土で、この遺跡でも内罨口縁環を少し作っていたことを示している。

27はこの遺跡では数少ない盤形土器で、胎土はやはり1a類で、この遺跡産の土師器と共通している。盤は、この他にSI-53に2点がある。高坏は33と34がある。34は、SI-06Aの24と、大きさ・形・胎土・赤彩が非常に良く似ていて、同時に作って焼いたかのようなのである。34は外面の坏部と脚部部に漆仕上げをしている可能性もあり、そうならば脚柱部外面・坏部内面の赤彩とともに、高坏を塗り分けていたことになる。SI-06



第77図 八幡根遺跡 SI-60 (1) 遺構

Aの24の方は、漆仕上げは認められない。35の鉢もSI-06Aに類似がある。

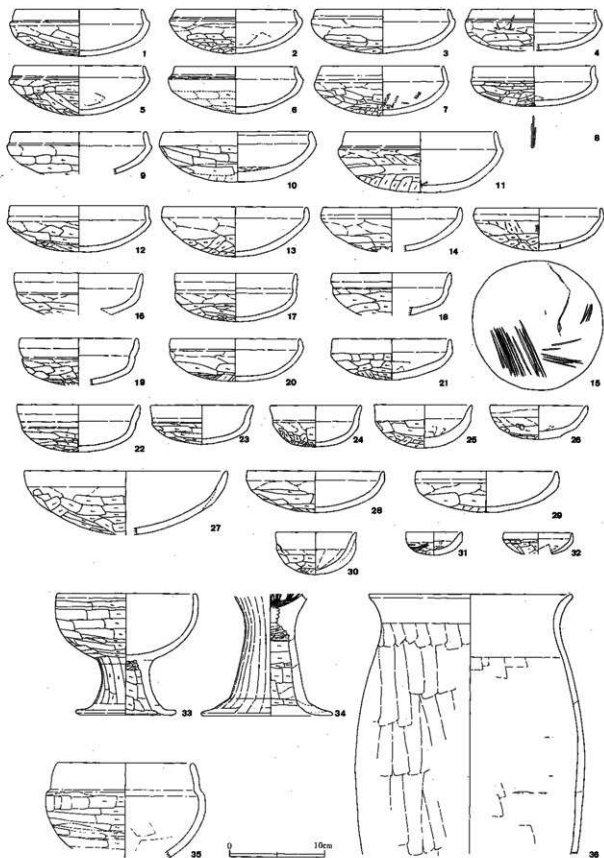
38と39は粗製の土玉で、堅穴の北西部で近くから出土したので、対になっていた可能性がある。40の紡錘車は、表面に傷はあるが、記号のような線刻はない。

土師器製作関連遺物 土師器の削りかすや焼粘土塊も多い。焼粘土塊には、木葉痕のあるもの・葉状の植物圧痕があるもの・指でこねただけで特別の圧痕がないもの、がある。44-46は葉状の植物繊維や木の葉を粘土に当てて、平たく押しつぶしたような形状で、SI-22B・SI-28・SI-47の例と同様である。41と43は手でひねった粘土塊がそのまま焼かれたもの。42には捺痕が残る。47-49は土師器底部・体部の削りかすで、49は成形時の底部付近と思われる。

その他 混入品として、平安時代の堅穴建物跡SI-04Aの11の鉢と接合する口縁部の破片がこの堅穴建物からも出土している。ただし、出土位置や出土状況は不明である。平安時代の人がSI-50付近に廃棄したのか、あるいはSI-50と重複する平安時代の堅穴建物SI-46Aから混入したのかもしれない。

第93表 SI-50出土遺物

番号 種類	法 量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 環 土師器	口高 13.3 大 14.8	全体にやや薄い。口縁部は内外面に明瞭な稜と段を持って内傾する。外面は体部に施すの後に、底部一方の後に体部横方向の裏削り。内面全面と口縁部外面は横撫で。	2.5YR/3 灰黄色 外底面に大黒斑あり	靱帯で黒・透明細砂と白細粒多量。やや硬質。1a類。	床底 口12/11周 体全面 [1床底]
2 環 土師器	口高 12.5 大 14.0	外面にゆるくやや長い段、内面に明瞭な稜を持って口縁部が内傾する。外面は体部に施すの後に、底部に多方向、体部下位に横方向の裏削り。内面は体部に横撫での後に、内面全面と口縁部外面に横撫で。内面が漆仕上げで、濃減している内面体部も、もとは漆で仕上げていた可能性がある。	10YR8/3 浅黄褐色	やや靱帯で白細粒と黒細粒多量。赤細粒と透明砂やや多量。軟質。1a類。	床底 完全形 [21床底]
3 環 土師器	口高 14.2 大 4.7 大 15.3	やや厚く軽い。口縁部は内面に明瞭な稜と、外面に浅い段を伴う段をもって内傾する。外面は体部に施すの後に、底部におおむね一方の裏削り、体部に横削り。内面全面と口縁部外面は横撫で。	10YR8/3 浅黄褐色 黒斑あり	靱帯で黒・透明細砂多量。白細粒やや多量。やや硬質。1a類。	床底 底-口1/3 [13床底]
4 環 土師器	口高 13.2 大 4.3 大 15.2	底部は中央がやや平たいが、丸底。口縁部は外面に浅く明瞭な段、内面に弱い稜を持って内傾する。外面は体部に施すの後に、体部下半～底部の全体に一方の裏削り。体部-口縁部には成形時の粘土のヒビが少々残る。内面全面と口縁部外面は横撫で、内面体部上端を少し強く撫でる。漆仕上げの確実な痕は認められないので、漆は使っていない可能性がある。	10YR8/3 浅黄褐色	やや靱帯で黒・透明細砂と白細粒多量。赤細粒少量。やや硬質。1a類。	底上24cmと 床底が接合 底-口5/12 [4]と[12 床底]
5 環 土師器	口高 13.8 大 5.2 大 14.9	内外面に明瞭な稜と段を持って口縁部が内傾する。外面は体部に施すの後に、底部に一方、体部に横方向の裏削り。内面全面-口縁部外面は横撫での後に漆仕上げ。漆は非常に薄い。	2.5Y7/3 浅黄色	靱帯で、黒・透明細砂と白細粒多量。やや軟質。1a類。	底上21cmと 27cmが接合 底-口1/2 [32]と[33]
6 環 土師器	口高 12.8 大 4.9 大 14.3	薄く、軽い。口縁部は内外面に明瞭な稜と段を持って内傾する。外面は磨減して不明瞭だが、体部施すの後に底部に一方または多方向裏削り、体部中央に横削り。内面全面と外面口縁部は横撫での後に漆仕上げ。	10YR8/3 浅黄褐色	やや靱帯で黒細粒多量。透明細砂と白細粒やや多量。軟質。1a類。	床底 口1/4周 体7/12周 [2床底]
7 環 土師器	口高 12.8 大 14.2	全体に薄く軽い。口縁部は内外面に明瞭な稜と段を持って内傾する。外面は体部に施すの後に、底部一方の後に体部横方向の裏削り。内面は体部に施すの後に、内面全面と口縁部外面を横撫で。内面に難灰色のものを幅1-2cm、長さ5-40cmの細い単位で、約50-60回ほど施すのであり、漆仕上げ用の漆をこすりつけている可能性がある。この土器自体には漆仕上げは行っていない。	10YR5/3 浅黄褐色	靱帯で黒・透明細砂と白細粒多量。やや硬質。1a類。	床底 口1/6周 体全周 [15床底]
8 環 土師器	口高 12.8 大 4.3 大 13.4	全体に薄く軽い。口縁部は内外面に弱い稜と段を持ってわずかに内傾し、内面上半は外反り。外面は体部施すの後に、口縁部横方向の裏削り。内面は体部に施すの後に、内面全面と口縁部外面を横撫で。内面に難灰色のものを中心に、全面横撫で、外面の底面中央に施す成層の亀裂が入った部分の後、縁部まで横撫でしている。この亀裂は最大深さ2mmで、内面には差していない。	2.5Y8/3 灰黄色 黒斑あり	靱帯で黒・透明細砂と白細粒多量。やや硬質。1a類。	床付近 口1/12周 体全周 [34]
9 環 土師器	口高 14.1 大 4.5 大 15.3	やや厚く軽い。口縁部は外面に明瞭な稜を持ち、内面にやや弱い稜を持って内傾する。外面は体部に施すの後に、横削り。内面全面と口縁部外面は横撫で。全体として非常に丁寧なつくり。	10YR7/2 に濃い黄褐色	やや靱帯で黒細粒と白細粒多量。透明細砂やや多量。やや硬質。1a類。	底上24cm 口1/体3/4 [4]

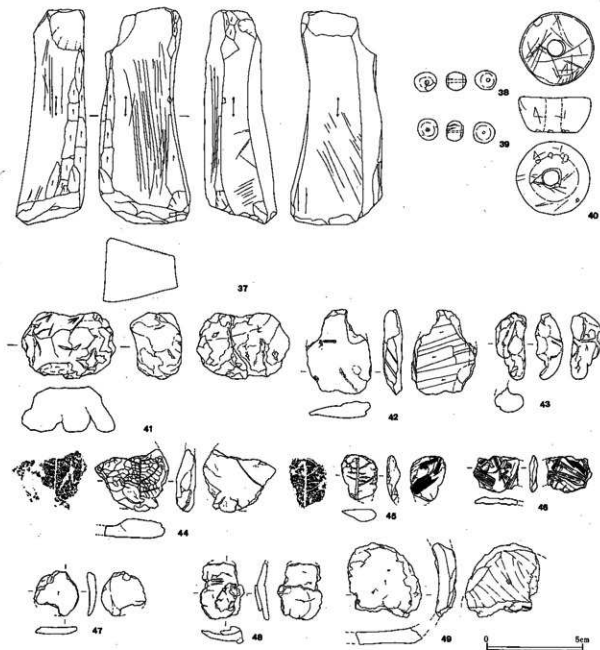


第78図 八幡根遺跡 SI-50 (2) 遺物

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号 種類	法 量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
10 土師器	口 復15.6 高 5.3 大 復16.6	全体に厚く軽い。口縁部は内外面に線を付けて内傾する。口縁端部は断面隅丸形の内傾する面になる。外面は口縁部に横線で、底面におそらく一方の内傾の後に、体部に横線あり。内面は底面に多方向並進で後に、底部一方内傾で、体-口縁部横線で。内面全面と外面上半は漆仕上げ。	2.5Y8/4 浅黄褐色	緻密で黒細砂と白細砂少量、透明細砂やや多量。軟質。1a類。	床直 口-底1/3周 「9床直」と「11床直」が接合
11 土師器	口 復16.0 高 6.4 大 復17.5	大きさのわりには厚く軽い。口縁部は内外面に明瞭な線を付けて内傾する。外面は体部に横線の後、底部一方、体部横方向並進あり。内面全面と外口縁部は横線で。外面底面に焼成前に生じた亀裂を撫つけた痕あり。内面中央の小亀裂も先に補修している。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒細砂少量、透明細砂・白細砂やや多量。硬質。1a類。	堀土中 口-底1/3周 「フク土」
12 土師器	口 14.6 高 4.9 大 16.2	やや薄い。口縁部は内外面に明瞭な線を付けてわずかに内傾する。外面は体部に横線の後、底部一方、体部横方向の並進あり。内面全面と口縁部は横線で。外面底面は体部に位置まで及び、底面も含めて内外全面を漆で仕上げている可能性もある。	2.5Y8/3 淡黄褐色	緻密で黒・透明細砂と白細砂やや多量。硬質。1a類。	床直と底土 26cmの接合 口/3周 体/2周 「6」[10] 「床直」が接合
13 土師器	口 15.0 高 4.4 大 16.6	やや薄い。口縁部は外面に線を付けてわずかに内傾し、内面はごく弱い線を付けて内傾する。外面は体部に横線の後、底部一方、体部横方向の並進あり。内面全面-口縁部外面は横線で。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂と白細砂やや多量。非細砂少量。やや硬質。1a類。	床直 口-体1/2周 底11/12周 「床直」と「フク土」が接合
14 土師器	口 14.6 高 4.5 大 16.2	底面は薄く丸底で、口縁部は外面に2本の線をもち、内面は非常に不明瞭な線を付けて内傾する。外面は体部に横線の後に底部一方、体部横方向の並進あり。内面全面-口縁部外面は横線で。	2.5Y8/2 灰白色	やや緻密で黒細砂多量、透明細砂・白細砂少量。やや硬質。1a類。	底上37cm 口-体5/12周 「20」
15 土師器	口 高 13.2 大 4.5 大 13.8	口縁部は内外面にごく弱い線を付けて内傾する。外面は体部に横線に施すで、底面一方の内傾。体部下位に横方向の並進あり。体部上には底面の粘土のりが多く残る。内面-口縁部外面は横線で、外面の横線は口縁部の浅い後より下まである。底面に、焼成時または焼成直前の亀裂が糸状に入っているが、内面までは達していないので、漆を塗りにあはさつかない。底面外面に焼成後の線割が多数ある。深さは0.5~2.5mmで、1本ずつ施して、おむね二方向にまたがる。	2.5Y7/3 淡黄褐色	やや軽い。白細砂と黒・透明細砂多量。やや硬質。1a類。	床直 完形 「5床直」
16 土師器	口 復13.4 高 4.4 大 復13.1	やや薄く軽い。口縁部は外面に浅い明瞭な線を付けて外傾し、上半外面に弱い線を付けて内傾する。内面は不明瞭な線を付けて外傾する。外面は体部に横線の後に横線あり。内面全面と外面口縁部は横線で。漆仕上げは見られない。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂と白細砂やや多量。軟質。1a類。	不明 口-体5/12周
17 土師器	口 12.8 高 5.0 大 13.0	口縁部の下縁で内面は少しくぼむ。外面は線を付けて口縁部はほぼ直立する。外面は体部に横線の後、底部を広く一方、体部の一部を横方向の並進あり。内面-口縁部外面は横線で。確実な漆仕上げは見られないが、薄い膜があった可能性も否定ではない。口縁部のうち約1/3周が、焼成時または焼成時に内傾へ7mmほどゆがんでいる。その直下の体部がおそらく焼成時に幅8cm×高さ2cmの範囲で割裂している。	10YR7/4 にぶい黄褐色 底面に黒痕あり	やや緻密で黒・透明細砂と白細砂多量。硬質。1a類。	床直 完形 「14床直」
18 土師器	口 12.6 高 4.5	底面はやや厚く、ゆるい丸底。口縁部外面は明瞭な線を付けて内傾したのちに、弱い線を付けて口縁部が開く。内面は体部に横線の後に、横線あり。内面全面と口縁部外面は横線で。漆仕上げは認められない。	7.5YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒細砂・白細砂少量、透明細砂少量。軟質。1a類。	貯蔵穴底上 31cm 口/12周 体/2周 「25貯蔵穴」
19 土師器	口 12.5 高 5.0 大 12.7	外面は口縁部に線を付けて開いた後に弱い線を付けて直立し、内面は弱い線を付けて開き、わずかに内傾する。外面は体部に横線の後に、底部一方、体部横方向の並進あり。内面全面-口縁部外面は横線で後に、漆仕上げ。外面の漆は体部下位まで及び、内面の漆は非常に薄く黒い。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で白細砂と黒細砂多量、透明細砂やや多量。やや軟質。1a類。	貯蔵穴底上 44cm 口/6/12周 底/2周 「23貯蔵穴」
20 土師器	口 13.8 高 4.5 大 14.2	口縁部は外面が凹線状の浅い線を付けて内傾し、内面は非常に弱い線を付けてわずかに外傾する。外面は体部に横線の後に、底部一方、体部横方向の並進あり。内面全面と口縁部外面は横線で、漆仕上げ。漆は外面で体部中央までおよび、特に内面で濃い。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒・透明細砂と白細砂多量。軟質。1a類。	底上46cm 底-口7/12周 「30」
21 土師器	口 12.6 高 4.4 大 12.9	口縁部は内外面に線を付けて直立し、外面の線は特に明瞭。外面は口縁部横線の後に、底部一方、体部横方向の並進あり。内面は底面に横線の後に全面横線で。内面の横線ではやや不十分で、底部の並進でよく残っている。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白細砂と黒細砂多量、透明細砂やや多量。やや軟質。1a類。	底上22cm 口は完形 「29貯蔵穴」

番号 種類	量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
22 環 土 脚 跡	□ 高 大 13.0 5.0 12.1	ゆるい丸底で薄く彫い、外面に浅い段を持ち、内面に明瞭な段を持たないで口縁部が突き、外周上半の内側中央、外面は体部端の後の、底部一方、体部横方向の彫削り、内面全面と口縁部外面は横溝で、外周上半と内面全面に漆仕上げ、漆はかなり濃い。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒細砂・白細砂やや多量、透明細砂やや少量、やや硬質。1a類。	貯蔵穴底上 21cmと床土 27cmが接合 口全面 体一部欠損 [28] [32] [33] が接合
23 環 土 脚 跡	□ 高 大 10.8 4.2	口縁部は外面に浅く明瞭な段を持った後に弱く外反する。内面には段を持たない。外面は体部に施すの後に、底部一方、体部横方向の彫削り、内面全面と口縁部外面は横溝で。	2.5Y8/3 淡黄色 黒底あり	緻密で黒細砂・白細砂多量、透明細砂やや多量、やや硬質。1a類。	底上37cm 底～口7/12 周 [20]
24 環 土 脚 跡	□ 高 大 9.4 9.1	薄く丸底。口縁部外面に不明瞭な段を持って、内面には明瞭な段線を持たないで外へ開く。外面は体部に施すの後に、底部～体部下半に多方向彫削り、内面全面と口縁部外面は横溝で。	7.5YR8/3 淡黄褐色	緻密で黒・透明細砂やや多量、白細砂少量、軟質。1a類。	底上25cm 口～底1/2 周 [31]
25 環 土 脚 跡	□ 高 大 10.5 4.5 10.2	体部は割り足らないようであり、非常に厚い。口縁部は内外面にやや弱い段を持ってわずかに外反する。外面は口縁部に横溝の後に、底部おおむね一方、体部横方向の彫削り、内面は全面横溝で、体部は横溝で直の多方向彫削りの底面が響し、口縁部もややゆがんでいて水平さ欠け、外周底の彫削りも僅か粘土カスが付着している。	7.5YR7/6 褐色	やや緻密で黒細砂・白細砂多量、透明細砂少量、やや硬質。1a類。	底上48cm 底形 [29]
26 環 土 脚 跡	□ 高 大 10.3 3.6	底部は少し厚く。口縁部は内外面ともに段線を持たない。外面は体部に施すの後に、底部二方向、体部下位に横方向の彫削り、口縁部は横溝で、体部外面に8mm大の粘土カスが付着。内面は横溝であるが、体部端部の凹凸を残す。内面全面と口縁部外面は漆仕上げで、内面体部の漆は薄く、やや黒底が残る。	10YR8/3 淡黄褐色 黒底あり	緻密で黒・透明細砂と白細砂やや多量、やや硬質。1a類。	底上43cmと 48cmが接合 口1/2欠損 [28] [29]
27 壺 土 脚 跡	□ 高 残 21.6 6.8	大形と呼んばうがよいかもしれない。全体にやや厚い。口縁部は段や段を持たないで内彎する。外面は体部に施すの後に、底部一方、体部横方向の彫削り、内面全面～口縁部外面は横溝で。主に上半部付近に二次変成をうけている。	2.5Y7/3 淡黄色	緻密で黒細砂多量・白細砂と透明細砂やや多量、やや硬質。1a類。	底上26cm 床直 底/12周 [6] [9] [床直]
28 環 土 脚 跡	□ 高 大 14.4 4.4 14.6	薄く彫い、口縁部外面は明瞭な段を持って直立し、内面はやや弱い段を持って外傾し、端部は外面側へ向かって丸味を持つ。外面は体部に施すの後に、底部一方、体部に横方向の彫削り、内面全面と口縁部外面は横溝で。	10YR8/3 淡黄褐色	やや緻密で黒細砂・白細砂多量、透明細砂やや多量、軟質。1a類。	床直 底上24cm 口5/6周 底全面 [4] [12] [床直]
29 環 土 脚 跡	□ 高 大 14.9 4.4 15.3	底部は薄く体部は厚い。口縁部は内外面に明瞭な段を持たないで外面が内傾し、内面は外傾する。外面は体部に施すの後に、底部一方、体部横方向の彫削り、内面全面と口縁部外面は横溝で。	10YR7/2 にぶい黄褐色	緻密で白細砂と黒細砂多量、透明細砂やや多量、やや硬質。1a類。	貯蔵穴底上 31cmと26cm が接合 口～底5/6 周 [24貯蔵穴] と [3]
30 小形土 脚 跡	□ 高 大 8.4 8.4	体部は厚い。外面にごく弱い段を持って突き、口縁部が外反する。外面は体部に施すの後に、底部二方向、体部に横方向の彫削り、内面は体部に横溝の後に、段で、口縁部内外面に横溝で、外面の所々に斜方向の粘土積み上げ痕を残し、そこに沿って粘土が剥離している部分もある。	2.5Y6/3 にぶい黄色	やや緻密で黒・透明細砂と白細砂多量、やや軟質。1a類。	底上34cm 口5/6周 底16cm [26]
31 小形土 脚 跡	□ 高 大 5.0 2.5 6.1	大ききのわりに厚い。口縁部は外面に明瞭な段を持って内彎する。外面は体部に施すの後に、底部多方向彫削り後、一部に彫削り、内面は体部に円周方向の彫削りの後に、内面全面で、内面の仕上げは横溝で、横溝の直が明瞭に残る。口縁部内外面横溝で。	2.5Y8/3 淡黄色	やや緻密で黒・透明細砂と白細砂やや多量、やや硬質。1a類。	不明 底～口7/12 周
32 小形土 脚 跡	□ 高 大 7.1 7.4	非常に薄く、口縁部は外面が段を持たずに内彎し、内面はごく弱い段を持って体部に施すの後に、底部におおむね一方、体部に横方向の彫削り、内面体部に円周方向の横溝の後に、内面全面と外面口縁部は横溝で。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細砂と黒・透明細砂やや多量、やや軟質。1a類。	口～底5/12 周 [壺内]
33 環 土 脚 跡	□ 脚 高 大 14.8 10.6 12.9 15.1	底部は薄い。環口縁部内外面や脚部外面には明瞭な段を持たない。脚端部は平直に仕上げられる。外面は脚部段彫削りの後に脚部横溝で、環部横溝あり。環部内面は横溝で、脚部内面は横溝で後に柱部に横溝あり。環部の内面全面・外面口縁部と脚部の外周ほぼ全面・内面の裾部に漆仕上げ。	7.5YR8/3 淡黄褐色	緻密で黒細砂多量・透明細砂・白細砂やや多量、軟質。1a類。	床直と貯蔵 穴底上21cm が接合 口5/6周 脚全面 [裏面コー ナー床直] と [32]



第79図 八幡根遺跡 SI-50 (3) 遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
34 高坏 土師器	脚 径13.8 高 径13.0	坏部と脚部との境は外面に峻を持たない。脚柱部と坏部との境は内外面ともに明確な峻線をなしてわずかに外反尖味に開く。坏部内面は中央を通るようにならぎに磨いたものに、その両側を放射状に磨き、内面全体を赤彩。外面は全体をおおむね下方内へ磨き、坏部内外面を横撫で。その後、外面を部分的に再度磨きでし、脚柱部内面を裏磨り。脚柱部外面にも赤色断片がまばらに残る。外面の脚柱部と坏部は粗灰色で、漆仕上げしている可能性もある。	2.5YR/3 灰黄色	緻密で黒・透明細砂多量、白磁粒少量。軟質。1a類。	底上17cm 箱1/3周 脚柱1/3周 坏1/3周 [17]
35 鉢 土師器	口 14.4 大 16.3	全体にやや厚く、口縁部は外面に広く明瞭な峻、内面に二条の弱い峻を持って内傾する。外面は体部に磨での後、裏磨り。内面は体部磨での後に、全面横撫で。内面全面と外面上半は漆仕上げ。	2.5YR/2 灰白色 黒濁あり	緻密で黒・透明細砂と白磁粒や多量。軟質。1a類。	底上22cm 口一休7/12周 [18]

番号 種類	法量 (cm)	特徴	色調	焼土 土成	出土状況 残存状況 注記
36 土師器	口 径21.6 大 径24.4	やや薄い。口縁部は内外面に線轡を持たないで外反する。口縁部は丸くおさまる。外面側部は下から上方向へ螺旋削りの後に、縦溝で、胴部残部の前後に口縁部横線をくりかえす。内面は胴部に横溝の後、口縁部横線。胴部下半の外面に大きな黒斑があり、残存部分で見えかざり加熱使用痕は不明。	7.5YR7/4 灰白褐色 胸外面黒斑あり	粗い。白・灰色砂・赤粒・黒粒・透明細砂・白粒が少量。 やや軟質。	床直 口一隅1/9 [2床直]
37 磁石	長 11.8 幅 4.8 厚 3.9 重 235g	不整形を示す厚板がみられ、特に図の左から2個目では明確で深い。下縁は本来の束端と考えられる。上縁は割れて欠損した可能性もあるが、その場合でも角が尖味を持つのでそのまま使用していたものである。破面の縁部や端部寄りには砥石成形時に万部を持つ工具で削った面が見られる。		磁器でやや軟質な堆積物で、流紋岩質硬灰岩の可能性あり。	不明 上縁欠損の 可能性あり
38 丸土 土師質	長 1.0 径 1.0-1.1 重 1.378g	全体に丸味が強く、図の左面の孔の周囲にだけ狭い平面部を持つ。表面は撫で、焼成前に図の左面から穿孔し、初径2.0mm、終径1.7mm。現状では跡は見られない。	10YR6/2 淡黄褐色	磁器で透明細砂少量、黒細砂と白細粒ごく少量。 軟質。1a類。	床直 左面の面に 縦溝痕 [8床直]
39 丸土 土師質	長 0.9 径 1.1 重 1.12g	左面の面の方がやや平たい。表面は撫で。焼成前に図の左面から穿孔し、初径1.5mm、終径はやや不整形で1.0-1.5mm。表面に漆を塗っていたかどうかは不明。乾燥時か焼成時に生じたと思われる亀裂が二条あり。	10YR5/1 灰白色	磁器で濡和材が目立たない。軟質。	床直 完形 [7]
40 紡錘車 石製品	径 3.9 高 1.9 重 43.18g	全面を丁寧に研磨して光沢を持つ。上下両面と側面には研磨後の細い溝状の傷が多い。孔はおそらく下面から穿孔し、初径3.4mm、終径3.1mm。		磁器で光沢があり、灰白色地に黒褐色の斑が入る。 蛇紋岩。	底上12cm 完形 [1]
41 焼粘土 土師質	長 5.0 幅 2.8 厚 2.8 重 32.85g	丸めた粘土がそのまま焼成されたもの。右側の面は粘土塊の大きな含む目を二条持つ。全体にきちんとした線や溝などはない。左側の面はわずかに縦線状のものがみられる。粘土中に繊維などは含まない。	10YR8/3 淡黄褐色	磁器で黒細砂・白細粒やや多量、透明細砂少量。 軟質。1a類。	不明 焼成後の破 損はない [SI-50]
42 焼粘土 土師質	長 4.6 幅 3.5 厚 1.0 重 残11.29g	中央がやや厚くなるように粘土を押しつぶした形状。左図は押しつぶしたままの面。右図は表面に黒など難痕をつける。図示した側面にも難で二条の傷をつけている。図の上縁はおそらく焼成後の破断面。	2.5Y8/2 灰白色	磁器で黒・透明細砂と白細粒多量。 軟質。1a類。	不明 焼成後に上 縁を欠く [SI-50]
43 焼粘土 土師質	長 3.6 幅 1.7 厚 1.5 重 5.13g	人差し、中指、薬指の3本でつまんで引ききった粘土塊が焼成されたもの。左図の左上半部はこのときの破断面で、焼成前である。	7.5YR8/3 浅黄褐色	磁器で黒細砂やや多量、透明細砂少量、やや軟質。 1a類。	不明 焼成後の破 損はない [SI-50]
44 焼粘土 土師質	長 3.9 幅 3.4 厚 1.1 重 8.23g	右図面は平坦な所に押しつけたような面をなす。左図面は粘土に広葉樹の葉面を当てて、図の左下部を指で2回やや強く裏の上から押しつけている。左図の左縁と上縁はおそらく焼成前の破断面。	2.5Y8/3 淡黄色	磁器で黒細砂・白細粒少量。 軟質。1a類。	不明 2面を焼 成前に欠く [SI-50]
45 焼粘土 土師質	長 残2.4 幅 1.9 厚 0.7 重 残1.99g	左図の面がやや平組で、広葉樹の葉面に押しつけた状況。右図面はやや中央が高く、その上面に葉状の植物繊維の圧痕が付く。図の下縁はおそらく焼成後の破断面。	7.5YR6/4 にぶい褐色	磁器で黒・透明細砂と白細粒ごく少量、やや軟質。 1a類。	不明 焼成後に一 端を欠く [SI-50]
46 焼粘土 土師質	長 2.5 幅 残2.0 厚 0.45 重 1.53g	両面とも円錐に平組で、黒と思われる植物繊維圧痕が密に付く。左図の右上部は折痕の可能性あり。両面に黒を当てて平たく押しつぶしたような状況。粘土中には繊維は混ざっていない。図の破線部は焼成後の破断面。	10YR8/2 灰白色	磁器で黒・透明細砂と白細粒やや多量。 軟質。1a類。	不明 焼成後に一 端を欠く [SI-50]
47 削りか 土師質	長 残2.4 幅 2.4 厚 0.5 重 残1.62g	背面(右図)は撫で圓蓋。腹面(左図)は一方の角削りで、図の左上には1回削りの痕が少し残る。図の下縁は焼成後の破断面。	10YR8/4 淡黄褐色	磁器で黒・透明細砂ごく少量。 軟質。2類。	不明 一端を焼 成後に欠く [SI-50]
48 削りか 土師質	長 残3.1 幅 2.4 厚 0.9 重 残3.30g	背面(右図)の下半は土師器成形時の線な撫で面、上半は1回削りの痕削りの痕。腹面(左図)は一方の角削りで、さらに削りかすの破片がもう1枚付着している。上縁は焼成後の破断面。	2.5Y8/3 淡黄色	磁器で黒細砂・白細粒やや多量、透明細砂少量。 軟質。1a類。	不明 上縁を焼 成後に欠く [SI-50]
49 削りか 土師質	長 4.0 幅 3.9 厚 1.3 重 13.04g	土師製作時の底部付近を削ったかす。成形時の底径を測定すると6cm前後(右図の破線)。背面(右図)は撫で痕跡で、承知り難し痕と考えるにはやや曇がそっていない。腹面(左図)は1回の角削り。周縁の全周は焼成前の破断面。	2.5Y8/3 淡黄色	磁器で黒・透明細砂と白細粒多量。 やや硬質。1a類。	掘土中 焼成後の破 損はない [「ク土」]

第94表 SI-50 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	埴	壘・皿	壘	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甗	大甗	埴粘土	その他
土	399	7		5	6	5				16			
器	有			脚柱9	有				有			45	
底徑				幅10					11				
須													
底徑													

磁石1点・紡錘車1点・土師器の削りかす3点。土師器壺の口縁部7片は同一個体で、図の27。
 古墳時代前期の土師器少量、平安時代の土師器・須恵器少量混入。
 平安時代の須恵器は、三和窯産(長壺胴部2片・同一個体の無台杯の口縁部と底部各1片)・新治窯産(長壺胴部3片)が混入。

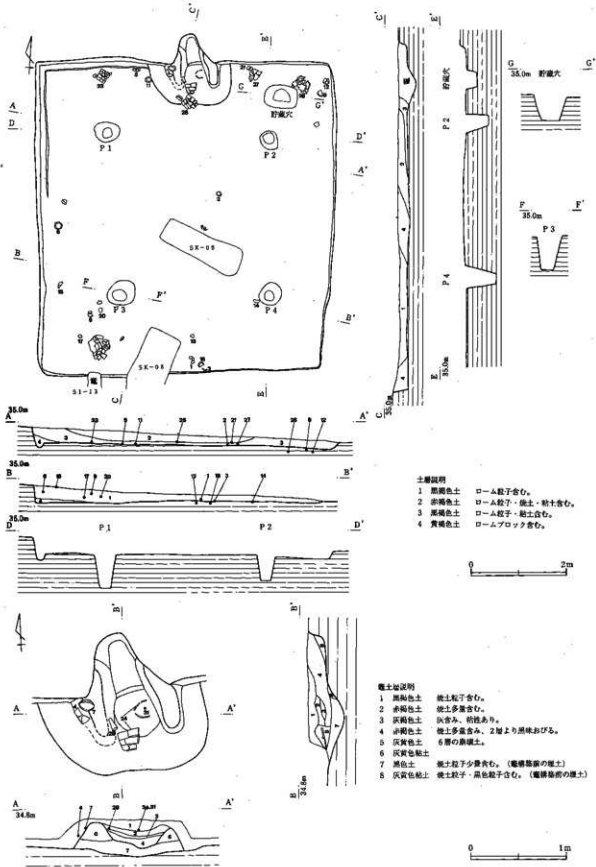
S1-53 (第80～82図、写真図版18・47～49・52・54～55)

本建物跡は、調査区の北部東寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-13より古く、南壁西側の一部をSI-13の竈の煙道先端によって切られている。また、SK-05・SK-08と重複するが、SK-05・SK-08は新しい時期のものと考えられる長方形土坑なので、SI-53の方が古く、床面と南壁の一部を切られていると思われる。また、調査を始めた時点ではこの建物の南部にさらにもうひとつの堅穴建物跡が重複していると考えてそれをSI-52と名付けたが、調査を進めるとSI-52はSI-53の一部分であることがわかった。そこで、SI-52は欠番とし、その遺物もSI-53に統合した。

平面形は、東西6.4m、南北6.8mの南北にわずかに長い形で、主軸方向はMN-5°-Eである。壁は確認面から西壁で34～37cm程、東壁で4～18cm程、南壁で2～33cm程、北壁で12cm程遺存しており、その立ち上がりは、西壁78～83°程、東壁で35～60°程、南壁で79°程、北壁で56°程の傾きである。周溝は、竈の西側から西壁北半分にかけての壁際で検出された。幅は16～30cm、深さは10～14cmであり、断面は皿状またはU字形で、底面は平坦もしくはやや内彎している。床面は建物跡西側が高く、東壁際が低くなっており、その比高差は15cmである。主柱穴は4本検出された(P1～P4)。P1は長径55cm、短径42cmの平面楕円形で、深さ75cm、P2は径43cm、深さ50cm、P3は長径64cm、短径52cmの平面楕円形で、深さ70cm、P4は長径50cm、短径44cmの平面楕円形で、深さ65cmである。掘形は、いずれも断面円柱状である。貯蔵穴は、北東コーナーに検出された。東西69cm、南北49cmの平面隅丸方形で、深さ60cmである。断面は逆台形で、底面は平坦である。

竈は、北壁中央に位置する。煙道天井部が崩落するものの、断面に、そのブリッジの構築材である灰黄色土層を最深16cm程確認することができるうえ、両袖部が残るなど残存状況は比較的良好。規模は、袖幅119cm、奥行き118cmである。袖は、灰黄色粘土を用いて構築されている。

竈の掘形は、北壁を幅89cm、奥行き65cmの平面漏斗状に掘り込んでいる。また、竈周辺の床面を東西178cm、南北89cmの平面不整な半円形に掘り窪めている。その断面は皿状で、床面から最深17cmである。その窪んだ部分の中心に、東西117cm、南北55cmの平面隅丸方形、高さ8～16cm程の断面台形状に、焼土粒を少量含む黒色土を埋め戻し、竈の土台としていた。そして、その土台の上層を径52cm程の円形に掘り窪め、燃焼部としていた。その断面は皿状で、深さは、土台の上端から最深9cmである。煙道は平面舟首形で、その立ち上がりは、もともと燃焼部中央から段をもって立ち上がり、煙道奥で急激に立ち上がっていた部分を埋め戻して整地していた。即ち、燃焼部と煙道奥に、焼土粒を少量含む黒色土と焼土粒(竈の7層)と、黒色土粒を含む灰黄色粘土(竈の8層)を使って埋め戻し、なだらかな立ち上がりになっている。その立ち上がりは、燃焼部中央から16°程の傾きであった。竈構築時の下層の整地土に焼土と粘土が含まれていることから考えると、この竈は、修復または再構築を行った可能性がある。



第80図 八幡根遺跡 SI-53 (1) 遺構

竈の燃焼部から煙道奥にかけて、焼土を主体としてやや黒みを帯びる赤褐色土が最深19cmの厚さで認められた。また、燃焼部内左袖寄りに、土製の支脚(28)が出土した。十分には焼かれておらず、非常にもろく、取り上げの際に下部が崩れている。さらに、燃焼部前に、ブリッジの芯材として使用したと思われる甕(24)も出土した。また、竈内から粘板岩製の玉(31)が出土している。

竈穴の埋土は、4層に分層される。西壁際、南壁際、建物跡中央部がロームブロックを含む黄褐色土、南側がローム粒子を含む黒褐色土、北側床面直上がローム粒子、粘土を含む黒褐色土、北側上層がローム粒子、粘土を含む褐色土である。

出土遺物 土師器類は、漆仕上げのものが多く、器形は坯身模倣形がやや多い。16の坏は、口縁部形が独特である。八幡根遺跡の製品に似た胎土だが、混和材の量が少ない胎土1b類なので、産地を確定できない。18は小形化した古墳時代終末期の坏かもしれないが、内面調整がやや雑なので、非実用の小形土師の可能性があると考えた。19・20はこの遺跡では数少ない整形土師器で、胎土からは、八幡根遺跡の製品かどうか明らかではない。他にSI-50にも整が1点ある。

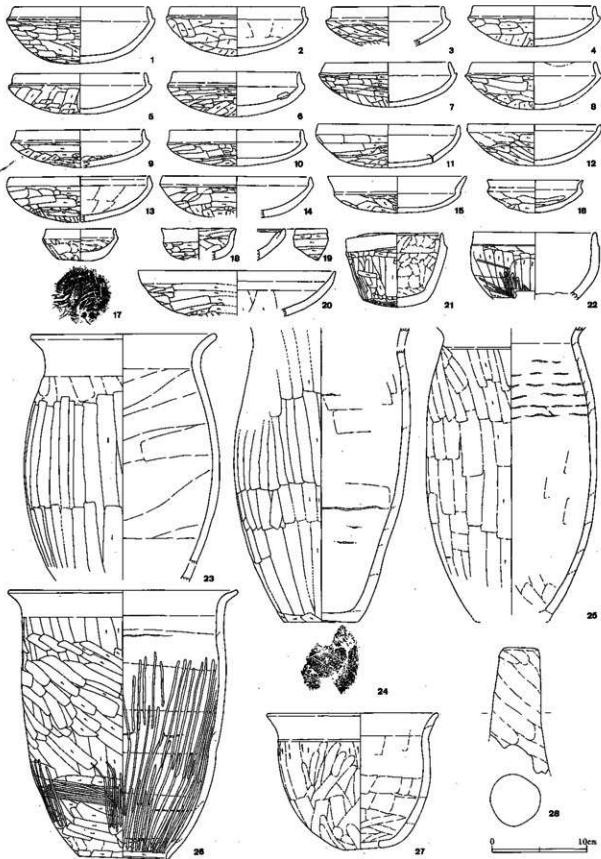
不良品や、それに準ずる出来の悪い土師器が目立つ。8・9・11の坏と22の鉢は不良品の土師器で、11は焼成時に大きな亀裂が入った坏をそのまま使用していた可能性がある。亀裂は内面まで達しているので、飲用器には使えない。9は内外面を調整した後に底面中央の内外面を広く雑に指で撫でていて、亀裂などを補修した痕と考えられる。22は焼成前に入った亀裂を亀磨きで補修している。

17は糸を手で回すようにして切り難した静止糸切り痕を持つ。体部の篋削りを省略したかまたは忘れたために、糸切り痕跡が残されたものである。21の鉢は調整がやや粗い。内面が特に雑で、粗く調整した後に、内面仕上げの横撫でを省略してしまったものらしい。底面は断面凸レンズ形に外に出る九底で、やや不安定ではあるが、平らな所に置くこともできる。竈穴建物の床面に完形で遺棄されたものである。27も内面調整が少し雑で、外面も胴部上半は成形時の雑な撫でのままである。

30は土師器の坏か鉢の未製品の断片が焼成されたものの可能性がある。29は焼粘土塊としてはめずらしく形のやや定まったもので、円筒形。31は竈から出土した粘板岩製の粗雑な玉で、SI-04AとSI-26に類例がある。

第95表 SI-53出土遺物

番号 器種 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 14.2 高 6.0 大 15.8	薄く九底。口縁部は内外面に明瞭な稜と段を持って内傾する。外面は体部に撫での後、底部多方向、体部横方向の篋削り。内面全面と外面口縁部は横撫での後、漆仕上げ。	7.5YR7/4 にぶい褐色 外底中央に 大黒斑あり	緻密で白細粒やや 多量、黒・透明 砂少量。 軟質。1b類。	床底 底~口2/3 周 [SI-52No3 床底]
2 坏 土師器	口 14.1 高 5.3 大 15.0	口縁部は内外面に明瞭な稜と段を持って内傾する。外面は口縁部に横撫での後、底部はおおむね円周方向、体部は横方向の篋削り。内面は体部篋削りの後に全面横撫で。内面全面と外面上半は漆仕上げ。	2.5Y8/2 灰白色 底面全面の 1/3に黒斑 あり	緻密で混和材は非 常に少ない。 軟質。1b類。	床底 口15/6周 体全面 [SI-53No11 床底]
3 坏 土師器	口 復11.6 高 4.2 大 復13.2	口縁部は内外面に明瞭な稜と段を持って内傾する。外面は体部に撫での後、底部に多方向篋削り、体部に斜方向篋削り。内面全面と外面口縁部は横撫での後、漆仕上げ。	7.5YR6/4 にぶい褐色	緻密で黒・透明 砂と白細粒やや少 量。軟質。1b類。	床底 口1/6周 底~体1/4 周 [SI-52No1 床底]
4 坏 土師器	口 13.0 高 4.3 大 14.0	口縁部は内外面に明瞭な稜と段を持って内傾する。外面は口縁部に横撫での後、底部一方向、体部横方向の篋削り。内面全面と口縁部外面は横撫で。漆仕上げは現状では認められないが、全体が磨滅している ので、もとは漆仕上げの可能性も残る。	2.5Y8/2 灰白色 外底面に大 黒斑あり	緻密で黒・透明 砂と白細粒やや多 量、赤褐色少量。 軟質。1a類。	底上13cm 底~口1/2 周 [SI-53No2 竈内]

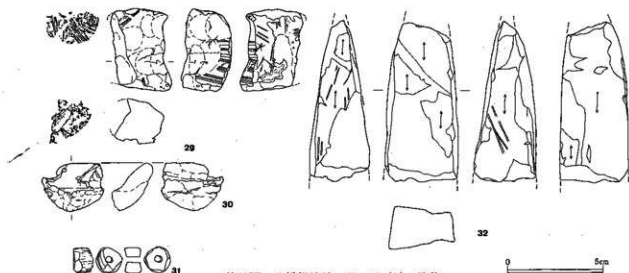


第81図 八幡根遺跡 SI-53 (2) 遺物

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	給 土 成	出土状況 残存状況 注記
5 環 土師器	口 径13.6 高 4.3 大 径15.2	口縁部は外面に長く明瞭な段、内面に明瞭な段を持って内傾する。外面は体部に紐での後、体部全面をほぼ一方方向の彫削り。内面全面と口縁部外面は横溝で、	5YR7/6 褐色	緻密で黒細砂少量 軟。1b類。	床直 底~口/2 周 [SI-53No2 床直]
6 環 土師器	口 径13.4 高 4.8 大 径14.6	非常に厚く重い。口縁部は内外面に明瞭な段と長くゆるい段を持って内傾する。外面は口縁部横溝での後、底部一方、体部横方向の彫削り。内面全面と外面口縁部は横溝での後に漆仕上げ。内面体部に粘土中に空気の入っていた部分が見られた2.5×1.5cmの傷があり、漆仕上げより後で生じたようである。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白細砂やや 多量、黒・透明細 砂少量。 やや硬質。1b類。	床上24cm 底直 [SI-52No12]
7 環 土師器	口 径13.2 高 4.7 大 径14.6	口縁部は内外面に明瞭な段と段を持って内傾する。外面は口縁部横溝での後に、底部一方、体部横方向の彫削り。内面は横溝で、内面全面と外面上半は漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄褐色 黒斑あり	緻密で透明細砂や 少量、黒細砂・ 白細砂少量。 やや軟質。1b類。	床上22cm 底直 [SI-53No1 底直]
8 環 土師器	口 径13.0 高 5.0 大 径14.5	口縁部は外面に明瞭な広い段、内面に明瞭な段を持って内傾する。外面は口縁部横溝での後に、底部一方、体部横方向の彫削り。内面は横溝での後、内面全面を漆仕上げ。底部外面に長さ3cmの深い亀裂が焼成時乾燥時に入っているが、内面には透していない。	2.5YR8/3 淡黄褐色 黒斑あり	緻密で黒斑材が目 立たず、白細砂 やや少量、黒細砂 少量、黒細砂極めて 少量。やや硬質。	床直 底~口5/12 周 [SI-53No9 床直]
9 環 土師器	口 径13.5 高 4.1 大 径14.9	口縁部は内面に明瞭な段と外面に浅く明瞭な段を持って内傾する。外面は体部に紐での後、内面全面と口縁部は横溝で、内面全面と口縁部中央を調整した後に漆に塗られていて、亀裂などを補修した痕と考えられる。	7.5YR7/4 にぶい褐色 外底面中央 に大黒斑あり	緻密で白細砂やや 多量、黒・透明細 砂ごく少量。 やや硬質。1b類。	床上18cm 底直 [SI-52No8]
10 環 土師器	口 径14.2 高 3.9 大 径14.8	底面はかなり平たいが、底中央にいたるまで丸底。口縁部は内外面に明瞭な段と段を持って内傾する。外面は口縁部横溝での後、底部一方、体部横方向の彫削り。内面は全面横溝で、横溝で工具と思われる目の粗い織物状段が体部に付く。	5YR6/6 黄色 外面に小黒 斑あり	緻密で黒・透明細 砂と白細砂やや少 量。硬質。1b類。	埋土2/2 底直 [7フク土]
11 環 土師器	口 径15.0 高 4.6 大 径15.3	口縁部は外面に明瞭な段を持ってわずかに内傾し、内面がごく弱い段を持って外傾する。外面は口縁部横溝での後、底部一方、体部横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面は横溝での後、漆仕上げ。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で黒・透明細 砂ごく少量。 軟質。1b類。	床直 底直 [SI-53No3 床直]
12 環 土師器	口 径14.2 高 4.4 大 径14.2	口縁部は外面に明瞭な段、内面にやや弱い段を持って外面が直立し、内面が外傾する。外面は体部に紐での後、底部一方、体部中央に横方向の彫削り。内面全面と外面口縁部は横溝での後、漆仕上げ。外面の漆仕上げは体部中央まで及ぶ。	2.5YR8/2 灰白色 外底面中央 に小黒斑あり	緻密で黒細砂と白 細砂やや多量、透明 細砂やや少量。 軟質。1b類。	床直 底直 [SI-53No8 床直]と [SI-53フク 土]が接合
13 環 土師器	口 径14.8 高 4.9 大 径15.4	薄く軽い。口縁部は内面に不明瞭な段を二条持ってほぼ直立したのちに外傾する面を持ち、外面はやや明瞭な段を持って内傾する。外面は口縁部に横溝での後、底部一方、体部横方向の彫削り。内面は体部に横溝での後に全面横溝で、内面全面と外面上半部は漆仕上げ。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白細砂と透 明細砂多量、黒細 砂・赤細砂少量。 軟質。1a類。	床直 口~底/2 周 [SI-52No4 床直]
14 環 土師器	口 径15.8 高 4.3 大 径16.2	口縁部は外面が明瞭な段を持って内傾し、内面は弱い段を持ってわずかに内傾した後に横溝が少し外傾する面を有す。外面は体部に紐での後、底部一方、体部横方向の彫削り。内面全面と口縁部外面は横溝での後、漆仕上げ。	7.5YR6/4 にぶい褐色	緻密で白細砂やや 少量、黒・透明細 砂少量。 やや硬質。	床直 口~体/4 周 [SI-52No14 床直]
15 環 土師器	口 径14.8 高 3.8 大 径13.5	薄く軽い。底面中央部はかなりゆるやかではあるが、全体としては丸底。内外面に明瞭な段を持って、口縁部が開き、内面上半部は内外区別。外面は体部に紐での後、体部上半と口縁部に横溝で、口縁部外面は横溝で、	7.5YR8/4 淡黄褐色	緻密で白細砂少量、 黒・透明細砂ごく 少量。軟質。	床上32cm 口~底/4 周 [SI-52No11]
16 環 土師器	口 径10.0 高 3.5 大 径10.2	口縁部は薄く、内面にやや明瞭な段、外面に強い段を持って外傾する。外面は体部に紐での後、底部に円周方向の彫削り。口縁部内外面~体部内面は横溝で、内面底部は多方向の横溝で。	10YR8/3 淡黄褐色 体部/4周 に黒斑あり	緻密で白細砂・透 明細砂少量。 軟質。1b類。	床直 口/3周 底~体/12 周 [SI-52No2 床直]
17 小形土 師器	口 径7.2 底 高 3.8 大 径3.4 大 径8.0	底部は厚く、平底。口縁部は内外面に明瞭な段を持って内傾する。外面は体部にやや横溝での後、口縁部横溝で、内面は体部に多方向彫削りの後、体部上半と口縁部に横溝で。底部外面は手で持った糸をまわすように静止糸切り織した後、体部下端から底面外周の一部を先の丸い棒で平行短状に調整する。	7.5YR7/3 にぶい褐色	緻密で透明細砂や 多量、黒細砂・ 白細砂少量。 軟質。	床上11cm 口5/6周 体全面 [SI-52No7]

番号 種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 土成	出土状況 注記
18 小形土 土師器	口 復 7.8 高 残 3.3 大 復 7.4	おそらく手捏成形ではなく、粘土練り上げ。大ききわりには底部が厚い。口縁部は内外面に比較的明瞭な稜を持って外反する。外面は口縁部横溝での後、体部に施削り。坪と考えると内面調整がや浅いので、小形土師と判断した。内面は体部に多方向の横溝での後、口縁部に横溝施削り。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒・透明細砂と白細粒やや多量。やや硬質。1b類。	不明 体-口1/3 高 [SI-58]
19 鏡 土師器	口 復約15	厚い。口縁部外面には明瞭な稜を持たないで内摩し、口縁部内面は凹線を一途持つ。凹線はあまり整っていない。外面は口縁部に横溝での後、体部を施削り。内面は横溝で、残存部の内面と外面口縁部は接仕上げ。	10YR6/3 にぶい黄褐色	緻密で白細粒・透明細砂やや少量。黒細砂少量。軟質。1b類。	不明 口約1/15周 [SI-58]
20 鉢 土師器	口 復21.0 高 残 4.8	やや厚く、口縁部は内外面に非常に弱い稜を持ってやや内摩する。外面は体部横溝での施削り。内面体部に多方向横溝での後、口縁部内外面に横溝で。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で胎材はあまり目立たず。白細粒・透明細砂少量。軟質。	底上13cm 口-体1/6 周 [SI-52No9]
21 鉢 土師器	口 10.2 底 7.0 高 7.8	底-体部は厚い。口縁部は外面に明瞭な稜を持って直立する。底部にはほぼ二方向の横溝の後、体部を縦位の横溝の施削り。口縁部外面は横溝で。内面は底部に多方向、口縁部には横溝の後に、多方向の横溝で、口縁部端は横溝施削り。	2.5Y8/3 淡灰色 底面は黒灰	緻密で黒・透明細砂と白細粒やや多量。赤灰少量。軟質。1a類。	床直 完全 [SI-53No5 床直]
22 鉢 土師器	口 復13.0 高 残 7.2 大 復13.4	厚く、口縁部は外面に明瞭な稜を持って直立気味に立つ。外面は体部に横溝で、縦方向の施削り後、下に施削り。内面は体部-口縁部内外面に横溝で、体部下位の裏磨きは、焼成前に生じた亀裂を補修したものと考えられる。現在は、その亀裂の部分で土師が破損している。	5YR7/4 にぶい褐色	緻密で透明細砂・白細粒やや多量。黒細砂・赤細粒少量。やや軟質。	不明 口-体1/6 周 [SI-52]
23 壜 土師器	口 19.8 高 残26.3 大 20.8	外面は頸部が折によってわずかに段を持ち、内面は横溝を持たない。口縁部端は丸い。外面は頸部に施した後は横溝での後、肩以下に施削り。内面は横溝で。口縁部内外面に横溝で。胴下半は加熱して赤化。	7.5YR7/4 にぶい褐色	粗い。灰色練と白・灰色砂多量。赤粒・白細砂と黒・透明細砂やや多量。やや硬質。	床直 口・胴とも に11/12周 [SI-53No1 床直]
24 壜 土師器	底 高 7.8 残31.3 大 18.8	少しゆがんでいるが、胴中位の少し下寄り最大径を持つようである。外面は頸部を少し内摩り、胴部下端を横溝施削り。底面は広葉の葉の裏面の圧痕が少し見られ二重に付く。内面は横溝で。口縁-頸部の横溝では残存部分がほぼ見られない。胴部中心-底部は加熱赤化。	10YR8/3 浅黄褐色 黒灰あり	粗い。灰色練と白・灰色砂多量。赤粒・白細砂と黒・透明細砂やや多量。やや硬質。	底上28cm 黒1/2周 胴1/3周 [SI-53No4, 5]
25 壜 土師器	高 残30.5 大 18.0	頸部外面に非常に浅く不明瞭な稜を持ち、内面は横溝を持たないで口縁部を外反する。外面は頸部中位以下を上方へ横溝での後、胴部上位を下方へ横溝施削りの後に、口縁部を横溝でし、胴により再度胴上部-胴部を斜め施削り。胴部下半は、部分別に粘土練合表面を横溝施削りした後に、全面を縦磨き。内面は胴部横溝で、胴部下半-口縁部横溝施削り、口縁部横溝で、最後に裏磨き。	7.5YR7/6 褐色	やや粗い。黒・透明細砂と白細粒やや多量。やや硬質。	底上5cm 胴部全周 [SI-53No4]
26 甕 土師器	口 24.7 底 高 9.5 残 28.7 孔 8.9	頸部は内外面に段や稜を持たないで強く外反する。孔部は施削りで面取り状に仕上げた。粘土練の練み上げ工程と対応して胴部の凹凸が目立つ。外面は上半を上へ、下半を下へ斜め施削り、胴部下部に横溝施削り。上部は縦磨きの後に、口縁部を横溝でし、胴により再度胴上部-胴部を斜め施削り。胴部下半は、部分別に粘土練合表面を横溝施削りした後に、全面を縦磨き。内面は胴部横溝で、胴部下半-口縁部横溝施削り、口縁部横溝で、最後に裏磨き。	10YR8/3 浅黄褐色 黒灰あり	緻密で胎材はほとんど目立たない。軟質。	床直 底-頸全周 口3/4周 [SI-53No7 床直]
27 甕 土師器	口 18.1 孔 3.0-3.6 高 大 14.6 大 16.1	外面口縁部はごく弱い稜を持つ。内面は明瞭な稜を持たないで外反する。外側は胴部上半にやや横溝で、粘土のヒビを消す。その後には胴部上位・下位の二部に横溝で、中位に縦溝で。内面は底部横溝で、胴部横溝で。底面に外面から裏又は外よりで厚い。孔縁は狭いところ(土師外底面)で、3.6cm、狭いところ(内面側)で3.0cmである。	10R8/3 浅黄褐色 外面の1/3 周は黒灰あり	やや緻密で赤・白細粒、灰色砂多量。透明細砂少量。軟質。	床直 ほぼ完全 [SI-53No6 床直]
28 土製 土製文	高 残 3.6 長 残13.4	スサと思われる植物繊維をごく少量含む粘土で成形。表面および先端面はやや横溝で。	10YR6/2 灰黄褐色	緻密で透明細砂・白細粒少量。スサ少量。軟質。焼成不良で、かなりの生の粘土に近い。	底上26cm 上部のみ残 [SI-53No3]
29 粘土塊 土師器	長 4.5 幅 3.4 厚 2.7 重 31.73g	中央と両端が少し円筒形の粘土練が塊成されたもの。側面は、中央部の面に木目または繊維等にによる擦痕が付いた後に、指で押して円柱形を作る。その後、右側の面を平坦な場所に押しつけて、植物繊維状の圧痕が付く。面の上面は少しカーブする擦痕が付く。裏面が平坦に整えているようである。面の下面はこねた粘土のままの面で、右土から左下へ向かって裏面で鉄のような痕を残し、右土の上には径1.0mmの細い丸線で押した痕が2ヶ所残る。	7.5YR7/4 にぶい褐色	緻密で白細粒と黒・透明細砂やや多量。やや硬質。1a類。	黒土中 1側面を焼 成後に欠 けに破損 した灰汁 [SI-52]
30 未製成 土師器	高 残 2.6 幅 3.3 厚 1.1 重 8.61g	口縁部破片。鉢か杯の可能性あり。外面は粘土練の練み上げ痕を残し、横溝で。内面は比較的丁寧な口縁部横溝での後、斜位の沈着が二条、先の鋭い意状のものでおそらく偶然に付いている。外面を調整する前に製作を中断した可能性がある。現在の破面は、内面側(左面)の左上部は粘土が軟らかい・硝点の可能性があり、他は焼成後の破断面と考えられる。	5YR7/4 にぶい褐色	緻密で黒・透明細砂と白細粒やや多量。やや硬質。1a類。	焼成後にさ らに破損 した灰汁 [SI-52]



第82図 八幡根遺跡・SI-53 (3) 遺物

番号 種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 構成	出土状況 残存状況 注記
31 玉 粘板岩	径 1.3-1.4 厚 0.7 重 2.27g	上下面は野間に沿った定制の割離面のままで、研磨痕なし。側面は横方向に粗く研磨し、形制時の切削面を4箇所に残す。孔は初径4.0mm、終径 3.9mmで、右面の面から穿孔。		軟質の粘板岩。	竈内の甕の付近 完形 [SI-53竈内]
32 磁石	長 残 8.6 幅 残 3.9 厚 残 3.3 重 残 114g	長軸方向の4面を磁面としている。各面は緻密でなめらかで、わずかに凹凸がある。底面には深い切り込み状の溝がみられ、表面と片側面の磁面は剥離・破損が著しい。面の上部は磁石中央が減って薄くなった部分で破損している。		軟質で緻密な磁灰岩。	竈土中 上下両端部 欠損 [SI-52フタ土]

第96表 SI-53 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

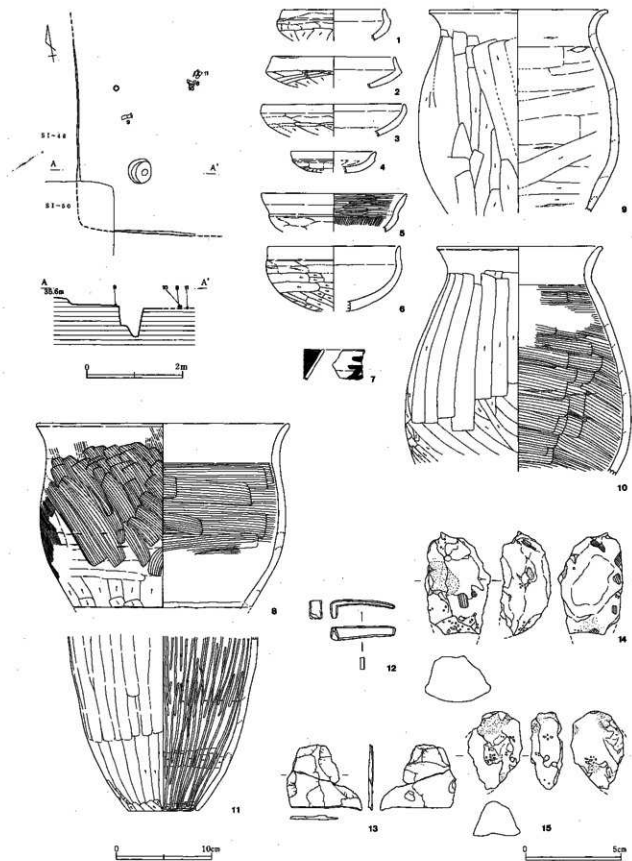
	坏	鉢・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	甕・甌	小形壺	長壺	甔	大甕	焼粘土塊	その他
土器	213				3	1		3	42				
土器	有				有				有			16	
須口縁部													
須口縁部													
土器													
土器													

土師器の未製品1点・白玉(粘板岩)1点。
古墳時代前期の土師器ごく少量と、平安時代の土師器ごく少量と三和瓦産須恵器坏体部1片が混入。

S1-57 (第83図、写真図版19・49・53)

本建物跡は、調査区の北部やや東寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。SI-48、SI-50と重複するが、SI-48はほとんど削平されてしまっており、セクションからは新旧関係は判断できない。また、SI-50との新旧関係も、共通するセクションがないため判断できない。出土した土器から考えると、SI-50よりも古く、建物跡の南西コーナーを切られている可能性がある。SI-48との前後関係も確実ではないが、SI-48よりこちらが古いかもしれない。

平面形は、残存している部分が建物跡南西部だけのため、確定できない。東西3.1m以上、南北4.8m以上の方形を呈し、主軸方向はMN-7'-E程度を示すと思われる。壁は、確認面から西壁で11cm程遺存してお



第83図 八幡根遺跡 SI-57 遺構・遺物

第3章 発掘調査された遺構と遺物

り、その立ち上がりは、50°程の傾きである。周溝は、確認された範囲内では検出されなかった。床面は、西壁際がわずかに高く、東に向かってわずかに傾斜しており、比高差は9cmである。主柱穴と思われるピットは、1本検出された。径54cm、深さ65cmであり、断面は西側に段を持つ円柱状である。貯蔵穴も、確認された範囲内では検出されなかった。

出土遺物 土師器壺のうち8は、粘土積み上げ痕に沿った胴部下位の破面を磨いて、底抜けの状態で再利用している。大形の坏である5は漆仕上げをしないで内面を丁寧に磨き、内唇口縁環としては古い特徴をもつ。これに対して小形の1・4は新しい特徴を持つ。6の鉢は残存部が多いが、1～5は坏口縁部だけの破片なので、1～5がすべてこの建物に伴うとは言い切れない。

12は釘の可能性がある。13は粘板岩の剥片で、SI-48(第74図)と、SI-49AまたはB(第76図)とに類例がある。14・15はおそらく鉄の鍛錬鍛冶滓であろう。13～15は出土状態が不明だが、14・15は古墳時代の遺物であつてもおかしくはない。

第97表 SI-57出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 復10.8 高 残 3.3 大 復12.0	口縁部は内外面に明瞭な段を持って内傾する。外面は体部にやや縦な溝の後、体部に斜め彫り。内面全面と外面口縁部は横溝の後、漆仕上げ。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で黒細砂と白細粒多量、透明細砂やや多量、やや軟質。1a類。	不明 □1/9周 体1/4周 [SI-57]
2 坏 土師器	口 復12.5 高 残 3.3 大 復14.4	内外面にシャープな段を持って口縁部が内傾する。外面は口縁部横溝での後、底部に一方角(?)、体部横方向の彫り。内面全面横溝で、残存部は内外全面漆仕上げで、口縁部はおそらく使用等により漆がとれている。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で混和材は目立たず、黒・透明細砂と白細粒ごく少量。軟質。	不明 □1/体1/6 周 [SI-57]
3 坏 土師器	口 復15.0 高 残 3.4 大 復15.4	内外面に弱い段を持って口縁部が内傾する。外面は体部に溝の後に口縁部横溝で、体部下位に彫り。内面は全面横溝で、内外面の口縁部一体部上半に漆仕上げ。内面底部は漆が薄くなるか、なくなるように見える。	10YR7/2 にぶい黄褐色	緻密で混和材は目立たず、黒・透明細砂と白細粒ごく少量。軟質。1b類。	不明 □1/体1/8 周 [SI-57]
4 坏 土師器	口 復 9.0 高 残 2.2 大 復 8.8	口縁部は外面に明瞭な段を持って外傾する。内面には段を持たない。外面は体部にやや縦な溝の後に、口縁部横溝で、体部横溝彫り。内面は体部横溝の後に全面横溝で、漆仕上げしていない。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で混和材は目立たず、黒・透明細砂と白細粒ごく少量。軟質。1b類。	不明 □1/体1/4 周 [SI-57]
5 坏 土師器	口 復15.3 高 残 4.1 大 復13.6	外面は明瞭な段を持った後に、口縁部上半が弱い段を持って内傾し、内面は体部に弱い段を二条持って、口縁部が外傾する。外面の残存部は体部に溝の後に、口縁部横溝で、内面は体部放射状の後に口縁部横溝彫り。漆仕上げみられない。	2.5Y6/2 灰黄色	緻密で混和材は目立たず、黒・透明細砂と白細粒ごく少量。軟質。	不明 □1/体1/4 周 [SI-57]
6 鉢 土師器	口 復14.0 高 残 6.9 大 復14.4	口縁部は外面に浅く明瞭な段を持ち、内面に弱い段を持って直立する。外面は体部に横な溝の後に、底部に一方角又は多方向、体部に横方向の彫り。内面全面と口縁部外面は横溝の後に、漆仕上げ。	2.5Y7/1 灰白色	緻密で白細粒・透明細砂少量、黒細砂ごく少量。軟質。	不明 □1/9周 体1/6周 と「SI-35A」が重合
7 坏 土師器	口 復約15	薄く、体部のクロロ目は凹凸が目立たない。内面は彫り後、黒色彫り。外面に曇りがある。平安時代の遺物が見入る。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で黒・透明細砂多量、白細粒やや多量、白細粒ごく少量。やや軟質。	不明 □約1/18周
8 壺 土師器	口 復26.9 大 復26.0	胴部は内面にだけ極めて弱い段を持って外反し、口縁部は丸くおさめる。外面は胴部下位に彫り彫り後に、上半部を撫でたら刷毛目。刷毛目は口縁部横溝の前後にそれぞれ論じている。内面は胴部上に横刷毛の後に、口縁部横溝で、胴部中央はおそらく使用により摩滅して調整不明。胴部下位の粘土積み上げ部で水平に破損した後に破面を粗いで平らにしている。残存部には加熱使用痕は見られない。	10YR7/3 にぶい黄褐色 肩部に黒斑あり	粗い。黒・透明細砂やや多量、赤細粒少量、黒細砂やや軟質。	床直 □1/5周 胴中位1/3周 [3,4床直]
9 壺 土師器	口 復19.0 高 残21.5 大 復21.2	胴部内面にごく弱い段を持って外反し、口縁部は丸く仕上げてわずかに外面側がふくらむ。外面は口縁部横溝の後に、胴部を下へ彫り。内面は胴部横溝の後に、下半部のやや厚い箇所を部分的に彫りし、口縁部に横溝で、胴下位は加熱赤化している可能性がある。	7.5YR5/4 にぶい褐色	粗い。半透明の白砂と白細粒・透明細砂多量、黒細砂・灰色砂やや多量、赤細粒少量。硬質。	床直 □1/胴1/5 周 [1床直]

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
10 土師器 土師器	口 径17.4 大 24.0	胴部は内外面に線や段を持たないで外反し、口縁部は丸く仕上げ、外周部は少し粘土がみまらぬように処理する。外面は、胴部下半を下へ覆り、口縁部後端の後に胴部上半を上へ覆り、内面は胴部反時計回りの横刷毛の後に口縁部後端で。外面は胴部下半が加熱硬化し、口へ肩部にスガが付着。	7.5YR5/4 にぶい褐色 黒度あり	粗い。灰色砂と白 紋、細粒多量、黒 ・透明細砂や多 量。硬質。	床直 口1/4 胴1/2 腹1/2 [4床直]
11 土師器 土師器	底 径7.4 孔 6.9	底部の孔縁面はやや不整形。胴部は粘土の積み上げ体止面付近がやや内側に肥厚する。胴部外面は縦地割りの後に、上半部を上へ覆れ、下半部は縦地割りの後に、内面は敷でまたは塗層で覆る後に、粘土積み上げ体止面付近と孔縁部を横刷毛してから全面焼成。	10YR6/6 明黄褐色	粗い。灰色砂・砂 と白細粒多量、黒 ・透明細砂と白砂 少量。硬質。	床直 底2/3 胴1/2 腹1/2 [3床直]
12 不明鉄 製品	長 3.4 幅 0.7 厚 0.2 重 残3.04g	扁平で薄い鉄製品で、片端をほぼ線直に折り曲げてある。もう一方の端は縦断面が先端にわずかに丸味をおびて終わり、あまり鋭くはないが、釘かもしれない。有機質等は見られない。古墳時代の遺物ではなくて投入品である可能性もある。			不明 折曲部の一 隅を欠く
13 銅片 粘板岩	長 4.0 幅 3.6 厚 0.3 重 3.54g	面の下辺は原石の自然面で、他の周辺は人為的に削った面。表裏面は劈開方向に沿った平坦な割離面。切削工具痕、研磨痕、穿孔などは認められない。中央で2片に割れているが、これは人為的な折断か二次的な破壊か不明。		劈開の発達した、 軟質で脆な粘板 岩。	不明 2片が接合 破壊なし [SI-57]
14 鉄滓	長 残 5.5 幅 3.5 重 67.49g	炉底に少量生成した、縦帯で重量感のある小形の塊形凝結滓。因の下端が破面。木炭灰は長さ5～8mm、幅3～5mm程度で、量は少ない。破面で観ると、全体に緻密で0.5mm程度の気孔が疎らに存在する。上面(左部左半部)と下面(下面下部)に紫褐色～暗茶褐色の酸化鉄分が明瞭に付着する。全面を覆く酸化土層が覆う。特殊金属探知機に反応しないのでメタル度なし。磁着度4(35cmの磁に吊した標準磁石が2.3cmで反応)。	5YR5/3 にぶい赤褐 色		不明 下端部欠損 [SI-57]
15 鉄滓	長 残 4.0 幅 2.8 厚 1.7 重 残24.77g	小形の不定形滓。かなり緻密だが、やや重量感に欠ける。破面には径1～2mm程度の気孔がやや多い。全面に酸化土層が付着し、因の上端付近には酸化鉄分が集中して見られる。上面(左部)の中央部にはやや連続的な酸化鉄分の多い滓がまとまっていて、微細な凹凸が多い。メタル度なし。磁着度が35cmの磁に吊した標準磁石が2.5cmで反応)。	5B6/1 青灰色		不明 一端を欠く [SI-57]

第98表 SI-57 古墳時代終末期 出土遺物数一覧表

	鉢	盤・皿	蓋	高杯	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甌	大甌	土師土器	その他
土 口縁部	15				2	3			12				器種不明
胴 体部	有			脚注2					有			2	
底 部								8	2				
須 口縁部													
壺 体部													
甌 底 部													

粘板岩銅片1点、時期不明の鉄滓3点。
古墳前期の土師器少量と、平安時代の土師器少量と須恵器3片(益子産無台高足1片、三和産産長壺体部2片)が混入。

第5節 平安時代の竪穴建物跡

S1-02 (第84図、写真版3-4・21)

本建物跡は、調査区の北西部にあり、台地上の平坦面に位置する。他の遺構との重複はないが、北西コーナー付近は、プレハブ建物が建っていたために調査できていない。

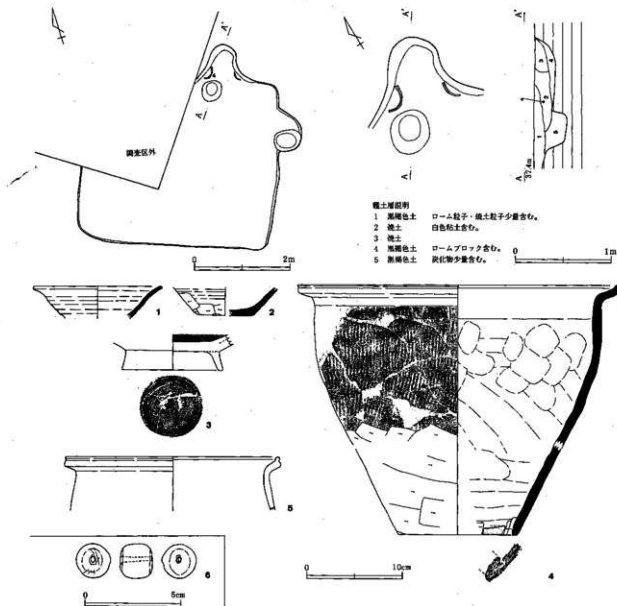
平面形は、確認された部分で東西4.2m、南北3.3mの隅丸方形を呈し、主軸方向はMN-17°-Eを示す。耕作による削平のため、壁はほとんど遺存していないが、ほぼ垂直に立ち上がっていたものと思われる。床面は全体にはほぼ平坦である。周溝、支柱穴は検出されなかった。東壁の一部が張りだしており、そこに径60cmのピットが検出されたが、本建物跡に係わるものかどうかは不明である。

竈は、北壁の中央東寄りに位置する。天井部、両袖等ほとんど残っていないため、規模や袖材は不明である。両袖の位置に、須恵器の甎が縦1/2ずつ倒立した状態で出土した。袖部の芯材か、または天井部の補強材に使用したものであろう。煙道は平面U字形で、A'の南40cm付近から40°程の傾きで立ち上がっている。燃焼部から煙道にかけては焼土が10~16cmの厚さで認められ、長期間使用したものと思われる。掘形は、北壁を幅134cm以上、奥行き81cm程掘り込んでいる。また、焚き口付近を径48cmの円形に掘り窪めており、断面は逆台形状で、床面から最深19cmである。

出土遺物 4は、同一個体の須恵器甎の胴部破片を、竈の両袖に1片ずつ当てている。甎の2片は直接接合しない。また、甎の底部破片は左袖付近から1片だけ出土している。この甎には明らかな二次焼成痕跡は見られないので、甎が機能していた時から補強材に使われていたのではなく、竈が廃絶するときに置かれたものかもしれない。

第99表 SI-02出土遺物

番号 器種	法差 (cm)	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 須恵器	口 復13.6	薄く、体部は外へ開きながら立ち上がり、口縁部は強く外反し、口唇部は丸味を持っている。体部内外面から口縁部内外面はロクロ轆で、外面のロクロ目は非常に強い。三和産産。	2.5Y7/3 淡黄色 内黒麻あり	やや粗い。白粒多 ・透明細砂。 やや軟質。	埋土中 口~体5/12周 「フク土」
2 坏 須恵器	底 復 6.0	薄く平底で、体部は外へ開きながら立ち上がる。外面のロクロ目非常に強い。内外面ロクロ轆で、底部外面は一方角削り、体部下端に手持ち角削り。三和産産。	5YR6/8 橙色	粗い。白粒・細粒 ・透明細砂多量。 硬質。二次焼成で 酸化する。	竈 底~体1/5周
3 高台付 土師器	高台 10.6	厚く重い。胴部は外へ開いてのびる。高台は高く「ハ」の字に開く。高台部外面はロクロ右回転の磨削り。回転北線一条の上に高台貼り付け。底部内面は黒色処理後磨き。	10YR7/3 にぶい黄橙 色	やや粗い。白・黒 ・透明細砂多量。 やや軟質。	埋土中 高台3/4周 底部全面 「フク土」
4 甎 須恵器	口 復34.0 底 復13.0 高 復27.0	やや厚く、胴部はゆるやかな丸味を持ち、口縁部は外反する。口唇部はつまみ上げられ、外面に凹線一条。口唇部内面の接線明確。胴部外面上半部は平行叩き目、下半部は磨削り。内面は下半磨削で後に上半に無文当具および指痕痕。口唇部内外面は横溝で、下部に穿孔後横溝削り。底部は多孔で、幅2.4cmの線状部を残してぐねく。三和産産。	2.5Y7/2 灰黄色 胴部上位に スス又は黒 色	粗い。白粒・白細 粒多量、半透明砂 少量。軟質。	竈両袖 口3/4周 底1/8周 「甎」 「甎左袖」
5 妻土 土師器	口 復22.8	薄く、胴部はゆるやかに立ち上がり、口縁部は強く外へ反し、口唇部はつまみ上げられ、外面に凹線が一条走る。胴部内外面磨削で、口唇部内外面横溝で。	7.5YR7/6 橙黄色	やや粗い。白・黒 ・透明細砂と赤細 粒がやや多い。 やや軟質。	埋土中 口1~3周 体一部 「フク土」
6 土玉 土師器	径 18mm 厚 17mm 重 5.71g	手づくね成形後、指で仕上げ。焼成前に一方から穿孔。	7.5YR8/3 淡黄橙色	緻密で混和材がほとんどない。 やや軟質。	埋土中 完形 「フク土」



第84図 八幡根遺跡 SI-02 遺構・遺物

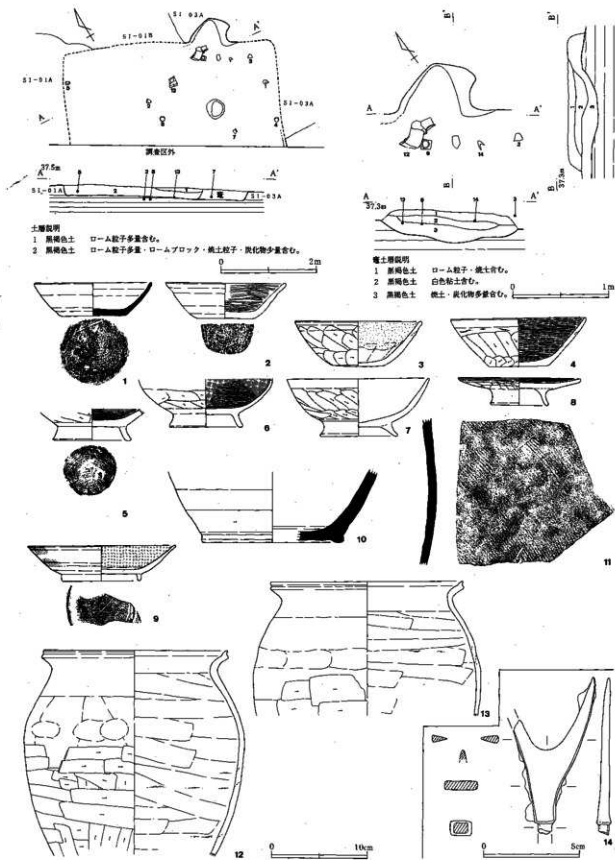
第100表 SI-02 平安時代 出土遺物数一覧表

	環・椀	壺・甕	甕	高坏	鉢	小形土器	壺・甕	小形壺	長壺	甕	大甕	焼粘土塊	その他
土	口縁部	4							3				
器	体部	有							有				
部	底部	平6	台3										
須	口縁部	3								7			
應	体部												不明
器	底部	平底1								1			

器種不明の須臾部は、産地も不明。その他の須臾部はすべて三和産産。甕の8片は同一個体。
古墳時代終末期の土師器やや多量と、焼粘土塊2点・土玉1点混入。

SI-03B (第85図、写真図版3-4・21-22・53)

本建物跡は、調査区の北西部の台地上の平坦面に位置する。SI-01A、SI-01B、SI-03Aより新しく、SI-01Aの東壁、SI-01Bの南東隅、SI-03Aの南西隅を切る。また、本建物跡の南半分は調査区外である。



第85図 八幡根遺跡 SI-03B 遺構・遺物

確認された部分では、東西4.5m、南北2.3m以上であり、平面形は方形を呈し、主軸方向はMN-25°-Eを示す。壁は確認面から22cm程遺存しており、西壁で75°、北壁で55°程の傾きで立ち上がる。周溝は、検出されなかった。床面はほぼ平坦である。柱穴は1本検出され、径41cm、深さ45cmである。

竈は、北壁の東寄りに位置する。残存状況は悪く、細形を確認するにとどまる。掘形は、北壁を幅144cm、奥行き52cmにわたり平面舟首形に掘り込んでおり、焼成部中央から20°程の傾きで立ち上がっている。

埴土は、2層に分層される。概ねローム粒子を多量、径10mm大のロームブロック、焼土粒子・炭化粒子を少量含む黒褐色土である。

出土遺物 須恵器が減る時期の組み合わせである。1の坏は、テフラ起源らしい白色粒子が胎土中に多い点は三和窯跡群産の須恵器と同様で、糸で切り離すものである。灯明具に使った可能性もある。土師器坏碗皿類は、3が灯明具である。外面調整に手持ち篋削りを多用する3・4・6~8と、糸切り離して篋削りを多用しない2・5がある。灰釉陶器碗(9)は斎藤孝正氏の御教示によると狭投産の黒性90号窯式3型式である。貯蔵用器種は須恵器が多く、益子産産の可能性のある壺(10)と、胎土に白色針状物を含む他地域産の大甕(11)がある。土師器甕のうち12は焼成で金色に発色する黒雲母を含むが、12・13ともに白雲母を含まない。器形は常盤型甕に近く、白雲母を含むものとは製作地域が少し異なる可能性がある。

第101表 SI-03B出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成 度	出土状況 残存状況 注記
1 坏 須恵器	□底 高 12.4 6.8 3.5	薄く平底で、体部は丸味を持って立ち上がる。口縁部はわずかに内彎する。内部内外口ロ口無で、底部外面回転糸切りで少し上底発色。糸切り口ロ口左回転。土師器の可能性もあり。内面の一部が暗灰色で、灯明具に使った可能性もある。三和窯産の可能性あり。	2.5Y8/1 灰白色	粗い。灰色砂と黒色透明磁砂。白濁粒多。軟質。	床底 底全面 体~口/2 周 [3]
2 坏 土師器	□底 高 12.8 6.0 3.8	やや厚く平底で、体部は丸味を持って立ち上がり、口唇部は外反する。糸切り口ロ口右回転。内外口ロ口無で、底部回転糸切り。体部下端は磨減して、手持ち篋削りの有無は不詳。内面は底部多方向・体部横方向向磨き。現状では黒色処理なし。	10YR7/3 淡い黄褐色	やや緻密で黒磁砂・白磁砂若干。 軟質。	床底 全面 体~口/3 周 [7]
3 坏 土師器	□底 高 13.4 5.4 4.9	やや厚く、丸底気味の平底で、体部はやや丸味を持って立ち上がる。口唇部は外面がごく弱く外反する。口縁部外面に浅い凹線あり。全面の1/4の範囲で、体部内外面に油塗付着。底部~体部外面重削り。内面~口縁部外面横削り。底部一方手持ち篋削り。	10YR8/3 淡黄色 黒濁あり	粗い。黒・白・透明磁砂多で赤磁粒若干。軟質。	床土16cm 底全面 体~口/3 周 [12]
4 坏 土師器	□底 高 14.4 6.4 5.2	やや厚く平底で、体部下端は丸味を持ち、体部中央から口縁部にかき集まる的に内彎する。底部一方、体部外面横削り。底部~体部内面横削り。口縁部内外面横削り。内面磨き(底一方、体横)後黒色処理。	2.5Y8/3 淡黄色 黒濁あり	やや粗い。白色粒子多。黒磁粒やや多。軟質。	床底 底全面 体~口/3 周 [2]
5 高台付 坏 土師器	高台 8.2	高台はやや外反しながら開く。高台底面は丸味を持つ。底部回転糸切り後外面横削り。高台貼り付け。内面底は一方、体部横方向向磨きの黒色処理。	10YR8/4 淡黄色	やや粗い。黒・白砂多。透明磁砂少量。やや硬質。	床土11cm 高台全面 [8]
6 高台付 坏 土師器	高台 7.8	底部はやや厚く、高台はやや外へ「八」の字形に開く。底部~高台は口ロ口無で。内面は底一方、体部横方向向磨き後黒色処理。底面は口ロ口右回転後削り後高台貼り付け。	10YR7/4 淡い黄褐色 黒濁あり	やや粗い。黒磁砂多量。灰色・透明磁砂少量。軟質。	甕底土14cm 高台全面 体~一部 [2]
7 高台付 坏 土師器	□底 高台 15.0 8.1 6.0	高台は高く「八」の字に開く。体部は丸味を持っており、口縁部は弱く内彎する。体部外面横削り。内面底で、高台貼り付け後外周と内面底すべて面横削り。	2.5Y8/2 灰白色	やや粗い。黒・透明磁砂多。軟質。	床土8cm 高台全面 口~口/3 周 [1]
8 高台付 坏 土師器	□底 高台 13.0 6.2 2.9	やや厚く平底で、高台は「八」の字形に開き、下面は丸味を持つ。体部は口ロ口無で、口中央部一方、外周横方向向磨き。底部外面高台貼り付けの口ロ口無で。内面黒色処理。	2.5Y8/3 淡黄色 口縁外面に 炭素痕着が 及ぶ	やや緻密で黒磁砂多。白粒・磁粒と透明磁砂やや多。やや硬質。	床底 高台全面 口5/12周 [8]
9 碗 灰釉陶 器	□底 高台 15.6 8.3 3.7	薄く、高台は直立して外面に弱く丸味を持つ。口縁部はごくわずかに外反する。底部外面口ロ口右回転篋削り後、高台貼り付け。体部内外面に釉を刷毛塗り。焼成前の発色「×」が底面にあり。高台下端に重ね焼きの輪が付着。	10Y7/1 灰白色	緻密で白砂若干。硬質。	甕土中、甕底/12周 口/8周 「フク土」と「壺」が 接合

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
10 須恵器	高台径15.0	厚く、胴部は直線的に立ち上がる。胴部内外面はロクロ織で。胴部下位に回転亀裂り後、高台起り付け。蓋子蓋座?	2.5Y6/1 黄灰色	やや粗い。白濁・白砂・半透明砂少量。やや軟質。	概 高台~胴下 半1/6周 「職」
11 大塚 須恵器		やや厚く、胴部は丸味を持つ。胴部外面は木目平行の平叩き。内面は丁寧な織りで平滑。外面全面に黒色の自然釉。雫地域産。	5Y6/1灰色 断面に ぶい 黄褐色	緻密で白砂多、白色針状物・透明砂若干。硬質。	福土中 胴一部 「フク土」
12 妻土師器	口 19.4 大 23.2	薄く、胴部はゆるやかな弧を描きながら立ち、最大径を肩に持ち、肩は少々張り、口縁部は強く外反する。口唇部はつまみ上げられ、外面に凹線を持つ。口縁部内外面織織で、胴部内面織織で、輪積りあり。外面胴部は指頭印後、下半部裏割り。	7.5YR6/6 褐色	粗い。灰色砂多。黒・透明細砂・白粒・金色の黒雲母片少。やや硬質。	福土中 胴~口5/6 周 「1」「3」
13 妻土師器	口 復20.2 大 復24.0	薄く、胴部はゆるやかな弧を描き、最大径は上位に持つ。胴部は丸く外反し、口唇部で外面に凹線を持つつまみ上げる。口縁部内外面織織で、胴部内面織織で、胴部上半外面指頭印後後に織で、胴部下半裏割り。	10YR7/4 にぶい 黄褐色	粗い。黒・透明細砂と白粒多量。やや硬質。	床直 胴中央~口 1/2周 「5」
14 鐵製品	鎌身長 7.5 厚 0.4 胴部11×8mm 茎部 8×8mm	雁又式の鉄鎌で、内側に刃部を持ち、先端が尖る。茎の断面は隅丸方形。胴部は上下左右の四面に段をつくり出す。茎部には木質は残っていない。残存重量21.40g。			床土17cm 鎌身先端と 茎部欠 「3」

第102表 SI-03B 平安時代 出土遺物数一覧表

	杯・橋	壺・皿	蓋	高杯	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甌	大甌	焼土	その他
土 口縁部	16								11				
器 体部	有								有				
部 底部	平6 台3	台1											
須 口縁部	5												
器 体部											1		
部 底部	平底1						台1						

灰釉陶器の碗1点と小片1片、鉄鎌1点。須恵器杯は同一個体で、圓の1。
 古墳時代終末期の土師器が若干混入。
 SI-03Aが03Bか不明の遺物に、平安時代の土師器杯少量・須恵器2片・灰釉陶器2片・平安時代(?)の鐵油(?)炉壁小片1点あり。

SI-04A (第86~88図、写真図版4・22・52~53・55)

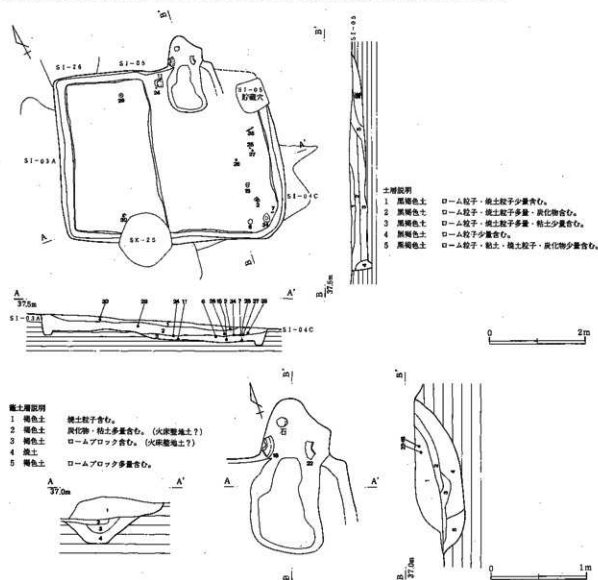
本建物跡は、調査区北西部の、台地上の平坦面に位置する。SI-03A、SI-05よりも新しく、SI-03Aの北東部、SI-05の南西部を切っている。また、SI-04C、SK-25とも重複するが、新旧関係は不明である。SI-04Aの床面をはがさないでSK-25を確認していることから、SK-25のほうが新しいかもしれない。当初はSI-04A(東半分)とSI-04B(西半分=欠番)が別の建物と考えたが、同一の建物と判明した。

平面形は、東西4.7m、南北3.8mの北東コーナーが鈍角な台形を呈し、主軸方向はMN-26°-Eを示す。壁は確認面から東壁で26cm程、その他の壁で35cm程遺存しており、東壁で70°程、その他の壁で83°程の傾きで垂直直みに立ち上がる。周溝は、甕の両脇と北東コーナーを除く壁際に検出された。幅は概ね13~32cm、深さは8~10cm程で、断面は扇形を呈する。床面は西半分が高く、東半分が低い。その比高差は最大28cmである。これは、SI-04A(東半分)とSI-04B(西半分=欠番)が別の建物と考えて、掘りすぎた可能性もある。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

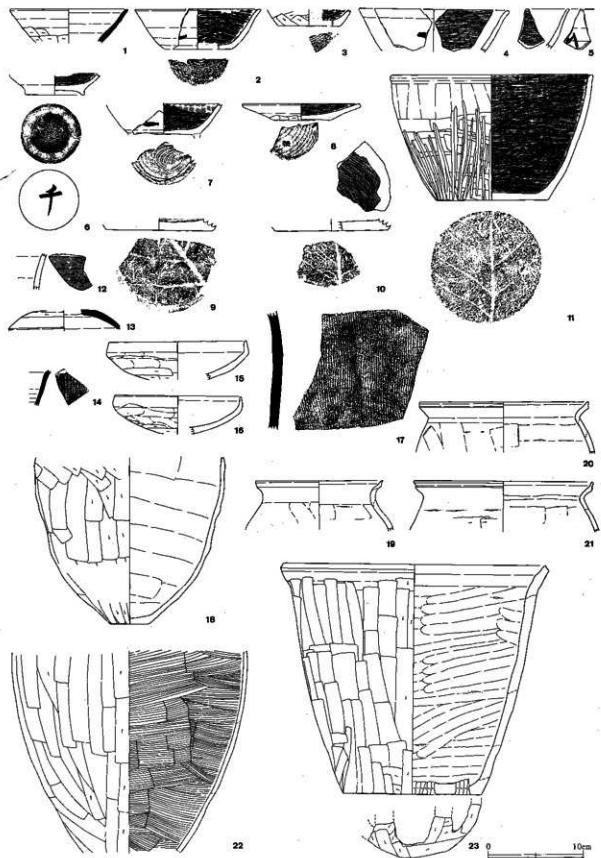
竈は、北壁の中央部やや東寄りに位置する。残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。掘形は、北壁を幅75cm、奥行き60cm程掘り込んでいる。また、床を南北102cm、東西78cmの不整な隅丸方形に掘り窪めており、断面は掃帚状で床面から最深24cmである。阿袖の付け根にあたる部分から甕の破片が出土したが、袖の芯材として使用されたものかもしれない。また、燃焼部中央から煙道にかけて焼土が最深22cmも認められ、長期にわたって使用されたものと思われる。埋土は、5層に分層された。概ねローム粒子・焼土粒子の多い黒褐色土である。いわゆるレンズ状堆積をしており、自然堆積の可能性がある。

出土遺物 墨書土器が多い。土師器高台付椀(6)の底面の墨書と、黒色処理の土師製の紡錘車(29)の刻書にはともに「千」の文字が見られる。須恵器を模倣した厚手の土師器がみられ、9・10・11の鉢は底面に木炭痕を残す。同じ胎土の製品で、23の甌とともに八幡根遺跡で生産された土師器の可能性ある(亀田1996)。11の鉢は、接合する破片のうち口縁部5/12周分が古墳時代終末期の堅穴建物跡SI-50からも出土した。金属に係わる遺物には、比較的目の細かい砥石と刀子があり、石皿状の大きな砥石も1点ある(34)。この大形砥石は酸化鉄分がかなり付着しているが、金床石と考えるには石質が柔らかく、被熱や剥離の痕が見られない。他に、材質不詳の金属製品?(30)がある。

埋土中からは古墳時代終末期の土師器破片が多く出ている。この建物と重複するSI-03A(古墳終末期)やSI-04C(時期不明)の遺物かもしれない。土師器坏(15・16)や粘板岩製の粗雑な玉(26・27)も古墳時代の遺物と考えられる。26・27の類例は、SI-26とSI-53にある。この他に、古墳時代中期後葉の須恵器もある(13・14)。14は断面赤味を帯びる丁寧な作りの製品で、搬入品だろう。13の坏蓋はTK-23型式に相当する形状だが、14よりも胎土は少し粗い。また、図示していないが、古墳時代前期の土師器も2片みられた。



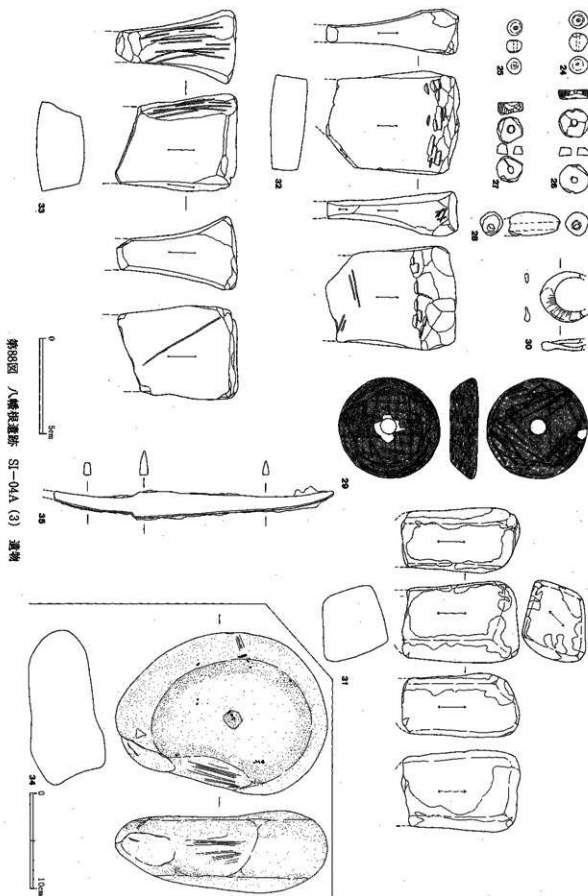
第86図 八幡根遺跡 SI-04A (1) 遺構



第87図 八幡根遺跡 SI-04A (2) 遺物

第103表 SI-04A出土遺物

番号 器種 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 須臾器	口 復12.5	薄く、体部は直線的に開き、口縁部はごくわずかに外反する。ロクロ 撫で後体部下端に幅広い手持ち彫削り。三和盆蓋。	10YR8/3 浅黄褐色	やや緻密で白粒・ 白細粒やや多い。 軟質で酸化気味。	壺土中 口一/体部 1/4周 [SI-04A]
2 坏 土師器	口 復13.4 底 高 7.0 底 高 4.3	薄く平底で、体部は丸味を持ちながら内彎気味に立ち上がり、口縁部 でやや外反する。外面ロクロ撫で、内面磨き後黒色処理。底部回転 糸切り施し後無調整。外面体部に墨書あり。	10YR7/3 にぶい黄褐色	やや緻密で透明砂 と白細粒若干、黒 緑砂少量。硬質。	床土9cm 底5/12周 口1/4周 [4]
3 坏 土師器	底 復 7.6	底部は厚く平底で、体部は薄く丸味を持ちながら立ち上がる。底部外面 回転糸切り、体部外面ロクロ撫で後手持ち彫削り。底部一帯内面 磨き後黒色処理。	10YR6/3 にぶい黄褐色	緻密で黒・透明 細砂少量。硬質。	壺土中 底一帯/9 周[SI-04B]
4 坏 土師器	口 復16.0	薄く、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部部で外反する。外面ロクロ 撫で、内面磨き後黒色処理。外面体部に墨書あり。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白細粒・透 明細砂ごく少量。 硬質。	壺土中 口1/8周 [SI-04A]
5 坏 土師器		薄く下半に丸味を持ち、口唇部で外反する。体部外面に墨書「山」か、 体部外面ロクロ撫で、内面磨き後黒色処理。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で黒細砂少量、 やや軟質。	壺土中 体一/口 1/12周未満 [SI-04B]
6 高台付 坏土師器	底 6.4	薄く、体部は開き気味に立ち上がる。高台の基部の發輪は不明瞭。ロク ロ右回転糸切り後施し、底面は高台貼り付け。外面体部ロクロ 撫で、内面に直文方向の磨き後黒色処理。外面底部に墨書「干」。	10YR8/4 浅黄褐色	緻密。やや軟質。 体部外面にスス付 着。	床土10cm 底部完全 [1]
7 高台付 坏土師器	底 7.0	薄く、体部は開き気味に立ち上がる。高台部は欠損している。ロク ロ右回転糸切り後高台貼り付け。内面底部一方向、体部横方向の 磨き後に内面黒色処理。外面体部に墨書あり。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細粒・透 明細砂少量。 硬質。	床土13cm 底一帯/3 周 [3]
8 钵 土師器	口 復12.6 底 復 1.8 高 1.8	やや厚く平底で、体部は直線的に開く。底部外面中央部が窪む。底部 外面回転糸切り後無調整。体部外面ロクロ撫で、糸切り時のロクロは 右回転。外面体部下端は成形時に突出していた部分を手持ち彫削り、 内面は磨き後黒色処理。	7.5YR6/6 褐色	やや緻密で白細粒 やや多。黒・透明 細砂少量。硬質。	壺土中 底1/4周 口1/6周 [SI-04]
9 鉢 土師器	底 復11.4	厚く平底。成形にロクロを使用しない。底部外面は木葉痕の後に軽 い。内面は円周方向磨き後黒色処理。八種視東遼産の可能性あり。	7.5YR6/4 にぶい褐色	粗い。白細粒・灰 色砂・透明細砂多 量。黒細砂少量。 硬質。	壺土中 底1/4周 [SI-04]
10 鉢 土師器	底 復12.0	やや厚く平底。成形にロクロを使用しない。底部外面に木葉痕が二重 に付く。胴部外面撫でまたは磨り。内面は磨き後黒色処理。八種視 東遼産の可能性あり。	10YR6/4 にぶい黄褐色	やや粗い。透明細 砂多。白・黒・灰 色砂少量。硬質。	壺土中 底1/3周 [SI-04B]
11 鉢 土師器	口 復21.6 底 11.8 高 13.3	やや厚く平底で、胴部は直線的に開き気味に立ち上がる。成形にロク ロを使用しない。口縁部外面に凹線あり。外面底部に木葉痕の後、外 周に軽い磨き。外面胴部上位裏撫で、胴部中位以下裏削り後、磨 き。内面磨き後黒色処理。八種視東遼産の可能性あり。	10YR6/4 にぶい黄褐色	粗い。白・灰色・ 半透明砂やや多。 硬質。	SI-50出土の 破片と接合 の24/5周 底全周 [10]
12 瓶 灰胎陶器	頸径約 7.0	頸部は外反して長く伸びる。外面に薄く輪飾。内外面ロクロ撫で。 灰胎陶器の中では質感に近い。	5Y7/1 灰白色	緻密で黒細砂ごく 少量。硬質。	壺土中 破片 [SI-04B]
13 坏 須臾器		薄く、ゆるやかに丸味をもつ。天井と口縁部の境に明瞭な凸線をつ くる。天井部の2/3以上を回転彫削り。自然色が灰白色に汚く滲けて天 井外面に付く。古墳時代中期後葉の遺物が混入。	5Y5/1灰色 断面も灰色 で6Y5/1	やや粗い。白砂・ 緑砂若干。硬質。	壺土中 天井1/6周 [SI-04B]
14 魂 須臾器		やや薄く、口縁部下端に段を持つ。胴部外面に幅1.2cmで高さ5本の帯 で唇部に向かって右方向に波状文を上下2段に施す。波状文は幅程が 大きく波長が短い。古墳時代中期後葉の遺物が混入。	2.5Y5/1 灰色 7.5YR5/1 断面にぶい 褐色	緻密で白砂ごく少 量。軟質。	壺土中 小破片 [SI-04B]
15 坏 土師器	口 14.4 高 残 4.2	薄く丸底で、体部は開き気味に立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁 部内面の輪飾は無い。外面体部下位に一方向彫削り。内面全面と外面 口縁部に横撫でを施す。古墳時代終末期の遺物が混入。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒細砂やや 多。軟質。1a類。	床土6cm 2/3周 [5]
16 坏 土師器	口 復13.4 底 復15.6 高 残 4.1	やや厚く丸底で、口縁部は短く内傾する。体部外面縁々撫での後底部 外面一方向彫削り。内面～口縁部外面は横撫で後に磨き上げ。古墳 時代終末期の遺物が混入。	2.5Y8/3 淡黄色 黒粒あり	緻密で白細粒と黒 ・透明細砂ごく少 量。軟質。1a類。	壺土中 口1/5周 [SI-04]



第88区 人権投蓋跡 SI-04A (3) 遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	粘 土 土 成	出土状況 残存状況 注記
17 須石	大 径50 以上	胴部はゆるやかな丸味を持つ。外面は叩き板の木目に平行の叩き目。内面無文当量後、撫でで平滑。外面に黒色の自然釉が薄く着く。	2.5Y5/1 褐灰色	緻密で白粉・黒砂少量。硬質。	甕土中 胴部1/4周 「フタ土」
18 甕土師器	底 径 4.0	薄く平底で、胴部は内彎気味。外面胴部磨削り、底部一方方向磨削り、内面胴部横撫で。	5YR5/4 にぶい赤褐色	やや緻密で白粉粒・黒細粒やや多。赤粒・透明砂少量。	23の瓶と一 緒に出土？ 蓋1/3周 胴部4周 「2」
19 甕土師器	口 径13.6	薄く、胴部はやや強く外反し、口唇部はつまみ出すように弱く外反する。胴部は外面撫で、内面横撫で、口縁部～胴部横撫で。	10YR5/4 にぶい黄褐色黒斑あり	やや粗い。白粒・細粒多。黒・透明細砂少量。硬質。	甕土中 口1/6周 「SI-04B」
20 甕土師器	口 径18.0	胴部は短く「く」の字に折れて外傾し、口縁部は外面が凹縁をなして厚く立ち上がる。口縁部内外面横撫で、胴部外面横撫でのち撫で、内面横撫で。	7.5YR6/4 にぶい橙色	やや粗い。白雲母細片・黒細砂やや多。半透明砂少。硬質。	甕土中 口1/4周 「SI-04B」
21 甕土師器	口 径19.0	薄く、口縁部は外反し、外面胴部に凹縁一条を巡らして、口唇部をつまみ上げている。口縁部内外面に横撫あり。外面口縁部～胴部は横撫で、胴部横撫削り、内面胴部～胴部に撫で。	5YR6/6 橙色	緻密で白粉粒多、黒細砂少。硬質。	甕土中 口1/6周 「SI-04A」
22 甕土師器		薄く、胴部はわずかに丸味を持ち、閉き気味に立ち上がる。外面胴部磨削り、内面胴部入念な刷毛目。	7.5YR7/4 にぶい橙色	粗い。白・灰・赤・透明砂・白粉粒多黒細砂やや多。硬質。	甕底上40cm 胴一底1/4周 「1」
23 甕土師器	口 径28.0 底 径14.8 高 24.4	やや厚く平底で、胴部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。外面口縁部に横撫あり。ロクロは使用しない。外面胴部磨削り、外面口縁部横撫で、内面横撫で、外底面に不定方向磨削り。短長い楕円形を中央に1孔。その両側に半円形を各1孔。蓋で穿孔。内面に黒色物が薄く付着。八幡様東遼斎館の可能性が高い。	7.5YR5/6 橙色 黒斑あり	やや粗い。赤細粒・赤粒多量。白・黒・透明細砂やや多量。硬質。	甕底上40cm 口一底1/3周 「2」
24 玉土製品	径 9×10mm 厚 10mm 重 0.71g	丁寧に丸く作り、焼成前に穿孔。片面の孔付近は焼成後に破損して剥離している。	5YR7/6 橙色	緻密で泥和材は目立たない。やや軟質。	床土9cm ほぼ定形 「11」
25 玉土製品	径7.7×8.5mm 厚 6.7mm 重 0.45g	丸味を持ち、丁寧に作り。焼成前に片面から穿孔。全面後撫でツヤを持つ。	1N1.5/0 黒色	漆塗のため不明。	床付近 定形 「8」
26 玉 粉板岩	径 15×16mm 厚 4.3mm 重 1.32g	上下面は寛帯の刷磨面。側面の一部に形割の刷磨面を残し、他は横方向の粗い研磨面。側面のみを一方に粗く研磨。孔は左面の面から穿孔し、初径4.0mm、終径3.5mm。		軟質で磨き面が粘り、磨削が容易だった。	床土18cm 定形 「6」
27 玉 粉板岩	径 14mm 厚 0.6mm 重 1.52g	未製品で、削片の側面の一部だけを一方面に粗く研磨。側面の一部に形割刷磨面跡あり。孔初径4.1mm、終径3.5mm。		磨削が容易だった。軟質で磨き面が粘り、磨削が容易だった。	床土8cm 定形 「7」
28 土 土製品	径 12.5mm 径 27.5mm 重 3.92g	棒に粘土を巻き付けて成形。孔径は4.0mmで均一。外面は削りまたは撫で調整。焼成後に磨減しているらしい。	7.5YR6/4 にぶい橙色	やや粗い。白粉粒多、黒・透明細砂少量。やや硬質。	不詳 下部欠損 「SI-04A」
29 紡錘 土師器	径 5.3cm 厚 1.5cm 厚 0.85cm 重 43.06g	ロクロは使用しない。焼成前に穿孔。全面手持ち磨削り成形後、孔内を除いて念に更磨す。全面黒色処理。焼成後に鋭い工具で磨削し、上面は「千」、下面は「+」または「千」と、「千」(?)が各々所見られる。下面の孔の周囲が焼成後に剥離している。	10YR5/2 灰青灰色 表面は黒色	緻密で白粉粒やや多。硬質。	床土18cm 定形 「12」
30 不明製品	径 2.7cm 径 7.3cm 厚 5.5mm 重 4.03g	材質不明。金属製品の部分のような質感で還元色。柔らかい状態で弧状に曲げて作られたらしく、内側にシワが多く見える。両面磨りも極も強く、厚さも薄くなり、柔らかい時点で引きちぎったような末端をなす。磁石には反応しない。	10BG5/1 青灰色		床土22cm 成形の破損はない 「13」
31 磁石	長 残6.3 幅 3.3 重 残156g	目の細かい磁石。磁面は5面あり、1面は破面。断面は台形を呈し、各磁面は残の部分だけがはがれ落ちている。	10Y6/1 灰色	緻密質の石英安山岩。硬質。	不詳 下部欠損 「SI-04A」
32 磁石	長 残6.8 幅 5.5 重 106g	扁平な磁石で、長軸方向4面を磁面とし、上端面と、下側の破面のうち1面も少し使用している。上層部付近の各磁面には成形時に刃物で切削加工した痕を残す。	7.5Y5/2 灰白色	緻密で均質な磁質岩。軟質。	不詳 下部欠損 「SI-04A」
33 磁石	長 残6.5 幅 6.2 重 残122g	断面方形を呈する磁石で、上面以外の4面を使用。下層は使用のため厚く残り欠損。磁面は4面あり1個面は一部分だけを使用して他の部分は成形時の切削加工痕が連続的に残る。	7.5Y8/2 灰白色	緻密で均質な緑色磁質岩。軟質。	不詳 下部欠損 「SI-04A」
34 磁石	長 残 22.5 幅 17.5 重 4000g	楕円形で、上下面の中央部が強く窪む。上下両面と側面をすべて使用したらしい。図示した面に2～3mm程度の暗赤褐色の鉄分が散在に付着し、裏面では外周部にわずかに見られる。薄く染められた刷磨面・刷磨面・敲打痕は見られなく、石材もやや軟質なので金床石とは考えにくい。	2.5Y7/4 淡黄色	多孔質安山岩。	床土15cm 定形 「2」

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 焼 土 成	出土状況 残存状況 注記
35 刀子 鉄製品	長 残14.8 幅 1.4 重 17.78g	平棧平造で、刃部が細長くのび、先端が刃側へやや彎曲気味。均等両 面で莖はゆるくカーブし、莖の先端は欠損。断面は台形で幅8mm×厚 3-4mm。			床上17cm 莖先端欠損 [9]

第104表 SI-04A 平安時代 出土遺物数一覧表

	壺・碗	盤・皿	蓋	高 杯	鉢	小形土器	甕・瓶	小形甕	長 壺	甌	大 甕	焼粘土土	その他
土 口縁部	16	1			1				17				
鉢 体部	有								有				
甌 底部	平7 台2	平底1			4				8	3			
甕 口縁部	3												
甕 体部									1		1		
甌 底部													

土鍔1・紡錘車1・碓石4・鉄刀子1・不明金属製品1・灰釉陶器類数1。
 図示していない須恵器は三和窯産?の長壺体部1片と産地不明の坏口縁1片。
 古墳時代前～終末期の土師器と須恵器少量、土玉・漆塗土玉各1点と薄石平玉が2点混入。
 SI-04A・B・Cの区別が不明の遺物に、古墳時代終末期の土師器多数と焼粘土土6点、平安時代の土師器・須恵器若干あり。

SI-12 (第89図、写真図版6)

本建物跡は、調査区の北東部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-11A、SI-13よりも新しく、SI-11Aの東壁南部、SI-13の北西コーナーを切っている。

平面形は東西3.6m、南北3.8mで、北壁の一部が建物内に湾曲し、南西コーナーが壁外に張り出した不整な方形を呈している。主軸方向はMN-17'Eを示す。壁は確認面から北壁・西壁で11cm程、南壁・東壁で7cm程とあまり遺存しておらず、立ち上がりも確認しにくい、40-45°程の傾きであったと思われる。周溝は、検出されなかった。床面は西側2/3が高く、東側1/3が低くなっており、比高差20cmである。柱穴または土坑は、3箇所検出された(P1~P3)。P1は径68cm、深さ37cmである。P2は径34cm、床面からの深さ36cmであり、南壁中央に位置することから、入口に係わるピットと思われる。P3は長さ68cm、短径38cmの平面楕円形を呈し、床面からの深さ16cmである。北西コーナーに位置することから、貯蔵穴とも考えられるが、貯蔵穴としては浅く、遺物も出ていないのでその可能性は低いと思われる。

竈は、北壁中央やや東寄りに位置する。残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。掘形は、北壁を幅48cm、奥行き52cmの平面直角三角形に掘り込んでおり、A'の南14cmの所から30°程の傾きで立ち上がっている。

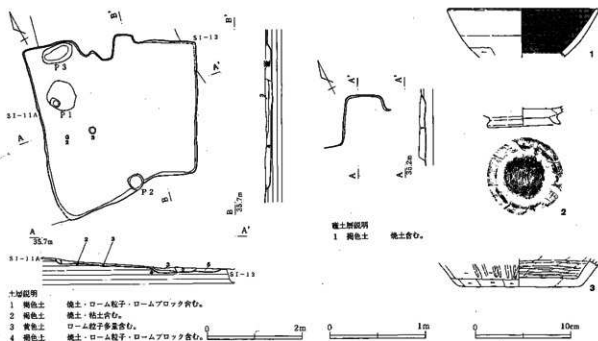
埋土は、5層に分層される。概ねローム粒子、ロームブロック、焼土を含む褐色土である。

出土遺物 量は少ない。1は体部下端に手持ち箕削りを行う点や、白細粒の多い胎土に、三和窯産の須恵器と共通する地城色がみられる。3は隣接する八幡根東遺跡の製品と考えられる。須恵器鉢を模倣した器形で、器壁が厚く、外面も磨く特徴的なものである。

第105表 SI-12 平安時代 出土遺物数一覧表

	壺・杯	盤・皿	蓋	高 杯	鉢	小形土器	甕・瓶	小形甕	長 壺	甌	大 甕	焼粘土土	その他
土 口縁部	4									有			
鉢 体部													
甌 底部	平3 台1				1								
甕 口縁部													
甕 体部								瓶1					
甌 底部	平底1												

須恵器体部1片は益子窯産?、須恵器坏底1片は三和窯産。
 近世陶器体部破片1点混入。



第89図 八幡根遺跡 SI-12 遺構・遺物

第106表 SI-12出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 土成	出土状況 残存状況 注記
1 輪 土師器	口 径16.0	やや薄く、体部はゆるやかに内彎する。体部内面磨き後黒色処理。体部外面ロクロ撫で、下縁部は手持ち磨削り。	10YR6/6 明黄褐色	やや粗い。白細粒 透明細砂やや多。 赤粒少量。 やや軟質。	底面～口1/9 周「縦」
2 高台付 輪 土師器	高台 7.8	厚く平底。高台は低く、外面が外へ強く開く。底面は糸切り磨き後、高台貼り付け、ロクロ撫で。糸切りは回転糸切りと思われるが、静止して手で糸をまわす糸切りの可能性も残る。内面ロクロ撫で。	10YR6/3 浅黄褐色	やや緻密で透明砂 多量。白細粒・黒 細砂少量。 やや軟質。	底付近 底全周 「1」
3 鉢 土師器	底 13.2	厚く平底で、外へ開く。ロクロ使用度は見られない。外面底面は中央に緩な多方向磨削り後、外面に円周方向の磨削り。胴部外面は手持ち磨削り後、粗い縦磨き。内面は斜め撫で後粗い横磨きで、黒色処理は見られない。八幡根東遺跡産の可能性あり。	7.5YR7/4 にぶい褐色	やや緻密で透明砂 多量。白細粒・黒 細砂少量。 やや軟質。	底付近 底全周 「2」

SI-18 (第90図、写真図版8・31)

本建物跡は、調査区の中央部東寄りにあり、台地上のゆるやかな東斜面に位置する。重複関係としては、SI-28よりも新しく、SI-28の北東コーナーを切っている。

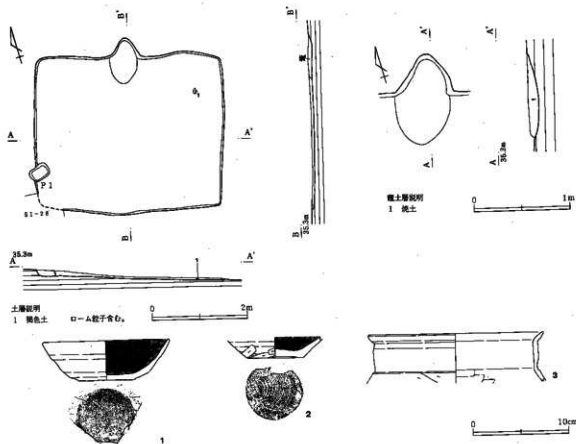
平面形は東西4.0m、南北3.5mの東西に長い方形を呈し、主軸方向はMN-16°-Eを示す。壁は確認面から西壁で12cm程、南壁で4cm程、東壁で2cm程とほとんど消存しておらず、立ち上がりも西壁で65°程の傾きを確認するほかは、ほとんど確認できない。周溝は、検出されなかった。床面は西壁際がもっとも高く、東壁際に向かってゆるやかに傾斜しており、比高差18cmである。柱穴は1本検出された(P1)。東西44cm、南北32cmの平面隅丸方形で、深さ25cmである。貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北壁ほぼ中央に位置する。残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。掘形は、北壁を幅61cm、奥行き39cmの平面舟首形に掘り込んでおり、さらに北壁と床面を東西59cm、南北90cmの平面楕円形に掘り

窪めている。その断面は皿状で、床面から最深6cmである。煙道床面は、燃焼部中央から12'程の傾きでゆるやかに立ち上がっており、燃焼部から煙道にかけて、焼土が最深11cmの厚さで堆積していた。

埋土は1層で、ローム粒子を含む褐色土である。

出土遺物 平安時代と古墳時代終末期の遺物がともに少量ずつ出土している。床面付近および竈から出土している1~3の遺物から見て、平安時代の遺構であると判断した。土師器坏(1・2)は、回転糸切り難し後に底面外周を手持ち寛削りする。2は体部下端にもやはり手持ち寛削りを施すが、1には見られない。3は、頸部が明瞭なコの字形になり、破片としては小さいが、竈から出土していることを考えると、この建物に遺棄された遺物の可能性もある。



第90図 八幡根遺跡 SI-18 遺構・遺物

第107表 SI-18出土遺物

番号種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 土質	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 径13.5 底 径5.9 高 4.2	ロクロ成形。平底で、回転糸切り難し時のロクロ右回転。体部下端に腰を持つ。底面外周に約1cm幅の手持ち寛削り。内面は底部一方向、体部横方向の磨きの後、黒色処理。	7.5YR/4 におい褐色 黒斑あり	緻密で赤・白細粒と黒・透明細粒が少量。やや硬質。	床付近 底7/12周 口1/6周 「甕」
2 坏 土師器	底 5.9	底部はやや厚く、底部外面の中央部が糸切り時に重む。回転糸切り難しロクロ造りで、外面体部下端と底面外周に手持ち寛削り。内面は底部一方向、体部横方向の磨きの後、黒色処理。	5YR6/6 褐色	やや粗い。白細粒多量、赤粒・細粒少量。やや軟質。	竈 底全周 「甕」
3 甕 土師器	口 径18.6	厚く、頸部はゆるやかな「コ」の字に外反する。胴部は外面寛削り、内面磨き。口縁部~頸部内外面磨き。	2.5YR6/6 褐色	緻密で黒細砂や多量、透明細粒、白細粒やや少量。硬質。	竈 口~胴1/6 周 「甕」

第108表 SI-18 平安時代 出土遺物数一覧表

	坏・碗	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形埴	長壺	甌	大甌	焼土片	その他
土口縁部	10								3				
胴体部	有								有				
器底部					1								
須口縁部	2												
胴体部													
器底部													

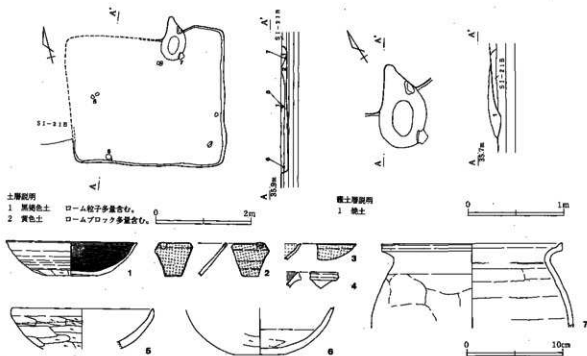
須磨器坏口縁は2片とも三和家産。
古墳時代前期と終末期の土器器や少量混入。

SI-20A (第91図、写真図版8・31)

本建物跡は、調査区の中央部北寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-21Bよりも新しく、SI-21Bの南側を切っている。

平面形は東西3.4m、南北3.0mの東西に長い方形を呈し、その北壁は、段をもって内側に平行移動した形になっている。主軸方向はMN-12° - Eを示す。壁は確認面から南壁で14cm程、北壁で11cm程遺存しており、その立ち上がりは南壁で60°程、北壁で40°程の傾きである。周溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北壁東寄りに位置する。残存状況は悪く、掘形を確認するとどまる。掘形は、北壁を幅45cm、奥行き37cmの平面漏斗状に掘り込んでおり、さらに北壁と床面を東西50cm、南北68cm程の平面楕円形に掘り窪めている。その断面は皿状で、床面から最深4cmである。煙道床面は、焼焼部中央から35°程の傾きでゆるやかに立ち上がり、A'の南59cmの所からは5°程とさらにゆるやかに立ち上がっている。焼焼部から煙道にかけて、焼土が最深12cmの厚さで堆積していた。また、焼焼部奥に石が出土したが、支脚かどうかは不明である。



第91図 八幡根遺跡 SI-20A 遺構・遺物

埋土は2層に分層され、床面直上はロームブロック主体の黄色土、上層はローム粒子を多量に含む黒褐色土である。

出土遺物 7はいわゆる常総型または下野型の形状で、胎土に雲母を含まない堯。灰陶軸器は、斎藤孝正氏の御教示によると3点とも独投窯産で、2の輪花碗がK-90号窯式の2型式?、3の小碗がK-90号窯式の3型式、4の瓶がIG-78号窯式である。5は混入した古墳時代終末期の土師器杯。

第109表 SI-20A出土遺物

番号 器種	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 土師器 土師器	口 復14.0 底 復 5.6 高 3.6	外道のロクロ目がやや強い。薄くやや上げ底で、丸味を持って立ち上がり、口縁部で多少外反する。外面体部下端は手持ち痕あり、底面は一方方向裏割り。内面は底面一方、体部は横方向の裏割き後、黒色処理。	7.5YR7/6 橙色	緻密で白粒・細粒多量、白砂と黒・透明細砂少量。	甕 口1/12周 底5/12周 〔甕〕
2 輪花碗 灰陶器	口 復14~ 15前後	薄く、体部は直線的に開く。内外面はロクロ製で残存全面に施釉あり。輪花が一面所見される。	10Y8/1 灰白色	やや緻密で黒色滲出粒やや多量。	甕土中 口1/12周 〔フタ土〕
3 小碗 灰陶器	口 復約12	薄く、体部は丸味をもち、口縁部は外面口縁部の下方に稜を持って弱く外反する。口縁部は外面側へやや尖り気味。口縁部内外面にロクロ製で後、残存破片の全面に施釉あり。	7.5Y7/2 灰白色	緻密で黒色滲出粒少量。硬質。	甕土中 口1/9周 〔フタ土〕
4 瓶 灰陶器	口 復14前後	薄く、口縁部中央が窪む。口縁部内外面はロクロ製で、内面に黄灰色の施釉が薄くみられる。	5GY8/0.5 灰白色	緻密で白細粒少量、やや硬質。	甕土中 口1/15周 〔フタ土〕
5 杯 土師器	口 復14.9 高 残 4.2	厚く深い。口縁部外面はかすかな稜を持って内彎する。体部外面は裏割り、内面全面と口縁部外面は横割き後、漆仕上げ。古墳時代終末期の遺物が混入。	2.5Y7/3 浅黄橙色	緻密で黒細砂少量、軟質。1b類。	甕土中 底~口1/3周 〔1〕
6 堯 土師器	底 5.4	平底で薄い。全面が熟を受けて、底~体部外面の割離が著しい。外面裏割り?で内面は底部裏割で、体部裏割で。	10YR7/3 にぶい黄橙色	緻密で灰色砂・白粒やや多量、黒・透明細砂少量。軟質。二次焼成で劣化。	底上8cm 底1/2周 底全面 〔No3フタ土〕
7 堯 土師器	口 復19.2	薄く、腹部は稜を持たないで強く外反し、口唇部は稜を持ってつまみ上げる。口縁部面に凹線一筋。腹部外面上手は隆で、指痕圧痕あり、内面は裏割で。口縁部内外面は横割で、内面腹部に輪痕み痕あり。	7.5YR7/6 橙色	やや粗い、黒砂・細砂多量、白・透明砂と白粒粒やや多量。硬質。	底上2cm 腹上1~口1/5周 〔5〕

第110表 SI-20A 平安時代 出土遺物数一覧表

	杯・碗	盤・皿	蓋	高杯	鉢	小形土器	壺・瓶	小形甕	長甕	甕	大甕	焼結土塊	その他
土師器	10							1	1				
灰陶器	有								有				
甕	平4	台2							2				
甕											3		
灰陶器													
甕													
甕													

灰陶輪花碗・小碗・瓶が各1点。須臾器長甕または甕3片は三和窯産で、同一個体の可能性もある。
古墳時代終末期の土師器破片少量と焼結土塊1点混入。

S1-21A (第92図、写真図版8・31・53)

本建物跡は、調査区の中央部北寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-22A、SI-22Bよりも新しく、SI-22Aの東壁の一部と、SI-21Bの竈・北壁の一部と北東コーナーを切っている。

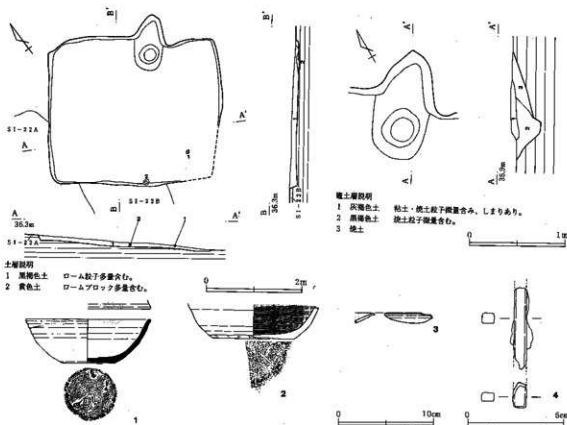
平面形は、南東コーナーが不明瞭だが、東西3.7m、南北3.2mの東西に長い方形と思われる。主軸方向はMN-35°-Eを示す。壁は確認面から西壁で10cm程、東壁で4cm程、南壁で16cm程、北壁で7cm程遺

存し、その立ち上がりは西壁で60°程、南壁で65°程の傾きである。周溝は検出されなかった。床面は西壁際が高く、東壁際に向かってゆるやかに傾斜し、比高差20cmである。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北壁やや東寄りに位置する。残存状況は悪く、掘形を確認することとまる。掘形は、北壁を幅80cm、奥行き54cmの平面舟首形に掘り込んでいる。また、北壁と床面を東西60cm、南北103cmの平面楕円形に掘り窪め、さらにその中央南寄りを径41cmの円形に掘り窪めている。断面は傾斜のゆるやかな漏斗状で、床面から最深25cmである。煙道床面は、燃焼部円形ピットの北端から18°程の傾きでゆるやかに立ち上がっている。煙道に、焼土が最深13cmの厚さで堆積していた。

埋土は2層に分層される。北壁際に、壁の崩落土と思われるロームブロック主体の黄色土がみられるほかは、ローム粒子を多量に含む黒褐色土である。

出土遺物 1の須恵器杯は胎土が三和窯とよく似ていて、糸切り離して、体部が丸く、体部下端を削らな
いもの。3は灰軸陶器皿の口縁部で、斎藤孝正氏の御教示によると猿投窯産のK-90号窯式2型式である。



第92図 八幡根遺跡 SI-21A 遺構・遺物

第111表 SI-21A 平安時代 出土遺物数一覧表

	杯・椀	鉢・皿	蓋	高杯	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甌	大甌	焼粘土造	その他
土口縁部	8							2	1				
脚体部	有								有				
器底部	平6台1								1				
須口縁部	1												
脚体部													
器底部	平底3												

灰軸陶器の皿1片、鉄製品の釘1点。図示していない須恵器杯底1片は回転糸切り離して、三葉窯産か？

第112表 SI-21A出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 環形器	口 13.2 底 5.5 高 4.6	ロクロ成形。外面のロクロ目やや明確。やや厚く、底部は糸切り時にやや上げ底気味。回転糸切り離し時のロクロ左回転。底面および体部下端は切り離し後、無調整。胎土は三和腐葉土とよく似る。右明具に少し使った可能性があり、口縁部の同じ位置の内外面に油漬が少量あり。	2.5Y7/2 灰黄色	やや粗い。白・透明の砂と細砂やや多量、赤細砂・白雲母細片少量。 軟質。	底上5cm 口1/8割欠損
2 環土師器	底 径8.6 残4.6	ロクロ成形。底部は薄く体部は厚い。底部は糸切り時に少し上げ底気味。回転糸切り離し時のロクロは右回転か。外面体部下端と底面外面に手持ち痕あり。内面は底部一方向、体部横方向の施磨き後、黒色処理。	7.5YR7/6 橙色	やや粗い。白細粒多量、白砂と黒・透明細砂やや多量、金色の黒雲母ごく少量。 軟質。	床直 底～体1/4周 「2床直」
3 瓦 灰輪陶器	口径18前後	体部はゆるやかな丸味を持ち、口縁部外面に稜を持って外反する。底部～体部外面はロクロ撫で。残存部の全面に施磨してある。	2.5GY8/0.5 灰白色	緻密で白細粒ごく少量。硬質。	埋土中 口1/15割
4 釘(?) 鉄製品	幅 7mm 厚 4～5mm 重 7.35g	頭部を欠損している釘の可能性がある。断面方形。下部はやや厚みが弱くなる。現在は錆が進んで破壊し、本来の全長は不明。図示した下部の破片がもしも下階で平坦に終わるのであれば、釘ではなく他の鉄器かもしれない。表面に木質などは見られない。			埋土中 両端部欠損 「フタ土」

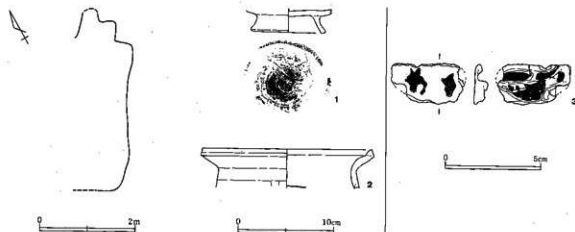
SI-25 (第93図、写真図版9・54)

本建物跡は、調査区の中央部北寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。SI-26と重複し、SI-26を切っていたと思われるが、本建物跡がほとんど削平されてしまっているため、新旧関係ははっきりしていない。出土遺物から判断して、SI-26よりも新しいと思われる。

平面形は、東西不明、南北3.2m程の方形を呈し、主軸方向はMN-31°-E程度を示すと思われる。

竈は、北壁東寄りに位置するらしい。残存状況は極めて悪く、掘形を推定するにとどまる。掘形は、北壁を幅84cm、奥行き64cmの平面不整形に掘り込んでいると思われるが、北壁を幅60cm程度、奥行き64cmの平面舟首形に掘り込んでいたものが、後に変形したものととも考えられる。

出土遺物 遺物は少ない。2はやや変わった形状の甕だが、胴部が薄いことや口縁端部が上へ立ち上がることは常総型の甕と共通する。3は漆の仕上がり具合を試した焼粘土塊と考えられる。漆を使う点や胎土からみて、古墳時代終末期の土師器生産にかかわる遺物が混入したものである。



第93図 八幡根遺跡 SI-25 遺構・遺物

第113表 SI-25出土遺物

番号 種類	数量 (cm)	特徴	色調	胎土 焼成	出土状況 残存状況 注記
1 高台付 土師器	高台 8.0	薄く、高台はやや「八」の字に開く。底部外面はおそらく回転削り後、高台貼り付け、全面ロクロ削で。内面もロクロ削で。	7.5YR7/4 にぶい褐色	やや緻密で黒・透明細砂少量。 やや硬質。	埋土中 台5/12間 底全面 「フク土」
2 土師器	口 径18.0	胴部は薄く、口縁部は厚い。口縁部は断面三角形に立ち上がり、胴部外面は上半が弱くくぼむ面をなす。胴部外面削り。口縁部内外面と体部内面は横削で。	7.5YR6/4 にぶい褐色	やや粗い。白細粒と黒・灰色砂ややや多量。黒・透明細砂少量。硬質。	埋土中 口1/12間
3 焼粘土 土師質	長3.9×2.2 厚0.7 重4.01g	左面はやや平坦。右面は粘土がシワ状にかさなって凹凸が激しい。平面を不整形長方形に仕上げる。右面の中央部全体と左面の2ヶ所に漆が付着。可塑性のある段階で漆を塗り、その後でまた粘土が変形している可能性がある。土師器製にかかわって漆仕上げを減した粘土塊か。古墳時代終末期の遺物が混入。	7.5YR6/4 淡黄褐色	断面で漆和材ほとんどなし。 やや軟質。2割。	不明 焼成後に一部欠損 「SI-25」

第114表 SI-25 平安時代 出土遺物数一覧表

	環・輪	壺・皿	蓋	高杯	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	異壺	甌	大甌	焼粘土	その他
土 師 器	口縁部 1 体部 1 底部								5 有				
須 恵 土 師 器	口縁部 体部 底部												
焼 粘 土	体部 底部												

土師器環体部はロクロ成形後、内面箇所まで黒色処理なし。口縁部はロクロ成形で磨きなし。
古墳時代終末期の土師器片若干と焼粘土塊2点混入。

S1-29 (第94図、写真図版11・35)

本建物跡は、調査区の中央部南寄りにあり、台地上の東斜面に位置する。重複する遺構はないが、建物跡中央部を東西方向に溝状の擾乱が切っている。南にSI-30が近接している。

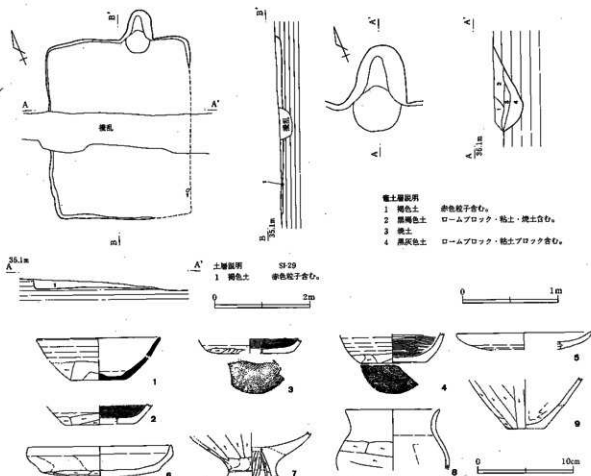
平面形は、東壁から南東コーナーにかけてがはっきりしていないが、確認している範囲では、東西3.1m程、南北3.9m程の南北にやや長い方形を呈していると思われる。主軸方向はMN-21°-Eを示す。壁は確認面から西壁で21cm程、南壁で4cm、北壁で12cm程遺存しているが、東壁は東に下がる傾斜地のため、欠如している。立ち上がりは西壁で75°程、北壁で45°程の傾きをもって立ち上がっている。溝溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北壁中央東寄りに位置する。残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。掘形は、北壁を幅73cm、奥行72cmの平面U字形に掘り込んでおり、さらに、北壁と床面を径51cmの平面円形に掘り窪めている。その断面は楕円状で、最深21cmであり、掘道床面は、燃焼部中央の最深部から27°程の傾きでゆるやかに立ち上がっている。焼土は、断面中層に7cm程の厚さで認められる程度である。

埋土は1層で、赤色粒子を含む褐色土である。

出土遺物 量は少ない。古墳時代終末期の土師器と平安時代の土器類とがほぼ同量ずつ出土している。床面出土遺物は古墳時代終末期の土師器環が1片あるが、「壺」と注記されている壺が平安時代の武蔵型壺なので、平安時代の建物と考える。1は三和窯跡群産の須恵器環。2～4は外面体部下端を手持ち削りする土師器環で、2は底面にも手持ち削りを行なっている。5は土師器皿としたが、焼成不良の須恵器皿である可能性も高い。その場合は、SI-35Aの22などと同じく、茨城県三和窯跡群の製品と考えられる。8は武蔵型の小形壺である。

6・7は古墳時代終末期の遺物。6の坏は床面出土だが、小破片なので混入品と考える。浅く、莖削りによる器形の変換点が明確で、あまり底が丸くない点や、硬質で赤味がある器質は、古墳時代終末期のこの遺跡の通常の坏類と少し異なる。高坏は脚根部の横撫でが見られるので、短脚化したものらしい。



第94図 八幡根遺跡 SI-29 遺構・遺物

第115表 SI-29出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 質	出土状況 残存状況 注記
1 坏 類 器	口 径 13.0 底 径 6.0 高 径 4.5	口縁部と底部は破片が直線には接合しないので、高さは推定。薄く平底で、外部外面はロクロ撫での凹凸が強い。底部内面中心部が盛り上がる。外面は底部に一方方向手持ち裏削り、体部下端に横方向手持ち裏削り。内面はロクロ撫で。三和陶産。	5Y7/2 灰白色	粗い。白細粒多量、透明細砂少量。やや硬質。	不明 口1/8周 底1/4周 [SI-29]
2 坏 土 脚 器	底 径 7.4	外面はロクロ撫での後、体部下端を手持ち裏削り。外底面は一方方向手持ち裏削り。内面は裏磨きの後、黒色処理。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細粒・透明細砂やや多量。硬質。	不明 底1/4周 [SI-29]
3 坏 土 脚 器	底 径 8.0	薄く平底。外面は底部回転糸切り磨きの後、底面外周と体部下端に手持ち裏削り。切り磨し時のロクロは左回転。外部外面のロクロ目は明確でやや強い。内面全面は裏磨きの後、黒色処理。	10YR7/4 にぶい黄褐色	やや緻密で白細粒多量、透明・黒細砂少量。やや硬質。	不明 底1/4周 [SI-29]
4 坏 土 脚 器	底 径 7.0	平底で、やや上げ底気味。体部下位に丸味を持ち、外面のロクロ目がやや強い。底面は回転糸切り磨き後無調整、ごく一部に外周手持ち裏削り。外周ロクロ撫で後、体部下端手持ち裏削り。内面全面裏磨き後黒色処理。	7.5YR6/6 褐色	緻密で白細粒多量、黒・灰色細砂少量。やや硬質。	不明 底3/8周 [SI-29]

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 土 成	出土状況 残存状況 注記
5 瓦 土師器	口 復14.4 高 残 1.8	底部はやや厚く、口縁部は薄い。口縁部は内彎する。内外面全面口ロ口縁で、外面の口ロ口目は強く、凹凸が激しい。外面口縁部と内面全面はおそらく使用によりやや汚れて褐色色。須恵器の可能性もある。	2.5YR6/6 褐色	やや粗い。白粒較多量、黒細砂と透明砂・粗砂やや多量。軟質。	堀土中 口一底1/6 周 「フク土」
6 坏 土師器	口 復15.0 高 3.4	薄い。やや突出する底部は外面中央に丸味を持つが平底に近い。口縁部は内外面に不明瞭な稜を持って内彎する。外面は体部縁で、底部磨削り。口縁部横縁で。内面は全面横縁で。古墳時代終末期の遺物が混入。	7.5YR7/4 にぶい褐色	緻密で透明細砂少量。やや硬質。	床底 口一底1/9 周 「1」
7 高坏 土師器		頸部はやや厚く、坏部と肩部は薄い。外面は脚柱部縁の後、坏部は磨削り、脚部横縁で。坏部内面は横縁で、脚部内面は横縁での後に縦方向の幅狭い磨削り。古墳時代終末期の遺物が混入。	10YR8/3 淡黄褐色	緻密で黒細砂非常に多量、赤細粒・透明細砂少量。軟質。1a類。	堀土中 脚部全周 「フク土」
8 小形壺 土師器	口 復10.0	非常に薄い。口縁部内外面は横縁で。外面脚部は横方向の磨削り。内面脚部は磨削り。口縁部外面と内面脚部にオコガが薄く残存する。	2.5YR6/6 褐色	緻密で白粒較やや多量、黒・透明細砂少量。やや軟質。	不明 口1/4周 「S1-29」
9 小形壺 土師器	底 復 4.0	胴部は薄く平底。外面の底面は大部分が剥離して不明瞭だがおそらく磨削り。外面胴部は多方向磨削り。内面胴部は磨削り。	2.5YR6/8 褐色	やや緻密で黒細砂やや多量、透明細砂と白粒較少量。やや軟質。	壺 底1/2周 「1」

第116表 SI-29 平安時代 出土遺物数一覧表

	坏・椀	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土師	壺・甕	小形壺	長壺	甌	大甌	焼粘土塊	その他
土師器	口縁部	6	1					5					
体部	有	1						有					
底面	平底13							平底1					
須恵器	口縁部	1											
体部	1								2				
底面	平底4												

須恵器はすべて3和煎産。
古墳時代前期の土師器少量混入、古墳時代終末期の土師器と焼粘土塊やや多量混入。

S1-31 (第95図、写真図版12・35)

本建物跡は、調査区の南部にあり、台地上の東斜面に位置する。重複関係としては、SI-30よりも新しく、SI-30の南西コーナーを切っている。

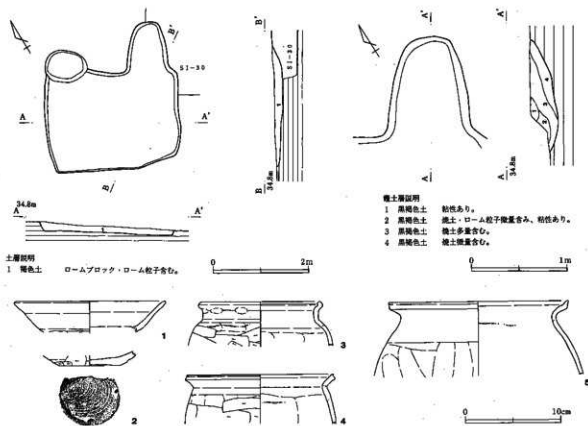
平面形は東西2.9m、南北2.2mの東西に長い方形を呈し、その北東コーナーに、壁張り出しピットを持っている。主軸方向はMN-27°-Eを示す。壁は確認面から西壁で19cm程、東壁で10cm程、南壁で5cm程遺存しており、その立ち上がりは西壁で65°程、東壁で、60°程の傾きである。溝溝は検出されなかった。床面は西側と南側が高く、東側と北側が低くなっており、その比高差は10cmである。ピットは、北壁上北西コーナーに1基検出された。長径90cm、短径70cmの平面楕円形で、床面よりも10~20cm程度深くなる。貯蔵穴の可能性もある。

竈は、北壁東寄りに位置する。残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。掘形は、北壁を幅97cm、奥行き101cmの平面U字形に掘り込んでおり、その煙道床面は、燃焼部中央から19°程の傾きでゆるやかに立ち上がっている。

埋土は1層で、ロームブロック、ローム粒子を含む褐色土である。

出土遺物 遺物は少量である。図示した土師器坏2点は硬質の酸化炎焼成で、内面を磨かず、外面体部下端を手持ち焼削りする。この2片は同一個体の可能性もある。5は常総型壺に類する器形である。土師器壺は3・4・5ともに胎土に黒雲母や白雲母を含まない。

第3章 発掘調査された遺構と遺物



第95図 八幡根遺跡 SI-31 遺構・遺物

第117表 SI-31出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土器	口 径16.0	内外面ロクロ撫で。ロクロ目はあまり強くない。外面体部下端に手持ち痕あり。	5YR6/6 橙色	やや緻密で、白粒・細粒多量、黒・透明・灰色細砂やや少量。硬質。	埋土中 口一肩1/6 周
2 坏 土器	底 6.4	やや薄く平底で、外面底部の中央部が窪んでいる。体部は開き気味に立ち上がる。外面体部ロクロ撫でのち、下端を手持ち痕削り。外面底部回転糸切り後、糸調整。糸切り時のロクロ目は右回転。内面ロクロ撫で。	5YR6/6 橙色	やや緻密で、白粒・透明細砂やや多量、黒・透明細砂やや少量、灰色砂少量。硬質。	埋土中 底2/3周
3 小形 土器	口 径12.4	薄く、頸部は内外面にゆるい線を付けて直立後に外傾する。口唇部は内面が明顯に折れて沈線状になり、外面は丸味を持つ。外面胴部は線な物での後に、地削り。内面胴部は撫で。口縁部内外面横撫で。口縁部外面にオコゲ少量。	5YR7/4 に灰い橙色	やや粗い、黒・透明細砂多量、白粒・透明細砂やや少量、灰色砂少量。やや硬質。	埋土中 口一肩1/6 周
4 小形 土器	口 径15.2	薄く、頸部外面に明瞭で内面にやや弱い線を付けて外傾する。口縁部は外面に凹線をもち、内面を弱くつまみ上げる。外面胴部は撫で後、寛削り。胴部内面は横撫での後に口縁部内外面横撫で。	7.5YR5/4 に灰い橙色	やや粗い、黒・透明細砂多量、白粒・透明細砂やや少量、赤褐色砂少量。やや硬質。	埋土中 口1/4周
5 壺 土器	口 径19.0	薄く、頸部は線を持たないで強く外反し、口唇部をつまみ上げる。口縁部外面は上端が少し外に出る。外面胴部は撫で、口縁部内外面と胴部内面を全面横撫で。	5YR6/6 橙色	やや粗い、黒・透明細砂多量、灰色砂・透明細砂やや多量。やや硬質。	埋土中 口一肩1/6 周

第118表 SI-31 平安時代 出土遺物数一覧表

	坏・椀	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形埴	長埴	甌	大甌	埴土塊	その他
土口縁部	4							3	2				
器体部	有								有				
器底部	平底4												
須口縁部													
器体部									1				
器底部									1				

須恵器は2片とも三和窯産。
古墳時代終末期の土師器若干混入。

S1-35A (第96~98図、写真図版12-13・36~37・53)

本建物跡は、調査区の南西部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-35B、SK-18よりも新しく、SI-35Bの北西コーナーと北東部を除く全部と、SK-18の全部を切っている。

平面形は、東西5.7m、南北4.6mの東西に長い方形を呈し、主軸方向はMN-17°-Eを示す。壁は確認面から東壁で44cm程、南壁で30cm程遺存しており、その立ち上がりは、東壁で79°程、南壁で75°程の傾きで垂直に立ち上がる。周溝は、北壁東側を除く壁際に検出された。幅は概ね24~46cm、深さは14~20cm程で、断面はU字形を呈する。床面は北壁際が高く、南壁際に向かってわずかに傾斜しており、その比高差は10cmである。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

庵は、北壁東寄りに位置する。残存状況は悪く、左袖の一部を残すものの、掘形を確認するにとどまる。掘形は、北壁を幅110cm、奥行き55cm程の平面平行四辺形状に掘り込んでいる。そして、左袖にあたる部分のローム土を23×37cm程掘り残し、左袖の基部としている。また、床を南北65cm、東西99cmの不整な楕円形に掘り窪めており、その断面は皿状で床面から最深17cmである。右袖・左袖にあたる部分から壺の大きな破片が出土したが、袖の補強材として使用されたものかもしれない。煙道奥から、倒立した甕とその上に逆さまにのせられた坏も出土した。出土位置に疑問があるものの、その形態から支脚として使用された可能性が高い。また、煙道にあたる部分に焼土が最深9cm程認められている。

埋土は、床面直上がロームブロック・焼土の多い褐色土、上層がロームブロック・焼土を含む褐色土である。この外、投げ込みとみられる焼土が、北西コーナーに146×125cmの範囲で確認されている。

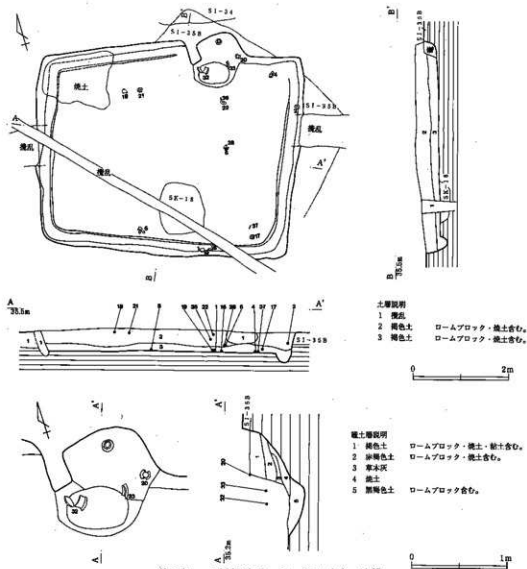
出土遺物 取り上げ時にSI-35AとSI-35Bを区別しなかったために「SI-35」としか注記がない遺物があり。SI-35Bは古墳時代の建物なので、「SI-35」の平安時代の遺物はすべてSI-35A出土品として扱った。出土量は非常に多い。

土師器坏は糸切り難し後無調整のものが多い。器体下部と底面外周または底面全面を手持ち寛削りするのも若干ある(7・8・13・16・19)。土師器坏は灯明具が多い。7~15と25は墨書土器。19の外表面には焼成後の刻書がある。3は内面に漆膜がはがれかけた状態で残るので、漆用のパレットに使ったものだろう。32・33は常総型に似た器形の土師器甕で、外面肩部は平行叩きをしている可能性があるが、撫で調整のために不明瞭である。雲母を含まない点で、常総型甕とは異なる。

須恵器では、新治窯産の長甕がある。図示した27の他に破片が数点あり、同一個体が破損したものかもしれない。須恵器坏はすべて三和窯産で、底部21片の内訳は手持ち寛削り20片に対して回転糸切り難し後無調整が1片である。22の皿は全体が黒褐色軟質で、下総地域に見られる焼成不良の須恵器に似る。このような焼成の品や灰釉陶器系の器形の皿は、三和窯跡群で浜ノ台窯跡に続く時期の須恵器に存在する。SI-29の5番が須恵器であれば、この類例になる可能性がある。29は内面に青海波文を持つので、SI-35Aの遺物とし

て取り上げられているが、古墳時代の須恵器片がSI-35Bから流入したのかもしれない。

34は須恵器坏底を転用した紡錘車の未製品と考えられるもので、35は土師質の専用紡錘車である。36～38は鉄刀子。38は折り曲げてあるので回収・再利用する予定だったのだろうか。

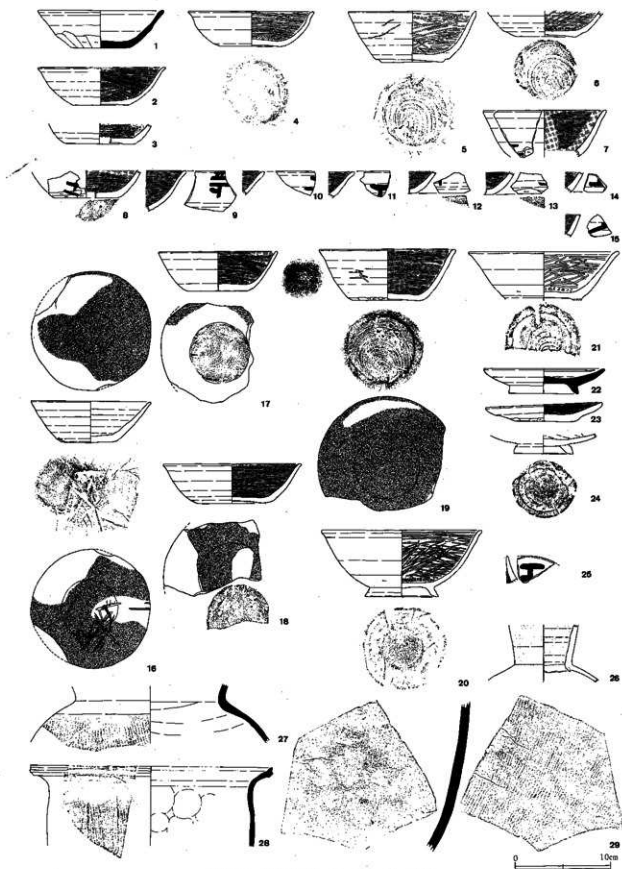


第96図 八幡根遺跡 SI-35A (1) 遺構

第119表 SI-35A 平安時代 出土遺物数一覧表

		杯・椀	鉢・皿	重	高杯	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甌	大甌	焼粘土瓦	その他
土師器	口縁部	303	16			1			2	93				
	体部	有				有		有	有					
	底部	平276台9	平2台4			2			台1	34				
須恵器	口縁部	37	2							4		2		
	体部	有								有		有		
	底部	平成21	台1							1				
新治産	口縁部			3						2				
	体部									有				
	底部									3				

須恵器転用紡錘車1点(三和産)・須恵器類の体部5片(産地不明)・反拍陶器の長頸瓶4片・鉄刀子3点あり。
古墳時代前期の土師器少量、古墳時代終末期の焼粘土塊少量・須恵器大甌体部1片・土師器やや多量が混入。



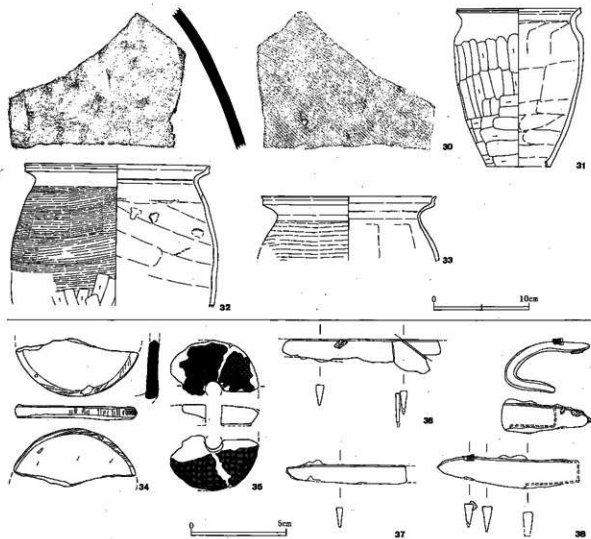
第97図 八幡根遺跡 SI-35A (2) 遺物

第3章 発掘調査された遺構と遺物

第120表 SI-35A出土遺物

番号 種類	量 法 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 須臾器	□ 底 13.4 高 6.0 4.0	体部は直線的で、内面のロクロ目は弱く、外面のロクロ目がやや目立つ。底部一方、体部下端横方向の手持ち痕あり。三和陶産。	2.5Y7/2 灰黄色	やや粗い。白粒・ 細粒多量、透明細 砂少量。軟質。	底上4cm 口～底1/2 周「10」
2 坏 土師器	□ 底 13.6 高 4.0	非常に青く軽い。口縁部は内面に深い轡を持って外反する。外面体部はロクロ撫で、底部全面におおむね一方の手持ち痕あり。下端の手持ち痕類りは見られない。内面は、底部に一方、体部に限定5単位に分割する横磨きの後、黒色処理。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で白細粒と透 明細砂やや少量。 赤細粒・黒細砂・ 透明細砂少量。 軟質。	底上40cm 底全面 口7/12周 「17」
3 坏 土師器	□ 復 7.6	平底で、底部中央は磨削りの具合により1段低くなる。底部外面手持ち痕あり。表面外面で、体部外面ロクロ撫で、内面は底部一方、体部横方向の磨削り。内面に轡が残り、該容器またはパレットに使っていたらしい。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白細粒と透 明細砂少量。 やや軟質。	埋土中 底～体下半 1/6周 「フク土」
4 坏 土師器	□ 復13.4 底 6.5 高 3.8	体部はやや厚く、底部は厚い。口縁部の外反は内面でやや明瞭。外面体部はロクロ撫で、底面は回転糸切り難し後無調整。糸切り時のロクロは右回転。内面は底部一方、体部横方向の磨削りの後に、黒色処理。	10YR7/3 にぶい黄褐色	やや緻密で白細粒 やや多量、黒・透 明細砂と赤細粒少 量。軟質。	床直 底全面 口5/12周 「2床直」
5 坏 土師器	□ 底 13.6 底 6.7 高 5.5	外面底部に明確な段差を持って切り離す。体部内外面はロクロ撫での凹凸が強い。外面体部に粘土接合痕あり。底部外面は低速のロクロ右回転で回転糸切り難し後、無調整。内面は体部に一方、体部に横方向の磨削り。体部外面の凹凸に対応する位置に油痕が付着。	6YR5/6 明赤褐色	やや緻密で白粒・ 細粒多量、透明・ 黒細砂少量。 やや硬質。	床直 底全面 口7/12周 「床直」
6 坏 土師器	底 6.4	外面体部はロクロ撫での凹凸がやや激しい。底部は回転糸切り後、無調整。切り離し時のロクロは右回転。内面は体部に横と斜方向、底部に多方向の磨削り。	7.5YR6/6 褐色	緻密で白細粒多量 白粒・灰色砂・黒 細砂やや多量。 硬質。	底上15cm 底全面 「4」
7 坏 土師器	□ 復13.0 高 残 5.0	厚く、口縁部はわずかに外反気味。体部外面ロクロ撫で、下端手持ち痕あり。内面は底部一方、体部横方向の磨削りの後に、黒色処理。外面に墨書あり。	7.5YR7/4 にぶい褐色	緻密で白細粒・透 明細砂多量、黒細 砂少量。 やや硬質。	埋土中 口1/8周 「SI-35フク 土」
8 坏 土師器	底 復 7.0	やや厚く平底で、体部下位に丸味を持つ。外面に墨書「土」あり。底面は回転糸切り後、無調整。外面は成形時の粘土接合痕を体部に少し残し、ロクロ撫で後体部下端を手持ち痕あり。内面は磨削りの後、黒色処理。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細粒やや 多量、黒・透明細 砂少量。 やや硬質。	不明 底1/6周 「SI-35」
9 坏 土師器	□ 約13.0	口縁部下位の外面側がややくぼむ。下半部外面はロクロ目の凹凸がやや明瞭。外面体部はロクロ撫で、内面は磨削りの後、黒色処理。体部上半に墨書あり。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細粒と黒 ・透明細砂少量。 軟質。	不明 口1/12周 「SI-35」
10 坏 土師器	□ 約12.0	体部外面はロクロ撫で、内面は磨削りの後、黒色処理。外面に墨書あり。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で黒・透明細 砂と白細粒少量。 硬質。	不明 口1/9周 「SI-35」
11 坏 土師器		やや厚く、口縁部は外面で弱く外反する。体部上半部外面ロクロ撫で、内面は磨削りの後、黒色処理。体部外面に墨書あり。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白細粒と黒 ・透明細砂少量。 軟質。	埋土中 口1/12周 「SI-35フク 土」
12 坏 土師器	底 約 6.0	外面下半はロクロ撫での凹凸がやや目立ち、全体に丸味を持つ。底部外面は回転糸切り難し後、無調整。内面は磨削りの後、黒色処理。外面に墨書あり。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白細粒・黒 細砂やや少量、透 明細砂少量。 軟質。	埋土中 底1/7周 「SI-35」
13 坏 土師器		平底で、体部に丸味を持つ。底部外面回転糸切り後、無調整。体部ロクロ撫での後、外面下端は手持ち痕あり。内面は磨削りの後、黒色処理。外面に墨書あり。	10YR5/3 にぶい黄褐色	やや緻密で白細粒 やや多量、黒・透 明細砂少量。 やや硬質。	埋土中 底1/9周 「SI-35」
14 坏 土師器		体部外面ロクロ撫で、体部下端に手持ち痕ありする可能性もある。底面は残存部がわずかで調整不詳。内面は磨削りの後、黒色処理。外面に墨書あり。	7.5YR7/4 にぶい褐色	やや粗い。黒・透 明細砂と白細粒や やや少量。軟質。	埋土中 底1/18周 「SI-35」
15 坏 土師器		体部外面はロクロ撫で、内面は磨削りの後、黒色処理。外面に墨書あり。	10YR4/6 褐色	やや粗い。白砂・ 透明細砂少量。 軟質。	埋土中 破片 「SI-36」
16 坏 土師器	□ 底 12.7 高 5.2 4.3	平底で外面にわずかに丸味を持つ。体部内外面はロクロ撫での凹凸が強い。外面外面に一方の手持ち痕あり。外面の底部～体部下半におそらく切り離し後で磨削りより前に、草の葉か茎のような植物質の圧痕あり。内外面に油痕が付着し、特に外面に多い。	10YR7/4 にぶい黄褐色	やや緻密で白細粒 やや多量、赤粒と 黒・透明細砂少量 やや硬質。	底上1cm 口3/4周 底～体全面 「9」

番号種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土成	出土状況 残存状況 注記
17 環 土師器	口 復12.6 底 6.4 高 4.2	底部はやや厚い。外周部は直線的で、口縁部内面がわずかに外反する。外周部はロクロ胎で、底部は回転糸切り後無調整。切り難し時のロクロは右回転。内面は裏磨きの後、黒色処理。口縁部外面にも少し炭素が吸着する。外面上半の一部に油塗が付着。	7.5YR6/6 橙色 黒斑あり	緻密で白磁粒と黒・透明細砂少量。 やや硬質。	底上8cm 底全周 C1/7周 [8]
18 環 土師器	口 復14.7 底 7.3 高 4.2	口縁部は外周がやや強く外反する。外周部はロクロ胎で、内面は底部一方方向、体部横方向の裏磨きの後、黒色処理。底部は回転糸切り後、無調整。糸切り時のロクロは右回転。外周部一底部に油塗が付くが、内面は黒色処理のためよくわからない。	10YR5/3 にぶい黄褐色	やや粗い。白磁粒多量、白粒・白砂・黒磁砂少量。 やや硬質。	底上43cm 底5/12周 C1/7周 [6]
19 環 土師器	口 14.4 底 7.0 高 5.4	口縁部が強く外反する。内外面はロクロ胎での凹凸が激しい。底部は回転糸切り難しの後、外周手持ち裏磨り。切り難し時のロクロは右回転。外面に焼成後の織刺「竹」。内面は底部一方方向、体部横方向の裏磨きの後、黒色処理。外周部全体にやや薄く油塗が付着するが、内面は黒色のため不詳。	10YR7/3 にぶい黄褐色	やや緻密で白磁粒多量、白粒と黒・透明細砂少量。 やや硬質。	底上4cm 底全周 C1/10周 [10]
20 高台付 土師器	口 復17.0 高台 7.8 高 7.1	高台は外周で接地する。外周は裏磨りの上側の縁線だけが明瞭で、体部は回転糸切り難しの後、外周側口縁部は縁を持たないで明確に外反する。内面は底部平型が比較的明瞭で広い。外周部はロクロ胎で、底部は全面裏磨り後、高台を貼って台の周囲をロクロ胎で、内面は裏磨きでもとは黒色処理していた可能性があるが、現状ではほとんど見られない。	5YR6/6 橙褐色	緻密で白磁粒多量黒磁砂やや多量、白砂・透明細砂少量。 やや硬質。	底上42cm C1/6周 底全周 [3磁]
21 高台付 土師器	口 復16.0 底 復 7.9	底部は厚い。体部のロクロ目の凹凸はあまり強くない。口縁部はごくわずかに外反する。外周側口縁部は、回転糸切り難し後に体部下端を回転糸切り後、高台を貼り付けて台の周囲をロクロ胎で、内面体部裏磨き。	7.5YR5/4 にぶい褐色	やや粗い。白磁粒多量、透明・灰色砂少量・透明細砂少量。 やや硬質。	底上88cm C1/6周 底1/2周 [5]と「フク土」が結合
22 高台付 須恵器	口 復12.5 高台 7.2 高 2.6	底部はやや厚い。口縁部内面に沈線一条あり。外周は底部部転直磨り後に高台を貼り付け、高台部と高台より外側の体部をロクロ胎で、前面一帯はさらに全体が黒褐色で、黒色処理ではない。下縁まで、三和陶の可能性あり。	2.5Y3/1 黒褐色	やや粗い。白磁粒・透明細砂多量、白砂少量。 軟質。	底上88cm 高台1/2周 C1/12周 [3]
23 皿 土師器	口 12.2 底 6.2 高 2.2	底部は厚く、口縁部は内彎気味。底面はおおむね一方方向気味、体部下端は横方向の手持ち裏磨り。体部ロクロ胎で、内面全面裏磨きの後、黒色処理。	10YR7/4 にぶい黄褐色	やや粗い。白磁粒やや多量、黒・透明細砂少量。 軟質。	底土中 底全周 C2/3周 [「フク土」]
24 高台付 貝土師器	底 6.2	高台の体部は蓋する上端部分は縁を持って凹線に嵌り込む。高台は外周部で接地する。外周は体部をおおく反転させてロクロ胎回りして回転糸切り後に高台を付け、全面をロクロ胎で、内面は回転を利用しない確かな構造で。	5YR6/6 橙褐色	やや緻密で白磁粒と黒・透明細砂が少量。硬質。	底土中 台1/2周 底全周 [「SI-35フク土」]
25 皿 土師器	口 約12.0	体部外周はロクロ胎で、内面は裏磨きの後、黒色処理。外面に墨書あり。	10YR6/4 にぶい黄褐色	やや粗い。黒磁粒・粒多量、白磁粒・透明細砂やや少量。軟質。	底土中 C1/12周 [「SI-35フク土」]
26 長頸 灰釉陶器	頸 復 6.0	薄く、外周と胴部内面はロクロ目の凹凸をほとんど残さないが、胴部内面は凹凸が明瞭で多い。頸部は別注のものに接合し、接合部はロクロ胎で粘土が下にはみ出す。外周全面と内面胴部に非常に薄く施釉。胴部一帯の可能な高い滑り片がここ他に胴部2片、頸部1片あり。縦穴腐食。	2.5Y6/2 灰青色	緻密で白・黒磁粒ごく少量。 硬質。	底土中 C1/4周 [「SI-85フク土」]
27 長頸 須恵器	頸 15.8	やや薄く、頸部は外周に明瞭な縁を持って外反する。外周は胴部に木目平行の平行叩きの後、胴部にロクロ胎で、内面は胴部に無文高具の後、横磨で。胴部ロクロ胎で。胴部内面の横磨では回転を利用しない可能性が高い。新治腐食。	7.5YR6/4 にぶい橙褐色	粗い。白雲母片・薄片多量、白粒・黒粒と白・透明砂少量。軟質。	底土中 C1/6周 [「SI-35フク土」]
28 長頸 須恵器	口 復25.6	薄く、胴部は内面に明瞭な縁を持って外反し、口縁部内面を強くつまみ上げる。外周は胴部に木目平行叩きの後、胴部口縁部はロクロ胎で、内面は胴部に無文高具の後、胴部以上にロクロ胎で。三和腐食。	2.5Y7/3 淡黄褐色	やや緻密で白磁粒やや多量、黒・透明細砂少量。 硬質。	底上15cm C1/12周 [14]
29 大甕 須恵器	大 復約40 以上	指示した天端は逆の可能性もある。外周は木目平行の平行叩き。破片上・中位では逆で、破片下位では異方向が混在する。内面は粘土接合痕を少し残す。残り同心円文当具の後、左上・右下方向の異い傷で。産地不明。古墳時代の終末期の遺物と推入した可能性もある。	2.5Y5/1 黄灰色	緻密で白粒・黒粒とガラス質の黒色薄出粒やや多量、白砂少量。 非常に硬質。	底土中 C1/8周 [「フク土」]
30 大甕 須恵器	大 復約100	外周は木目平行の平行叩きを斜位に残す。内面は無文高具の後、回転を利用しない構造で。無文高具は直線的な縁辺を持つ。三和腐食の可能性が高い。	10YR4/1 黄灰色	やや粗い。白粒・黒粒多量、白・灰色の塵・砂やや多量、透明細砂少量。硬質。	底土中 C1/18周 [「フク土」]



第98図 八幡根遺跡 SI-35A (3) 遺物

番号 器種 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
31 小形素 土師器	口 復 13.0 底 6.7 高 16.8	薄く、腹部内外面に弱い稜を持って外傾し、口縁端部は内面を弱くつまみ上げ、外面を凹縁にする。外面は胴部上位に施での後、中位を上内外面にス 下位を右へ廻り、口縁部横施で、内面は胴部下位前後での後、 中位以上に施で、頸部以上は横施で。	5YR7/4 にぶい褐色	粗い。白粒・緑粒 と透明・黒細砂多 量、白砂少量、 やや硬質。	甕 底面欠損 [7軸]
32 素 土師器	口 復19.8	薄く、腹部は内外面に稜を持たないで強く外反する。口縁端部は内面 に稜、外面に凹面をなして上へつまみ上げる。外面は胴部刷毛目または 本目平行の横位叩き目の後に施で。内面は胴部横施で後、斜め施で で、凹凸と輪横痕を残す。内外面ともに頸部以上は横施で。内面頸部 にやや鋭い水平の沈線を一線、細軸施文している可能性がある。	5YR6/4 にぶい褐色	粗い。白雲母片と 白砂・透明砂多 量、黒細砂少量、 硬質。	底上40cm 口~胴1/3 周 [5軸左軸]
33 素 土師器	口 復18.6	薄く、胴部外面と口縁部内外面に明確な稜を持って受け口状になる。 口縁端部の上半がゆるくくぼむ。外面は胴部に横刷毛または本目平行 の叩き目の後に施で。口~頸部は横施で。内面は胴部横施での後 に口~腹部横施で。	2.5YR6/6 褐色	粗い。白と半透明 の砂と細砂多量、 白雲母細片と赤粒 やや多量、軟質。	底上42cm 口~胴1/6 周 [4軸右軸]
34 紡錘車 須恵器	径 復 6.8 厚 0.6 重量11.56g	須恵器の無台杯の底部を再利用。外面部と体部立ち上がり部を削って 整形。中央の孔部の有無は欠損して不明なので、厳密には紡錘車かど うかは確実ではない。三和層産。	5Y8/1 灰白色	緻密で白細粒やや 多量、透明・黒細 砂ごく少量、 軟質。	堀土中 5/12周 [フク土]
35 紡錘車 土師質	径 復 5.3 厚 1.2 孔 0.9	上面は一方周磨き。下面は円周方向の手持ち廻り。側面は横方向 の手持ち廻り後の、上面寄りの部分に横方向の磨き。孔はおおよそ く芯に円棒を通して成形時につくり出す。全面黒色処理。	2.5Y5/3 黄褐色	緻密で白細粒やや 多量、やや軟質。	不明 5/12周 [S1-38]

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 焼 土 成	出土状況 残存状況 注記
36 刀子 鉄製品	長 残 8.4 幅 残 1.2 重残 13.10g	出土時には蓋から切先まで残存している。蓋を含めた全長は10cm以上あったようであるが、現在は破損がひどく、図示した状況までしか復元できない。おそらく平塚で、幅幅は約4mm。刃幅は確認できるところで12mmで、さらに割傷へ広がっていくようである。図示した面に、同一個体か別個体か不明の小破片が接着する。また、二方向の木質が上下に重なって接着している所が1箇所ある。			底上27cm 出土時は完 形で、現状 は先鋒と蓋 を欠損 [12]
37 刀子 鉄製品	刃幅 1.0 長 残 6.4 重 残 4.99g	横部は平塚で、または弱く丸味を持つ。横部は3mm。先端部は弱いフクラ状。表面に有機質などは残っていない。			底上1cm 刃部先鋒側 [7]
38 曲げた 刀子 鉄製品	刃幅 1.4 長 7.5 重 18.43g	刃部が折曲げられている。横部は5mm。同一蓋部は錆が固着している。確実な形状がよくわからないが、浅い溝を持って横部5mm・刃幅約3mm前後の蓋になる可能性が高い。刃部の片面に斜位の木質が付く。反対面には10本/2mm程度の密度で横部の糸が平行して付く。この糸の下には木質などは見られず、錆が浸透した土質だけのようである。			埋土中 完形 「フク土」

S1-39 (第99図、写真版14・39)

本建物跡は、調査区の南西部にあり、台地上の南斜面に位置する。重複関係としては、SI-38より新しく、SI-38の南側を切っている。本建物跡は覆土でほとんど削平されてしまっているため、壁セクションからは判断できないが、図示した平安時代の刻書土器がSI-38の南側から出土していることから判断して、SI-38よりも新しいと判断した。

残存している部分が、南東コーナーとSI-38の上ののった床の一部だけのため、平面形は、確定できない。推測するに東西不明、南北2.5m以上の方形を呈し、主軸方向はMN-29°-E程度を示すと思われる。はっきりしている南東コーナーは、107°程の鈍角で、南壁に近づくほど床面は浅い。

出土遺物 土師器杯2点を伏せて重ねた状態で出土した。1の上に2を入れて、それを伏せた状態である。重ねて灯明具に使っていた杯を、さかさまに遺棄した可能性がある。杯の特徴はかなり異なる。どちらも、内面に焼成後の刻書「上万」が見られる。

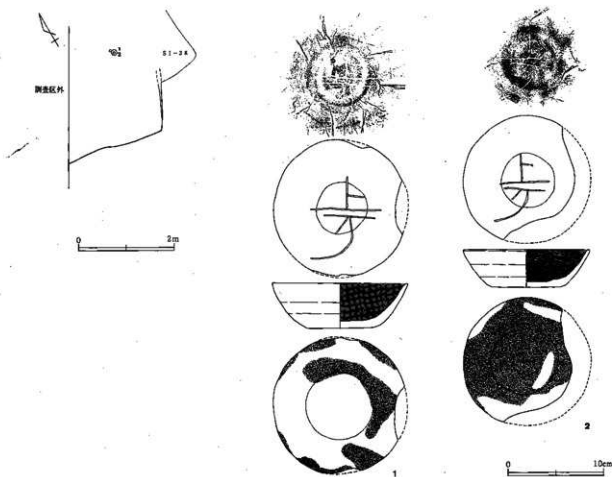
第121表 SI-39出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 焼 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 杯 土師器	口 14.2 底 7.0 高 4.8	厚手で重い。体部下端は丸味を持つ。内面はロクロ目が弱く、外面のロクロ目のほうがやや目立つ。内外ともに摩擦して調整痕が不明瞭。外面体部下端の手持ち裏面は現状では調整できない。外面の底面はおそらく手持ち裏面。内面の裏磨きの有無も摩擦して不明瞭だが、底面を研磨しているようなので、底磨き後に黒色処理している可能性が高い。内面底面に焼成後の刻線「上万」がある。内面は黒色のため不詳だが、外面に油塗があるので、灯明具だろう。	2.5Y8/2 灰白色	やや緻密で黒・透明磁粒多量、白・赤磁粒少量。	伏せた杯を 2枚重ねた うち上層。 [15/9]埋 土は全周 [1]
2 杯 土師器	口 13.4 底 7.3 高 4.1	全体に薄く軽い。体部下位がわずかにふくらんだ後、口縁部まで直線的に開く。内外面ロクロ強。底面裏切り難した後、無調整または軽い磨で。内面は体部横方向、底部多方向裏磨きの後、黒色処理。内面に焼成後の刻線「上万」あり。外面体部全体にやや薄く油塗が付着するが、内面は黒色のため不詳。	2.5Y8/4 淡黄色	緻密で黒・細砂や や多量、透明磁粒 と白・赤磁粒少量 軟質。	伏せた杯を 2枚重ねた うち下層。 [15/12]埋 土は全周 [2]

第122表 SI-39 平安時代 出土遺物数一覧表

	杯・碗	鉢・皿	蓋	高杯	鉢	小形土器	壺・瓶	小形壺	長壺	甕	大甕	焼土塊	その他
土師器	6												
土師器								有					
須恵器	平2							1					
須恵器								1					
須恵器	平1							1					

須恵器は長壺か瓶の体部1片が新治産産、他は三和産産。
古墳時代終末期の土師器少量混入。



第99図 八幡根遺跡 SI-39 遺構・遺物

SI-40 (第100図、写真図版14・39~40)

本建物跡は、調査区の南西部にあり、台地上の南斜面に位置する。重複関係としては、SI-41より古く、SI-41の竈煙道部先端によって、南壁の一部を切られている。

平面形は、東西3.8m、南北4.0mのわずかに南北に長い方形を呈し、主軸方向はMN-26°-Eを示す。壁は確認面から西壁で16cm程、東壁で5cm程、南壁で12cm程遺存しており、その立ち上がりは、西壁で60°程、東壁で40°程、南壁で55°程の傾きである。周溝は検出されなかった。床面は中央部が高く、南壁際に向かっては段を持ちながら、東壁際に向かってはなだらかに傾斜しており、その比高差は南壁際で18cm、東壁際で16cmである。また、建物跡中央部北側に南北154cm、最深28cmの床下土坑があり、そこを粘性のある黒褐色土で埋め戻して、貼り床にしていた。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北壁中央(A号竈)と北壁東寄り(B号竈)に1基ずつ、計2基存在する。土層断面から考えて、古いほうの竈(A号竈)を埋めてから、新しい竈(B号竈)を構築していると思われる。A号竈の残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。掘形は、北壁を幅78cm、奥行き58cm程の平面舟首形に掘り込んでいる。その煙道は、燃焼部奥から20°程の傾きで立ち上がり、いったんなだらかになった後、A'の南31cmの所からは47°程の傾きで立ち上がっている。燃焼部奥から煙道にかけて、焼土が最深18cmの厚さで認められた。A号竈は廃棄された後、一部を粘土ブロックと焼土粒子を含む黒褐色土で埋め戻し、北壁に復場していた。

B号竈の残存状況もあまり良好ではないが、竈内には、支脚と思われる川原石、その上に逆さに載せられた坏(2)、竈で使用されたと思われる甕(5)などが残されていた。刻書のある破破片(6)が東部に立っていて、右袖材の可能性がある。掘形は、北壁を幅79cm、奥行き83cm程の平面舟首形に掘り込んでいる。その煙道は、燃焼部前から12°程の傾きでゆるやかに立ち上がり、A'の南22cmの所からは50°程の傾きで立ち上がっている。A号竈程の明確な焼土層は確認されず、比較的短い期間で廃棄された竈である可能性が高い。

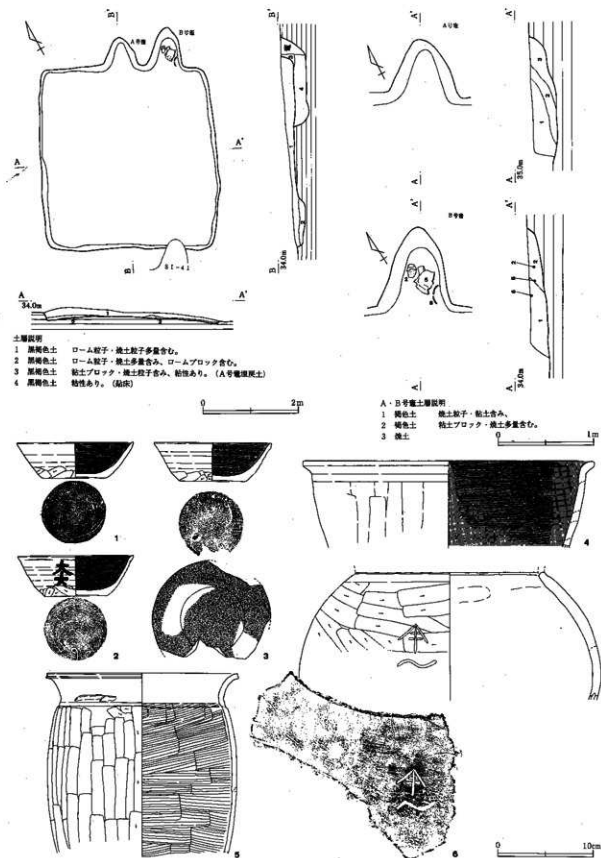
埋土は4層に分層される。おおむね、豊蔭が壁の崩落層と思われ、ローム粒子・焼土粒子を多量に含み、2cm大のロームブロックも含む黒褐色土である。その外は、ローム粒子、焼土粒子を多量に含む黒褐色土である。

出土遺物 土師器坏(1~3)は、回転糸切り離しの後に体部下端を斜めに手持ち篋削りするものである。B号竈の支脚の上に伏せてあった坏(2)は、黒色処理の炭素が、破面に接するごく一部で失われているが、他は良く残っている。この坏が火を受けていないということであり、竈の燃焼が終了してから支脚の上にこの坏を伏せたことがわかる。この坏の外面には「大」を上下に重ねたような墨書がある。B号竈付近から出土した鉢(4)は、須恵器の長甕または鉢を模倣した土師器で、八幡椀東遺跡の製品と考えられる(亀田1996)。B号竈の甕は、外面に「傘~」の刻書を焼成前に行う丸甕(6)と、内面刷毛目調整で頸部外面に明瞭な段を持つ、古墳時代の土師器に似た長甕(5)がある。ただし、6の甕の文字が「傘」であるのかどうかは、確実ではない。

第123表 SI-40出土遺物

番号 種類 器名	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 底 高 12.4 6.8 3.8	体部はわずかに内彎する。体部はロクロ離での後、下端に手持ち篋削り、外面底部は回転糸切り離し後、1/4周だけ外周手持ち篋削り、糸切り時のロクロは右回転。内面は体部横方向、底部一方向の亀裂き。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白粒・細粒多量、黒・透明細砂少量。 やや軟質。	埋土中 底金剛 体~口1/4 周 「フク土」
2 坏 土師器	口 底 高 12.2 6.6 4.3	平底で、少々上げ底気味。体部外面はロクロ離での凹凸が激しい。体部下端手持ち篋削り。内面は底部一方向、体部横方向の亀裂きの後、黒色処理。外面底部は回転糸切り離し後、無調整。糸切り時のロクロは右回転。外周体部に「大」をふたつ重ねた墨書。	7.5YR6/6 褐色	緻密で白粒・細粒多量、黒・透明細砂少量。硬質。	B号竈の支脚の石の上に伏せた状態 底金剛、体 ~口2/3周 「SI-40B 1文脚」
3 坏 土師器	口 底 高 12.5 6.8 4.1	体部外面はロクロ離での凹凸がひどい。外面体部下端篋削り。底部外面は回転糸切り離してやや上げ底気味。糸切り時のロクロは右回転。底面外周の一部に距離で、内面は底一方向、体部横方向の亀裂き後黒色処理。体部外面に広く油煙が付き、灯明具の可能性が高い。内面の油煙は黒色処理のため不明。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細粒・透明細砂やや多量、黒細粒少量。 やや軟質。	埋土5/6周 体~口7/12 周 「B号竈」
4 鉢 土師器	口 径 31.0	頸部は外面に明瞭な段、内面には丸味をもって外へ折れ、口縁端外面は外面に不明瞭な面を持つ。外面は体部離後の後、口縁部に横溝で、内面は亀裂きの後、黒色処理。八幡椀東遺跡か。	10YR7/4 にぶい黄褐色	やや緻密で白細粒多量、黒・透明細砂少量。 やや軟質。	竈 口~/8周 「竈」
5 甕 土師器	口 径 20.2 20.2	薄く、頸部は外面に鋭い段、内面に鋭い稜を持つ。口縁端部外面に凹線を持つ。外面は口縁部横溝で、頸部篋削り。頸部は成形時の凹みを残す。内面は頸部横溝毛、口縁部横溝で、外面上位にスス付着。中位以下は加熱赤化。	5YR6/6 褐色 黒斑あり	やや粗い。透明砂・細砂と赤・白細粒多量、白・灰色砂と黒細砂少量。 軟質。	B号竈袖材 口~体5/12 周 「SI-40B 2 甕」
6 甕 土師器	口 径 20.0 32.0	厚い。頸部でおそらく外反する裏の頸部を打ち欠いて削って水平にしている。外面は頸部上半に横方向篋削り、頸部横溝で、胴部下半は唇面が荒れて調整不明。内面胴部は調整が著しいが、おそらく横溝で、外面胴部に浅成前の刻書あり。書き順は、横線2本→縦線→左下がり線→右下がり線。左下がり線と右下がり線の前後は迷いかもしれない。横線2本は右から左へ、他は上から下へ書いている。この文字の下は「~」が1本、左から右へ書いている。	10YR7/4 にぶい黄褐色	やや粗い。白・黒細砂多量。白細粒・灰色砂・透明細砂少量。 やや軟質。	底上15cm 頸~胴上半 部~/4周 「3甕」

第3章 発掘調査された遺構と遺物



第100図 八幡根遺跡 SI-40 遺構・遺物

第124表 SI-40 平安時代 出土遺物数一覧表

	坏・柄	鉢・皿	壺	高坏	鉢	小形土器	甕・瓶	小形甕	長甕	甌	大甕	焼粘土塊	その他
土師器	口縁部	19				1			8				
土師器	底部	平底11							有				
須恵器	口縁部	1							6				
須恵器	底部	平底1											
須恵器	底部	平底1								1			

須恵器は坏口縁と坏底各1点が三和窯産。甌底1点は産地不明(三和窯産か?)
古墳時代前期の土師器少量と、終末期の土師器多量混入。

S1-41 (第101図、写真図版14・53)

本建物跡は、調査区の南西部にあり、台地上の南斜面に位置する。重複関係としては、SI-40より新しく、SI-41の竈煙道部先端がSI-40の南壁の一部を切っている。

平面形は、東壁と南壁東側が削平されてしまっていてはっきりしないが、確認された範囲では、東西4.0m程、南北3.5m程のやや東西に長い方形を呈し、主軸方向はMN-30°-Eを示す。北壁上竈東に東西幅62cm程、南北幅34cmの建物跡内に突き出た突出部を持つが、その用途は不明である。壁は確認面から西壁で17cm程、北壁で13cm程遺存しており、その立ち上がりは、西壁で54°程、北壁で70°程の傾きである。周溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北壁中央わずかに東寄りに位置する。残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。掘形は、北壁を幅72cm、奥行き61cm程の平面舟首形に掘り込んでおり、さらに、北壁とその前の床面を長径53cm、短径43cmの不整な楕円形に掘り窪めている。その断面は皿状で、深さは床面から8cmである。煙道は、燃焼部奥から43°程の傾きで立ち上がっている。また、燃焼部奥から煙道にかけて、焼土が最深16cmの厚さで認められた。

堀土は2層に分層され、床面直上がローム粒子、焼土粒子を多量に含み、2cm大のロームブロックも含む黒褐色土である。上層は、ローム粒子、焼土粒子をやや多量に含む黒褐色土である。

出土遺物 遺物は非常に少なく、しかも小破片である。坏類は細片なので図示していない。ロクロ成形・内面黒色処理の土師器坏細片が1片あり、底径は不明だが回転糸切りで、切り離し後は無調整のようである。3は頸部が明瞭な「コ」の字形になる。煮炊き用の可能性もある軟質焼成の三和窯産須恵器長甕(1)が竈から出土している。2も三和窯産で、胴部下位は、回転を利用しない横方向の篋削りがかかなり幅広い。床面に録が2点あり、うち1点は基部に折り曲げ加工がない(6)。

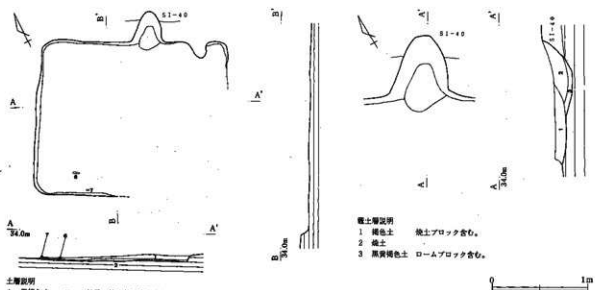
古墳時代終末期の土師器が、掲載した小形甕1点(5)の他にも多量に出土し、同じく土師器製作関連遺物も少量ある。SI-40もSI-41も平安時代の堅穴建物であるから、これらの古墳時代遺物は混入または流入品であろう。

第125表 SI-41 平安時代 出土遺物数一覧表

	坏・柄	鉢・皿	壺	高坏	鉢	小形土器	甕・瓶	小形甕	長甕	甌	大甕	焼粘土塊	その他
土師器	口縁部	1						1	2				
土師器	底部	1							有				
土師器	底部	平底1							1				
須恵器	口縁部	1							2				
須恵器	底部								4				
須恵器	底部												

鉄錐2点。須恵器はすべて三和窯産。
古墳時代終末期の土師器多量と、焼粘土塊・土師器削りかす各1点混入。

第3章 発掘調査された遺構と遺物

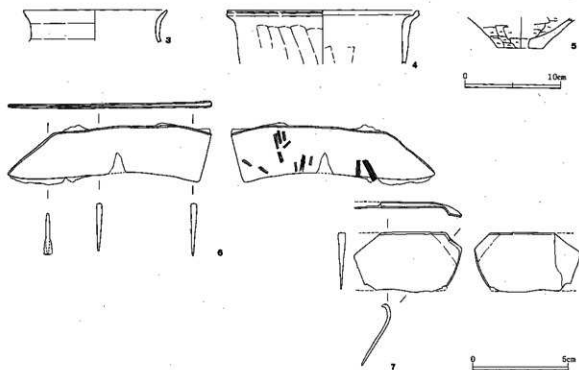


土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子多量含む。
 2 黒褐色土 ローム粒子・焼土粒子少量・ロームブロック含む。

焼土層説明

- 1 焼土 焼土ブロック含む。
 2 焼土
 3 黒褐色土 ロームブロック含む。



第101図 八幡根遺跡 SI-41 遺構・遺物

第126表 SI-41出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 葉 須恵器	大 復約25	胴部はゆるく内彎する。胴部外面は木目平行の平行叩き目。内面は縁上部が明確で凹凸がはばしい無文当具帯。底の天地は透かもしれないが、上部は灰色で下部は浅黄褐色などで加熱使用した可能性がある。三和原産。	10YR8/3 浅黄褐色	焼い。白粒・細粒多量、半透明・白・灰色砂少量。硬質。	甕 胴/6周 「甕」
2 葉 須恵器	大 復約30	胴部はゆるく内彎する。胴部外面は木目平行の平行叩き目の後、下半部に回転を判別しない旋削り。寛形りの幅は現存破片下縁から上へ4cm。内面は鏡面銅製の状態で、粘土積み上げ痕も残し、凹凸が激しい。	10YR6/3 にぶい黄褐色	粗い。白粒・細粒多量、透明・黒黒砂少量。硬質。	甕土中 胴/6周 「フタ土」
3 小形 土師器	口 復15.2	厚く、口縁部内面は明確な線を持たず、外反し、外面は線を持って「コ」の字形になる。口縁部内外面銅製で。	5YR5/8 明赤褐色	やや緻密で黒黒砂多量、白・赤黒砂と透明細砂少量。やや軟質。	甕土中 口/6周 「フタ土」
4 葉 土師器	口 復約20	口縁部は外面に霽い線を持って大きく開き、口縁部を上につまみ上げる。口縁部外面はゆるくくぼむ面をなす。外面は口縁部銅製の後、胴部に藍方内の施で。内面は黒施で後、口縁部-胴部に銅製の。	2.5YR6/6 褐色	やや粗い。白細粒多量、白・透明細砂と黒黒砂少量。やや軟質。	甕土中 口/12周 「フタ土」
5 甕 土師器	底 復 4.8	底部は厚く、中央に焼成前に推定径3cm程の孔をあける。外面は胴部下縁に横溝削り、底面多方向削削り。胴部内面は横溝削り、孔内は施で。古墳時代終末期の遺物が入る。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細粒多量、黒・透明細砂やや多量。軟質。	甕土中 底/3周 「フタ土」
6 鐵 製品	全長 11.0 刃長 10.1 幅 2.7 重132.97g	縁は先端から3.4cmの所で少し急に曲がり、そこから先端縁は縁が薄くて縁に面を持たない。そこから基部縁は縁厚2.2-3mm。刃縁は刃先から基部までずっと厚く刃部状になり、基部個縁も刃縁と同様に厚く仕上げられる。基部折り返し加工はない。片面だけに傾斜の著しい幅1.5-2.5mmの繊維質が付着している。この繊維がついている面を上に向けて出土した。			床底 刃の一部を除いて変形 「床底」
7 鐵 製品	長 残 5.7 幅 残 3.2 重残14.91g	縁面はまったくで縁厚はやや厚く9mm。基部付近では1.0-1.5mmまで全体が縁を手術へ約8mm折り返す。各面ともに木質や有機質の痕は見られない。			床底 先端寄り 欠損 「2床底」

S1-42 (第102-103図、写真図版14・40)

本建物跡は、調査区の南西部にあり、台地上の南斜面に位置する。重複する遺構はない。北東にSI-37Aが近接する。

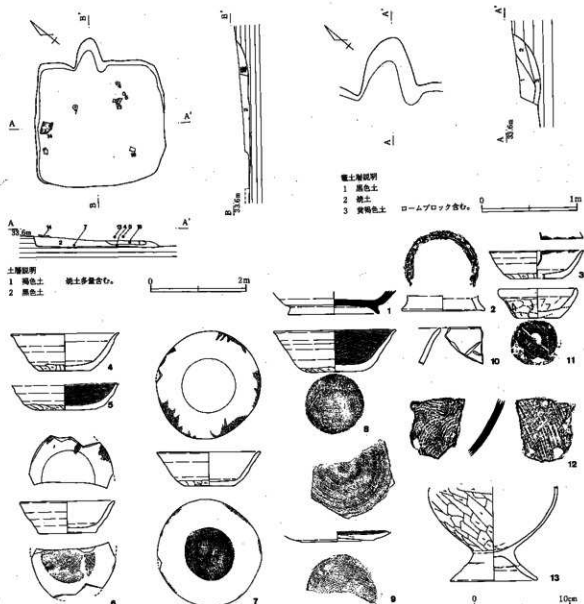
平面形は、東西2.8m、南北2.7mのほぼ正方形を呈し、主軸方向はMN-50° - Eを示す。壁は確認面から西壁で22cm程遺存しており、その立ち上がりは、75°程の傾きである。南壁と東壁の南側は、すでに削平されており、その痕跡をとどめるのみである。周溝は検出されなかった。床面はほぼ平坦である。柱穴、貯蔵穴も検出されなかった。

竈は、北壁中央やや西寄りに位置する。残存状況は悪く、掘形を確認することにどまる。掘形は、北壁を幅65cm、奥行き55cm程の平面舟形に掘り込んでいる。その際、右袖の付け根にあたる部分のローム土を掘り残して、袖部としていた。煙道は、燃焼部中央から28°程の傾きで立ち上がっている。また、燃焼部奥から煙道にかけて、焼土が最深12cmの厚さで認められた。

埋土は2層に分層された。東側上層に焼土を多量に含む褐色土がみられるほかは、黒色土である。

出土遺物 灯明具に使った土師器坏が多い。3・6は小形で、灯明具の専用器種であろう。7は少し大きい。胎土や底部周辺の調整が3と共通し、これも灯明具用の器種かもしれない。これらも含めて、土師器坏は底面の外周(8)または全面(3・4・5・7)を調整するものが多い。

瓦もやや多い。確認できた隣部数は丸瓦3・平瓦2である。粘土板で成形し、平瓦は桶巻き作り、丸瓦は2分割で製作している。軒丸瓦(18)は表面が黒色で裏面が灰色の、いぶし焼きである。茨城県結城市の結城八幡瓦窯と胎土が共通することや、斜格子叩きが下野薬師寺に見られないことから、結城庵寺の瓦である可能性がある。ただし、結城庵寺出土瓦の斜格子叩き痕と現物同士を対照して確認したわけではない。

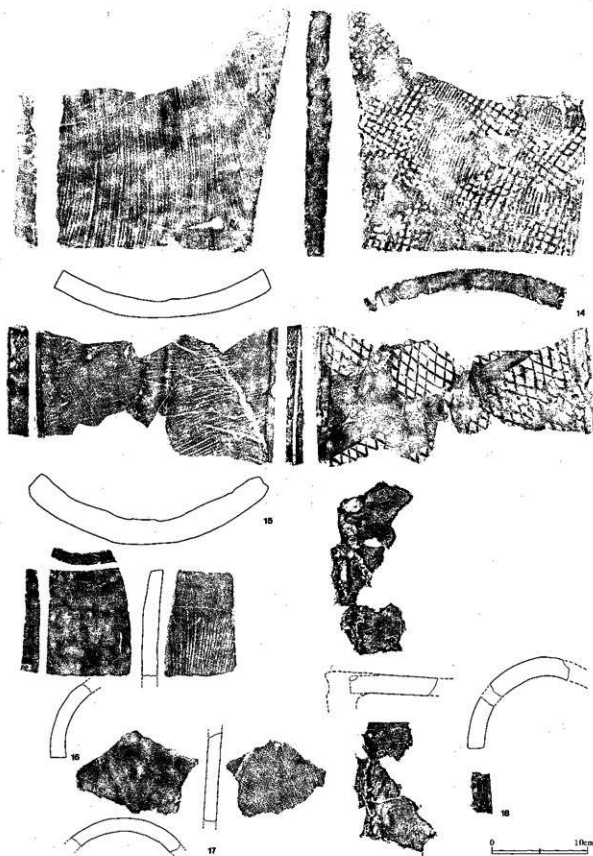


第102図 八幡根遺跡 SI-42 (1) 遺構・遺物

第127表 SI-42出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 質 成	出土状況 残存状況 注記
1 高台付 坏 須恵器	高台 9.6	底部は厚い。高台は外面はゆるく外反し、内面は直線的に固く。底面はロクロ右回転の廻りりの後に高台を貼り付けて、高台の両側を内側1cm、外側5mmの幅でロクロ削で、三和面削。	5Y7/1 灰白色	緻密で白細粒多量、透明細砂少量。	不明 高台1/2間 やや硬質。
2 高台付 坏 土師器	高台 8.8	高台は踵面が広がり、外周で接地する。坏身底部面の回転未切り離し痕が高台の上面に陰影として残る。内外面ロクロ削で。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白細粒と黒細砂やや多量、透明細砂少量。	不明 高台2/3間 やや硬質。
3 坏 土師器	口 径10.0 底 径 5.4 高 2.9	薄く軽い。ロクロ削での凹凸は外面は強く、内面はなめらか。外面は底面多方向の後、体部下縁に横方向の手持ち廻り。口縁部内外面に油漉付着。灯明具専用の小形器種。	7.5YR7/6 褐色	緻密で白細粒・黒細砂少量、透明細砂ごく少量。	不明 口1/6 底1/3間 軟質。

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
4 坏 土師器	口 11.4 底 5.5 高 4.0	体部外面はロクロ機での凹凸が明瞭、口縁部が明確に外反する。外面は体部下端に手持ち彫削り、底面にはほぼ直交する二方向の手持ち彫削り。内面はロクロ機で、凹凸が目立たない。内面は磨滅しているが、磨き、黒色処理ともに行っていないと考えられる。	2.5YR/3 淡黄色	やや緻密で黒細砂多量、透明細砂と赤・白細砂少量。軟質。	床直 口3/4周 底全周 「1床直」
5 坏 土師器	底 6.2	平底の外周部から体部下端に丸珠を持つ。外面体部はロクロ機での凹凸が深い。外面は底全面に多方向の手持ち彫削り、体部下端は斜方向の手持ち彫削り、底面中央を少し磨き。内面は底面一方向、体部横方向の磨き跡の後、黒色処理。	10YR6/3 にぶい黄褐色	やや緻密で白細砂と黒・透明細砂少量。やや硬質。	底上21cm 底全周 「2」
6 坏 土師器	口 復10.1 底 6.0 高 3.4	やや薄く軽い。体部はロクロ機での凹凸が外面で強く、内面はなめらか。底部外面は回転糸切り難し後無調整。内面2~3ヶ所に油煙が付く。灯明具専用の小形容器。	7.5YR7/6 褐色	緻密で白細砂と黒・透明細砂少量。軟質。	不明 底1/2周 口1/9周
7 坏 土師器	口 11.0 底 5.4 高 3.6	やや薄く軽い。体部外周のロクロ機での凹凸がやや目立つ。糸切り難し後、底面を一方の手持ち彫削りの後に体部下端外面に手持ち彫削り、内面はロクロ機で、口縁部内外面の5ヶ所に黒色の油煙が残る。	5YR6/6 褐色	やや緻密で白粒・細砂やや多量、黒粒・透明細砂と赤・細砂少量。軟質。	床直 変形 「8床直」
8 坏 土師器	口 復12.8 底 6.0 高 4.4	体部外面のロクロ機では凹凸があまり目立たない。口縁部が外反する。粘土は糸切り難しの後に外周を手持ち彫削り、外面は底面から手持ち磨き。内面は底面一方向、体部5~6単位位の磨き。内面は黒色処理していたようで、底面だけに黒色が残っている。	10YR6/4 にぶい黄褐色	緻密で黒細砂やや多量、透明細砂・白細砂少量。軟質。	不明 口3/4周 底全周
9 瓦 土師器	底 7.4	薄く、糸切りでかなり上げ底になる。底部外面は回転糸切り難し後、外周のこく一部を手持ち磨削り。内面は底面一方向、体部横方向の磨きで、磨きは凹凸がかなり強い。黒色処理は現状ではみられない。	10YR7/4 にぶい黄褐色	やや緻密で白粒・細砂多量、赤細砂と黒・透明細砂少量。硬質。	不明 底1/2周
10 坏 土師器	口 復約15	大形の坏または甕で、口縁部が少し外反する。口縁部内外面は凹凸の少ないロクロ機で、体部外面に焼成後に残った「人」字形の刺青(?)あり。	10YR6/6 明黄褐色	緻密で黒・透明細砂と白細砂少量。軟質。	不明 口1/12周
11 小形土 師器	口 復 8.2 底 4.6 高 3.1	全体に厚く平底で、口縁部は外面に壁を持って立ち、内面は外傾する。粘土は約3枚程度で成形し、外面体部は成形時の粘土のヒビを残したまま乾燥。底部外面は平行な直線の凹凸が全体に平行してさらに一線あり、成形時の痕か。内面体部は磨滅で、口縁部内外面を磨滅し、内面全面と外面口縁部に磨き上げ。古墳時代終末期の遺物と推定。	10YR6/3 淡黄褐色	やや緻密で黒細砂多量、白・赤細砂少量、透明細砂少量。軟質。	不明 底全周
12 大甕 須恵器		甕としてはやや薄く、中形の器種か。胴部下半とて図示したが、天施は逆の可能性もある。外面は木直交の平行叩き目。内面は同心円文で真鍮。古墳時代終末期の遺物と推定。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白細砂少量、赤粒・黒細砂ごく少量、透明細砂少量。軟質で器の芯は酸化気味。	不明 胴部破片
13 台付甕 土師器	台 復 9.2	胴部は薄い。台は途中まで外面に圓い壁を持って開く。外面胴部磨削りの後、台部内外面を磨滅で、胴部内面は磨滅。胴部外面は中位以上にスチヤ層、内面にオコゲ(?)付着。	2.5YR5/8 明赤褐色	緻密で黒細砂やや多量、透明細砂と白細砂少量。やや硬質。	底上21cm 台1/8周 胴1/4周 「4」
14 平瓦	長 残26.8 幅 25.4 厚 2.0	粘土板で巻巻作り。両面ともに糸切状条痕を残す。凸面は斜格子叩き目。凹面は布目。横背縁はあまり明瞭ではない。粘土の重ね目や布の縫い合わせ目は見られない。狭幅端と両端面は一面の磨削り。結核八幡瓦磨滅。	2.5YR/4 淡黄色	やや緻密で黒細砂やや多量、白細砂・透明細砂少量。軟質。	底上22cm 狭幅の二隅 残存 「7」
15 平瓦	長 残14.6 幅 25.4 厚 2.1	粘土板で巻巻作り。凸面は腹の施での後に斜格子叩き目。凹面は横背縁を残し、糸切状条痕の後に布目。横の縫い合わせ目が斜位に見える。両側面はやや縁に粘土をひきするような磨滅で三面の面取り。そのうち一方の側面にはおそらく切断時に深い凹線状に溝が入る。側面には指紋がわずかに残り、運搬時のものか。結核八幡瓦磨滅。	2.5YR/3 淡黄色	緻密で黒細砂やや多量、白細砂少量。軟質。	不明 狭幅の二隅 残存
16 丸瓦	長 残10.8 幅 残 6.5 厚 1.2	素材は粘土板。狭幅端が薄くなり、狭幅面を斜めに削るのが特徴的である。凸面は狭幅面から4.5cmの範囲を横割りにした後、全面磨滅で、凹面は糸切り状条痕の後に布目。端と側面は磨削り。結核八幡瓦磨滅。	10YR7/3 にぶい黄褐色	やや緻密で黒・透明細砂多量、白細砂少量。軟質。	底上9cm 狭幅端の隅 部 「5」
17 丸瓦	長 残 9.7 幅 残11.7 厚 1.4	破片の天施は逆の可能性もある。素材は粘土板。凸面は腹方向の施での後、破片の上部に横割り。凹面は糸切状条痕の後に布目。甕に使用したため凸面に一線が付き。結核八幡瓦磨滅。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白細砂多量と黒・透明細砂少量。やや軟質。	甕 端部・側面 は残っていない。「甕」
18 軒丸瓦	長 残 9.2 高 残 9.3	おそらく最大径20cm前後の円筒を分割して製作。凸面は瓦高面を接合して粘土補充後に縦方向の磨削り。凹面は布目後の後に瓦高面を接合して粘土補充後に凹面方向の指施で、側面は磨削りで、内面貫り角を少しおとして二面にする。焼成はよぼし焼き状。結核八幡瓦磨滅。	表面裏面は 7.5Y4/1 褐色 裏面5Y8/2 灰白色。	やや緻密で白粒・細砂と黒細砂多量、透明細砂少量。軟質。	不明 側面長4cm 残、瓦高接 合部1/2周 「S1-42」



第103図 八幡模遺跡 SI-42 (2) 遺物

第128表 SI-42 平安時代 出土遺物数一覧表

	坏・椀	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形甕	長甕	甌	大甕	焼結土塊	その他
土	口縁部	11							3				
師	体部	有							有				
器	底部	平12 台2						台7	4				
須	口縁部	2											
惠	体部	1								5			
器	底部	平3 台1											

丸瓦14片・平瓦9片・軒丸瓦3片。須惠器は長甕か甌の体部3片が新治窯産で、他は三和窯産。
古墳時代前期の土師器1片、終末期の土師器多量・須惠器1片・焼結土塊4点が混入。

SI-44 (第104~105図、写真図版15・41・42)

本建物跡は、調査区の南西部南寄りであり、台地上の南斜面に位置する。重複関係としては、SI-43より新しく、SI-43の北西コーナーから北壁西側にかけての部分に切っている。

平面形は、東西3.4m、南北3.0mのわずかに東西に長い方形を呈し、主軸方向はMN-17°-Eを示す。壁は、確認面から西壁で48cm程、東壁は攪乱を受けてはっきりしないが、推定で34cm程、南壁で39cm程遺存しており、その立ち上がりは、西壁で67°程、東壁で推定65°程、南壁で71°程の傾きである。周溝は検出されなかった。床面は、壁際を除き一段深く掘り窪められ、いわゆる床下土坑になっている。その平面形は、東西2.8m、南北2.5mの隅丸方形を呈し、深さは壁際から最深28cmである。その床下土坑を、ロームブロックを多量に含む褐色土で埋め戻し、貼り床にしていた。その貼り床を施した床面も東壁際・南壁際が高く、それぞれ西壁際・北壁際に向かってゆるやかに傾斜しており、その比高差は西壁際で16cm、北壁際で20cmである。柱穴、貯蔵穴も検出されなかった。

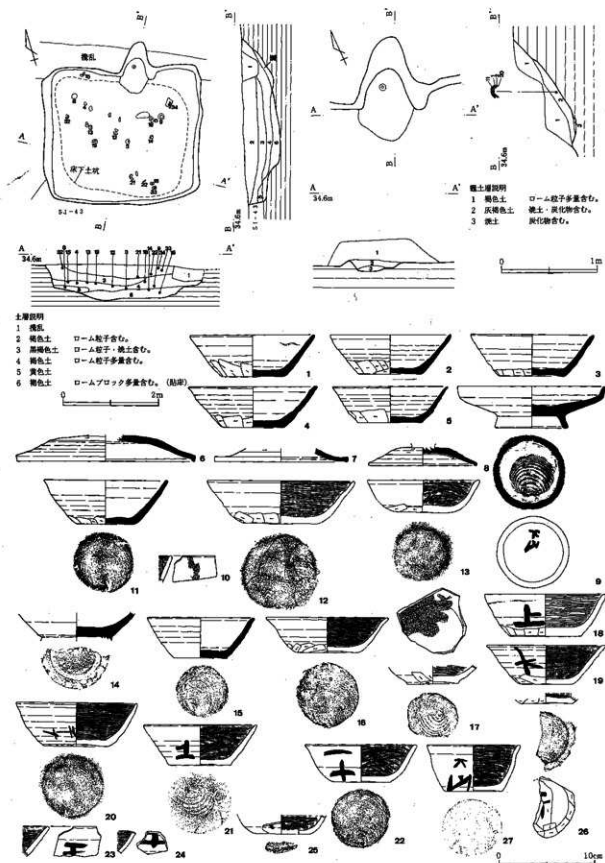
竈は、北壁中央やや東寄りに位置する。残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。掘形は、北壁を幅83cm、奥行き60cm程の平面舟首形に掘り込んでいる。その際、右袖の付け根にあたる部分のローム土を、若干掘り残して袖部としていた。また、北壁とその前の床面を、東西58cm、南北76cm程の平面不整形の隅丸形に掘り窪めている。その断面は皿状で、深さは床面から最深10cmである。煙道は、燃焼部奥から37°程の傾きでゆるやかに立ち上がっている。焼土は燃焼部の底に最深7cm程しかたまっていなかった。あまり使用されなかった竈であると思われる。燃焼部から、須惠器と土師器の坏が4枚逆位で重なった形で出土した。一見すると支脚として使用したようにも思われるが、20の土師器の内面の黒色処理が燃焼で消失していないので、竈を廃絶したときに儀礼行為として4枚の坏を重ねたものかもしれない。

埋土は攪乱を除き、5層に分層される。概ね、床面直上がローム粒子を多量に含む褐色土、中層がローム粒子、焼土を含む黒褐色土、上層がローム粒子を含む褐色土である。

出土遺物 量が多い。この建物跡では12・13・17~21のように底面を手持ち削り調整するものがやや多い。11・16・22・25・27のように、回転糸切り離しの後に体部下端は調整しても底面を調整しない土師器坏が他の建物跡では多い。食器類の中では須惠器の割合が多く、須惠器坏も一定量が見られる。また、金属器模倣形の甕がまだ見られる(9)。三和窯跡群の須惠器が鋭切り離しなのに対して、9は回転糸切り離して橙色の焼成なので、土師器である可能性も残る。墨書土器は土師器坏に多く、「子」・「土」・「上」・「十一」・「大」と、「下」および「下山」とがある。「下」または「大」と「山」の墨書の類例はSI-46Aにも見られる。

図示していないが、出土遺物中には古墳時代終末期の土師器も非常に多い。平安時代の遺物にくらべると破片ばかりだが、量は古墳時代のほうが多い。この中には、SI-43から流入した遺物が多いと考えられる。

第3章 発掘調査された遺構と遺物



第104図 八幡根遺跡 SI-44 (1) 遺構・遺物

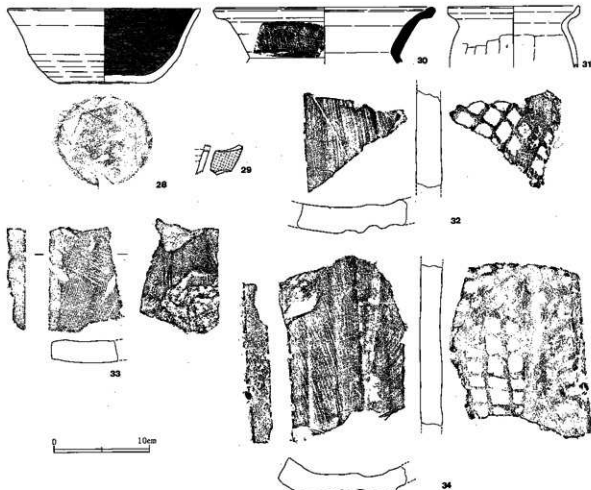
第129表 SI-44出土遺物

番号 種類	量 目	法 量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 須器	口 底 高	13.2 6.6 4.3	薄く、軽い。外面体部のロクロ目が強い。体部内面はそれほどではない。体部外面下半は横方向、底部外面は一方の裏側。体部内面は内傾方向に顕著する所が多い。三和腐産。	5Y8/1 灰白色	粗い。白粒・細粒多量。黒・赤・透明・灰色細砂少量。硬質。	甕底に4枚重ねた坪の上から2番目。底全面 [C15/12周 「龜 2」]
2 坏 須器	口 底 高	12.6 6.6 4.2	薄く、軽い。体部外面ともにロクロ目が強い。外面は底面に一方の手持ち裏側りの後、体部下端に手持ち裏側り。三和腐産。	5Y7/1 灰白色	やや粗い。白粒・細粒多量。透明細砂少量。硬質。	甕底に4枚重ねた坪の上から3番目。変形 [「龜 3」]
3 坏 須器	口 底 高	12.9 6.7 4.4	器厚は薄い。胎土直質で重さ感がある。体部内外面のロクロ面での凹凸が強い。外面は突き切り難し後に底面に一方の手持ち裏側りをした後、体部下半に手持ち裏側り。底面は上げ底気味。外面口縁部の一部に緑灰色の薄い自然釉。甕の内腐産の可能性が高い。	5Y6/1 灰色	緻密で不透明の白砂・細砂と白磁粒やや多量。硬質。	底上20cm [C15/12周 底全面 「7」]
4 坏 須器	口 底 高	13.6 6.5 4.4	平底で、ロクロ面での凹凸は体部外面で強く、内面はややなめらか。底部外面に多方向の後、体部外面下に横方向の手持ち裏側り。三和腐産。	2.5Y7/2 灰黄色	やや粗い。白磁粒・透明細砂多量。白粒少量。やや硬質。	底上19cm [C15/12周、底全面 「18」]
5 坏 須器	口 底 高	12.9 6.9 3.8	薄く平底で、体部は内外面にロクロ面での凹凸が目立ち、特に外面は強い。底部外面に一方の手持ち裏側りの後、外面体部下端に手持ち裏側り。三和腐産。	5B5/0.5 青灰色	緻密で白磁粒多量。透明細砂少量。硬質。	甕土中 [C15/4周 底上/2周 「アケ土」]
6 坏 須器	口 底 高	18.8 7.2 2.8	やや厚く、口縁部は内面に明瞭な稜、外面に丸味を持って短く下へ折り、肩部は大きく仕上げられる。内外面はロクロ面での凹凸が目立つ。天井部外面はクロ右回転の回転裏側りの後に、縁の裏側にロクロ面での新治腐産。	5Y7/1 灰白色	緻密で白磁粒と白雲母粉少量。黒・透明細砂ごく少量。軟質。	甕土中 [C15/9周 天井/13周 「アケ土」]
7 坏 須器	口 底 高	14.2	薄く、口縁部は内面に明瞭な稜を持って外へ短く。内外面ロクロ面での後、外面天井部にクロ右回転の回転裏側り。三和腐産。	10BG6/1 青灰色	緻密で白磁粒多量。透明細砂少量。硬質。	不明 [C15/12周]
8 坏 須器	口 底 高	11.4 7.9 1.9	薄い。口縁部はわずかに内側へ折る。外面の口縁部には丸味を持つ。天井部内外面はロクロ面での凹凸が目立つ。天井部中央外面はクロ右回転の回転裏側り後に縁の裏側にロクロ面での新治腐産。縁は嵌合面から割かれたのではなく、その下の天井部も割られるほど強い力でこわれているので、打ち欠いたのかもしれない。蓋内面中央は少し摩滅し、靨または食器に転用している。三和腐産。	2.5Y8/1 灰白色	緻密で白磁粒多量。白粒・透明細砂少量。硬質。	底上5cm 底大損、他 は全面 「18」]
9 高台付 須器	口 底 高	15.6 7.7 4.4	薄く重い。高台は外面で接地する。体部内外面はロクロ面での凹凸は回転裏側りの後、高台を貼り付けて、高台の周囲を鍍金ロクロ面での切り難し時のロクロは右回転。高台内に墨書「下山」あり。胎土は三和腐産と共通する。土師器の可能性も残る。	5YR7/6 褐色	緻密で白磁粒多量。赤粒・黒粒・赤砂多量。やや硬質。酸化炭素焼成。	底上25cm [C15/6周 高台全面 「2」]
10 土 師器	口 底 高	13	体部内外面ロクロ面での内面に重磨きは認められない。内面は全面、外面は縦位に油漉が行き、それ以前に内面を黒色処理していた可能性もある。	7.5YR5/4 にぶい褐色	緻密で白磁粒多量。赤粒と黒・透明細砂少量。硬質。	不明 [C15/12周]
11 坏 須器	口 底 高	13.1 6.1 4.6	薄く軽い。内外面ロクロ面での外面は体部のロクロ目が少し目立ち、体部下段に手持ち裏側り。底部は回転裏側り難し後、無調整。切り難し時のロクロは右回転。三和腐産。	5YR6/8 褐色	やや粗い。白磁粒・黒細砂多量。透明細砂・赤細砂少量。軟質。	甕底に4枚重ねた坪の上から1番目。変形 [「龜、支脚」]
12 坏 土師器	口 底 高	15.6 7.9 4.6	やや厚く重い。体部は外面にロクロ目がやや目立ち、上部が内側で内面口縁部付近に浅い沈積がめぐる。クロ右回転の回転裏側り難し後に、底面外面と体部下端に手持ち裏側り。内面は底面一方、体部横方向の裏側りの後、黒色処理。	7.5YR7/4 にぶい褐色	やや粗い。白磁粒・透明細砂や多量。黒細砂少量。軟質。	底上30cm [C15/12周 底全面 「6」]
13 土 師器	口 底 高	12.0 5.7 3.2~3.7	平底で、体部下端と底面外面の境が不明瞭。底面内面中央が盛り上がり。底面外面は回転裏側り難し後、約半周を一方の手持ち裏側り。体部外面下半は横方向の手持ち裏側り。体部のロクロ面では凹凸が目立たない。底面内面は一方、体部内面は横方向の裏側り。おそろもとは内面黒色処理していたが、全体に二次焼成を受けて炭質がかなり変わっている。	2.5Y8/3 淡灰色	やや緻密で白磁粒・透明細砂・赤粒少量。軟質。	底上28cm [C15/12周、底全面 「13」]
14 高台付 須器	底 高	7.1	底部は厚く、体部は薄くなる。体部内外面ロクロ面での凹凸は、クロ右回転の回転裏側り難し後に、高台を貼り付け、台の両側にロクロ面での非常に硬質で、穴で酸化炭素焼成したと考えられる。三和腐産。	5YR6/6 褐色	緻密で白磁粒と白・黒・透明細砂少量。硬質。	底上11cm 底上/2周 「8」]

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	筋 土 成	出土状況 残存状況 注記
15 環 須部器	口 11.5 底 5.5 高 4.3	体部はやや薄い、底部は厚い。重味がある。ロクロ盤での凹凸は内面では少なく、外面で少し目立つ。底部外面は回転糸切り難し。後、無調整。糸切り時のロクロは右回転。外面底部下端に磨削は行っていない。非常に硬質で、穴間で酸化炭化焼成したと考えられる。三和煎産。	5YR6/8 褐色	緻密で白細粒と黒・透明細砂やや多量。赤細砂少量。非常に硬質。	底上18cm 口2/3周 底一全体周 底「21」
16 環 土師器	口 13.0 底 6.6 高 3.8	体部は薄く、底部はやや厚い。下半は内彎、上半は外反気味。外面は底部回転糸切り難し。後、無調整。切り難し時のロクロは右回転。外面はロクロ盤での後、体部下端に斜めの手持ち磨削り。内面は底部一方、体部横方向の磨削きの後、黒色処理。	7.5YR7/4 にぶい褐色	緻密で白細粒と黒・透明細砂と赤粒少量。硬質。	底上18cm 口5/6周 底3/4周
17 環 土師器	底 5.5	体部はやや薄く、底部は厚い。底部外面はロクロ右回転の回転糸切り難し。後、外周に手持ち磨削り。内面は底部はほぼ一方、体部は横方向の磨削き。現地で黒色処理はみられない。内面底部の1/3周と、外面の残存全面に油磨きが行着。	5YR5/3 にぶい赤褐色	緻密で白細粒・透明細砂少量。硬質。	不明 底はは全周
18 環 土師器	口 12.6 底 7.4 高 4.5	底部は厚く、体部は薄い。体部外面に墨書「上」。外面は体部下端のうち全周の約1/4に手持ち磨削りし、他は磨削りを行わない。底面全面におおむね一方の手持ち磨削り。内面全面は底部一方、体部横方向の磨削きの後、黒色処理は見られない。	7.5YR7/8 褐色	緻密で白細粒やや多量。黒・透明細砂と赤粒少量。軟質。	底上26cm 口5/6周 底全周 底「4」
19 環 土師器	口 12.6 底 5.6 高 4.1	体部はやや薄く、平底で、外面のロクロ目が強い。口縁端部は外反する。底面は雑夷ではないが糸切り難しの可能性がある。底面全面に多方向の後、体部下端に横方向の手持ち磨削り。内面全面は底部一方、体部横方向の磨削きの後、黒色処理。体部外面に墨書あり「大」か。	7.5YR8/3 淡黄褐色	緻密で白細粒やや多量。白・灰色砂と黒・透明細砂少量。軟質。	底上33cm 口5/6周 底一全体周 底「12」
20 環 土師器	口 12.7 底 6.6 高 4.5	体部は薄く、底部は厚くやや厚い。底部外面回転糸切り難し。後、外周手持ち磨削り。糸切り時のロクロは右回転。体部外面ロクロ盤での後、体部下端に幅の狭い手持ち磨削り。内面は体部横方向、底部一方の磨削きの後、黒色処理。	7.5YR7/6 褐色	緻密で白細粒多量。黒・透明細砂やや多量。やや硬質。	底底に4枚 重たた坪の 一重下。 口5/6周 底一全体周 底「4枚」
21 環 土師器	口 12.0 底 6.7 高 4.3	体部はやや薄い。底面外面は平底で、中央は糸切り時に少しくぼむ。体部外面はロクロ目が強い。底面はロクロ右回転の回転糸切りの後、外面を手持ち磨削り。体部外面下端には磨削りは見られない。内面は体部・底部ともにおおむね円周方向の磨削きの後、黒色処理。	7.5YR7/6 褐色	緻密で白細粒と黒・透明細砂少量。やや硬質。	底上45cm 口5/6周 底一全体周 底「11」
22 環 土師器	口 12.0 底 6.1 高 3.9	平底で、口縁部は強く外反する。底部外面は回転糸切り難し。後、無調整。糸切り時のロクロは右回転。体部外面はロクロ盤で、体部下端には磨削りは見られない。内面全面は磨削きの後、黒色処理。体部外面に墨書あり。雑類は土師の口を上に向けて右から左、下から上なので、土師を伏せて「+」と書いたものである。	2.5Y7/4 淡黄色	緻密で白細粒と黒・透明細砂少量。赤粒ごく少量。やや軟質。	底上50cm 底部 底「10」
23 環 土師器	口 復約13	内面は横方向の磨削きの後、黒色処理。外面はロクロ盤で、体部外面に墨書あり。	7.5YR6/4 にぶい褐色	緻密で白細粒多量。黒・透明細砂と赤粒と半透明白砂少量。やや硬質。	不明 口1/18周
24 環 土師器		薄い。体部がわずかに内彎。体部外面ロクロ盤で、内面磨削きの後に、黒色処理。体部外面に墨書あり。	7.5YR8/4 淡黄褐色	緻密で黒細砂多量。透明細砂と白細粒少量。硬質。	不明 小破片
25 環 土師器	底 復 6.0	薄く、平底。外面は底面回転糸切り難し。後、無調整。糸切り時のロクロは右回転。体部はロクロ盤で、内面は底部一方、体部多方向の磨削きの後に、黒色処理。体部外面に墨書あり。	7.5YR7/4 褐色	緻密で白細粒・黒細砂やや多量。透明細砂少量。軟質。	不明 底1/6周
26 環 土師器	底 復 5.5	薄く、平底。外面は底面ロクロ右回転で回転糸切り難しの後に、底面下部に一方、体部下端に横または斜方向の手持ち磨削り。内面は底部一方、体部横方向の磨削きの後、黒色処理。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細粒と黒・透明細砂やや多量。白砂・黒細砂少量。やや硬質。	不明 底1/2周
27 環 土師器	口 10.0 底 6.2 高 4.9	全体に薄く軽い。体部は内彎し、口縁部は外反する。底部外面はロクロ右回転の回転糸切り難し。後、無調整。体部外面はロクロ盤で、内面は底部一方、体部横方向の磨削きの後、黒色処理。体部外面に墨書あり「下山」か?	10YR7/4 にぶい黄褐色 黒斑あり	緻密で白細粒やや多量。白砂・黒細砂少量。やや軟質。	不明 口1/2周 底3/4周
28 環 土師器	口 20.3 底 9.6 高 7.8	やや厚い。体部外面のロクロ目は下半部で強い。外面は底部回転糸切り難しの後、外面を磨削りし、体部下端も狭い幅で手持ち磨削り。内面全面は底部一方、体部横方向の磨削きの後、黒色処理。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で黒・透明細砂と白細粒少量。	不明 口5/12周 底はは全周
29 長頸瓶 灰輪陶器		頸部はわずかに外反している。内面はロクロ盤での凹凸が少し目立つが、外面はなめらかに仕上げる。外面に施釉。後段煎産。	5Y7/2 灰白色	緻密で白細粒・黒細砂ごく少量。	埋土上 小破片 「フク土」

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
30 長型 須恵器	口 復24.0 頸 復16.0	口縁部はやや厚く、体部は薄い。口縁端部は外傾する面をなして、一条の浅い沈線が浅い。口縁部内面は明瞭な沈線を作って断面方形に上端が肥厚する。外面に平行引きの後、内外面ロクロ撫で。頸部外面に積み上げ痕あり。新治産。	10YR5/3 にぶい黄褐色	緻密で白雲母片と白細粒多量。やや硬質。	不明 口1/12周 頸1/8周
31 小形 土師器	口 復14.0	厚く、頸部は内面に弱い沈線を持って外反する。口縁部は上へつまみ上げ、外面が浅い凹線状になる。内面は胴部寛撫での後、口縁部横撫で。外面は胴部上位と口縁部-頸部に横撫で、胴部中位に黒刷り。	10YR8/4 浅黄褐色	やや緻密で白細粒と透明細砂やや多量。白・灰色砂と赤細粒少量。軟質。	不明 口-肩1/6周
32 平瓦	長 残10.5 幅 残11.0 厚 2.5	粘土板を素材として種巻き作り。凹面には糸切状条痕の後に横骨痕および布目痕。深い沈線が一条あり。凸面には糸切状条痕の後に1.6×1.4cmの浅い斜格子明き目。粘土板の重ね目や布の縦じ合わせ目は見られない。新城八幡瓦産。	7.5YR7/4 にぶい橙色	粗い。白粒・細粒と透明細砂多量。白砂と赤細粒少量。軟質。	底上44cm 側面や凹面は残存しない。[15]
33 平瓦	長 残12.5 幅 残 7.5 厚 2.3	種巻き作りで、素材はおそらく粘土板。凸面は縦方向の撫での後、子犬などの小動物物が爪先でひっかいたような3条1組の縦い傷が8ヶ所に見られる。凹面は種巻きおよび布目痕の後、側面寄りの縁部に黒刷り。側面は黒刷り。新城八幡瓦産。	5YR6/6 橙色	粗い。黒・透明細砂やや多量。白・赤・灰色砂と白細粒少量。やや硬質。	底上58cm 側面11cm残 [9]
34 平瓦	長 残17.7 幅 残13.9 厚 2.5	粘土板を素材として種巻き作り。凹面は糸切り状条痕の後に横骨痕および布目痕。凹の右寄りに縦位の布縦じ合わせ目。その少し左側に粘土の重ね目がある可能性がある。側面は黒刷りで凸面側の角を面取りして、二面に仕上げる。新城八幡瓦産。	10YR7/4 にぶい黄褐色	やや粗い。白細粒多量。黒・透明細砂と赤細粒やや少量。軟質。	底上63cm 側面17cm残 [1]



第105図 八幡根遺跡 SI-44 (2) 遺物

第130表 SI-44 平安時代 出土遺物数一覧表

	坏・椀	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形甕	長甕	甗	大甗	焼粘土塊	その他
土師器	口縁部	78						1	7				
	体部	有							有				
	底部	平42 台1			2				3				
須恵器	三口縁部	23	1	4									
	体部	1		1					4				
	底部	平11 台1	台2		2				1				
	新治産	口縁部							1				
瀬戸物	口縁部								4				
	体部												
	内底部	平底1											
	窓	口縁部	1										
甕	体部												
	底部	平底1											
	窓	口縁部											
不明	体部	1									2		
	底部	平底3											

平瓦24片・灰釉陶器1片・時期不明の磁石1点。
古墳時代終末期の土師器非常に多量と焼粘土塊4点混入。

S1-45 (第106図、写真図版15・42・52・55)

この遺構は、建物の遺構が確実に認められたものではない。しかし、竪穴建物跡であった可能性が高いので、ここで遺物だけを掲載する。

この遺構は、調査区の南部にあり、台地の南東斜面に位置する。同じ平安時代の遺構としては、西方に竪穴建物跡SI-44、東方に竪穴建物跡SI-55が隣接する。

黒色土中に土器の集中する箇所を確認しただけで、建物跡の平面形については明らかにできなかったようである。出土遺物は一箇所にまとまっていて、遺物の注記や遺物出土状況写真の台帳には「カマド」と記載されているので、竪穴建物跡の竪部分に集中していた土器群である可能性がある。竪や建物跡本体の遺構の構造については、残念ながら明らかにできなかった。出土状況写真からみて、この出土品は一括遺物であると考えて間違いないであろう。

出土遺物 7-10は体部下半を横断削りし、磨ききしない甕である。8だけは金色に発色する黒雲母を少量含むが、その他は雲母を含まない。11は須恵器版を模倣した土師器。八幡椀東遺跡の製品の可能性がある(亀田1996)。6も須恵器鉢を模倣した土師器のようであるが、内面調整が雑な撫で、磨きや黒色処理をしないので、八幡椀東遺跡の製品とは少し特徴が違う。土師器食器類は甕で火を受けたようなものが多い。このうち3・5は内面に磨きも黒色処理も最初からしていない。

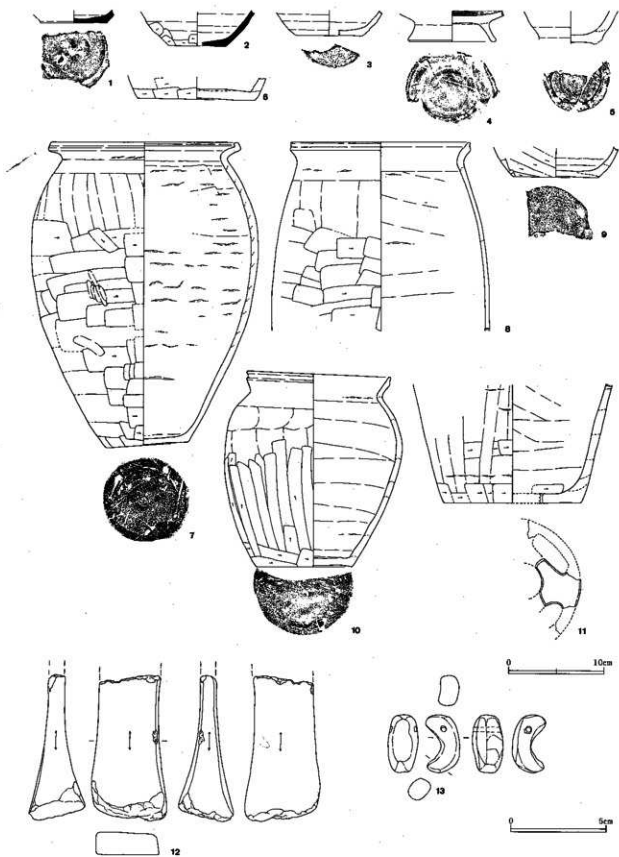
須恵器は三和甕産で、1は底面を手持ち削りしない点が普通の三和甕製品と少し違う。2は、三和甕製品としては硬質に焼けた良品である。

13は、胎土の特徴からみて、古墳時代終末期に八幡椀遺跡内で製作された土製勾玉が混入したものである。

第131表 SI-45 平安時代 出土遺物数一覧表

	坏・椀	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形甕	長甕	甗	大甗	焼粘土塊	その他
土師器	口縁部	7							19				
	体部	有							有				
	底部	平8 台9			4				13	2			
須恵器	口縁部	1											
	体部	2											
	底部	平底2											

磁石1点。平安時代の須恵器は坏の口縁部と底部が三和甕産、体部は産地不明。
古墳時代終末期の土師器若干・焼粘土塊2点・土製勾玉1点が混入。



第106図 八幡根遺跡 SI-45 遺物

第3章 発掘調査された遺構と遺物

第132表 SI-45出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 須恵器	底 径 6.9	薄く平底で、底部内外面に凹凸が目立つ。内外面はロクロ撫で、底面は裏切り磨しの後に雑な多方向撫で。三和麻底。	2.5Y7/2 灰黄色	緻密で白細粒多量、 透明細砂少量。	電 底1/4周 「電」
2 坏 須恵器	底 径 6.0	薄く平底。体部外面はロクロ撫での後に下部部を手持ち裏削り。内面はロクロ撫で。底部外面は一方の手持ち裏削り。三和麻底。	7.5Y6/1 灰色	緻密で白細粒多量、 透明細砂少量。	電 底1/4周 「電」
3 土師器	底 径 7.0	薄く平底。内面にくらべて外面のロクロ目の凹凸がやや目立つ。内外面はロクロ撫で。底面は回転糸切り磨し後無調整。切り磨し時のロクロ回転軸少量は不詳。	7.5YR8/3 浅黄褐色	緻密で白細粒と黒・ 透明細砂少量。	電 底1/3周 「電」
4 高台付 土師器	台 径 9.4	高台は厚く、少し反気味に厚く。内面は底面一方、体部横方向の裏磨きの後、黒色処理。底面は底面糸切り磨しの後に黒台を貼り付け、その周囲部分を回転軸撫で。二次焼成を受けて赤化している。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細粒と透 明細砂やや多量、 黒細砂少量。	電 底全周 台1/3周 「電」
5 高台付 土師器		やや厚い。内外面はロクロ撫で。底面も高台貼り付け後に全面ロクロ撫で。内外面が赤化していて、二次焼成を受けたようである。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白細粒・黒 細砂やや多量、透 明細砂少量。	電 底7/12周 「電」
6 鉢 土師器	底 径 12.4	大形の鉢としてはやや薄い。外面底部は製作時の台からはずした後、軽く多方向の裏撫で。外面胴部は撫での後、下端に裏削り。内面は底面中央の厚さを整えるために粘土を重ねたに、多方向の雑な撫で。内面の体部と底面外面は裏撫で。全体に内面の仕上げが雑である。	7.5YR7/4 にぶい橙褐色	やや粗い。白細粒 ・灰色砂と黒・透 明細砂少量。	電 底5/6周 「電」
7 壺 土師器	口 径 20.1 底 径 8.8 高 大 32.2 大 23.9	胴部は内面が裏取り状で縁を持ち、外面には縁を持たないで外反する。口縁端部は外面に浅い段状の凹線を持ち、内面側に折り返す。外面は胴上位に斜め裏撫での後、口～胴部横撫で、胴部中央以下横裏削り。底面は小さく製作台からはずした後、種物織維?の圧痕が少し付く。内面は粘土粒積み上げ後に、底面は内周方向の指撫で、胴～胴部は横裏撫で、口縁部横撫で。胴下位は加熱赤化し、中位外面にスス付着。	7.5YR6/8 橙褐色	粗い。白細粒と黒 細粒と透明細砂・ 灰色砂多量、赤 砂・黒砂やや多量、 やや軟質。	電 口3/4周 胴2/3周 底5/6周 「電」
8 壺 土師器	口 径19.0 大 径23.0	胴部は薄い。胴部は内外面に縁を持たないで外反する。口縁端部は、内面に別様な袋を持つつまみ上げ、外面は凹線になる。外面は胴部上半に撫での後、下半部に横裏削り、口～胴部に横撫で。内面は胴部に幅広の撫でまたは裏撫での後、口～胴部横撫で、全体が加熱赤化。	2.5YR6/8 橙褐色	やや粗い。白粒・ 黒粒と透明細砂・ 灰色砂と赤細砂・ 黒細砂と赤細砂少量。 金色の黒帯が目く 少量。硬質。	電 口～胴1/4 周 「右袖」
9 壺 土師器	底 径 9.0	薄い。外面胴部は裏削り。内面はロクロを使わない横撫で。底面は製作時の台からはずしたままの面で、細かい凹凸が見られる。	5YR6/8 橙褐色	やや緻密で白細粒 多量、黒・透明細 砂と赤細粒少量。 硬質。	電 底5/12周 「電」
10 小形壺 土師器	口 径 15.5 底 径 10.3 高 大 20.7 大 18.7	体部はやや薄い。胴部は内外面に縁を持たないで外反し、口縁端部内面に弱くつまみ上げ。外面は凹線をなす。外面は胴上位に雑な撫での後、口～胴部に横撫で、胴部は裏削りの後に下部部横裏削り。底面は製作後におそらく台からはずした後に雑な多方向撫で、乾燥時と思われる種物織維が外周面に透くみられる。内面は胴部に撫での後、口～胴部横撫で。外面胴下半は加熱赤化。胴上半は薄くスス付着。	7.5YR7/6 橙褐色	やや粗い。白細粒 ・黒細砂多量、赤 粒・灰色砂少量、 やや軟質。	電 口～肩全周 下半～底部 1/2周 「電」
11 瓶 土師器	底 径14.4	厚い。底面の中央に円形1孔、外周に隅丸長方形4孔をあける。胴部外面は撫での後に一部横裏削り→縦撫で→下部部横裏削り。底面は製作時の台からはずしたままの面。内面は胴部横方向、底部内周方向の裏磨きで、中央の孔は孔縁部横撫で。外周の孔は寛でくりぬき、内周側の孔縁を横撫で。須恵器底を構築した土師器。八橋根東遺跡の製品の可能性あり。	7.5YR8/4 浅黄褐色	やや粗い。白細粒 と黒・透明細砂多 量。軟質。	電 底1/18周 「電」
12 磁石	長 残 7.8 幅 厚 4.0 厚 2.9 重 残 80g	目の細かい砥石で、4面を使用。上下両面は図の下線へ向かって厚くなる。左右両側面は図の下方へ向かって広がり、下縁付近で砥石を磨きとおすように内側へ丸味を持つように減っている。図の下面は砥石製作時の割れ目または切痕面。		緻密でやや軟質の 緑色凝灰岩。	電 上半部欠損 「電」
13 勾玉 土製品	長 残 3.1 幅 厚 1.8 厚 1.6 重 6.73g	手捏成形。撫で調整。孔は右に図示した方の断面から棒状工具で焼成前に穿孔し、初径2.9mm、終径2.7mm。表面を漆仕上げしていた可能性もあるが、現在は摩滅して不明。古墳時代終末期の遺物が混入。	10YR5/3 浅黄褐色	緻密で黒細粒多量、 透明細砂少量。 軟質。1a調。	不明 定形 「電」

SI-46A (第107~108図、写真図版15~16・42~43・53)

本建物跡は、調査区の北部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SK-19、SK-20、SK-21より古く、建物跡の西壁・南壁の一部と床面の一部を同土坑群によって切られている。また、SI-08、SI-10、SI-46B、SI-50よりも新しく、SI-08の北東コーナー、SI-10の北半分、SI-46Bの中央部から東側、SI-50の西南部を切っている。

平面形は、東西5.3m、南北4.8mのやや東西に長い方形を呈し、主軸方向はMN-8°-Eを示す。壁は確認面から東壁で8cm程しか遺存しておらず、その立ち上がりは、推定で80°程と垂直気味である。周溝は、東壁南半分から南東コーナーにかけて検出された。幅13~41cm、深さ14cm程で、断面はU字形を呈する。床面は建物跡の西側が高く、中央部から東側が低くなっておりその比高差は24cmである。あるいは、貼り床などをはがしすぎた結果かも知れない。ピットは2本検出された。P1は径40cm、深さ48cm、P2は長径36cm、短径30cmの平面楕円形で、深さ47cmである。貯蔵穴は検出されなかった。

竈は、北壁中央東寄り位置する。わずかに断面の左袖部にその構材材と思われる粘土層の一部がみられるものの、残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。掘形は、北壁を推定幅90cm、奥行き57cm程の平面舟首形に掘り込んでいる。また、北壁とその前の床面を東西86cm、南北124cmの楕円形に掘り溜めており、その断面は鍋底状で、床面から最深22cmである。煙道は、燃烧部中央からしだいに傾きを増しながら、平均31°程の傾きで立ち上がっている。燃烧部から煙道奥にかけて、焼土が最深42cmの深さで、体積的にも大量に確認された。長期間の使用を物語っているものと思われる。また、左袖の付け根にあたる部分から壺の破片が出土したが、袖の芯材として使用されたものかもしれない。

掘土は2層に分層され、建物跡北側がローム粒子を含む黒色土であり、南側がロームブロックを多量に含む黒褐色土である。

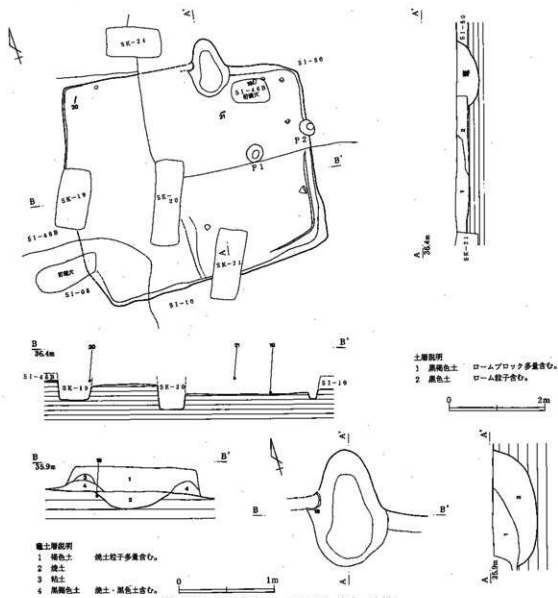
出土遺物 遺物は、SI-46AとSI-46Bを区別しないで取り上げたものが大半である。両遺物は時期が違うので、平安時代の遺物をSI-46Aに伴うもの、古墳時代終末期の遺物をSI-46Bに伴うものとして扱った。出土遺物一覧表の出土数も、この基準で計数した値である。SI-46AとSI-46Bを区別しないで取り上げた遺物は、注記が「SI-46」であることを観察表で明示してある。

土師器坏は、底面外周を手持ち篋削り調整するものが目立つ(2・3・4・12・13)。3はこの遺跡の土師器坏としてはめずらしく篋削り離して、この点はむしろ三和窯跡群の須恵器と共通する。他は回転系切り離しである。14の皿の外面の墨書は、確実ではないが「宮」の可能性もある。他にも墨書のある土師器小破片が多く、「山」(12)や、「下」または「大」(7)が見られる。「下」または「大」と「山」の墨書の類別はSI-44にも見られる。ただし、これらの小破片はSI-46AとSI-46Bを区別しないで取り上げたもののうち、平安時代の遺物なのでSI-46Aに伴うと判断したものである。

16・19は土師器甕としては厚く、須恵器鉢を模倣した八幡根東遺跡(亀田1996)甕の土師器に類似する。18の甕は八幡根遺跡で出土した土師器としてはめずらしく雲母片を含む。残念ながら胴部下半を欠くので、下半部の外面調整や底面の状況は不明である。この地域の平安時代の甕は、SI-45出土例などに見られるように、受け口状口縁のものであっても雲母片を全くあるいはほとんど含まず、底面に木炭痕がなく、胴部下半を篋削り調整後に磨かないものが多い。

鉄器は刀子と鑿がある。どちらも「SI-46A」としてとりあげてあるので、平安時代の遺物である。鑿状の鉄器(21)は、木製柄を持たない小形形で、ねじり加工は掘る時の滑り止めであろう。鑿というよりも、板金加工用などの工作用の「けがき針」である可能性を考えたい方がよいのかもしれない。鉄針(22)は、「SI-

46]として取り上げられているので、SI-46Aの遺物か、古墳時代のSI-46Bに伴うものか、出土状況からは明らかでない。穴沢義功氏の御教示によれば、鉄滓の質感から見て平安時代と考えたほうが良いということなので、SI-46Aの遺物として掲載した。

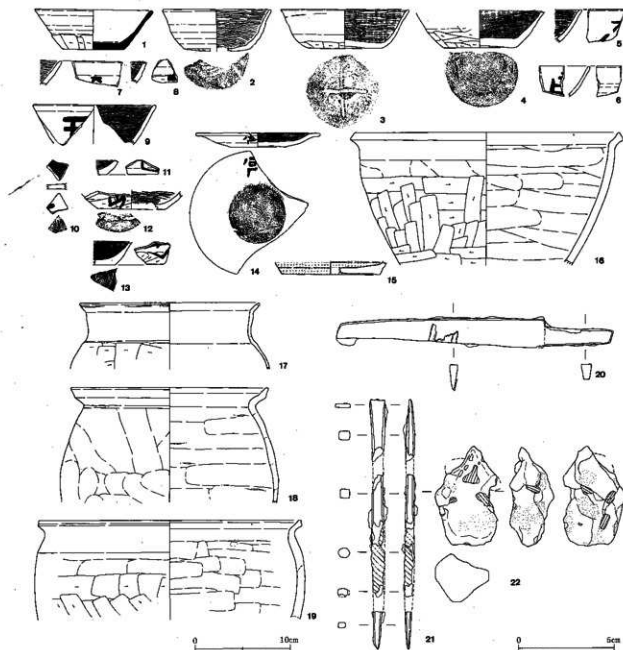


第107図 八幡根遺跡 SI-46A (1) 遺構

第133表 SI-46A 平安時代 出土遺物数一覧表

	杯・椀	鉢・皿	蓋	高杯	鉢	小形土器	壺・瓶	小形甕	長壺	甕	大甕	焼粘土塊	その他
土口縁部	132	7			3				15				
胴体部	有								有				
底部	平83 台2	平底1							11				
須口縁部	15												
胴体部	3						瓶3		7	4			
底部	平底5												

鉄滓小破片8点。須恵器杯は産地不明の口縁部2片の他は三和窯産。長壺は新治窯産5・三和窯産2、瓶と大甕は産地不明。土師器皿は、図の14番以外に口縁部6片。鉄製品は刀子1点と鑿または、けがき針が1点。中世か近世のかわらけ1片、時期不明の陶器4片混入。



第108図 八幡棋遺跡 SI-46A (2) 遺物

第134表 SI-46A出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 原形器	口 径 12.5 底 径 6.5 高 4.2	薄く軽い。体部外面のロクロ目が強く、内面は目立たない。外面は底面に多方向の手持ち痕刷りの様、体部下端に手持ち痕刷り。三和麻産。	5B65/1 青灰色	やや粗い。白粒・細粒多量、透明細砂少量。硬質。	不明 底1/12周 作~□□/18
2 坏 土師器	口 径 11.5 底 径 7.0 高 4.3	体部・底部ともに薄い。体部外面はロクロ強で。外面はロクロ目が強い。内面は底部一方向、体部横方向の裏磨き。底面は回転糸切り磨しの後に、外面を手持ち痕刷り。体部下端には磨刷りはない。現状では内面に黒色処理は見られない。	7.5YR6/6 橙色	緻密で白粒・細粒多量、黒・透明細砂やや多量。軟質。	底 底1/3周 □□/6周 「電」

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号 器種 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 土 成	出土状況 残存状況 注記
3 坏 土師器	口 復13.6 底 7.8 高 4.1	体部は薄く、底部外周はやや厚い、上げ底気味。外面は体部下端手持り箇所、内面は底面一方向、体部横方向のやや緩な磨きの後、黒色処理。底部外面は底面が切り離し、外周を手持り箇所にした後に焼成前の発見号「+」を、先周にやや幅のある帯で記す。焼切り時のロクは右回転。	25Y7/3 淡黄色 底面の1/3 周に黒底あり	緻密で白磁粒と黒・透明細砂少量。 軟質。	不明 底1/2周 口1/3周
4 坏 土師器	底 7.4	体部は薄く、底部は非常に厚い。底部外面回転余切り離した後、外周手持り箇所。余切り時のロクは右回転。体部外面はロク口後での後、体部下端のやや厚くなったと思われる部分を手持り箇所。内面は体部横方向、底部一方向の磨きの後、黒色処理。外面底部付近のごく一部に油煙が付着。	10YR7/4 にぶい黄褐色	やや緻密で、白粒・透明細砂多量、黒・透明細砂やや多量、やや硬質。	不明 底一帯7/12 周
5 坏 土師器	口 復約14	やや薄く、口縁部はわずかに外反気味。体部外面ロク口後で、内面磨き後黒色処理。外面に墨書あり。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白磁粒多量、黒・透明細砂少量、やや硬質。	埋土中 口1/12周 [SI-46フク土]
6 坏 土師器	口 復約13	やや薄い。体部内外面ロク口後で。外面はロク口目が少し目立つ。内面に墨書あり。	25Y8/3 淡黄色	緻密で灰色砂と黒・透明細砂少量。 軟質。	埋土中 口1/12周 [SI-46フク土]
7 坏 土師器	口 復約13	体部外面はロク口後で。内面は横方向磨きで、現状では黒色処理は見られない。外面に墨書あり「大」または「下」か?	5YR6/6 褐色	緻密で白磁粒やや多量、透明細砂・赤粒少量。硬質。	埋土中 口1/8周 [SI-46フク土]
8 坏 土師器		薄く、体部外面はロク口後での凹凸が強い。体部下端に手持り箇所。内面は磨き後、黒色処理。外面に墨書あり。	7.5YR6/6 褐色	緻密で白磁粒・透明細砂やや多量、黒磁粒少量。 硬質。	不明 体下半 [SI-46]
9 坏 土師器	口 復12.8	坏としてはやや厚い。体部外面はロク口後で。内面は磨き後、黒色処理。外面に墨書あり。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で白磁粒と黒・透明細砂やや多量。 軟質。	不明 口1/6周 [SI-46]
10 坏 土師器		薄く平底。底面回転余切り離し。内面は底面に一方向の磨き後、黒色処理。底部外面に墨書あり。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で白磁粒少量。 軟質。	不明 底小破片 [SI-46]
11 坏 土師器	底 復約6	やや薄い。底面は回転余切り離し後、無調整。体部外面ロク口後で。内面は底面一方向、体部横方向の磨き後、黒色処理。外面に墨書あり。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で白・褐色磁粒と黒・透明細砂少量。 軟質。	不明 底1/6周 [SI-46]
12 坏 土師器	底 復7.0	底部外面は回転余切り離した後外周を手持り箇所。外面は体部下端のやや外へ出たと思われる部分を手持り箇所。内面は底面一方向、体部横方向の磨き。体部外面に墨書「山」あり。	10YR6/3 にぶい黄褐色	緻密で透明細砂やや多量、白磁粒・黒磁粒少量。 硬質。	不明 底1/8周 [SI-46]
13 坏 土師器	底 復5-6	底面はロク口右回転の回転余切り離し後、無調整。内面は体部横方向におそらく底面一方向の磨き後、黒色処理。外周体部下端の、やや外へ出ていると思われる部分を手持り箇所。外面に墨書あり。	10YR6/4 にぶい黄褐色	緻密で白磁粒と黒・透明細砂少量、やや硬質。	埋土中 底1/9周 [SI-46フク土]
14 皿 土師器	口 復13.1 底 6.0 高 1.5	口縁部は強く外反する。体部外面はロク口後で。底部外面はロク口右回転の回転余切り離し後、無調整。内面は底面一方向、口縁部は全面を6単位に分割する横方向の磨きの後、黒色処理。体部外面に墨書あり。	10YR8/4 淡黄褐色	緻密で透明・半透明細砂多量、白磁粒・黒磁粒やや多量、白砂少量。 軟質。	不明 底全周 口5/12周
15 管 利 灰 輪	底 復10.3	低い高台を形作り出す。全面に施釉し、高台下面および高台高台内の外周部は釉をふみとる。近き陶管が混入。	3.5Y7/2 粘土は灰黄色	緻密で透明少量。 硬質。	埋土中 底1/8周 [SI-46フク土]
16 鉢 土師器	口 復28.0	厚く、口縁部は内面に明確な稜を持って外反し、内面上半を弱くつまみ上げる。外面は胴部上位に多方向後での後に中位以下磨削。内面は胴部に横溝。口縁部内外面に横溝。外面上半にス付着。	10YR6/3 にぶい黄褐色	やや緻密で白磁粒・透明細砂・褐色粒多量、黒磁粒・白砂少量。 硬質。	不明 口1/4周
17 壺 土師器	口 復19.0	薄く、口縁部と頸部は内外面にごく強い稜を持って「コ」の字形に折れる。口縁部付近の外面に粘土積み上げ痕あり。外面は肩部磨削り。口縁部横溝。内面は胴部・口縁部にも横溝。	7.5YR6/6 褐色	緻密で黒・透明細砂ごく少量。 やや硬質。	不明 口1/3周 [SI-46]
18 壺 土師器	口 復21.0 大 23.1	薄く、頸部は内外面に不明瞭な稜を持って強く外反し、口縁部は内外面に段と稜を持ってつまみ上げる。口縁部外面は上反が少し外反する。胴部外面は多方向の後で、下半部は凹凸が目立つ。内面横溝で、口縁部内外面に横溝。	5Y6/6 褐色	粗い。白雲母片・顔料多量。白灰色砂と赤粒やや多量。 軟質。	底付近 胴1/6周 口5/12周 [龍1]

番号 種類	法 量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
19 土師 器	口 径27.8 大 径28.6	土師器としてはかなり厚いので、底部が比較的近くで器高の低い鉢の可能性もある。胴部は外周縁方向の後に縦方向の亀裂り、内面横溝で、口縁部内外面横溝で、下部に二次焼成を受けている可能性がある。	5YR7/8 褐色		床付近 周→口/8 周 [5]
20 刀子 鉄製品	刃長 11.0 金長 14.8 重 26.22g	背開が9mmと深く、刃開は推定1mmと浅い。刃部先端を欠損する可能性もあるが、その場合は古い欠損と考えられる。柄は背厚5mm、刃開厚3mm、幅8mm、刃部は幅約4mm。両部と刃部の境に痕跡がわずかに残るが新木の木目までは確認できない。刃部は図示した面だけに植物繊維質のものが刃と直交する方向に付着している。			床上13cm 底部 [10]
21 鑿? 鉄製品	長径12~13 幅 0.5~0.8 厚 0.5 重残 10.66g	縦尺1/20の出土状況図からみると、出土時には長さ12~13cm程だったようである。腐化した以外は細片になり、これ以上接合できない。中央部のもっとも狭い部分に刃が差になる可能性がある。刃部は長軸先端に向かい厚くなり、断面長方形。刃部は片面に鋭く反るが、前により角が少し結集であるかもしれない。刃部先端は直線的というよりも両角が少し突出する。現状では刃部中央も少し突出しているが、これは錆ぶくれによる可能性が大きい。中央部の一端寄りには鉄滓におじりを入れているようである。基部はふたたび断面長方形になり、基部が尖る。有機質等も見られない。			床上33cm 大破片3片 と細片 [8]
22 鉄滓	長 5.4 短 3.0 厚 2.2 重 39.44g	炉底に少量生成した小形の不定形鉄滓。全体に緻密で重量感がある。表面とも木炭(長径7mm×幅3mm程度)が若干見られるほかは凹凸は少なめで、細かい顆粒状突起などは見られない。図の下半部の四角に雲灰色(5R P 5/1)の酸化鉄分を含み、表面に酸化土砂が多い。この部分が磁着するが、メタル度から見て金属鉄の遺存は良くない。メタル度計、組織度5(35cmの径についた標準磁石2.5cmの距離で反応)。炭化層と精炭層のどちらであるか区別がむずかしいが、前者である可能性のほうがやや高い。	10BQ3/1 表面とも暗 青灰色		不明 →所だけ 破面が可能 がある。 [SI-46]

SI-55 (第109図、写真図版18・49・53)

本建物跡は、調査区の南部にあり、台地上の東斜面に位置する。重複する遺構はない。SI-30、SI-31が北に近接する。

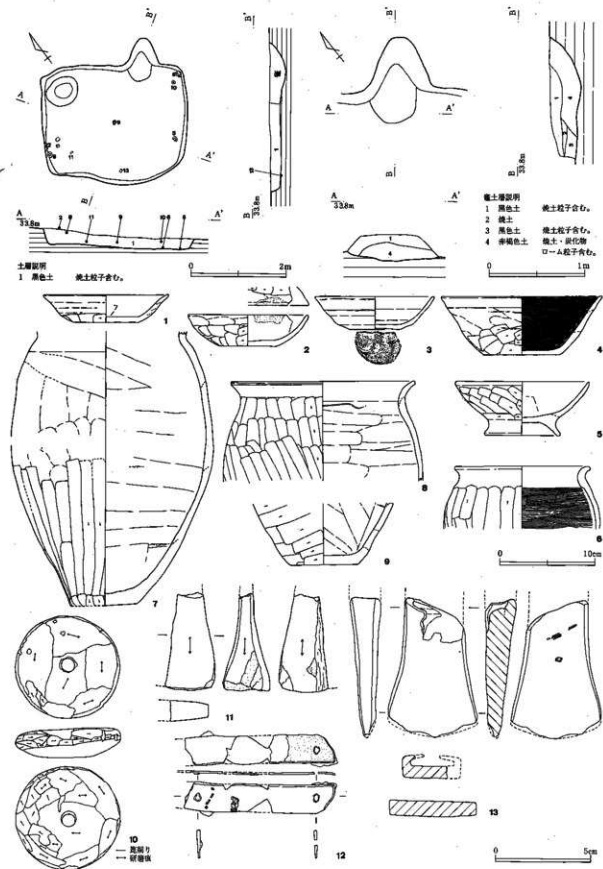
平面形は、東西3.1m、南北2.6mの東西に長い隅丸方形を呈し、主軸方向はMN-35°-Eを示す。壁は確認面から西壁で34cm、東壁で22cm程、南壁で18cm程遺存しており、その立ち上がりは、西壁で69°程、東壁で60°程、南壁で65°程の傾きである。周溝は検出されなかった。床面は西壁際がわずかに高く、東壁際に向かってわずかに傾斜しており、その比高差は10cmである。ピットは、北西コーナーに1本検出された。長径71cm、短径59cmの平面楕円形で、深さは不明である。写真を見てもかなりの深さがあり、遺物は検出されなかったものの、貯蔵穴の可能性が高い。

竈は、北壁東寄りに位置する。残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。掘形は、北壁を幅80cm、奥行き55cmの平面舟首形に掘り込んでいる。また、北壁とその前の床面を、東西50cm、南北63cmの平面不整な楕円形に掘り窪めており、断面は皿状で、深さは床面から最深5cmである。煙道は、燃焼部やや奥から33°程の傾きで立ち上がっている。焼土は、燃焼部前の断面中層に、最深5cm程しか確認できなかった。

埴土は1層で、焼土粒子を含む黒色土である。

出土遺物 土師器食器類は全体に軟質である。4のように磨き・黒色処理をするものは少ない。成形・調整に回転を利用しない土師器環(1・2)が見られる。土師器甕類は硬質で、胴部縦溝削りが主体である。胴部下位を横溝削りする9も残っている。10の紡錘車は、焼成後にやや粗く研磨している点が変わっている。篋削りで成形しているのので、転用品ではない。表面の色がやや暗いので、炭素を吸着している可能性もあるが、そうだとすると、篋磨きをしていない点がやや異質である。鉄斧は、SI-37Aからも出土している。

この他に、平安時代の遺物と同じ位の量の古墳時代終末期の土師器が出土した。古墳時代の遺物はみな小破片なので、流入品と考えられる。



第109図 八幡根遺跡 SI-55 遺構・遺物

第135表 SI-56出土遺物

番号 器種	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成 成	出土状況 残存状況
1 土師器	口 復13.4 底 高 7.0 高 2.9	薄く軽い。ロクロを使っていない。外面は体部に粘土積み上げ痕と指押さへの凹凸を残す確率で、下端を手持ち彫削り。内面は体部横溝施での後に全面を焼成で。底面はおそらく製作時の台から取り外した面を、縁に施すだけ。	10YR8/2 灰白色	粗い。白磁粒と黒磁砂多量、透明磁砂やや多量。軟質。	竈口5/12周 底全周「3」 「匚」
2 土師器	口 12.6 底 高 6.0 高 3.3	薄く軽い。口縁部は少し内彎気味で、外面の直下が弱くはくむ。ロクロを使用しない。外面は口縁部に指施で、底面中央一方と外周円周方向の手持ち彫削りの後に、体部下半に横方向の彫削り。内面は全面横施で、口縁部の1箇所内外面に油塗が薄く付着し、灯明具の可能性がある。	7.5YR7/4 にぶい橙色	粗い。白砂・白磁粒多量、黒・透明磁砂と灰色砂やや多量。軟質。	底上34cm 口1/2周 底全周「8」
3 土師器	口 復12.4 底 高 5.6 高 3.8	非常に薄く軽い。内外面のロクロ目の凹凸がやや目立つ。内外面の口縁部でやややや、粘土積み上げ痕が外面上半に残る。外面底面は回転糸切り跡後、無調整。糸切り時のロクロは右回転。	10YR8/4 浅黄褐色	やや緻密で白磁粒多量、黒・透明磁砂やや多量、白・灰色砂少量。軟質。	竈土中 口一底1/3周 「フク土」
4 土師器	口 復17.1 底 高 8.0 高 6.3	成形・調整にロクロを使わない。外面は体部上半に横で、底面一方の後に、体部下半に横方向の手持ち彫削り、口縁部に横施で。内面は底面一方、体部は全面を8単位程に分割する横方向の彫削りの後、黒色処理。	10YR7/4 にぶい黄褐色	やや粗い。白・透明磁砂と黒・透明灰色磁砂と白磁粒多量。やや硬質。	不明 口一底1/2周 底5/12周
5 高台付 土師器	口 14.1 底 高 8.0 高 5.7	体部は厚く、筒へ挿す。体部から縁を持たないで開く。外面は口縁部横施で後に、体部を彫削りしてから高台を貼り付けた後、底面に横で、底面の縁では、おそらく回転による可能性がある。体部内面は横施で後に、回転を利用しない横で。	2.5Y7/2 灰黄色	やや粗い。黒・透明磁砂と白磁粒多量、灰色砂やや多量。軟質。	床直 底全周 「4直」
6 小形遺 土師器	口 復14.2 大 復16.4	胴部外面には明窓な縁を持たない。外面は口縁部に横施での後、胴部を上へ彫削り。内面は口縁部横施での後、胴部に黒い毛目。胴部上の縁はこの時の刷毛目で作られたもの。外面全面と内面口縁部上端にスス付着。	10YR4/4 褐色	緻密で白磁粒と黒・透明磁砂やや多量。硬質。	床直 口一底5/12周 「底直」
7 土師器	底 高 7.0 残 29.0 大 復21.4	外面は胴部上に指頭痕の後に横施で、口縁部に横施で。胴部は下半に彫削り後、下半をさらに彫削りおよび横施削り。底面は横施で調整不明。内面は全面横施で、上半部には不規則な凹凸がやや多い。外面は下半部が加熱赤化し、中にスス付着。	10YR8/3 浅黄褐色	やや粗い。黒・透明磁砂多量、白磁粒・灰色砂やや多量。軟質。	上半は竈、 下半は竈土 中。底1/3周、 「3」 「匚」 「匚」が 接合
8 土師器	口 復19.4 大 復21.2	薄い。胴部は外面に明窓な縁を持ち、内面は縁を持たずに外反する。外面は口縁部に横施での後、胴部を下へ彫削り。内面は胴部に横で、口縁部に横施で。	7.5YR7/4 にぶい橙色	やや粗い。白磁粒と透明磁砂多量、灰色砂・黒磁砂やや多量。硬質。	底上25cm 口1/6周 胴1/3周 「7」
9 土師器	底 7.2	外面は胴部に横施削りの後、底面を多方向彫削りで平坦にする。内面は底面に多方向横施で、胴部に横施で。底面も含めて外面残存部全体にススが付着。加熱赤化痕は明瞭ではない。	7.5YR6/4 にぶい橙色	やや粗い。白磁粒と黒・透明磁砂多量、灰色砂少量。硬質。	底上11cm 底5/6周 胴1/2周 「3」と「匚」が接合
10 紡錘車 土師器	径 5.5-5.7 厚 1.6 孔 0.8-0.9 重 53.04g	粘土が軟らかいうちに丸棒などを通して穿孔し、手持ち彫削りで成形する。焼成後に、おそらく細い砥石などで上下両面を研削する。研削粉の跡が表面に残る。側面は彫削りのままで、研削しない。研削していない表面は黒褐色で、炭素を少し吸着させている可能性がある。彫削りはしていない。	7.5YR6/4 にぶい橙色	白粒・細粒多量、黒・透明磁砂と赤磁粒やや多量、赤・灰色砂少量。やや硬質。	底上16cm 底全周 「2」
11 砥石	長 残 5.3 幅 残 2.5 厚 残 2.7 重 残27.0g	4面のうち3面を使用し、他の1面は横施で不明。面の下層は原石の風化した自然面のまま。表面は緻密で非常に目が細かい。破損後に裏面に使用した痕跡は見られない。		緻密でやや硬質の粘板岩。	底上7cm 上半部と1 側面欠損 「8」
12 織機 鉄製品	長 残 8.1 幅 1.5 重 残5.23g	縁はほぼまっすぐで、押縮2mm。一端に径3mm程の孔あり。他端は欠損し、径4mm程の突起がある。縁または釘の可能性もあるが、反対側の鉄脚の有無が不明確で、釘とは断定できない。1面には、縦割りに刃部と交互する方向に、部材の縦断面と、半中央に木質の付着する。反対面に孔の裏面に草や布糸等の有機物が付いた痕跡が少し黄褐色を帯びて残る。			一端と 他端欠損 「フク土」
13 斧 鉄製品	長 残 7.4 幅 4.8 厚 1.5 重 残94.51g	発部はごく一部しか残っていない。現状で筋による判別が難しいが、発部は出土時からこの程度しか残っていないようである。発部は両面から折り返す。片側の一部分が残るだけで、発が完全に左右から折れていたとは不明。発内面の底面には刃部と木質の付着する。刃部は鉄板を2枚積層していると思われる。内部に木質等は残っていない。刃部断面形状はやや片刃形。裏面に植物繊維痕が少量付着していて、こちらの面を下に向けて出土した。			床直 発部欠損 刃部発形 「56直」

第136表 SI-55 平安時代 出土遺物数一覧表

	坏・碗	盤・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	壺・瓶	小形甕	長甕	甕	大甕	焼粘土塊	その他
土口縁部	37							2	16				
土器底部	有							有	有				
須口縁部	平15	台4							11				
須口縁部	2								4		9		
須器底部	3												
器底部													

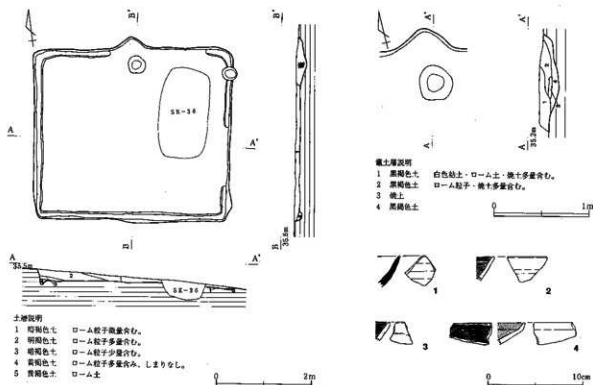
紡錘車1点・磁石1点・木炭小片1片・種類不明の瓦破片1片あり。須器器は、坏と長甕はすべて三和窯産、大甕は産地不明。古墳時代前期の土器器少量と、古墳時代終末期の土器器多量と焼粘土塊4点混入。

SI-60 (第110図、写真図版19)

本建物跡は、調査区の北部やや東寄りにあり、台地上の東斜面に位置する。重複関係としては、SK-36より古く、建物跡の北東部と東側をSK-36によって切られている。

平面形は、東西4.3m、南北3.7mのやや東西に長い方形を呈し、主軸方向はMN-9°-Eを示す。壁は確認面から西壁で25cm程、東壁で4cm程、南壁で12cm程遺存しており、その立ち上がりは、西壁で72°程、東壁で推定60°程、南壁で74°程である。周溝は、北壁東側と東壁南側を除く壁際で検出された。幅10~28cm、深さ5~8cm程で、断面はU字形を呈する。床面は建物跡の中央西側が高く、東壁際に向かってゆるやかに傾斜しており、その比高差は18cmである。ピットは、東壁上北側に1本検出された。径33cm、深さ34cmである。貯蔵穴は検出されなかった。時期を決められるような遺物が少ないが、建物の形状や規模の小ささからみて、平安時代の建物と考えた。

竈は、北壁中央に位置する。残存状況は悪く、掘形を確認するにとどまる。掘形は、北壁を幅93cm、奥行



第110図 八幡根遺跡 SI-60 遺構・遺物

き48cm程の平面なだらかな山状に掘り込んでいる。また、北壁前の床面を径78cmの平面円形に掘り窪めており、その断面は皿状で、床面から最深4cmである。煙道は、燃焼部中央から13'程の傾きでゆるやかに立ち上がっている。そして、A'の南33cmの所からは7'程とさらにゆるやかになり、A'の南13cmの所からは49'程と急激に立ち上がっている。燃焼部から煙道奥にかけて、黒褐色土が最深9cmの深さで確認された。その上面が、きれいにならされた斜面状になっていることと、その上から焼土が検出されていることから、あるいは意図的に埋め戻して、煙道を作り直したものかもしれない。焼土は、燃焼部の黒褐色土層の上に、最深4cm程の深さで検出された。

埋土は4層に分層される。壁際に、ローム粒子を多量に含む黄褐色土がみられるほかは、概ね、ローム粒子を微量含む暗褐色土である。

出土遺物 遺物は非常に少なく、細片ばかりである。4のような金属器模倣系の壺も残る一方で、3のような粗製の坏・碗類も現れる時期の可能性がある。図示出来ない甕は、三和窯産の須恵器甕胴部と、土師器の武蔵型甕がある。このほかに、古墳時代終末期の土師器がやや多くみられるが、混入品と判断した。建物の規模からみて平安時代の建物と考えられる。

第137表 SI-60出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 須恵器		外面はロクロ目の凹凸が強く、内面はなめらか。口縁部はごく細く外反気味。外周体部下縁を手持ち彫削しているかどうかは確認して不詳。三和窯産。	5YR7/1 灰色	緻密で白細粒やや多量、黒・透明細砂少量。 やや軟質。	不明 体1/12周
2 坏 土師器	口 復約12	外面はロクロ撫での凹凸が目立たない。内面は磨き後、黒色処理。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細粒・透明・黒細砂やや多量。 やや軟質。	不明 口1/9周
3 坏 土師器		薄い。外面は縁に撫でて、粘土積み上げ痕を残す。内面は磨き後の後に黒色処理。	10YR2/3 黒褐色	やや軽い。白細粒多量、橙粒と透明細砂少量。 やや軟質。	不明 口1/60周
4 甕 土師器	口 復約13	薄い。口縁部は外面に明確、内面に不明瞭な痕を持つて外傾する。外面は横撫で、内面全面は内周方向の磨き後の、黒色処理。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白細粒と透明細砂多量、黒細砂やや多量、赤粒少量。 やや硬質。	不明 口1/8周

第138表 SI-60 平安時代 出土遺物数一覧表

	坏・碗	壺・皿	蓋	高坏	鉢	小形土器	甕・瓶	小形甕	異焼	瓦	大甕	焼粘土	その他
土 口縁部	6	1											
陶 体部	有								有				
砂 底部													
須 口縁部													
甕 体部	2								2				
甕 底部													

須恵器坏体部2片と甕2片は三和窯産。
古墳時代前期の土師器少量と、古墳時代終末期の土師器やや多量と焼粘土8点が混入。

第6節 時期不明の竪穴建物跡

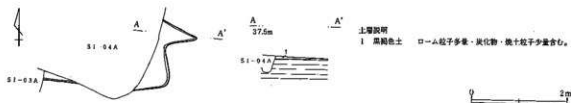
SI-04C (第111図)

本建物跡は、調査区の北西部にあり、台地上の平坦面に位置する。重複関係としては、SI-04Aよりも古く、SI-04Aによって南東コーナー以外の大部分を切られている。また、SI-03Aとも重複するが、新旧関係は不明である。

平面形は、確認された部分で東西2.7m以上、南北1.5m以上である。南東コーナーは、端正な方形を呈する。また、東壁上に底辺70cm、高さ54cmの直角三角形の突出部がある。壁はほとんど遺存しておらず、わずかに確認面から6cmであり、その傾きもはっきりしない。周溝、柱穴、竈は、検出されなかった。

埋土は1層で、ローム粒子を多量、炭化物、焼土粒子を少量含む黒褐色土である。

この建物に伴うことが確かな遺物はない。ただし、この竪穴を切る平安時代の建物SI-04Aの出土遺物には古墳時代終末期の土器片が非常に多い。SI-03A(古墳時代終末期)だけでなくSI-04Cから流入した遺物もその中にあるとすれば、SI-04Cが古墳時代の建物だった可能性もある。



第111図 八幡根遺跡 SI-04C 遺構

第7節 その他の遺構と遺物

(1) 井戸跡

井戸は、調査区内で2本を確認した。どちらも底面まで発掘調査していない。出土遺物は、周囲の集落から細土の上層に流れこんだと考えられる小破片だけしかない。どちらの遺構でも遺物の量比では古墳時代のほうが多いが、これは、八幡根遺跡の遺構・遺物の密度そのものが平安時代より古墳時代のものが多いためだろう。遺構の時期を積極的に決める材料がないが、関東地方では古墳時代の一般集落には井戸はあまり見られないので、平安時代の集落に伴う可能性が考えられる。

1号井戸（第112図左、写真図版8）

調査区の中央部北東寄りにあり、台地上の平坦面に位置する。古墳時代終末期の竪穴建物跡SI-17の埋土を切っている。

SI-17の床面で確認した平面形は、やや東西に長い円形で、東西170cm・南北150cmである。遺構確認面から130cmまで調査したところで直径120cmまで狭くなる。その下は、残念ながら発掘調査を行えなかった。

出土遺物はすべて小破片ばかりで、周囲の集落の遺物が埋もれた井戸の上半に流入したものであろう。古墳時代終末期の土師器と、平安時代の土師器・須恵器が少量ある。平安時代の土師器はロクロ成形で内面黒色処理のものである。須恵器は三和窯産の坏と長甕の体部小破片で、長甕(第112図の左1)は体部下半を横方向に寛削りする部位の破片である。

2号井戸（第112図右、写真図版19）

調査区南半の南西部にあり、台地上の平坦面に位置する。すぐ南には、平安時代の竪穴建物跡SI-40が所在する。

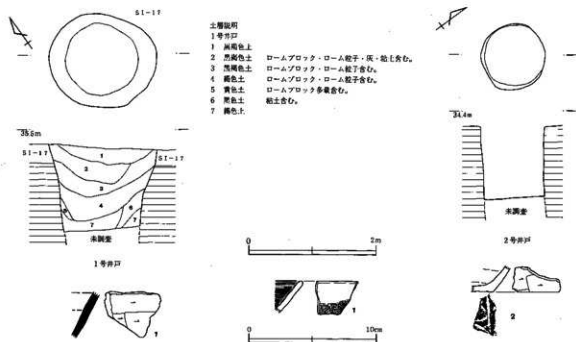
平面形は円形で、直径100cmである。遺構確認面から120cmまで調査したところで直径90cmまで狭くなる。埋土の状況については残念ながら記録が不明である。こちらの井戸も、底面まで発掘調査を行えなかった。

出土遺物はこちらの井戸でもすべて小破片ばかりで、1号井戸と同じく周囲の集落の遺物が埋もれた井戸の上半に流入したものであろう。古墳時代終末期と平安時代の土師器が少量ある。平安時代の土師器坏は2片ともにロクロ成形で内面黒色処理のものである(第112図の右1)。

第139表 井戸出土遺物数一覧表

遺構	部類	部位	古墳中期		古墳時代終末期						平安時代		その他		
			坏	高坏	鉢	小形甕	長甕	甕	大甕	磁土	坏・碗	甗		長甕	甗
1号井戸	土	口縁部	5											平安時代の須恵器は2点とも三和窯産。	
		体部	15				15			1		1			
		底面				2									
		溝								1			1		
2号井戸	土	口縁部	1				1			2					
		体部	1				2					3			
		底面				1	1					1			

第3章 発掘調査された遺構と遺物



第112図 八幡根遺跡 1号井戸・2号井戸 遺構・遺物

第140表 1号井戸出土遺物

番号 器種 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 要カ紙 灰器		外面は回転を利用しない横断削り。内面はロクロ盤で又は横断削り。二和腐産。	2.5Y7/2 灰黄色	粗い。白細粒多量、透明細砂、灰色砂やや多量。軟質。	1号井戸 小破片 [1号井戸]

第141表 2号井戸出土遺物

番号 器種 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 径約13	口縁部付近はわずかに肥厚する。体部内外面のロクロ盤では凹凸が少ない。内面は磨き跡、灰色処理。外面体部下半は黒色で、油煙が付着している。	2.5Y8/3 淡黄色	緻密で白細粒・透明細砂多量、黒細砂ごく少量。	2号井戸 口1/12周 [2号井戸]
2 要 土師器	底 径 6.0	外底面は広葉樹の葉裏面の木葉痕。外周体部下端は磨削り。内面は横断削り。外面は加熱赤化。	7.5YR6/4 にぶい橙色	粗い。白器片細片・白細粒・透明細砂多量。やや軟質。	2号井戸 底1/6周 [2号井戸]

(2) 円形・方形土坑

平面形が円形および方形の土坑は、27基を検出した。確実に時期を判定できる土坑は多くないが、推定によるものを含めると、縄文中期の可能性があるもの1基(SK-30)、古墳中期の可能性があるもの1基(SK-43)、古墳終末期の可能性があるもの7基(SK-03,10,14,15,16,37,44)、平安時代の可能性があるもの3基(SK-26,32,35)を含んでいる。各土坑の出土遺物数は第156表に、規模は巻末の第160表にまとめた。

SK-03(第113・115図、写真図版7)

調査区の中央部北東寄り、土坑群内の南端に位置する。SI-15とSI-16に切られているので、古墳時代以前の土坑である。平面形は正方形に近い長方形で、南壁は斜めに、北壁はやや垂直気味に立ち上がる、断面播鉢状で、底面はほぼ平坦である。埋土は自然堆積か人為埋土か判断できない。第115図1は、古墳時代終末期の土師器坏で、胎土がとても緻密で橙色を帯びる。器高がやや高い可能性があり、体部は上端まで割る。

SK-07(第113・115図、写真図版8)

調査区の中央部北寄り、土坑群内の南端に位置する。重複する遺構はない。西にSI-21A、南にSI-21Bが近接している。平面形は正方形に近い隅丸形で、壁は垂直気味に立ち上がる。断面形は播鉢状で、底面はほぼ平坦である。埋土は自然堆積の可能性もある。出土遺物は古墳時代中期・終末期・平安時代のものがある。図示した土師器鉢(第115図2)は、体部上位を削り残す点から見て、終末期の遺物と考えられる。

SK-10(第113・115図、写真図版10)

調査区の中央部北西寄り、土坑群内の南西端に位置する。重複する遺構はない。西にSI-26、SK-11、北にSI-25が近接している。位置的にはSK-11と東西方向に並び、形状・規模的にはSK-11、SK-12、SK-13と大きさ・深さがよく似ている。平面形は楕円形で、壁は斜めに立ち上がっている。断面形は播鉢状で、底面はわずかに丸みを帯びている。遺物は古墳時代終末期の土師器坏・甕があり、図示できたのは坏口縁部(第115図3)だけで、器表面が橙色に発色する胎土である。古墳時代後期か、終末期のやや古い段階の可能性もあり、この土器が伴うと仮定すれば、近接するSI-26よりも古い可能性がある。

SK-11(第113図、写真図版10)

調査区の中央部北西寄り、土坑群内の南西端に位置する。SI-26と重複するが、新旧関係は不明である。位置的にはSK-10と東西方向に並び、SK-12、SK-13と南北方向に並んでいる。形状・規模的にもSK-10、SK-12、SK-13と大きさ・深さがよく似ている。平面形は円形で、壁は南壁が斜めに立ち上がり、北壁は垂直気味に立ち上がっている。断面形は播鉢状で、底面はわずかに丸みを帯びている。

SK-12(第113図、写真図版9)

調査区の中央部北西寄り、土坑群内の南西端に位置する。SI-26と重複するが、新旧関係は不明である。位置的にはSK-11、SK-13と南北方向に並んでいる。形状・規模的にはSK-10、SK-11、SK-13と大きさ・深さがよく似ており、SK-10、SK-11とも同じ群と考えられる。平面形はやや不整な隅丸形で、壁は垂直気味に立ち上がっている。断面形は鍋底状で、底面は平坦である。

SK-13(第113図、写真図版9)

調査区の中央部北西寄り、土坑群内の南西端に位置する。SI-25と重複し、またSI-26とも重複していた可能性もあるが、いずれも新旧関係は不明である。位置的にはSK-11、SK-12と南北方向に並んでいる。形状・規模的にはSK-10、SK-11、SK-12と大きさ・深さがよく似ており、SK-10、SK-11とも同じ群と考えられる。平面形は円形に近い楕円形で、壁は斜めに立ち上がっている。断面形は播鉢状で、底面はやや丸みを帯びている。

SK-14(第113・115図、写真図版9・49)

調査区の中央部北西寄り、土坑群内の南西端に位置する。重複する遺構はない。北にSI-24、北西にSK-15が近接している。位置的にSK-15と北西-南東方向に並び、形状・規模的にもSK-15と大きさ、形が似ている。平面形は円形で、壁は垂直に立ち上がっている。断面形は鍋底状で、底面はわずかに凹凸がある。

土坑内からは、焼成前の亀裂に粘土を貼り付けて撫でと蒐磨きで補修した土師器高坏が1点だけ出土した(第115図4)。白色胎土で短脚化が著しいもので、この高坏から古墳時代終末期の土坑と考えられる。

SK-15(第113図、写真図版9)

調査区の中央部北西寄り、土坑群内の南西端に位置する。SI-24の南端と重複するが、新旧関係は不明である。位置的にSK-14と北西-南東方向に並び、形状・規模的にもSK-14と大きさ、形が似るので、SK-14と同様に古墳時代の土坑の可能性がある。平面形は円形に近い楕円形で、壁は垂直気味に立ち上がっている。断面形は鍋底状で、底面はほぼ平坦である。

SK-16(第113・115図、写真図版13・55)

調査区の南西部に位置し、土坑群外に存在する。SI-36Cと重複するが、新旧関係は不明である。調査区壁面の写真で土層を見ると、この土坑がSI-36Cを切っている可能性がある。本土坑の北東部から南西部にかけての部分は、調査区外である。確認された部分では、平面形は楕円形に近い隅丸方形で、壁は垂直気味に立ち上がっている。断面形は鍋底状で、底面はほぼ平坦である。床面直上から土製玉類が出土した。SI-36Cを切るならば、古墳時代終末期の土坑であると考えられる。

遺物は、土師器(第115図5)の他に、土製勾玉3と土製丸玉2もある(第115図17~21)。土師質の勾玉3点は同工の品で、同様の勾玉が遺構外からの出土品にもある。遺物の注記によると土製勾玉のうち2点は土坑底面から出土していることがわかる。土師質の丸玉2点は、漆が見られないものと漆塗のものが各1点ずつある。土師器の特徴だけでなく、玉類の胎土が古墳時代終末期の八幡根遺跡土師器と同質であることから、古墳時代終末期の土坑と考えられる。

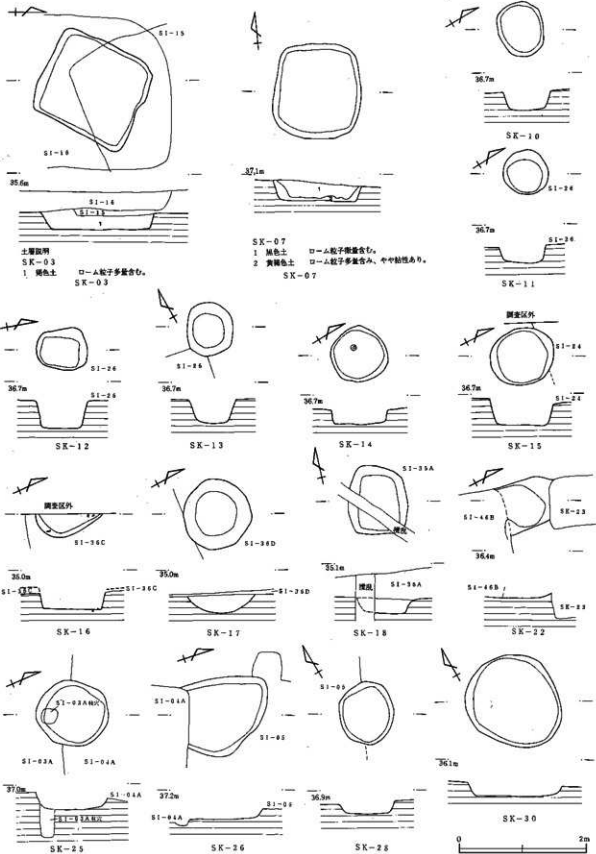
SK-17(第113図、写真図版13)

調査区の南西部、円形土坑群内に位置する。SI-36Dと重複する。確実な新旧関係は不明だが、SK-17の方が古い可能性がある。竪穴建物SI-36DのセクションベルトがSK-17の上を通るが、土坑の立ち上がりが竪穴建物の埋土中に確認されていない。SI-36Dに切られるならば、古墳時代後期以前の土坑であると考えられる。この場合、出土遺物は混入と考えなくてはならない。平面形は円形で、壁は緩やかに立ち上がっている。断面形は半球状に近く、底面はきれいに丸みを帯びている。

出土遺物は土師器の坏片と甕片があり、図示した口縁部(第115図6)も含めて古墳時代終末期と考えられる。

SK-18(第113図、写真図版13)

調査区の南西部、円形土坑群の東側に位置する。SI-35Aに切られる。このことから、9世紀後葉よりも古い土坑であるといえる。あるいは、古墳時代の土坑かもしれない。平面形は隅丸方形で、壁はやや斜めに立ち上がっている。断面形は椀鉢状で、底面はほぼ平坦である。遺物は古墳時代終末期と平安時代のものがあり、平安時代の遺物がSI-35Aからの混入でなければ平安時代の可能性もある。



第113図 八幡根遺跡 円形・方形土坑 (1) 遺構

SK-22(第113図、写真図版16)

調査区の北部、土坑群内の北側に位置する。SI-46B、SK-23と重複するが、いずれも新旧関係は不明である。平面図を見ると、SK-23より古いようにみえる。確認された部分では、平面形は隅丸方形に近い楕円形で、壁の立ち上がり、断面形は不明である。底面はほぼ平坦であると思われる。

SK-25(第113図、写真図版3)

調査区の北西部に位置し、土坑群外に存在する。SI-03A、SI-04Aと重複するが、いずれも新旧関係は不明である。平面形は円形で、壁は南壁でやや斜めに立ち上がり、北壁で斜めに立ち上がっている。断面形は擋鉢状で、底面はわずかに丸みを帯びている。

SK-26(第113・115図、写真図版3・49)

調査区の北西部に位置し、土坑群外に存在する。SI-04A、SI-05と重複するが、いずれも新旧関係は不明である。平面図を見ると、SI-04Aに切られているように思われる。確認された部分では、平面形は隅丸三角形で、壁は北壁で緩やかに立ち上がっている。断面形は皿状で、底面はわずかに丸みを帯びている。遺物出土状況は不詳である。古墳時代終末期の土師器坏(第115図7)も1点あるが、他の遺物からみて平安時代の土坑と考える(第115図8・9)。

SK-28(第113図、写真図版19)

調査区の北部西寄り、土坑群の西隣に位置する。SI-05と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は円形に近い楕円形で、壁は西壁で緩やかに立ち上がり、東壁で斜めに立ち上がっている。断面形は皿状で、底面はわずかに丸みを帯びている。

SK-30(第113図、写真図版10・49)

調査区の西部北寄りに位置し、古墳時代以降の土坑群から外に離れて存在する。SI-27の東壁にあたる付近に位置するが、SI-27の削平がひどいので、埋土同士の関係は不明である。平面形は円形で、壁は西壁で斜めに立ち上がり、東壁で緩やかに立ち上がっている。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。直径は1.5～1.6m、深さは0.2mである。遺物の出土状況は不明だが、出土した土器(第8図)は3片すべてが縄文中期のものなので、縄文時代の土坑と考えられる。詳しくは縄文時代の項(p.19)で記述している。

SK-31(第114図、写真図版19)

調査区の南西部、円形土坑群内に位置する。重複する遺構はない。北にSI-36D、東にSI-37Aが近接している。平面形は円形で、壁は緩やかに立ち上がっている。断面形は皿状で、底面はやや丸みを帯びている。

SK-32(第114・115図、写真図版19・49)

調査区の南西部、円形土坑群内に位置する。長方形土坑SK-33と重複するが、新旧関係は不明である。土層断面図はないが、SK-33に切られている可能性がある。この遺跡では、円形土坑は古墳時代～古代の集落に伴うものが多く、長方形土坑はそれよりも新しい傾向があるからである。確認された部分では、平面形は円形で、壁は緩やかに立ち上がっている。断面形は浅い擋鉢状で、底面はほぼ平坦と思われる。

出土遺物はSK-32とSK-33が区別されないで一緒に取り上げられている(第115図10・11)。詳しい状況がわからないが、SK-33が後の時代の攪乱とすると、その遺物もSK-32から流れ込んだものと現地で判断して一緒に取り上げたものかもしれない。古墳時代終末期の土師器も多いが、墨書土器からみて、SK-32が平安時代の土坑の可能性はある。

SK-34(第114図、写真図版20)

調査区の南西部、円形土坑群内に位置する。重複する遺構はない。北にSI-36D、東にSI-37A、西にSI-38が近接している。平面形は円形で、壁はかなり緩やかに立ち上がっている。断面形は不整な皿状で、底面は丸みを帯びている。古墳時代終末期の土師器が出土してはいるが、坏の体部が2片だけしかないので混入の可能性も高く、時期は決められない。

SK-35(第114図)

調査区の南西部、円形土坑群内に位置する。重複する遺構はない。南東にSI-37Aが近接している。平面形は円形に近い楕円形で、壁はかなり緩やかに立ち上がっている。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。出土遺物は細片なので図示していないが、回転糸切り摩し後に体部下端を手持ち施削りする、内面施磨き後黒色処理の土師器坏と、三和窯産の須恵器坏がある。平安時代の土坑と考えられる。

SK-37(第114・115図、写真図版20・49)

調査区の中央部南西寄りに位置し、土坑群外に存在する。重複する遺構はない。東にSI-30、SI-31が近接している。平面形は円形で、壁は垂直気味に立ち上がっている。断面形は襜鉢状で、底面は丸みを帯びている。完形の土師器坏1点が、伏せた状態で少し浮いて出土した(第115図12)。他にも同時期の土師器小片が少量出土している。古墳時代終末期の土坑と考えられる。

SK-39(第114図、写真図版20)

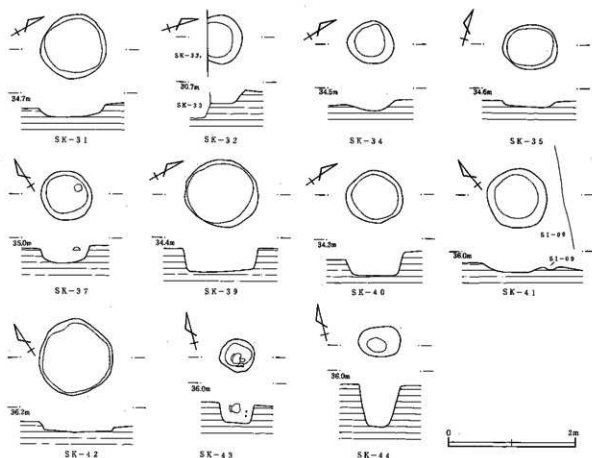
調査区の南部に位置し、土坑群外に存在する。重複する遺構はない。北にSI-30、SI-31が近接している。平面形は円形に近い楕円形で、壁は垂直気味に立ち上がっている。断面形は鍋底状で、底面は北壁際がわずかに高く、南壁際に向かってわずかに傾斜しており、比高差6cmである。古墳時代終末期の土師器がわずか3片出土しただけであり、混入の可能性を考えると、土坑の時期は決められない。

SK-40(第114図、写真図版20)

調査区の南部に位置し、土坑群外に存在する。重複する遺構はない。北にSI-30、SI-31、南にSI-55が近接している。平面形は円形に近い楕円形で、壁は南壁でやや斜めに立ち上がり、北壁で垂直気味に立ち上がっている。断面形は襜鉢状で、底面はほぼ平坦である。

SK-41(第114図)

調査区の北部、土坑群内の中央南寄りに位置する。SI-09と重複するが、新旧関係は不明である。平面形は円形を呈する。壁は底面との境が不明瞭で、なだらかに立ち上がっている。断面形は皿状で、底面はほぼ平坦である。



第114図 八幡根遺跡 円形・方形土坑(2) 遺構

SK-42 (第114図、写真図版20)

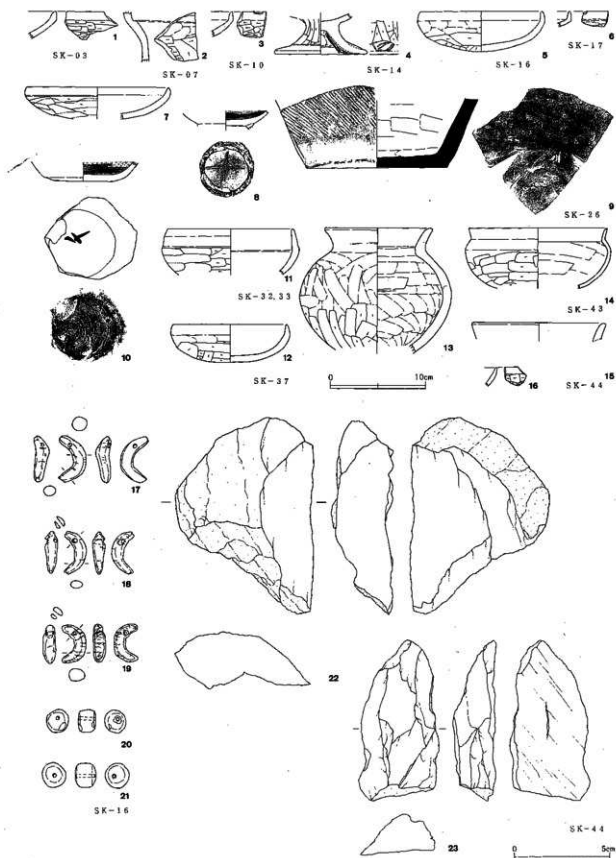
調査区の中央部西寄りに位置し、土坑群外に存在する。重複する遺構はない。北東にSI-27が近接している。平面形は円形で、壁は西壁でやや斜めに立ち上がり、東壁はほとんど遺存していない。断面形は皿状で、底面は壁際がわずかに高く、中央部がわずかに低くなっており、比高差4cmである。

SK-43 (第114・115図、写真図版20・50)

調査区の西部南寄りの、土坑群外に存在する。重複する遺構はない。東にSI-33が近接する。平面形は円形で、壁は西壁でやや斜めに立ち上がり、東壁で垂直気味に立ち上がる。断面形は鍋底状で、底面は西壁際がわずかに高く、東壁際に向かってわずかに傾斜しており、比高差4cmである。遺物は2点だけで、古墳時代中期後半の小形甕と碗形杯がある(第115図13・14)。小形甕は完形なので、この時期の土坑と考えられる。

SK-44 (第114・115図、写真図版20)

調査区の西部南寄りの土坑群外にあり、重複する遺構はなく、東にSI-33が近接する。楕円形で、断面は壁がやや斜めに立ち上がる深い槽鉢状で、底はほぼ平坦である。SK-43から近く、同じく深いので、古墳時代の可能性がある。遺物は細片4点だけだが、終末期の土師器がある(第115図15・16)。また、石製模造品製作に関わる荒制工程品が2点ある(第115図22・23)が、片岩製なので、古墳時代中期の遺物の可能性が高い。



第115図 八幡根遺跡 円形・方形土坑(3) 遺物

第3章 発掘調査された遺構と遺物

第142表 SK-03出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 坏 土師器	口 復約13	やや厚く、口縁部は外面が明瞭な線を有して内傾し、内面は明瞭な線を持たないで外傾する。外面は口縁部横撫での後に直削り。内面は全面横撫で。確かな線は見られないが、磨仕上げを施した可能性も残る。	7.5YR6/4 にぶい橙色	緻密で白磁粒・透明細砂やや多量、黒細砂ごく少量。やや軟質。1b類。	不明 口一底1/9 周

第143表 SK-07出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
2 鉢 土師器	大 復約14	外面口縁部下に強い段を持ち、内面には線を持たないで口縁部が直立する。外面は体部に横撫での後、口縁部横撫で、体部中央に直削り。内面は横撫で。	7.5YR6/8 橙色	緻密で混和材はほとんど目立たず、白磁粒・透明細砂少量、黒細砂ごく少量。軟質。	不明 体1/8周

第144表 SK-10出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
3 坏 土師器	口 復約14	外面に明瞭、内面に不明瞭な線をそれぞれ持って急に立ち上がる。外面は口縁部横撫での後に直削り。内面は全面横撫で。器表面が橙色に発色する胎土を用いている。塗彩はしていない。	5YR5/8 明赤褐色	緻密で混和材は目立たず、透明細砂少量・白磁粒・黒細砂ごく少量。やや硬質。	不明 口1/18周

第145表 SK-14出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
4 高坏 土師器	脚 9.8	脚部は外面で低く不明瞭な段を持って裾が開き、内面は線を持たない。外面は口縁部横撫での後に、脚部直削り。脚部内面は裾部横撫での後に、脚部直削り後、多方向撫で。坏部内面は丁寧な多方向撫で。焼成前に穿脚部に入った亀裂の内外面に粘土を貼り付けて撫で、粗い彫磨きを上から施して修整している。	2.5Y6/3 淡黄色	緻密で混和材はほとんど目立たず、透明細砂ごく少量。軟質。1b類。	不明 体4/6周 脚柱部全周

第146表 SK-16出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
5 坏 土師器	口 復12.8 高 4.3 大 復13.5	口縁部外面は線を持って内傾し、内面はごく弱い線を持って直立する。外面は体部に横撫での後、底部多方向(?)、体部横方向の直削り。内面全面と口縁部外面は横撫で。	2.5Y6/3 淡黄色 黒炭あり	やや緻密で黒・透明細砂多量、白磁粒やや多量。やや硬質。1a類。	埋土中 口一底1/4 周 「フク土」
17 勾玉 土師器	長 2.5 幅 1.5 厚 0.7 重 1.38g	両端を細くした粒を曲げて表面を軽く撫で、粘土を曲げた時の細い亀裂がわずかに背面に見える。左側の面から焼成前に丸棒を通して穿孔。孔は両面とも径2.2mm。	7.5YR7/3 にぶい橙色	緻密で黒・透明細砂やや多量、白磁粒少量。軟質。1a類。	床直 突起 「1床直」
18 勾玉 土師器	長 2.3 幅 1.2 厚 0.7 重 0.91g	両端を細くした粒を曲げて表面を軽く撫で、粘土を曲げた時の細い亀裂が背面に見える。左側の面から焼成前に丸棒を通して穿孔。孔は初径2.3mmで、終径は丸棒を動かしているの最大3.7mmまで広がる。	2.5YR8/3 淡黄色	緻密で黒・透明細砂やや多量、白磁粒少量。軟質。1a類。	不明 突起 「SK-16」
19 勾玉 土師器	長 幅 2.1 厚 1.3 重 0.7 1.11g	両端を細くした粒を曲げた後、表面をきちんと調整しない。腹部上半には曲げる時に当たった棒状品の痕を残し、側面～背面には曲げた時の細かい亀裂が非常に多い。焼成前に丸棒を通して穿孔し、穿孔方向は不詳だが、左側の面からあけたものかもしれない。孔径は左側面で2.2mm、右側の面で2.0mm。	10YR2/3 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂やや多量、白磁粒少量。軟質。1a類。	床直 突起 「2床直」
20 丸玉 土師器	長 0.9 径 1.3 重 1.47g	両面はおおむね平直で、左側の面は少しくぼむ。両面は平滑に撫でて仕上げ。左側の面から焼成前に棒を通して穿孔し、孔径は両面とも1.8mm。現状では磨仕上げは見られない。	10YR6/3 にぶい黄褐色	緻密で黒・透明細砂やや多量、白磁粒やや少ない。やや軟質。1a類。	埋土中 突起 「フク土」
21 丸玉 土師器	長 径 1.1 重 1.89g	両面はおおむね平直で、右側の面は少し突出気味。側面は平滑で撫でて仕上げ。左側の面から焼成前に棒を通して穿孔し、孔径は初径2.0mm、終径0.8mm。全面を磨仕上げ。	7.5YR 灰褐色	緻密で白磁粒・透明細砂やや多量、黒細砂少量。やや軟質。1a類か1b類?	埋土中 突起 「フク土」

第147表 SK-17出土遺物

番号 器種 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 焼 土 成	出土状況 残存状況 注記
6 坏 土師器	口 復約12	薄い。外周は口縁部に少し凹線気味の浅い段を持ち、内面は弱い段を持って直立する。外面は口縁部に溝を施すので、おそらく裏割り。内面全面と口縁部外面に横溝で。	10YR7/3 にふい黄橙 色	緻密で黒・透明細 砂やや多量、白細 砂少量。 やや軟質。1a類。	不明 □、18周

第148表 SK-26出土遺物

番号 器種 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 焼 土 成	出土状況 残存状況 注記
7 坏 土師器	口 復16.0 高 残 3.4 大 復15.5	口縁部は外面に沈線に伴う段を持って内傾し、内面は不明瞭な段を持って外傾する。外面は口縁部に横溝の後に、体部に横方向の彫り。内面全面と外面口縁部は横溝の後に仕上げ。古墳時代終末期の遺物が混入。	10YR8/3 浅黄橙色	緻密で透明細砂や 多量、白細砂・ 黒細砂やや少量。 やや軟質。1b類。	不明 □～体1/3 周
8 高台付 碗土師器	底 6.1	薄く軽い。外面はワコロ溝で、底面外周に回転沈線を二条入れてから、その沈線の上に高台を貼り付ける。高台内に先の丸い工具で焼成前に、「キ」の字形の捺刻を入れる。内面は底面一方、体部横方向の彫り跡の後、黒色処理。	7.5YR7/4 にふい橙色	やや緻密で白細砂 と黒・透明細砂や 多量。 やや硬質。 やや硬質。	埋土中 底全面 「フク土」
9 須恵 土師器	底 復14.5	外面は胴部に斜位の平行明きの後、胴部下端に横位の横溝で。底面は製作時の台から外したままの、わずかにゆるい凹凸を持つ平坦面。内面は、底面に凹削方向で、胴部は横長の無文器具をやや斜位に当てた痕。益子窯産の可能性あり。	10BG6/1 青灰色	緻密で白練・白砂 やや多量。硬質。	埋土中 底1/4周 「フク土」

第149表 SK-32・33出土遺物

番号 器種 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 焼 土 成	出土状況 残存状況 注記
10 坏 土師器	底 6.9	体部下位にゆるい段状の明瞭な腰を持つ。底面外面に墨書「千」あり。底面は回転糸切り彫し後、無調整。糸切り時のロクロは右回転。内面は底面一方、体部横方向の彫り跡の後、黒色処理。	10YR7/6 明黄褐色 黒深あり	緻密で黒・透明細 砂多量、白細砂や 多量、灰色練・ 砂少量。軟質。	不明 底1/2周
11 坏 土師器	口 復13.2 高 残 4.9 大 復14.6	外面に明瞭な段、内面に沈線に伴う段を持って口縁部が内傾する。外面は口縁部に横溝の後に、体部に裏割り。内面は体部に横溝の後に、口縁部に沈線に伴う横溝で。	10YR7/4 にふい黄橙 色	緻密で白細砂と黒 ・透明細砂多量。 軟質。1a類。	不明 □～体1/6 周

第150表 SK-37出土遺物

番号 器種 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 焼 土 成	出土状況 残存状況 注記
12 坏 土師器	口 12.1 高 4.1 大 12.7	中央部のカーブがかなり弱い丸底で、口縁部は外面に弱い段を持って内傾し、内面はほとんど段を持たないで直立する。外面は体部に横溝の後に、底部多方向、体部横方向の彫り。内面全面と口縁部外面は横溝で。	2.5Y8/3 淡黄色 黒深あり	緻密で黒細砂・白 部粒多量。透明細 砂やや多量。 黒細砂やや少量。 やや硬質。1a類。	底上18cm ほぼ完形 「1」

第151表 SK-43出土遺物

番号 器種 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 焼 土 成	出土状況 残存状況 注記
13 小形 土師器	口 11.3 高 13.3 大 15.8	胴部内面は丸味を持って少し内面側へ突出する。口縁部は外面側へわずかに膨らむ。外面胴部は下半に裏割りの後に、口縁部横溝でと胴部上半に斜め溝で。内面は胴部に横溝の後に、口縁部横溝で。外面胴部下半にスス。内面口縁部～胴部全面に薄いオコグマが付着。底面が欠けていて加熱赤化痕は不明。	10YR7/3 にふい黄橙 色	緻密で白細砂・透 明細砂やや多量。 黒細砂やや少量。 やや硬質。	底上15cm 胴下半～口 全面 「1」
14 碗形 土師器	口 復14.6 高 残 6.4 大 復15.3	大形で非常に薄い。外面は口縁部下端と胴部にやや弱い横、内面は口縁部下端に弱い段を持って外傾する。外面は口縁～体部上半に横溝の後に、下半に裏割り。内面は体部に裏割り、口縁部横溝で。	10R5/4 赤褐色	粗い。白細砂、黒 ・透明細砂多量。 やや硬質。	不明 体1/5周 □、15周

第152表 SK-44出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成 成	出土状況 残存状況 注記
15 鉢 土師器	口 復14.1	厚く、口縁端部は丸くおさめる。口縁部内外面横撫で。	2.5Y6/3 にぶい黄色	やや密で白細粒・透明細砂多量、黒・灰色細砂少量、やや硬質。	不明 □/8周
16 鉢 土師器		薄い。口縁部は外面に非常に弱い稜を持って外傾する。外面体部に横撫削りの後、口縁部内外面横撫で。	5YR6/8 橙色	密で混和材は目立たず、黒・透明細砂と白細粒少量、硬質。	不明 □/30周
22 瓦削工 程品 石製模 造品	長 10.5 幅 7.4 厚 3.3 重 203g	左面の面の右手と、右面の面の左手は劈開を利用して削った大きな割離面。他は原石の自然面。原石に近い段階の瓦削工程品。工具の方向感や割突痕は見られない。		雲母薄片を多量に含み、劈開が著しく発達した片岩。	埋土中 完形 「フク土」
23 瓦削工 程品 石製模 造品	長 8.6 幅 4.3 厚 2.3 重 76.5g	図の下端面は原石の自然面の可能性がある。右面の面は劈開方向に沿って一気に削れた面で、加工によるものかどうかは不明。この平ら面から対面側へ数回割離して、これが製品のとれる大きさを目指しているのであれば、形削工程品の可能性もある。工具の方向感や割突痕は見られない。左面の面には自然面を残さない。		雲母薄片を多量に含み、劈開が著しく発達した片岩。	埋土中 完形 「フク土」

(3) 長方形土坑

本調査区内の長方形土坑は、17基を検出した。

その平面形や出土遺物から見て、そのほとんどが比較的新しい時期(おそらく中世以降)の土坑だと考えられる。したがって、土層断面図がなくて新旧関係がはっきりしない場合でも、古墳時代・平安時代の堅穴建物跡との切り合いについては、土坑の方が新しく、建物跡を切っていると判断した。土坑の断面図に重複関係を破線で示したものが、これにあたる。この場合、堅穴建物跡を切っていると判断した土坑の深さも、建物跡埋土の上端から測り込んだ。各土坑の出土遺物数は第156表に、規模は巻末の第160表にまとめた。

SK-01A(第116図、写真図版15)

調査区の南部西寄りに位置し、土坑群以外に存在する。SI-43を切っている。SK-01Bとも重複するが、新旧関係は不明である。平面形は不整な隅丸長方形で、壁は垂直気味に立ち上がる。断面形は指鉢状で、底面はやや丸みを帯びている。

SK-01B(第116図、写真図版15)

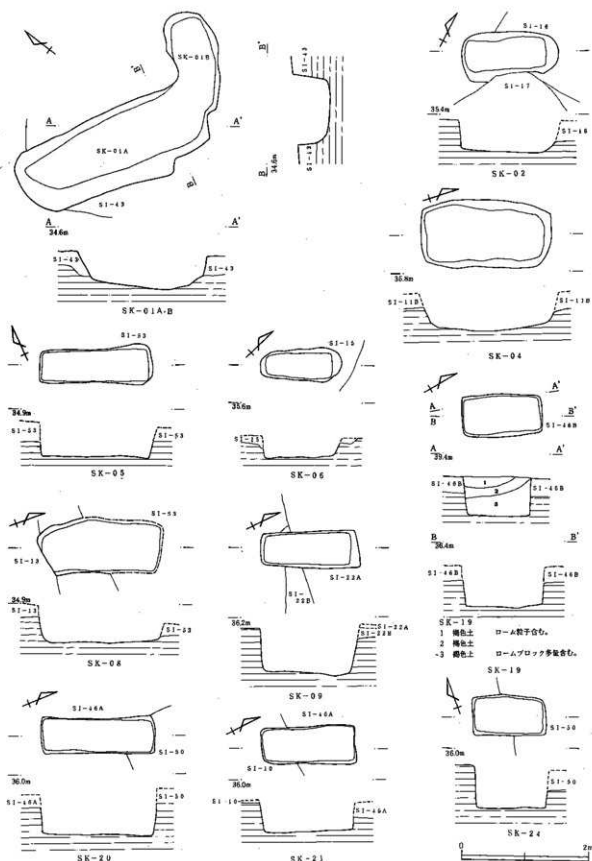
調査区の南部西寄りに位置し、土坑群以外に存在する。SI-43を切っている。SK-01Aとも重複するが、新旧関係は不明である。平面形は隅丸長方形である。

SK-02(第116図、写真図版7)

調査区の中央部北東寄り、土坑群内の南端に位置する。SI-16・SI-17を切っている。南壁は垂直気味に立ち上がり、北壁は緩やかに立ち上がっている。断面形は鍋底状で、底面は平坦である。古墳時代終末期の土師器が少量出土しているが、混入であろう。

SK-04(第116図、写真図版6)

調査区の北部東寄りの、土坑群内に位置する。SI-11A(およびSI-11B)を切っている。平面形は長方形で、



第116図 八幡根遺跡 長方形土坑(1) 遺構

壁はやや斜めに立ち上がっている。断面形は鍋底状で、底面はやや丸みを帯びる。この土坑からは、古墳時代終末期の土師器がかなりの量出土しているが(第156表参照)、SI-11Aから混入したものと考えるのが妥当であろう。

SK-05(第116図、写真図版19)

調査区の北東部、土坑群内の東端に位置する。SI-53を切っている。平面形は長方形で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。断面形は鍋底状で、底面は東壁際がやや低くなっている。

SK-06(第116図、写真図版19)

調査区の中央部北東寄り、土坑群内の南東端に位置する。土層断面の記録はないが、長方形土坑であることからみてSI-15よりも新しい可能性がある。平面形は隅丸長方形で、南壁は垂直気味に立ち上がり、北壁はやや斜めに立ち上がっている。断面形は鍋底状で、底面はすこし凹凸がある。

SK-08(第116・117図、写真図版6)

調査区の北東部、土坑群内の東端に位置する。SI-13、SI-53を切っている。平面形は、南端がわずかに東に曲がった長方形で、南壁は垂直気味に立ち上がっている。断面形は鍋底状で、底面は北壁際がわずかに高く、南壁際に向かってわずかに傾斜しており、比高差は8cmである。

遺物は、古墳時代終末期の土師器の身模倣形坏(第117図1)が1片だけ出土した。真っ白な胎土がめずらしい。SI-13やSI-53から流入した可能性が考えられる。

SK-09(第116・117図、写真図版8)

調査区の中央部北寄り、土坑群内の南端に位置する。SI-22A、SI-22Bを切っている。平面形は長方形で、壁は垂直気味に立ち上がっている。断面形は鍋底状で、底面は北側がわずかに低く、比高差は8cmである。

図示した遺物(第117図2)は、口縁部に2段を持つ土師器で、底部の状況からみると高坏の可能性があり、須恵器を模倣したものかもしれない。

SK-19(第116図、写真図版16)

調査区の北部、土坑群内の中央部西寄りに位置する。SI-46A、SI-46Bを切っている。平面形は端正な長方形で、壁は垂直に立ち上がっている。断面形は円筒状で、底面は中央部がわずかに低く、比高差は6cmである。埋土はレンズ状に分層でき、自然堆積と考えられる。

SK-20(第116図、写真図版16)

調査区の北部、土坑群内の中央部に位置する。SI-46A、SI-50を切っている。平面形は端正な長方形で、壁は垂直に立ち上がっている。断面形は円筒状で、底面は南壁際がわずかに高く、北壁際に向かってわずかに傾斜しており、比高差は6cmである。

SK-21(第116図、写真図版16)

調査区の北部、土坑群内の中央部に位置する。SI-10、SI-46Aを切っている。平面形は端正な長方形で、

壁は垂直に立ち上がっている。断面形は円筒状で、底面は北壁際がわずかに高く、南壁際に向かってわずかに傾斜しており、比高差は6 cmである。

SK-23(第117図)

調査区の北部、土坑群内の北側に位置する。SI-47、SI-48を切っている。SK-22とも重複するが、新旧関係は不明である。平面図をみると、SK-22を切っていると思われる。平面形は長方形で、壁は垂直気味に立ち上がっている。断面形は円筒状で、底面はほぼ平坦である。第117図3の他にも、古墳時代終末期の土師器が多く出土したが、SI-47、SI-48と近い時期のもので、流れ込みの可能性がある。このほかに、出土状況は不明ではあるが、中世以降と思われる陶器が3片ある。いずれにせよ、古墳時代の土坑とは考えないでよいと思われる。

SK-24(第116図、写真図版17)

調査区の北部、土坑群内の北側に位置する。SI-50を切っている。平面形は端正な長方形で、壁は垂直に立ち上がっている。断面形は円筒状で、底面はほぼ平坦である。

SK-27(第117図、写真図版4)

調査区の北部東寄り、土坑群内の西端に位置する。SI-05を切っている。北半分は調査区外である。確認された部分では、平面形は端正な長方形で、壁は垂直に立ち上がっている。断面形は円筒状で、底面は平坦である。

SK-33(第117図、写真図版19・49)

調査区の南西部に位置し、土坑群外に存在する。SK-32と重複し、土層断面の記録はないが、平面図をみるとSK-32を切ると思われる。西側は調査区外である。確認された部分では、平面形は端正な長方形で、壁はやや斜めに立ち上がっている。断面形は浅い楕円状で、底面はほぼ平坦である。写真をみると、埋土はロームブロックを少量含む黒色土で、いわゆる「イモ穴」風であり、新しい土坑であると推測される。

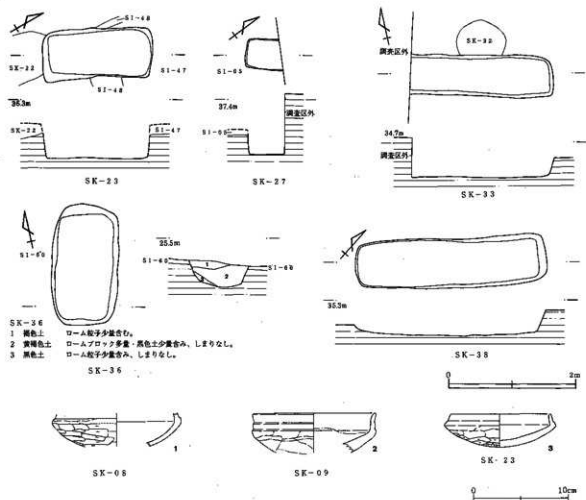
SK-36(第117図、写真図版19)

調査区の北部東寄り、土坑群内の東側に位置する。SI-60を切っている。平面形は隅丸長方形で、西壁は緩やかに立ち上がり、東壁はやや斜めに立ち上がっている。断面形は不整な半球状で、底面は丸みを帯びている。埋土は自然堆積か人為埋土か判断できなかったが、埋土にしまりのないことから、かなり新しい土坑であると推測される。

SK-38(第117図、写真図版20)

調査区の中央部南西寄りに位置し、土坑群の外に所在する。重複する遺構はない。西にSI-34、東にSI-30とSI-31が近接する。平面形は端正な隅丸長方形で、断面形は、北壁はやや斜めに立ち上がっている。断面形は浅い鍋底状で、底はわずかに丸みを帯びている。古墳時代および平安時代の遺物がかなり多く出土しているが、中世・近世の陶器も小片がわずかに1片ずつではあるがみられるので、遺物の大半か、またはすべてが混入品と考えられる。

第3章 発掘調査された遺構と遺物



第117図 八幡根遺跡 長方形土坑(2) 遺構・遺物

第153表 SK-08出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
1 土 脚器	大 復13.7	口縁部は外面に少くはむ明瞭な段を持ち、内面には非常に不明瞭な段を持って内傾する。外面は体部に離な態での後、体部横断面より、内面全面と口縁部外面に横撫で。	10YR8/2 灰白色	緻密で透明細砂・白輝粒少量。厚層砂と赤輝粒ごく少量。やや軟質。1b類。	不明 体1/8周 「SK-08」

第154表 SK-09出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
2 高 土脚器	口 復12.8 高 残 4.2 大 復13.1	口縁部外面に明瞭な2段を持ち、内面はやや弱い段を持ったものにゆるく外反する。底部へ向かうにつれて非常に厚くなるので、高坏の可能性はあるが、確実ではない。外面は体部に離な態での後、口縁部横撫で。残存部には差別りは認められない。内面は全面横撫で。内外面の体部上位以上には磨仕上げ。内外面の底部寄りには現状で漆が認められない。	2.5Y7/2 灰黄色 底部寄りに 黒斑あり	緻密で白細粒と黒・透明細砂多量。軟質。1a類。	不明 口~体1/6周 「SK-09」

第155表 SK-23出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 焼 成	出土状況 残存状況 注記
3 坏 土脚器	口 復10.6 高 3.5 大 復11.8	体部はやや厚い。口縁部は外面に長くゆるい段、内面に強い段を持って内傾する。外面は体部に離な態での後、底面に多方向、体部に横方向の磨削り。口縁部外面と内面全面は横撫で。	2.5Y8/2 灰白色	緻密で透明細砂・白細粒やや多量。軟質。1b類。	不明 口1/4周 体1/3周

第156表 土坑出土遺物数一覧表

遺構	部位	古墳中期		古墳時代終末期						平安時代			その他	
		杯	高杯	鉢	小形甕	長甕	甕	大甕	磁土器・杯・柄	甕	長甕	甕		
SK-02	土口縁部	1												
	胴体部	3					2							
	器底部						1							
SK-03	土口縁部	3												
	胴体部	10												
	器底部													
SK-04	土口縁部	9		2	2									
	胴体部	25					10							
	器底部				1									
SK-07	土口縁部	1	2											
	胴体部			1										
	器底部									平底1				
SK-08	土口縁部	1												
	胴体部													
	器底部													
SK-09	土口縁部	2	1				1							
	胴体部	4		5					2					
	器底部	平底1		1										
SK-10	土口縁部	2												
	胴体部	7					9							
	器底部													
SK-14	土口縁部													
	胴体部			脚柱1										高杯は同一個体。
	器底部			板1										古墳時代終末期の土坑と考えられる。
SK-16	土口縁部	1												
	胴体部													
	器底部													
SK-17	土口縁部	1					1							
	胴体部	3		1										
	器底部					1								
SK-18	土口縁部	3										1		
	胴体部	1					4			2		3		
	器底部					1				平底4		1		
SK-23	土口縁部	9		1							2			
	胴体部	有					有							中世以降?の陶器4片。
	器底部													古墳・平安時代の遺物は混入と考えられる。
SK-24	土口縁部													
	胴体部	2					1							近世以降の瓦1片。
	器底部	有	脚柱1	8			2							古墳・平安時代の遺物は混入と考えられる。
SK-26	土口縁部													
	胴体部	14					1							河原石1点あり。
	器底部	25					12		5		19			平安時代の須恵器壺1片は益子産産の可能性はある。
SK-28	土口縁部													
	胴体部													平安時代の土坑と考えられる。
	器底部	2									1			平安時代の須恵器杯1片は三和陶産。
SK-30	土口縁部	11			4						2			
	胴体部													
	器底部										1			
SK-31	土口縁部													
	胴体部													
	器底部										1	2		
SK-32	土口縁部	2					1				1			
	胴体部	15					15		3	2		1		古墳前期の甕3片。
	器底部										平底1			SK-32は平安時代の土坑の可能性もある。

第3章 発掘調査された遺構と遺物

遺構	器具	部位	古墳中期		古墳時代終末期						平安時代			その他		
			杯	高杯	鉢	小形甕	長甕	甕	大甕	磁土器・陶器	甕	長甕	甕			
SK-34	土	口縁部														
		胴部	2													
		底部														
SK-36	土	口縁部					1					1				平安時代の須恵器杯1片は三和陶産。平安時代の土坑と考えられる。
		胴部										1	1			
		器底部										平底1				
		須口縁部										1				
SK-37	土	口縁部	4													古墳時代終末期の土坑と考えられる。
		胴部	1		2		10									
		器底部														
SK-38	土	口縁部	15	4		1										中世以降の焼き締めの銅軸陶器1片、近世の土師器器底部1片。古墳時代前期の甕4片、時期不明の鉄滓1片。
		胴部	47				39		2	4		2				
		器底部					1									
		須口縁部														
		器底部										平底1				
SK-39	土	口縁部				1										
		胴部					2									
		器底部														
SK-42	土	口縁部														
		胴部	高杯脚1埋1	2				8								
		器底部														
SK-43	土	口縁部	小形甕3, 鉢形杯1													小形甕は同一個体。古墳時代中期の土坑と考えられる。
		胴部	小型甕有													
		器底部														
SK-44	土	口縁部	1	1												石製模造品の寛前工程品が2点あり。
		胴部						2								
		器底部														

(4) 遺構外出土の古墳時代・平安時代の遺物

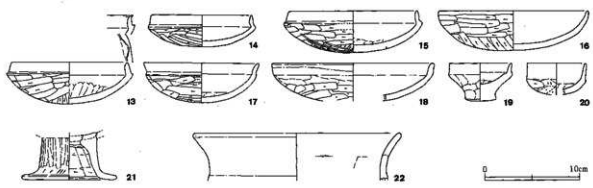
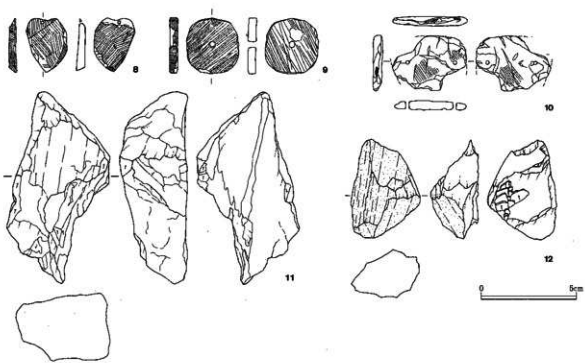
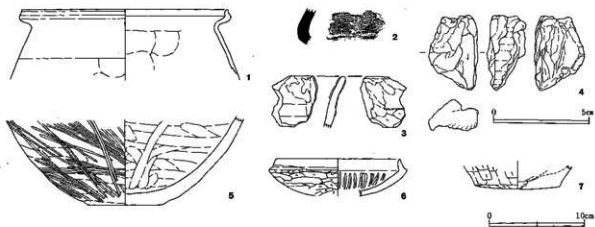
表面採集品や、表土からの出土品を紹介する(第118・119図)。弥生時代以前の遺物は第3章第8節で扱うので、古墳時代以降のものをここでは扱う。

遺構番号の注記がある遺物も、いくつかはこの項で扱う。SI-54・SI-56A・SI-56B・SI-58・SI-59がそれである。これらの番号を持つ遺構は、調査時の全体図原因や遺構実測原因にも認められないので、遺構として認定できなかったものであろう。最初は遺構があると考えて調査を始め、遺物を取り上げたが、その後、たとえば、遺構ではないと判断された——などの事情で欠番になったものと考えられる。調査区の中における位置はよくわからない。

1-4には「SI-56」の注記がある。1は平安時代の甕で、ごくわずかながら金色に発色した黒雲母を含む常総型のもの。2は古墳時代後～終末期の関東地方の在産の須恵器甕。3は古墳時代終末期の甕・瓶類の破片で、胎土が緻密で混和材が少ないので甕の可能性が高い。雑に挫でいるので、製作時の歪みなどを補修している可能性もある。4は古墳時代終末期の土師器製作関連遺物で、土師器の削りかすである。これらと同じく「SI-56」あるいは「SI-56A」「SI-56B」の注記がある遺物は、これらの他に古墳時代終末期の土師器破片が多量で、平安時代の土師器・須恵器若干がある。

5は「SI-58フクド」の注記がある。火にかけないでおそらく貯蔵用などに使用した、古墳時代中期の土師器である。「SI-58」の注記がある遺物はこれだけしかない。

6・7には「SI-59」の注記がある。6の坏は漆仕上げと内面部の放射状甕磨きを兼用するもので、器高も4cm以上あったようなので、古墳時代後期後半の遺物になる可能性がある。7も底面が突出する古墳時



第118図 八幡根遺跡 遺構外出土遺物 (1)



第119図 八幡根遺跡 遺構外出土遺物 (2)

第157表 遺構外出土遺物

番号 種類	法量 (cm)	特 徴	色 調	胎 土 成	出土状況 残存状況 注記
1 罫土師器	口 21.7 高 残 7.5	薄い。頸部は内外面とも稜線を持たないできつく外反し、口縁部は内外面に明瞭な稜と外面に浅い凹線を持って肩部が外反する。外面は胴部推での後に、頸部以上を横撫で。内面は胴部推で、口縁部横撫で。	7.5YR7/3 にぶい橙色	やや緻密で黒・透明細砂と白細砂やや多量、白細砂と赤細砂やや少量、金色の黒雲母細片ごく少量。 やや軟質。	埋土中？ 口〜胴1/2周 [SI-56A,B フタ土]
2 小形甕 須恵器	口 復約14	厚く、頸部は下層の内外面に弱い稜を持つ。外面は口縁部推での後に、樽指波状文を器面に向かって右から左へ回転施文。内面は口縁部推で。	5YR6/2 桃灰色 芯は橙黄色 器表は桃灰色	やや緻密で白細砂・白細砂多量、黒・透明細砂やや多量。 軟質。	埋土中？ 胴1/8周 [SI-56フタ土]
3 瓶？ 土師器		頸部の内面にごく弱い稜、外面に浅く明瞭な段を持つ。外面は口縁部横撫での後に、胴部直削り。内面は横撫で。外面(右面)の左縁付近の内外面に焼成前に亀裂が生じた部分を、粘土を糊って上からまたたく撫でて補修し、その後に焼成している。内面も同様。	2.5YR6/3 淡黄色	やや緻密で黒細砂多量、透明細砂・白細砂やや多量。 軟質。1b類。	不明 口/12周未測 [SI-56]
4 削りか す 土師重	長 4.0 幅 2.6 厚 2.0 土師重 12.35g	左側の面を下へ磨削した後、左手を手持へ折り返す。右側の面は削りかすをソフト状に折りつぶす。図示した側面は、この時に撫でたか、または平らな面に押しつけてひきずった痕痕。	10YR8/4 淡黄褐色	緻密で焼成材は目立たず、透明細砂やや少量。 軟質。2類。	不明 底/6周 [SI-56]
5 罫土師器	底 7.7	底部は厚い。底部は胴部からごくわずかに下へ突出気味。外面は幅の狭い工具で底面に多方向の撫で。胴部は雑な撫での後、磨き。内面は底部多方向、体部横方向の撫で。加熱痕跡は見られない。	2.5YR5/6 明赤褐色	粗い。白・灰色の角礫と砂、黒・透明細砂多量。白細砂少量。 やや硬質。	埋土中？ 底/6周 [SI-58フタ土]
6 坏 土師器	口 復13.1 高 残 3.9 大 復14.6	口縁部は内外面に明瞭な稜と段を持ち、内傾する。外面は口縁部に横撫で、体部に撫での後、縦方向の磨削り。内面は全面に横撫での後、体部に2本一線の放射状磨削り。内面全面と外面口縁部は漆仕上げ。	5YR6/4 にぶい橙色	緻密で透明細砂多量、白細砂やや多量、黒細砂少量、1b類。	不明 口〜体1/5周 [SI-59]
7 罫土師器	底 径 9.0	厚く、底部は少し突出し、外底面は丸底。外面は胴部推での後に、縦磨削りし、底面を一方削削り。内面横撫で。	7.5YR6/4 にぶい橙色	粗い。白細砂・透明細砂多量、灰色細砂・黒細砂やや少量。 軟質。	不明 底〜胴1/3周 [SI-59]
8 甕形石製模 造品	長 2.9 幅 2.2 厚 0.4 重 4.18g	両面はおおむね一方向にやや粗く研磨する。側面は斜方向に研磨し、所々に切刃痕を残す。孔は径1.6mmで、左側の面から穿孔する可能性もあるが確かではない。孔が上端に寄りすぎているので、右側の面の上端の大きな鋭利な穿孔後に破損している可能性がある。	滑石。	滑石。	表採 表裏又は上端を欠損 [表採]
9 有孔円板 石製模 造品	径 2.8-3.0 厚 0.4 重 7.35g	両面を一方方向に細かく研磨する。側面は部分的に切刃痕を残すが、大半は横方向に細かく研磨している。左側の面から穿孔し、初径3.2mm、終径3.1mm。全体として非常に丁寧な作りであるが、側面研磨が横方向なので、平面形がやや多角形気味になる。	滑石。	滑石。	表土中 穿孔し [表土]
10 有孔円板 石製模 造品	径 4.0 厚 0.5 重 7.47g	全体に破損がひどく、本来の形態・成形加工と後世の傷を区別できない。両面ともにおそろしく一方方向に細かく研磨する。側面は、わずかな残存部で見ると斜方向に細かく研磨している。左側の面から穿孔している可能性があり、初径・終径ともに1.9mm。	滑石。	滑石。	表土中 全面に破損あり [表土]
11 完工 器品 石製模 造品	長 10.2 幅 5.5 厚 3.6 重 192g	左側の面上部中央は頸部に沿った平面面面で、自然面とは考えられないが主・副頸部と、右側の面を各種面はすべて革新の割離面。全面に切刃工具の刃が多いが、細の操作に伴う傷も僅まっている可能性があり、明確に区別できないものも多い。刺突痕は認められない。		滑石。	表採 変形 [SI-32付近 表採]
12 完工 器品 石製模 造品	長 幅 5.3 厚 3.7 厚 2.4	左側の面は、大手が劈開に沿って割れた自然の割離面。右側の面が削片を削り出していて、直線的な方部を持つ工具の刃が残る。		滑石。	表採 変形 [SI-32付近 表採]
13 坏 土師器	口 12.2 高 大 4.4 大 13.4	口縁部は内外面に明瞭な稜線とやや下へくぼみ気味の段を持って内傾する。外面は口縁部横撫での後に、底部一方、体部横方向の磨削り。内面は全面横撫での後に、体部下半に一方方向の撫で。口縁部端が一枚所、焼成前に大きく外へ舂がむ。	7.5YR6/3 淡黄褐色	緻密で透明細砂やや少量、白・赤細砂と黒細砂少量。 やや軟質。1b類。	表採 口〜体2/3周 [表採]
14 坏 土師器	口 復10.5 高 3.4 大 復11.4	やや薄く軽い。口縁部は内外面に明瞭な稜と段を持って内傾後に直立する。外面は体部に撫での後、体部横方向、底部一方方向の磨削り。内面全面と口縁部外面は横撫で。	7.5YR8/4 淡黄褐色	緻密で透明細砂やや多量、黒細砂・白細砂少量。 やや硬質。1b類。	表採 口/4周 [表採]

第3章 発掘調査された遺構と遺物

番号 種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土 土成	出土状況 残存状況 注記
15 坏土師器	口 復13.6 高 4.4 大 復14.6	やや薄く軽い。口縁部は内外面に明瞭な稜を持つ。外面は口縁部横撫での後、底部におおむね一方、内部は口縁部横撫での後に口縁部横撫の後に、口縁部-体部横撫の後に不規則な重層が集中して、焼成前に生じた亀裂を補修した痕と考えられる。亀裂は内面まで達していない。	7.5YR8/4 浅黄褐色	緻密で透明細砂やや多量、黒磁砂・白磁粒少量。 軟質。1b類。	表採 口1/2周 体1/2周 「表採」
16 坏土師器	口 15.9 高 4.2	大きめのわりにやや薄い。口縁部は内外面に明瞭な稜を持たないで弱く外反する。外面は口縁部に横撫での後、底部に広く一方、体部横撫の方向の横撫あり。内面は全面横撫。	5YR7/6 褐色	緻密で黒磁砂やや少量、白・透明細砂少量。 やや軟質。	表採 口・底1/2周 「表採」
17 坏土師器	口 12.1 高 4.2 大 11.7	やや薄い。口縁部は外面に明瞭な稜、内面に弱い稜を持って上半が外傾する。外面は口縁部横撫の後に、底部におおむね二方向、体部横撫の方向の横撫あり。内面は底部に一方横撫の後に、口縁部-体部横撫を横撫で、内面全面と外面上半は漆仕上げ。漆はやや濃い。	10YR8/4 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂多量、白磁粒少量。 軟質。1a類。	表採 口2周 体3/6周 「表採」
18 坏土師器	口 復17.2 高 残 4.0	口縁部は外面にやや不明瞭な稜、内面にはごく弱い稜を持って外傾する。口縁部外縁はわずかに外反気味。外面は体部に横撫での後、横撫あり。内面全面と口縁部外縁は横撫での後、漆仕上げ。	7.5YR7/4 にぶい褐色	緻密で白磁粒・透明細砂多量、黒・灰色細砂少量。 やや軟質。	表採 口5/12周 「表採」
19 形土師器	口 6.6 高 4.0 大 6.8	底部が柱状に突出する。底面は凸面をなすが、平坦な場所に安定して外傾する。上半は上部が厚くなる。稜部は上部におおむね横方向、底面に多方向の横撫で、口縁部に横撫で、内面は口縁部横撫の後に、底部に一方の弱い横撫。	10YR8/4 浅黄褐色	緻密で灰和材はほぼ少量、目立たず、黒磁粒ごく少量。 軟質。	表採 口・底全面 体「表採」
20 小形土師器	口 復 6.2 高 残 3.3 大 残 3.2	薄く丸底で軽い。口縁部は外面に明瞭な稜を持った後に、弱く外反する。外面は体部横撫で、口縁部横撫の後に、体部横撫あり。底面は厚感して不明瞭だが、体部下位以下は横撫あり。内面は底部一方横撫で、体部横撫。	10YR8/3 浅黄褐色	緻密で黒・透明細砂・白磁粒多量。 軟質。1a類。	表土中 底・口1/2周 「表土」
21 高坏土師器	脚 10.0 高 残 5.0	脚部は上半ほど厚くなる。脚部上端に坏底部をのせるように嵌合する。外面は脚部横撫の後に、脚柱部縦撫あり。脚部の一部にひびきいたような浅い亀裂が数本あり。坏部内面は漆塗あり。脚部内面は縦部横撫の後に脚柱部縦撫あり。脚部外面全面から内面内端付近まで漆仕上げ。	10YR6/2 灰黄褐色	緻密で黒磁砂多量、透明細砂・白磁粒やや多量。 軟質。1a類。	不明 脚部一帯部 の全面 注記なし
22 姜土師器	口 22.0	残存する範囲には明瞭な稜や段を持たないで少し外傾した後に、口縁部中位の粘土積み上げ面から上をやや強く外反させる。外面横撫で、内面は横撫横撫の後に、全面横撫。	10YR7/3 にぶい黄褐色	粗い。灰色砂・細砂多量、黒・透明細砂と白磁粒やや多量。軟質。	表採 口全面 「表採」
23 玉土師器	長 3.4 幅 2.0 厚 1.2 重 4.79g	ちぎった粘土製の両端を丸く撫で、勾玉の腹面に指輪を当てて曲げ作る。腹面は曲げた時のツブを残す。側面と背面は撫でているが背面には曲げたときのヒビがやや多く残る。孔は焼成後に右の側の側面から棒を通して穿孔し、初径4.2×3.0mm、終径3.9×2.4mm。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒磁砂多量、白磁粒・透明細砂やや多量。 軟質。1a類。	表採 口・底全面 「表採」
24 玉勾玉土師器	長 残 2.5 幅 残 1.2 厚 0.8 重 1.59g	粘土紐の上下端付近を曲げて成形。尾部先端の腹面寄りが少し尖り、粘土紐をちぎった状況を残している。側面・腹面・背面を撫で調整し、背面の尾部寄りに粘土を曲げた時のヒビが残る。孔は焼成後に右側の側面から棒を通して穿孔し、推定径2mm。	10YR7/3 にぶい黄褐色	緻密で黒磁砂やや多量、透明細砂やや少量。 やや軟質。1a類。	表採 孔部から上 を欠く 「表採」
25 玉板岩	径 1.5~1.6 厚 0.4 重 1.42g	表裏面は背腹方向に沿った割傷のままで、研ぎ直した。側面は穿孔と平行する方向にやや強く研ぎ直した。左側の面の右側の縁辺は、切削加工が残っている可能性が高い。右側の面に穿孔し、初径3.8mm、終径3.5mm。			背腹に発達した 軟質で解着な板岩 「表土」
26 坏土師器	口 8.4 底 5.1 高 3.2	薄く軽い。体部外面のロクロ目は内面よりもやや目立つ。外面は体部で横撫、口縁部方向の手持ち痕あり。底面に一方手持ち痕あり。口縁部内外面に油煙が付着するので灯明具に用いている。底部残存部も黒色だが、こちらは黒炭の可能性もある。	5YR6/4 にぶい褐色	緻密で黒磁砂・白磁粒やや多量、透明細砂少量。 軟質。	表採 口1/2周 底1/6周 「表採」
27 坏土師器	底 復 6.0	外面体部はロクロ撫での後に、底面のすくなくとも外周に一方、体部下端に斜方向の手持ち痕あり。内面は底面におおむね一方、体部に横撫の方向の横撫の後に黒色処塗。外面体部下位から底面にかけて墨書あり。	10YR6/4 にぶい黄褐色	緻密で透明細砂多量、黒磁砂・白磁粒やや多量。 やや軽質。	表採 底1/4周 「表採」
28 皿土師器	底 5.4	底部はやや厚く、体部は薄い。底部外面は回転糸切り難し後、無調整糸切り時のロクロ目は右回転。底部内面は底面一方、体部横撫の方向の横撫の後に黒色処塗。底面に墨書「+」あり。	10YR7/4 にぶい黄褐色	緻密で白磁粒と透明細砂多量、白・黒磁砂赤磁粒少量。 硬質。	表採 底全面 「表採」
29 姜土師器	口 復21.5 大 22.0	やや薄い。胴部は外面に浅い波溝、内面に稜を持って立ち上がった後に、強く外反する。口縁部は外面に明瞭な稜を持ち、中央がくぼむ。外面は胴部にやや強くなる後に口縁部横撫で、胴部縦撫あり。内面は胴部に横撫横撫の後に口縁部に横撫で、内面の横撫ではごく浅く縦糸輪状で、萌毛目の可能性も残る。胴部成形時の土積み上げ面に對して口縁部がやや傾いている。外面の胴部中位以下が加熱赤化し、肩部にスス付着。	7.5YR6/4 にぶい褐色	粗い。白粒・磁粒と黒・透明細砂多量、赤磁粒・灰色細砂やや少量。 やや軽質。	覆? 口5/12周 底1/2周 「表土」 SI-54カマド

番号種類	法量 (cm)	特徴	色調	胎土成	出土状況 残存状況 注記
30 香炉 土製 土製		厚い。外部外面にスタンプ模様。内部内面はロクロ推で。	10YR5/4 にぶい黄褐色	緻密で透明細砂や やや少量。 やや硬質。	表探 体一部 「表探」
31 紡錘車 石製品	径 4.5 厚 1.8 重 56.45g	上面(広い面)の外周の縁は明瞭。下面の外周の縁はやや不明瞭。下面の孔の旋線はやや下へ盛り上がるように出る。全面をよく磨き、美しい光沢を持つ。上面は多方向、側面と下面は円周方向に丁寧に細く磨く。磨ききれなかった原石の凹部が上面の外周付近に残る。上面から穿孔し、孔径2.2mm、孔径3.2mm。	10YR1.7/1 黒色	良質で緻密な蛇紋 岩。	表土中 突起、側面 の部中～下位 の縁は発露 時のもの。 「表土」
32 砥石	長 残 7.6 幅 残 3.8 厚 1.3	扁平な自然石を利用。左側の面の中央が右上～左下方向に長く窪み、その底に幅約1mmの溝状の痕跡が残る。刃物を砥く砥石と考えられるには、あまりなめらかではない。		緻密でやや軟質な 安山岩。	表土中? 約1/2欠損 「760-B-22 グリッド」
33 釘 鉄製品	長 残 9.8 脚幅 0.2～ 0.8 脚厚 0.2～ 0.5 重 11.90g	断面形は横長の長方形。脚は先端に向かうにつれて細く薄くなる。先端付近まで断面形は横長の長方形。頭部付近で急に厚さが減り、この部分を叩き広げから折り返して、頭部を作り出したことを示す。頭部を折り返した部分の先端は下面側へさらに少し折り返す。頭部平坦面は13×6mm。有機質は見られない。丸く折り曲げているので、再利用する予定だったと考えられる。面は現状図と展開復元図を示してある。			表土中 突起 「表土R211 17」
34 不明鉄 製品	長 残 1.80 幅 0.60 厚 0.35 重 残 1.40g	やや扁平で棒状の鉄製品。鉄製の頭部の可能性がある。			表土中? 上下層欠損 「760-A-16 Gグリッド 出土」
35 不明鉄 製品	長 残 3.0 幅 1.9 厚 0.1 重 残 3.23g	厚さはほぼ均一だが、左側の右縁(1.3mm)のほうが左縁(1.0mm)より少し厚め。左側の左下部の外形が折れる形と、右下部が隅切形になる形は、後世の模倣ではない。中央からやや片側へ寄った位置に径4.0mmの孔が1孔あり。X線写真でも他に孔は認められない。右側の左上部に木質が付く。又、孔から右側に横方向の木質または繊維・木質が付く。これは孔に造した紐の可能性もある。表面はやや黒くツヤを持つが、後世が鉄錆かは不明。			表土中? 上部欠損 「760-A-16 Gグリッド 出土」
36 紡錘 鉄製品	長 残 6.1 径 0.5 重 残 6.0g	紡錘車は厚さ約1mm。軸の断面は円形。紡錘車の外周が残る部分がないが、現状で最大径15mm。有機質等は見られない。			表探 軸の両端 と紡錘車外 周を欠く。 「表探」
37 鉤状鉄 器 鉄製品	長 残 3.3 幅 2.5 厚 0.2～0.5 重 残 3.0g	先端は鉤状で、先端は平面形がやや広がった部分から先が破損している。断面形は長方形で、后面の縁が非常に明瞭。基部は7×4mmで広く厚く、先端へ近づくと細く薄くなる。有機質などは付着していない。全体に残りがよく、新しい時代のものである可能性もある。			表土中 基部部分損 「表土」
38 刀? 鉄製品	長 残 6.2 幅 残 2.5 厚 0.4 重 残 17.9g	平縁平造りの直刀の可能性もある。刃部は残っていない。縁幅は錆ぶくれのために正確に測れないが、ほぼ4～5mmで一定。木質等の有機質は見られない。			表探 破片 「表探」
39 鏡? 鉄製品	長 残 3.9 幅 残 4.0 厚 0.4 重 残 18.0g	厚さが均一でやや厚手の製品。やや紫褐色の錆が出ていて、銅製の可能性がある。全体に破面が丸味を帯びていて、本来の輪縁が明瞭ではない。図上縁が口縁部になるのが破面であるのかも確実ではない。			表探 破片 「表探」
40 鉄塊?	長径 2.9 短径 2.1 厚 1.8 重 19.8g	上下に2重に重なっているようである。全面に小さい割傷が多く、原形は不詳。かなり新しい時代の遺物の可能性もある。			表土中 破片 「表土」
41 不明鉄 製品	径 残 1.9 高 1.1 重 残 8.2g	平面はもとが円形で、断面は丸味を持った台形。裏面はきれいな平坦面。上面中央に幅3mm、深さ1～3mmの溝を持つ。近代以降のねじ等の頭部の可能性もある。			表探 全面の多く が割落。 「表探」
42 不明鉄 製品	径 残 1.9 高 1.0 重 残 8.2g	平面はもとが円形で、断面は丸味を持った台形。裏面はきれいな平坦面。上面中央に幅3mm、深さ1～3mmの溝を持つ。近代以降のねじ等の頭部の可能性もある。			表探 全面の多く が割落。 「表探」

代後～終末期の甕である。「SI-59」の注記がある遺物はこの2点だけである。

8以下のものは、表面採集品と、表土から出土した遺物である。

8～12は古墳時代中期の滑石製模造品と、その製作に関わる遺物。古墳時代後期からこの地域では石製模造品の材質が滑石から粘板岩に変わるので、これらは中期の遺物と考えられる。8・9・10は製品。側面を横または斜めに研磨することから見て、中期後半と考えられる(篠原1995)。11・12は荒削り工程品。この2点は、古墳時代終末期の堅穴建物跡であるSI-32の付近から採集された。この近くの古墳時代中期の建物はSI-33がある。12は剥離面が狭いので、形削り工程品の可能性もある。

13～25は古墳時代終末期の遺物。13の坏は、焼成前に口縁部に指か工具が当たってしまった痕のような歪みが生じている。使用する際には差し支えないだろうが、不良品に準ずる土師器である。14は小形の坏。15の坏は、焼成前に生じた外面の亀裂を剝きで補修しているようである。16は、口縁部近くまで外面を削る点や、橙色が強くて白細砂を少量含む胎土が、この遺跡の古墳時代終末期の土師器坏としてはやや異質である。17は内彎口縁坏に少し似た形である。18は大形の坏で、盤にも近い形状のもの。19は底部が突出する小形土器。全体に剝削りを行わない。底面には糸切り産し痕や木葉痕などは見られず、丁寧に撫でてゆるい凸面に仕上げている。20も小形土器で、底面はやや磨減して不明瞭だが、おそらく剝削りで丸底に仕上げている。21は短脚化した高坏で、この時期のものとしては脚径が大きい。22は口縁部上半がやや強く外反する甕。23と24は土製勾玉で、SK-16の出土例と同様の作りである。胎土がLa類なので、古墳時代終末期に八幡根遺跡で製作された可能性が高い。25は粘板岩製の粗製の玉。古墳時代後期以降に滑石製白玉が粘板岩製に転換した製品である。SI-26・SI-53など古墳時代終末期の堅穴建物から出土例がある。平安時代の堅穴建物SI-04Aにも混入品が2点ある。

26～29は平安時代の遺物。26は小形の土師器坏で、灯明具の専用器種と考えられる。体部下端だけでなく底面にも削りを行う。27も体部下端と底面の両方に削りを行う。体部から底部にまたがって墨書が見られる。28は回転糸切り産し後に体部下端だけを削る皿で、底面に「十一」の墨書を書く。「十一」の墨書は、SI-44出土例にも見られる。29は、口縁端部に明瞭な面を持つ平安時代の甕で、「SI-54」の注記がある。

30は中世以降の遺物と考えられる。スタンプ模様を持つ。

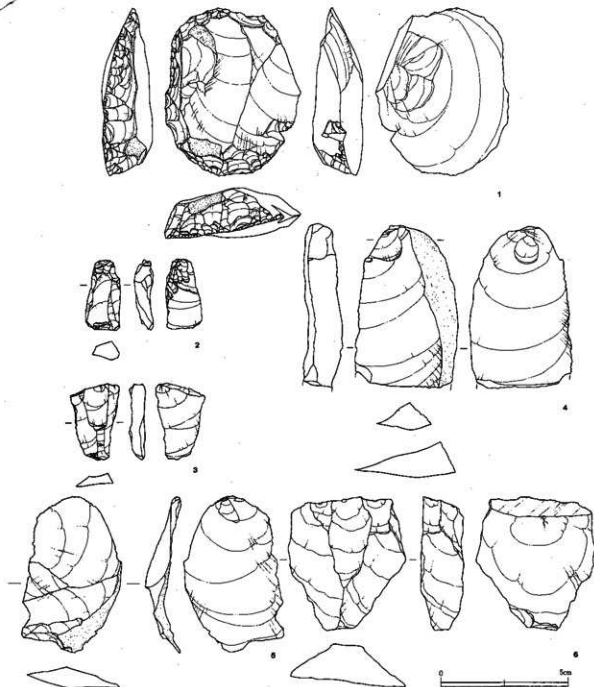
31・32は、主に時期不明の遺物である。31は、良質の蛇紋岩製の紡錘車。類例が古墳時代終末期の堅穴建物SI-50にあるが、石材の色調はやや違う。平安時代の可能性も残る。32は小形の石製品などを加工する砥石の可能性はあるが、確かではない。

33～42は鉄製品。33は丸められた釘で、平安時代の遺物の可能性が高い。図は、展開復元図を添えてある。これと同じく鉄素材として再利用するために丸めた刀子が、平安時代の堅穴建物SI-35Aに見られる。34は詳細不明だが、鉄鎌の頭部の可能性がある。35は、小札と考えるには薄くて、孔の配置も不規則である。36は鉄製紡錘で、平安時代の可能性が高い。37は鉤状鉄器で、新しい時期の遺物かもしれない。38は直刀かもしれないが、鎌などの可能性も否定はできない。39はゆるくカーブする鍔鉄製品で、鉄鍋の可能性もあるが、確かではない。40も詳細不明の鉄塊または鉄製品で、かなり新しい遺物の可能性もある。41・42は近代以降のネジの頭部かもしれない。ただし、脚部の折れた痕は、現状では裏面に見られない。

第8節 遺構外出土の旧石器・縄文・弥生時代の遺物

(1) 旧石器時代の遺物 (第120図、写真図版55)

旧石器時代の所産と思われる遺物は5点が確認され、すべてを図示した。いずれも表探あるいは包含層中出土のもので、出土層位は不明である。また、遺跡からは縄文時代の遺物も出土しているため、掲載した遺物中にも縄文時代の石器が含まれている可能性がある。しかし、近接する八幡根遺跡の石器群と類似する



第120図 八幡根遺跡 旧石器時代の遺物

石材（珪質頁岩、珪質流紋岩）も見られることから、これらの遺物も時期的に近いものと考えた。

1はラウンドスクレイパーである。分厚い横長の剥片を素材としており、右側縁の一部を除いて、ほぼ全周するように刃部が作り出される。刃部の角度は70～80度ほどである。長さ6.7cm、幅5.4cm、厚さ2.0cm、重量は76gである。石材は珪質流紋岩を用いている。

2～6は剥片である。2の表面には、主要剝離面と反対方向からの剝離が認められる。また、上下両端部に見られる剝離は、打面調整によるものと思われる。長さ2.9cm、幅1.4cm、厚さ0.8cm、重量は2.9gである。石質はチャートである。3は剥片の下端および左側面に細かい剝離が見られる。使用痕であろうか。長さ3.1cm、幅2.0cm、厚さ0.7cm、重量は3.0gである。珪質頁岩製と思われる。4は表面の一部に自然面を有し、下半部を欠損する縦長剥片である。左側面には細かい刃こぼれ状の剝離が認められる。使用痕であろうか。長さ6.5cm、幅4.2cm、厚さ1.5cm、重量は32.0gである。珪質頁岩製と思われる。5は4同様、表面の一部に自然面を有する。表面には左右両方向からの剝離が見られ、打面の転移が行われたことを示す。長さ6.3cm、幅4.0cm、厚さ0.8cm、重量は15.1gである。珪質頁岩製と思われる。6はやや厚手の剥片である。作業面は概ね平坦で、打面調整はみられない。長さ5.4cm、幅4.7cm、厚さ1.7cm、重量は42.2gである。石材は質の悪い安山岩を用いている。

（2）縄文時代の遺物

1、土器

本遺跡の遺構外から確認された縄文時代の遺物は、土器・石器合わせて800点ほどで、遺物全体に占める割合は僅かである。土器は、時期的には早期～後期に亘っており、中でも、前期の黒浜式、中期の阿玉台式～加曾利E式期にかけての土器が多く出土している。以下本遺跡中における分類を示す。

第1群土器	早期熱糸文系土器
第2群土器	早期条痕文系土器
第3群土器	早期末葉～前期初頭の土器
第4群土器	前期黒浜式土器
第5群土器	前期浮島式土器
第6群土器	前期末葉～中期初頭の土器
第7群土器	中期阿玉台式土器
第8群土器	中期中峠式土器
第9群土器	中期加曾利E式土器
第10群土器	後期堀之内式土器
第11群土器	後期安行式土器

第1群土器 早期熱糸文系土器（第121図1、写真図版56）

1は、1段Rの密な熱糸文が施される。色調は橙色を呈する。胎土には白色粒子、砂粒を多く含み、焼成は良好である。時期的には井草式～夏島式期と思われる。本遺跡中からは、3点が確認されたのみである。



第121図 八種模遺跡 縄文土器(1)

第2群土器 早期条痕文系土器(第121図2~6、写真図版56)

条痕文系の土器は計47点が確認された。いずれも胎土中に繊維を含み、焼成も不良なものが多い。2はやや、くの字に張り出す胴部破片。隆帯上に棒状工具による押圧が巡る。条痕は磨滅しており、明確ではない。色調は橙色を呈する。3・5は、比較的幅の広い条痕文がみられる。3は斜位の条痕文を有する。外面は橙色、内面は黒褐色を呈し、焼成は良好である。5の条痕文は、外面は縦位、内面は横位に施文される。器面は凹凸が著しく、繊維の脱痕も目立つ。鈍い黄橙色を呈し、焼成は不良である。4・6は、細かく密な条痕文が横位施文される。胎土には白色粒子を多量含み、焼成も良い。色調は、にぶい橙色を呈し、同一個体と思われる。3・5の土器に施文される条痕文は、いずれも、貝殻背面によるものとおもわれる。特徴的な口縁部破片などが見られないため、型式は明らかにできない。

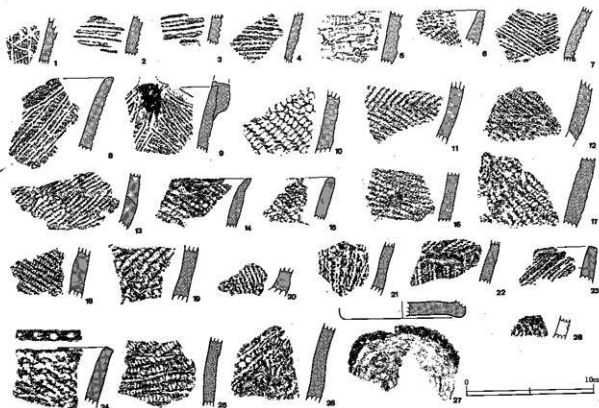
第3群土器 早期末葉～前期初頭の土器(第121図7、写真図版56)

本遺跡中からはこの1点のみが確認された。7は、外面に横方向の2段R Lの単節縄文が施され、内面には貝殻背面によるものと思われる条痕文がみられる。胎土中には砂粒、石英粒子、繊維を多量含む。焼成は不良で、色調はにぶい黄橙色を呈する。花積下層式期の土器と思われるが、縄文が施された条痕文系土器の可能性もある。

第4群土器 前期黒浜式土器(第122図1~35、写真図版56)

黒浜式土器は計110点が出土した。胎土中に繊維を含み、焼成は不良なものが多い。また縄文は、その殆どが横方向の回転施文である。

1~9は竹管文などにより、文様の施されるものである。1は、無文地に1本書きの粗雑な格子目文が施される。小破片のため部位は不明である。2・3は半載竹管の内面により、横位の平行沈線が施される。色調は、2は橙色、3は明褐色を呈する。4は4本一組以上の棒状工具もしくは鋸歯状工具により、横位の有節の波状文が施される。色調は、にぶい黄褐色を呈する。器厚は6mmと比較的薄く、胎土には砂粒、雲母片等を含む点で他の黒浜式土器と比べると異質である。5は幅広の角棒状工具または筥状工具を用いた、横位の押し引き文が施され、一部に2段R Lの単節縄文もみられる。色調は明褐色を呈する。6は口縁部に平行して、半載竹管による押し引き文が施される。地文は2段L Rの縄を横位施文したものである。にぶい黄橙色を呈する。7は括れ部から口縁部付近の破片と思われる。括れ部に当たる破片下端には隆帯の一部が残つ



第122図 八幡根遺跡 縄文土器 (2)

ている。半截竹管により菱形あるいは鋸歯状の文様が描かれていたものと思われる。地文は2段R Lの単節縄文が施される。明褐色を呈し、焼成は良好である。

8・9は波状口縁を有する土器。色調は鈍い褐色を呈し、器厚、胎土等も類似することから、同一個体と考えられる。9は、波状口縁の波頂部に棒状の隆帯が縦位に貼付される。口縁部には幅1cmほどの無文部が作り出される。ここは半截竹管による細目の平行沈線により区画され、以下同様の工具により菱形あるいは、鋸歯状の文様が展開するものと思われる。地文には2段R Lの原体を用いた単節縄文が施される。

10～27は、地文のみが施されるものを集めた。

10・11は羽状構成をとる単節縄文が施される。10は、結束縄文の可能性がある。色調は明黄褐色を呈する。11は0段多条の原体を用いたものか。にぶい黄褐色を呈する。

12～26は、単節斜縄文が施される。12は2段R Lの原体を用い、無文部には追加成形施文の痕跡が認められる。色調は橙色を呈する。13の破片中央部には、内外面ともに接合痕が残る。施文原体は2段L Rの縄である。色調は明褐色を呈する。14・15は平口縁を呈する口縁部破片である。これらの施文原体は2段L Rの縄である。14は口唇部の断面が先細り状を呈し、小さく外反する。色調は橙色を呈する。これに対し、15は直線的に立ち上がり、口唇部の断面は丸味を帯びている。焼成は良好で、橙色を呈する。16～18の胴部破片の施文原体は2段R Lの縄である。16の焼成は非常に悪く、明褐色を呈する。17は、非常に脆い土器である。胎土には繊維、白色粒子を多量に含み、一見、縄文条痕土器に類似する。しかし内面に条痕が見られないことから、あえて本群に属するものとした。色調は明褐色を呈する。18は、0段多条あるいは前々段反燃りの原体が用いられる。色調にぶい黄褐色を呈する。

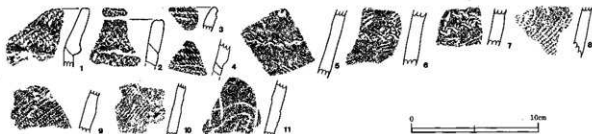
19・20は、無節縄文の施されるものである。19の原体は1段Lの縄である。胎土は白色粒子、繊維を多く

含み、前述の17の土器と類似する。早期末～前期初頭の土器の可能性もある。色調は橙色を呈する。20は1段Rの縄による無節縄文が施される。器厚は、やや厚く、底部付近の破片と思われる。橙色を呈する。

21・22・23は捻糸文が施されるものである。20は1段LとRの縄を2本一組にして巻いた原体を用いたもので、縦位に施文される。焼成は良好で、色調は橙色を呈する。22の原体は1段Lの縄を2本一組にして巻いたものであり、縦位、斜位に施文される。明黄褐色を呈する。23は、口唇部の断面が角頭状を呈する平口縁の土器である。1段Lと1段Rの縄を2本一組にして巻いた原体を用いたもので、斜位に施文される。色調は橙色を呈する。24は平口縁の土器である。角頭状を呈する口唇部には、棒状工具の側面による押圧が巡る。口縁部直下からは目の粗いループ文が重層する。施文原体は末端環状2段LRの縄であり、色調は明黄褐色を呈する。25・26は附加条縄文が施される。25の原体は、2段RLの輪縄に1段Rの縄1本を絡めた、附加条第1種の縄である。26は2段RLの縄に、1段Rの縄を2本一組にして巻いた、附加条第2種の縄が用いられる。25・26ともに色調は橙色を呈する。27は底部の破片である。底部外面は磨かれており、やや上げ底状を呈する。復元底径は10cm程である。色調は明褐色を呈する。

第5群土器 前期浮島式土器（第122図28、写真図版56）

浮島式土器は、この1点が確認されたのみである。28は、横位の波状貝殻文が施される胴部破片である。胎土中には白色粒子を多量含み、焼成はやや不良である。色調は、にぶい黄褐色を呈する。



第123図 八幡根遺跡 縄文土器(3)

第6群土器 前期末葉～中期初頭の土器（第123図1～11、写真図版56）

本群に属する土器は、計37点が確認された。これらは、胎土に白色粒子および砂粒を多量含み、焼成は比較的脆弱なものが多い。1～4は口縁部破片である。1は複合口縁部に単節縄文が施される。施文原体は2段LRの縄で、横位施文される。以下胴部には半截竹管による斜位の平行沈線が施されるが、明確な文様構成は不明である。色調はにぶい橙色を呈する。2は外面に粘土紐の接合痕を残す。地文には、2段RLの単節縄文が横位施文される。断面角頭状を呈する口唇上には同一原体による縄文が施される。色調は明褐色を呈する。3は、口縁と平行して、1段Lの縄の側面圧痕が2列に亘って施される。色調は褐色を呈する。4は複合口縁部に3と同様の原体による側面圧痕が施される。色調は明褐色を呈し、焼成は良好である。

5～10は地文のみの施される胴部破片である。5は地文に1段Rの無節縄文および結節縄文が施される。これらはいずれも横位施文である。色調はにぶい黄褐色を呈する。6は横位の無節縄文が浅く施文された後、横位の結節縄文が見られる。明褐色を呈する。7は1段Lの縄が横位に施文された後、斜位の2列の結節縄文が施される。6と胎土、色調等も類似しており、同一個体の可能性がある。8～10の施文原体は、いずれも2段LRの縄で、横位施文したものである。色調は8・9は、にぶい黄褐色、10は明褐色を呈する。11は、無文地に浅い平行沈線により、波状の文様が描かれる。胎土には石英粒子、砂粒を含み、本群の土器と類似



第124図 八幡根遺跡 縄文土器 (4)

するが、雲母片を多く含む点で異なっている。

これらの土器は大木6～7式、あるいは十三善堤～五領ヶ台式土器に並行するものと思われる。

第7群土器 中期阿玉台式土器（第124図1～13、写真図版57）

本群に属する土器は、計58点が確認された。胎土中に雲母片を多く含み、焼成も良好なものが多い。

1は、無文地に一列の有節沈線によりモチーフが描かれる。器面は僅かに丸味を帯びる。比較的薄手で、色調は褐色を呈する。2は平口縁の土器である。短く外反する口縁に沿って、断面三角形の隆帯が貼付され、以下幅広い爪形文が、間隔をあけ施文される。内面には稜を有する。色調は明褐色を呈し、焼成は非常に良い。3は、肥厚・外反する口縁部から、蛇行する隆帯が垂下する。内面の稜はそれほど明確ではない。明褐色を呈する。4は、断面三角形の隆帯が、縦位、横位に貼付される胴部の破片である。隆帯の両脇には一列の角押文が沿う。この隆帯による区画内には、細かい円形の刺突が充填されている。色調は褐色を呈する。

5は、小さく外反する口縁部破片である。口唇部は断面角頭状を呈し、内面の稜は明確である。口縁部の隆帯に沿って二列の横位の角押し文が施される。色調は橙色を呈する。6は断面三角形の隆帯に2本一組の角押し文が沿う。色調は褐色を呈する。7は口縁部が短く外反する平口縁の土器である。僅かに丸味を帯びる胴上半部には、横位の環状の隆帯が貼付される。この隆帯および口縁部には、5と非常に類似した二列の角押し文が沿うことから、同一個体の可能性がある。8は小さな波状口縁を呈する土器である。メガネ状あるいは楕円形の隆帯に沿って、一列の幅広い爪形文が施される。色調は橙色を呈し、焼成は不良である。

9は無文地に横位の鋸歯状の沈線文が施される。焼成は良好で、色調は明赤褐色を呈する。

10は幅広い隆帯上に、単節縄文が施される。口縁部から垂下する隆帯は2本一組となっている。角押し文は幅広く、半截竹管あるいは多截竹管の背面により、深くしっかりと施文される。色調はにぶい褐色を呈する。11は平口縁の土器である。短く、肥厚外反する口縁部には、2本一組の沈線文が沿う。口縁部には、横位施文の2段Rの単節縄文がみられ、以下に施される縄文は、同じ原体を縦位施文したものである。色調は明褐色を呈する。

12はやや内湾気味に立ち上がる平口縁の土器である。口縁部には、楕円形あるいはS字状の隆帯が貼付され、隆帯上には2段LRの単節縄文が施される。色調は明褐色を呈する。13は波状口縁の波頂部もしくは、把手部分の破片。渦状の隆帯に沿って一条もしくは二条の有節沈線文が施される。裏面に見られる有節沈線は二条となっている。胎土には白色粒子を多量、雲母片を少量含み、色調は橙色を呈する。

1・4は阿玉台Ib式、2・3は阿玉台Ib～II式、8～10は阿玉台III式、11・12は阿玉台IV式にそれぞれ比定されるものと思われる。

第8群土器 中期中鉢式土器（第124図14、写真図版57）

14は口縁部が短く内傾する器形を有する。渦状の隆帯には二条の深めの沈線が沿う。口縁部に平行して施文される沈線の区画は方形を呈する。ここには先端の鋭利な筧状工具により、斜め上下の双方から、交互に刺突が繰り返される。これにより中鉢式土器に特徴的な連続口の字状文を意識した文様が描き出される。色調はにぶい褐色を呈し、胎土には砂粒、雲母片を少量含む。中鉢式土器はこの1点が確認されたのみである。

第9群土器 中期加曾利V式土器（第124図15～40、第125図1～9、写真図版57・58）

本遺跡中から本群に属する土器は計370点が確認された。第124図15～18は口縁部の破片を一括した。15は、

内湾する平口縁の土器である。半載竹管による平行沈線と、それよりやや太めの隆帯により渦文が施される。この沈線文は半載竹管の内面を深く施文しているため、断面はカマボコ状を呈する。砂粒を多量含み、焼成は良好である。色調は明褐色を呈する。

16は波状口縁の波頂部破片で、メガネ状の把手の上部が残る。太めの棒状工具により、同心円状の沈線文が施される。色調は明褐色を呈し、胎土中には雲母片を少量含む。17は大きな環状の把手を持つ波状口縁の土器と思われる。隆帯は2本一組で渦状を呈しており、その脇には太めの沈線に沿う。地文には2段R Lの単節縄文が縦方向に施文される。平坦で幅広いの口唇部上には、同様の太めの沈線により、同心円状の文様が施される。口縁部の内面は突出し、明確な段差を有する。胎土には砂粒、雲母片を多く含む。

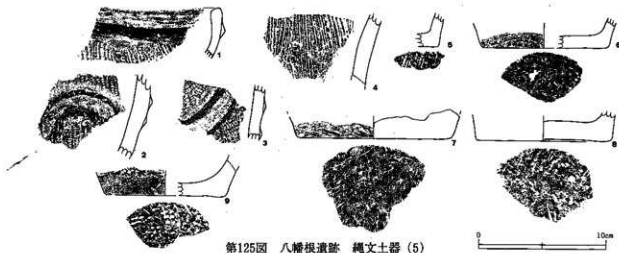
18は内湾する平口縁の土器。口縁部に沿って深めの平行沈線が施され、破片下端には沈線の沿った隆帯が貼付される。地文は横方向の2段R Lの単節縄文が施される。色調は、橙色を呈する。

19-25は文様の施される頸部・胴部の破片をまとめた。19は横位の二条の隆帯の巡る頸部破片である。幅広い隆帯の中央を沈線で2分割している。地文には1段Lの細目の燃承文が、縦位に施文される。色調は、鈍い橙色を呈する。20は縦位の3本一組の平行沈線文が間隔をおいて施される。施工具は半載竹管の内面を用い、一方の沈線を重複して施文している。2段LRの縄が縦位施文される。胎土は砂粒を多量含み、色調は橙色を呈する。21はキャリバー形を呈する括れ部～口縁部付近の破片である。地文には、2段R Lの単節縄文が縦位施文され、半載竹管による蛇行する平行沈線文が施される。胎土中には白色粒子、雲母片を含み、明褐色を呈する。22はやや丸味を帯びる胴部破片。縄文地に、太めの沈線による平行沈線文と渦文が施される。地文は2段R Lの縄を縦位施文したものである。色調は橙色を呈する。24は浅い太めの沈線により、3本一組の縦位の平行沈線文や弧線文、1本描きの縦位の波状文が施される。地文の単節縄文は、0段多条あるいは、前々段反摺りの原体を用いている。胎土には砂粒を多量、雲母片を少量含み、色調はにぶい橙色を呈する。胴部上半の復元径は約21cmである。25は2段R Lの縄を縦位施文したのち、3本一組の縦位の沈線文が施される。施工具は1本描きで、比較的深めである。雲母片を少量含む。23は縦位施文の2段R Lの縄文が施された後、2本の縦位の沈線文が施される。色調は褐色を呈する。

15-17、19-24は加曾利E I式に、18は加曾利E II式にそれぞれ比定されるものと思われる。

26-40は単節縄文のみの施される胴部破片である。これらは地文のみの土器であり、他の型式の胴部破片と混在してしまう恐れがあるが、胎土、焼成の類似する後期の土器が殆ど出土していないため、本群の土器として、ここに掲載した。これらの施文原体は、殆どが2段R Lの縄を縦方向施文したものである。26は節が細長いことから0段多条の原体を使用したものと思われる。色調は明黄褐色を呈する。27は上下の接合痕から判明している。焼成は非常に良好で、色調は橙色を呈する。28はほぼ直線的に立ち上がる。色調は橙色を呈する。29はやや外反気味に立ち上がる器形を有する。器厚は7mm前後と薄く、焼成は非常に良好である。色調は橙色を呈する。30は2点の土器が接合したもので、僅かに丸味をもって立ち上がる器形を有する。2段R Lの施文原体を用いる点では他の土器と同様だが、斜め方向に施文するため、結果として横方向の縄文が現れる。色調は橙色を呈し、焼成は非常によい。胎土は砂粒、石英粒子を含むほか、雲母片も少量含む。31は2段R Lの原体を横位施文している。僅かに丸味を帯び、胎土中に砂粒雲母片を含む点では30の土器と類似するが、同一個体ではないと思われる。

32-34・36・37は縦位の間隔施文が見られる土器である。32は砂粒を少量含み、焼成は不良である。色調は橙色を呈する。33・36は砂粒をあまり含まず、焼成も良好で、色調は橙色を呈する。32・33・36の施文の間隔が比較的狭いのに対し34・37は間隔が広い。また胎土中には白色粒子を多量含み、焼成も比較的軟質で



第125図 八幡根遺跡 縄文土器(5)

ある。34・37は胎土の特徴から前期末葉～中期初頭の土器あるいは、大木式系土器の可能性も考えられる。

35は無節縄文が見られる。1段Lの縄を縦位施文したものであり、砂粒、石英を多量含み、焼成は不良である。38・39は燃糸文が見られる。原体はいずれも1段Lの縄を用い、縦方向に施文される。38の焼成は非常に良好で、色調は橙色を呈する。39は破片右端にための沈線が見られる。色調は明黄褐色を呈する。

40は複節縄文の施される胴部破片である。施文原体は3段LRLの縄を縦方向に施文したものである。破片の上下は接合痕より欠損している。

125図1～3は微隆起線が貼付されるものである。1は内湾気味に立ち上がる平口縁の土器。口縁部に並行して巡る微隆起線により、幅1.5cm程の口縁部の無文帯と、条線文の施される胴部とに分けられている。

2・3は胴部破片である。2は僅かに丸味を帯びる器形を有する。二条の隆帯の脇に沿うようにナダが施される。地文の縄文は2段RLの縄で、横方向に施文されている。3は、僅かに外反する胴部の破片である。二条の隆帯にはナダが沿い、地文の単節縄文は2段RLの縄を斜位、縦位に施文している。これらの土器はいずれも橙色を呈し、胎土中にも砂粒を多く含み、雲母片も含むことから、同一個体の可能性がある。

4は外反気味に立ち上がる胴部破片で、条線文が縦位に施文される。橙色を呈し、焼成は非常によい。

125図5～9は無文の底部破片である。5・8・9は底部外面に網代痕を有する。5・8は僅かに上げ底状を呈する。胎土に雲母片、砂粒を含み、器厚、色調共に類似しており同一個体と思われる。8の復元底径は11cm程である。9は、破片断面の接合痕の観察により製作工程が窺える。焼成は良好で、橙色を呈する。復元底径は10cm程である。6は、器厚9mmと比較的薄い。胴部外面は施削りにより成形され、底部の内外面は良く磨かれている。復元底径は10cm程である。7は内面が刺離しているが、比較的厚手の破片である。外面は良く磨かれている。復元底径は13cm程である。125図1～4は加曾利EⅢ～IV式に比定されるものと思われる。



第126図 八幡根遺跡 縄文土器(6)

第10群土器 後期堀之内式土器 (第126図1、写真図版58)

1は、縄文地に、やや太めの縦位、斜位の集合沈線文が施される。縄文の原体は不明である。胎土には砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。色調は鈍い黄橙色を呈する。堀之内I式と思われ、本遺跡からは8点が出土したのみである。

第11群土器 後期安行式土器 (第126図2・3、写真図版58)

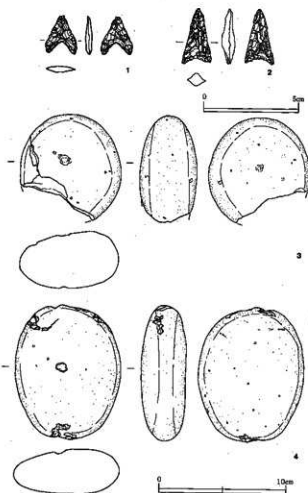
2は、平口縁の土器である。口縁部には、棒状の貼付文がなされ、口縁部と平行する帯状の区画内には、2段RLの単節縄文が施される。口縁の内面は肥厚し、僅かな稜を有する。焼成は良好で、橙色を呈する。

3は平口縁の土器である。断面角頭状を呈する口縁部に平行して、連続刺突文が施される。以下、太めの、三条の沈線文が巡る。砂粒を含み、焼成はやや不良である。色調は鈍い黄橙色を呈する。

2は安行I式、3は安行式期の粗製土器と思われる。本遺跡からは5点が出土したのみである。

2、石器 (第127図、写真図版58)

本遺跡より出土した、縄文時代に属するとと思われる石器類の数は剥片も含めて65点ほどである。土器の出土量に比べると、石器は質的にも量的にもかなり貧弱であると言える。



第127図 八幡根遺跡 縄文時代の石器

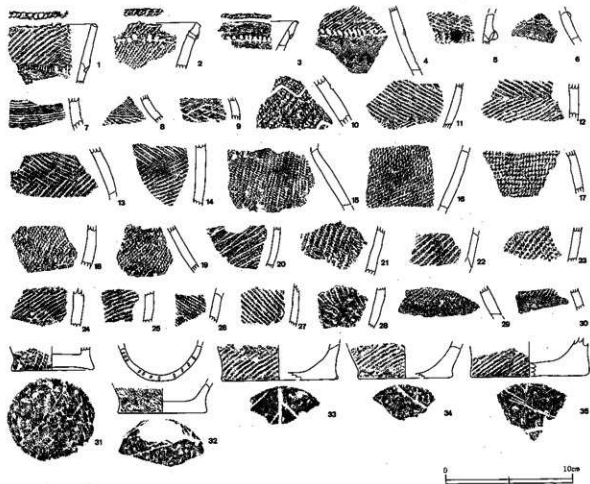
1は、やや基部の挟り込みの深い石鏃である。先端がわずかに欠損するのみで、ほぼ完存する。長さ2.2cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重量は0.64gである。石材はチャートを用いている。2は基部の挟り込みの比較的浅い、完形の石鏃である。チャート製の厚手の剥片を用いている。長さ3.0cm、幅2.0cm、厚さ0.7cm、重量は1.4gである。

3・4は磨石である。3は下端の一部を欠損するが、平面形は凹形に近い形状を呈する。器面は平滑で、両面の中央部には浅く小さな窪みを有する。長さ8.4cm、幅7.5cm、厚さ4.6cm、重量は335gである。4の平面形は楕円形を呈する。器面は光沢を帯び平滑であり、中央部には窪みは見られない。長軸の両端部に若干の使用痕が認められる。これは敲打痕とも思われるが、明確ではない。長さ10.7cm、幅8.4cm、厚さ3.5cm、重量は487gである。いずれも安山岩製と思われる。

(3) 弥生時代の遺物 (第128図、写真図版58・59)

本遺跡から出土した弥生時代の遺物は、土器片のみであり、総数で200点ほどである。ここでは、そのうち、35点について図示したが、器形を窺えるような個体は存在しなかった。時期的には弥生時代後期の二軒屋式期の土器がその主体を成すようである。

1～5は複合口縁を有する土器である。1の口唇部には原体の側面押圧が施され、複合口縁部には、羽状構成をとる附加条縄文が施される。施文原体は附加条第1種2段LR+R1およびRL+L1の縄である。軸縄は0段多条の原体を用いたものと思われる。複合口縁の下端には、細かい連続刺突が巡る。焼成は非常に良好で、色調は褐色を呈する。2の複合口縁は、やや肥厚している。口唇上にまで施文される縄文は、附加条第1種2段LR+R1の縄を用いている。複合口縁の下端には、原体の末端による連続刺突が施された後、1対の焼成前の円孔がみられる。孔は外面から穿たれている。焼成は非常に良好で、色調は明褐色を呈する。3は、無文の複合口縁下端に原体末端による連続刺突が施される。縄文は口唇部と複合口縁部以下に施文されており、施文原体は附加条第1種2段LR+R1の縄と思われる。鈍い黄褐色を呈する。4の複合口縁部には附加条第1種LR+R1の縄文が施され、その下端部には棒状工具による連続刺突が巡る。頸部には、横位の波状文が2段にわたって施文される。8本一組の櫛歯状工具によるものである。明赤褐色を呈する。



第128図 八幡根遺跡 弥生土器

5は、附加条第1種LR+R1、およびRL+L1の縄文が羽状に施文される。また複合口縁部下端には、原体の側面が連続して押圧されたのち、ボタン状の貼付けが施される。色調は明褐色を呈する。

6は複合口縁部を欠損した口縁部付近の破片と思われる。上端にはボタン状の貼り付けが見られ、以下、頸部には弧状の櫛歯文が施される。8本一組の工具を用いているようである。色調は明赤褐色を呈している。7は4本一組の櫛歯状工具による、横位の沈線文が2段にわたって施文される。破片の上下が正しければ、この文様は左回りで施文されたことになる。色調は赤褐色を呈している。8は頸部の破片である。胴部以下には附加条第1種2段RL+L1の縄文が施されたのち、頸部と区画するように、7本一組の櫛歯文が右方向から施文される。さらにその上部には、同様の工具による鋸歯文が重複して施文される。焼成は非常に良好で、色調は明黄褐色を呈する。9は、軸縄は不明だが、附加条第3種の縄文が施された後、細い櫛歯状工具を用いた波状文が施される。鈍い橙色を呈する。10はやや太めの2段RLの単節縄文が施された後、横位の鋸歯状文が間隔を置いて施文される。器厚は約1cm程と厚く色調は橙色を呈する。

11~30は縄文のみの施された胴部破片である。11~14は羽状構成をとるものである。これらは、いずれも附加条第1種2段LR+R1、RL+L1の縄を用いている。13は丸味を帯びる胴部破片と思われる。色調は褐色および明褐色を呈する。15~30は斜縄文の施される土器をまとめたが、小破片が多いため羽状構成をとるものも含まれていたと思われる。15は比較的粗目の附加条第1種の縄文が施される。原体は2段LR+R1もしくは、直前段多条の縄と思われる。色調は明褐色を呈する。16は、附加条第1種LR+R1もしくは1段Rの燃糸文の可能性がある。外面には炭化物が付着する。石英粒子を多量含み、焼成は不良である。17は2段RLの単節縄文が施される。色調は橙色を呈する。

18~25の施文原体は附加条第1種2段LR+R1と思われる。18は、やや粗雑に施文される。胎土には石英粒子を多量含み、色調は明褐色を呈する。19は、附加する縄が他の土器と比べて非常に細いのが特徴である。胎土には混入物をあまり含まず、色調は鈍い橙色を呈する。20は、器厚は比較的薄く、色調は外面は黒褐色、内面は明褐色を呈する。21は軸縄の原体は不明瞭だが、施文方向を考えると2段LRの可能性が高い。砂粒を多く含み、焼成は不良である。色調は明褐色を呈する。22は器厚5mmほどで、軸縄は僅かに確認できる。色調はにぶい黄橙色を呈する。23は砂粒を多量含み、明黄色を呈する。24は風化が著しく濃い。色調は褐色である。25は軸縄、附加した縄ともに明瞭に確認できる。褐色を呈する。

26~28の施文原体は附加条第1種2段RL+L1と思われる。26は軸縄と附加する縄の太さにあまり差が見られないため、直前段多条の可能性もある。色調は暗褐色を呈し、焼成は良好である。27は軸縄、附加した縄ともに明瞭に確認できる。器厚は4mm程と薄く、焼成は非常に良い。28は底部付近の破片である。施文原体は直前段多条もしくは燃糸文の可能性もある。焼成はやや不良で色調はにぶい黄橙色を呈する。

29・30は同一個体と思われる。地文には細かい単節縄文が施されており、施文原体は0段多条もしくは前前段反回りの可能性がある。破片の下半部は磨きにより磨り消されており、この部分は赤彩が施される。器厚は7mm程と厚手で焼成は良好である。附加条縄文の施される一群の土器とは趣を異にしている。

31~35は底部の破片である。31・32は底部が大きく張り出している。31は底部が完存しており、径は7cm程である。地文は28の土器と類似しているため、同一個体の可能性がある。にぶい黄橙色を呈する。32~35は底部外面に木葉痕が認められる。32の地文は2段RL+L1と思われる。破片の上端の接合痕には刻みが施される。33~35は底部の張り出しはやや小さい。施文原体は、附加条第1種2段LR+R1と思われる。

33・35は緩やかに立ち上がるが、34はやや閉き気味に立ち上がる。

第4章 まとめ

今回報告した遺構は、竪穴建物跡68棟(古墳中期末葉3、古墳後期2、古墳終末期42、平安時代前半期20、時期不明1)と、平安時代の可能性のある井戸跡2本、円形および方形の土坑27基、かなり新しい時期のものと考えられる長方形土坑17基、であった。円形・方形土坑のうち所属する時期を推定できるものとしては、縄文時代中期1基、古墳時代中期1基、古墳時代終末期7基、平安時代3基がある。

次に、各時期の集落の変遷をまとめる。

第1節 古墳時代の集落と遺物

(1) 古墳時代前・中期の集落

古墳時代前期の遺物は、各遺構の出土遺物数一覧表に示したように、少量ずつ出土している。器種は、刷目のある甕胴部破片が多い。遺構は見られなかった。調査区の西外側に集落がある可能性がある。

古墳時代中期の遺構は、竪穴建物跡3棟がある。また、土坑のうち1基(SK-43)も古墳中期と考えられる。

竪穴建物跡のうち、SI-30は石製模造品工房跡である。小山市域の、江川流域に集中している石製模造品製作遺跡群の一部である。中期の竪穴建物の時期を示す資料としては、田辺編年TK-23～TK-47型式の須恵器坏を模倣した土師器が見られる(SI-30の3)。SI-33・SI-36CとSK-43は遺物が少ないが、輪形坏を伴うので、中期後半の可能性もある。

この他には、平安時代の竪穴建物に混入した遺物の中にTK-23型式の坏蓋などが見られ(SI-04Aの13,14)、古墳中期集落に伴う遺物だろう。集落の中心は、5世紀末～6世紀初頭と考えられる。

(2) 古墳時代後期の集落

古墳時代後期の遺構は、竪穴建物跡2棟が検出された。このうち、SI-49Aは南側に張り出した土坑または貯蔵穴を持つ大形の建物である。伴う坏は体部が深くて口縁部が長く外傾し、内面を丁寧に磨くもので、古墳後期前半と考えられる。宇都宮市砂田A遺跡第15号・第31号住居跡(芹沢1993)や、茨城県真壁町八幡前遺跡のIV期(吹野1995)に類似がある。SI-36Dの坏も形状や調整は類似するが、やや浅い。確実ではないが漆仕上げならば後期後半まで下がる可能性もある。その場合も、その中では早い時期になるだろう。集落の時期は、6世紀前葉～中葉と考えられる。

(3) 古墳時代終末期の集落と土師器

古墳時代終末期の遺構は、竪穴建物跡42棟があり、円形・方形土坑のうちSK-03,10,14,15,16,37,44の7基もこの時期の可能性もある。これらは、おおむね終末期前半のものである。この時期の集落と土師器の変遷を検討する。

竪穴建物跡の重複関係 古墳時代終末期の建物跡どうしの重複関係を次に示す。

SI-01B → SI-01A

SI-06BとSI-07 → SI-06A

SI-10 → SI-08 → SI-46BとSI-09

SI-53 → SI-13
 SI-15 → SI-16
 SI-21B → SI-22B → SI-22A
 SI-48 → SI-47 → SI-50

また、前後関係は不明だが、重複していると考えられる建物跡は次のとおりである。

SI-01B と SI-03A SI-36B と SI-36A
 SI-17 と SI-16 SI-48 と SI-57
 SI-35B と SI-34 SI-50 と SI-57

古墳時代終末期の八幡横遺跡の変遷 建物跡の重複関係と土器の特徴から、3段階に整理した。建物跡の重複が著しいので、2・3段階はそれぞれ新古に細分する。細分段階の中でさらに重複している建物跡は、短い時間幅での変遷を示すと考えられる。出土土器の特徴は後の項目で説明する。

各段階の建物跡を次に示す。下線は、各段階の代表的な一括遺物を持つ遺構である。これ以外のSI-11B, 14B, 36B は遺物の数が少ないので時期を限定しにくい。

1段階 SI-01B, 07, 10, 28, 48

2段階 (古相) SI-08, 11A, 21B, 22B, 37A, 46B, 53, 57

(新相) SI-05, 06A, 06B, 09, 14A, 17, 27, 32, 35C, 38, 47, 50

3段階 (古相) SI-03A, 22A, 24, 26, 35B, 43, 49B

(新相) SI-01A, 13, 15, 16, 23, 34, 36A

1段階には、調査区内の北半部に5種の建物が現れる。2段階では、新古の各相に10棟前後があり、南半部にもそのうちSI-37A, 27, 32, 36D, 38が分布するようになる。北半部ではSI-21Bと22B, 08と46B, 06Aと06B, 47と50がそれぞれ重複することから考えると、2段階の各相の時間幅は1・3段階より少し長い可能性がある。同時に存在した建物は数棟程度であろう。3段階では、北部に数棟、南部に2棟が細分した各相に見られ、重複する建物はSI-15と16だけである。ただし、SI-16は東に竪を持つ点がやや特異で、平安時代の可能性も残る。

建物は、最初は正方形で、後に長方形も加わる。古墳時代の竪穴建物では長方形のものはやや珍しい。この集落内で土師器を生産していたことと関わるのかもしれない。長方形の例は、2段階新相のSI-17, 32, 35C, 3段階古相のSI-35B, 49B、3段階新相のSI-15, 16, 23, 36Aがある。

土師器の変遷 坯は次の3種が主体である。

坯身模倣坯=須恵器の坯身を模倣した器形

半球形坯=外面に段を持たず、弱い後かまたは丸みを持って口縁部が立ち上がるもの

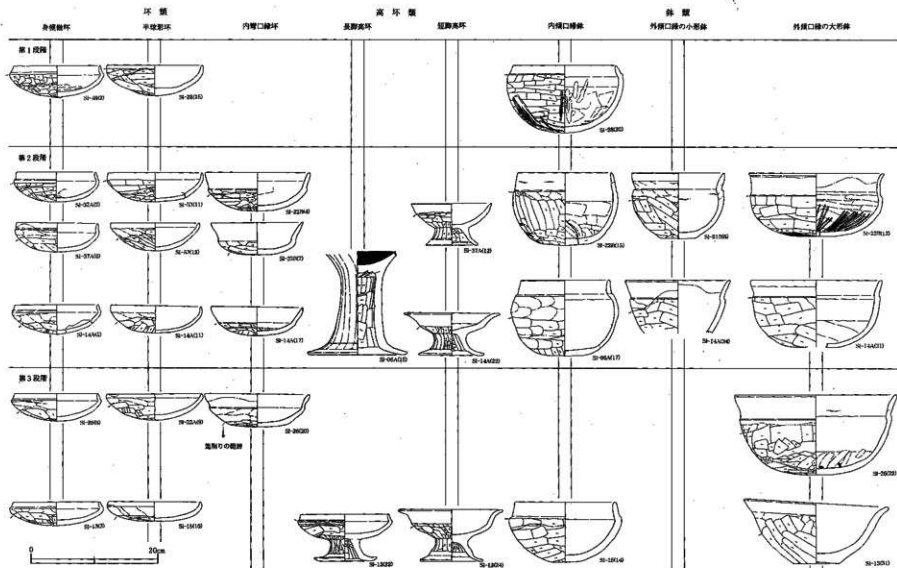
内彎口縁坯=外面に段を持って口縁部が開き、口縁部上半の外面が弱く内彎するもの

この3種は、上から順に、津野(1995)分類のA類・D類・F類にそれぞれ該当する。

各種類を通じて、坯は次のように変化する。段階区分は集落と同じである。

1) 体部の削り範囲が狭くなる(第129図)。

1段階では坯の体部全面を削る。2段階では、体部の全面を削る坯と上位を削り残す坯が共存するSI-22B, 37A, 53と、体部上位を削り残す坯が主体になるSI-06A, 14A, 50がある。3段階からは体部上位を削り残すものにおおむね統一される。八幡横遺跡の時期より後は、7世紀末までこの地域ではこの調整法が続くようである(津野編1997)。



第129図 古墳時代終末期前半の土師器 (1) 鉢・高杯・鉢類

第1期 古墳時代の集落と遺物

2) 器高が低く、器形が平たくなる(第129・130図と第158表)。

器高/最大径の値は、1段階で0.29~0.32、2段階で0.30~0.33、3段階で0.25~0.30程度である。1段階から2段階へは、形は同様で、径と高さが小さくなる。3段階では、径が少し大きく、器高は低く、全体が扁平になる。

器高は、1段階で4.5~4.7cm、2段階で4.3~4.6cm、3段階で3.5~4.5cm前後に、それぞれ中心がある。

坯の大きさは、口縁部の内傾の程度で身模倣坯の口径が左右されるので、最大径で比較した。1段階では15cm強が多い。2段階は14~15cmが中心である。3段階は15cmが中心で、SI-22AやSI-26はやや大きく、SI-01Aはやや小さい。径10~12cm台の小さな坯は、全段階に少量ずつ見られる。

坯の種類によっても大きさが少し違い、半球形坯≧坯身模倣坯≧内彎口縁坯の順になる。2段階から見られる内彎口縁坯は、径12cm前後の小さなものが多い(SI-22Bの5~7、SI-14Aの14~17、SI-50の16~19・22・23など)。

次に、坯以外の型式変化を検討する。高坯は、1段階にもあるはずだが、今回は出土していない。短脚高坯は2段階のSI-05,06A,14A,17,22B,37A,50と3段階のSI-13にある。坯部底面が広く、口縁の外反が強くなる可能性がある。長脚のものは2段階のSI-06A,09,14A,50にあり、長脚高坯の最終段階であろう。

盤は2段階に例がある。SI-53では体部全面を削り(p.163の19,20)、SI-50では上位を削り残す(p.155の27)。

鉢は、内傾口縁のものは体部が浅く、底の丸みが弱くなる。体部上位を削り残すものは2段階から見られる。1段階のSI-01B,28、2段階のSI-06A,14A,22B,38,47,50,53、3段階のSI-13,15にある。外傾口縁の鉢は、口径が大きい大形鉢と、口径が器高に近い小形鉢がある。大形鉢は、口が開き下部が狭くなる。2段階のSI-14A,22Bと3段階のSI-26にあり、他遺跡にくらべて八幡根遺跡に目立つ器種である。SI-13にも平底でやや異なる種類の大形鉢がある。小形鉢は小形甔と同じ器形で、2段階のSI-14A,21B,37Aにある。

小形甔はSI-22Aの15とSI-35Cの8の他は単孔である。1段階のSI-28、2段階のSI-21B,47,53、3段階のSI-22A,49Bにある。体部上位を削り残すものにはSI-21Bの9がある。大形甔は1段階のSI-01B,28、2段階のSI-06A,14A,53,57、3段階のSI-13,34にある。大形・小形甔はともに下が狭く、上が広がる。

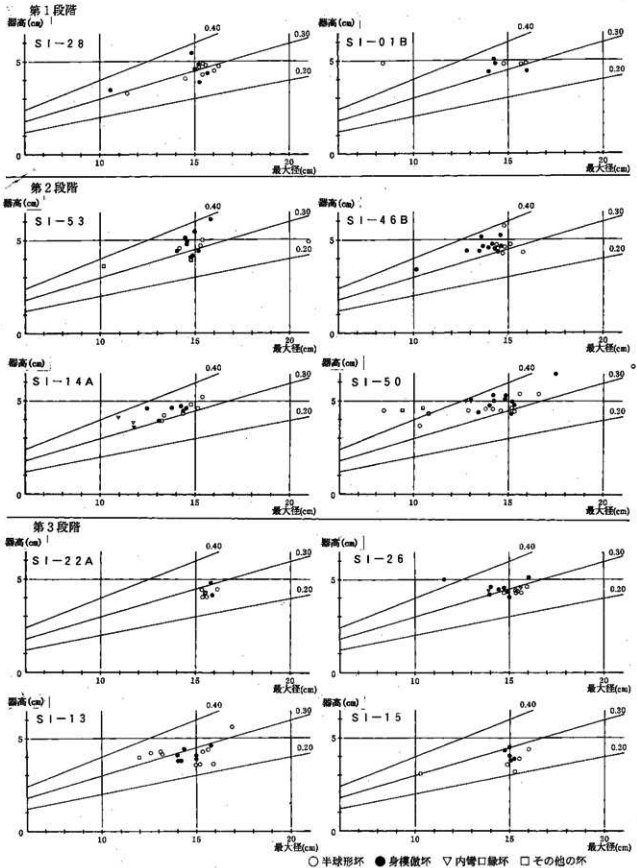
長甕は最大径が胴部から口縁部に移り、口が横に開いてゆく。丸甕は1段階のSI-28、2段階のSI-06A,14A,37A,46B、3段階のSI-35Bにあり、胴部が少し縦に伸びる。

他編年との関係 八幡根遺跡の古墳時代終末期第1~3段階の土師器を、従来の土器編年と比較する。

茨城県城西部では、吹野(1995)の八幡前遺跡VI~VII期に相当するようである。八幡前遺跡は茨城県真壁町に所在し、八幡根遺跡から東へ22kmの位置である。八幡前遺跡ではこの時期の資料はあまり豊富ではない。

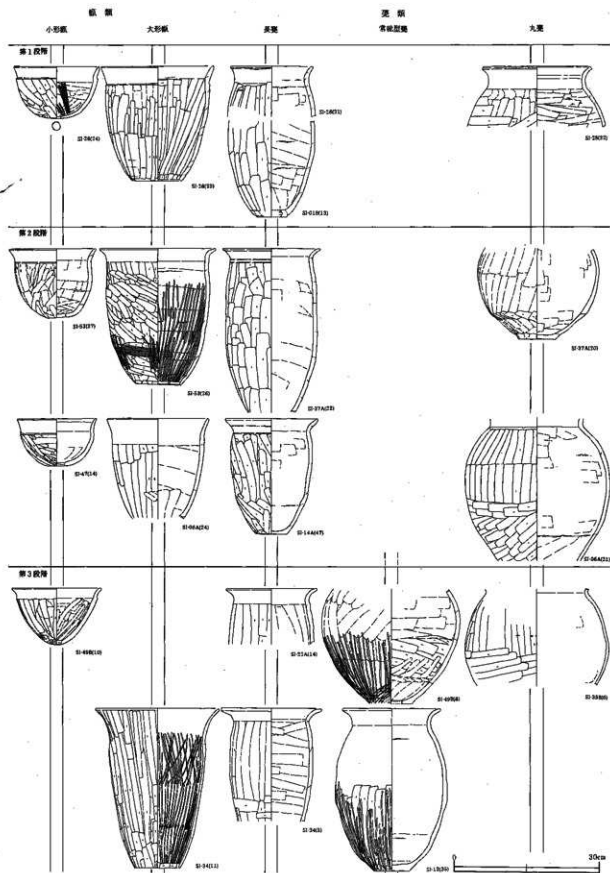
栃木県城中央部~南部では、津野(1995)のIV~VI期に相当する。八幡根1段階の坯類は津野IV期よりやや浅く、IV期かV期に相当する。八幡根2段階は内彎口縁坯(津野F類)が現れるV期、3段階は坯身模倣坯(同A類)の口縁部が最も短いVI期に該当する。津野編年は、八幡根遺跡の南7.5kmにある金山遺跡の資料も含むが、主に八幡根遺跡より10~20km北方の複数遺跡の個体を組み合わせているようである。

栃木県城中央部では、梁木・田熊(1989)のIV~V期に相当する。八幡根1段階に坯類をほとんど磨かない点は、IV期でも新要素である。八幡根2段階は内彎口縁坯の登場するV期に相当する。中央部ではV期に内彎口縁坯(梁木・田熊のF類)が主体になり、坯身模倣坯(同D類)・半球形坯(同E類)が減る。それに対して坯身模倣坯や半球形坯が多くて内彎口縁坯が少ない八幡根3段階は、地域差として古い要素を残すのかもしれない。梁木・田熊編年は、八幡根遺跡の北方10~20km付近の、鹿沼市・上三川町・南河内町域の複数遺跡の一括遺物を組み合わせて配列した編年である。



第130図 古墳時代終末期前半の土師器(2) 坏の大きさ

第4章 まとめ



第131図 古墳時代終末期前半の土師器(3) 瓶・甕類

同じく中央部では、安永(1996)の7世紀1～2段階に相当する。坏身模倣坏(安永B類)と半球形坏(同D類)の器形からみて、八幡根1～2段階が安永1段階、八幡根3段階が安永2段階(栃木市大塚遺跡群の第一群)に相当する。八幡根遺跡の北方12～18kmの栃木市・上三川町・石橋町・南河内町域の資料を使い、遺跡ごと一括遺物を用いて編年を行なっている。

暦年代 八幡根1段階は津野IV期、田熊・梁木IV期、安永1段階と並行するか、又は少し新しい。これらは陶器窯跡群のTK-209型式と並行すると考えられている。この型式期に前方後円墳が消滅してから後を古墳時代終末期とすると、八幡根1段階は終末期初頭になる。7世紀初頭と考えられる。

次に、SI-26の須恵器坏身を検討する。これは狭投窯(斎藤1988)の製品で東山50号窯期に相当する。東山50号窯期は、田辺編年TK-217型式の新しい部分に並行し、中村編年II型式第6段階およびIII型式第1段階並行期の後半とされる(尾野1993)。暦年代は7世紀前半の中頃から7世紀第2四半期に相当する。なお、SI-26の須恵器の産地・型式・年代は、柴垣勇夫・井上喜久男・城ヶ谷和広氏から御教示をいただいた。

SI-26の土師器は、八幡根3段階では古相と考えられる。身模倣坏の平均器高4.4cm、平均器高/平均最大径=0.30で、半球形坏の平均器高4.3cm、平均器高/平均最大径=0.28である。新相の年代幅を含めて、八幡根3段階が7世紀前半の中頃から7世紀中葉頃にあたと考える。

第158表 土師器坏の大きさ

(単位 cm)

	身模倣坏						半球形坏						内嚢口縁坏					
	最大径		器高		器高/最大径		最大径		器高		器高/最大径		最大径		器高		器高/最大径	
	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.	平均	S.D.
第1段階																		
SI-01B	14.7	0.91	4.7	0.30	0.32	0.03	15.5	0.62	4.8	0.06	0.31	0.01						
SI-28	15.2	0.30	4.5	0.59	0.30	0.04	15.5	0.56	4.5	0.30	0.29	0.02						
第2段階																		
SI-46B	14.0	0.60	4.6	0.23	0.33	0.02	14.9	0.47	4.7	0.48	0.32	0.04						
SI-53	14.8	0.50	4.7	0.66	0.32	0.04	15.0	0.67	4.6	0.25	0.31	0.01						
SI-50	14.6	0.65	4.8	0.34	0.33	0.03	14.8	1.15	4.7	0.40	0.32	0.02	12.9	0.17	5.0	0.00	0.39	0.01
SI-14A	13.8	0.83	4.5	0.29	0.32	0.03	14.4	0.90	4.5	0.46	0.31	0.02	11.5	0.46	3.8	0.25	0.33	0.04
第3段階																		
SI-22A	15.9	0.07	4.4	0.42	0.28	0.03	15.6	0.32	4.2	0.18	0.27	0.01						
SI-26	14.8	0.71	4.4	0.32	0.30	0.02	15.5	0.40	4.3	0.11	0.28	0.01	14.9	1.20	4.4	0.14	0.30	0.02
SI-15	14.9	0.18	4.0	0.27	0.27	0.02	15.4	0.51	3.7	0.44	0.24	0.03						
SI-13	14.8	0.62	4.0	0.28	0.27	0.02	(大)15.4	0.35	3.8	0.41	0.25	0.03						
							(小)13.0	0.29	4.1	0.05	0.32	0.01						

※ S.D.(標準偏差)は、標本自体の標準偏差ではなく、標本の計測値から母集団の標準偏差を計算した値で、1σを示した。

(統計に用いた標本の一覧)

	身模倣坏	半球形坏	内嚢口縁坏
SI-01B	1~4。	5,7,8。特に小さい9は除く。	
SI-28	1,2,4~6。特に小さい7は除く。	8~12,14,15。特に小さい16は除く。	
SI-46B	1~8,10。特に小さい9は除く。	11~17。	
SI-53	1,2,4~10。	11~13。20の蓋は除く。	
SI-50	1~8,12。特に大きい11は除く。	10,13~15,20,21,28,29。特に小さい26,30,31と27の蓋は除く。	17,19,22。
SI-14A	1~5,7。	8~13。	14,16,17。
SI-22A	1,3。	4~9。	
SI-26	2,5~10。特に小さい9は除く。	11~13,15,18,19。	20,21。
SI-15	1,3~5,7。	8~11。	
SI-13	1~7。	(大)9~11,13,17。特に大きい16は除く。 (小)12,15,18,19。	

(4) 古墳時代終末期の土師器生産

土師器の不良品 おそらく製作・乾燥時に破損・変形した土器を、そのままか、または補修して製品にしているものが、八幡根遺跡には多い。第132図上段のような例がある。

特にSI-28の20やSI-14の28の鉢、SI-53の8の坏のように、破損・補修がはなはだしい不良品は、その土器の製作地から遠く離れて流通するものとは考えにくい。付近で土師器を生産していたことを示している。乾燥中に小動物が噛んだ痕を補修しないで焼成したSI-49Bの4の坏や、欠けた口縁部に漆を塗って焼成したSI-46Bの6・10・15の坏などは、他人に出荷するものではなく、身内や関係者の間で消費することを前提にして焼き上げた土器ではないだろうか。埼玉県社具路遺跡でも同じ状況が見られる(長谷川1987, p.167)。

失敗品・不良品が鉢に多い理由としては、混和材の少ないきれいな粘土で大きめの器を作るので、乾燥時に収縮・変形しやすいものと考えられる。

不良品とは断定できないが、その可能性がある土師器も、参考として次に列挙しておく。

坏: SI-01Aの3・7、SI-01Aまたは01Bの1、SI-01Bの3・7・12、SI-11Aの3・7、SI-23の4、SI-34の2、SI-50の15・17・25、SI-53の6・9、遺構外出土(第118図)の13・19。

鉢: SI-01Bの12、SI-06Aの16、SI-47の10。

高坏: SI-13の23・26。 甌: SI-28の24。

未製品の焼成品・土師器削りかすの焼成品・焼粘土塊 左の小見出しに挙げたこの3者を、土師器製作関連遺物と呼ぶことにする。写真図版54に集成し、第132図下段と第133図に主な物を集めて図示した。これらを出土した竪穴建物、土師器製作工人と関わる住居・土師器製作工房などの可能性がある。

この3者ともに出土したSI-22Bは、土師器製作工人と関わる建物の可能性が高い。SI-28とSI-50にも焼粘土塊と削りかすが多いので同じ可能性がある。ただし、ここでは未製品の焼成品は見られない。削りかすは、この他にSI-14A・22A・23・34・35B・37Aからも少数ずつ出土している。SI-11A・SI-46B・SI-53は、削りかすは見られないが、不良品と土師器未製品の焼成品ともに出土している。他に、未製品の焼成品が、古墳時代中期の建物跡SI-36Cにも混入している。

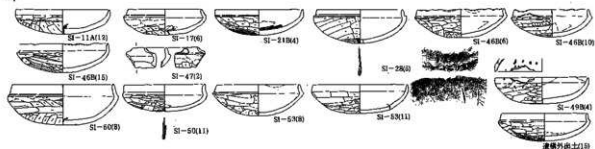
焼粘土塊を出土した竪穴建物跡が、この遺跡には非常に多い。20点以上の焼粘土塊を出土した遺構は、SI-08・14A・15・17・22B・23・28・34・35・37・46B・47・49AかB・50がある。なお、SI-35の出土例はSI-35A・B・Cの3軒のうちSI-35Bに伴う可能性がある。

土師器の削りかすや未製品が焼成される理由は、1) 乾燥中の土師器の外面に付着していたか土器内に入っていた、2) 焚火・竈・土師器焼成坑などに廃棄したか偶然入ったかまたは意識して入れた、などが考えられる。したがって、これらを出土する建物跡は、焼きあがったばかりの土器を持ち込んだ場所、または焼成された削りかすや未製品を廃棄した場所ということになる。その建物内か周辺で、土師器生産に関わる作業をしていたと考えられる。

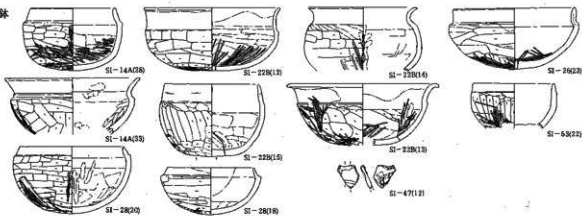
土師器生産遺跡から出土する焼粘土塊は、1) 試し焼き、2) 焼成する土師器を安定させるためにかませた粘土、3) 土師器製作作用の粘土が偶然焼かれたもの、などと考えられている(木立1995)。八幡根遺跡の焼粘土塊は直径数cmで、大きさからみて窯の構築材などとは考えられない。このことは、他遺跡の場合でも同様である。

焼粘土塊の中には、稲葉の圧痕が付いたものが見られ、八幡根遺跡ではSI-22A・22B・28・47・50から出土している。ただし、SI-22Aのものは22Bから流入した可能性が高い。7～8世紀の土師器焼成坑が200基

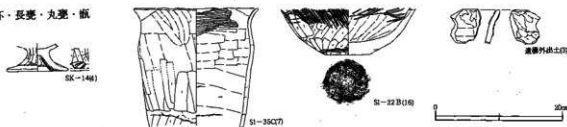
坏



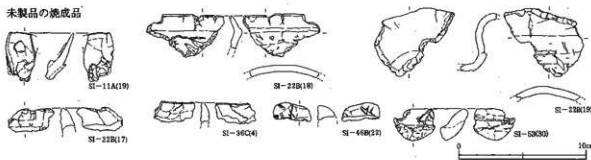
鉢



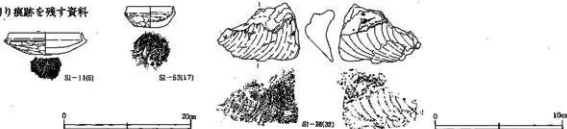
高坏・長甕・丸壺・瓶



未製品の焼成品



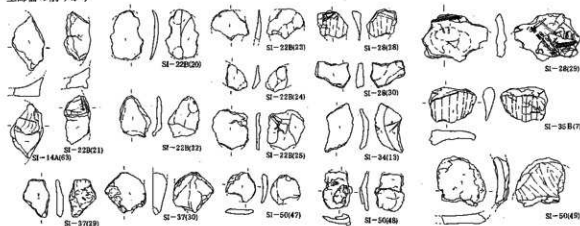
糸切り痕跡を残す資料



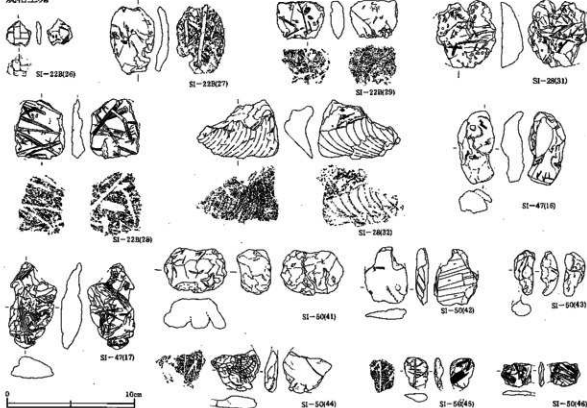
第132図 土師器の不良品・未製品の焼成品・糸切り痕跡資料

以上調査された三重県北野遺跡では、「葉の痕跡が付き、焼成を受けた粘土塊が土師器焼成坑内から少量ではあるが一般的に出土する。土師器の焼成方法に関連するものなのかもしれない」(竹田1995)とされ、「羽や葉の圧痕が付着している粘土塊が焼成坑内から出土することより、土師器を葉で覆い、その上を泥状のもので覆ったのではなかろうかとも推定される」(上村1995)という意見もある。また、東京都上落合二丁目遺跡の奈良時代の土師器焼成遺構や整穴住居跡から出土した焼粘土塊にも葉圧痕があり、土師器焼成に関わるものと考えられている(橋本他1996)。八幡根遺跡のSI-28出土例では、葉圧痕のほかに細い丸棒の刺突痕があ

土師器の削りかす



焼粘土塊



第133図 土師器の削りかす・焼粘土塊

るので、この理由を説明する課題も残る。

漆が付着する焼粘土塊(SI-25の3)は、漆の仕上がり具合を試した粘土塊と考えられる。漆が膜状に剥がれないでしっかり定着しているので、土師器の漆仕上げと同じく焼き付けなどの工程を経ていたようである。粘土のシワの下に漆が入り込んでいるので、ある程度柔らかいうちに漆を塗った可能性もある。これは平安時代の堅穴建物に混入していた資料であるが、漆を使う点や胎土からみて古墳時代終末期の遺物と考えている。

製作していた器種 SI-22BやSI-28から出土した焼粘土塊や土師器削りかすの土質を見ると、いずれも土師器・鉢・鉢・高坏類と同質の緻密な胎土(後述の1a類)で、礫や粗い砂を含まない。八幡根遺跡の他の堅穴建物跡から出土した焼粘土塊や削りかすにも、この点は共通している。このような緻密な胎土は、瓶や貯蔵用丸甕にはみられても、耐火性が必要な煮炊用長甕には使っていない。

焼磨き補修を行なっている不良品土師器の器種も、坏・鉢類が多い。これらにくらべると長甕は少なく、SI-35Cの7だけである。この甕は、坏・鉢類と同様の胎土(1a類)に、赤粒と、主にチャートと思われる灰色礫・砂を混ぜたような、粗い胎土である。丸甕は、SI-22Bの16が1点ある。

長甕類が少ないので、八幡根遺跡の今回報告した調査区付近(SI-22BやSI-28付近)で製作されていた土師器の器種は食器類に偏っていた可能性がある。また、長甕類も同じく作っていたら、砂・礫の多い粗い胎土の削りかすがもっと出土するはずである。坏・鉢・高坏・瓶・貯蔵用丸甕に使うきれいな胎土と、煮炊用長甕に使う粗い胎土とは、葉土の調合が違う。別の場所や別の機会に、あるいは別の工人が作っていた可能性があるだろう。瓶は、SI-14Aの53と59が八幡根遺跡産の坏・鉢類の胎土1a類と同じなので、この遺跡内でも製作していたと考えられる。

もしも確かに工房ごとに胎土別分業製作が行われていたとしたら、どの工房でも坏から甕まで全器種を作っているような状況ではなかったということになる。土師器生産の分業化の程度を考えさせる資料である。

木葉痕と糸切り離し痕 土師器の底部を製作台からはずす方法には、木の葉の上で製作して切り離さないものと、糸で切り離すものとがみられる。土器成形時の木葉痕を篋削りで削り落としたカスは、2点出土している(SI-14Aの63とSI-22Bの21)。糸切り離しを示す資料(第132図下段)には、糸切り離し痕跡を削り忘れた坏(SI-11の5、SI-53の17)がある。この他に、糸で粘土を切っていたことを示す資料として、糸で切り出した小粘土塊がSI-28の32にある。

SI-14Aの63やSI-22Bの21(第133図左上)をみると、糸で切り離したり木の葉からはがした時点では、土師器の底部は直径数cm程度の円柱状をしていたようである。この状況は、遺構外出土遺物中の坏(第118図19)でも見られる。この坏は底部を丸底に削る仕上げを忘れたか省略したものでしょう。円柱状の平底に成形してから、調整時に篋削りで丸底に仕上げ上げる製作方法を復元できる。口縁部を水平に作って横溝で行うために、成形時は平底のほうが都合が良かったのだろう。埼玉県社貝路遺跡にも同様の例がある(長谷川1987, p.168)。

八幡根遺跡と八幡根東遺跡 この八幡根遺跡と、隣接する八幡根東遺跡の古墳時代終末期の集落は、台地の付け根で連続する一連の集落になる可能性も考えられる(第4図)。八幡根東遺跡からも、同じく補修痕跡がある土師器が出土している。坏(SI-12の2、SI-18の5・11、SI-21の8、SI-22の14)、鉢(SI-18の13、SI-42の4)、小形瓶(SI-18の19)があり(数字は亀田1996の遺物番号)、SI-18に目立つ。ただし、このSI-18の遺物には土師器削りかすや未製品がなく、焼粘土塊も小形のものが5点だけで、この建物を土師器の製作工房や製品の仕分け場と断定する材料は少ない。

広く流通しえない不良品の土師器を供給されて使用するような、土師器製作者と使用者との間の親密な関

係が、八幡根遺跡と八幡根東遺跡の住人の間にあったことを推定できる。

八幡根遺跡産土師器の胎土 次に示すとおり、1a類・1b類・2類の3種類が認められた。

(胎土1類) 緻密な黄白色系統のやや軟質の胎土。混和材には、白細粒・黒細砂・透明細砂がみられる。白細粒は、針先で突くと崩れそうな軟質で不透明の粒で、高温で発泡した岩石(テフラ・凝灰岩など)に起源する可能性がある。この地域の歴史時代の土師器や、隣接する茨城県三和漁跡群産の須恵器にも多く見られる。黒細砂は、光沢を持ち角のある鉱物の結晶で、輝石(または角閃石)の可能性がある。透明細砂は、やはり光沢と角を持つ鉱物で、石英の可能性が高い。白・赤・灰色の不透明鉱物・岩石類は含んでいない。

(胎土1a類と1b類) 混和材の量を基準にして、胎土1類を1a類と1b類に細分する。上記の3種の混和材の量が多くて明瞭に認定できるグループが1a類である。また、3種の混和材を含むが、量が少ないものを1b類とする。

胎土1a類は八幡根遺跡産土師器の標準的な胎土である。出土例は多い。SI-22Bから出土した土師器の未製品の焼成品と削りかすや、各建物跡から出土した補修痕のある土師器の胎土は、おおむね共通してこれを使っている。胎土1b類は八幡根遺跡の周辺地域に共通する胎土である。少なくとも栃木県小山市城南東部から茨城県結城市・三和町周辺の古墳時代後期～平安時代の土師器・須恵器・瓦には広く見られる。

(胎土2類) 浅黄橙色で、混和材がほとんど見られない、非常に軟質で緻密な胎土。おそらく何らかの方法で土を選別しているのだろう。さわると指先に緻密な土の粉が付きそうなものもあるが、多くはない。漆仕上げをしないでそのまま食器に使うには弱い、漆仕上げをよく定着させるためにはこのように緻密で細かい軟質の胎土が有効と考えられる。胎土1類とは明らかに異なる。八幡根遺跡で生産していたことわかる胎土2類の遺物には、次の例が挙げられる。

補修した鉢: SI-26の23

補修した高坏: SK-14の4

削りかす: SI-28の28・29、SI-50の47

焼粘土塊: SI-28の31、SI-47の16・17、SI-25(混入品)の3

隣接する八幡根東遺跡(亀田1996)でSI-18などにみられる、補修磨きを行う不良品土師器にもこの胎土が多いようである。

八幡根遺跡または周辺で、この胎土の土師器をも生産していた可能性が高い。しかし、補修痕などがない場合には、2類に似た胎土の製品が八幡根遺跡産であることを決めるのは今のところむずかしい。「混和材がほとんどない」という認定基準は消極的である。他の製作地でも同様な胎土の精選工程を行なっていれば、似た胎土の製品ができることも十分考えられることである。

供給関係と今後の課題 八幡根遺跡に多く、また識別しやすい胎土1a類の土師器は、栃木県中央部(河内郡城～下都賀郡城北部)ではあまり見られないようである。2類に似た胎土のものは、栃木県中央部～南部の7世紀代の土師器坏・鉢・高坏類には多いが、八幡根遺跡周辺だけでは産地を限定できない。

八幡根遺跡やその周辺から供給された土師器の分布を明らかにするためには、周辺や他の地域で土師器生産遺跡を確認し、土師器製作関連資料を蓄積・分析することが必要である。八幡根遺跡の土師器と同様の器形・技法・胎土の製品を生産する遺跡が付近にもあるかもしれない。もしそうなら、両者を比較してどこが識別のポイントなのかを検討する必要がある。奈良・平安時代の須恵器の生産産地を識別できるのは、各生産遺跡の所在を把握し、近辺の窯の製品との違いを、器形・製作技法・胎土(混和材)について比較検討した結果として可能になったのである。

第2節 平安時代の集落と遺物

(1) 平安時代の集落

平安時代の遺構は、竪穴建物跡20棟がある。1号井戸と2号井戸もこの時期に伴う可能性が高い。また、円形および方形の土坑SK-26,32,35の3基も平安時代の可能性がある。

平安時代の竪穴建物どうしが重複するものは、SI-41がSI-40を切る1例だけである。集落の年代幅はあまり長くないだろう。出土遺物を2分すると、SI-02,04A,12,18,29,35A,39,40,42,44,45,46Aが前半期、SI-03B,20A,21A,25,31,41,55が後半期の可能性がある。SI-60は遺物が少ないので時期を決めにくい。古墳時代終末期の竪穴建物跡SI-37Aの上層に廃棄された平安時代遺物(第68図)は前半期に該当する。

前半期の遺物 遺物量が多い遺構(SI-35A,44,46A)で口縁部破片を数えると、坏・碗類のうち須恵器の占める割合は10～25%だけで、ロクロ成形・内面磨き・黒色処理の土師器が中心である。土師器・須恵器ともに坏の体部下端を手持ち筥削りするものが多い。

須恵器は茨城県三和窯跡群の製品が大半で、坏底部全面を手持ちで削り、浜ノ台窯跡段階に近い(阿久津1992)。しかし、SI-44では体部下端や底部を削らない糸切り無調整のものや、酸化炎焼成品もあり、より新しい様相である。

土師器坏類は、回転糸切り離し後に底面外周をしぼし手持ち筥削りする。有台碗皿類の台部には低いものと高いものがある。須恵器を模倣した土師器鉢・瓶などが一定量あり、隣接する八幡根東遺跡(亀田1996)の製品と考えられる(SI-04Aの9～11, SI-12の3, SI-40の4, SI-45の11, 46Aの16)。

後半期の遺物 遺物が最も多いSI-55で口縁部破片を数えると、坏碗類のうち須恵器の割合は5%で、食器から須恵器が衰退する。ただし、どの遺構も遺物が少ないので意味のある集計をしにくい。

土師器では、底部付近が丸みをもって小さくなる坏が現れる(SI-20A,21A)。有台碗皿類の台部はすべて高い。内面無処理のロクロ成形坏(SI-31,55)や、非ロクロ成形で外面を広く手持ち筥削りする坏碗類(SI-03B,55)も現れる。須恵器を模倣した土師器は見られない。須恵器坏は少なく、回転糸切り離し後無調整で体部下端を削らないものがあり(SI-03B,21A)、三和窯跡群の終末期の状況であろう。

集落の時期 八幡根遺跡の平安時代の土器群は、栃木県域では下野国府跡のⅡ期D段階からⅢ期A段階(田熊1988)、茨城県域では浅井(1992,1993)のⅥ期に相当する。前者は9世紀後葉から10世紀前葉、後者は9世紀後葉とされている。八幡根遺跡は、おおむね9世紀後葉～10世紀初頭の集落と考えられる。

(2) 灰釉陶器の産地と型式

八幡根遺跡の平安時代集落に伴う灰釉陶器の産地と型式(窯式)について、斎藤孝正氏から御教示をいただいた結果を、第159表に示した。なお、SI-17の瓶とSI-24の碗については、整理作業の過程で後に検出したために、斎藤氏の御教示を受けられなかった。その後、井上喜久男氏から御教示を頂く機会を得たので、この2点についてはその結果を示した。

個々の遺物について少し補足しておく。細片以外は各遺構ごとに図と観察表を掲載したので、くわしくはそちらで説明した。SI-01Aまたは01Bの2は、釉がやや薄めに汚く黄色に発色するものである。SI-03Bの9は、外面の釉がやや薄く、内面がやや浅くて内底面が広めで、口縁部の薄さをやや欠いている。それに比べるとSI-20Aの3やSI-21Aの3は口縁部が薄く、端部付近の外面を浅く窪ませ、その下が軽い稜をなしている。瓶類では、SI-04Aの12、SI-35Aの26、SI-20Aの4は外面の釉が薄く、SI-44の29はそれよりは釉

がやや明瞭である。SI-35Aの26は頸部の開き方がやや強めである。SI-14とSI-17の長頸瓶の胴部は小片なので図示していないが、軸や胎土の状態が良く似ていて、同じ個体の可能性もある。

遺物の型式は、黒笹90号窯式(K-90)の2~3型式が多い。黒笹14号窯式の遺物は見られない。井ヶ谷78号窯式(IG-78)のものが若干あり、こちらはすべて長頸瓶である。すべて猿投窯跡群の製品で、東濃や遠江・三河の製品は見られない。東濃の灰釉陶器生産が活発化する前の状況を示している。

遺物の多くは遺棄されたものではなく、個々の遺構の時期を考えるうえでは、あまり積極的に参考にできないものが多い。確実に竪穴建物跡の床面から出土した遺物はなく、埋土中から出土したものばかりと考えられる。古墳時代の竪穴建物跡に混入して出土したものも多い。SI-03Bの1点が口縁部から底部までやや良く残っているのを除くと、遺物の残存状況も小破片が多い。

むしろ、八幡根遺跡の平安時代集落が継続した時期を考える上で、黒笹90号窯式の時期(9世紀後半~10世紀初め)が参考になる。なお、井ヶ谷78号窯式期に相当する8世紀後半の時期の遺構・遺物は、在地の土器編年から考えると、今回の調査区内では認められない。隣接する調査区外にこの時期の遺構・遺物が存在しているのであろうか。

第159表 八幡根遺跡出土灰釉陶器一覧表

遺構名	出土状況	報告No	器種	残存状況	産地	型式
SI-01AまたはB	古墳時代竪穴に混入	2	碗	口1/12周	猿投	K-90 3型式
SI-03B	平安時代の竪穴建物(埋土中と竈)	9	碗	口1/8周, 底1/12周	猿投	K-90 3型式
SI-04A	平安時代の竪穴建物	12	長頸瓶	頸部小片	猿投	IG-78
SI-14A	古墳時代竪穴に混入	なし	長頸瓶	胴部小片	猿投	K-90
SI-17	古墳時代竪穴に混入	なし	長頸瓶	胴部小片	猿投	K-90
SI-20A	平安時代の竪穴建物(埋土中)	2	輪花碗	口1/12周	猿投	K-90 2型式?
SI-20A	平安時代の竪穴建物(埋土中)	3	小碗	口1/9周	猿投	K-90 3型式
SI-20A	平安時代の竪穴建物(埋土中)	4	長頸瓶	口1/15周	猿投	IG-78
SI-21A	平安時代の竪穴建物	3	皿	口1/15周	猿投	K-90 2型式
SI-24	古墳時代竪穴に混入	なし	碗	体部小片	猿投	K-90 2型式
SI-35A	平安時代の竪穴建物(埋土中)	26	長頸瓶	頸1/4周	猿投	IG-78
SI-44	平安時代の竪穴建物(埋土中)	29	長頸瓶	頸部小片	猿投	IG-78

第3節 旧石器・縄文・弥生時代の遺物

旧石器時代 今回報告する調査区内の台地中央を中心として、グリッドに沿って旧石器時代の地層を掘り下げた(第5図右および写真図版1下段)。しかし、旧石器時代の遺構や文化層を確認することはできなかった。表土中や、他時代の遺構の埋土中から、遺物が少量だけ確認されている。

旧石器時代の遺物のなかで、唯一の定型的な石器は第120図1のラウンドスクレイパーである。石器は流紋岩製で、厚手の横長剥片を利用した片面調整のものである。ラウンドスクレイパーの類例は、近接する八幡根東遺跡2号・3号・5号・7号ブロックから出土している。これらは片面調整である点で共通するが、いずれも縦長剥片を用いており、石材も珪質頁岩もしくは珪質凝灰岩を用いる点で異なる。

第120図2・5・6は大グリッドの759-Bから出土し、それぞれ小グリッドの7・9・6の注記がある。遺構配置図(第5図右)のSI-30・31付近に相当する。出土層が不明で、石材もそれぞれ異なるので明らかではないが、この付近に遺物のまとまりがあった可能性もある。

これら遺物の時期は明確には出来ないが、近接する八幡根東遺跡の遺物出土層位は、As-BPG Group

以上で、As-YP(約1.3~1.4万年前)降灰前後であるとの分析結果が報告されている。

縄文時代 八幡根遺跡で確認された縄文時代の遺構は、阿玉台式期の土器を出土した中期の土坑(SK-30)が1基だけである(第3章第1節)。SK-30よりも西方の調査区外に縄文時代の遺構が分布するのかもしれない。時期不明の土坑は数が多いので(第3章第7節)、その中にもさらに縄文時代の遺構が含まれている可能性も残る。

遺構外から出土した縄文土器は、分類(p.250)に示したとおり、早・前・中・後期のものが見られた。出土量は少なく、全部を合わせても中形コンテナ(内法長54×幅34×深さ20cm)に1箱程度である。

早期では条痕文系の土器が多い。有文のもの無く、時的には不明な点が多いが、細かな条痕を有するものは野鳥式の可能性がある。早期末~前期初頭の土器は1点(第133図1)のみである。比較的まとまった資料としては小山市間々田六本木遺跡の例があるが、その他近隣の遺跡では殆ど確認されていない。これらの土器は黒浜式土器との判別が困難なものも多くあるので、注意して見ていく必要のある土器である。

前期では黒浜式土器が主体となり、粗雑な格子目文(第122図1)、ループ文(第122図24)がみられる。また有文の土器に縦位の区画がないことから黒浜期でも比較的古い様相を呈する土器が多い。付近では黒浜式土器を出土する遺跡が非常に多く、土器も古手のものが多い。

前期末~中期初頭の土器は、量的に少ないものの、いくつかのバリエーションが見られる。付近では小山市溜ノ台遺跡より比較的まとまって検出されている。今後の資料の増加が期待される土器である。

中期の阿玉台式土器はIb・II・III・IV式に亘って検出されている。これに対して、加曾利E式土器はE I式がその大半を占め、E II式以降は少量が検出されたのみである。中期の土器は近接する寺野東遺跡から大量に出土しており、その関連について今後検討する余地のあるものと思われる。

弥生時代 今回報告する調査区内では、弥生時代の遺構は認められなかった。

遺構外から出土した弥生土器は、中期のものを一部に含むが、大半が後期の二軒屋式土器である。小破片が多いので詳しくはわからないが、口縁部は縄文、胴部は羽状に構成する附加条縄文第1種、底面は木葉痕を持つものが、それぞれ主体になる可能性がある。これらは二軒屋式でも比較的新しい要素を有するものが多い。近接する八幡根東遺跡出土の弥生土器に非常に類似しており時的にもほぼ同時期の可能性があるとと思われる。出土量は少なく、浅いコンテナ(内法長54×幅34×深さ10cm)に1箱弱である。

【参考文献】

- 秋山隆雄 1988 『西山遺跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告第21集 小山市教育委員会
- 河久津久 1992 『猿島郡三和町尾崎浜ノ台窯跡調査報告』『三和町史』資料編 原始・古代・中世
- 浅井哲也 1992 『茨城県内における奈良・平安時代の土器(Ⅰ)』『研究ノート』創刊号 茨城県教育財団 pp.81-110.
- 浅井哲也 1993 『茨城県内における奈良・平安時代の土器(Ⅱ)』『研究ノート』2 茨城県教育財団 pp.145-192.
- 岩上照朗他 1988 『一般国道4号(新4号国道)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過』栃木県埋蔵文化財調査報告第95集 財団法人栃木県文化振興事業団
- 岩上照朗他 1989 『一般国道4号(新4号国道)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過(昭和63年度)』栃木県埋蔵文化財調査報告第103集 財団法人栃木県文化振興事業団
- 岩上照朗他 1990 『一般国道4号(新4号国道)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過(平成元年度)』栃木県埋蔵文化財調査報告第110集 財団法人栃木県文化振興事業団
- 岩上照朗他 1994 『寺野東遺跡——発掘調査概要報告——』栃木県埋蔵文化財調査報告第152集 栃木県教育委員会・小山市教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 岩上照朗・篠原祐一・亀田幸久・太田嘉彦・斎藤弘 1994 『田間東道北遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第149集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 岩上照朗・篠原祐一・斎藤弘 1994 『塚崎遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第150集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 岩上照朗・亀田幸久・斎藤弘 1995 『横倉宮ノ内遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第161集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 岩上照朗・仲山英樹 1995 『長福城跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第158集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 岩淵一夫・中山晋・初山孝行・田代隆・藤田典夫 1986 『烏森遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第80集 住宅・都市整備公団・財団法人栃木県文化振興事業団
- 大金宣亮・石橋知明・中山晋・塚本師也・篠原祐一 1993 『成沢遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第138集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 尾野善裕 1993 『猿投窯6世紀の空白をめぐる』『考古学フォーラム』3 名古屋 pp.52-70.
- 小山市史編さん委員会 1981 『小山市史』史料編 原始・古代 小山市
- 小山市史編さん委員会 1984 『小山市史』通史編 自然・原始・古代・中世 小山市
- 小山市史編さん委員会 1984 『小山市史』通史編1 史料補遺編 小山市
- 小山市教育委員会社会教育課編 1978 『小山市遺跡分布図・地名表』小山市文化財調査報告書第4集 pp.65-66, 94.
- 上村安生 1995 『東海の土師器生産と土師器焼成坑——三重県を中心として——』『古代の土師器焼成遺構について』第1回窯跡研究会資料 窯跡研究会 明和(三重県多気郡)
- 亀田幸久編 1996 『八幡根東遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第181集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 川上真司 1989 『大坂遺跡・向台遺跡』南河内町埋蔵文化財調査報告書第4集 南河内町教育委員会

- 川原由典・初山孝行・芹澤清八・藤田典夫 1985 『鷹の巣前遺跡・本郷前遺跡・向野原遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第70集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 川原由典・藤田典夫 1984 「中久喜遺跡」小山市史編さん委員会編『小山市史 通史編1 史料補遺編』小山市発行 pp.30-36.
- 木立雅明 1995 『第1回窯跡研究会「古代の土師器焼成遺構について」に参加して』『窯研通信』4 窯跡研究会 小松 p.39.
- 小峯一成編 1995 『横倉遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第182集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 小森哲也・熊倉一見・田代隆・後藤信祐・仲山英樹・加藤秀正・馬場悠男・茂原信生・阿部修二・桜井秀雄 1988 『二ノ谷遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第97集 住宅・都市整備公団・財団法人栃木県文化振興事業団
- 斎藤孝正 1988 「猿投窯Ⅲ期杯類の型式編年」『名古屋大学総合研究資料館報告』4 名古屋 pp.105-113.
- 斎藤孝正 1989 「古墳時代の猿投窯」『断夫山古墳とその時代』第6回東海祖蔵文化財研究会
- 藤原祐一 1995 「白玉研究私論」『研究紀要』3 財団法人栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター 国分寺 pp.17-49.
- 鈴木一男 1985 「宮内北遺跡緊急発掘調査報告書」小山市文化財調査報告書第16集 小山市教育委員会
- 鈴木一男 1993 「小山の遺跡2—10年間の発掘成果—」小山市立博物館
- 鈴木一男 1994 「宮内5号墳墳形確認調査」『小山市立博物館報』11 小山市立博物館
- 竹澤謙・塚原孝一・阿部茂・野崎進・後藤信祐 1990 『溜ノ台遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第107集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 芹澤清八 1993 『砂田A遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第132集 栃木県教育委員会
- 田熊清彦 1988 『下野国府跡Ⅲ 土器類調査報告』栃木県埋蔵文化財調査報告第90集 財団法人栃木県文化振興事業団
- 竹田憲治 1995 「北野遺跡(第5次)発掘調査概要」『古代の土師器焼成遺構について』第1回窯跡研究会資料 窯跡研究会 明和(三重県多気郡)
- 田代 隆 1993 『谷館野東・谷館野西・上芝遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第137集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 常川秀夫 1974 「下石橋委宕塚」『東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書』栃木県埋蔵文化財調査報告第12集 栃木県教育委員会
- 津野 仁編 1993~1997 『金山遺跡』I~V 栃木県埋蔵文化財調査報告第135・148・160・179・187集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団
- 津野 仁 1995 「栃木県における6・7世紀の土器編年と地域的特徴」『東国土器研究』4 東国土器研究会 藤沢 pp.43-62.
- 栃木県教育委員会事務局文化課編 1983 『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』栃木県埋蔵文化財調査報告第53集
- 中山晋・石川均・橋本澄朗・田代隆 1981 『下都賀郡国分寺町栄工業団地内遺跡調査報告』栃木県埋蔵文化財調査報告第43集 栃木県教育委員会
- 橋本真紀夫・徳澤啓一・山田美和・小木谷晃与 1996 「古墳時代から奈良・平安時代にかけての住居跡か

参考文献

ら検出される焼成粘土塊」『東京の遺跡』52 東京考古談話会 青梅 pp.674-676.

長谷川 勇編 1987 『埼玉県本庄市 社具路遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第5集3分冊 本庄市教育委員会

初山孝行・斎藤弘・高崎進・田代隆 1985 『谷館野西遺跡 第1次発掘調査報告書』栃木県埋蔵文化財調査報告第72集 住宅・都市整備公団・財団法人栃木県文化振興事業団

初山孝行・熊倉一見・田代隆・小森哲也・仲山英樹・加藤秀正・藤沢徹 1987 『三ノ谷遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第87集 住宅・都市整備公団・財団法人栃木県文化振興事業団

日下田欣一・小森哲也・田代隆・倉田英・大日向己佳・山口耕一・柳瀬安栄・仲山英樹・鈴木泰浩 1990 『三ノ谷東・谷館野北遺跡』栃木県埋蔵文化財調査報告第112集 栃木県教育委員会・財団法人栃木県文化振興事業団

吹野富美夫 1995 『八幡前遺跡における古墳時代後期の土器様相』『研究ノート』4 茨城県教育財団

福田定信・三沢正善・秋山隆雄・野口静男 1992 『下大塚遺跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告第29集 小山市教育委員会

三沢正善・大塚昌彦 1987 『乙女不動原北浦遺跡B地点発掘調査報告書』小山市文化財調査報告第18集 小山市教育委員会

三沢正善 1990 『八幡根東遺跡発掘調査報告書』小山市文化財調査報告第24集 小山市教育委員会

南河内町史編さん委員会 1992 『南河内町史』史料編1 考古 南河内町

安永真一 1996 『古墳時代後期の土器について』『大塚遺跡群』栃木県埋蔵文化財調査報告第173集 栃木県教育委員会 pp.227-241.

梁木誠・田熊清彦 1989 『古代下野の土器様相(Ⅰ)』『栃木県考古学会誌』11 栃木県考古学会 宇都宮 pp.151-179.

結城市教育委員会 1984 『結城市遺跡分布図・地名表』結城市文化財調査報告書 第2集

結城市史編さん委員会 1980 『結城市史』第四巻 古代中世通史編 結城市

第160表 八幡根遺跡遺構一覧表

古墳時代中期の堅穴建物跡

遺構番号	主軸長	幅	主軸方向	火処	貯蔵穴	主柱穴	その他
SI-30	5.9m	6.0m	N-34°-E	炉	南東1基	4	石製模造品工房跡
SI-33	3.5m	3.4m	N-6°-E	炉?	なし	2?	
SI-36C	2.6m	2.5m以上	N-12°-E	炉?	不明	不明	

(主軸方向の基準は磁北)

古墳時代後期の堅穴建物跡

遺構番号	主軸長	幅	主軸方向	竈	貯蔵穴	主柱穴	その他
SI-36D	2.5m	2.9m	N-8°-E	北	なし	不明	
SI-49A	6.3m	6.0m	N-30°-W	北	南1基	4	

(主軸方向の基準は磁北)

古墳時代終末期の堅穴建物跡

遺構番号	主軸長	幅	主軸方向	竈	貯蔵穴	主柱穴	その他
SI-01A	2.4m以上	4.0m	N-17°-E	北	北東1基	推定4	
SI-01B	1.8m以上	5.0m以上	N-20°-E	北	北東1基	4	
SI-03A	4.7m	4.7m	N-3°-E	北	不明	4	
SI-05	3.8m以上	5.8m	N-28°-E	調査区外?	南東1基	2以上	
SI-06A	3.7m	3.6m	N-9°-E	北	なし	不明	
SI-06B	1.1m以上	3.6m	N-4°-E	不明	不明	4	
SI-07	不明	不明	N-2°-W	調査区外?	不明	不明	
SI-08	5.2m	5.4m	N-4°-E	北	北2基	4	
SI-09	6.0m	5.9m	N-15°-W	北	北東1基	4	
SI-10	1.1m以上	3.1m以上	N-5°-E	不明	不明	不明	
SI-11A	6.2m	5.9m	N-5°-E	北	北東1基	4	
SI-11B	不明	不明	不明	北	不明	不明	
SI-13	4.4m	4.8m	N-0°-E	北	北東1基	4	床面か床下に土坑有
SI-14A	6.6m	5.7m以上	N-34°-E	北	不明	6	拡張遺構?
SI-14B	不明	不明	N-31°-E	北	不明	不明	
SI-15	3.8m	5.3m	N-17°-W	北	北東1基	不明	平面長方形
SI-16	2.6m	3.2m	N-3°-E	東	なし	不明	平面長方形
SI-17	3.8m	5.1m	N-34°-E	北	なし	不明	平面長方形
SI-21B	5.5m	5.3m以上	N-5°-E	北	北東1基	5	
SI-22A	4.8m	4.7m以上	N-11°-E	北	北東1基	不明	
SI-22B	3.8m	4.1m	N-24°-E	北	不明	不明	
SI-23	3.0-3.1m	4.8m	N-10°-E	北	北東1基	壁柱穴1	平面長方形
SI-24	5.2m前後	5.2m以上	N-10°-E	北	不明	1?	
SI-26	7.4m	5.2m以上	N-11°-E	調査区外?	北東1基	不明	
SI-27	4.8m	不明	N-1°-E	北	北東1基?	推定4	
SI-28	6.5m	6.2m	N-8°-E	北	北西1,北東1	4	床面に土坑有
SI-32	3.7m	4.1m	N-7°-E	北	北東1基	壁柱穴2	平面長方形
SI-34	6.2m	6.1m	N-6°-E	北	北東1基	4	

遺構一覧表

SI-35B	2.4m以上	4.6m	N-50'-E	不明	不明	不明	平面長方形
SI-35C	3.0m	3.6m	N-8'-W	北	なし	不明	平面長方形
SI-36A	2.5m	2.6m以上	N-4'-E	不明	不明	壘柱穴2	平面長方形
SI-36B	不明	不明	N-30'-E	不明	不明	不明	
SI-37A	7.3m	6.8m	N-9'-W	北	北東1基	4	
SI-38	3.2m	3.1m以上	N-5'-W	北	不明	不明	
SI-43	3.7m以上	3.6m	N-55'-E	不明	不明	不明	
SI-46B	5.4m	5.8m以上	N-14'-E	不明	北東1基	不明	
SI-47	5.3m	5.0m	N-17'-E	北	北東1基	4	
SI-48	7.3m	7.2m	N-1'-W	北	北東1基	4	
SI-49B	3.3m	4.8m以上	N-21'-E	北	不明	不明	平面長方形
SI-50	5.4m	5.3m	N-9'-E	北	北東1基	4	
SI-53	6.8m	6.4m	N-5'-E	北	北東1基	4	
SI-57	4.8m以上	3.1m以上	N-7'-E	不明	不明	1以上	

(主軸方向の基準は磁北)

平安時代の壘穴建物跡

遺構番号	主軸長	幅	主軸方向	壘	貯蔵穴	主柱穴	その他
SI-02	3.3m	4.2m	N-17'-E	北	不明	不明	東に土坑有?
SI-03B	2.3m以上	4.5m	N-25'-E	北	不明	1以上	
SI-04A	3.8m	4.7m	N-26'-E	北	なし	不明	床面に段差有?
SI-12	3.8m	3.6m	N-17'-W	北	北西1基?	3以上	北西に土坑有
SI-18	3.5m	4.0m	N-16'-E	北	なし	壘柱穴1	
SI-20A	3.0m	3.4m	N-12'-E	北	なし	不明	
SI-21A	3.2m	3.7m	N-35'-E	北	なし	不明	
SI-25	3.2m	不明	N-31'-E	北	不明	不明	
SI-29	3.9m	3.1m	N-21'-E	北	なし	不明	
SI-31	2.2m	2.9m	N-27'-E	北	北西1基?	不明	北西に土坑有
SI-35A	4.6m	5.7m	N-17'-E	北	なし	不明	
SI-39	2.5m以上	不明	N-29'-E	不明	不明	不明	
SI-40	4.0m	3.8m	N-26'-E	北東2基	なし	不明	
SI-41	3.5m	4.0m	N-30'-E	北	なし	不明	北東に張出有
SI-42	2.7m	2.8m	N-50'-E	北	なし	不明	
SI-44	3.0m	3.4m	N-17'-E	北	なし	不明	床下に土坑有
SI-45	不明	不明	不明	方位不明	不明	不明	
SI-46A	4.8m	5.3m	N-8'-E	北	なし	2	床面に段差有?
SI-55	2.6m	3.1m	N-35'-E	北	北西1基?	不明	北西に土坑有
SI-60	3.7m	4.3m	N-9'-E	北	なし	壘柱穴1	

(主軸方向の基準は磁北)

時期不明の壘穴建物跡

遺構番号	主軸長	幅	主軸方向	壘	貯蔵穴	主柱穴	その他
SI-04C	1.5m以上	2.7m以上	N-2'-E	不明	不明	不明	

(主軸方向の基準は磁北)

長方形土坑

遺構番号	長軸	短軸	深さ	主軸方向	遺構番号	長軸	短軸	深さ	主軸方向
SK-01A	3.2m	1.3m	0.6m	N-60° -W	SK-20	1.8m	0.6m	0.8m	N-23° -E
SK-01B	1.7m	0.8m		N-43° -E	SK-21	1.5m	0.6m	0.7m	N-27° -E
SK-02	1.5m	0.8m	0.5m	N-62° -E	SK-23	1.7m	0.9m	0.6m	N-28° -E
SK-04	2.1m	1.1m	0.6m	N-13° -E	SK-24	1.2m	0.7m	0.7m	N-70° -W
SK-05	1.8m	0.7m	0.6m	N-68° -W	SK-27	0.6m以上	0.5m	0.4m	N-43° -E
SK-06	1.3m	0.6m	0.4m	N-45° -E	SK-33	2.3m以上	0.7m	0.3m	N-72° -W
SK-08	2.0m	0.9m	0.6m	N-20° -E	SK-36	1.9m	1.1m	0.4m	N-14° -E
SK-09	1.6m	0.6m	0.8m	N-26° -E	SK-38	3.0m	0.8m	0.2m	N-45° -E
SK-19	1.3m	0.7m	0.7m	N-25° -E					

(主軸方向の基準は磁北)

円形土坑・方形土坑

遺構番号	長軸	短軸	深さ	主軸方向	遺構番号	長軸	短軸	深さ	主軸方向
SK-03	1.7m	1.5m	0.3m	N-35° -E	SK-28	1.0m	0.9m	0.2m	N-16° -E
SK-07	1.5m	1.4m	0.3m	N-6° -E	SK-30	1.6m	1.5m	0.2m	N-23° -W
SK-10	0.9m	0.7m	0.3m	N-81° -W	SK-31	1.1m	1.0m	0.2m	N-51° -W
SK-11	0.7m		0.3m		SK-32	0.8m	0.6m以上	0.2m	N-80° -W
SK-12	0.8m	0.7m	0.4m	N-12° -E	SK-34	0.8m	0.7m	0.2m	N-86° -E
SK-13	0.9m	0.7m	0.4m	N-29° -E	SK-35	0.9m	0.7m	0.1m	N-77° -E
SK-14	0.9m		0.2m		SK-37	0.8m		0.3m	
SK-15	1.0m	0.9m	0.4m	N-4° -E	SK-39	1.2m	1.1m	0.4m	N-40° -E
SK-16	1.0m	0.6m	0.4m	N-8° -W	SK-40	0.9m	0.8m	0.4m	N-37° -E
SK-17	1.1m		0.3m		SK-41	1.0m		0.2m	
SK-18	1.1m	1.0m	0.2m	N-9° -E	SK-42	1.2m		0.2m	
SK-22	0.9m	0.8m	0.4m	N-8° -E	SK-43	0.6m	0.5m	0.3m	N-85° -W
SK-25	1.2m	1.0m	0.3m	N-25° -E	SK-44	0.7m	0.5m	0.7m	N-86° -W
SK-26	1.6m以上	1.3m	0.2m	N-15° -W					

(主軸方向の基準は磁北)

遺構索引表

第161表 八幡根遺跡遺構索引表

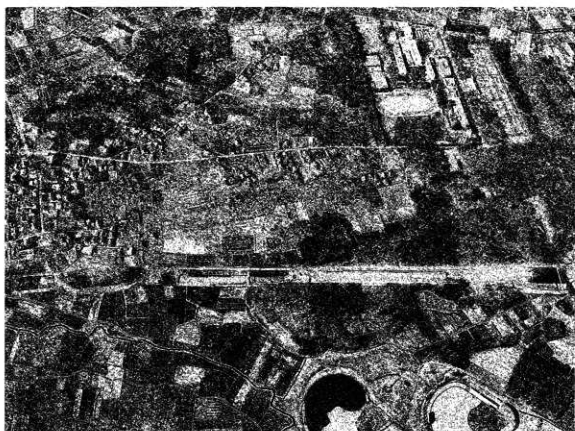
壙穴遺物跡 (S1)		遺構名	種別	時代	本文ページ	挿図番号	表番号	写真図版	その他
SI-01A	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	36-42	18-21	13-14・17・159	3・21			
SI-01B	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	36-42	19-21・130	15-17・158-159	3・21・55			
SI-02	壙穴遺物跡	平安時代	170	84	99-100	3-4・21			
SI-03A	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	42	22	18-19	3・21			
SI-03B	壙穴遺物跡	平安時代	171-173	85	101-102・150	3-4・21-22・53			
SI-04A	壙穴遺物跡	平安時代	174-175	86-88	103-104・159	4・22・52-53・55			
SI-04C	壙穴遺物跡	時代不明	224	111					
SI-05	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	44	23	20-21	4・22-23・55			
SI-06A	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	46	24-25	22-23・25	4-5・23-24			
SI-06B	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	50	26	24-26	5			
SI-07	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	51	27	27-28	5			
SI-08	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	52-53	28	29-30	5・24			
SI-09	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	55	29	31-32	5・24-25・55			
SI-10	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	57	30	33-34	5			
SI-11A	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	58-60	31-32	35-36	6・25・53-54			
SI-11B	壙穴遺物跡?	古墳時代終末期	62	31-32	35-36				
SI-12	壙穴遺物跡	平安時代	180	89	105-106	6			
SI-13	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	62-63	33-34・130	37-38・158	6・26-27			
SI-14A	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	68-71	35-39・130	39-40・158-159	6-7・27-30・53-55			
SI-14B	壙穴遺物跡?	古墳時代終末期?	79	40		7			
SI-15	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	79-81	41・130	41-42・158	7・30・55			
SI-16	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	82	42	43-44	7・31			
SI-17	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	84	43	45-46・159	8・31			
SI-18	壙穴遺物跡	平安時代	181-183	90	107-108	8・31			
SI-19	欠番		88						SI-14Aに統合
SI-20A	壙穴遺物跡	平安時代	183-184	91	109-110・159	8・31			
SI-21A	壙穴遺物跡	平安時代	184-185	92	111-112・159	8・31・53			
SI-21B	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	88	44	47-48	8・31-32			
SI-22A	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	90-91	45-46・130	49-50・158	8-9・32・54			
SI-22B	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	94	47-48	51-52	9・32-33・54			
SI-23	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	99-100	49	53-54	9・33			
SI-24	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	101-102	50	55-56・159	9・52			
SI-25	壙穴遺物跡	平安時代	186	93	113-114	9・54			
SI-26	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	102-103	51-52・130	57-58・158	10・33-34・53・55			
SI-27	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	106	53	59-60	10・34			
SI-28	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	108-111	54-56・130	61-62・158	10-11・34-35・54			
SI-29	壙穴遺物跡	平安時代	187-188	94	115-116	11・35			
SI-30	壙穴遺物跡	古墳時代中期	20-26	9-12	3-4	11-12・35・51・53			
SI-31	壙穴遺物跡	平安時代	189	95	117-118	12・35			
SI-32	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	114	57	63-64	12			
SI-33	壙穴遺物跡	古墳時代中期	26-27	13	5-6	12			
SI-34	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	115-117	58-60	65-66	12・35-36・52・54-55			
SI-35A	壙穴遺物跡	平安時代	191-192	96-98	119-120・159	12-13・36-37・53			
SI-35B	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	120	61	67-69	13・37・54			
SI-35C	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	122-124	62	70-71	13・37・53			
SI-36A	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	125	63	72-73	13			
SI-36B	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	125	64	74-75	13			
SI-36C	壙穴遺物跡	古墳時代中期	27-28	14	7-8	13・37・54			
SI-36D	壙穴遺物跡	古墳時代後期	30	15	9-10	13			
SI-37A	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	126-127	65-68	76-78	13-14・37-39・52-55			
SI-37B	欠番	平安時代	128-127	68	78				SI-37Aの上層遺物
SI-38	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	134-136	69	79-80	14・39・55			
SI-39	壙穴遺物跡	平安時代	197	99	121-122	14・39			
SI-40	壙穴遺物跡	平安時代	198-199	100	123-124	14・39-40			
SI-41	壙穴遺物跡	平安時代	201	101	125-126	14・53			
SI-42	壙穴遺物跡	平安時代	208	102	127-128	14・40			
SI-43	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	136-137	70	81-82	15・40-41			
SI-44	壙穴遺物跡	平安時代	207	104-105	129-130・159	15・41-42			
SI-45	壙穴遺物跡	平安時代	212	106	131-132	15・42・52・55			
SI-46A	壙穴遺物跡	平安時代	215-216	107-108	133-134	15-16・42-43・53			
SI-46B	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	137-139	71・130	83-84・158	16・43・54			
SI-47	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	141-143	72-73	85-86	16・43-44・54-55			
SI-48	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	145	74	87-88	16・44-45			
SI-49A	壙穴遺物跡	古墳時代後期	31・151	15-17・76	11-12・91-92	16-17・45・56			
SI-49B	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	148・151	75-76	89-92	17・45			
SI-50	壙穴遺物跡	古墳時代終末期	152-154	77-79・130	93-94・158	17-18・45-47・52・54			
SI-51	欠番								

SI-52	欠番	160					SI-53に統合
SI-53	竪穴建物跡	古墳時代終末期	160-162	80-82・130	95-96・158	18・47-49・53・54-55	
SI-54	欠番	242・246	119		157		
SI-55	竪穴建物跡	平安時代	219	109	136-136	18・49・53	
SI-56	欠番	242	118		157		
SI-57	竪穴建物跡	古墳時代終末期	166-168	83	97-98	19・49・53	
SI-58	欠番	242	118		157		
SI-59	欠番	242・246					
SI-60	竪穴建物跡	平安時代	222-223	110	137-138	19	

土坑 (SK)							
遺構名	種別	時代	本文ページ	探照番号	表番号	写真回数	その他
SK-01A	長方形土坑	中世以降?	236	116		15	
SK-01B	長方形土坑	中世以降?	236	116		15	
SK-02	長方形土坑	中世以降?	236	116	156	7	
SK-03	方形土坑	古墳時代終末期	227	113・115	142・156	7	
SK-04	長方形土坑	中世以降?	236-238	116	156	6	
SK-05	長方形土坑	中世以降	238	116		19	
SK-06	長方形土坑	中世以降	238	118		19	
SK-07	方形土坑	時代不明	227	113・115	143・156	8	
SK-08	長方形土坑	中世以降時代?	238	116-117	153・156	6	
SK-09	長方形土坑	中世以降時代	238	116-117	154・156	8	
SK-10	円形土坑	古墳時代終末期	227	113・115	144・156	10	
SK-11	円形土坑	古墳時代終末期?	227	113		10	
SK-12	方形土坑	古墳時代終末期?	227	113		9	
SK-13	円形土坑	古墳時代終末期?	227	113		9	
SK-14	円形土坑	古墳時代終末期	228	113・115	145-156	9・49	
SK-15	円形土坑	古墳時代終末期?	228	113		9	
SK-16	方形土坑	古墳時代終末期	228	113・115	146・156	13・55	
SK-17	円形土坑	古墳時代後期以前	228	113	147・156	13	
SK-18	方形土坑	平安時代以前	228	113	156	13	
SK-19	長方形土坑	中世以降?	238	116		16	
SK-20	長方形土坑	中世以降?	238	116		16	
SK-21	長方形土坑	中世以降?	238	116		16	
SK-22	円形土坑	時代不明	230	113		16	
SK-23	長方形土坑	中世以降	239	117	155-156	16	
SK-24	長方形土坑	中世以降?	239	116	156	17	
SK-25	円形土坑	時代不明	230	113		3	
SK-26	方形土坑	平安時代	230	113・115	148・156	3・49	
SK-27	長方形土坑	中世以降?	239	117		4	
SK-28	円形土坑	時代不明	230	113	156	19	
SK-29	欠番						
SK-30	円形土坑	縄文時代中期	230	8・113	156	10・49	
SK-31	円形土坑	時代不明	230	114	156	19	
SK-32	円形土坑	平安時代	230	114-115	149・156	19・49	
SK-33	長方形土坑	中世以降?	239	117	149・156	19・49	
SK-34	円形土坑	時代不明	231	114	156	20	
SK-35	円形土坑	平安時代	231	114	156		
SK-36	長方形土坑	中世以降?	239	117		19	
SK-37	円形土坑	古墳時代終末期	231	114-115	150・156	20・49	
SK-38	長方形土坑	近世以降?	239	117	156	20	
SK-39	円形土坑	時代不明	231	114	156	20	
SK-40	円形土坑	時代不明	231	114		20	
SK-41	円形土坑	時代不明	231	114		20	
SK-42	円形土坑	時代不明	232	114	156	20	
SK-43	円形土坑	古墳時代中期	232	114-115	151・156	20・50	
SK-44	円形土坑	古墳時代終末期	232	114-115	156	20	

井戸							
遺構名	種別	時代	本文ページ	探照番号	表番号	写真回数	その他
1号井戸	井戸	平安時代	225	112	139-140	8	
2号井戸	井戸	平安時代	225	112	139・141	19	

写 真 图 版



八幡根遺跡と八幡根東遺跡遺景（東上空から）



八幡根遺跡（東上空から）

鳥取県立博物館蔵 鳥取県立博物館 鳥取県立博物館 鳥取県立博物館



八幡根遺跡と八幡根東遺跡遠景（南西上空から）



八幡根遺跡（南西上空から）



SI-01A遺物出土状況（東から）



SI-01A・B・03A・BとSK-25全景



SI-01A竈（南から）



SI-01A貯蔵穴（北西から）



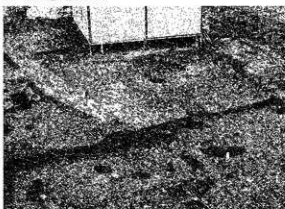
SI-01B遺物出土状況（東から）



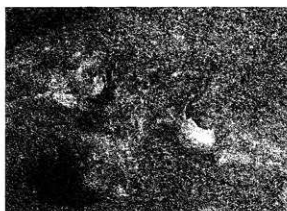
SI-01B竈（南から）



SI-01B貯蔵穴（東から）



SI-02とSK-26全景（南東から）



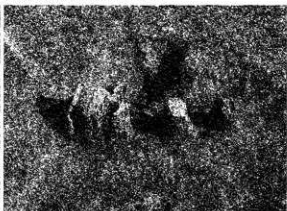
SI-02竈 (南から)



SI-03B遺物出土状況 (南から)



SI-03B遺物出土状況 (東から)



SI-03B竈 (南から)



SI-04A・04B・05とSK-27全景 (南から)



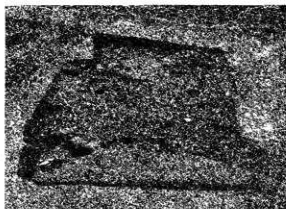
SI-04A竈 (西から)



SI-06A遺物出土状況 (北東から)



SI-06A遺物出土状況 (東から)



SI-06A・06B・07全景（南から）



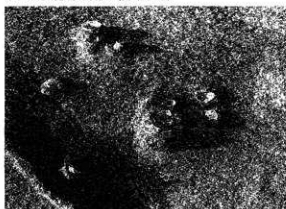
SI-08遺物出土状況（東から）



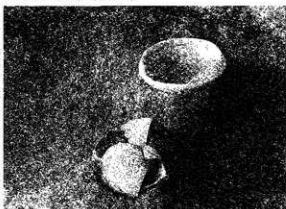
SI-08遺物出土状況（南東から）



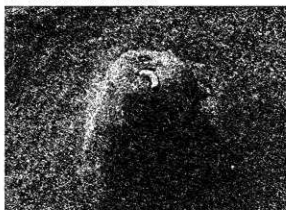
SI-08・10全景（東から）



SI-09遺物出土状況（南から）



SI-09遺物出土状況（南から）



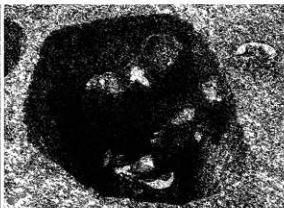
SI-09勾玉出土状況（東から）



SI-09全景（東から）



SI-11A・12とSK-04全景 (東から)



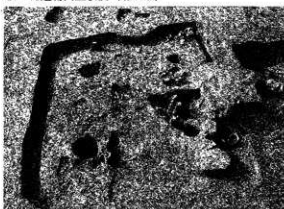
SI-11A貯蔵穴 (東から)



SI-13遺物出土状況 (北から)



SI-13貯蔵穴遺物出土状況 (東から)



SI-13とSK-08全景 (東から)



SI-13竈 (南から)



SI-14Aセクション (南から)



SI-14A遺物出土状況 (西から)



SI-14A遺物出土状況 (南から)



SI-14A全景 (南から)



SI-14A竈 (南から)



SI-14B電遺物出土状況 (西から)



SI-15遺物出土状況 (東から)



SI-15全景 (南東から)



SI-15貯蔵穴 (東から)



SI-16とSK-02・03全景 (東から)



SI-17遺物出土状況 (南東から)



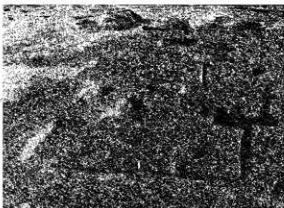
SI-17全景と1号井戸 (南東から)



SI-18全景 (南東から)



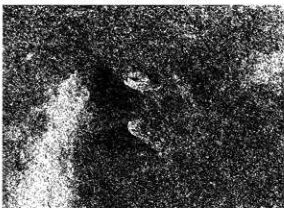
SI-20A全景 (南西から)



SI-21A・B・22A・BとSK-07・09全景



SI-21B貯蔵穴 (北西から)



SI-22A遺物出土状況 (西から)



SI-22A竈 (南から)



SI-22A貯蔵穴（北西から）



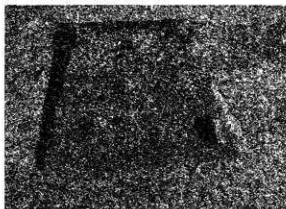
SI-22B遺物出土状況（北西から）



SI-22B遺物出土状況（西から）



SI-23遺物出土状況（南から）



SI-23全景（東から）



SI-23窟（南から）



SI-24全景（東から）



SI-25とSK-12・13・14・15全景（南東から）



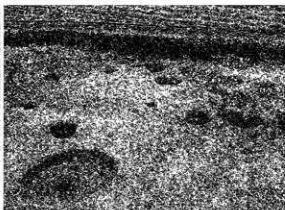
SI-26遺物出土状況 (南から)



SI-26遺物出土状況 (南から)



SI-26とSK-10・11全景 (東から)



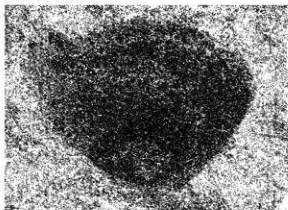
SI-27とSK-30全景 (東から)



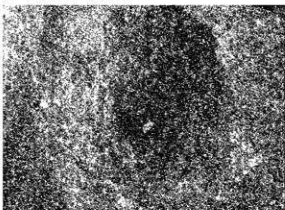
SI-28貯蔵穴2 (北から)



SI-28貯蔵穴1 (西から)



SI-28貯蔵穴2完掘 (北から)



SI-28貯蔵穴1完掘 (西から)



SI-28遺物出土状況（西から）



SI-28全景（西から）



SI-28壙（南から）



SI-29全景（南東から）



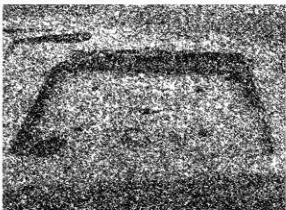
SI-30セクション（南東から）



SI-30遺物出土状況（東から）



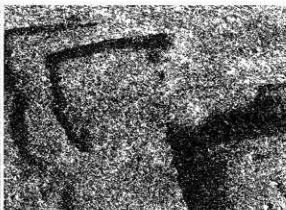
SI-30遺物出土状況（北西から）



SI-30全景（東から）



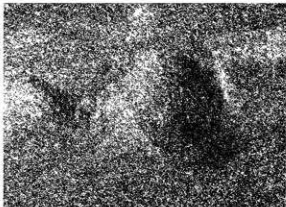
SI-30貯蔵穴 (東から)



SI-31全景 (東から)



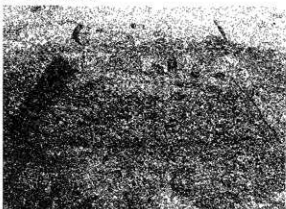
SI-32全景 (南から)



SI-32竈 (南から)



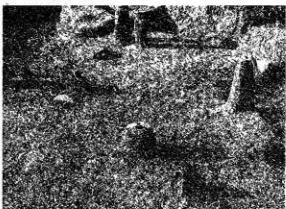
SI-33全景 (東から)



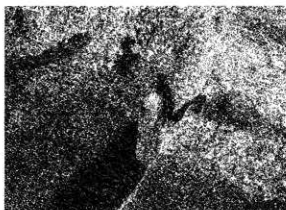
SI-34全景 (南から)



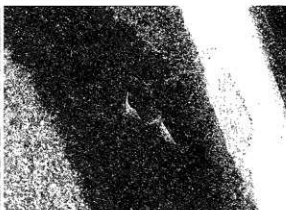
SI-34竈 (南から)



SI-35A遺物出土状況 (東から)



SI-35A遺物出土状況 (南から)



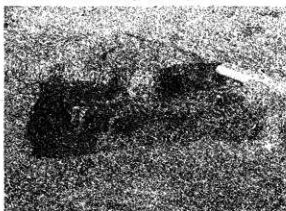
SI-35A遺物出土状況 (南から)



SI-35A・BとSK-18全景 (東から)



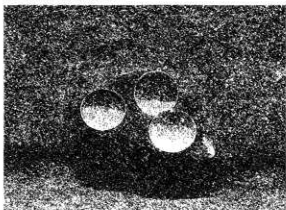
SI-35A竈全景 (南から)



SI-35C全景 (南から)



SI-36A・B・C・DとSK-16・17全景 (南東から)



SI-37A遺物出土状況 (北から)



SI-37A遺物出土状況 (東から)



SI-37A全景 (南から)



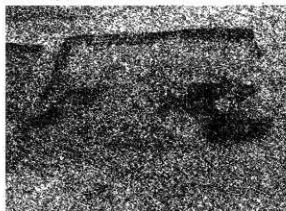
SI-37A竈全景 (南から)



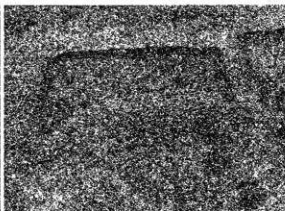
SI-37A貯蔵穴 (東から)



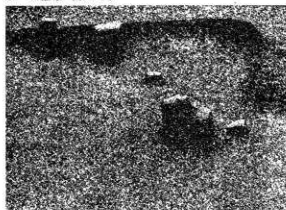
SI-38・39全景 (東から)



SI-40全景 (東から)



SI-41全景 (東から)



SI-42遺物出土状況 (東から)



SI-42全景 (南から)



SI-43とSK-01A・B全景（南東から）



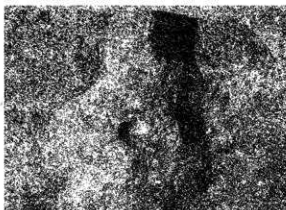
SI-44遺物出土状況（南から）



SI-44遺物出土状況 墨書土器（西から）



SI-44全景（南から）



SI-44竈（南から）



SI-45竈（南西から）



SI-46A遺物出土状況（東から）



SI-46A遺物出土状況（南東から）



SI-46A・BとSK-19・20・21・22 (東から)



SI-47遺物出土状況 (南から)



SI-47遺物出土状況 (南から)



SI-47・48全景 (東から)



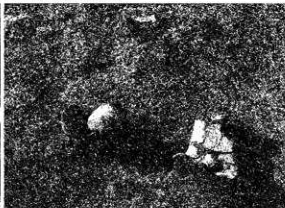
SI-48遺物出土状況 (東から)



SI-48貯蔵穴 (北から)



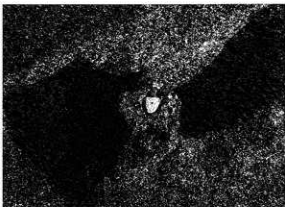
SI-49A遺物出土状況 (南東から)



SI-49A遺物出土状況 (南東から)



SI-49A遺物出土状況（南西から）



SI-49A遺物出土状況（西から）



SI-49A遺物出土状況（東から）



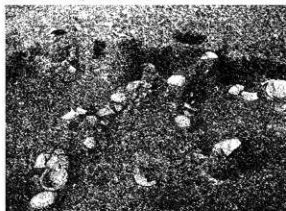
SI-49B遺物出土状況（西から）



SI-49A・B全景（南東から）



SI-50遺物出土状況（南西から）



SI-50遺物出土状況（南東から）



SI-50とSK-24全景（東から）



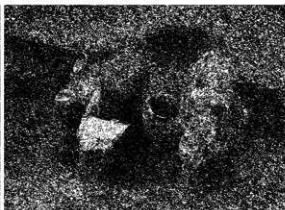
SI-50貯蔵穴 (東から)



SI-53遺物出土状況 (東から)



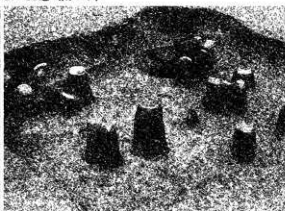
SI-53全景 (東から)



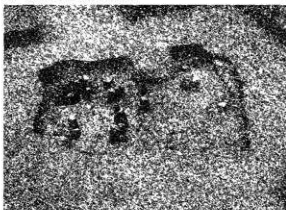
SI-53竈 (南から)



SI-53貯蔵穴 (東南から)



SI-55遺物出土状況 (南から)



SI-55全景 (南から)



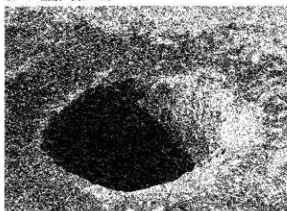
SI-56A遺物出土状況



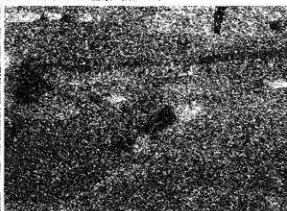
SI-57全景 (東から)



SI-60とSK-36全景 (東から)



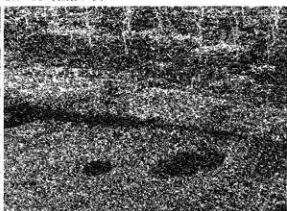
2号井戸



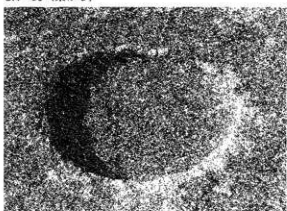
SK-05 (北東から)



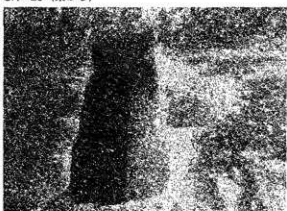
SK-06 (東から)



SK-28 (東から)



SK-31 (東から)



SK-32・33 (東から)



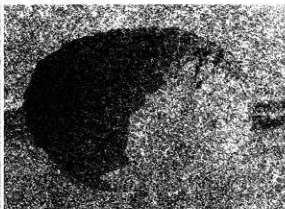
SK-34 (東から)



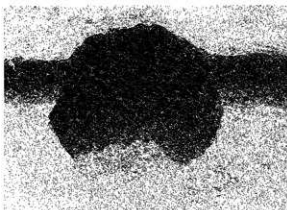
SK-37 (北西から)



SK-38 (西から)



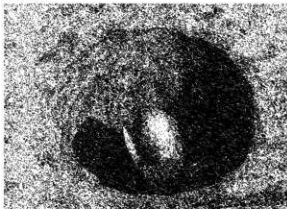
SK-39 (東から)



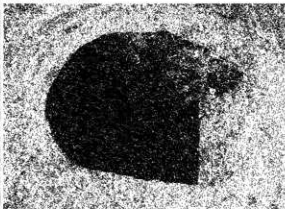
SK-40



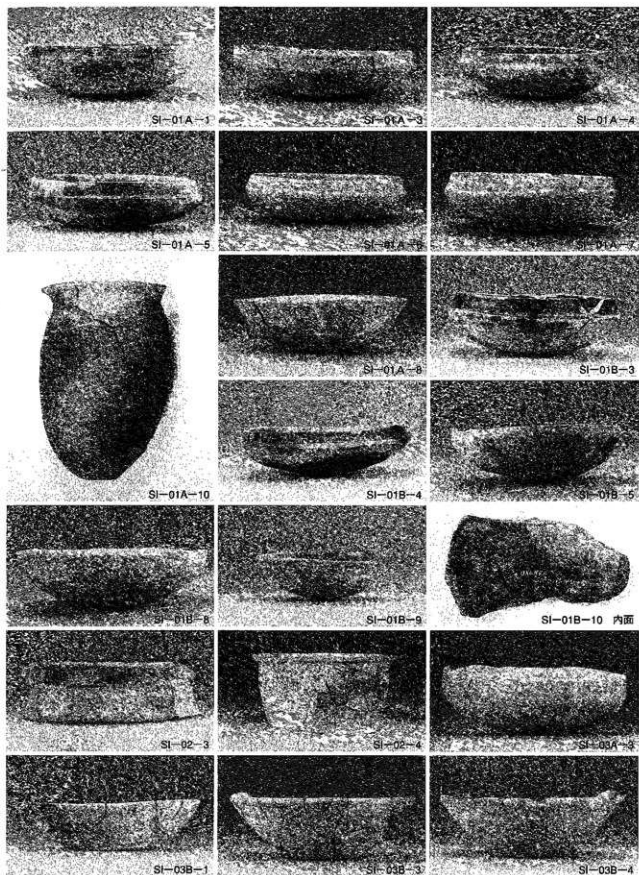
SK-42 (南から)

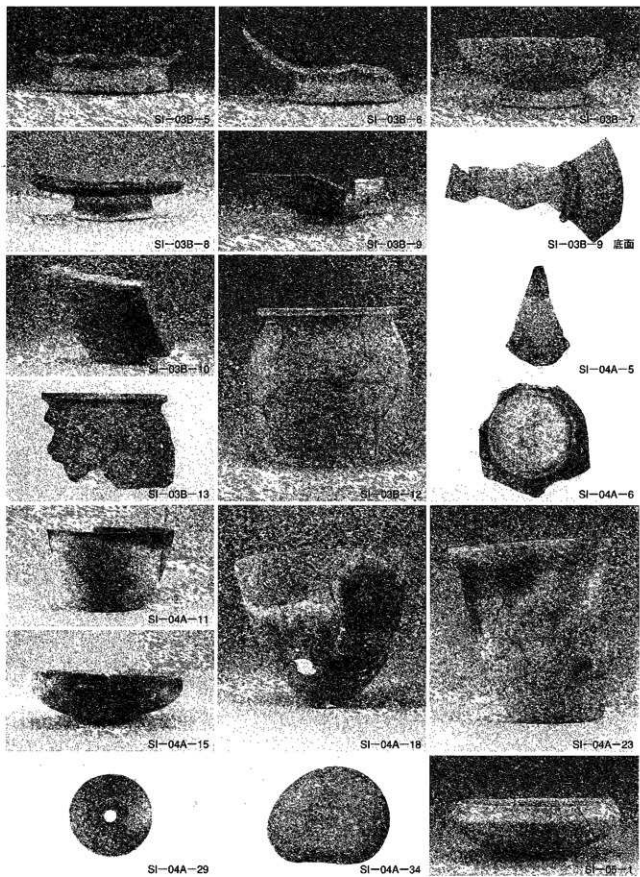


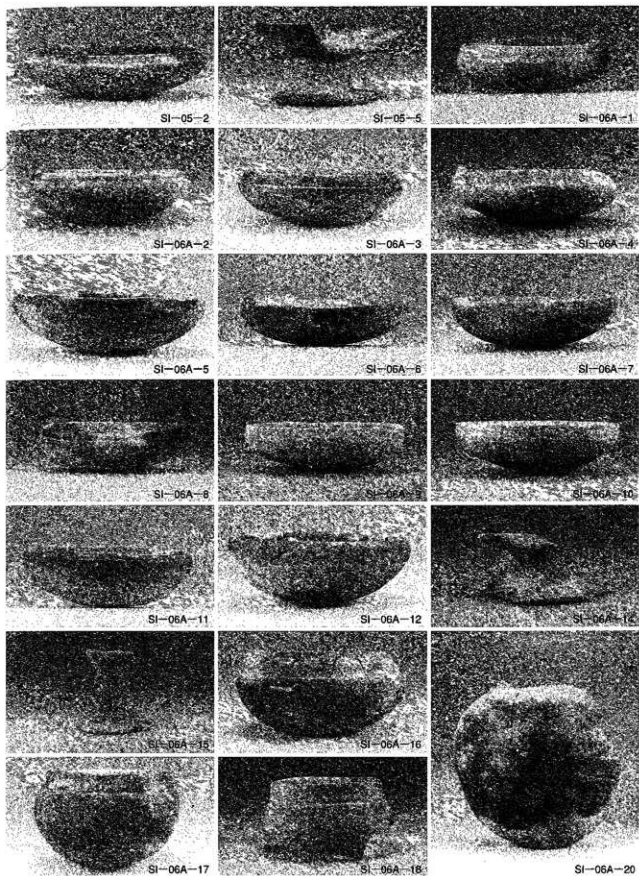
SK-43 (南から)

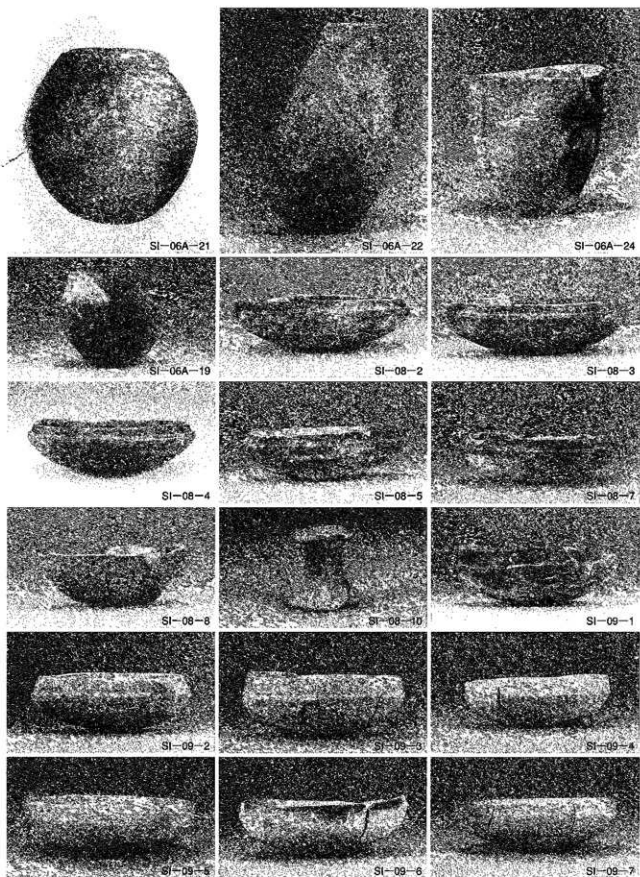


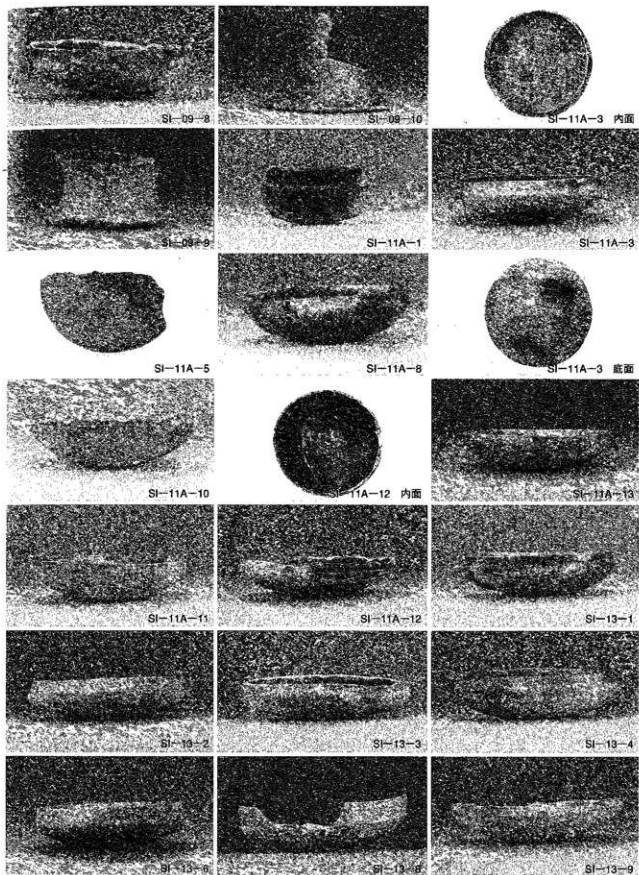
SK-44 (東から)

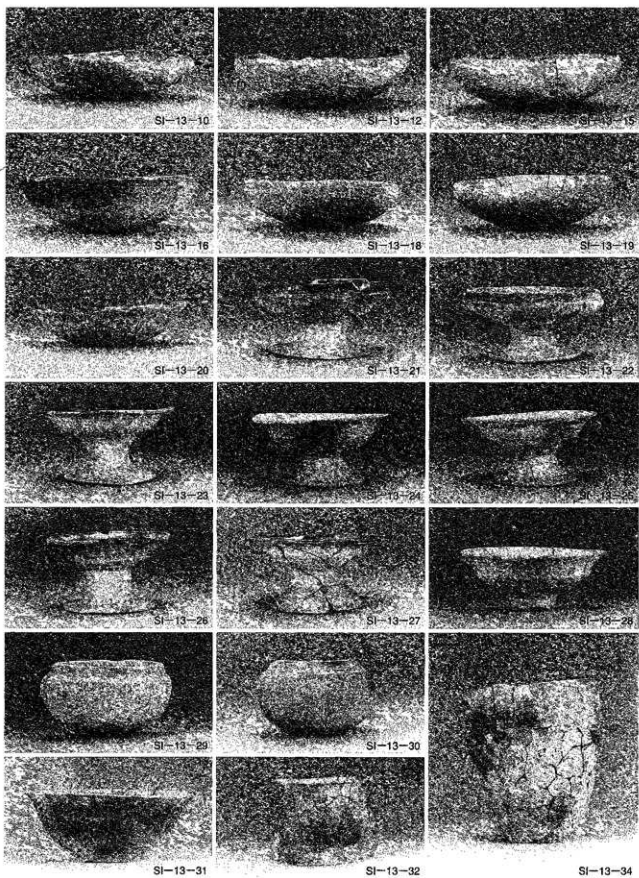


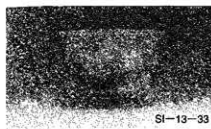




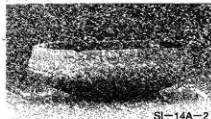




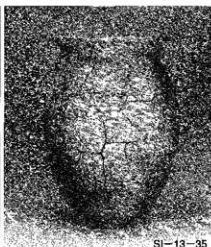




SI-13-33



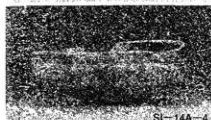
SI-14A-2



SI-13-35



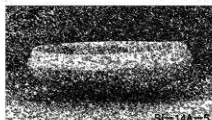
SI-13-36



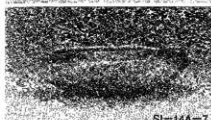
SI-14A-4



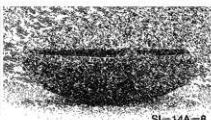
SI-14A-6



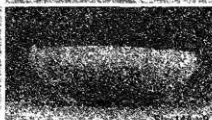
SI-14A-5



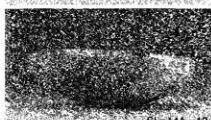
SI-14A-7



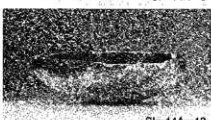
SI-14A-8



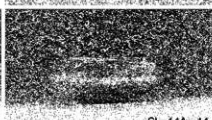
SI-14A-9



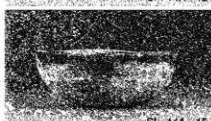
SI-14A-12



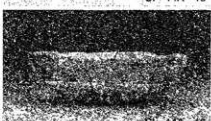
SI-14A-13



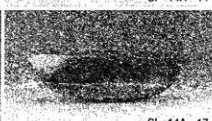
SI-14A-14



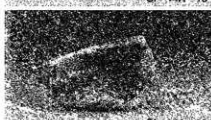
SI-14A-15



SI-14A-16



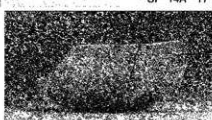
SI-14A-17



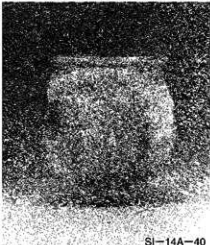
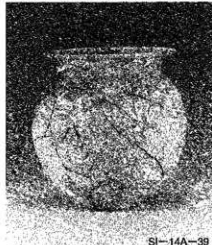
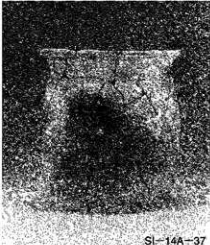
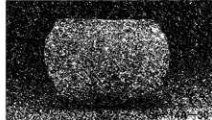
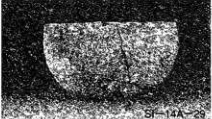
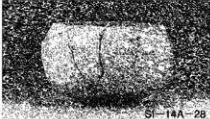
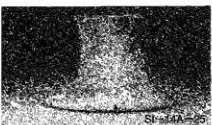
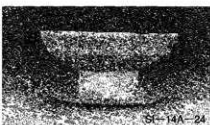
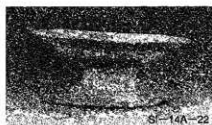
SI-14A-19

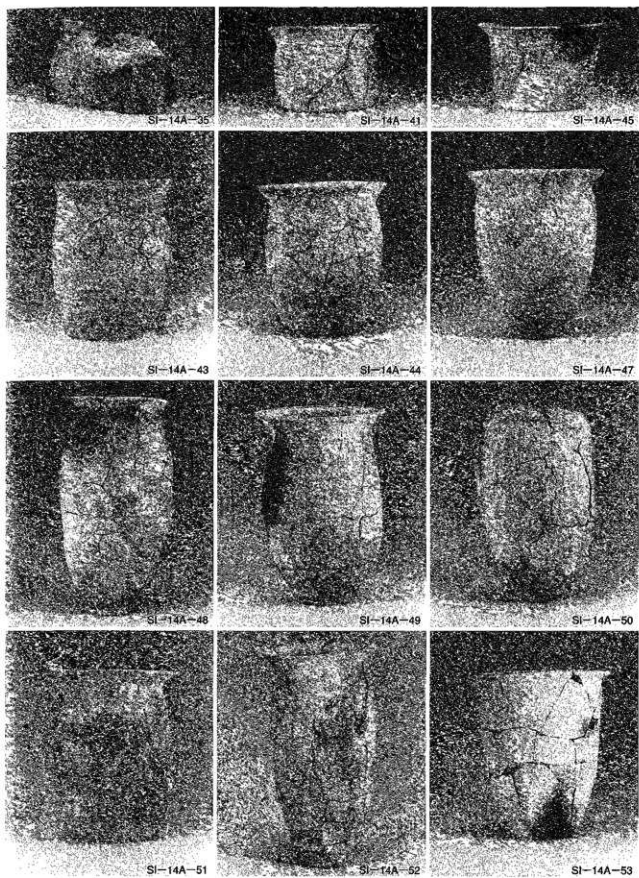


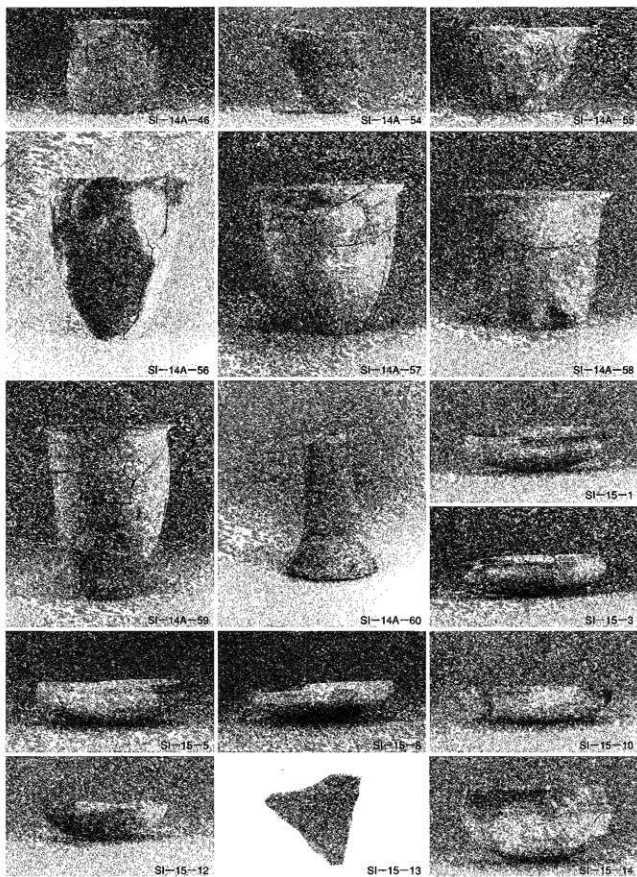
SI-14A-20



SI-14A-21

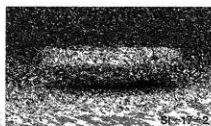




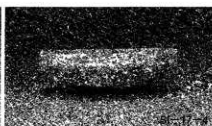




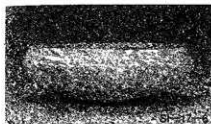
SI-16-5 内面



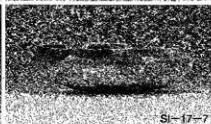
SI-17-2



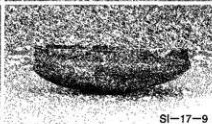
SI-17-3



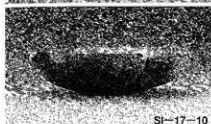
SI-17-4



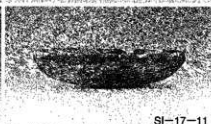
SI-17-7



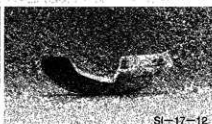
SI-17-9



SI-17-10



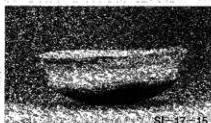
SI-17-11



SI-17-12



SI-17-14



SI-17-16



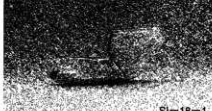
SI-17-19



SI-17-20



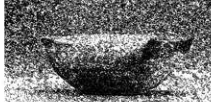
SI-17-22



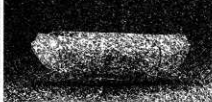
SI-18-1



SI-20A-2



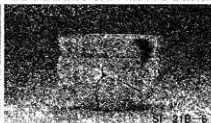
SI-2(A)-1



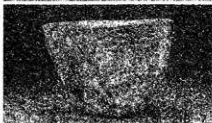
SI-2(B)-1



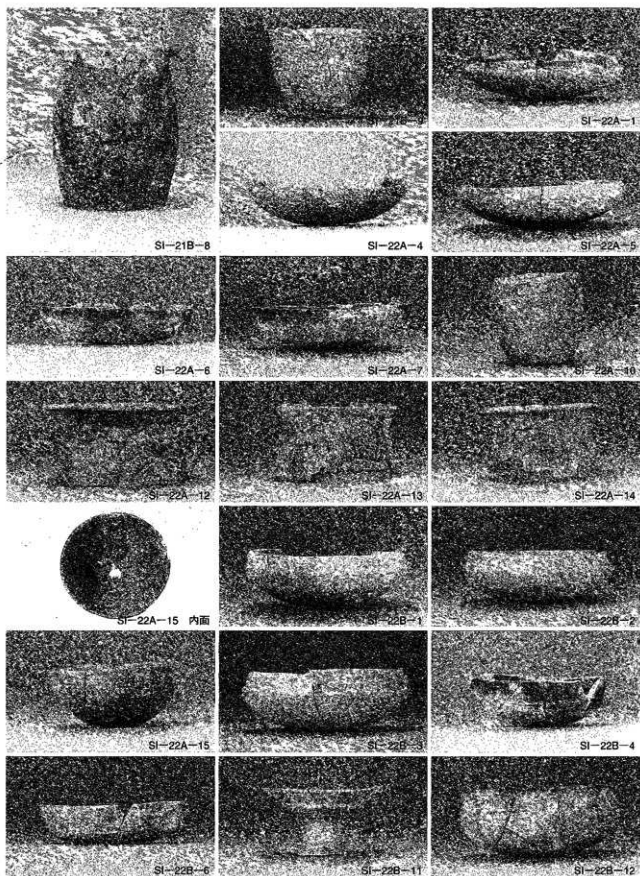
SI-2(B)-5

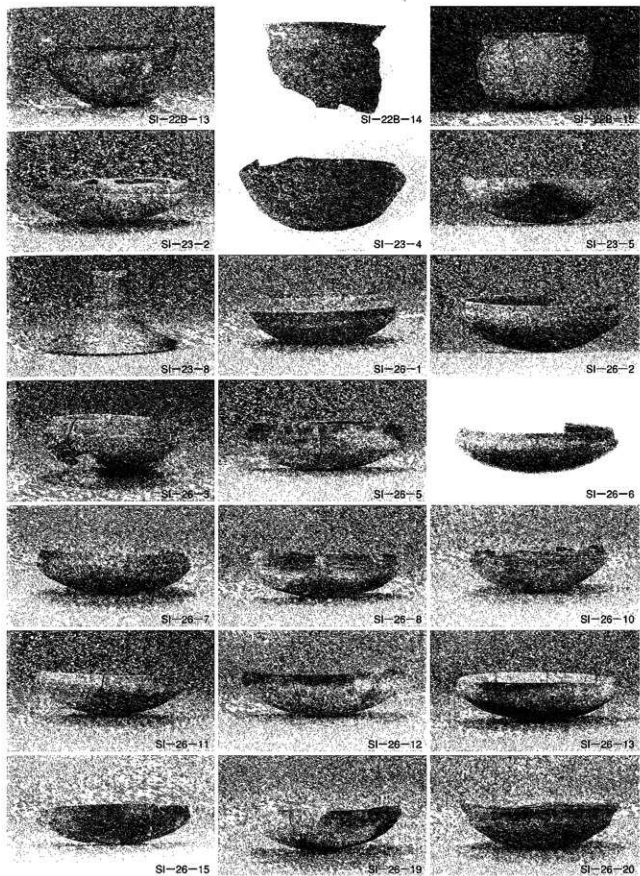


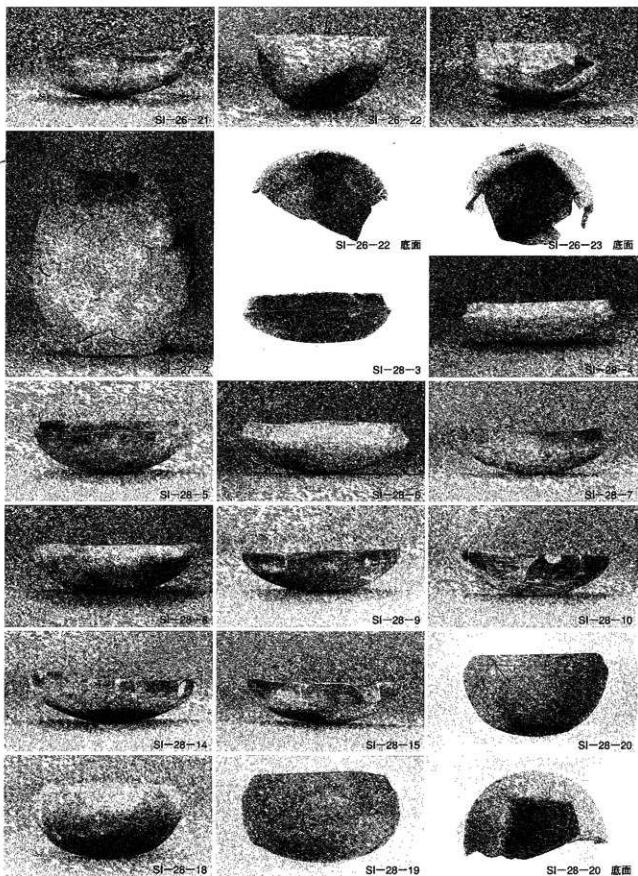
SI-2(B)-6

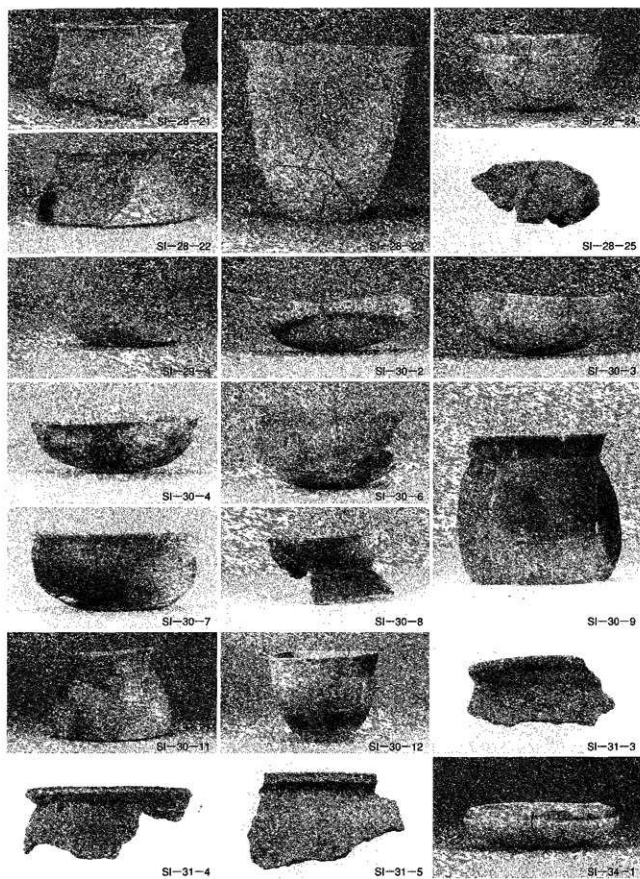


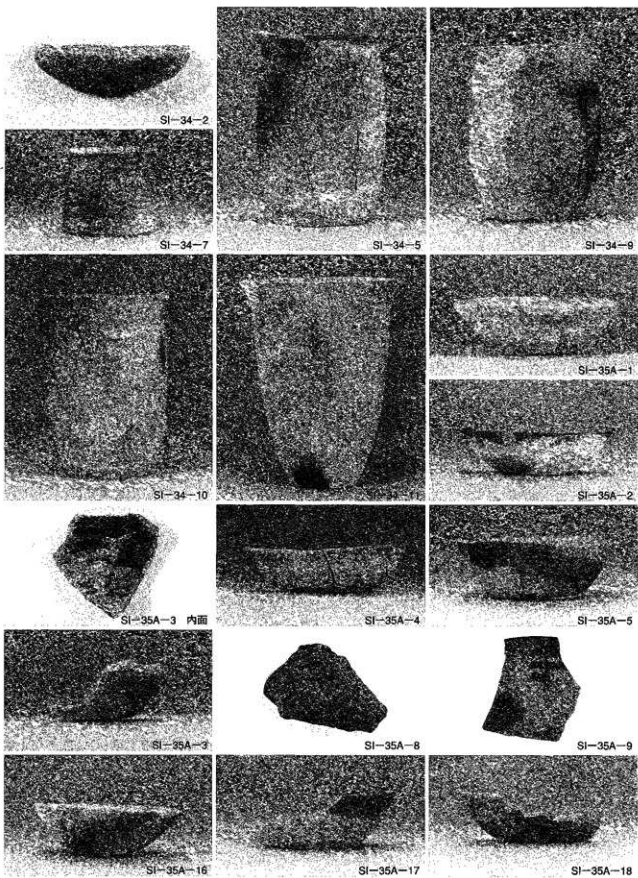
SI-2(B)-7

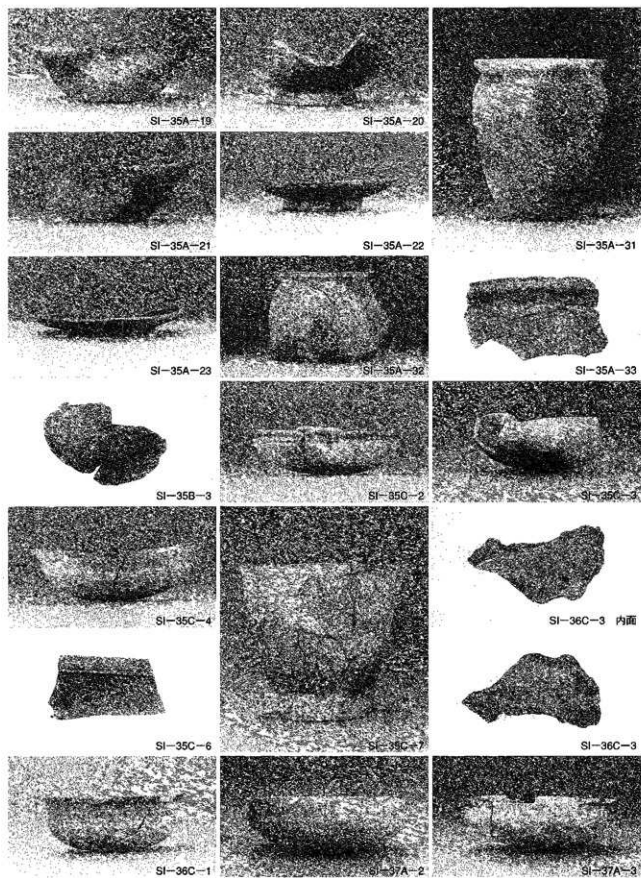


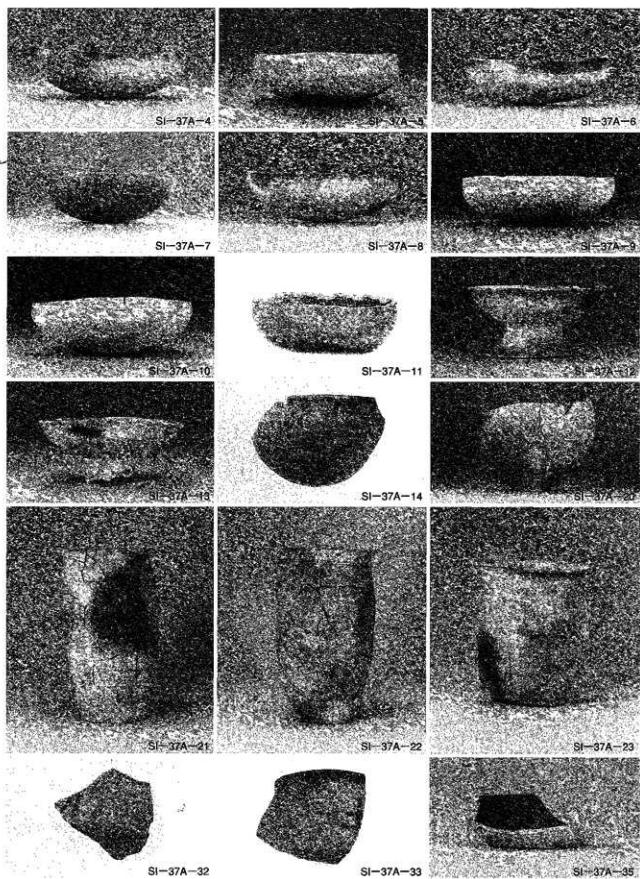


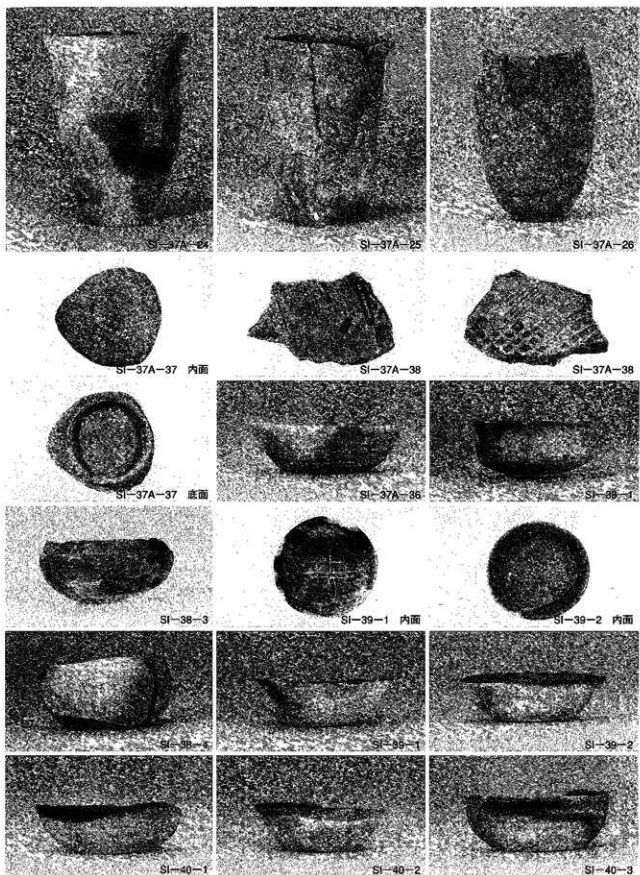


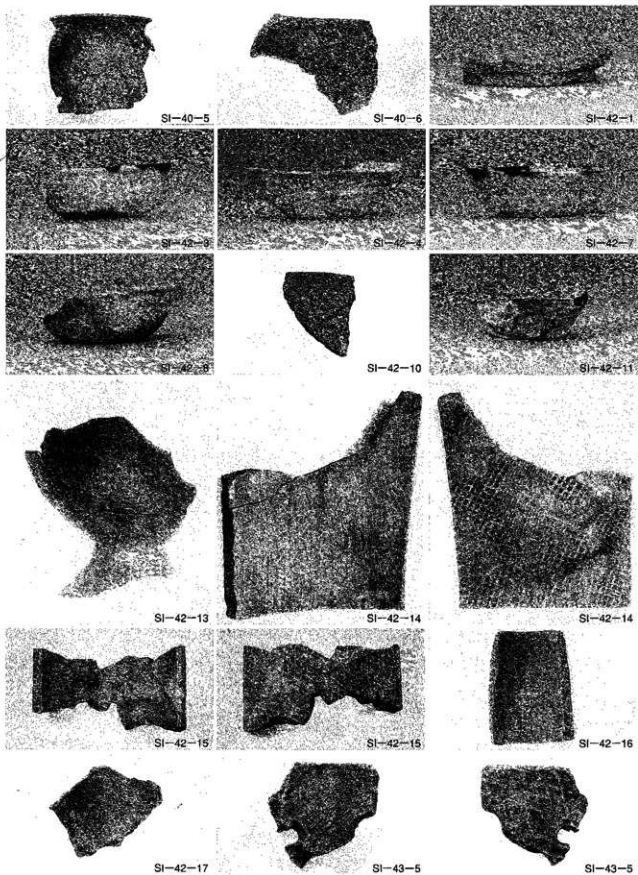


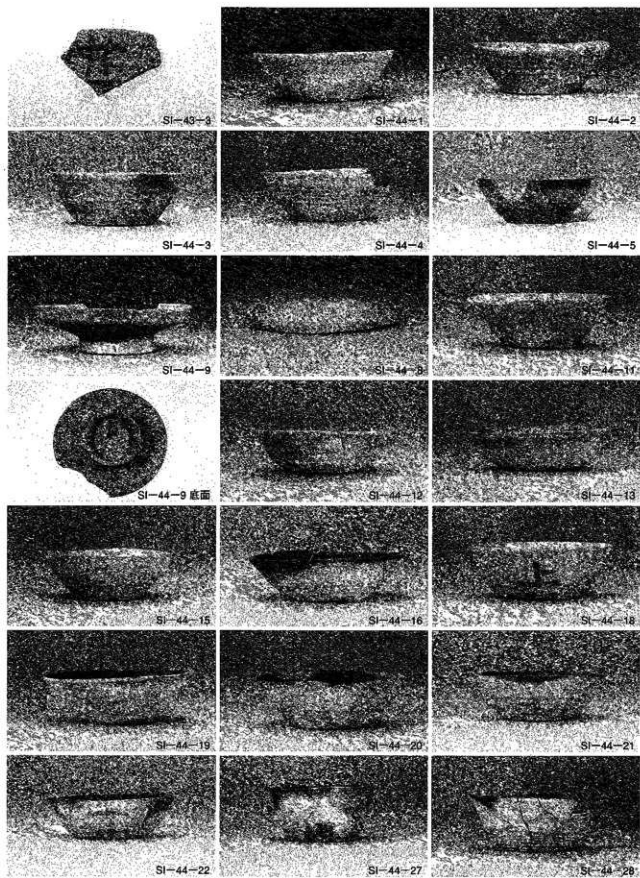














SI-44-32

SI-44-32



SI-44-34



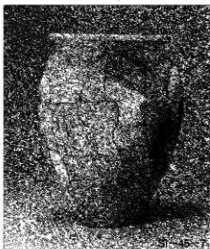
SI-44-34



SI-44-33



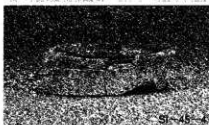
SI-44-33



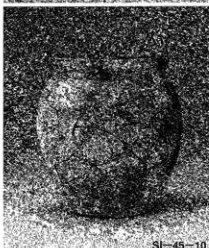
SI-45-7



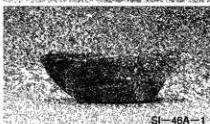
SI-45-8



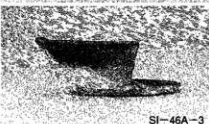
SI-45-4



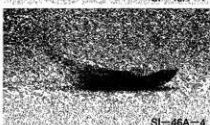
SI-45-10



SI-46A-1



SI-46A-3



SI-46A-4



SI-46A-3 底面



SI-46A-5



SI-46A-6



SI-46A-7



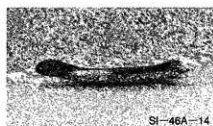
SI-46A-9



SI-46A-11



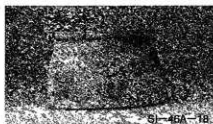
SI-46A-12



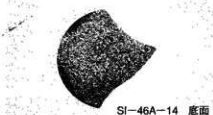
SI-46A-14



SI-46A-16



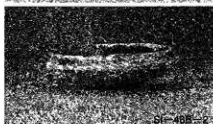
SI-46A-18



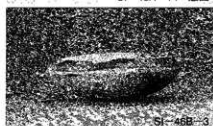
SI-46A-14 底面



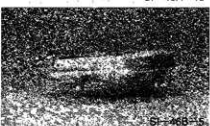
SI-46A-19



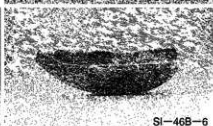
SI-46B-2



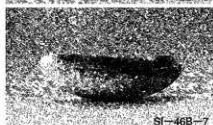
SI-46B-3



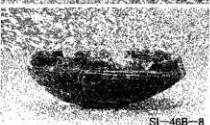
SI-46B-5



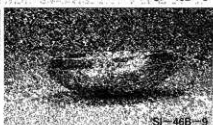
SI-46B-6



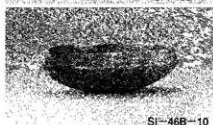
SI-46B-7



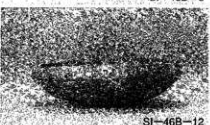
SI-46B-8



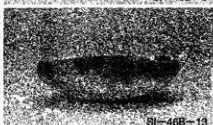
SI-46B-9



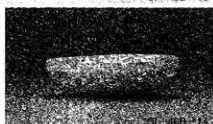
SI-46B-10



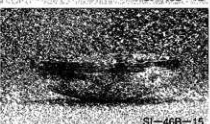
SI-46B-12



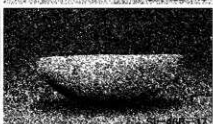
SI-46B-13



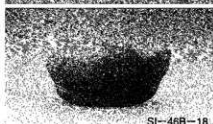
SI-46B-14



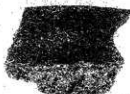
SI-46B-15



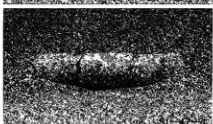
SI-46B-16



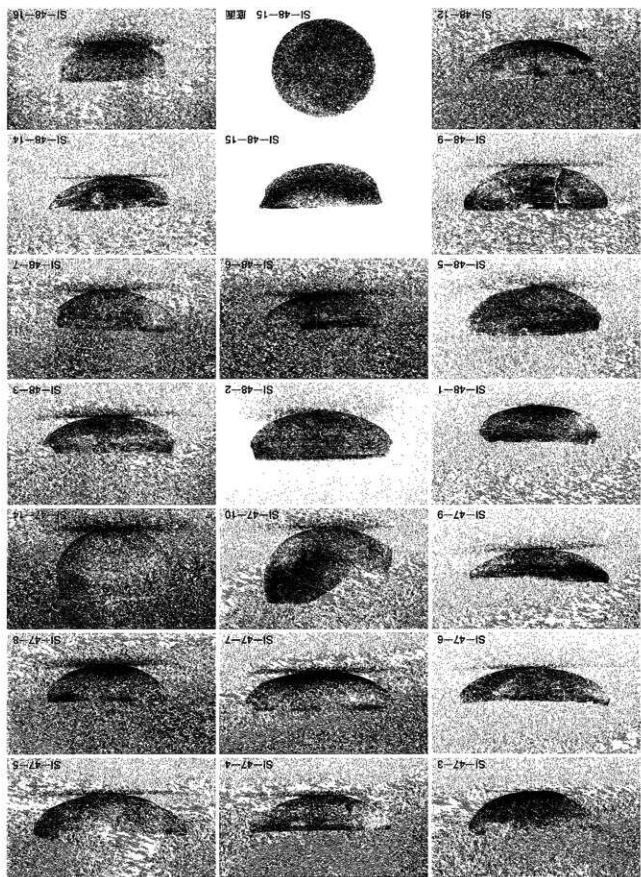
SI-46B-18



SI-46B-19

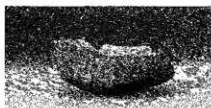


SI-46B-20

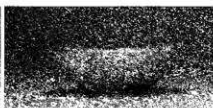




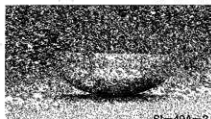
SI-48-17



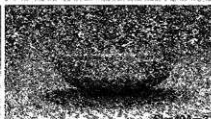
SI-48-18



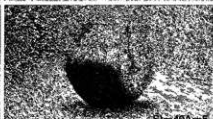
SI-49A-1



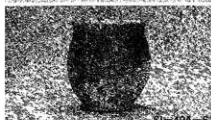
SI-49A-2



SI-49A-3



SI-49A-5



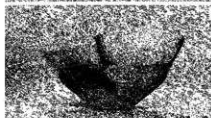
SI-49A-6



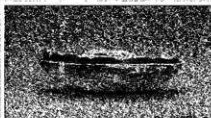
SI-49A-7



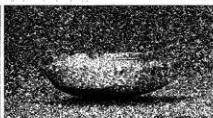
SI-49A-8



SI-49A-9



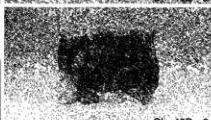
SI-49B-2



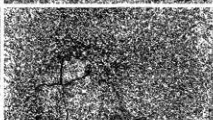
SI-49B-3



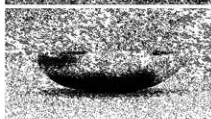
SI-49B-4



SI-49B-6



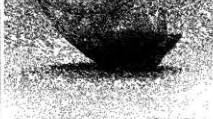
SI-49B-7



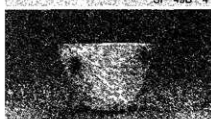
SI-49B-4



SI-49B-7



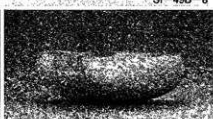
SI-49B-8



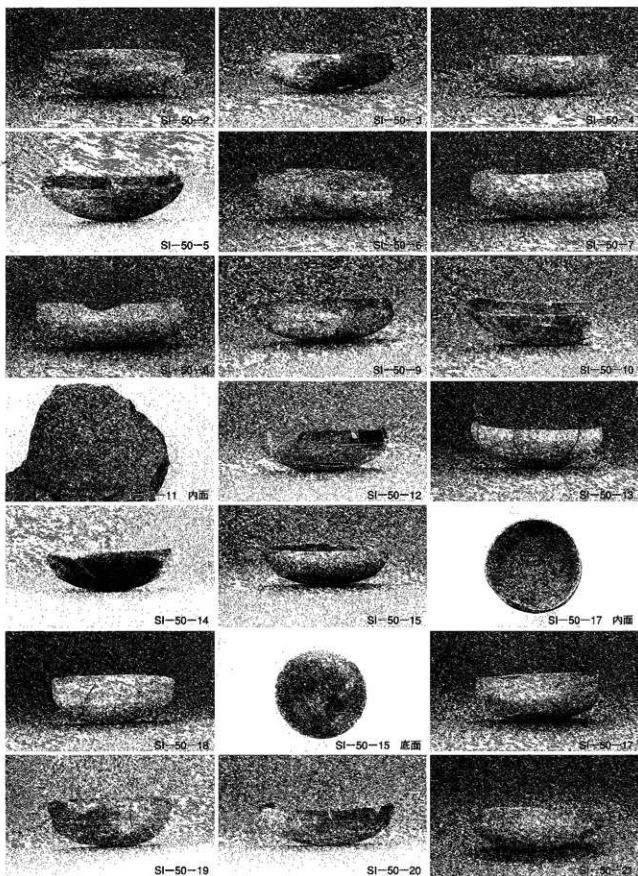
SI-49B-9

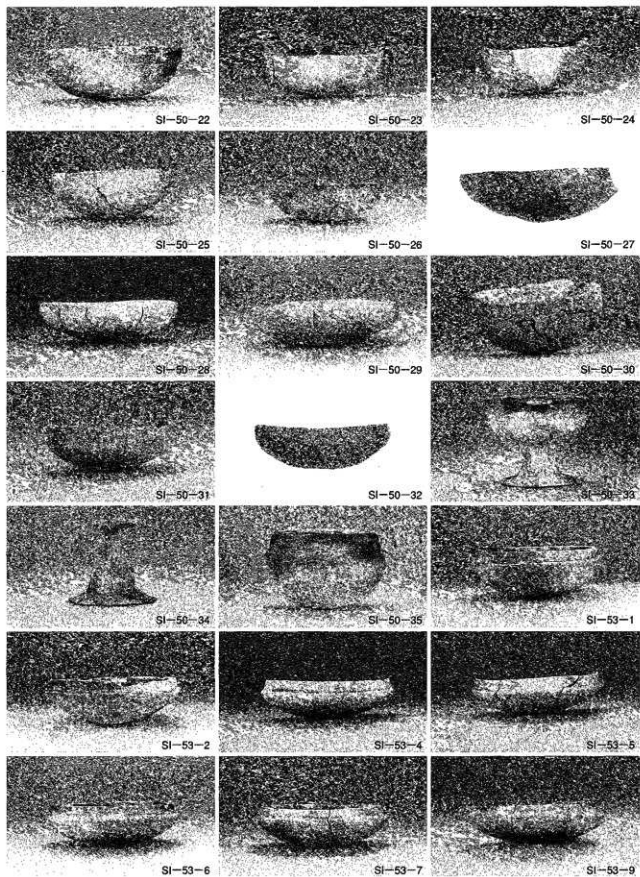


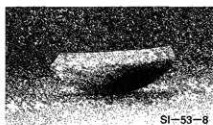
SI-49B-10



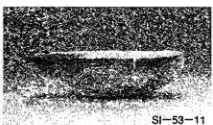
SI-50-1



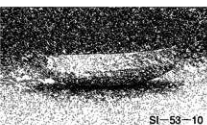




SI-53-8



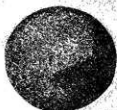
SI-53-11



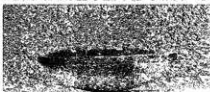
SI-53-10



SI-53-8 底面



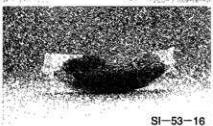
SI-53-11 底面



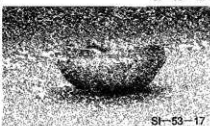
SI-53-12



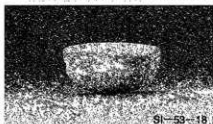
SI-53-13



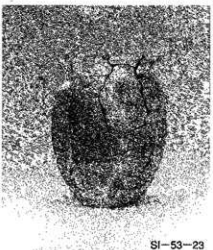
SI-53-16



SI-53-17



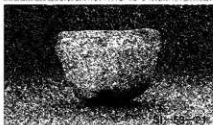
SI-53-18



SI-53-23



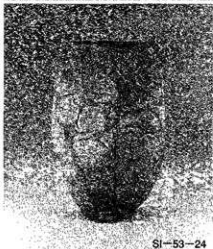
SI-53-17 底面



SI-53-19



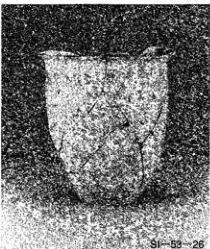
SI-53-22



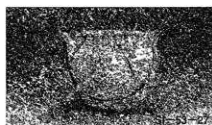
SI-53-24



SI-53-25



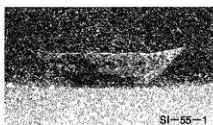
SI-53-26



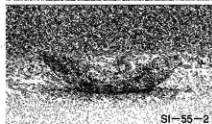
SI-53-27



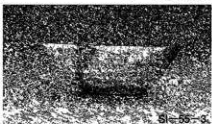
SI-53-28



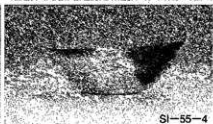
SI-55-1



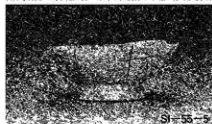
SI-55-2



SI-55-3



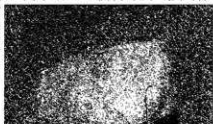
SI-55-4



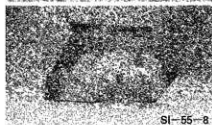
SI-55-5



SI-55-6



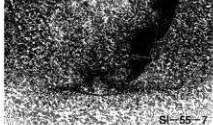
SI-55-7



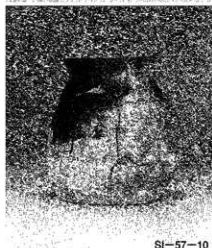
SI-55-8



SI-57-7



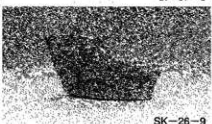
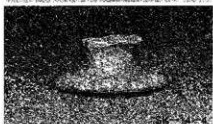
SI-55-7



SI-57-10



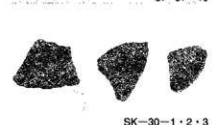
SI-57-8



SK-26-9



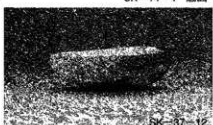
SK-14-4 底面



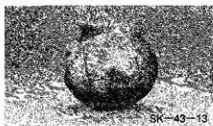
SK-30-1・2・3



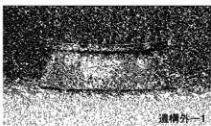
SK-32・33-10



SK-37-12



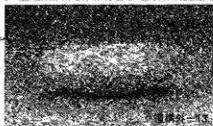
SK-43-13



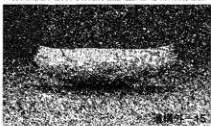
遺構外-1



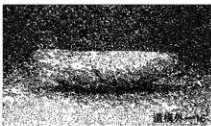
遺構外-3



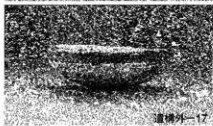
遺構外-13



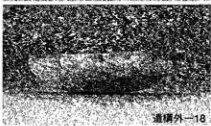
遺構外-15



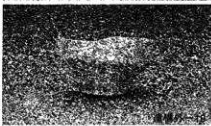
遺構外-16



遺構外-17



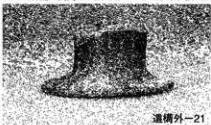
遺構外-18



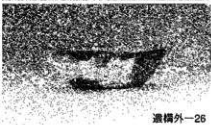
遺構外-19



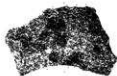
遺構外-20



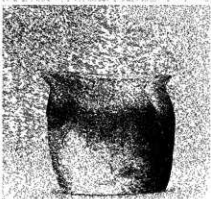
遺構外-21



遺構外-26



遺構外-27



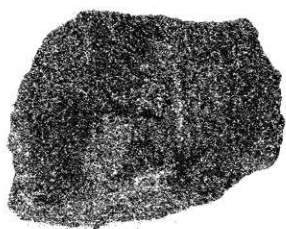
遺構外-29



遺構外-30



遺構外-28



14



16



17

SI-30



SI-30-18



65



67

SI-30



SI-30-96



102



103



104

SI-30



136



137

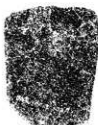


SI-30-138

SI-30
石製模造品製作関連遺物



SI-04A-31



SI-04A-32



SI-04A-33



SI-24-4



SI-34-15



SI-37A-31



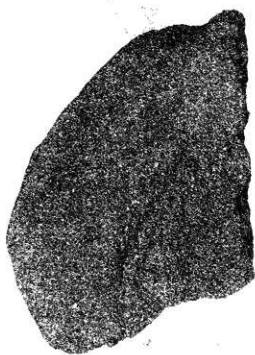
SI-45-12



SI-50-37

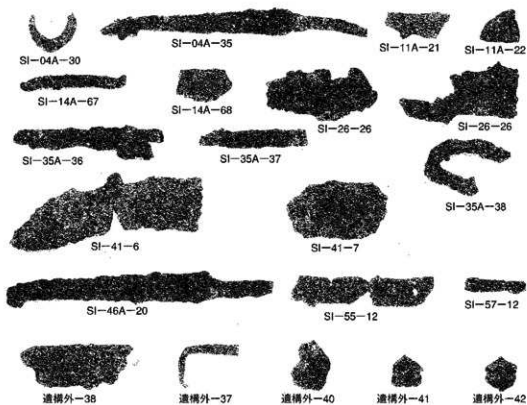
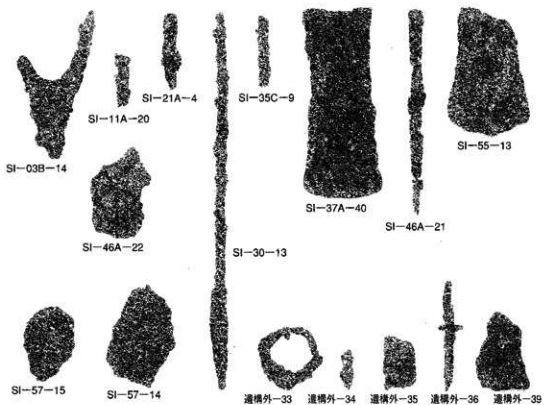


SI-53-32

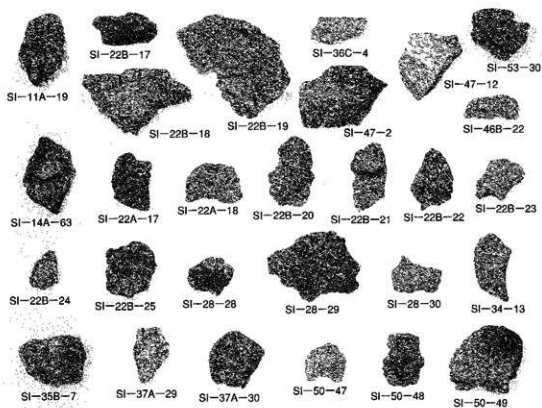


SI-34-12
砥石・磨石および石皿(?)

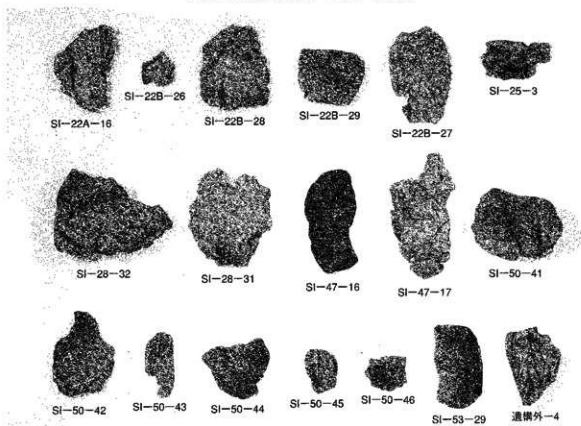
SI-34-12



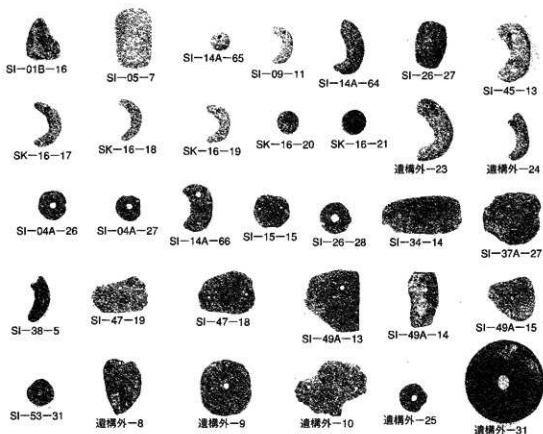
鉄器類



土器の未製品の焼成品・不良品・削りかす



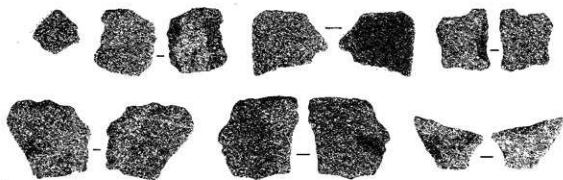
焼粘土塊



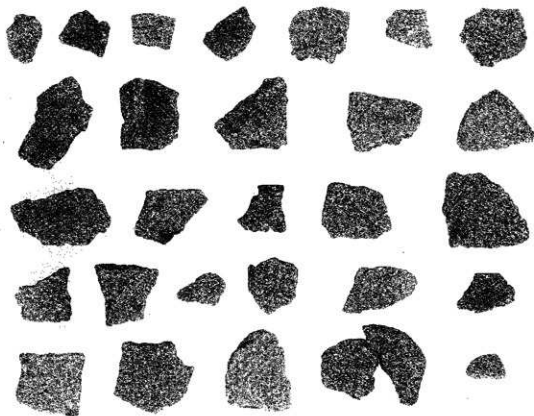
土製品・石製模造品・石製品



旧石器時代の遺物（第120図参照）



縄文土器 (1) 第1群～第3群 (第121図参照)

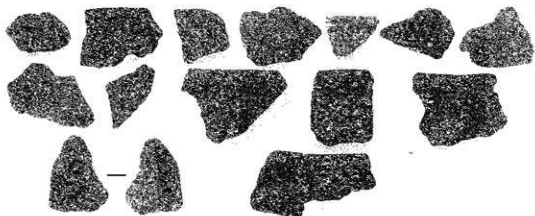


縄文土器 (2) 第4群・第5群 (第122図参照)

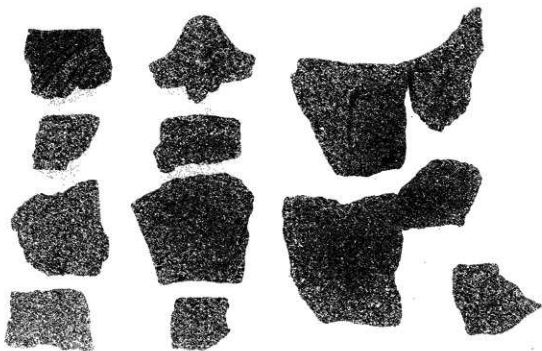


縄文土器 (3) 第6群 (第123図参照)

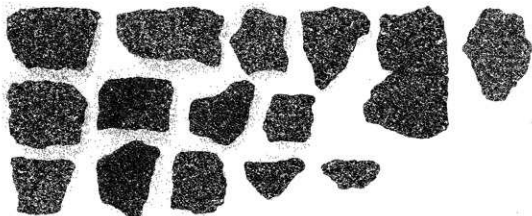
Copyrighted material



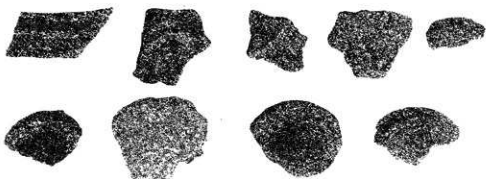
縄文土器 (4) 第7群・第8群 (第124図参照)



縄文土器 (5) 第9群 (第124図参照)



縄文土器 (6) 第9群 (第124図参照)



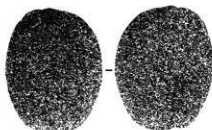
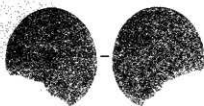
縄文土器 (7) 第9群 (第125図参照)



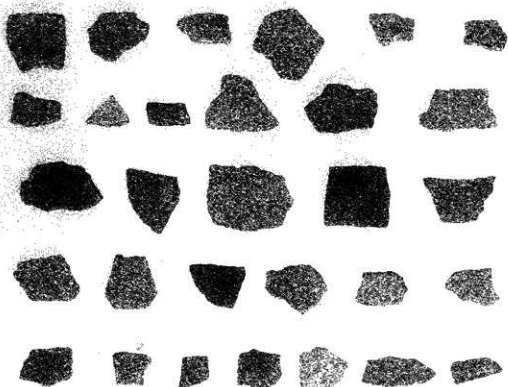
縄文土器 (8) 第10群・第11群 (第126図参照)



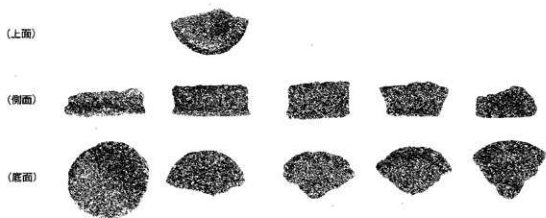
縄文時代の石器 石鏃 (第127図参照)



縄文時代の石器 磨石 (第127図参照)



弥生土器 (1) (第128図参照)



弥生土器 (2) 底部 (第128图参照)

報 告 書 抄 録

ふりがな	やはたねいせき							
書名	八幡根遺跡							
副書名	一般国道4号(新4号国道)改築に伴う埋蔵文化財発掘調査							
巻次								
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第189集							
編著者名	内山敏行・飯塚俊昭・亀田幸久・岩上照明							
編集機関	財団法人栃木県文化振興事業団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒329-04 栃木県下都賀郡国分寺町大字国分乙474 TEL0285-44-8441							
発行機関	栃木県教育委員会 財団法人栃木県文化振興事業団							
発行年月日	西暦 1997年3月25日(平成9年3月25日)							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市 町 村	遺跡番号	° ° °	° ° °		m ²	
八幡根	栃木県小山市大字 中久喜 字八幡根939ほか	09208	340	36度 18分 27秒	139度 50分 58秒	19821008~ 19830315	7,700	国道4号線バイパス設置に伴う事前調査
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特 記 事 項		
八幡根	集 落 生産遺跡	旧石器 縄文 弥生	縄文時代中期の 土坑 1	旧石器 縄文土器(早~後期) および石器 弥生土器(中・後期)		旧石器・弥生時代の 遺構はなし。		
		古 墳 (前~終末期)	竪穴建物跡 土坑 47	土師器、須恵器、 鉄器、石製模造品		7世紀前半に土師器 を製作している。		
		平 安 (9~10世紀)	竪穴建物跡 井戸 土坑 2	土師器、須恵器、 灰釉陶器、鉄器、 鉄滓		隣接する八幡根東遺 跡で製作した土師器 を消費している。		
		時代不明	竪穴建物跡 土坑 1					

栃木県埋蔵文化財調査報告第189集

八幡根遺跡

一般国道4号(新4号国道)改築に伴う埋蔵文化財発掘調査

発行 栃木県教育委員会

宇都宮市埴田1-1-20

TEL 028(623)3425

財団法人栃木県文化振興事業団

宇都宮市塚4-2-2

TEL 028(621)1611

平成9年3月25日発行

編集 財団法人栃木県文化振興事業団

埋蔵文化財センター

下都賀郡国分寺町大字国分乙474

TEL 0285(44)8441

印刷 晃南印刷株式会社
